

芳賀東部団地遺跡

- 縄文時代以降編 -

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2013.1

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

芳賀東部団地遺跡

- 縄文時代以降編 -

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2013.1

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 H区全景 西上空から東を望む

上武道路の路線はまっすぐに延び、赤城山南麓の台地上を東西に横切っている。中央に古墳時代の竪穴住居群が分布する。中央下未調査区域は墓跡、左手は芳賀住宅団地と工業団地、右手は畠と住宅があり、旧地形が残る。



2 C区4住居出土 袋形土器

口縁部は内湾気味に開き、体部の一端に注口部がある。古墳時代前期。



3 H区8住居出土土器一括

須恵器高杯の右側は全体が遺存しない土器で、左側は略完形の土器。古墳時代後期。

序

上武道路は埼玉県と群馬県を結ぶ高規格道路として計画され、これに伴う発掘調査が群馬県内では昭和49年に開始されました。南から順に部分区間が開通し、現在は国道17号に合流するまでの最終区間の調査が急ピッチで進められています。

当事業団では、前橋市教育委員会の調査した隣接地を含めた芳賀東部団地遺跡の一部である上武道路用地にかかる区域の発掘調査を、平成19年度から20年度にかけて実施しました。

上武道路用地内の本遺跡では、旧石器時代から中近世に至る遺構・遺物を発見し、旧石器時代については、すでに当事業団発掘調査報告書第535集として刊行しました。

本書は縄文時代以降の遺構・遺物を掲載したものです。縄文時代では、前期の竪穴住居や袋状土坑を調査し、赤城山南麓における縄文集落の分布で新たな資料を加えました。古墳時代前期とみられる住居跡からは、袋形土器と呼ばれる全国的にも珍しい特殊な土器が出土しました。また古墳時代後期の住居では、斜路を出入口とする希少例があり、平安時代の住居から出土した鉄滓は、近隣の遺跡で発見された製鉄関連遺構との関連性で注目されることになりました。

赤城山南麓に展開された原始・古代史を明らかにする上で、芳賀東部団地遺跡の発掘成果がかなり大きな貢献をするであろうことは間違いないでしょう。この度、めでたく本報告書を上梓するにあたって、発掘調査の着手以来、幾多の御指導・御協力を賜った地元の皆様、国土交通省関東地方整備局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会の関係各位に厚く感謝申し上げますとともに、本書が活用されることを願って序とします。

平成25年1月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 榮 一

例 言

- 1 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)による、芳賀東部団地遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書に掲載した芳賀東部団地(はがとうぶだんち)遺跡は、群馬県前橋市の次の番地に所在する。
五代町643-3、649-1、673-7、674-1、675-1、681-2・6・7番地
鳥取町711-2、717-1・5、719-1・3、720-1・2、721-1・2、722、723-1・2、735、736-1、737-1、740、741-3、840-1・4、883-1、884-1、885-1・2、886-1・2、871-1・3、872-1番地4
調査対象面積は28,946.43㎡で、遺跡略称は「JK56」である。
当事業団「年報27-平成19年度事業概要-」及び「年報28-平成20年度事業概要-」に掲載された「芳賀東部工業団地遺跡群」は、名称変更されて本書の「芳賀東部団地遺跡」となった。
- 3 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月に公益財団法人に組織改定)
- 5 調査期間 平成19年度 調査期間 平成19年5月22日から平成20年3月31日
履行期間 平成19年4月1日から平成20年3月31日
平成20年度 調査期間 平成20年4月1日から平成20年8月31日(鳥取松合下遺跡と並行)
履行期間 平成20年4月1日から平成21年3月31日
- 6 調査体制は次のとおりである。
平成19年度 調査担当 新井 仁(主任調査研究員) 菊池 実(主席専門員) 関 晴彦(上席専門員)
遺跡掘削請負工事 山下工業株式会社
委託 地上測量 アコン測量設計株式会社、航空写真撮影 技研測量設計株式会社
平成20年度 調査担当 並木勝洋(主任調査研究員) 関 晴彦(上席専門員)
遺跡掘削請負工事 山下工業株式会社
委託 地上測量、航空写真撮影 技研測量設計株式会社
- 7 整理事業の体制・期間は次のとおりである。
平成22年度 整理期間 平成22年10月1日から平成23年3月31日
整理担当 関 晴彦(上席専門員)
平成24年度 整理期間 平成24年4月1日から平成24年9月30日
整理担当 関 晴彦(上席専門員)
- 8 本書作成の担当は次のとおりである。
編集 関 晴彦(上席専門員) デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
執筆 第4章縄文時代遺物観察表 縄文土器 橋本 淳(主任調査研究員) 石器・石製品 岩崎泰一(上席専門員)
第4章古墳時代以降遺物観察表 神谷佳明(上席専門員資料2課長) 板岡正信(整理統括)
金属製品 大西雅広(上席専門員) 鉄滓 笹澤泰史(主任調査研究員)
遺物写真撮影 佐藤元彦(補佐(総括)) 保存処理・樹種同定 関 邦一(補佐(総括)) ほかは関 晴彦
- 9 石器・石製品の石材同定は、飯島静男氏(群馬地質研究会会員)にお願した。成果は遺物観察表に掲載した。
- 10 テフラの分析は火山灰考古学研究所 早田 勉氏に依頼し、第5章に成果を掲載した。
- 11 人骨の鑑定は生物考古学研究所 橋崎修一郎氏に依頼し、第5章に成果を掲載した。
- 12 出土遺物及び発掘調査に係る資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 13 発掘調査並びに整理作業にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して御礼申し上げます。
(敬称略) 国土交通省関東地方整備局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会 前原豊

凡例

- 1 グリッドの設定、座標値の表記は国家座標第X1系(世界測地系)を用いた。図中の数値はX座標-Y座標の値を示し、一部では下3桁で表記したものがあ
- 2 遺構断面図、等高線図に表記した数値は標高を示し、単位はmである。方位は座標北である。真北方向角はD区南西隅地点で+0度25分47秒である。
- 3 挿図の縮尺及び掲載内容は以下のとおりである。

遺構 1/80、1/40を基本とし、挿図中に縮尺を示した。土層断面図の太線は、生活面(使用面)を表している。

遺物 分布図の番号は掲載遺物を表し、遺物観察表・写真図版とも一致する。

接合関係は線で示した。

遺物の選択は遺構の時期を特定できるものを優先した。掲載は1/4を基本とし、小型品は1/2または1/1、大型品は1/8を基本とした。挿図中に基本の1/4以外は縮尺を表記した。

石器に用いた縦定位規線は摩耗範囲を、斜定位規線は線条痕の方向を示す。礫石器は必要に応じ拓本を用いた。

縄文土器の断面にある●は繊維の含有を表す。

古墳～平安時代遺物の年代観は、当事業団 大木紳一郎・坂口 一・桜岡正信の協力を得た。

念仏銭等に関して、当事業団 唐澤至朗・新倉明彦の助言を得た。

- 4 遺構図・遺物図とも4章末に一括掲載した。遺物観察表は図の直前に掲載し、遺構番号を優先して掲載している。
- 5 本書で使用した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』(平成9年版)に準拠した。
- 6 本書で使用した地図は、下記のものを使用した。

第1図 上武道路と遺跡の位置 国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用。

第2図 上武道路8工区の遺跡 国土地理院1/50,000地形図「前橋」平成10年発行を使用。

第4図 旧地形図上の遺跡 明治18年「迅速図」に芳賀東部(上武道路)を加筆(網点は谷地形)。

第8図 近傍の遺跡分布図 国土地理院1/25,000地形図「前橋」平成22年発行、「澁川」平成14年発行、「鼻毛石」平成14年発行、「大胡」平成22年発行を使用。

第9図 調査区の設定 国土交通省1/500丈量図 平成19年に加筆。

第10図 芳賀東部団地遺跡調査区位置図(1) 前橋市1/2500現形図 昭和43年を使用。

第11図 芳賀東部団地遺跡調査区位置図(2) 前橋市1/2500現形図 平成21年を使用。

第12図 上武道路調査測量グリッド設定図 国土地理院1/25,000地形図「前橋」「大胡」平成22年発行、「澁川」平成14年発行、「鼻毛石」昭和56年発行を使用。

- 7 テフラの呼称として、次の略語を使用する。

棟名FA 略称 Hr-FA 6世紀初頭

棟名FP 略称 Hr-FP 6世紀中葉

浅間A軽石 略称 As-A 1783年(天明3年)

浅間B軽石 略称 As-B 1108年(天仁元年)

浅間C軽石 略称 As-C 4世紀初頭

- 8 遺構の部分名称は、右図のように表した。

- 9 住居の計測値等については、「住居一覧表」に掲載した。



I区5住居の床面図に加筆した

目次

序・例言・凡例

第1章 調査に至る経過

- 第1節 上武道路について
- 第2節 上武道路と埋蔵文化財
- 第3節 調査に至る経過

第2章 立地と環境

- 第1節 地理的環境
- 第2節 歴史的環境

第3章 調査の方法と経過

- 第1節 調査の方法
- 第2節 基本土層
- 第3節 調査の経過

第4章 検出された遺構と遺物

- 第1節 概要
- 第2節 A区
- 第3節 B区
- 第4節 C区
- 第5節 D区
- 第6節 E区
- 第7節 F区
- 第8節 G区
- 第9節 H区
- 第10節 I区
- 第11節 遺構外出土の遺物
- 住居一覧表
- 遺物観察表
- 遺構図
- 遺物図

第5章 自然科学分析

- 第1節 分析の目的
- 第2節 テフラ分析
- 第3節 芳賀東部団地遺跡出土土人骨
- 第4節 芳賀東部団地遺跡出土炭化物について
- 第5節 鉄滓について

第6章 成果とまとめ

- 第1節 科学分析の成果
- 第2節 遺物の特徴
 - 1 縄文土器
 - 2 袋形土器
 - 3 滑石のチップ
 - 4 丸柄と鉋尾
 - 5 墓の副葬品
- 第3節 地形・遺構の特徴
 - 1 A区の旧地形復元
 - 2 出入口施設
 - 3 鉄滓と製鉄関連遺構

写真図版
報告書抄録

付図 芳賀東部団地遺跡 全体図 1:400

挿 図 目 次

第1図	上武道路と道跡の位置	1	第64図	E区6住居(1)	167
第2図	上武道路8工区の道跡	2	第65図	E区6住居(2)	168
第3図	芳賀東部印地道跡周辺の地質	5	第66図	E区1掘立柱建物	169
第4図	旧地形図上の道跡	6	第67図	E区東部土坑・ピット位置図、土坑断面図	170
第5図	昭和21年(1946年)米津による空中写真	7	第68図	E区中央部土坑・ピット位置図、土坑断面図	171
第6図	芳賀東部印地道跡(上武道路)の位置と小河川	8	第69図	F区2断面図	172
第7図	芳賀東部印地道跡の谷筋		第70図	F区居家跡地トレンチ	173
	前橋市教育委員会「芳賀東部印地道跡」第2巻の図(C18F)に加筆	8	第71図	F区全体図、1住居	174
第8図	近傍の道跡分布図	10	第72図	F区2住居(1)	175
第9図	調査区の設定	13	第73図	F区2住居(2)	176
第10図	芳賀東部印地道跡調査区位置図(1)	14	第74図	F区3住居	177
第11図	芳賀東部印地道跡調査区位置図(2)	15	第75図	F区4・7住居	178
第12図	上武道路調査測量グリッド設定図	16	第76図	F区5住居	179
第13図	基本土層図 C区南北ベルト、1区3型穴土層1/40	17	第77図	F区6住居(1)	180
第14図	A区全体図、A区1・2号トレンチ	117	第78図	F区6住居(2)	181
第15図	A区旧地形の推定復元	118	第79図	F区8住居(1)	182
第16図	A区1住居	119	第80図	F区8住居(2)	183
第17図	B区全体図、1号	120	第81図	F区8住居(3)	184
第18図	B区北壁土層断面	121	第82図	F区1掘立柱建物	185
第19図	B区1・2溝	122	第83図	F区2掘立柱建物	186
第20図	B区土坑・ピット(1)	123	第84図	F区東平部溝・土坑・ピット位置図、溝・土坑断面図	187
第21図	B区土坑・ピット(2)	124	第85図	F区西平部溝・土坑・ピット位置図、溝・土坑断面図	188
第22図	B区土坑・ピット(3)	125	第86図	F区2断面図	189
第23図	B区土坑・ピット(4)	126	第87図	G区全体図、2住居(1)	190
第24図	B区1～42ピット断面図	127	第88図	G区2住居(2)	191
第25図	B区43～83ピット断面図	128	第89図	G区2住居	192
第26図	B区84～125ピット断面図	129	第90図	G区3住居	193
第27図	B区126～164ピット断面図	130	第91図	G区4・5住居	194
第28図	B区165～214ピット断面図	131	第92図	G区6住居	195
第29図	C区全体図	132	第93図	G区7住居	196
第30図	C区1住居(1)	133	第94図	G区9住居	197
第31図	C区1住居(2)	134	第95図	G区9・10住居	198
第32図	C区2住居・3住居外ピット土層	135	第96図	G区11住居	199
第33図	C区3住居	136	第97図	G区12住居	200
第34図	C区4住居	137	第98図	G区13住居	201
第35図	C区5・7住居	138	第99図	G区14住居	202
第36図	C区6住居(1)	139	第100図	G区15住居	203
第37図	C区6住居(2)	140	第101図	G区1掘立柱建物	204
第38図	C区1掘立柱建物	141	第102図	G区2掘立柱建物	205
第39図	C区2掘立柱建物	142	第103図	G区3掘立柱建物	206
第40図	C区3・5掘立柱建物	143	第104図	G区1・2溝、4・5・9・14土坑	207
第41図	C区4掘立柱建物	144	第105図	G区3溝	208
第42図	C区溝	145	第106図	G区中央部土坑・ピット位置図、1～3・6土坑断面図	209
第43図	C区1面土坑・ピット位置図(1)	146	第107図	G区7・8・10～13土坑、1～14ピット断面図	210
第44図	C区1面土坑・ピット位置図(2)	147	第108図	H区全体図、H区1住居(1)	211
第45図	C区1面土坑断面図	148	第109図	H区1住居(2)	212
第46図	C区2面土坑・ピット位置図(1)	149	第110図	H区2住居	213
第47図	C区2面土坑・ピット位置図(2)	150	第111図	H区3住居	214
第48図	C区2面土坑断面図(1)	151	第112図	H区4住居(1)	215
第49図	C区2面土坑断面図(2)	152	第113図	H区4住居(2)	216
第50図	C区2面土坑断面図(3)	153	第114図	H区6住居	217
第51図	C区2面土坑断面図(4)	154	第115図	H区7住居	218
第52図	C区2面土坑断面図(5)	155	第116図	H区8住居	219
第53図	C区2面土坑断面図(6)	156	第117図	H区9住居	220
第54図	C区東西・南北ベルト	157	第118図	H区10住居(1)	221
第55図	D区全体図、トレンチ位置図	158	第119図	H区10住居(2)	222
第56図	D区トレンチ土層断面図	159	第120図	H区11住居(1)	223
第57図	D区1溝・ピット	160	第121図	H区11住居(2)	224
第58図	E区全体図、1住居(1)	161	第122図	H区12住居(1)	225
第59図	E区1住居(2)	162	第123図	H区12住居(2)	226
第60図	E区2住居	163	第124図	H区13住居	227
第61図	E区3住居	164	第125図	H区14住居	228
第62図	E区4住居(1)	165	第126図	H区15住居	229
第63図	E区4住居(2)、5住居	166	第127図	H区16住居	230

第128図	H区1掘立柱建物	231	第192図	H区8住居(2)、9住居出土遺物	295
第129図	H区東半部溝・土坑・ピット位置図	232	第193図	H区10住居出土遺物	296
第130図	H区東半部溝・土坑断面図	233	第194図	H区11住居、12住居(1)出土遺物	297
第131図	H区西半部土坑・ピット位置図	234	第195図	H区12住居(2)、13住居、14住居(1)出土遺物	298
第132図	H区西半部土坑断面図(1)	235	第196図	H区14住居(2)、15住居出土遺物	299
第133図	H区西半部土坑断面図(2)	236	第197図	H区16住居、1掘立柱建物、1・4・15～18・21～24土坑、32土坑(1)出土遺物	300
第134図	H区1～35ピット断面図	237	第198図	H区32土坑(2)、33・34・36・41～43・45土坑出土遺物	301
第135図	H区37～67ピット断面図	238	第199図	H区48・49・53・54・67土坑出土遺物	302
第136図	H区70～100ピット断面図	239	第200図	H区68～70土坑出土遺物	303
第137図	H区全体図、1井戸(1)	240	第201図	H区71～73土坑出土遺物	304
第138図	I区1井戸(2)	241	第202図	H区74・77土坑、墓跡跡、2トレンチ、1区1井戸・2住居(1)出土遺物	305
第139図	I区2住居(1)	242	第203図	I区2住居(2)出土遺物	306
第140図	I区2住居(2)	243	第204図	I区3住居出土遺物	307
第141図	I区2住居(3)、3住居(1)	244	第205図	I区4・5住居出土遺物	308
第142図	I区3住居(2)	245	第206図	I区6～8住居、9住居(1)出土遺物	309
第143図	I区4住居	246	第207図	I区9住居(2)、1型穴(1)出土遺物	310
第144図	I区5住居(1)	247	第208図	I区1型穴(2)出土遺物	311
第145図	I区5住居(2)	248	第209図	I区1型穴(3)出土遺物	312
第146図	I区6住居(1)	249	第210図	I区1型穴(4)出土遺物	313
第147図	I区6住居(2)	250	第211図	I区1型穴(5)出土遺物	314
第148図	I区7住居	251	第212図	I区1型穴(6)出土遺物	315
第149図	I区8住居	252	第213図	I区2型穴(1)出土遺物	316
第150図	I区9住居(1)	253	第214図	I区2型穴(2)出土遺物	317
第151図	I区9住居(2)	254	第215図	I区2型穴(3)出土遺物	318
第152図	I区9住居(3)	255	第216図	I区3型穴(1)出土遺物	319
第153図	I区1型穴(1)	256	第217図	I区3型穴(2)出土遺物	320
第154図	I区1型穴(2)	257	第218図	I区3型穴(3)出土遺物	321
第155図	I区2型穴(1)	258	第219図	I区3型穴(4)、1礫石、15・17・26・28土坑出土遺物	322
第156図	I区2型穴(2)	259	第220図	I区37・40～42・44・45・51・56・58土坑出土遺物	323
第157図	I区3型穴	260	第221図	I区60・61・72～75・78土坑、79土坑(1)出土遺物	324
第158図	I区東半部1面上土坑・ピット位置図	261	第222図	I区79土坑(2)、81・82・84土坑、85土坑(1)出土遺物	325
第159図	I区東半部1面上坑断面図(1)	262	第223図	I区85土坑(2)、87・89土坑出土遺物	326
第160図	I区東半部1面上坑断面図(2)	263	第224図	I区91・94・95・99・100・103・106・109・110土坑出土遺物	327
第161図	I区西半部1面上土坑・ピット位置図	264	第225図	I区112・114・115・119～121・123・126土坑、127土坑(1)出土遺物	328
第162図	I区西半部1面上坑断面図	265	第226図	I区127土坑(2)、128・130～135土坑出土遺物	329
第163図	I区東半部2面上土坑・ピット位置図	266	第227図	I区136～138・140・147・149・151・152・154土坑出土遺物	330
第164図	I区東半部2面上坑断面図(1)	267	第228図	I区158・162・163・165～172土坑出土遺物	331
第165図	I区東半部2面上坑断面図(2)	268	第229図	A・B区遺構外、C区遺構外(1)出土縄文土器	332
第166図	I区西半部2面上土坑・ピット位置図、集石	269	第230図	C区遺構外(2)、D遺構外、E区遺構外(1)出土縄文土器	333
第167図	I区西半部2面上坑断面図(1)	270	第231図	E区遺構外(2)、F区遺構外、G区遺構外(1)出土縄文土器	334
第168図	I区西半部2面上坑断面図(2)	271	第232図	G区遺構外(2)、H区遺構外(1)出土縄文土器	335
第169図	I区2面61・79・82・85・89土坑	272	第233図	H区遺構外(2)出土縄文土器	336
第170図	I区2面99・109・127・140・170・171土坑	273	第234図	I区遺構外(1)出土縄文土器	337
第171図	I区1面ピット断面図	274	第235図	I区遺構外(2)出土縄文土器	338
第172図	I区1・2面ピット断面図	275	第236図	I区遺構外(3)出土縄文土器、遺構外出土石部(1)	339
第173図	A区1住居、B区9・55ピット、C区1～4住居(1)出土遺物	276	第237図	遺構外出土石部(2)	340
第174図	C区4住居(2)、6住居、201土坑出土遺物	277	第238図	遺構外出土石部(3)	341
第175図	E区1・2住居出土遺物	278	第239図	遺構外出土石部(4)、遺構外出土土器	342
第176図	E区3住居、4住居(1)出土遺物	279	第240図	H区人骨出土土坑位置図	343
第177図	E区4住居(2)、5住居、6住居(1)出土遺物	280	第241図	チカラ分析試料採取位置	344
第178図	E区6住居(2)、F区1住居、2住居(1)出土遺物	281	第242図	住居内炭化材出土状況と試料採取位置	345
第179図	F区2住居(2)、3住居(1)出土遺物	282	第243図	鍍層出土住居	346
第180図	F区4～6住居、7住居(1)出土遺物	283	第244図	B区1トレンチの上層柱状図	352
第181図	F区7住居(2)、7・8住居、8住居(1)出土遺物	284	第245図	B区2トレンチの上層柱状図	352
第182図	F区8住居(2)、1～3溝、G区1住居(1)出土遺物	285	第246図	B区7トレンチの上層柱状図	352
第183図	G区1住居(2)、2住居出土遺物	286	第247図	C区南北ベルトの上層柱状図	352
第184図	G区3住居、5住居(1)出土遺物	287	第248図	C区2トレンチ南壁の上層柱状図	352
第185図	G区5住居(2)、6住居、7住居(1)出土遺物	288	第249図	C区17トレンチ南壁の上層柱状図	352
第186図	G区7住居(2)、8住居出土遺物	289	第250図	D区2トレンチ東壁の上層柱状図	352
第187図	G区9～11住居出土遺物	290	第251図	D区2トレンチ東壁南端の上層柱状図	352
第188図	G区12・13住居、14住居(1)出土遺物	291			
第189図	G区14住居(2)、15住居、H区1住居、2住居(1)出土遺物	292			
第190図	H区2住居(2)出土遺物	293			
第191図	H区2住居(3)、3・7住居、8住居(1)出土遺物	294			

第252図	C区17トレンチの火山ガラス比ダイヤグラム	353
第253図	D区2トレンチ東壁試片1 (Fig. 9)の火山ガラス比ダイヤグラム(重鉱物組成を含む)	353
第254図	H区人骨出土土坑全体図	354
第255図	H区48土坑人骨出土状態	354
第256図	H区48土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)	354
第257図	H区48土坑出土人骨頭蓋骨前頭縫合(上面観)	355
第258図	H区48土坑出土人骨上顎骨前脱落(咬合面観)	355
第259図	H区49土坑人骨出土状態	355
第260図	H区49土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)	355
第261図	H区51土坑人骨出土状態	356
第262図	H区53土坑人骨出土状態	356
第263図	H区53土坑出土人骨下顎骨(左M1の生前脱落)	357
第264図	H区67土坑人骨出土状態	357
第265図	H区67土坑出土人骨下顎骨(異常摩耗)	357
第266図	H区67土坑出土人骨左側面骨(鼓室骨穿孔)	358
第267図	H区68土坑人骨出土状態	358
第268図	H区69土坑人骨出土状態	358
第269図	H区69土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)	359

第270図	H区70土坑人骨出土状態	359
第271図	H区70土坑出土人骨頭蓋骨(左側面観)	359
第272図	H区70土坑出土人骨下顎骨(左M3の遠心捻転)	359
第273図	H区71・72土坑人骨出土状態	360
第274図	H区71土坑出土人骨1頭蓋骨(左側面観)	360
第275図	H区71土坑出土人骨2頭蓋骨(右側面観)	361
第276図	H区73土坑人骨出土状態	361
第277図	H区74土坑人骨出土状態	361
第278図	芳賀東部印地遺跡鉄器関連遺物一覽	367
第279図	芳賀東部印地遺跡縄文土器型式別点数	370
第280図	C区4住居痕形土器出土状態	373
第281図	滑石製白玉破片の分類	374
第282図	丸剣・鉞・石製濫方	375
第283図	H区墓坑群 北から	376
第284図	念仏銭・大黒銭・大福銭・題目銭(拓影1/1)	378
第285図	I区9住居斜土層図	381
第286図	近傍遺跡住居の出入口施設	382
第287図	近傍の製鉄関連遺構	384

表 目 次

第1表	土武道路8工区調査遺跡一覽表	2
第2表	近傍の遺跡一覽表	11
第3表	出土遺構数値表	22
第4表	出土遺物数値表	24
第5表	住居一覽表	77
第6表	遺物観察表	79
第7表	C区1 雁立柱建物計測表	141
第8表	C区2 雁立柱建物計測表	142
第9表	C区3 雁立柱建物計測表	143
第10表	C区5 雁立柱建物計測表	143
第11表	C区4 雁立柱建物計測表	144
第12表	C区1 面土坑計測表	148
第13表	C区2 面土坑計測表(1)	151
第14表	C区2 面土坑計測表(2)	152
第15表	C区2 面土坑計測表(3)	153
第16表	C区2 面土坑計測表(4)	154
第17表	C区2 面土坑計測表(5)	155
第18表	C区2 面土坑計測表(6)	156
第19表	E区1 雁立柱建物計測表	169
第20表	F区1 雁立柱建物計測表	185
第21表	F区2 雁立柱建物計測表	186
第22表	F区土坑計測表	188
第23表	F区ピット計測表	189
第24表	G区1 雁立柱建物計測表	204
第25表	G区2 雁立柱建物計測表	205
第26表	G区3 雁立柱建物計測表	206
第27表	G区溝計測表	207
第28表	G区土坑計測表	210
第29表	G区ピット計測表	210
第30表	H区1 雁立柱建物計測表	231

第31表	H区土坑計測表(1)	233
第32表	H区溝計測表	233
第33表	H区土坑計測表(2)	235
第34表	H区土坑計測表(3)	236
第35表	H区1～35ピット計測表	237
第36表	H区37～67ピット計測表	238
第37表	H区68～100ピット計測表	239
第38表	I区1 面土坑計測表(1)	262
第39表	I区1 面土坑計測表(2)	263
第40表	I区1 面土坑計測表(3)	265
第41表	I区2 面土坑計測表(1)	267
第42表	I区2 面土坑計測表(2)	268
第43表	I区2 面土坑計測表(3)	270
第44表	I区2 面土坑計測表(4)	271
第45表	I区2 面土坑計測表(5)	273
第46表	I区1・2ピット計測表	274
第47表	I区1・2面ピット計測表	275
第48表	火山ガラス比分析結果	351
第49表	重鉱物組成分析結果	351
第50表	チフク検出分析結果	351
第51表	屈折率測定結果	351
第52表	芳賀東部印地遺跡出土人骨まとめ	363
第53表	芳賀東部印地遺跡出土人骨頭蓋骨計測値及び比較表	364
第54表	住居出土木材樹種構成表	365
第55表	出土炭化物一覽表	366
第56表	芳賀東部印地遺跡縄文土器型式別数値表	370
第57表	H区墓坑出土遺物一覽表	377
第58表	出入口施設を伴う住居	380
第59表	近傍の製鉄関連遺構・遺物	385

写真目次

トピラ	1区全景 南上空から		C区5住居遺物出土状態 北から
PL. 1	A区1トレンチ・1住居遺物全景 東から		C区5住居土層断面 c-d 南から
PL. 2	A区2トレンチ全景 東から		C区5住居南西部遺物出土状態 西から
PL. 3	A区1トレンチ・1住居全景 西から		C区5住居掘り方全景 北から
	A区1トレンチ・1住居遺物出土状態 北から	PL.20	C区6住居床面全景 南西から
PL. 4	A区道状遺構 西から		C区6住居遺物出土状態 西から
	A区道状遺構 北から		C区6住居南西隅遺物出土状態 西から
PL. 5	B区1面全景 東上空から		C区6住居カマド全景 南西から
PL. 6	B区1溝全景 南から		C区6住居掘り方全景 西から
	B区2溝全景 南から	PL.21	C区7住居全景 東から
	B区1溝土層断面 南から		C区7住居掘り方全景 東から
	B区2溝重複上坑群 南から	PL.22	C区1掘立柱建物全景 北から
	B区2溝土層断面 南から		C区2掘立柱建物全景 南から
	B区2溝重複上坑群 南から	PL.23	C区3・4掘立柱建物全景 北から
PL. 7	B区1砂明辺ビッド群 東から		C区5掘立柱建物全景 北から
	B区1砂全景 北西から	PL.24	C区1溝土層断面 東から
PL. 8	B区3土坑全景 北西から		C区南北ベルト 3溝土層断面 西から
	B区4・24土坑全景 東から		C区南北ベルト ワイヤー敷設溝土層断面 西から
	B区16土坑全景 北から		C区5溝土層断面 南から
	B区18土坑全景 南東から		C区6~9溝全景 南から
	B区20土坑全景 南東から	PL.25	C区12・13溝鉄塔北側 東から
	B区22土坑全景 北西から		C区土坑・ビッド群 南から
	B区38土坑全景 西から	PL.26	C区8土坑全景 西から
	B区43土坑全景 東から		C区32土坑全景 西から
PL. 9	B区46・47土坑全景 西から		C区38土坑全景 西から
	B区59・60土坑全景 東から		C区46土坑全景 西から
	B区64土坑全景 北から		C区70土坑全景 南から
	B区65土坑全景 北から		C区106土坑全景 西から
	B区1ビッド全景 南東から		C区107土坑遺物出土状態 西から
	B区27ビッド全景 南西から		C区115土坑遺物出土状態 東から
	B区186ビッド遺物出土状態 北から	PL.27	C区121土坑全景 東から
	B区203ビッド全景 北から		C区125土坑全景 東から
PL.10	C区全景 西上空から		C区139土坑全景 北から
PL.11	C区全景 南上空から		C区149土坑全景 南から
PL.12	C区南北ベルト南半部 西から		C区201土坑全景 南から
	C区東西ベルト東半部 南から		C区205土坑全景 南から
PL.13	C区1住居遺物出土状態 東から		C区213土坑全景 南から
	C区1住居遺物出土状態 高杯(C4)		C区214土坑全景 南から
	C区1住居遺物出土状態 勾玉(C9)	PL.28	C区216土坑全景 南から
	C区1住居遺物出土状態 袋状鉄弁(C11)		C区225土坑全景 南から
	C区1住居遺物出土状態 有孔円盤(C8)		C区230土坑全景 北から
PL.14	C区1住居床面全景 東から		C区235土坑土層断面 南から
	C区1住居P5全景 南から		C区11道路西側土坑・ビッド全景 西から
	C区1住居内溝・ビッド 北から	PL.29	C区鉄塔北側土坑、105ビッド全景 東から
	C区1住居掘り方全景 東から		C区鉄塔北側土坑、113ビッド全景 北東から
	C区1住居南部掘り方 東から		C区鉄塔北側土坑全景 北から
PL.15	C区2住居床面全景 西から		C区下層確認東西トレンチ1全景 西から
	C区2住居遺物出土状態 西から	PL.30	C区下層確認トレンチ3 南から
	C区2住居北西部遺物出土状態 西から		C区下層確認トレンチ4 南から
	C区2住居が焼上出土状態 西から	PL.31	C区下層確認トレンチ5-1 南から
	C区2住居掘り方全景 西から		C区下層確認トレンチ5-2 南から
PL.16	C区3住居床面全景 西から	PL.32	C区下層確認トレンチ6 南から
	C区3住居遺物出土状態 北から		C区下層確認トレンチ7 南から
	C区3住居が全景 北から	PL.33	C区下層確認トレンチ8 北から
	C区3住居粘土出土状態 西から		C区下層確認トレンチ9 北から
	C区3住居掘り方全景 西から	PL.34	C区下層確認トレンチ10 北から
PL.17	C区4住居炭化材・焼上出土状態 東から		C区下層確認トレンチ11 南から
	C区4住居北東部炭化材・焼上出土状態 南から	PL.35	D区全景 南東から
	C区4住居遺物出土状態 東から	PL.36	D区1溝全景 北から
	C区4住居北壁焼上出土状態 南から		D区1溝北壁土層断面 南から
	C区4住居袋形土器(C25)出土状態 東から	PL.37	D区1土坑全景 南から
PL.18	C区4住居床面全景 東から		D区2土坑全景 東から
	C区4住居掘り方全景 東から		D区1ビッド全景 南から
PL.19	C区5住居床面全景 北から		D区2ビッド全景 南から

	D区3ビット全景 南から	F区7住居カマド遺物出土状態 西から
	D区4ビット全景 南東から	F区7住居カマド支脚 西から
	D区7ビット全景 南東から	F区7住居掘り方全景 北西から
	D区8・9ビット全景 北西から	F区8住居床面全景 西から
PL.38	D区1トレンチ南壁西端上層断面 北東から	F区8住居遺物出土状態 西から
	D区1トレンチ南壁上層断面 北西から	F区8住居カマド左遺物出土状態 西から
	D区2トレンチ南壁東端上層断面 北西から	F区8住居掘り方全景 西から
	D区3トレンチ南壁上層断面 北から	F区8住居カマド掘り方全景 北西から
PL.39	E区全景 西上空から	F区1掘立柱建物全景 南から
PL.40	E区1・5住居遺物出土状態 北西から	F区2掘立柱建物全景 東から
	E区1住居遺物出土状態 土師器裏(往7)	PL.58
PL.41	E区2住居全景 西から	F区1溝全景 東から
	E区2住居カマド全景 西から	F区2溝全景 北から
PL.42	E区3住居遺物出土状態全景 西から	F区1土坑全景 南から
	E区3住居南東隅遺物出土状態 西から	F区2・3土坑全景 南から
	E区3住居西部遺物出土状態 西から	F区4土坑全景 南から
	E区3住居作業風景 西から	F区5土坑全景 南から
	E区3住居掘り方全景 西から	PL.59
PL.43	E区4住居遺物出土状態全景 西から	F区6土坑全景 南から
	E区4住居カマド前遺物出土状態 北西から	F区8土坑全景 東から
	E区4住居カマド全景 西から	F区9土坑全景 南から
	E区4住居掘り方全景 西から	F区10土坑全景 東から
	E区4住居カマド掘り方全景 西から	F区11土坑、9～11ビット全景 南から
PL.44	E区6住居床面全景 西から	F区12土坑、12～16・20ビット全景 南から
	E区6住居As-B分布状態 西から	PL.60
	E区6住居遺物出土状態 西から	G区全景 西上空から
	E区6住居カマド全景 西から	PL.61
	E区6住居掘り方全景 西から	G区1住居床面全景 北から
PL.45	E区1掘立柱建物全景 西から	G区1住居遺物出土状態 北から
PL.46	E区1土坑全景 西から	G区1住居南東隅遺物出土状態 北西から
	E区2土坑全景 西から	G区1住居カマド遺物出土状態 西から
	E区3土坑全景 西から	G区1住居掘り方全景 北から
	E区5土坑、8・9ビット全景 西から	PL.62
	E区6土坑全景 西から	G区2住居遺物出土状態全景 西から
	E区8土坑全景 西から	G区2住居カマド遺物出土状態 西から
	E区9土坑全景 西から	PL.63
	E区10土坑全景 西から	G区3住居床面全景 西から
PL.47	E区1～7ビット全景 東から	G区3住居遺物出土状態 北から
	E区10～12ビット全景 西から	G区3住居炭化材出土状態 北から
	E区14ビット全景 北から	G区3住居遺物出土状態 北から
	E区16・17ビット全景 北西から	G区3住居掘り方全景 西から
	E区18～20ビット全景 北東から	PL.64
	E区21ビット全景 北西から	G区4住居床面全景 西から
	E区23ビット全景 西から	G区4住居掘り方全景 西から
	E区27ビット全景 東から	PL.65
PL.48	F区全景 西上空から	G区5住居遺物出土状態全景 西から
PL.49	F区1住居全景 西から	G区5住居掘り方全景 西から
	F区1住居掘り方全景 西から	PL.66
PL.50	F区2住居床面全景 北から	G区6住居遺物出土状態全景 西から
	F区2住居遺物出土状態 北から	G区6住居掘り方全景 北から
	F区2住居土師器裏(F15)出土状態 西から	PL.67
	F区2住居南壁際遺物出土状態 北から	G区7住居床面全景 西から
	F区2住居掘り方全景 北から	G区7住居遺物出土状態 西から
PL.51	F区3住居遺物出土状態全景 西から	G区7住居カマド付近遺物出土状態 西から
	F区3住居遺物出土状態 西から	G区7住居カマド遺物出土状態 西から
	F区3住居カマド全景 西から	G区7住居掘り方全景 西から
	F区3住居カマド遺物出土状態 西から	PL.68
	F区3住居掘り方全景 北から	G区8住居遺物出土状態全景 西から
PL.52	F区4住居遺物出土状態全景 西から	G区8住居掘り方全景 西から
	F区4住居遺物出土状態 西から	PL.69
PL.53	F区5住居全景 西から	G区9住居床面全景 北から
	F区5住居掘り方全景 西から	G区9住居遺物出土状態 北から
PL.54	F区6住居全景 西から	G区9住居カマド遺物出土状態(1) 西から
	F区6住居カマド全景 西から	G区9住居カマド遺物出土状態(2) 西から
PL.55	F区7住居全景 西から	G区9住居掘り方全景 北から
	F区7住居遺物出土状態 西から	PL.70
		G区10住居床面全景 西から
		G区10住居掘り方全景 西から
		PL.71
		G区11住居遺物出土状態全景 西から
		G区11住居掘り方全景 西から
		PL.72
		G区12住居遺物出土状態全景 西から
		G区12住居カマド周辺遺物出土状態 西から
		PL.73
		G区13住居遺物出土状態全景 西から
		G区13住居カマド石出土状態 西から
		PL.74
		G区14住居床面全景 西から
		G区14住居遺物出土状態 北から
		G区14住居南部遺物出土状態 北から
		G区14住居掘り方全景 北から
		PL.75
		G区15住居床面全景 西から

	G区15住居遺物出土状態	北から		H区10住居滑石片出土状態(3)	西から		
	G区15住居カマド遺物出土状態	西から		H区10住居滑石片出土状態(4)	西から		
PL-76	G区15住居掘り方全景	西から	PL-91	H区10住居床面全景	西から		
	G区1掘立柱建物全景	南から		H区10住居遺物出土状態	西から		
PL-77	G区2掘立柱建物全景	東から		H区10住居カマド土層断面	西から		
	G区3掘立柱建物全景	東から		H区10住居カマド石出土状態	西から		
PL-78	G区1・2溝	南から		H区10住居掘り方全景	西から		
	G区1上土全景	東から	PL-92	H区11住居遺物出土状態全景	西から		
	G区2上土全景	北東から		H区11住居北部遺物出土状態	西から		
	G区3上土全景	北から		H区11住居カマド石組	東から		
	G区7・8上土、7・8ビット全景	南から		H区11住居カマド石組	西から		
G区9・14上土全景	南から	H区11住居カマド石組		北から			
PL-79	G区10・13上土全景	北東から	PL-93	H区11住居床面全景	南西から		
	G区11上土全景	北から		H区11住居カマド全景	南から		
	G区12上土全景	北東から		H区11住居貯蔵穴全景	東から		
	G区11～5・9ビット全景	南から		H区11住居掘り方全景	南西から		
	G区6上土、10～12ビット全景	南から		H区11住居カマド掘り方全景	南から		
PL-80	H区全景	東上空から	PL-94	H区12住居遺物出土状態全景	西から		
PL-81	H区1住居床面全景	北から		H区12住居カマド周辺遺物出土状態	西から		
	H区1住居遺物出土状態	北から		H区12住居鉢(0126)・甕(0128)出土状態	西から		
PL-82	H区1住居カマド全景	南西から	PL-95	H区12住居カマド遺物	費(0130・131)出土状態	北から	
	H区1住居貯蔵穴遺物出土状態	西から		H区12住居カマド遺物	費(0130)出土状態	西から	
	H区1住居掘り方全景	北から			H区12住居床面全景	西から	
	H区2住居遺物出土状態全景	北から			H区12住居掘り方全景	西から	
	H区2住居西部遺物出土状態	北西から			H区12住居カマド掘り方全景	西から	
PL-83	H区2住居カマド周辺遺物出土状態	西から	PL-96	H区13住居床面全景	南から		
	H区2住居貯蔵穴遺物出土状態	西から		H区13住居遺物出土状態	南から		
	H区2住居掘り方全景	北から		H区13住居カマド周辺遺物出土状態	西から		
	H区3住居床面全景	南から		H区13住居掘り方全景	南から		
	H区3住居遺物出土状態	東から		H区13住居カマド全景	西から		
PL-84	H区3住居南東隅遺物出土状態	須恵路蓋(028)	PL-97	H区14住居西部床面	北から		
	H区3住居カマド全景	南から		H区14住居西部遺物出土状態	北から		
	H区3住居掘り方全景	南から		H区14住居内上土1・2全景	北から		
	H区4住居全景	西から		H区14住居内上土3全景	南東から		
	H区4住居遺物出土状態	西から		H区14住居西部掘り方全景	北から		
PL-85	H区4住居カマド周辺遺物出土状態	西から	PL-98	H区15住居床面全景	北から		
	H区4住居カマド全景	西から		H区15住居遺物出土状態	北から		
	H区4住居掘り方全景	西から		H区15住居遺物出土状態	西から		
	H区6住居床面全景	北から		H区15住居掘り方全景	北から		
	H区6住居遺物出土状態	西から		H区15住居カマド周辺	西から		
PL-86	H区6住居カマド周辺	西から	PL-99	H区16住居床面全景	西から		
	H区6住居カマド土層横断面	西から		H区16住居遺物出土状態	西から		
	H区6住居掘り方全景	北から		H区16住居東部遺物出土状態	西から		
	H区7住居床面全景	西から		H区16住居貯蔵穴	南から		
	H区7住居遺物出土状態	西から		H区16住居掘り方全景	西から		
PL-87	H区7住居北西隅遺物出土状態	西から	PL-100	H区住居群西部掘り方全景	北西から		
	H区7住居掘り方全景	西から		H区住居群東部掘り方全景	北西から		
	H区7住居カマド掘り方全景	西から			H区1溝全景	東から	
	H区8住居遺物出土状態全景	北から		PL-102	H区8上土全景	西から	
	H区8住居西部遺物出土状態	北から			H区9上土全景	西から	
H区8住居南西隅遺物出土状態	西から	H区13上土全景	西から				
H区8住居中央部遺物出土状態	北西から	H区15上土全景	南から				
H区8住居北西部遺物出土状態	西から	H区16・17上土全景	西から				
PL-88	H区8住居床面全景	北から	PL-101	H区18・19上土全景	西から		
	H区8住居高杯(037)・費(042)出土状態	北東から		PL-102	H区22～24・26上土全景	西から	
	H区8住居カマド全景	北西から			H区81上土全景	北から	
	H区8住居カマド遺物出土状態	北西から				H区泉地跡土坑群・1掘立柱建物全景	北から
	H区8住居掘り方全景	北から			PL-103	H区48上土人骨出土状態	東から
H区9住居床面全景	西から	PL-104	H区49上土人骨出土状態		南から		
PL-89	H区9住居遺物出土状態	西から	PL-105	H区51上土人骨出土状態	西から		
	H区9住居カマド周辺遺物出土状態	西から		H区52上土人骨出土状態	南から		
	H区9住居南部遺物出土状態	西から	PL-106	H区53上土人骨出土状態	南から		
	H区9住居掘り方全景	西から		H区67上土人骨出土状態	西から		
	H区10住居遺物出土状態全景	西から	PL-107	H区68上土人骨出土状態	東から		
PL-90	H区10住居滑石片出土状態(1)	西から	PL-108	H区69上土人骨出土状態	南から		
	H区10住居滑石片出土状態(2)	西から		H区70上土人骨出土状態	東から		

	H区70・71・72土坑人骨出土状態 西から	I区9住居出入口斜土層断面 東から
PL-109	H区73土坑人骨出土状態 東から	I区9住居出入口 東から
	H区74土坑人骨出土状態 西から	I区9住居掘り方出入口1 東から
PL-110	H区1トレンチ縄文遺構確認 北から	I区9住居掘り方出入口2 東から
	H区2トレンチ縄文遺構確認 西から	PL-126
PL-111	H区3トレンチ縄文遺物出土状態 東から	I区1井戸全景 東から
	H区4トレンチ縄文遺構確認 北から	I区1井戸遺物出土状態 東から
PL-112	H区27土坑遺物出土状態 西から	I区1井戸周辺全景 北西から
	H区32土坑全景 東から	I区1井戸周辺全景 南から
	H区33土坑全景 東から	I区1井戸底面全景 西から
	H区34土坑全景 東から	PL-127
	H区36土坑全景 東から	I区1竪穴上位遺物出土状態 南から
	H区39土坑全景 東から	I区1竪穴南西部上位遺物出土状態
	H区40土坑全景 北から	I区1竪穴遺物出土状態全景 南から
	H区41土坑全景 東から	I区1竪穴遺物出土状態
PL-113	H区42土坑全景 南東から	I区1竪穴掘り方全景 南から
	H区43土坑全景 東から	I区2竪穴上位遺物出土状態 南から
	H区45土坑遺物出土状態 東から	I区2竪穴上位遺物出土状態
	H区54土坑全景 西から	I区2竪穴床面全景 北から
	H区77土坑全景 南から	I区2竪穴 炉2遺物出土状態 南から
PL-114	I区全景 東上空から	PL-129
PL-115	I区2画北東部全景 南西から	I区3竪穴上位遺物出土状態 南から
	I区全景 南東から	I区3竪穴遺物出土状態 東から
PL-116	I区2住居遺物全景 西から	I区3竪穴北西部遺物出土状態 南東から
	I区2住居カマド周辺遺物出土状態 西から	I区3竪穴床面全景 南から
	I区2住居遺物出土状態 石製塩方(121)	I区3竪穴掘り方全景 南から
	I区2住居南西部遺物出土状態 北から	PL-130
PL-117	I区2住居床面全景 西から	I区1集石全景 南から
	I区2住居掘り方全景 西から	I区7土坑全景 南東から
PL-118	I区3住居床面全景 西から	I区10土坑全景 南東から
	I区3住居遺物出土状態 西から	I区17土坑全景 西から
	I区3住居下層遺物出土状態 西から	I区20土坑全景 西から
	I区3住居東壁柱穴全景 西から	PL-131
	I区3住居掘り方全景 西から	I区24土坑全景 南西から
PL-119	I区4住居床面全景 西から	I区28土坑全景 南東から
	I区4住居遺物出土状態 西から	I区29土坑全景 東から
	I区4住居カマド周辺遺物出土状態 西から	I区37土坑全景 南東から
	I区4住居カマド全景 西から	I区37土坑遺物出土状態 東から
	I区4住居掘り方全景 西から	I区40土坑全景 東から
PL-120	I区5住居床面全景 北から	I区41土坑全景 北西から
	I区5住居遺物出土状態 西から	I区42土坑全景 南東から
	I区5住居離れ鉄出上状態	PL-132
	I区5住居カマド全景 西から	I区44土坑全景 北西から
	I区5住居掘り方全景 北から	I区45土坑全景 北東から
PL-121	I区6住居床面全景 西から	I区50土坑全景 西から
	I区6住居遺物出土状態 西から	I区50土坑土層断面 東から
	I区6住居カマド遺物出土状態 北西から	I区51土坑全景 南から
	I区6住居貯蔵穴全景 東から	I区54土坑全景 北東から
	I区6住居掘り方全景 西から	I区55土坑全景 北東から
PL-122	I区7住居床面全景 北から	I区56土坑全景 北東から
	I区7住居遺物出土状態 北から	PL-133
	I区7住居カマド全景 北西から	I区57土坑全景 南から
	I区7住居南東部遺物出土状態 北から	I区58土坑全景 南西から
	I区7住居掘り方全景 北から	I区61土坑全景 南西から
PL-123	I区8住居床面全景 西から	I区67土坑全景 北東から
	I区8住居遺物出土状態 西から	I区72土坑全景 東から
	I区8住居カマド周辺遺物出土状態 西から	I区73土坑全景 西から
	I区8住居カマド全景 西から	I区74土坑全景 南から
	I区8住居掘り方全景 西から	I区75土坑全景 東から
PL-124	I区9住居遺物出土状態全景 西から	PL-134
	I区9住居カマド周辺遺物出土状態 南から	I区78土坑全景 南西から
	I区9住居カマド遺物出土状態 西から	I区79土坑全景 東から
	I区9住居カマド全景 西から	I区79土坑遺物出土状態 東から
	I区9住居掘り方全景 西から	I区81土坑全景 南から
PL-125	I区9住居床面全景 西から	I区81土坑遺物出土状態 南から
		I区82土坑全景 西から
		I区84土坑全景 南から
		I区85土坑全景 北から
		PL-135
		I区87土坑全景 北東から
		I区87土坑遺物出土状態 北東から
		I区89土坑遺物出土状態 北から
		I区89土坑天井部除去遺物出土状態 北東から
		I区89土坑遺物出土状態 北から

PL. 136	I区89土坑全景	北東から	PL.142	C区1・4・6住居出土遺物
	I区90土坑全景	南東から		E区1～4住居出土遺物
	I区91土坑全景	東から	PL.143	E区5・6住居出土遺物
	I区92土坑全景	南から		F区1～4・6・7住居出土遺物
	I区95土坑全景	北から	PL.144	F区8住居出土遺物
	I区99土坑全景	南から		F区3溝出土遺物
	I区99土坑遺物出土状態	南西から		G区1・2住居出土遺物
	I区100土坑全景	北東から	PL.145	G区2・3・5・6住居出土遺物
	I区108土坑全景	北西から	PL.146	G区7～11住居出土遺物
	I区109土坑全景	北東から	PL.147	G区12～15住居出土遺物
I区110土坑全景	北から		G区1溝出土遺物	
PL. 137	I区114土坑遺物出土状態	南西から		H区1～3・7住居出土遺物
	I区114土坑全景	南西から	PL.148	H区8～10住居出土遺物
	I区121土坑全景	東から	PL.149	H区10～12住居出土遺物
	I区121土坑遺物出土状態	南東から	PL.150	H区12～16住居出土遺物
	I区127土坑遺物出土状態	南西から	PL.151	H区1離立柱建物出土遺物
	I区127土坑全景	西から		H区16・18・21～24・32～34・36・41～43・45・48土坑出土遺物
	I区127土坑遺物出土状態	北西から	PL.152	H区49・53・67～72土坑出土遺物
	I区130土坑全景	東から	PL.153	H区73・74・77土坑出土遺物
	I区132土坑全景	南西から		H区墓地跡出土遺物
	I区132土坑遺物出土状態	南東から		I区1井戸出土遺物
PL. 138	I区133土坑全景	南西から		I区2住居出土遺物
	I区134土坑遺物出土状態	北から	PL.154	I区3～5住居出土遺物
	I区135土坑全景	南から	PL.155	I区6～9住居出土遺物
	I区136土坑全景	北東から	PL.156	I区1竪穴出土遺物
	I区136土坑遺物出土状態	北東から	PL.157	I区1竪穴出土遺物
	I区137土坑遺物出土状態	北西から	PL.158	I区1竪穴出土遺物
	I区137土坑全景	西から		I区2竪穴出土遺物
	I区138土坑遺物出土状態	南西から	PL.159	I区2竪穴出土遺物
	I区140土坑遺物出土状態	東から	PL.160	I区3竪穴出土遺物
	I区140土坑遺物出土状態	南東から	PL.161	I区3竪穴出土遺物
PL. 139	I区146土坑全景	北西から		I区1集石出土遺物
	I区147土坑全景	北東から		I区15・17・26・28・37・40～42土坑出土遺物
	I区147土坑遺物出土状態	北東から	PL.162	I区44・45・51・56・58・60・61・72～75・78土坑出土遺物
	I区151土坑全景	南から	PL.163	I区79・81・82・84・87・89土坑出土遺物
	I区152土坑遺物出土状態	南東から	PL.164	I区85・89土坑出土遺物
	I区152土坑全景	南東から	PL.165	I区91・94・95・99・100・103・106・109・110・112・114・115・119・120・121・123・126土坑出土遺物
	I区154土坑全景	南東から	PL.166	I区127・128・130～138土坑出土遺物
	I区162土坑全景	北東から	PL.167	I区140・147・149・151・152・154・158・162・163・165～172土坑出土遺物
	I区162土坑遺物出土状態	北東から		
	I区165土坑全景	東から	PL.168	遺構外出土石器
PL. 141	I区166土坑全景	北から	PL.169	石仏
	I区167土坑全景	北東から	PL.170	石仏・遺構外出土石器
	I区167土坑遺物出土状態	北東から		
	I区167土坑遺物出土状態	北東から		
	I区169土坑全景	北東から		
	I区171土坑全景	北西から		
	I区171土坑遺物出土状態	北西から		

第1章 調査に至る経過

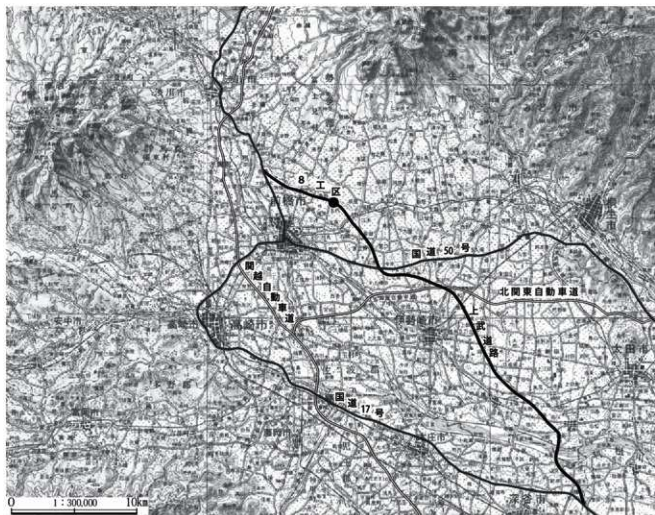
第1節 上武道路について

上武道路は一般国道17号の交通混雑に対応するために計画された大規模バイパスで、埼玉県熊谷市で深谷バイパスから分岐、群馬県前橋市田口町で現道に接続する延長40.5kmの道路である。現道の西には、前橋洗川バイパス、その先には鯉沢バイパス、また計画では上信自動車道が続いて、県北西部の新たな交通幹線網整備事業として期待されている。平成10年には、前橋洗川バイパスを含めて地域高規格道路「熊谷洗川連絡道路」として計画路線の指定を受け、群馬県では「幹線交通乗り入れ30分構想」の中で主要幹線のひとつに位置づけられている。

上武道路の建設事業は、昭和45年度から着手され、平

成4年2月までには起点から国道50号までの延長27.4km区間が供用された。その後、供用区間が延伸するとともに交通量は増大し、平成元年度に着手された国道50号から前橋市上泉町までの4.9km区間(7工区)が、平成20年6月に暫定2車線で供用された。現在供用が残されているのは、終点までの8.2km区間となる8工区である。

8工区は、平成17年度に事業が着手され、平成24年度に主要地方道前橋赤城線までの4.7km区間の暫定開通を果たし、全線開通までの最終工区の発掘調査と工事が進められている。

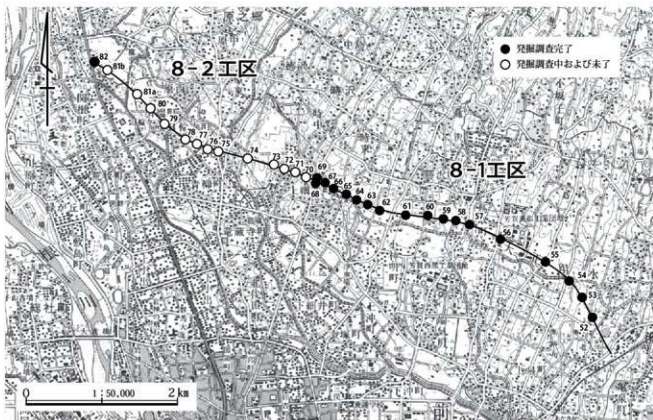


第1図 上武道路と道跡の位置 国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用

第1章 調査に至る経過

第1表 上武道路8工区調査遺跡一覧表

JKNb	遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	調査年度	報告書 発行年度
52b	上泉唐ノ堀遺跡	前橋市 上泉町	00774	平成18・19・20年度	平成23年度
53	上泉新田塚遺跡群	前橋市 上泉町	00775	平成18・19・20年度	平成23年度
54	上泉武田遺跡	前橋市 上泉町	00773	平成19年度	平成24年度
55	五代砂留遺跡群	前橋市 五代町	00772	平成19年度	平成23年度
56	芳賀東御田遺跡	前橋市 五代町・鳥取町	00357	平成19・20年度	平成24年度予定
57	鳥取松合下遺跡	前橋市 鳥取町	00776	平成20年度	平成23年度
58	駒城遺跡	前橋市 鳥取町	00041	平成19・20・21年度	平成23年度
59	鳥取塚田遺跡	前橋市 佛京町		調査除外	
60	堤遺跡	前橋市 佛京町	00034	平成20年度	平成24年度予定
61	小神明勝沢墳遺跡	前橋市 小神明町	00778	平成20年度	平成23年度
62	小神明富士塚遺跡	前橋市 小神明町・上郷井町	00403	平成20・21年度	平成23年度
63	東田之口遺跡	前橋市 上郷井町	00125	平成20年度	平成23年度
64	丑子遺跡	前橋市 上郷井町	00134	平成20年度	平成24年度予定
65	上郷井五十嵐遺跡	前橋市 上郷井町	00777	平成20・21年度	平成24年度予定
66	天王・東郷屋谷ノ遺跡	前橋市 上郷井町	00131	平成20・21年度	
67		前橋市 富士見町	90094	平成20・21年度	
68	上町・時沢西組屋谷ノ遺跡	前橋市 上郷井町	00798	平成21年度	平成24年度予定
69		前橋市 富士見町	90097	平成21年度	
70	王久保遺跡	前橋市 富士見町・富士見町	00794	平成21・24年度	平成24年度予定
71	新田上遺跡	前橋市 上郷井町	00128	平成24年度	
72	上郷井中島遺跡	前橋市 上郷井町	00787	平成21・24年度	
73	上郷井獅子山遺跡	前橋市 上郷井町	00786	平成21・24年度	平成24年度予定
74	山王・築遺跡群	前橋市 青柳町	00795	平成21・22・23・24年度	
75	引切塚遺跡	前橋市 青柳町	00434	平成24年度	
76	青柳宕上遺跡	前橋市 青柳町	00325	平成24年度	
77	日輪寺諏訪前遺跡	前橋市 日輪寺町		調査除外	
78	諏訪遺跡	前橋市 日輪寺町	00144	調査除外	
79	川端根岸遺跡	前橋市 川端町	00807	平成24年度	
80	川端山下(道東)遺跡	前橋市 川端町	00808	平成24年度	
81a	関根榎ヶ沢遺跡	前橋市 関根町	00802	平成24年度	
81b	関根赤城遺跡	前橋市 関根町	00803	平成24年度	
82	田口下田尻遺跡	前橋市 田口町	00804	平成23年度	



第2図 上武道路8工区の遺跡 国土地理院1/50,000地形図「前橋」平成10年発行を使用

第2節 上武道路と埋蔵文化財

上武道路が通過する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地の多い地域である。群馬県は、昭和48年に文化財保護室を文化財保護課に拡充して調査にあたり、昭和53年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）が調査事業を受託して、現在に至っている。

上武道路の建設事業は起点側から段階的に進められてきた。その工程は概ね①埼玉県境から国道50号まで、②国道50号から前橋市上泉町まで、③前橋市上泉町から前橋市田口町の現国道17号までの3つの区間に分けることができ、現在は②の北端まで供用が開始されている。

埼玉県境から国道50号までの区間では、35箇所 of 遺跡の発掘調査が行われ、調査の成果は26冊の発掘調査報告書として刊行されている。この区間の事業が完了した平成7年には、埋蔵文化財調査の成果をより広く公開するため、冊子総集編「地域をつなぐ 未来へつなぐ—上武道路埋蔵文化財22年の軌跡—」が刊行された。この総集編では、「弥生時代の開拓者」といった平野部での発掘調査や「芳郷」の墨書土器出土で話題となった古代勢多部の芳賀郷、東山道駅路のひとつにも推定されていた「あずま道」など、この地域の歴史的課題に対する検討の結果がまとめられており、今後取り組むべき考古学的課題も特記されている。

国道50号から前橋市上泉町までは7工区にあたる。ここでは17箇所の遺跡が発掘調査の対象となり、16冊の発掘調査報告書が刊行されている。この区間の発掘調査では、荒砥川の東で検出された古墳時代の集落が周辺の今井神社古墳や大室古墳群の築造と関連する可能性があること、荒砥前田Ⅱ遺跡では県内でも希少な巴形銅器破片が出土したこと、女塚の調査では浅間川テフラが確認されたことで開削年代を特定する手がかりが得られたこと等が成果としてあげられている。荒砥川の西では、帯状低地に分断された台地ごとに縄文時代前期の集落が立地し、旧石器時代の遺物も暗色帯および上位の複数の土層から出土したこと等が注目されている。

前橋市上泉町から現国道17号までは8工区にあたり、31箇所の遺跡、約40万㎡が埋蔵文化財の調査対象となっている。工区名称は県道前橋赤城線を境界にして東が8

-1工区、西が8-2工区と呼ばれている。調査は、平成18年度に8-1工区の東端から始められ、工事工程との調整により、平成23年度からは8-2工区の西端である終点の田口下田尻遺跡の調査も開始された。

8-1工区は、これまでと同様に旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が多いのに対して、8-2工区では縄文時代より新しい遺跡の存在が続々と明らかになっている。遺跡の実態が未知数であった赤城白川流域の白川扇状地では、予想外の縄文時代の埋没谷や旧石器まで含まれていることが判明している。特に最西端の田口下田尻遺跡では竪穴住居280棟が検出された大集落が調査され、従来の広瀬川低地帯の遺跡分布の理解を見直す資料が得られている。

これまで、群馬県内の上武道路関連で発掘調査を実施してきた遺跡には、J Kを冠した遺跡略号が付されている。Jが上武、Kが国道を指しており、南側の起点から順次算用数字を1から付している。8工区も、7工区の最終番号J K52に続いて、この略号を記録類作成に際して使用している。J K52だけは、上泉唐ノ堀遺跡が供用部分の関係で7工区と8工区で分割されたことから、8工区分の上泉唐ノ堀遺跡にはJ K52bをつけて7工区と区別している。また、J K59烏取塚田遺跡は、水田遺構の存在が想定されていたが、試掘調査で遺構の無いことが判明し、発掘調査対象から除外したものの略号は欠番とせず、そのままとした。（第1表）また、当初関根遺跡群で一括されていた遺跡が田口下田尻遺跡、関根細ヶ谷遺跡、関根赤城遺跡に細分されたこと、平成23年度に開始された田口下田尻遺跡を先行して82としたことから、関根細ヶ谷遺跡は81a、関根赤城遺跡は81bとした。

第3節 調査に至る経過

上武道路7工区の発掘調査は、上泉唐ノ堀遺跡を最後に平成16年度末で終了した。その後の工事は順調で、県道前橋赤城線までの供用が間近に迫っていた。さらに同16年度には、国道17号の現道から西の前橋渋川バイパスが着工されたことから、8工区は、開通部分と前橋渋川バイパスとの間に残された格好となり、早期着工を待ち望む声が一段と強まった。

8工区が建設に向けて動いたのは、平成18年度に入ってからである。国土交通省による路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事に準備が起点側から始まった。これまでの調査状況からみて、埋蔵文化財が用地内にあることは明確であったことから、埋蔵文化財の発掘調査を実施するための調整がおこなわれた。

埋蔵文化財の発掘調査について実施に向けての協議が、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、平成18年2月16日付で「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)の実施に関する協定書」(以下、「協定書」という。)が三者の間で締結された。これによって、群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。

協定書では、協定の適用区間、発掘調査の実施場所・対象面積が示され、平成18年10月1日～平成29年3月31日に発掘調査を完了させることが明記された。なお、「協定書」は、平成18年6月20日付で、調査期間の開始を3ヶ月前倒しとする変更のための「変更協定書」が締結されて、現在に至っている。この「変更協定書」に基づいて、平成18年7月から東端の上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群の発掘調査が開始された。

また、各遺跡が発掘調査に入る前には、調査範囲と調査面積の確定、調査期間や経費算定のため、群馬県教育委員会文化財保護課(以下、「県文化財保護課」と略記する)により、平成18年4月25・26日、同年5月17・18日、同年8月11日、同年12月5～7日、平成19年8月16～27日、同年12月10～14日、平成21年1月6日～8日、同年4月20日～5月7日、同年9月25～29日、平成22

年12月6～20日、平成23年5月12日、同年8月22日～24日、同年10月18日、の13回(23年度未現在)にわたって、8工区の試掘調査が実施された。

芳賀東部団地遺跡周辺の試掘調査は、平成18年12月5日～7日の間に県文化財保護課によって実施され、荻窪川以西～上信五代工業団地以東までの区間は「本格的な発掘調査が必要」とされた。上信五代工業団地付近は低地のため、今後試掘・確認調査が必要だが、芳賀東部工業団地付近は、「過去の調査結果から、本調査が必要」とされ、この旨平成18年12月20日付けで当事業団に通知された。この試掘調査結果の通知の「過去の調査結果」とは、前橋市教育委員会(芳賀団地造成地内埋蔵文化財発掘調査団)による昭和51～55年度の調査で、上武道路用地の南北にある対象面積32.78haの区域である。それらの調査結果は発掘調査報告書として第1巻(昭和59年度)、第2巻(昭和63年度)、第3巻(平成2年度)が刊行されている。

上述の試掘調査結果を受け、本遺跡の調査は平成18年度末に国土交通省関東地方整備局長、群馬県教育委員会教育長、当事業団理事長の三者の協議を経て、平成19年4月2日付けで5月から着手することとなった。また、本遺跡の一部は平成19年度に終了しなかったため、平成20年4月1日から鳥取松合下遺跡の調査と併行して実施し、平成20年8月に終了した。

第2章 立地と環境

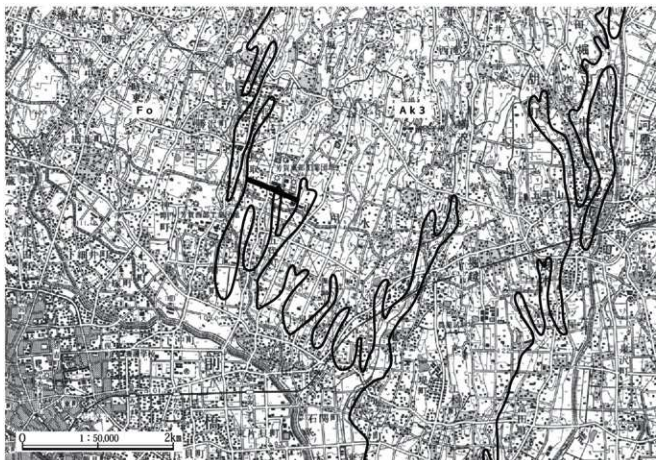
第1節 地理的環境

本遺跡は上武道路用地内という制約もあって、幅約40m・長さ約790mの「トレンチ」状の調査である。面的に調査を実施した前橋市教育委員会による「芳賀東部団地遺跡」（以下、「芳賀東部(市教委)」と略記する)の広がりと比較すると、遺構の分布や地形的特徴を把握するには限界がある。そこで、芳賀東部(市教委)の発掘調査報告書に導かれつつ、本遺跡(以下、「芳賀東部(上武道路)」と略記する)の位置を記すこととする。

芳賀東部(上武道路)は赤城山の南麓にあり、現代の標高では142.0mから147.7mの間にある。第3図は『群馬県10万分の1地質図』の一部と、『国土地理院5万分1地形図』の一部とを重ねたものである。芳賀東部団地遺跡周辺は、地質的には赤城火山第3期噴出物(Ak3溶結凝灰

岩・軽石及び火山灰)と、第四紀山麓堆積物(Fo礫・砂及びローム)が堆積する。赤城南麓は、中小河川が下刻して谷地形を作り、その間に残された尾根筋が赤城山山頂部を中心にして放射状に残っている。遺跡近傍の中小河川は広瀬川低地帯に至って桃ノ木川に合流し、南東に向かう。上武道路の路線沿いに実施された旧石器調査では、厚さを異にしつつローム層が堆積している。A区東端の国土交通省によるボーリング調査結果では、下位に「黒～黒褐色砂質シルト」が約2m堆積し、その下位には1m弱の「暗灰色礫混じり火山灰礫」、その下5mまでが「暗灰色玉石混じり火山灰礫」である(P.118 第15図-上)。

昭和40年代以前の地形で水田が営まれているのは、谷地形のなかのみで、尾根筋は山林または畠である。第4



第3図 芳賀東部団地遺跡周辺の地質

図は明治時代に測量された「迅速図」(1/2万)を1/2.5万に縮小し、道路・溜池・神社等を目安に、上武道路用地と近傍の遺跡を重ねたものである。谷筋に網かけを加筆している。谷地形を上流にたどると、小規模な溜池の存在に気付く。芳賀東部(上武道路)のA区(東端)は谷筋の上であり、C区西端は低地(天神川の谷)を臨む位置にある。さらに、西端の1区は金丸川の低地(鳥取松合下遺跡)に接していることが読み取れ、現地での微地形観察・推定と一致していることが解った。

第5図は米軍による第二次大戦後の航空写真の一部である。記録によると昭和21年の撮影で、現地を特定するのが難しいが、芳賀東部(上武道路)調査区域のほぼ中央部に相当するD区西端と推定できる地点に●を示した。図中下部の白い帯は大正用水である。大正用水は大正7年12月に群馬県会で決議され、昭和18年着工、昭和27年

竣工という(『勢多郡誌』1958)。空中写真撮影時は工事中と推定される。

大規模な発掘調査が行われる以前の地形としては、昭和43年の前橋市現形図があり、狭い範囲では比較的起伏に富んだ地形であったと考えられる。第6図は前橋市の1/2500現形図を1/1万に縮小し、芳賀東部(上武道路)区域を加筆したものである。A区東端の五代川、C区とD区の境界とした天神川、鳥取松合下遺跡の金丸川の位置も加筆した。この図と迅速図とを比較してみると、昭和43年図では大正用水が設置されたほか、道路が直線的になったり、住宅が増加しているなどの変化はあっても、芳賀東部団地遺跡全体としては、地形的に大きな変化がないと考えられる。

当事業団の調査担当が現地入りした平成19年5月の時点では、東半部の様相が一変していた。芳賀東部団地遺



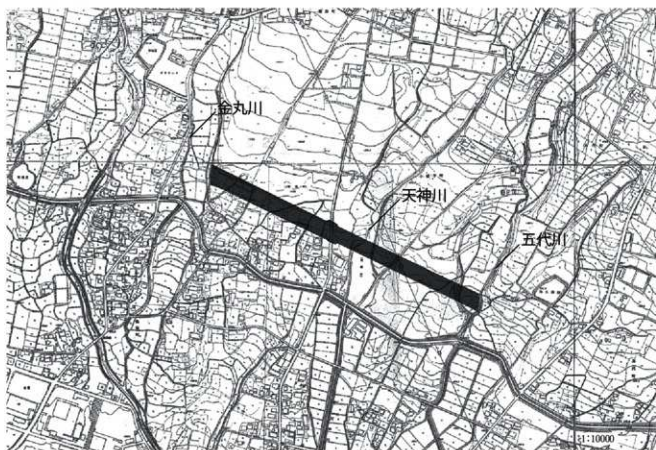
第4図 旧地形図上の遺跡 明治18年「迅速図」に芳賀東部(上武道路)を加筆(網かけは谷地形)

跡(上武道路)は、調査着手時点で、すでに上武道路用地南北の両側に工業団地や住宅団地が営まれており、東側のA B C D区では団地造成前の微地形を見ることはできなかった。それを補うのが市教委調査の記録である。第7図は市教委報告書第2巻(318頁)に掲載された図に、芳賀東部(上武道路)のA区から1区的位置を加筆したものである。この図によると、上武道路A区の東側に谷地形があり、「A谷」と呼ばれる。A谷は東側に所在する砂留遺跡との間に南流する五代川の谷筋である。「B谷」は上武道路用地に含まれず、大正用水に谷頭がかかっている、芳賀東部(市教委)の南東部に相当する。「C谷」は芳

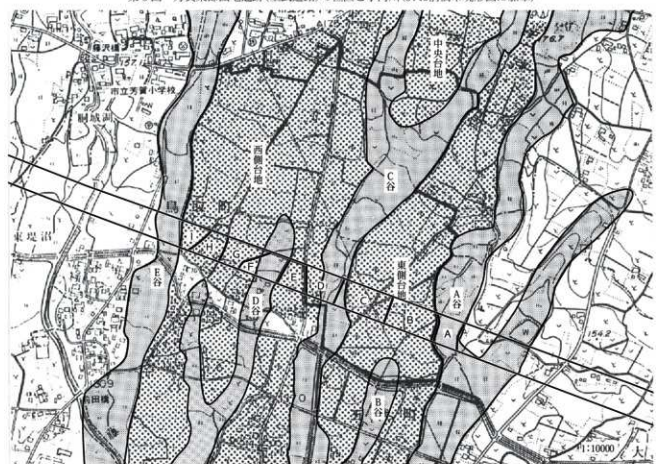
賀東部(上武道路)のC区-D区境界とした天神川の谷筋に相当し、「東側台地」と「西側台地」とを分けてさらに上流に遡り、「中央台地」の東西に分岐する。「D谷」は芳賀東部(上武道路)のE区-F区境界とした浅い谷地形に相当する。「E谷」は芳賀東部(上武道路)西端の1区の西側の低地に相当し、金丸川東側の鳥取松合下遺跡A B C区の谷筋に相当する。以上のように、芳賀東部(上武道路)区域で観察・推定された微地形が、市教委報告書に掲載された谷と台地との微地形分析に概ね一致することが理解できた。



第5図 昭和21年(1946年)米軍による空中写真(コース158-A-5の一部を拡大)



第6図 芳賀東部団地遺跡(上武道路)の位置と小河川(S.43前橋市現形図に加筆)



第7図 芳賀東部団地遺跡の谷筋 前橋市教育委員会「芳賀東部団地遺跡」第2巻の図(318頁)に加筆

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には、近年の大規模開発に伴う発掘調査によって明らかにされた、旧石器時代から中近世に至る時代の遺跡が多数あり、それらの遺跡の発掘調査報告書も多数刊行されている。東側では五代砂留遺跡群(当事業団)、北側と南東側は芳賀東部団地遺跡(市教委)・五代南部工業団地住宅団地、北西部では芳賀北部団地遺跡(市教委)、西側では鳥取松合下遺跡・胴城遺跡(当事業団)の調査があり、南西部では芳賀西部団地遺跡(市教委)がある。

周辺の遺跡をあけて歴史的環境を考察する方法がもっとも一般的な手法であるが、ここでは比較的近い距離にあって本遺跡の一部または密接な関係をもつと考えられる遺跡を取り上げ、本遺跡の内容を考える一助としたい。芳賀東部団地遺跡(上武道路)がその一部をなす「芳賀東部団地遺跡(市教委)」が鍵になる。

旧石器時代

平成23年度末に『上武道路・旧石器時代遺跡群(3)』(2012, 当事業団)が刊行され、上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群(近傍遺跡6)・上泉武田遺跡(5)・五代砂留遺跡群(4)・芳賀東部団地遺跡(2)・胴城遺跡(3)の6遺跡出土の旧石器について、報告されている。詳細はそちらに譲るが、「群馬編年」のI期からIV期までの旧石器が出土し、環状ブロック群や礫群の存在が明らかにされた。そのほか、鳥取福蔵寺11遺跡(8)では、群馬編年V期に相当する細石器が350点以上出土し、「同様の時期の遺跡がこの周辺にさらに存在する可能性は高い」と予想されている。

縄文時代

芳賀東部団地(1, 市教委)をはじめとして、芳賀北部団地(10)・川白田(17)・五代伊勢宮VI(16)の各遺跡で縄文時代住居等が発見されている。手元の集計では、近傍の遺跡地図に示した遺跡で263軒の縄文時代住居を数える。前期から竪穴住居を構えるようで、川白田遺跡で早期、湯気遺跡で草創期の土器片が確認されている。

弥生時代

倉本遺跡(近傍遺跡19)で弥生中期の住居2軒、湯気遺

跡(20)で後期の住居1軒、小神明勝沢境遺跡(29)で後期の住居2軒が検出されているが、縄文時代に比較して発見例が少ない。

古墳時代

この時代以降、集落の発見例が多くなり、埋没した古墳も発見されている。昭和13年刊行の『上毛古墳総覧』では、芳賀村の古墳は64基(前方後円墳4、円墳55、他5)が集計されている。近傍遺跡であげた胴城遺跡、芳賀東部団地(市教委)、芳賀西部団地、芳賀北曲輪、西田、オブ塚古墳等の各遺跡検出古墳数は49基となり、これらを加えると100基を超える古墳が存在していたと推定されている。古墳時代の古い段階として五代中原II遺跡・III遺跡(11)の集落がある。芳賀東部団地(1)の南東区域にも前期のH420号住居他があり、いわゆる「石田川期」の集落がこの付近を中心に分布する。五代川東側の低地に、五代砂留遺跡群(4)の45地区があり、ここにも「古墳時代前期中葉の集落の可能性が高い」住居群が発見されている。近傍の古い時期の古墳として、端着帳遺跡(芳賀西部団地の南約500m)の方形周溝墓2基が弥生時代末～古墳時代初め(As-C 降下以前)、五代江戸屋敷遺跡(五代伊勢宮遺跡の南約100m)の方形周溝墓2基(周溝埋没土はAs-C 混土)が4世紀中頃とされる。

奈良平安時代

近傍の遺跡では、やはり芳賀東部団地(1)が最大の軒数で413軒、次が芳賀北部団地遺跡の237軒である。その他、近傍遺跡地図に掲載した遺跡の住居数を足し合わせると、一部に古墳時代を含むが1129軒にもなる。芳賀東部団地(1)が、この付近の中心的・拠点の集落と考えられる。

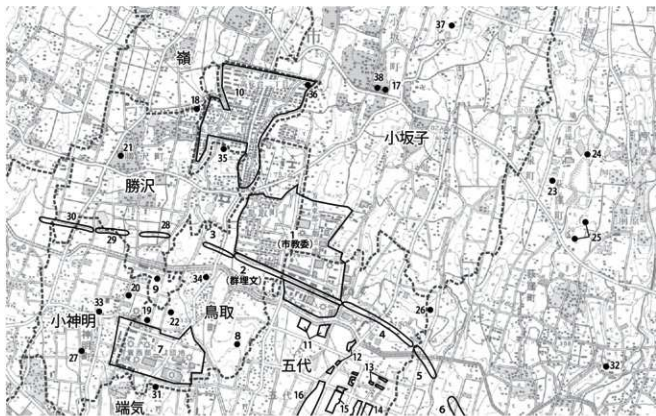
中近世以降

戦国時代には比較的小規模な城址・砦が造られ、大胡氏の勢力圏に含まれていたとされる。五代伊勢宮遺跡の南方約1.3kmにある上泉城は、上泉伊勢守の居城という。明治22年4月には、嶺・小坂子・五代・鳥取・勝沢・端着・小神明の7カ村が合併して「南勢多野芳賀村」が成立し、当時の戸数516戸・人口3107人との記録が残っている。第8図の町名境は、現代の境界線を加筆したもので、当

時の境界とは一致しないが、大雑把な位置関係はつかめるであろう。

[参考文献]

- 『端気遺跡群1』前橋市教育委員会,昭和57年,1983
前橋市史編さん委員会『前橋市史』第一巻,前橋市,1971
前橋市史編さん委員会『前橋市史』第四巻,前橋市,1978
『上毛古墳総覧』群馬県,1938
『群馬県史 通史編7 近現代1』付表,群馬県史編さん委員会,1991
『上野国郡村誌1 勢多郡(1)』群馬県文化事業振興会,1977



第8図 近傍の遺跡分布図 国土地理院1/25,000地形図(前橋)平成22年発行、「西川」平成14年発行、「鼻毛石」平成14年発行、「大井」平成22年発行を使用

第2表 近傍の道跡一覧表 ●=遺物主体、○=遺構伴う 「飛鳥」は古墳に含まれる場合がある。

番号	道跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	飛鳥	奈良 ～ 平安	中世 住	近世	備考(その他の遺構)	文献
			草	早	前	中	晩								
1	芳賀東部団地道跡市教委				○	○					○	○	○	畿治地、製鉄跡	
1	芳賀東部団地道跡1998							○			○		出入口のある住居		
1	芳賀東部団地道跡2005									○			8c初頭以降		
2	芳賀東部団地道跡群理文	●	●	○	○			○		○	○			本道跡	
3	鳥取松平下道跡・銅城道跡	●		○	●	●		○					銅城破片、鉄斧、古墳1基、前期住居1、題目銭	G534	
4	五代砂留道跡群	●		○				○		○	○	○	畿治遺構、道路状遺構	G530	
5	上泉武田道跡	●		●	●			○		○	○			年報27	
6	上泉新田塚道跡群	●		○				○		○			7c代円墳	G522	
7	芳賀西部団地			○	●	●		○			○	○	古墳31基(5c後半～6c初頭)		
8	鳥取福蔵寺・福蔵寺Ⅱ道跡	●						○	○	○			9c中頃鍔鎌銅治炉、中世銅立柱建物		
9	九科道跡			●	●	○				○	○		硬玉大珠、張り出しピット		
10	芳賀北部団地道跡			○	○					○	○		神功御室、製鉄跡、開沢城一部		
11	五代中原Ⅰ～Ⅲ道跡			○	○					○			4c代ベッド状遺構のある住居		
12	五代山街道Ⅰ道跡							○				○			
13	五代深堀Ⅱ道跡			○						○					
14	五代木福Ⅰ道跡・木福Ⅲ道跡			○	●	●		○		○	○		9c中畿治工房跡		
15	五代竹花・竹花Ⅱ道跡			○	●	●				○			87住=和銅開助2、神功御室3、銅鈴2		
16	五代伊勢宮Ⅰ～Ⅳ道跡・伊勢宮道跡(1)(2)									○	○	○	畿治工房跡8c後～9c前葉		
17	川白田道跡		●	○	●	●	○					○	軽石製石製品、近世井戸覆屋		
18	芳賀北面輪道跡			○	○	●				○			古墳6基7c中頃		
19	倉本道跡						○				○	○	弥生中期～後期住居2軒、縄文土器		
20	陶気道跡		●	○	●		○			○					
21	オブ塚古墳						○						全長35m前方後円墳、6c後半		
22	西田道跡			○				○					間1式期3軒、和泉期4軒		
23	依窪 鱒塚道跡								○	○			「林」墨書土器、布張り擬立柱		
24	依窪 東爪道跡			○											
25	依窪倉兼・倉兼Ⅱ道跡									○					
26	松 峯道跡・五代松峯Ⅱ道跡							○		○			奈良三彩小甕、出入口ピットのある住居		
27	大明神道跡														
28	堤道跡		○	●	○	●	○				○	○	柄鏡形散石住居、中世火葬墓	年報28	
29	小神明勝沢 堤道跡				○			○			○	○	弥生後期2軒、古墳前期4軒	G524	
30	小神明富士塚道跡			●						○	○	○	中世屋敷跡	G524	
31	天台宗善勝寺											○	鉄鑄造阿弥陀如来座像、仁治4年(1243年)銘		
32	依窪城跡												16世紀		
33	小神明の寄居・營											○	16世紀		
34	鳥取城											○	15～16世紀		
35	勝沢城											○	16世紀		
36	小坂子城跡											○	16世紀		
37	小坂子妻吉城											○	16世紀		
38	川白田の營											○	16世紀		

第2章 立地と環境

[文献] 番号は第8回番号、近傍の道路表番号と一致

- 1 『芳賀東部旧地道路』前橋市教育委員会、芳賀旧地道路群第1巻、1984
- 1 『芳賀東部旧地道路II』前橋市教育委員会、芳賀旧地道路群第2巻、1988
- 1 『芳賀東部旧地道路III』前橋市教育委員会、芳賀旧地道路群第3巻、1990
- 1 『芳賀東部旧地道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、1998
- 1 『芳賀東部旧地道路II』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2005
- 2 本道路
- 3 『鳥取松合下道路・駒城道路』群理文、534集、2012
- 4 『五代妙留道路』群理文、530集、2012
- 5 『年報』27、群理文、2008
- 6 『上泉府ノ堀道路・土泉新田塚道路群』群理文、522集、2011
- 7 『芳賀西部旧地道路』前橋市教育委員会、芳賀旧地道路群第4巻、1999
- 8 『鳥取福蔵寺道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、1997
- 8 『鳥取福蔵寺II道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、1998
- 9 『小神明道路群I』前橋市教育委員会、1984
- 9 『小神明道路群IV』前橋市教育委員会、1986
- 9 『小神明道路群V』前橋市教育委員会、1987
- 10 『芳賀北部旧地道路』前橋市教育委員会、芳賀旧地道路群第5巻、1994
- 11 『五代伊勢宮II道路・五代深堀II道路・五代中原II道路・五代伊勢宮IV道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2002
- 11 『五代伊勢宮VI道路・五代深堀II道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2003
- 11 『五代中原II道路・五代山街道II道路・五代山街道II道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2004
- 12 『五代中原II道路・五代山街道II道路・五代山街道II道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2004
- 13 『五代伊勢宮II道路・五代深堀II道路・五代中原II道路・五代伊勢宮IV道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2002
- 14 『五代竹花道路・五代木福道路・五代伊勢宮I道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2001
- 14 『五代竹花II道路・五代木福II道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2004
- 15 『五代竹花道路・五代木福道路・五代伊勢宮I道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2001
- 15 『五代竹花II道路・五代木福II道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2004
- 16 『五代竹花道路・五代木福道路・五代伊勢宮I道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2001
- 16 『五代伊勢宮II道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2002
- 16 『五代伊勢宮III道路・五代深堀II道路・五代中原II道路・五代伊勢宮IV道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2002
- 16 『五代伊勢宮VI道路・五代中原II道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2003
- 16 『五代伊勢宮道路(1)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2007
- 16 『五代伊勢宮道路(2)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2009
- 17 『川白田道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、1998
- 18 『芳賀北面輪道路』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、1990
- 19 『小神明道路群II』前橋市教育委員会、1984
- 20 『小神明道路群IV』前橋市教育委員会、1986
- 21 『前橋市史』第一巻、前橋市、1971
- 22 『小神明道路群III』前橋市教育委員会、1984
- 23 『茯苓塚塚道跡・茯苓東爪道跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2002
- 24 『茯苓塚塚道跡・茯苓東爪道跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2002
- 25 『茯苓倉兼道跡・茯苓倉兼II道跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、2003
- 26 『松家道跡』前橋市教育委員会、1982
- 26 『五代松塚II道跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団、1998
- 27 『小神明道路群II』前橋市教育委員会、1984
- 28 『年報』28、群理文、2009
- 29 『小神明勝沢堤道跡・小神明富士塚道跡』群理文、524集、2012
- 30 『小神明勝沢堤道跡・小神明富士塚道跡』群理文、524集、2012
- 31 『増補前橋の文化財』前橋市教育委員会、1999
『前橋市史』第一巻、前橋市、1971
- 32-38 『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会、1989

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

1 試掘調査

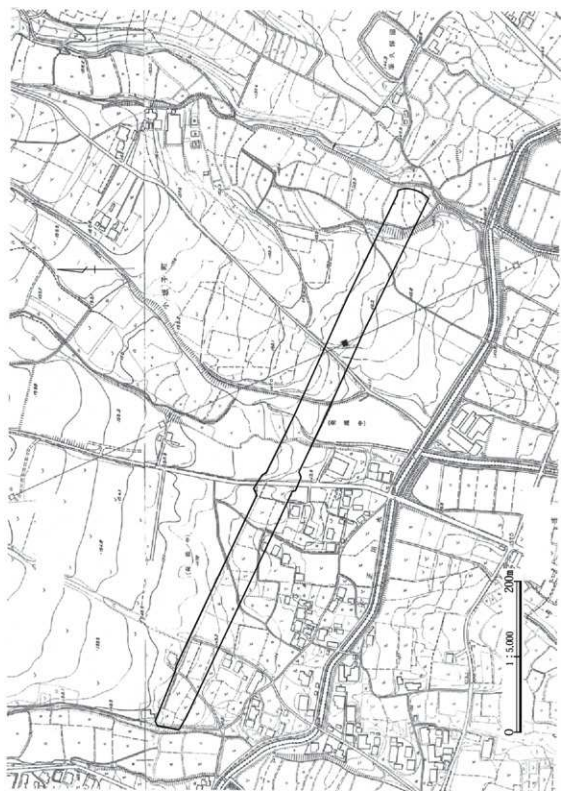
本遺跡周辺の試掘調査は平成18年12月に群馬県教育委員会文化財保護課によって実施されたが、本遺跡隣接地ですでに前橋市教育委員会による発掘調査が昭和51～55年に行なわれており、遺跡・遺構のあることが明らかであることから、上武道路用地内の試掘調査は実施されず、直接本調査を実施することになった。

2 調査区・グリッドの設定

芳賀東部団地遺跡は、東端の五代川の低地と西端の金丸川の低地に挟まれた区域で、東西約790m、幅約40mの区域である。調査区は市道00-040号線を境界として、東側のA B C D区と、西側のE F G H I区に大きく分けられる。東側は用地の南北に工業団地が営まれ、すでに活動中であり、南北の断面では上幅約30m・下幅40m（路線幅に等しい）の台形を呈する。西側のEからI区は、用地北側に芳賀住宅団地の擁壁があり、南側は畠と宅地で、もとの地形を残している。調査対象区域東側のなかにJRの鉄塔が存在し、この周辺を先行して調査することが求められたことから、地形と鉄塔とを含めて勘案し、天神川を境としてその東側から鉄塔までをC区、鉄塔から東側の高い区域をB区、B区の東側に位置する一段低い区域をA区とした。D区は天神川から市道00-040号線までの区域、E区は市道00-040号線から西側の浅い谷地形まで、F区はこの谷地形から西側の細い市道05-263号線までである。G区は市道05-263号線から西側の市道05-270号線まで、H区は市道05-270号線から市道05-265号線まで、I区は市道05-265号線から市道05-234号線までの区域である。国土交通省による土地番号は118～159までで、A区=118の一部(120除外)、B区=118の中央部、C区=118の西部(121除外)、D区=123、E区=126～129(130～132除外)、F区=134～138、G区=141～147、H区=149～152、I区=155～156(148・153・154・157・



第9図 調査区の設定 国土交通省1/300大縮図 平成19年4に加筆



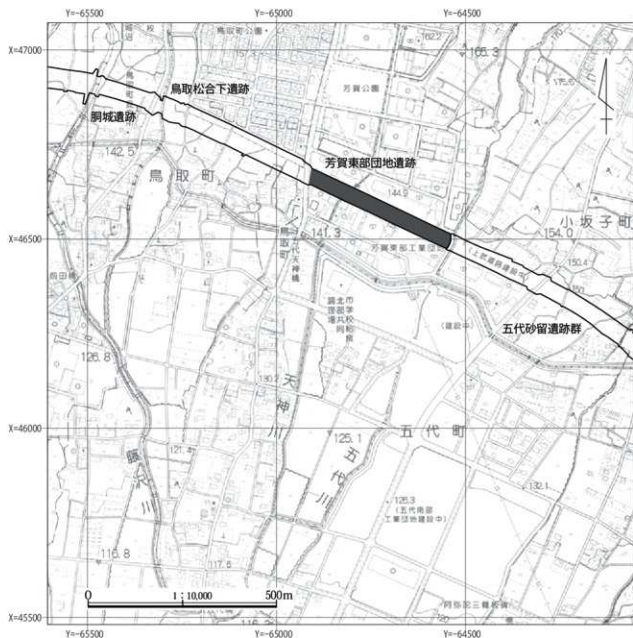
第10図 芳賀東部団地道路調査区位置図(1) 前橋市1/2500地形図 昭和43年を使用

158・159除外)である。

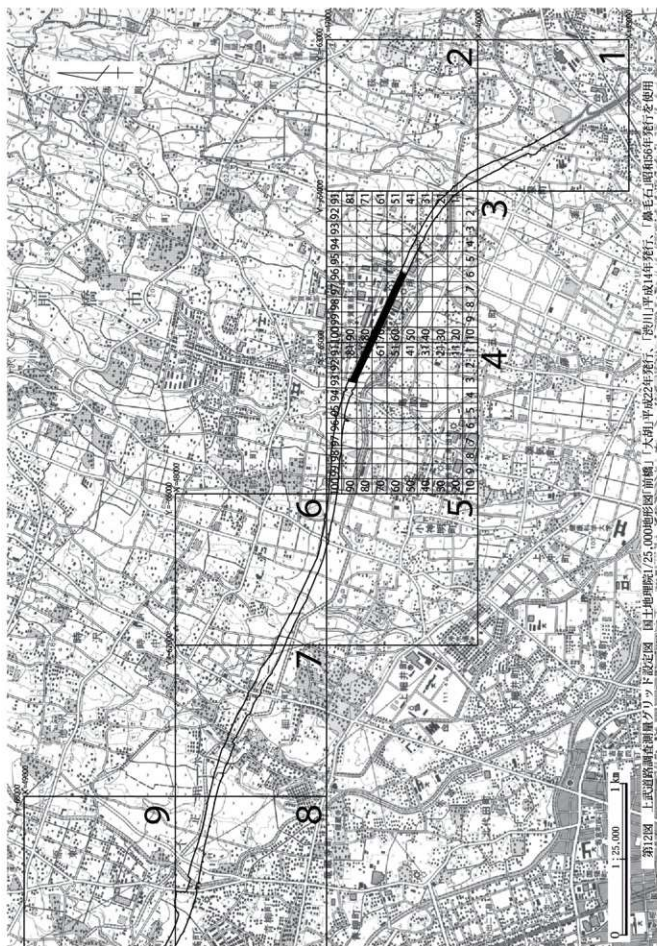
グリッドは、8工区の起点である国家座標第IX系(世界測地系) X=45,000、Y=63,000を基準に設定した。上武道路調査区域の統一仕様では、1km四方が地区、その中の100m四方を区とし、さらに区の南東隅を基点に5mごとにX軸が南から1～20、Y軸が東からA～Tをつけて小区画に細分した。この表記は遺構の位置を示したり、遺物の取上げ、遺物注記などの作業で使われてい

る場合がある。本遺跡は3区と4区とにまたがる区域である。

本遺跡も上武道路7工区までの仕様にあわせ、遺跡略称「JK」を使用した。本遺跡はJK56である。また、遺構等の位置・範囲をX-Y座標値の下3桁で表記する場合がある。



第11図 芳賀東部団地遺跡調査区位置図(2) 前橋市1/2500現形図 平成21年版を使用



第2節 基本土層

東半部の代表としてC区南北ベルトの土層、西半部の代表としてI区3堅穴の北壁土層を示す。土層採取地点は、第9図の調査区設定図に●で示した。→は土層を見た向きである。

1 C区南北ベルト

C区は本遺跡調査の第1着手地区である。C区の路線用地外の南北の区域は工業団地として造成されて深く平坦に掘り下げられており、周囲の地形から旧地形を想定することは困難であった。着手時には調査区域全体が平坦化されており、わずかに西端の天神川に面する範囲が斜面をなしていた。北端に沿って掘削を始めたところ、表面から数十cmのローム層は造成盛り土であることが判明した。土層観察のため、東西・南北のベルトを残して遺構確認面まで掘削したところ、北端付近では表面から約1mで遺構確認面に達し、南端近くでは約2.5mの盛り土のあることが判明した。

第13図は土層観察用の東西ベルトと南北ベルトとの交点付近で、南北ベルトの北半部である。4層上面が工業団地造成以前の旧地表と推定する。5層は黒色土で白色軽石を多く含み、近世以前の表土と考えられる。

2 I区3堅穴北壁土層

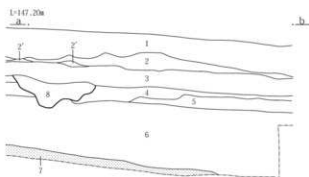
I区は本遺跡西端の調査区である。3堅穴はI区北辺の中央部にある堅穴で、縄文時代前期の所産と推定され、堅穴の北半部は調査区外にある。第13図下は3堅穴土層の一部で、1が現在の表土、2は黒褐色系の土で白色軽石・黄白色軽石を含む。3～6層は堅穴の埋没土である。堅穴の北側には、住宅団地南端のコンクリート擁壁があり、1層・2層とも土木工事で動いている可能性がある。

第3節 調査の経過

以下、日誌から調査の経過を追う。

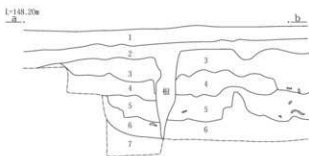
平成19年度の調査経過

5月 22日、現地入り。5月中は現地の状況を確認し、事務所の設置場所や着手順などの打合せを行なう。調査



C区 南北ベルト土層の部分図

- 1 黒褐色の3% 掘れたロームの埋土。黒褐色土ブロック・礫が一部に混じる。粘性・しまりやや強。工場建設後の駐車場造成。昭和55年以降。
- 2 黒褐色の3% 細砂粒・黒褐色土・褐色土を層状に混入する。粘性・しまり弱い。前期中教委調査開始から駐車場造成前までの土。発掘調査の表土上。昭和51年以降。
- 2' 細砂粒。2層の一部。
- 3 黒褐色の3% 白色軽石・細砂粒少量。ローム粒子少量混入。地盤造成前の埋土。ワイヤーロープ埋設溝(4溝)より新しい。
- 4 黒褐色の3% 白色軽石・細砂粒・黒褐色土(5層)ブロック(1~3cm大)少量混。粘性弱。しまりやや弱。4溝より古い。
- 5 黒褐色の3% 白色軽石多量混。粘性・しまりやや強。近世以前(古墳~平安朝)の表土。
- 6 灰黄色の10% 古墳~平安朝時代の遺構埋土。
- 7 明黄褐色10% 6地山ローム層。
- 8 1溝 黒褐色の3% 細砂粒・細砂粒多。粘性弱。しまり強。



I区 3堅穴土層の部分図

- 1 黒褐色土 表土。
- 2 黒褐色土 白色軽石・黄白色軽石を含む。締まりなし。
- 3 黒褐色土 2より白色軽石少ない。土の締り弱い。
- 4 灰黄色土 ローム粒子を含む。
- 5 灰黄色土 白色軽石を含む。4より赤味あり。
- 6 近い黄褐色土 白色軽石・ローム粒子・ロームブロックを含む。締まっている。
- 7 近い黄褐色土 ロームブロックを含む。締まっている。

第13図 基本土層図 C区南北ベルト、I区3堅穴土層1/40

を始めるための事務処理を行なう。

6月 4日、旧杭を撤去し、除草等を行なう。7日、C区の表土掘削を開始する。遺構確認を平行して実施する。鉄塔から10m空けて周囲の掘削を行なう。20日、C

第3章 調査の方法と経過

区住居・溝の掘り下げ開始。基準点・水準点の測量を始める。25日、1～3住居、1～6土坑、1～3溝の掘り下げ及び図・写真記録をとる。26日、C区の遺構概念図の作成を開始する。28日、4・5住居の掘り下げを開始する。

7月 3日、C区1～5住居掘り下げ及び記録を続ける。6日、C区南北ベルト・東西ベルト土層掘り下げを進め、記録をとる。12日、C区6～7住居掘り下げ・記録を開始する。土坑・ピットの調査を開始する。

8月 1日、C区6～7住居記録を終了する。掘立柱建物掘り下げ・記録を開始する。2日、D区幅杭確認開始。3日、C区1面の空撮を実施する。7日、C区2面掘り下げを開始する。20日、D区1トレンチの掘削を開始する。22日、D区2・3トレンチの掘削を開始する。24日、C区2面の空撮を実施する。D区1～3トレンチを埋め戻す。27日、C区2面縄文確認トレンチの掘り下げを開始する。28日、D区西半部の表土掘削を開始する。

9月 3日、C区縄文遺構確認トレンチと土坑の掘り下げを続行する。D区遺構確認と土坑等を掘り下げる。4日、C区旧石器トレンチ12・13の掘り下げを開始する。D区の旧石器トレンチの掘り下げを開始する。6～7日、台風9号接近のため作業休止。10日、C区旧石器トレンチ掘り下げに全面移行する。14日、D区旧石器トレンチ2で礫層出土を確認する。25日、E区草刈りを開始する。26日、C区記録作業終了し、埋め戻しを開始する。B区東端から表土掘削を開始し、ローム層まで削平されていることを確認する。D区集石遺構の平面図を作成し、記録を終了する。27日、D区埋め戻しを開始する。28日、B区東寄り焼土1カ所を検出する。

10月 1日、B区ピット・土坑の掘り下げを開始する。4日、C区埋め戻しを終了する。D区埋め戻し終了し、整地を開始する。11日、D区事務所配置の縄張りをする。B区ピット・土坑を掘り下げ、記録をとる。F～I区の草刈りを進める。12日、B区空撮を実施する。16日、B区旧石器トレンチの掘り下げを開始する。E～I区の柵囲いを開始する。17日、B区旧石器トレンチから剥片が出土し始め、トレンチを拡張する。D区新事務所建物の設置を開始する。23日、F・G区にトレンチを設定し、遺構の確認を開始する。24日、E区表土掘削を開始する。B区旧石器トレンチの拡張が続く。25日、E区の遺構確認を開始する。31日、事務所をA区からD区に移転する。



▲A区1トレンチ北壁土層



▲B区旧石器トレンチ拡張全景



▲C区4住居 炭化物出土状況



▲D区旧石器時代の集石

11月 1日、E区の住居の掘り下げを開始する。12日、E区住居の掘り下げ・写真撮影と土坑等の掘り下げを進める。A区の北側1トレンチの掘削を開始する。15日、A区南側2トレンチの掘削を開始する。E区空撮を実施し、旧石器トレンチの掘り下げを開始する。19日、A区1トレンチの住居掘り下げを開始する。20日、B区旧石器135点に達する。26日、A区全景写真を撮影する。B区旧石器出土地点のラップ巻き保存を開始する。27日、B区9トレンチの土層剥ぎ取りを実施する。30日、A区の埋め戻しを開始する。

12月 3日、A区埋め戻しが完了し、調査終了。5日、B区旧石器149点に達する。E区旧石器80点出土する。12日、B区旧石器164点、E区旧石器191点出土する。F区表土掘削を開始する。14日、B区旧石器168点、E区200点以上出土する。18日、B区旧石器177点、E区旧石器215点出土する。F区遺構確認を進める。21日、B区旧石器182点、E区300点以上出土。G区遺構確認トレンチを掘り下げる。25日、E区トレンチの埋め戻し終了。26日、年末年始休止に備えて現地養生を実施する。

1月 8日、調査再開する。B区旧石器185点出土する。F区住居の掘り下げを開始する。H・I区安全柵を設置する。11日、B区高所作業車で全景写真を撮影する。H区の表土掘削を開始する。15日、B区旧石器204点に達する。F区遺構掘り下げを続行し、記録を進める。16日、B区の調査を終了する。H区の遺構確認を進める。17日、H区の遺構掘り下げを開始する。18日、B区の埋め戻しを開始する。23日、雪のため作業を休止する。25日、B区の埋め戻しを終了する。F区・H区の掘り下げを続行し、記録を進める。29日、F区空撮を実施し、旧石器トレンチの掘り下げを開始する。H区縄文遺構確認トレンチを拡張する。

2月 7日、H区住居の空撮を実施し、掘り方調査を開始する。F区旧石器トレンチの掘り下げを続行する。12日、F区調査が終了する。G区の表土掘削を開始し、遺構確認を進める。13日、G区の住居の掘り下げを開始する。H区一部で旧石器トレンチの掘り下げを開始する。18日、H区墓地跡の改修に立ち会う。22日、H区墓地跡の表土掘削を開始する。25日、H区墓地跡から元禄12年銘墓石、享保17年銘墓石が出土する。28日、H区墓地跡から人骨が出土する。



▲E区6住居浅間山As-Bの地積土層



▲G区2住居カマド遺物出土状況



▲H区住居の調査



▲1区2堅穴の調査

第3章 調査の方法と経過

3月 4日、G区空撮を実施し、住居の掘り方調査を開始する。H区墓地跡の人骨を13体確認する。5日、H区の人骨13体を取り上げる。住居の掘り方調査を開始する。7日、H区墓地跡土坑群の全景写真を撮影する。13日、G区の調査が終了する。H区の埋め戻しを終了する。14日、1区の表土掘削を開始する。19日、1区の遺構確認で住居9軒を検出し、配置図を作成する。25日、残土運搬車を返却する。26日、年度末の事務処理。

平成20年度の調査経過

4月 調査休止。調査手順の打合せ、発掘準備、新任担当者の研修等を行う。

5月 12日、鳥取松合下(以下、松合下と略称)の草刈りをして杭を確認し、丈量図と調査区域現地の照合を行う。調査区域を現地の地形を勘案し、松合下A区～D区を設定する。A～C区は金丸川の東側、D区は金丸川の西側とする。A～C区の低地部の調査を先行する。13日、芳賀東部G区旧石器トレンチの掘り下げを開始する。15日、県文化財保護課による松合下試掘調査トレンチを復元し、浅間山As-B軽石下の水田(平安時代)がないことを推定する。松合下B区トレンチの北寄り、西側にある胴城遺跡ののり台地の裾部を検出する。20日、松合下A区の埋め戻しを開始する。27日、松合下B区埋め戻しを開始する。28日、松合下C区の全景写真を撮影し、埋め戻しを開始する。30日、松合下D区の表土掘削を開始する(松合下D区の調査は別班が担当したので、以下、D区の日誌は割愛する)。

6月 2日、松合下C区の埋め戻しを終了する。9日、芳賀東部H・1区境界の市道05-265号線の舗装を撤去し、表土を掘削して遺構を確認する。10日、芳賀東部H区のごみ穴からゴミを除去し、住居の掘り下げを開始する。11日、G区の旧石器トレンチの埋め戻しを開始する。16日、H区2住居から石製巡方が出土する。19日、H区9住居で出入口を検出する。25日、H区1住居の掘り下げが進行し、井戸であることが判明する。

7月 1日、H区北西部で縄文土器が多数出土する。3日、事務局長視察。7日、H区空撮を実施し、カマドの断ち割り調査、住居の掘り方調査を進める。14日、降雨により、H区の遺構が水没する。F区の低地に降雨が集中し、南側民家に溢れたため、堤防を築いて水止めを

する。17日、前日の雨により堤防が決壊したため、再び堤防を築く。22日、H区1面の調査が終了し、2面の縄文時代遺構の調査を全面に展開する。23日、ゴミ穴出土のゴミを集めて産廃処理を進める。

8月 5日、H区縄文時代土坑の調査をほぼ終了し、竪穴の調査を進める。8日、H区旧石器トレンチの調査を開始する。20日、H区南寄りの旧石器6トレンチで剥片が出土する。

9月 1日、H区旧石器6トレンチで原石・台石が出土する。4日、H区旧石器6トレンチの全景写真を撮影する。5日、H区の調査を終了する。8日、H区埋め戻しを開始する。9日、埋め戻しが終了して、本遺跡の調査を終了する。

第4章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

1 各区の概要

本遺跡では東側から現地形や道路等を境界として、A区B区・・・1区の9区域の調査区を設定して調査を進めた。B区とC区との境界は、鉄塔の存在するC区の調査が優先されたことから、鉄塔から安全距離10mをとった地点を境界とした。

A区

調査区東端に位置する。B区C区への進入路となったため、C区→B区→A区の順に調査した。東西約60m・南北約30mの範囲が調査対象である。調査着手時には南北の用地沿いに工業団地が造成されていた。用地の北側・南側は斜めに削られており、調査区域の断面は上面30m・下面40m・高さ1～5mの台形を呈する。

A区は調査着手前まで駐車場への進入口となっていたため、盛り土が厚く施されていた。中央部の舗装された範囲を除外して、北側に1トレンチ、南側に2トレンチを設定して調査を行なった。1トレンチの西寄りの緩い斜面で、1住居を発見した。古墳時代前期の所産と思われる。

B区

A区低地の西側に隣接し、調査着手時には削平された駐車場として利用されていた区域である。雑草を含む薄い表土と碎石を除去したところ、直下にローム層が現れ、ローム層よりも高い水準の遺構は、失われていた。調査区北側の土層断面を観察した結果、B区東寄りではより深く掘削が及び、西寄りでは比較的浅いことが判明した。駐車場造成前の旧地形は、東寄りに南北走行の尾根が存在し、西に向かって緩やかに低くなる地形だったと推定される。東側はA区の谷地形に向かって急に低くなる地形だったと復元される。古代の住居跡等は検出されず、縄文時代と推定される形状の土坑1基のほか、道路跡の

可能性のある溝2本を調査した。なお、ローム層中の旧石器調査を実施した。

C区

JR鉄塔を含む区域で、主として鉄塔の西側に住居等の遺構が存在した。鉄塔付近はB区から緩やかに低くなる地形の西端に相当し、鉄塔の西側で浅い谷地形となり、さらに西端は天神川の谷地形に急斜面で落ち込むことが判明した。C区北側では表面から0.5mほどの現代の盛り土が施され、深さ約1mで遺構確認面に達したが、南側では約2.5mの現代の盛り土が認められた。B区を削平した土を盛って、平坦な駐車場を造成したと推定される。全体に北側が高く、急な傾斜で南側が低くなる。

C区では5軒がカマドの設置されない時期の住居で、古墳時代前期(4世紀ころ)の所産とみられる。4住居は火災に遭っていて、炭化木材が多量に出土し、貯蔵穴から皮袋形土器と呼ばれる特殊な土器が出土した。

D区

D区は天神川から市道00-040号線までの区域で、調査着手前まで駐車場として利用されており、厚い盛り土で平坦化されていた。トレンチを設定して造成前の地形を調査した結果、中央部西寄りに南北走行の尾根があり、西側は緩く西に向かって低くなる地形で、東側の天神川までは東西約60mの谷地形であったと復元される。西側はローム層に達するまで削平されていた。ローム層中で発見した旧石器は、前掲報告書に掲載されている。

E区

E区は市道00-040号線の西側にあり、北側は芳賀住宅団地のコンクリート擁壁が築かれ、南側には民家と畠が存在する。中央部西寄りに南北走行の低い尾根があり、東側の市道に向かって緩やかに低くなる。西端はF区との境界となる谷地形である。

第4章 検出された遺構と遺物

第3表 出土遺構数量表

	遺構種	時代								備考
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世	不詳	小計	
A区	住居跡				1				1	
	土坑								0	
	溝状遺構								0	
	道跡						1		1	
	その他								0	
B区	住居跡								0	
	土坑							71	71	ビット214
	溝状遺構						2		2	
	道跡								0	
	その他		971						0	
C区	住居跡			5	1			1	7	
	土坑							244	244	ビット356
	溝状遺構						13		13	
	道跡								0	現代1
	その他					住居痕跡1		掘立柱5	0	
D区	住居跡								0	
	土坑							2	2	ビット9
	溝状遺構							1	1	
	道跡								0	
	その他	集石1							0	
E区	住居跡					6			6	
	土坑							10	10	ビット28
	溝状遺構								0	
	道跡								0	
	その他							掘立柱1	0	
F区	住居跡				2	6			8	
	土坑							11	11	ビット19
	溝状遺構							4	4	
	道跡								0	
	その他							掘立柱2	0	
G区	住居跡				4	11			15	
	土坑							14	14	ビット14
	溝状遺構							3	3	
	道跡								0	
	その他							掘立柱3	0	
H区	住居跡				11	4			15	
	土坑		3				12	57	72	ビット91
	溝状遺構							1	1	
	道跡								0	
	その他							掘立柱1	0	
I区	住居跡		3		6	2			11	8軒・26穴3
	土坑		96			75			171	ビット49
	溝状遺構								0	
	道跡								0	
	その他		集石1			井戸1		2	集石1+井戸1	
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世	不詳		備考
計	住居跡		3	0	29	30	0	0	62	
	土坑		99	0	0	75	12	409	595	ビット755
	溝状遺構		0	0	0	0	15	9	24	
	道跡		0	0	0	0	1	0	1	
	その他	集石1	集石1			井戸1		掘立柱11	0	

E区6住居はAs-Bが堆積し、住居のプランと火山灰の分布範囲がずれていることが判明し、As-Bが堆積した後も凹みが残っていたと考えられる。As-Bの上位にあった青灰色のテフラは、浅間粕川テフラ(As-Kk)の可能性が指摘されている。

F区

F区は北西端がもっとも高く、南東部に向かって低くなる地形である。南東端の谷地形を東側のE区との境界とした。1住居は南北に長い形状を呈し、ほかの住居に比して異質である。これとほぼ平行する辺をもつ2住居からは、鉄滓がやや多く出土した。

検出した8軒の住居のうち、5軒が平安時代と推定され、いずれも長軸方位が似ている。

G区

農道を境界として東側がF区、西側をG区とした。北西端がもっとも高く、南東に向かって低くなる地形である。北側はコンクリート擁壁、南側は高である。

住居は15軒を検出したが、掘立柱建物を含めて重複する住居がない。1・3・8・14住居が比較的規模が大きい。土器等の出土が多い住居と少ない住居とが存在する。

H区

市道を挟んでG区の西側にあり、南西部に向かって低くなる地形である。調査区北側のやや西寄りがもっとも高く、南東端がもっとも低い。北側は住宅団地のコンクリート擁壁、南側は畠と宅地である。

住居は15軒調査したが、重複する住居はない。5住居は欠番である。8住居は遺物の遺存が良好であり、完形に近いものが多い。南東隅にカマドを設置する。10住居では埋没土や床面水準から多数の滑石小片(チップ)が出土し、滑石工房の可能性もある。11住居は北辺にカマドを設置し、石を多用して粘土で固めるという特異な構造である。

H区南西部に墓地跡の区域があり、12基の土坑から人骨が出土した。副葬品等から、江戸時代の墓と推定される。68土坑のなかから「南無阿彌陀仏」と鑄造された念仏銭が出土した。

I区

I区は調査対象区域の西端にあり、東側H区との境界は墓地跡への参道であり、西側は急な斜面を経て鳥取松合下遺跡の低地になる。I区は全体に南に向かって低くなる地形で、東側のH区の地形につながる。

当初1住居とした遺構は、調査の進展によって井戸であることが判明し、番号を引き継いで1井戸とした。このため、1住居は欠番とした。1井戸では、確認面よりやや下がった深さで4本の柱穴とみられるビットを検出し、「覆屋」のあったことが推定される。2住居はやや大型で一辺6.5m前後あり、床面付近から石製巡方出土したが、住居自体の推定年代は5世紀代とみられ、石製巡方とは時代が合致しない。9住居は南西辺中央部の住居内に斜路があり、外側の幅1m以内の範囲が踏み固められ、ビットが並んで検出されたことから、出入口を検出したと考えられる。

I区の北西部区域では縄文土器片が集中して出土し、竪穴状の遺構となった。焼土・埴・床面を検出した時点で「住居」と認定したが、当初の名称「竪穴状遺構」を継承し、1・2・3竪穴とした。また、周辺を含めて数十cmを掘削し、第2面の縄文時代の土壌を確認した。85・89・140土坑はフラスコ状の断面をもち、比較的多くのまとまった土器が出土した。

2 時代別概要

各区を通して、以下時代別に概要を記す。

旧石器時代

A区を除き、各区でトレンチを設定して、旧石器の有無を確認した。B区・E区・I区では、いくつかのブロックが認められ、接合した剥片がある。D区では集石が発見され、炭化物和焼土を伴う土坑が認められた。これらの調査成果は当事業団報告書535集「上武道路・旧石器時代遺跡群(3)」2012.3に詳細に掲載されているので、本書では割愛する。

縄文時代

B区では削平が深かったため、明確に縄文時代の遺構とするには難があるが、が状の土坑1基を検出した。こ

第4章 検出された遺構と遺物

れを囲むようにピットが並んでいることから、住居であった可能性がある。

H区の西寄りで行くつかの縄文時代土坑を検出しており、これらの土坑は1区の竪穴や土坑の東端に位置すると考えられる。

1区では3軒の竪穴を調査した。全体を調査できたのは、1及び2竪穴である。西寄りの区域で検出した85・89・140土坑は、中から前期の土器が出土し、竪穴とともに、北側の住宅団地地域の遺構群につながる前期の所産と考えられる。

古墳時代

この時期では、A区1住居、C区1～4住居が前期の所産と考えられる。C区4住居は前述のように、火災に遭っており、炭化物が多量に出土した。

古墳時代後期とみられるのは、G区1・2・3住居、H区1・4・8・10・11・12・14・15・16住居、I区2・5・6・8・9住居である。1区9住居では、上位に棲

名山曲-FAまたはFPと推定されるテフラのブロックを含んだ層が認められた。

奈良平安時代

E区・F区の住居はすべてこの時代の所産と考えられる。G区では5・6・7・8・14住居が奈良時代、9～13・15住居は平安時代に下ると考えられる。H区の3・13住居は奈良時代の可能性が高く、2・9住居は平安時代の所産と推定される。1区1井戸は平安時代に属し、3住居は飛鳥時代に遡るか。4・7住居は奈良時代の所産であろう。

中世

明確に中世とできる遺構は、見当たらなかった。

近世以降

H区の墓坑は江戸時代に属し、18世紀に遡る可能性がある。

第4表 出土遺物数量表

発掘遺物	縄文			古墳～平安										江戸時代									
	土器	石器	酒片	土器・土製品	石製 石製品等 品 具の目	金属製品	その他	土器・土製 品	陶磁器	石製品	その他	鏡片	鏡	鏡筒	時代 不明	ガラス 土器	金属 製品						
A区	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0									
B区	19	7	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0									
C区	36	8	0	25	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0									
D区	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0									
E区	12	4	0	33	3	6	0	0	0	0	0	0	0	0									
F区	16	4	0	83	5	9	1	0	0	0	0	0	0	0									
G区	21	2	0	119	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0									
H区	90	13	0	119	62	7	0	0	0	2	0	0	0	0	29	6	3						
I区	521	71	0	86	7	0	2	0	0	0	0	0	0	0	4								
小計	724	109	0	487	88	8	30	1	0	2	0	0	0	16	29	6	3						
発掘遺物	縄文			古墳～平安										江戸時代									
種別	数量	種別	数量	種別	数量	種別	数量	種別	数量	種別	数量	種別	数量	種別	数量	種別	数量						
A区	0	0	1	2	1	136	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
B区	196.4	3	1864.2	46	773.7	48	518.2	1	23.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0						
C区	0	0.0	25	127.1	106	1346.5	506	3942.3	4	13284.3	2	30.1	0	0.0	0	0.0	0.0						
D区	0	0.0	2	314.5	3	2.9	07	98.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1						
E区	3	13.3	8	1079.6	10	317.6	3362	15455.4	5	1597.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	9						
F区	16	32.7	11	1863.1	30	1083.5	16306	72303.0	7	1892.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3						
G区	3	25.9	18	2725.5	44	3641.8	3644	25982.2	4	1827.2	0	0.0	0	0.0	1	4.2	7						
H区	803	1288.0	63	2566.1	479	4211.8	2500	23539.3	31	651.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0						
I区	2750	3325.7	148	3786.1	643	12712.8	1819	18527.0	3	2966.0	1	20.1	2	16.0	1	7.2	5						
小計	4820	9677.0	303	7602.4	1379	23303.8	28545	168899.8	76	27369.0	3	30.2	2	16.0	1	7.2	16						
合計	7344	9677.0	431	78632.4	1379	23303.8	28622	168899.8	163	27377.0	23	30.2	3	16.0	1	7.2	16						

第2節 A区

A区の概要

A区は調査区東端に位置し、当初の事務所を設置した区域である。B区C区への進入路となったため、C区→B区→A区の順に調査した。東西約60m・南北約30mの範囲が調査対象である。B区C区と同じく、南北の用地沿いに工業団地が造成され、すでに活動中であった。用地側面は斜めに削られており、調査区域の断面は上面30m・下面40m・高さ1～5mの台形を呈する。

A区は調査着手前まで駐車場への進入口となっていたため、盛り土が厚く施されていた。中央部の舗装された範囲を除外して、北側に1トレンチ、南側に2トレンチを設定し、古代の水田跡の有無確認を目標として調査をおこなった。結果的には、水田を確認する以前に、湧水のため掘り下げを断念した。

1トレンチの西寄りの緩い斜面で、1住居を発見した。古墳時代前期の所産と思われる。

A区トレンチ（第14図、Pl. 1～3）

A区は調査着手前まで、周辺の工業団地内各社の駐車場として利用されていて、中央部にアスファルト舗装がされていた。調査着手当初は事務所を設置していたことと、調査区B・Cへの唯一の進入可能な区域であったため全面的な掘り下げができないこと、盛り土が厚いことが予想されたことなどから、トレンチ調査を行なうこととした。

略東西方向の用地中央部に舗装された進入路があり、その南北が露地であったことから、北側に1トレンチを、南側に2トレンチを設定して、重機による階段状掘削を行なった。

1トレンチは地表面で東西約45m、南北10mとした。2トレンチは同じく東西約50m、南北10mに設定した。1トレンチ西半部の底面精査によって1住居を発見し、その南北の壁面を観察するとともに、低地と予想される底面を追求したが、掘削途中で水が湧き出して危険なため、底面到達前に断念した。

1トレンチ北壁では、確認できた最深部で厚さ約4mの盛り土があり、汚れたロームの中に黒色土や黒褐色土などのブロックが混在していた。A区よりも先に調査を

着手したC区・B区・D区の地山の観察結果から推定すると、B区C区D区の凸部の土を削平してA区とC区の窪地を埋め、ABC区を平坦な駐車場として造成したものと考えられる。土層3は駐車場造成前の表土と推定されるが、土層8もその可能性が高い（土層8は南壁でビニールを含んでいることを確認した）。土層9は砂質土でAs-AまたはAs-Bを含んでいて、旧表土直下の土と考えられる。土層7は1住居埋没土と同じで、住居西壁の立上りを確認できた。最深部の土層1・2は草の根を含む泥炭質の黒褐色系の粘質土で、土層2の底部に小礫を含む地山があり、ここから湧水した。前橋市の昭和43年地形図でみると、五代川の西約500mの位置に、北側上流の水田につながる無名の水路があり、これを検出したと推定される。

1トレンチ南壁では、西寄りの地点で堅くしまった黒褐色系の土層21を確認した。土層断面は1道路を横切っていると考えられる。土層8のなかにビニールが含まれていて、表土の一部と考えられる。

2トレンチは北壁のみ記録した。2トレンチでは、最深部で4.7mもの盛り土があり、1トレンチの湧水した土層1・2を確認した深さで掘削を中止した。土層の堆積状況は1トレンチに似るが、最深部に近い急斜面がやや南東寄りに曲り始めていることが判明した。

なお、図中「G-3 ボーリング」とある○は、国土交通省が実施したボーリング調査地点で、その結果は別途掲載し、A区の旧地形復元の資料としたい。

A区1住居(第16・173図、Pl. 1・3)

検出位置 525-595付近。A区北西部で検出した。B区の尾根がA区低地に下がる斜面に位置し、B区よりも一段下がった緩い斜面の山側を削って作られている。東寄り(谷側)は住居壁の立ち上がりが見出されず、傾斜を強めて谷地形に至る。A区北寄りに、東西方向で設定した1トレンチで確認した。

重複関係 不明。

覆土 黒色土に白色軽石を多く含み、ザクザクしている。壁 北西辺で25cmを測るが、南東辺は立ち上りを確認できない。

第4章 検出された遺構と遺物

床面 北西寄り得不整形の硬化した床面を検出した。
支柱穴 不明。P 1 : 73×51・深さ14cm、P 2 : 51×45・深さ17cm、P 3 : 41×35・深さ30cm、P 4 : 31×26・深さ26cm、P 5 : 33×29・深さ9cm。
壁溝 不明。硬化面の残る壁際では確認できなかった。
カマド なし。
炉 北寄りのトレンチ壁際に近いところで、焼土ブロックの入る掘り込みを検出した。住居プランからみて、北寄り中央部に相当する。
貯蔵穴 不明。P 1か。
掘り方 トレンチの壁寄りで長さ44・幅21cm・深さ7cmの溝を検出した。南東寄りの楕円形ピットは42×32・深さ18cmである。
その他 1 トレンチ北壁の土層で、北西辺の壁立上りとみられる土層を検出した。
遺物 硬化した床面が遺存していた範囲に、土器破片・砥石が分布する。土器は小片が多い。
時代・時期 出土した遺物から、古墳時代前期の4世紀

第3節 B区

B区の概要 (第17図、PL. 5)

B区は東から二つ目の調査区に位置し、JRの鉄塔よりも東側の区域で、A区の低地に隣接する。調査着手前には駐車場が造成され、松杭が東西方向に打設されて、雑草の繁茂する区域であった。調査はまず、松杭と雑草を除去し、C区への進入路を確保することから始まった。

表土を除去したところ、全体に南に向かって低く、東西方向はほぼ平坦であった。南寄りの幅約5mの範囲には碎石が敷き詰められ、その直下はローム層であった。また、北側の工業団地に面する側面はローム層が露出し、削平が深く及んでいると推定された。調査区北側に幅約50cmの未掘削部分を帯状に残し、土層を観察したところ、B区東寄り区域ではより深く削平が及び、西寄りでは比較的浅いことが判明した。B区全体の高さを平坦に造成するため、東寄りを深く削ったとみられる。造成前の旧地形は、東寄りに南北走行の尾根が存在し、西に向かって低くなる地形だったと復元される。

前半の所産と考えられる。

A区1道路(第14図、PL. 4)

検出位置 525～600付近のA区B区境界で検出した。本道路を境として、東側が急傾斜で一段下がり、段下の緩やかな傾斜面に1住居を発見している。
重複関係 なし。
覆土 埋没土の下位にAs-B・灰を含む層があり、上位には黒褐色系の土が堆積する。
底面 径10～20cm大の穴が多く、凹凸著しい。トレンチ底面は踏み固めた状態ではないが、トレンチ南壁に堅い層が認められた。
その他 前橋市の1/2500地形図に、この付近を通る南北走行の小道が掲載されており、より古い時代に形成された傾斜変換点沿いの道と考えられる。
遺物 なし。
時代・時期 中近世まで遡る可能性があるが、確証がない。As-Bの堆積は二次的なものと推定される。

遺構の分布は削平の及んだ深さに依存し、東寄り(Y=64660より東)では時期不確定の縄文時代土坑・ピットを多く発見し、焼土の詰まった土坑を1箇所検出した。範囲を確定できないが、縄文時代の住居の痕跡とみられる。

西寄りでは1溝の底面で固結したAs-Bを確認した。溝としたが、2溝も含め、道路跡の可能性はある。

B区1面1溝(第19図、PL. 6)

検出位置 546～569-674～677で検出。長さ22m、幅0.8～1.3mを確認した。
重複関係 小ピットに接する。
覆土 中位から下位に純に近いAs-Bを含む。
壁 両脇に段差あり。
底面 底面は固結している。
その他 土層断面では、固結した面を二つ有する。溝というよりも、道路跡の可能性はある。
遺物 なし。

時代・時期 As-Bが中位以下にあることから、平安時代～中世の所産と推定される。

B区1面 2溝(第19図、PL. 6)

検出位置 565～590・715～718で検出。長さ24.3m、幅0.7～1.4mを確認した。

重複関係 35・36・37・41・42土坑と重複し、いずれも土坑が新しい。

覆土 黒色土に黄白色軽石を含む。

壁 中央部付近が幅広くなっている。

底面 一部は平坦な面をもつ。

その他 1溝のような固結面を持たないが、道路の可能性はある。土層断面から、掘り直しされた可能性がある。

遺物 須恵器杯片1、裏片2が出土した。

時代・時期 黄白色軽石の由来不明。平安時代か。

B区1面の土坑・ピット(第20～28・173図、PL. 8・9)

B区では、薄く柔らかい表土直下から土坑・ピットを検出した。北壁の土層断面を検討したほか、土坑・溝等の埋没土を検討した結果、駐車場造成に伴ってローム層の最上位が削平されていることが判明した。

調査区北壁土層を観察したところ、B区の東寄り区域で削平が深く及んでおり、西寄りの区域では比較的浅いことが解った。すなわち、削平前の地形は、東寄りでやや高く、南北走行の尾根筋が推定復元され、西寄りで低くなる地形とみられた。

土坑・ピットの検出状況は、この削平前地形と密接に関連し、B区西寄りではAs-Bを含む溝等が確認でき、かつ検出された土坑・ピットは中近世とみられるものが多く分布する。B区東寄りでは、検出された土坑・ピットの多くは地山のローム層とわずかに異なる色調や混入物(ロームブロック・炭化物等)の範囲を精査することによって認定できたものが多く、ローム層に貼り付いた縄文土器や、土坑中から小破片で発見された縄文土器が若干存在する。東寄りの区域では、古墳時代から中近世に

いたる時代の地層は、調査着手時点で削平されていたと考えられる。

B区北壁断面(第18図)

第18図はB区の調査区北側の壁断面を採取したもので、上位からの掘り込みが見られる等の特徴ある断面のみ採取した。B区は調査着手時点で平坦な地形を示し、北寄りがやや高く、表土を盛り上げているように見えた。しかし、南寄りの幅5mほどの区域はローム層の直上に砕石が散布され、駐車場進入路となっていた。雑草の繁茂する土を除去したところ、北寄りの幅数mの範囲に表土がみられたが、遺構の分布及び土層観察の結果、ローム層に至るまでの旧表土以下の土層は、調査前に削平されていたことが判明した。わずかに遺存していた北寄りの土層を採取したのが第18図であるが、攪乱が著しく、移動された土が多い。遺存していたローム層の上面を西から東へ向かって追求したところ、東側のローム層がやや高く、西側が低いことが解り、このことから東寄りに尾根筋があったと推定される。断面5から東へ15mほどで、A区への斜面となる。

B区1面 1炉(第17・173図、PL. 7)

検出位置 548～639付近。

重複関係 60土坑の上で確認した。炉跡と認定したのち、さらに広がることを確認したが、1炉が60土坑と同一遺構かどうか、判定困難。

覆土 上位は堅くしまった焼土。

その他 周辺から縄文土器破片が出土し、付近の土坑・ピットも縄文土器片を出土していることから、1炉を火処とする縄文時代住居が削平された可能性が高い。

遺物 周辺からいくつかの破片が出土しているが、炉に直接伴うものはない。

時代・時期 周辺から出土した土器片は、縄文時代中期堀之内1・2期のものである。

第4節 C区

C区の概要 (第29図、PL.10・11)

C区は第一着手の調査区域である。JR鉄塔が存在し、

この付近の調査を優先的に終了するよう委託者からの要請があり、それに対応して東側のA区B区に先行して着

手した。

鉄塔の周囲10m以内での掘り下げを禁じられたことから、鉄塔周囲の東側10m地点を境としてC区とB区との境界とした。鉄塔の北側では10m以上の余裕があり、幅約6mを調査可能であった。南側では余裕がなく、碎石を敷き詰めていて、その下位が削平されていると予想されたことと、重機等の進入路確保のため、調査を割愛した。

C区の南北の区域は工業団地として造成され、深く平らに掘り下げられていて、周囲の地形から旧地形を予想することは困難であった。また、C区は盛り土が厚く施され、駐車に適するように平坦化されていた。少しずつ注意しながら掘り下げたところ、表面から数10cmのローム土は造成盛り土であることが判明し、土層観察のため、東西・南北の土層観察用ベルトを残して遺構確認面まで掘り下げた。その結果、北寄りでは表面から約1mで遺構確認面に達したが、南寄りでは約2.5mの盛り土が存在した。

C区の旧地形は、北から南へ低くなる地形で、鉄塔西側に造成前道路が北東・南西走行し、西端は天神川の水路に急斜面で落ち込むことが判明した。また、西寄りに北東・南西走行の尾根があり、その東に浅い谷地形があったことも判明した。造成前道路は、この谷地形の東寄りに走る。

C区1面では7軒の住居を調査した。そのうち1～4住居はカマドが設置されない時期のものと思われ、古墳時代前期の所産とみられる。4住居は火災に遭っていて、炭化した木材が多量に出土し、貯蔵穴から特殊な注口土器が出土した。5住居は火処がなく、住居かどうか確認がない。6住居はカマドが東壁に設置されていて、風倒木痕と重複し、奈良時代の所産とみられる。7住居はプランが不確定で痕跡のみであり、時代判定は困難である。

1～4住居に囲まれるような位置で、1～4掘立柱建物を検出した。概ね同じ方向の柱通りをもち、住居と同時存在可能なものもある。

2面では多数の土坑・ピットを検出したが、住居と認定できる遺構は見当たらなかった。縄文時代前期の土坑・ピットと見られるが、出土遺物が少ない。

なお、C区のピット土層断面図は割愛した。

C区土層観察用ベルト (第54図、PL.12)

C区は発掘調査の第一着手区域で、駐車場として利用するため平坦化されていた。ただし、西端部は水路に面することから、人の身長程度の段差が残っていた。地表には碎石が敷き詰められ、松杭の間に雑草が繁茂していた。

駐車場造成前の旧地形を把握するため、表面の碎石等を除去した後、東西・南北方向の土層観察用ベルトを保存して、重機による表土掘削を進めた。

南北ベルト

約25mの長さで、目安となるローム層上面の北端での標高は146.3mほどである。これに対して、南端でのローム層上面の標高は143m前後であり、南北の比高は3.3mになる。すなわち、北端に比して南端は3m前後低い地形だった区域を、南北差0.5mほどの南傾斜になるように埋めたと推定される。北端から南へ15mほどの位置で、風倒木痕と6住居が重複していることが判明した。風倒木痕→6住居の順に新しい。

東西ベルト

着手前地形で最も高くみえる場所を起点として、東西約44mの長さで設定した。東端はJ R鉄塔に近付ける限界とした。西端付近の表土を除去すると住居のプランが確認され、1住居とした。ベルトの西半部では、風倒木痕、柱穴、土坑等を確認した。東半部では、ロームや黒色土など掘削された土が混在する東西長さ約8mの範囲が認められ、その範囲の底面は凹んでいることが判明した。凹みの範囲を南北に追求したところ、調査区北端・南端でも同様な堆積状態を示し、前橋市の地形図と比較した結果、造成前の北東・南西走行の道路であることが判明した。

旧地形

以上の観察結果からC区の駐車場造成前(工業団地造成前)の旧地形は、1住居(X=46615, Y=64790)付近を突端とした尾根があり、西側は小河川(天神川)に面し、全体として南に低くなる地形である。東側はなだらかな谷地形となり、さらに東側へ向かうとB区の尾根に至る地形となる。鉄塔との間に認められた道路は、浅い谷地形を呈する。

C区1面 1住居(第30・31・173図、PL.13・14・142)

検出位置 615-790付近。C区のなかでもっとも高所に位置し、尾根筋の突端に相当する。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の埋没土で、白色軽石を多量に含む。

壁 斜めに直線的に立ち上がる。高さ31～52cm。北東側で遺存が良い。

床面 北辺下中央部やや西と南辺中央部のやや西の対面する位置で、硬化面を検出した。また、北西-南東走行の長さ1.5m・幅20～25cmの溝6本を、東辺に並ぶように検出した。住居外の周辺には耕作痕に似た極く細い溝が存在するが、方向が異なることから、床面の溝は現代の耕作痕ではない。

主柱穴 P1～P4が主柱穴とみられる。P1：75×74・深さ83cm、P2：71×64・深さ92cm、P3：51×50・深さ90cm、P4：61×49・深さ83cmである。各ピット間の距離は芯々で、P1～P2：278cm、P2～P3：279cm、P3～P4：264cm、P4～P1：279cmと計測され、P3～P4がやや短い。

壁溝 南辺中央部・北西隅・北辺西寄りのP5付近を除き、幅8～11cm、深さ1～8cmである。南辺東寄り・南西隅付近は、幅が23cmほどになる。

炉 主柱穴に囲まれた範囲の北西寄りで炉を発見した。東西51・南北59cm・深さ7cmの不整形で、焼土ブロック・粒子を含む暗褐色系の土が詰まっていた。底面は充分焼けていない。

貯蔵穴 北西隅でP19、北辺東寄りの壁で斜めに掘り込むP5を検出している。P19の上面は100×82cmの楕円形で、中段は59×54cmの略方形を呈し、底面も33×35cmの方形を呈する。深さは44cmである。P5は開口155cmの楕円形で、北側住居壁外へ向かって斜めに約40cm掘り込まれている。底面は63×55cmを測る。

掘り方 主柱穴4本と東辺・南辺・西辺に囲まれた範囲で、不整形の帯状の掘り込みを検出した。幅1m前後で北東隅付近から連続的に南辺沿いから西辺沿いへ続く。P2の内側に小ピット、P3の外側にP15が検出され、P4は北側にずれた掘り込みを持つことから、柱穴の掘り直し、建て替えの可能性がある。

床溝 住居の各辺が概ね東西南北に平行するのに対し、北西-南東走行を示す溝を床面で検出した。東辺沿

いはほぼ等間隔に並び、西辺沿いではP3から西辺に延びる1本のみである。深さは北東隅寄りから17・17・27・14・11・12cmで、西側の溝が17cmであり、一律ではない。丸太状の枝を並べ、上に板や敷物を載せた施設の可能性がある。

その他 南辺中央部で壁溝が途切れることや小ピットを検出していること、硬化面があること、北辺寄りに貯蔵穴があることなどから、南辺に出入口が推定できる。

遺物 南辺沿いで鉄製斧、北西部で土器片が集中して出土している。

時代・時期 土器の様相とカマドがないこと等から、古墳時代前期の4世紀後半と推定する。

C区1面 2住居(第32・173図、PL.15)

検出位置 611-795付近。1住居よりも尾根をやや南に下がった位置にある。

重複関係 なし。1住居との最短距離は2.8mほどである。

覆土 黒褐色系の土で、白色軽石を多量に含み、炭化物も含む。

壁 4～17cmの高さで、北側がやや深い。南辺は輪郭を確認できる程度である。南東隅が斜めにカットされたような形状で、北辺3.25m、東辺2.35m、南東辺0.67m、南辺2.76m、西辺2.70mを測る。東西3.49×南北2.83mで、東西に長い長方形プランである。

床面 比較的平坦だが、しっかりした硬化面は確認できなかった。

主柱穴 P1・P2・P5・P6の4本とみられるが、やや浅い。P4はP5より深い。P1：41×40・深さ13cm、P2：41×41・深さ9cm、P5：37×39・深さ8cm、P6：33×36・深さ8cmである。ピット間の距離は芯々で、P1～P2：1.36m、P2～P5：1.86m、P5～P6：1.21m、P6～P1：2.25mである。

壁溝 なし。

炉 住居中央部で3箇所の焼土が分布していた。50cm大のもの、25cm大のもの、15cm大のもので、大・中の焼土はよく焼けており、下には深さ数cmの浅い掘り込みが認められた。

貯蔵穴 P3：46×53・深さ29cm(二段掘り込み)の可能性が高い。掘り方で検出した西辺中央部の不整形掘り

第4章 検出された遺構と遺物

込み(60×42・深さ11cm)の可能性もある。

掘り方 底面に細かい凹凸があり、西寄りていくつかの小ピットを検出した。北辺沿いのピットは深さ5～7cmと浅く、中央部は深さ13～19cm、南辺に近いP19は深さ26cmと最も深い。

その他 南東隅が斜めにカットされたような形状は、P3の存在によるものか。

遺物 床面から浮いた状態で、北辺寄りに炭化物が出土した。そのほか、概ね北寄りの住居内で、土器小片が出土している。

時代・時期 出土土器片の型式やカマドを持たないこと等から、古墳時代前期の4世紀後半の所産と推定する。

C区1面 3住居(第32・33・173図、PL.16)

検出位置 605-778付近で検出した。1住居よりも南東部に7mほど離れ、一段下がった位置にある。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で、白色軽石を多量に含む。

壁 高さ12～49cmで、斜めに立ち上がる。北西隅から西辺にかけて、西辺の外側50cmのところ10cm前後の段が認められた。住居内壁と屋根基部との境界の可能性がある。掘り込みの東西4.76m、南北3.92mで東西に長く、全体に隅丸長方形のプランをもつ。

床面 全体に平坦で、中央部から西辺にかけて硬化面を確認した。中央部に2箇所がよく焼けた焼土があり、炉とみられる。北辺中央部付近にも焼土が分布する。南西部のP5付近で、粘土塊が出土している。

支柱穴 不明確。P3：深さ7cm、P4：深さ12cmで浅く、柱穴と想定しにくい。P5：深さ41cm、P6：深さ71cm、P9：深さ7cm、P10：深さ15cm、P11：深さ49cmである。配列から考慮すると、P5とP11が支柱穴と見られるが、不足気味である。住居掘り込みの近隣を精査したところ、外1P～外12Pを検出した。P2・P3・P4、P5・P6、P7・P8・P9・P10を住居の柱穴の一部とみることができる。計測値は次の通り。

掘り込み内 単位cm

P1：44×33・深さ17 P2：66×52・深さ14
P3：62×52・深さ7 P4：68×64・深さ12
P5：64×47・深さ41 P6：51×53・深さ71

P7：25×26・深さ7 P8：28×24・深さ7
P9：36×35・深さ7 P10：44×35・深さ15

P11：41×32・深さ49

掘り込み外 単位cm

P1：67×56・深さ61 P2：46×60・深さ34

P3：42×50・深さ7 P4：40×46・深さ15

P5：44×37・深さ23 P6：42×32・深さ30

P7：40×39・深さ15 P8：33×37・深さ11

P9：46×37・深さ25 P10：45×39・深さ17

P11：41×43・深さ52 P12：46×45・深さ20

壁溝 南西隅付近を除き、ほぼ全周する。幅13～22cm、深さ4～12cmである。

炉 床面中央部の2箇所で見出した。東側が1炉、西側が2炉である。いずれも底面がよく焼けており、直下から浅い掘り込みを検出した。使用時期の前後関係は、確認できない。北辺中央部の焼土は小範囲で、壁にかかるような出土状態で、下位には掘り込みがなかった。

貯蔵穴 不明。

掘り方 全体に細かい凹凸がある。北東隅付近、南半部が5～10cm低くなる。

遺物 床面からやや浮いた状態を含めると、ほぼ全体から土器破片が出土している。

時代・時期 カマドを持たないこと、出土土器型式等から、古墳時代前期の4世紀後半と推定する。

C区1面 4住居(第34・173・174図、PL.17・18・142)

検出位置 599-791付近。3住居よりもさらに低い区域に位置する。

重複関係 7～10土坑と重複し、いずれも土坑が新しい。

覆土 黒褐色系の土で、白色軽石・炭化物を含む。

壁 直に近く立ち上がる。高さ39～80cmで、北西側がやや高い。南西辺がやや短く、北東辺が長い長方形～台形のプランで、隅が丸みをもつ。中央部での計測値は、南北369cm・東西413cmである。

床面 壁から床面やや上にかけて多量の炭化物が出土し、一部は棒状を呈する。北西辺から南隅にかけて焼土が分布し、北西辺の壁は焼けて焼土化していた。炭化物出土状態を記録したのち炭化物・焼土を除去すると、住居中央部を中心として硬化面が露出した。北西辺中央や

や西寄りの床面も硬化していた。炭化物の分布はほぼ住居全体に及んでいる。

支柱穴 P6・P8の可能性が高い。ほかの小ピットは浅い。各ピットの計測値は次の通り。P3:25×26・深さ20cm、P4:17×16・深さ17cm、P5:28×26・深さ4cm、P6:26×27・深さ43cm、P7:21×24・深さ20cm、P8:32×32・深さ78cm。P6～P8:292cm。

壁溝 北西辺中央から南辺につながる。幅25～39cm、深さ3～9cmである。南西辺南寄りの壁は二段になっている。

炉 中央部南西寄りの床面で、炉を検出した。掘り込みは浅く、6cm程度である。

貯蔵穴 P1及びP2とみられる。P1:70×54・深さ62cm、P2:53×54・深さ46cmで、P1は中段をもつ。

掘り方 中央部の北東辺寄り、南西辺寄りに、それぞれ不整形の浅い掘り込みがみられる。

その他 棒状の炭化物の分布、焼土の分布、壁が焼けていることなどから、本住居は火災を受けていると考えられ、屋根の構造材が遺存中に炎上したと推定される。また、焼土が掘り込み内に広く分布することから、屋根に土を載せていた可能性がある。炭化材の分布と推定支柱穴の位置を勘案すれば、東西に桁行をもつ上屋構造が推定される。出入口は東または南が想定されるが、貯蔵穴の位置と硬化面の分布、床面出土の土器・石製品等の分布を総合すれば、東入口の可能性が高い。

遺物 炭化材等を除去したのち、床面を精査したところ、大きめの石2個と、土器片が出土した。また、貯蔵穴内から、袋形土器(C25)が略完形で出土した。この土器は長さ10.6cm・高さ5.9cmで上に開く口縁部をもち、体部の両端が細く突る器で、一端には孔があき、注ぎ口の形状を呈している。

時代・時期 出土土器の型式とカマドを持たないことから、古墳時代前期の4世紀中頃と考えられる。

C区1面 5住居(第35図、PL.19)

検出位置 604-788付近にあり、3住居と4住居との間に位置する。

重複関係 25ピットと接するが、5住居→25Pの順に新しい。

覆土 黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 17～47cmで、北側が高い。東西2.61m、南北3.21mの長方形プランをもつ。各隅は丸みがある。

床面 平坦だが、硬化面がない。

支柱穴 P1・P3か。各ピットの計測値は次のとおり。P1:18×13・深さ20cm、P2:21×15・深さ7cm、P3:14×10・深さ24cm、P4:18×17・深さ8cm。P1～P3:183cm、P3～P4:184cm、P4～P1:213cm。

壁溝 なし。

カマド・炉 火処が検出されなかった。

貯蔵穴 不明。

掘り方 30～50cm大のピットがいくつか検出された。底面は細かい凹凸がある。

その他 本住居は火処がなく、人の住む住居として利用されたか不明であるが、掘り込み自体はしっかりしており、掘り方も検出された。埋没の状態も人為的な様子が見られない。建設途中の建物か、ごく一時的な利用、または火を使わない納屋的な建物など、通常の竪穴住居とは別の機能をもった建物等が想定される。

遺物 中央部から南西隅にかけて、土器の小片が床面から浮いた状態で出土した。

時代・時期 わずかな出土土器片の型式から、古墳時代前期の4世紀前半の所産と推定する。

C区1面 6住居(第36・37・174図、PL.20・142)

検出位置 600-771付近で検出した。3住居から5mほど東に位置し、南北ベルトに一部がかかり、風倒木痕と重複していたため、プランの確認に時間を要した。

重複関係 風倒木痕→6住居の順に新しい。

覆土 黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 35～61cmで、斜めに立ち上がる。東西2.78m、南北3.94mで南北に長い長方形プランをもつ。南東隅が1×0.5mほど突出し、東辺中央部にも住居外へ向かう三角形の掘り込みがある。この三角形掘り込みはカマドの作り替え痕跡の可能性もある。

床面 中央部から西辺にかけて、堅い床面が破壊されたような状態を確認した。底面が水分を含んで変色し、その両側がローム層の色調を示すのに対し、この部分のみ茶褐色～黄褐色系の土である。掘り方の調査面では、さらにこの傾向が顕著であった。

第4章 検出された遺構と遺物

主柱穴 不明。P 1 : 63×65・深さ15cm、P 2 : 60×55・深さ4cm、P 3 : 41×54・深さ16cm、P 2 南西ピット : 51×45・深さ14cmで、いずれも柱穴の様相とはみられない。

壁溝 北東隅～東辺～南東隅を除き、幅13～20cm、深さ3～7cmの壁溝が巡る。西辺南寄りの途切れる箇所は風倒木痕の位置と一致しているため、本来壁溝が切れていたかどうか、確認がない。西辺の壁溝内に、5個の小ピットが認められた。

カマド 遺存状態良好で、煙道部煙出しがあり、燃焼部奥側の内部が良く焼けた状態であった。燃焼部左寄りに支脚にしたと見られる石があり、これより手前の焚き口天井部は欠損していた。また、右袖部の粘土は遺存していたが、左袖部粘土は検出できなかった。北側に隣接する掘り込みは、作り替えられたカマドの痕跡の可能性はある。

貯蔵穴 張出しをもつ南東隅のP 3とみられる。二段に掘り込まれている。内部からの出土遺物はない。

掘り方 南東隅のP 3の下から、壁溝状の細い掘り込みが検出された。張出し部を作る前の形状とみられる。南西隅付近、北辺西寄りの壁溝下からも小ピットを検出した。東辺カマド北側の風倒木痕と、住居掘り方底面に広がる軟弱・変色した地山の存在を勘案すると、南西辺に向かって斜めに横断する変色部は、風倒木の倒れた痕跡と推定される。木の幹が南西に向かって倒れたと想定すれば、根とともに地山のローム層が持ち上げられ、東寄りにロームが分布している現象と符合する。

その他 C区検出住居でカマドをもつのは、本住居のみである。

遺物 中央北寄りで石が出土し、中央部では土器小片が出土した。南辺西寄りの壁に貼り付くように土師器杯(C 29)が出土している。

時代・時期 カマドの存在と出土土器から、奈良時代の8世紀中頃の所産と推定する。

C区1面 7住居(第35図、PL.21)

検出位置 595-774付近で、住居床面に似た硬化面を確認した。焼土を含む範囲が認められたことから、周辺を精査したが、明確な掘り込みを検出するには至らなかった。ただ、柱穴とみられるピット3本を硬化面の周囲に

検出したため、規模不明確な住居として7号をとらえた。概ね東西4m、南北3.5mほどの規模と推定される。6号住居の南側に位置し、調査区域のなかでは低地に相当し、水分を含んだ土の範囲での認定である。

重複関係 不明。

覆土 硬化面上の土は黒褐色系の土で、白色軽石・焼土を含む。

壁 不明。プランはP 1・P 2・P 3等の配置から推定した。

床面 2×1.5mほどの不整形の範囲で硬化した面を検出した。

主柱穴 P 1～P 3と考えられるが、P 16は位置が不均衡である。各ピットの計測値は次の通り。P 1 : 44×39・深さ58cm、P 2 : 48×38・深さ63cm、P 3 : 37×33・深さ30cm、P 16 : 30×25・深さ24cm、P 15 : 36×37・深さ34cm、P 17 : 29×24・深さ40cm、P 19 : 25×23・深さ45cm、P 20 : 38×40・深さ61cm、P 1～P 2 : 212cm、P 2～P 3 : 162cm。

壁溝 なし。

カマド 不明。

貯蔵穴 不明。

掘り方 硬化面を中心として、3～8cmほどの不整形掘り込みが認められた。

その他 いくつかの土器片が近隣で出土しているが、住居に伴うか不明である。

遺物 小片のみ。

時代・時期 不明。

C区1面 1掘立柱建物(第38図、PL.22)

検出位置 608-785付近で確認した。1住居・2住居・3住居・5住居に囲まれた場所にある。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P 1～P 8で2間×2間だが、南北に長い。深さは23～69cmだが、概ね50cm前後で揃っている。

その他 28ピットは単独で番号を付けた掘り込みだが、建物内部に位置するため、ここに掲載した。28P : 32×27・深さ30cm。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や1・2住居と概ね平行な位置にあ

ることから、古墳時代と推定する。

C区1面 2掘立柱建物(第39図、PL.22)

検出位置 605-784付近で確認した。南端のP3・P4は3住居の中で発見されており、3住居とは同時存在できない。

重複関係 3住居のプラン確認時にP3・P4を検出していないので、2掘立柱建物→3住居の順に新しいと考えられる。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P8で2間×2間だが、南北に長い。深さは10～94cmであるが、3住居内検出のP3～5を除外すると、概ね50cm以上あり、掘り込みはしっかりしている。

その他 32ピットは単独で番号を付けた掘り込みだが、建物内部に位置するため、ここに掲載した。32P:20×14・深さ10cm。1掘立柱建物とほぼ平行しており、関連ある建物と推定される。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や重複する3住居との前後関係から、古墳時代前期と推定する。

C区1面 3掘立柱建物(第40図、PL.23)

検出位置 605-774付近で確認した。2掘立柱建物の東側に位置し、2掘立柱建物のピットとほぼ同じ並び方を示す。4掘立柱建物と重複し、同時存在できない。

重複関係 4掘立柱建物と重複するが、前後関係は確定できない。3掘立のP7と4掘立のP8が重なるが、P8の方が深い。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P7で2間×2間だが、P1・P2の間には柱穴が発見できなかった。P2～P4間が10cmほど長いので、東西棟とした。深さは15～39cmで、概ね30cm前後である。

その他 2掘立柱建物とほぼ平行した柱穴の並びを示し、関連ある建物と推定される。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や2掘立柱建物と平行する柱並びから、古墳時代と推定され、前期に遡る可能性がある。

C区1面 4掘立柱建物(第41図、PL.23)

検出位置 608-764付近で確認した。2掘立柱建物の東側に位置する。3掘立柱建物と重複し、同時存在できない。

重複関係 3掘立柱建物と重複するが、前後関係は確定できない。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P10で3間×2間、東西棟である。深さは12～48cmで、P5のみ48cm、その他は概ね20cm前後である。

その他 2掘立柱建物よりも一回り規模が小さく、東西棟であり、異なる様相を示す。しかし、概ね直交方向をもつことから、2掘立柱建物と関連ある建物と推定される。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や2掘立柱建物とほぼ直交する柱並びから古墳時代とみられ、前期に遡る可能性がある。

C区1面 5掘立柱建物(第40図、PL.23)

検出位置 595-785付近で確認した。4住居と7住居との間に位置する。この付近はピットを多数検出し、それらのなかで組合せを勘案したもので、1～4掘立柱建物のように、当初から明確に存在を認識できなかった建物である。

重複関係 建物の内側に87～90Pが存在するが、5掘立柱建物に伴うか、確認がない。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P8の組合せで、南辺は2間、北辺は3間が想定される。西辺のP5・P6間には、P2に相当する掘り込みが検出できなかった。ここでは、2間×2間の東西棟としておく。ピットの深さは25～60cmで、比較的しっかりしている。

その他 1～4掘立柱建物に比べ、長軸の方位が異なり、時代が異なる可能性があるが、埋没土はよく似ている。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 不明。

C区1面 1溝(第42図、PL.24)

検出位置 602～616-763～782付近で東西に延びる細い溝である。2溝・3溝と概ね同じ走行を示す。

重複関係 なし。

覆土 細砂粒を多量に含む灰褐色～黒褐色系の土。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 なし。

時代・時期 南北ベルトで観察すると、駐車場造成前の表土よりも下位にあり、かつ地山の軽石を含む黒褐色系の土を掘り込んでいるので、古墳時代以降～中世の時期が推定される。覆土の特徴からは、新しいものと見られるが、確証がない。

C区1面 2溝(第42図)

検出位置 613～615-780～783付近で東西に延びる短い溝である。1溝と概ね同じ走行を示す。

重複関係 なし。

覆土 細砂粒を多量に含む灰褐色～黒褐色系の土。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 なし。

時代・時期 1溝に似た様相を示す。

C区1面 3溝(第42図、PL.24)

検出位置 595～605-766～775付近で東西に延びる浅い溝である。1溝と似た走行を示す。

重複関係 なし。

覆土 砂粒を多量に含む灰褐色～黒褐色系の土。

壁 1溝よりも深く、斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 なし。

時代・時期 南北ベルトでみると、1溝に似た様相を示す。

C区1面 4溝(第42図)

検出位置 593～601-768～784付近で東西に延びる深い溝である。

重複関係 6土坑・5溝を切る。現代の溝。

覆土 灰褐色系の土で、黒色土ブロックを含む。駐車場造成時の盛り土よりも下位にある。

壁 深く直線的で、機械による掘削とみられる。

その他 底面近くから、ワイヤーロープが出土し、アース線埋設の溝と判明した。鉄塔の設置年代から、昭和14年頃とみられる。

C区1面 5溝(第42図、PL.24)

検出位置 597-774付近にあり、6住居の風倒木痕に続く溝状の落ち込みである。

重複関係 5溝→6住居の順に新しい。4溝に切られる。

覆土 黒色土で白色軽石を含む。

壁・断面形 半截の楕円形を呈する。

底面 丸みあり。

その他 6住居中央部の風倒木痕続きとすれば、木の幹部が腐植したのち、土が堆積した可能性がある。4溝以南では検出されなかった。

遺物 なし。

時代・時期 奈良時代以前。

C区1面 6～9溝(第42図、PL.24)

検出位置 601～605-793付近に平行する浅い溝。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で白色軽石を含む。

壁・断面形 箱形。

底面 平坦。

その他 5住居の西側に平行して4本検出した。土の様相を観察すると、新しいもののように見えるが、確証がない。中近世の耕作痕の可能性がある。

遺物 なし。

時代・時期 不明。

C区1面 10溝(第42図)

検出位置 598-798付近で検出した短く浅い溝。1面の南西端に位置する。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で白色軽石を含む。

壁・断面形 三角形。

その他 溝状を呈するが、細長い土坑の可能性もある。
遺物 なし。
時代・時期 不明。

C区1面 11溝(第42図)

検出位置 597-795付近で検出した短く浅い溝。1面の南西端に位置する。
重複関係 なし。
覆土 黒褐色系の土で白色軽石を含む。
壁・断面形 丸みあり。
その他 耕作痕の可能性ある。
遺物 なし。
時代・時期 不明。

C区1面 12溝(第42図、PL.25)

検出位置 594-603-726-746付近で検出した。J R 鉄塔北側の北壁に沿って東西に延びる。1溝よりも直線的である。
重複関係 中央部を幅1.2mの現代擾乱により破壊されている。
覆土 暗褐色系の土で黄色土ブロックを含む。
壁 斜めに立ち上がる。
底面 平坦。
その他 1溝と比較して、埋没土が異なる。
遺物 なし。
時代・時期 近世～現代の可能性が高い。

C区1面 13溝(第42図、PL.25)

検出位置 595-596-742付近で検出した。J R 鉄塔の北側に位置し、南北走行の短い溝。土坑状を呈する。
重複関係 118ピットと重複する。
覆土 黒褐色系の土で白色軽石を含む。
壁 斜めに立ち上がる。
底面 丸みあり。
その他 表土直下で切り込まれている。
遺物 なし。
時代・時期 近世～現代の可能性が高い。

C区1面 土坑(第43～45図、PL.25・26)

C区は2面が認められ、1面では古墳時代以降、近世

までの土坑や現代の擾乱を検出した。住居に重複する土坑の多くは、住居よりも新しくなる傾向がある。個々の土坑の大きさや埋没土などは一覧表にまとめた。

C区1面 ピット(第43・44図、PL.25・29)

C区1面のピットは南寄りに多い。北寄りのピットは掘立柱建物として組合せが考えられ、単独のピットは少ない。J R 鉄塔の北側では、いくつかのピットが発見されているが、近世～現代の掘り込みとみられる。個々のピットの大きさや埋没土等は一覧表にまとめた。

C区2面 土坑・ピット(第46～53・174図、PL.25～28)

C区の2面は、1面で縄文時代の土器片が採集され、一部の土坑で縄文土器が出土したことから、当初はトレンチを設定して下層の確認を行なったことに始まる。トレンチを拡張して、C区全体に広げたところ、土坑・ピットを多数検出したが、J R 鉄塔西側の旧道路付近では検出されていない。これらの中で、住居と認定できるものはなかった。ピットはC区西寄りの尾根上に集中する傾向があり、西端の小さな谷地形に面する斜面にはない。
個々の土坑の大きさ等は一覧表にまとめた。ピットは土層断面が多数に及ぶことから剖愛した。

第5節 D区

D区の概要 (第55図、PL.35)

D区はC区との境とした天神川の西側に位置し、市道00-040号線までの区域である。調査着手前まで駐車場として利用されていたため、盛り土されて平坦な現況であった。D区の北側・南側とも平坦に造成され、路線の南北には工業団地が営まれており、旧地形を想像することは困難であった。そこで、天神川に面する谷地形の広がりを確認するため、トレンチを3本設定した。

D区の旧地形は、1トレンチ g-h 断面、3トレンチ k-l 断面にあるとおり、D区中央部付近に天神川の谷地形の西岸斜面がみられる。これに対応する東岸斜面はC区西端の急傾斜であろう。天神川西岸は検出してきたが、ここより西側の市道に至る範囲は、ローム層に達する深さまで削平されていることが判明した。1トレンチ南西部の南壁断面では、標高144.60mの深さまで重機等によって攪拌されていることも判明した。

市道00-040号線までの現地形と以上のことから、D区は中央部西寄りに南北走行の尾根があり、西側は緩く西に低くなる地形で、東側の天神川までは東西約60mの谷地形と復元される。

D区は1～3トレンチを設定して掘り下げ、1トレンチと3トレンチを拡張したところ、D区中央部付近で南北走行の1溝を検出した。1溝は平安時代に遡る可能性がある。西半部は削平が著しく、土坑・ピットをいくつか検出したのみで、縄文時代以降の確かな遺構はなかった。

D区 トレンチ土層(第55・56図、PL.38)

1トレンチ a-b, c-d, e-f, g-h

D区の南寄りに東西方向で長さ約60mを設置した。盛り土が厚く施されており、現地表から1.8～2mまでは駐車場造成時の盛り土であった。盛り土の下には造成前の旧地表が確認できた。さらにその下位の厚さ1m前後の土は、改変前の自然地形を平坦化するための埋土とみられる。土層番号7～10、同17～22、同32～35の土層は谷地形を埋めた土で、本来の位置から動いている。時期は確定できないが、近代以降の埋め土であろう。

西端の地点では、動いていない地山ロームを検出して

いる。

2トレンチ i-j

D区の北東部に東西方向で、長さ約15mを設置した。1トレンチの東端と平行する。ここも1トレンチ東端に類似した堆積を示し、大半は動いている土である。

3トレンチ k-l

D区の中央部北寄り、2トレンチの西側に長さ約20mを設置した。1・2トレンチと同様に、上位には駐車場造成時の盛り土があり、中位に自然地形を埋めた土、下位に自然地形に沿った自然埋没土が認められた。k-l 断面の土層番号1～3は造成時盛り土、同4は自然地形を埋めた土、5～10は自然埋没土と考えられる。12・13は地山のローム層で、ここから西側に動いていないローム層が想定された。

南壁 m-n

1トレンチを拡張した南西部の南壁を記録した土層断面で、表面に砕石が載り、中位は重機等による攪拌された土。下位の地山相当のローム表面も攪乱されていた。

D区 1溝・土坑・ピット(第57図、PL.36・37)

1溝

1トレンチと3トレンチにかかった溝で、概ね南北走行である。東へ向かって低くなる斜面に切り込まれ、幅0.6m前後で、D区中央部のみ確認した。底面から土器片が出土しており、平安時代の所産と推定する。

土坑

1トレンチを拡張した西寄り1土坑を、3トレンチを拡張した西寄り2土坑を検出した。不整形な形状で、遺物の出土はなかった。

ピット

1トレンチ・3トレンチの拡張部で1～9ピットを検出した。いずれも小さく、浅いもので、遺物の出土はない。

第6節 E区

E区の概要 (第58図、PL.39)

E区は市道00-040号線の西側に接し、北側にコンクリートの擁壁が築かれ、南側は民家の並ぶ住宅に囲まれた区域である。コンクリート擁壁の北側は芳賀住宅団地として新しく開発された住宅街で、階段状に削平されている。このような周囲の状況のなかで、E区から1区にかけての区域は、近年の改変が比較的少なく、自然地形の残った区域とみられる。A区からD区が大きく改変されたのとは異なる状況である。

D区の調査結果と併せて推定すると、D区とE区の間を通る市道00-040号線付近は浅い谷地形があったとみられ、E区東端の歩道脇から4住居の乗る低い尾根まで、緩く東に低くなる地形が復元される。

住居は確実なもの5軒が検出され、いずれも奈良～平安時代のもと考えられる。また、掘立柱建物1棟が南東隅で検出された。土坑・ピットは2住居から3住居にかけて分布するが、ほとんど遺物が出土しないため、時期等は不明である。調査区東寄りで検出された細長い土坑は、埋没土の様子から、近世～現代のもと考えられる。

調査区への出入口とした東端開口部の西側7m付近に、6号住居が検出された。表土掘削時からカマド構築材とみられる大きめの石が露出し、周囲にAs-Bらしきものが不整形に広がっていたことから、その詳細が期待された住居である。土層観察用ベルトを残して火山灰堆積範囲を中心に掘り下げたところ、住居のプランと火山灰の分布範囲がずれていることが判明した。浅く落ち込む範囲の中央部に火山灰が堆積し、住居のプランは北側に寄っていた。また、堆積していた火山灰はAs-Bだけではなく、科学分析を依頼した火山灰考古学研究所によると、As-Bの上位にある青灰色テフラは、浅間川テフラ(As-Kk)の可能性がきわめて高いという所見を得た。

E区 1住居(第58・59・175図、PL.40・142)

検出位置 663-950付近で検出した。D区西半部から西へ向かって低くなる浅い谷地形の西側に位置する。北側の6住居との距離は6m弱、西側の2住居との距離は約4m、東側の1掘立柱建物との距離は最短で6mである。

重複関係 北側に5住居とした台形を呈する浅い掘り込みがあり、調査所見では5住居→1住居の順に新しい。

覆土 暗褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ41～60cmで、斜めに直線的に立ち上がる。東辺に比べて西辺がやや短く、全体として台形を呈する。床面 概ね平坦である。

主柱穴 不明。

壁溝 幅20～42cm、深さ1～7cmで、南東隅を除き、ほぼ全周する。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。カマド燃焼部は住居の東辺にかかり、外側に広がる。袖部は不明であるが、燃焼部の掘り込みは深い。

貯蔵穴 掘り方で検出した南東隅の掘り込みか。二段に掘り込まれ、103×83・深さ27cmである。

掘り方 細かい凹凸をもち、やや盛り上がる範囲が中央部にあり、北東・北西・南西の各隅付近に不整形な浅い掘り込みがある。南辺中央部付近に二段掘り込みのピットがあり、56×46・深さ26cmである。

その他 5住居は本住居に比べて1/3ほどの深さが遺存し、底面は平坦であることから、本住居の拡張部分の可能性がある。

遺物 床面北西部で鉄鎌(E9)が、カマド左脇付近の床面からやや浮いた状態で小型甕(E7)が、北西隅壁際で土師器杯(E1)が出土している。カマド前の床面から破片が出土した。

時代・時期 出土遺物、住居構造などから、奈良時代の8世紀後半の所産と推定する。

E区 2住居(第60・175図、PL.41・142)

検出位置 670-958付近で検出した。1住居の西側にあり、北側の3住居との間は15m弱離れていて、その間に土坑・ピットが分布する。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ34～46cmで、斜めに直線的に立ち上がる。本住居も東辺に比べて西辺がやや短いが、全体として長方形を呈する。

床面 細かい凹凸がある。

支柱穴 不明。

壁溝 南東隅付近を除き、ほぼ全周する。幅36～50cm、深さ4～8cmである。北辺と南辺は凹みの連続のように見え、明確ではない。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。カマド燃焼部は住居の東辺にかかる。袖部は不明であるが、燃焼部の焼土がよく遺存していた。

貯蔵穴 南東部の二段掘り込みのピットで、59×48・深さ35cmである。中から略完形の須恵器杯(E16)と土師器杯の破片が出土した。

掘り方 全体に凹凸が著しい。各隅に不整形の掘り込みがあり、中央部にも楕円形の掘り込みがある。カマド掘り方の底面には、小ピットが4個検出された。

その他 E区内では、南端に位置しており、調査区南壁ギリギリでプランを検出した。

遺物 カマド内から土師器製の破片がまとめて出土し、貯蔵穴内からは略完形の須恵器杯(E16)が、カマド左脇の床面近くから土師器杯(E10)が出土している。

時代・時期 出土遺物、住居構造などから、奈良時代の8世紀後半～末の所産と推定する。

E区 3住居(第61・176図、PL.42・142)

検出位置 684-955付近で検出した。調査区中央部付近にあり、東に向かって低くなる緩い傾斜面にある。周囲に土坑・ピットが分布するが、住居との関係は不明である。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ41～61cmで、直に近く立ち上がる。南北に長い平行四辺形のようなプランであるが、基本形は長方形であろう。

床面 平坦で、踏み固められている。

支柱穴 不明。

壁溝 カマド左脇から南東隅を欠くが、その他の辺は全周する。幅30～55cm、底面幅3～11cm、深さ1～11cmである。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。カマド燃焼部は住居の東辺にかかる。カマド構築材とみられる30cm大・40cm大・60cm大の石がカマド前の床面から出土し、そのほかの割れた石は、中央部付近に散乱していた。袖部は

不明であるが、燃焼部の焼土がよく遺存していた。

貯蔵穴 南東部の略楕円形のピットで、64×50・深さ15cmである。上面から須恵器製体部片(E27)が蓋のような状態で出土した。南壁との間からも完形に近い杯(E23)が出土している。

掘り方 全体に凹凸が著しい。北辺-西辺-南辺にかけて、幅50～90cmの不整形で帯状の掘り込みがある。

カマド掘り方の底面には、中央部に細長い58×20・深さ2～8cmの掘り込みがあり、その両脇に小ピットが2個ずつ計4個検出された。

その他 カマド構築材とみられる石が床面から発見されている状況から、意図的なカマド破壊の可能性がある。

遺物 中央部西寄りの床面から甕(E25)が出土し、中央部には10～15cm大の細長い石が10個ほど出土している。

時代・時期 出土遺物、住居構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

E区 4住居(第62・63・176・177図、PL.43・142)

検出位置 692-970付近で検出した。E区中央のやや北西寄りに、南北走行の低い尾根があり、4住居はそのもっとも高い位置にある。西側はF区との境をなす浅い谷地地形があり、本住居はE区の西端に位置する。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ11～20cmで、他の住居に比較して浅い。南北に細長く、隅が丸みをもつが、基本形は長方形である。西辺5.78mに対し南辺は2.97mで、縦横比は約2倍となって、特異なプランである。

床面 平坦で、踏み固められている。

支柱穴 不明。

壁溝 なし。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。袖石が住居の壁ラインに並ぶ。カマド構築材とみられる大きめの石が、カマド付近から割れた状態で出土した。左袖石下部を除き、もとの位置から動いているように見える。

貯蔵穴 不明。

掘り方 全体に凹凸が著しい。南辺沿いに不整形の掘り込みがあり、中央部にはやや大きめの掘り込みがある。カマド内では小ピットがほぼ円形に5個並ぶ。北寄りにやや深いピットがあるが、その他のピットは深さ10cm前

後で浅い。

その他 カマド焚き口天井部とみられる石が割れた状態で出土し、その他の割れた石もカマド前の床中央部から出土しているなどの状況から、意図的なカマド破壊の可能性がある。

遺物 大半の土器片がカマド前から出土し、それらは細かく割れており、1カ所に集中して出土した。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

E区 5住居(第63・177図、PL.40・143)

検出位置 669-950付近で検出した。1住居の北側に突出した状態で検出した。

重複関係 南側で1住居と重複しており、調査所見では5住居→1住居の順に新しいが、土器片が混じっている可能性がある。

覆土 暗褐色系の土で、軽石を多く含む。

壁 深さ12～21cmで浅く、西辺0.77m、北辺2.32m、東辺1.22mの台形状を呈する。

床面 概ね平坦である。

主柱穴 不明。

壁溝 なし。

カマド 不明。

貯蔵穴 不明。

掘り方 細かい凹凸があり、概ね平坦である。北西部に25×16・深さ13cmの不整形のピットがある。

その他 1住居の深さに比べて1/3程度であることと、掘り方底面が平坦であることなどから、単独住居というよりも、1住居の拡張(張出し)部の可能性がある。

遺物 北部底面から鉄鎌(E40)が、東辺沿いで細い石と土器片が出土している。

時代・時期 土器片から、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

E区 6住居(第64・65・177・178図、PL.44・143)

検出位置 677-945付近で検出した。E区東端にあり、道路にもっとも近く、E区のなかでは東側の低地に寄っている。

重複関係 なし。

覆土 当初の遺構検出作業では、不整形の方形プランの

内側にAs-Bが不整形に堆積しているとみられた。検出面で土器片や大きめの石の出土位置を記録し、土層断面観察用ベルトを設定して掘り下げたところ、As-Bの堆積する凹みは、住居プランに対して南寄りに広がるのが判明した。この凹み遺構は住居周りの構造と密接に関連しているとみられる。遺物の分布状態を記録した図が、第64図の下である。住居の覆土は黒色土～暗褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ32～61cmで、他の住居に比較して深い。凹みの外側からの深さは70cm以上となる。南北に長く、長方形を呈する。

床面 平坦で、中央部は踏み固められ、硬化面が認められた。主柱穴 不明。

壁溝 なし。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。袖石が住居の壁ラインに並ぶ。カマド構築材とみられる大きめの石が、カマド付近の上位から割れた状態で出土した。左右の袖石はもとの位置にあると見られる。奥壁には落差17cmの段差がある。

貯蔵穴 不明。

掘り方 全体に凹凸が著しい。北辺沿いと南辺沿いに不整形の掘り込みがある。カマド焚き口に65×54・深さ22cmの楕円形の掘り込みがあり、燃焼部には小ピットが二つ検出された。

その他 As-Bが降下した後も、住居は完全に埋没しておらず、凹みが残っていたと推定する。As-Bに伴う灰が確認されていて、As-B直下の土は黒色土で、当時の表土であろう。埋没土の様相は自然堆積を示すが、As-Bよりも上位の層が降下テフラで直接埋没したかは確定的ではない。

遺物 大半の土器片がカマド内～カマド前と中央部から出土している。甕の破片が多い。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代9世紀中頃の所産と推定する。

E区1面 1掘立柱建物(第66図、PL.45)

検出位置 664-940付近で確認した。調査区の南東隅に位置している。1住居との最短距離は約6m、6住居とは約8m離れている。

重複関係 なし。北西隅のP1が現代の掘り込みで一部

破壊されている。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P9で2間×2間だが、南北に長い。深さは23～57cmだが、概ね40cm前後で揃っている。

その他 東西の柱間が短く、南北が長い。柱並びの内側にはピット等が検出されなかった。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係から、平安時代と推定する。

第7節 F区

F区の概要 (第71図、PL.48)

F区はE区の西側に位置し、南東部に向かって低くなる地形である。北西端がもっとも高く、南東端がもっとも低い。E区と同じく、北側にコンクリート擁壁が築かれ、南側は高である。

住居は8軒が検出され、1住居はとくに南北に長い形状で、他の住居に比して異質である。4住居は火処がない。1～4住居と1掘立柱建物・2掘立柱建物はほぼ平行した位置関係にあり、なんらかの関係が想定できるが、同時存在かどうか、判定しにくい。5住居・7住居と併せて、平安時代の所産と推定する。

6住居・8住居は大型で、8住居はF区中最大の規模である。6住居は竪穴の周囲に斜めの掘り込みがあり、屋根の葺きおろしが斜面の外にあれば、規模が大きくなる。6・8住居は奈良時代の所産と推定する。

溝は近世以降の新しい所産と推定されるが、中から出土する遺物や埋没土を勘案すると、平安時代に遡るものが存在するようである。

F区トレンチ

民家跡地トレンチ(第70図)

F区はE区西端の谷地形から続く、西へ向かって高くなる地形の区域で、東端部は引き渡し未了区域を含む浅い谷地形であるため、北寄りの区域は遺構の存否を確認するトレンチ調査とした。その後、平成20年2月段階で南端区域の調査が可能になったことから、重機による東西トレンチを設定して、遺構の有無・埋没土層の堆積状

E区 土坑・ピット(第67～69図、PL.46・47)

E区は1面のみで、平安時代以降近世までの土坑や現代の擾乱を検出した。土坑・ピットは2住居・3住居の間に多く分布し、3住居の東側にもいくつか分布する。2～4土坑・8土坑の細長い掘り込みは、近世以降の新しいものに見える。個々の土坑の大きさや埋没土などは一覧表にまとめた。

態を確認した。遺構は認められなかった。

表土直下の土層2にはAs-Bを含み、土層4はAs-B軽石純層で、その直上の3はAs-Bに伴う灰層である。4の直下はAs-Bが堆積する直前の地表とみられ、谷地形はまだ、浅い凹みとして残っていた。4が降下して堆積したか、上流からの流れ込みの堆積かは断定できない。

土層5・6・7は黒褐色～暗褐色系の土で、白色軽石を含んでいる。土層8・9・10・12・13・14は黒褐色～暗褐色系の土で、白色軽石を含まない。このことから推定すると、土層5・6・7は古墳時代から平安時代に堆積した土層で、白色軽石はAs-CまたはHr-PPで、この時期には谷地形として大きく凹んでいたと考えられる。

F区 1住居(第71・178図、PL.49・143)

検出位置 726-043付近で検出した。F区中央部の北寄りに位置する。東側の2掘立柱建物との最短距離は0.6mたらずなので、同時存在は困難とみられる。

重複関係 3溝と重複し、1住居→3溝の順に新しい。3溝の掘り込みが浅く、1住居床面まで届いていない。覆土 暗褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ4～16cmで浅く、東側がやや深い。南北に長い長方形で、南辺に2.15×1.20mの10cmほど高い「張出部」がある。「張出部」には8土坑が重複し、拡張部→8土坑の順に新しい。この張出部が住居の一部ならば、1住居→8土坑の順に新しい。張出部を含めると、カマドの位置は東辺の中央になるが、除外すると南寄りとなる。ここでは、東西がほぼ同寸であることから、住居の一部

としておく。

床面 カマド前付近の中央部のみ、概ね平坦である。北側は攪乱により乱されている。

支柱穴 不明。

壁溝 なし。

カマド 東辺中央に設置する。突出部に焼土が遺存していたが、全体として遺存不良で、詳細は不明である。

貯蔵穴 掘り方で検出された南東部の掘り込みか。不整形で二段に掘り込まれ、66×40・深さ29cmである。

掘り方 カマド左脇に不整形で深さ10cm前後の掘り込みがあり、低い南辺の掘り込みは大きく広がる。

その他 一段低い南辺中央に59×38・深さ11cmの掘り込みがある。ほかの住居に比較して規模が小さく、南北に細長いプランで、用途や機能が異なる竪穴の可能性が有る。

遺物 カマド左脇の床面近くから杯の破片が出土し、低い南辺沿いからも小片が出土している。

時代・時期 出土遺物の特徴から、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

F区 2住居(第72・73・178・179図、PL.50・143)

検出位置 731-050付近で検出した。F区中央部の西端に位置し、隣接するG区との境界にある。隣りあう3住居との間隔は0.5m以下で平行している。同時存在の場合は、軒が重なるというよりも、柱・桁・梁など構造材の一部を共有するようなケースを考える必要があろう。重複関係 なし。東辺外側のカマド両脇部は、攪乱されている。

覆土 暗褐色系の上で、白色軽石を含む。

壁 東辺の攪乱部分を除くと、深さ48～76cmで、北側がやや深く、また他の住居に比較して深い。南北に長い長方形を呈する。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。カマド前床面には、灰と焼土が分布する。

支柱穴 掘り方で検出したP1・P2・P3・P6の4本とみられる。P5・P8は南辺から約0.8mの距離で平行しており、出入口施設に関連するか、3住居との連接にかかわる可能性がある。各ピットの計測値は次の通り。P1:31×27・深さ60cm、P2:26×20・深さ57cm、P3:25×18・深さ49cm、P6:31×28・深さ

20cm(カマド前から26cm)、P1～P2:2.28m、P2～P3:2.41m、P3～P6:2.46m、P4:27×25・深さ29cm、P5:34×33・深さ61cm、P7:29×27・深さ32cm(カマド前から45cm)、P8:37×28・深さ13cm、P5～P8:0.99m。

壁溝 カマド右脇～南東隅を除き、全周する。幅26～50cm(底面幅5～16cm)、深さ2～8cmである。

カマド 東辺中央に設置する。袖石が住居の壁ラインに並ぶが、粘土の袖部が住居内側に延びる。カマド構築材とみられる石が、カマド付近の上位から出土した。現代の攪乱による破壊が入っているとみられる。

貯蔵穴 南東隅の略円形を呈する掘り込みで、二段に掘り込まれ、63×59・深さ58cmである。

掘り方 全体に細かい凹凸はあるが、中央部は比較的平坦である。四隅に深さ10cm前後の不整形掘り込みがあり、南辺中央部付近(P8周囲)も1×1.2m・深さ15cm程度に掘り込まれている。カマド前は不整形に掘り込まれている。

その他 他の住居に比べて遺存状態が良好で、1住居・3住居・4住居・掘立柱建物とほぼ平行しており、1・3・4住居よりも規模が大きい。

遺物 住居全体から遺物が出土しているが、床面から高い位置のものもある。カマド左脇の四角形の石、南西隅付近の50cm大の石は台石の可能性が有る。カマド右脇の床面からは土師器(Ⅱ)口縁部が、南辺壁際では破片がまとまって出土している。本住居は鉄製品の出土がやや多く、刀子のような棒状の鉄製品、滓らしきもののほか、東辺北寄りの壁際の床面から鉄製品2個体(鉄鏝F24・鏃先F25)が出土した。

時代・時期 出土遺物、住居構造などから、鉄製品の製作工房の可能性があり、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

F区 3住居(第74・179図、PL.51・143)

検出位置 725-051付近で検出した。2住居の南側に接するように平行しており、南側の4住居との最短距離は約3.4mである。3住居と4住居の間には、近世以降の攪乱が入っている。

重複関係 南東隅からカマド前付近を攪乱で破壊されている。

第4章 検出された遺構と遺物

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 南東隅が破壊されているが、ここを除くと深さ63～89cmで北側がやや深く、また他の住居に比較して深い。南北にやや長い長方形を呈する。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。カマド前床面には、灰が分布する。

支柱穴 不明。掘り方から検出したピットは3本で、計測値は次の通り。P 1：26×23・深さ6cm、P 2：38×32・深さ17cm、P 3：20×18・深さ22cm。

壁溝 カマド右脇～南東隅を除き、全周する。幅13～47cm（底面幅3～8cm）、深さ3～8cmである。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。袖石が住居の壁ラインに並ぶが、粘土の袖部が住居内側に延びていた可能性が高い。深い攪乱により破壊されている。左右の袖石は本来の位置にあるとみられ、焚き口天井部らしき石が割れて落ち込んでいた。カマド奥壁は落差70cmほどの斜めの立上りになる。

貯蔵穴 南東隅の掘り方で検出した略楕円形の掘り込みとみられ、44×32・深さ49cmである。

掘り方 全体に細かい凹凸はあるが、中央部は比較的平坦である。掘り方でP 1～3を検出した。カマド焚き口付近は15cm前後の浅い掘り込みとなる。奥壁は落差30cmほどの段差が認められた。

その他 2住居に隣接して平行しており、1住居・4住居とも平行している。カマド前は攪乱が深いためか、遺物の遺存が不良である。

遺物 住居中央部に大きめの石が出土している。台石またはカマド構築材とみられる。土器等は床面近くから出土し、床面から浮いた状態で炭化物が西辺寄りから出土している。

時代・時期 出土遺物、住居構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

F区 4住居(第75・180図、PL.52・143)

検出位置 720-056付近で検出した。3住居の南側に概ね平行しており、北側の3住居との最短距離は約3.4mである。4住居の北東部に近世以降の攪乱が入っている。重複関係 北東隅から北辺にかけて、攪乱で破壊されている。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を多量に含む。

壁 北東部が破壊されているが、深さ14～32cmで東隅がやや深く、全体に20cm前後である。南北にやや長い長方形を呈する。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。

支柱穴 不明。掘り方で検出した南西隅の掘り込みは深さ3cmほど、北東隅の掘り込みは6cm程度で、柱穴とは考えにくい。

壁溝 掘り方で北西隅～西辺にかけて検出した。幅21～46cm（底面幅3～14cm）、深さ2～7cmである。

カマド 不明。他の住居が東辺に設置するのが通例であることを勘案すれば、北東部の攪乱により破壊されたと推定するよりも、もともと設置されていなかった可能性が高い。しかし、火処がなくなり、本住居は別の機能・用途を考えなければならない。

貯蔵穴 南東隅の掘り方で検出した略楕円形の掘り込みとみられ、73×43・深さ14cmである。

掘り方 全体に小ピット状の掘り込みが広がる。

その他 1～3住居とほぼ平行している。火処はないが、遺物の出土があり、ごく一時的な住居か、火を使わない建物(物置、納屋のような)が推定される。

遺物 北西隅付近の床面から土師器甕(F36)が出土したほか、小片と10cm大の石がいくつか出土している。

時代・時期 出土遺物の特徴から、奈良時代の8世紀後半の所産と推定する。

F区 5住居(第76・180図、PL.53)

検出位置 701-035付近で検出した。F区南東部にあり、南に向かって低くなる地形の裾部にある。カマドを含む南寄りの範囲を近世以降の攪乱により破壊されている。

重複関係 8住居と重複し、8住居→5住居の順に新しく、出土土器の所見とも矛盾しない。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 東辺南半部・西辺南半部が破壊されているが、深さ20～65cmで北側がやや深い。南北にやや長い長方形を呈する。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。

支柱穴 不明。掘り方で検出したP 1～3の計測値は次の通りである。P 1：40×22・深さ15cm、P 2：30×24・深さ18cm、P 3：100×94・深さ16cm。

壁溝 東辺のカマド左袖部から南辺までほぼ全周する。

幅23～43cm（底面幅2～11cm）、深さ2～9cmである。カマド 東辺中央南寄りに設置する。南半部は攪乱により破壊されている。カマド燃焼部上位から、土器片や10cm未満の石が出土した。

貯蔵穴 南東隅の掘り方で検出した隅丸長方形の掘り込みとみられ、36×29・深さ20cmである。

掘り方 全体に小ピット状の小さな掘り込みが広がる。北東隅・西辺南寄り・南東部に不整形の掘り込みがある。その他 攪乱の掘り込みが深く、カマド付近～中央部の破壊が著しい。

遺物 カマド付近の土器片出土がもっとも多い。

時代・時期 出土遺物の特徴から、平安時代の9世紀代の所産と推定する。

F区 6住居(第77・78・180図、PL.54・143)

検出位置 710-030付近で検出した。F区のほぼ中央部にあり、7住居・8住居にきわめて近い。両者との最短距離は1m未満で、同時存在は想定しにくい。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 住居本体の壁の周囲に、緩い傾斜の掘り込みをもつ。この掘り込みはカマド煙道の先端部を除き、幅30～126cmで全周する。西辺中央部が凸になり、この箇所幅が126cmである。南辺は40cm前後でやや幅が狭く、北辺では80～90cmの幅がある。カマドの左手で幅123cm、右手で48cmである。この斜めの掘り込みは、住居の外側の構造にかかわる遺構とするよりも、煙道部との位置関係から、住居の屋根葺きおろしの内側と考えたい。直に近い壁の高さは30～54cm、斜めの掘り込み外からの深さは57～83cmで、北寄りがやや深い。プランは南北に長い、東辺が西辺に比べて短く、全体として台形を呈する。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。

主柱穴 P1～4の4本。各ピットの計測値は次の通り。P1：66×63・深さ74cm・二段(脇に径39・深さ9cmピット)、P2：58×58・深さ53cm・二段、P3：58×56・深さ78cm・二段、P4：64×52・深さ66cm・二段(下バ2個)。P1～P2：3.39m、P2～P3：2.23m、P3～P4：3.48m、P4～P1：2.20m。

壁溝 なし。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。右袖部に石が据え

られ、脇から粘土が出土した。燃焼部中央から20cm大の石が出土し、支脚の可能性もある。燃焼部には焼土が分布し、カマド前には灰と焼土の混じりが1.2×1.5mほどの範囲に散布していた。燃焼部奥壁には落差14cmの壁があり、煙道につながる。燃焼部から出土した石は、カマド構築材の一部とみられる。

貯蔵穴 南東隅の深さ4cmの掘り込みか。不整形で、プランが判然としないため、半掘とした。

掘り方 全体に小ピット状の小さな掘り込みが広がる。カマド左脇から北辺・西辺・南辺中央付近まで、壁際が不整形に掘り込まれている。中央部は比較的平坦な不整形部分が残る。また、P1の南側にP6、P2南側にP7、P3南側にP8、P4南東側にP5を検出した。建替えしたか、補助柱の可能性もある。それぞれの計測値は次の通り。P6：56×49・深さ26cm、P7：58×51・深さ63cm、P8：77×38・深さ73cm、P5：62×62・深さ58cm。P6～P7：3.41m、P7～P8：1.94m、P8～P5：3.96m、P5～P6：1.86m。その他 住居外周に連続する斜めの掘り込みは、西辺中央部が突出し、南辺での幅がもっとも狭いことから、出入口は西辺または南辺に推定される。

遺物 カマド燃焼部とカマド前から土器片が、西辺の壁際から10～16cm大の細長い石が出土した。

時代・時期 出土遺物の特徴から、奈良時代の8世紀中頃の所産と推定する。

F区 7住居(第75・180・181図、PL.55・143)

検出位置 710-027付近で検出した。6住居の東側に位置し、最短距離は1m未満である。8住居と重複する。6住居・8住居に比べて規模が小さい。

重複関係 8住居と重複し、8住居→7住居の順に新しく、出土土器の所見とも矛盾しない。6住居を含めて、これら3軒の同時存在は困難と考えられる。

覆土 暗褐色系の土で、ロームブロックを含む。

壁 壁の高さは24～45cmで、概ね40cmであり、南北にやや長い長方形である。南辺の位置は、貼床の南限界で捉えた。東辺北半部と北辺につながって、6住居に似た斜めの掘り込みがある。幅7～16cmで狭い。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。8住居と重なる範囲は、貼床がやや柔らかい。

第4章 検出された遺構と遺物

支柱穴 不明。

壁溝 南辺を除き、ほぼ全周する。幅22～41cm（底面幅7～15cm）、深さ5～8cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部中央付近から長さ28cmの細長い石が立てた状態で出土し、支脚として利用したものと考えられる。ほかにカマド構築材らしき石の出土がなく、粘土で構築したと推定される。支脚石の近くの燃焼部内から土師器甕1個体分が出土している。

貯蔵穴 不明。

掘り方 全体に小ピット状の小さな掘り込みが広がる。8住居と重なる範囲は、下位に8住居の貼床が存在し、7住居との間はロームブロックを含む暗褐色系の土が認められた。7住居床面を形成するため、人為的に埋められたと推定される。

その他 カマドの遺存が不良にもかかわらず、出土遺物の残りが良い。投げ込まれた可能性もある。

遺物 カマド燃焼部～カマド前、床面中央部、南辺沿いから、完形に近い土器が出土し、中央部床面から完形の刀子(F60、布状圧痕あり)が略完形で出土している。

時代・時期 出土遺物の特徴から、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

F区 8住居(第79～81・181・182図、PL.56・144)

検出位置 706-025付近で検出した。6住居の南東部に位置し、最短距離は1m未満である。F区の東端にあり、南西部の5住居、北西部の7住居に切られている。規模が大きい。

重複関係 5住居・7住居と重複し、8住居→5住居、8住居→7住居の順に新しい。6住居との同時存在は困難と考えられる。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石・焼土粒子を含む。

壁 壁の高さは49～83cmで、北西部がやや高く、南北にやや長い長方形である。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。5住居の床面と高さがほぼ同じであるが、壁溝で南西隅を検出できた。北側で重複する7住居は、床面の高さが8住居よりも約40cm高い。

支柱穴 P1・P9・P3・P8の4本と考えられる。P5とP7は深さが20cm以上あるが、その他は10cm前後である。各ピットの計測値は次の通り。

P1:68×58・深さ58cm・二段、P9:42×41・深さ40cm、P3:66×53・深さ98cm・二段、P8:40×34・深さ19cm、P1～P9:2.96m、P9～P3:2.34m、P3～P8:2.72m、P8～P1:2.14m、P2:39×34・深さ4cm、P4:28×22・深さ13cm、P5:48×45・深さ24cm・二段、P6:34×23・深さ9cm、P7:52×40・深さ35cm。

壁溝 東辺北半部を除き、ほぼ全周する。幅25～45cm（底面幅4～13cm）、深さ1～6cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインよりも内側にある。カマド前～袖部両脇にかけて灰が分布し、燃焼部では灰に焼土が混じる。煙道部に割れた状態の石が3個出土しているが、両袖部から石は出土していない。住居内からはほかに割れた状態の石がいくつか出土しているため、組み合わせて天井部を構築した可能性もあるが、ベースは粘土とみられる。

貯蔵穴 南東隅の二段に掘り込まれた土坑とみられる。69×64・深さ39cmで、中から土器片が出土した。

掘り方 全体に小ピット状の小さな掘り込みが広がる。カマド前及び壁に沿って不整形の掘り込みがあり、結果として、中央部が盛り上がった状態である。

その他 他の住居に比べて規模が大きく、深かったため、カマド袖部の粘土が遺存しており、貼床がしっかりしている。

遺物 遺物は破片ながら全体から出土した。西辺寄りの床面から25cm大の扁平な石、中央部付近で鉄器2点(刀子F93・F94)が、カマド左袖脇から土師器杯(F71)が出土している。

時代・時期 出土遺物の特徴、カマド構造等から、奈良時代の8世紀前半の所産と推定する。

F区1面 1掘立柱建物(第82図、PL.57)

検出位置 728-030付近で確認した。F区の中央部北寄りに位置する。2掘立柱建物とほぼ同じ規模・方位で、1～4住居とも方位が近い。6住居との最短距離は3.8mである。

重複関係 1溝・5土坑と範囲が重なる。1溝・5土坑からは奈良平安時代の土師器・須恵器の破片が出土している。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P 1～P 9で1間×3間だが、全体に南北に長く、南北の柱間よりも東西の柱間の方が長い。深さは50cm前後で、P 7のみ86cmである。

その他 柱並びの内側にいくつかのピットがあり、東列の柱並びに5土坑がかかる。

遺物 1～4・3・7の各ピットから、奈良平安時代の土器片が出土しているが、小片のため割愛した。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係、及び小片ながらピットから土師器・須恵器が出土していることから、平安時代と推定する。

F区1面 2掘立柱建物(第83図、PL.57)

検出位置 729-040付近で確認した。F区の中央部北寄りに位置する。1掘立柱建物とはほぼ同じ規模・方位で、1～4住居とも方位が近い。6住居との最短距離は5.1m、1掘立柱建物とは5.9m、1住居との最短距離は0.6mである。

重複関係 南西側の柱穴を近世以降の攪乱で破壊されている。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P 1～10 (P 6欠)で3間×2間、全体に南北に長い。中央部のP 2～P 3・P 7～P 8の柱間がやや短い。ピットの深さは40～50cmで、P 7・P 10がやや浅い。

その他 柱並びの内側にはピット等がなく、東列中央部に9土坑が認められ、中から奈良平安時代の土器片が出土しているが、底面の凹凸が著しく、木の根の可能性もある。遺物 P 6相当の攪乱から奈良平安時代の土器片が出土しているが、混入である。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係から、平安時代と推定する。

F区1溝(第84・182図、PL.58)

検出位置 720～734-009～040にあり、東西に延びる溝と、南北に延びる溝の両者である。東西走行の部分は1掘立柱建物と重複する。南北走行の部分は1掘立柱建物と2掘立柱建物の間にある。

重複関係 1掘立柱建物の南端部ピットと重なるが、前後関係を判定できなかった。調査所見では、4土坑→1溝→5土坑の順に新しい。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 奈良平安時代の土師器・須恵器の破片が1,030g出土している。

時代・時期 埋没土、出土遺物・重複関係から、平安時代の所産と推定されるが、時期を限定できない。

F区2溝(第84・182図、PL.58)

検出位置 700～724-009～015にあり、調査区東端部を南北に走行する。同じ走行で掘り直しされたらしく、西側の2a溝が新しい。

重複関係 1溝と重複する位置にあるが、攪乱により破壊されている。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。上位に砂層があり、水流があったことを示す。

壁 23～48cmの深さがあり、斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 平安時代の土師器・須恵器の破片が350g以上出土している。

時代・時期 埋没土、出土遺物から、平安時代の所産と推定されるが、時期を限定できない。

F区3溝(第85・182図、PL.144)

検出位置 715～726-044・045にあり、1住居の南端から南に向かって走行し、浅く細くなって検出できなくなる。

重複関係 1住居南端から発するため、前後関係は判定できない。

覆土 灰褐色系の土。

壁 浅い。

底面 凹凸あり。

その他 1住居がやや細長く、特異な形状を呈していることから、3溝が1住居の一部であった可能性があるが、確証がない。

遺物 奈良平安時代の土器が21点出土している。

時代・時期 埋没土、出土遺物から、平安時代の所産と推定されるが、時期を限定できない。

F区 4溝(第85図)

検出位置 721～727-060付近で検出した。3住居の西側にあり、ほぼ南北の走行である。3溝の走行や形状に似るが、長さは半分程度である。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の上で、白色軽石を含む。

壁 浅く、斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 3溝とほぼ平行し、かつ1～4住居とも平行しており、同時期の確認はないが、関係ある溝と推定される。

遺物 なし。

時代・時期 埋没土、走行から平安時代と推定するが、時期を限定できない。

F区 土坑(第84・85図、PL.58・59)

検出位置 概ねF区の北西部にあり、1～7土坑はほぼ円形で、規模が近い。8土坑は1住居の南端、9土坑は2掘立柱建物の東列にかかり、10土坑は4住居の南東部に、11土坑はF区の西端部にある。

重複関係 重複関係で判定できたのは、4土坑→1溝→5土坑、1住居→8土坑の順に新しいという前後関係のみである。

覆土 暗褐色～黄褐色系の上で、白色軽石を含む。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 1～5土坑は概ね同じ規模で、東西に並んでいる。9土坑は2掘立柱建物の一部の可能性もある。

遺物 2～5土坑・9土坑・12土坑から奈良平安時代の土師器・須恵器の破片が出土しているが、小片のため割愛した。

時代・時期 埋没土、出土遺物・重複関係から、平安時代の所産と推定する。

F区 ビット(第84～86図、PL.59)

F区のビットは土坑の分布とほぼ同じ傾向を示し、北西部で検出している。遺物の出土はない。各ビットの概要は、計測値表で示した。

第8節 G区

G区の概要 (第87図、PL.60)

G区はF区の西側に位置し、南東部に向かって低くなる地形である。北西端がもっとも高く標高147m付近、南東端がもっとも低く144.60mほどである。E・F区と同じく、北側にコンクリート擁壁が築かれ、南側は畝である。

竪穴住居は15軒が検出され、1・3・8・14住居は比較的規模が大きい。長方形の住居は北北東・南南西に対象軸をもつものが多い。中央部の1土坑を囲んで8・7・9・10・11・12住居があり、2掘立柱建物を11・12・13・14住居が囲む。また、5住居の北東側は何もない空間である。なんらかの関係が想定できるが、住居すべてが同時存在ではない。

G区の竪穴住居と掘立柱建物は重複がまったく見られない。規制があったかの如くである。より新しい時代の住居を建設するとき、古い住居が凹みを残して、そ

れらを避けて建設した可能性がある。

土器等の出土が多い住居と、少ない住居とが存在する。時代・時期によるものか、にわかに判定できない。カマドの焚き口天井石や袖石の遺存は不良である。竪穴内部に焼けた状態の数十cm大の石がいくつか見られる。意図的な破壊かもしれないが、埋没過程で散乱した可能性も残る。

1・2溝は平安時代に遡る可能性があるが、3溝は近世以降の耕作痕である。

G区 1住居(第87・88・182・183図、PL.61・144)

検出位置 779-116付近で検出した。G区の北西隅に位置する。南側の2住居・3住居とは、10mほど離れている。重複関係 なし。

覆土 暗褐色～黄褐色系の上で、白色軽石・ロームブロックを含む。

壁 深さ56～79cmで深く、北西部がやや深い。北辺に沿って斜めの掘り込みがあり、この部分を含めると南北4.31mだが、除外すると3.97mとなる。これに対して、東西は4.28mを測り、斜めの掘り込み部を除外した場合は、東西に長い長方形となる。

床面 平坦で、全体に踏み固められている。地山ローム層が堅くしまっている状態に近い。

支柱穴 不明。床面・掘り方とも、検出したのはP1・P2のみである。P1:26×24・深さ15cm、P2:16×15・深さ33cm。

壁溝 北東隅～北辺東半、西辺南半～南辺西辺で検出した。幅22～38cm(底面幅4～7cm)、深さ1～6cmである。南東部を除き、全周していた可能性が高い。

カマド 東辺中央やや南に設置する。燃焼部の2/3は住居壁ラインの内側にあり、カマドを構築する粘土が焼土化して遺存していた。また、袖石・焚き口天井部の石らしき構築材料が、カマド前から焼けた状態で出土している。

貯蔵穴 略円形の南東部の掘り込み。81×72・深さ57cmで、しっかりしている。

掘り方 西半部の底面は小ビット状の細かい凹凸があり、カマド前付近は、堅くしまっている状態であった。その他 北辺沿いの斜めの掘り込みが、この住居でも確認された。幅30～40cmで、テラス状である。

遺物 カマド前から土師器裏破片・略完形の杯(G1)が、南東隅付近から土師器裏(G10)・杯(G2)・甕(G4)が出土している。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

G区 2住居(第89・183図、PL.62・144・145)

検出位置 765-125付近で検出した。G区の西端で、路線のほぼ中央部に位置する。東側の3住居との最短距離は3.5mほどである。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石・ロームブロックを含む。

壁 深さ41～66cmで深く、北西部がやや深い。東西4.25m、南北4.10mで東西にやや長い長方形である。

床面 平坦で、全体に踏み固められている。地山ローム層が堅くしまっている状態に近い。

支柱穴 北辺に沿ってP1・P2を検出したが、南辺沿いは検出されなかった。P1:52×53・深さ48cm、P2:35×32・深さ50cmで、いずれも深く掘り込まれている。P1～P2の芯々距離は1.78mである。

壁溝 東辺のカマド付近から南東隅を除いて、ほぼ全周する。幅21～30cm(底面幅2～8cm)、深さ5～9cmである。

カマド 東辺中央やや南に設置する。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり、カマドを構築する粘土が焼土化して遺存していた。また、袖石・焚き口天井部の石らしき構築材料が、カマド前から焼けた状態で出土している。

貯蔵穴 略円形の南東部の掘り込み。78×77・深さ56cmで、二段に掘り込まれ、しっかりしている。

掘り方 全体に細かい凹凸があり、西辺から南辺にかけてL字状に一段低くなる。掘方調査で南辺沿いの柱穴が2本発見された。南西側は径29×32cm、南東側は略三角形で径68×37cm。

その他 カマド焚き口天井部の大きめの石が、住居内側に落ち、焼けた面を上にして出土している。

遺物 カマド燃焼部から略完形の土師器裏(G28)、右袖付近から杯2個体、左袖付近から潰れた状態の甕(G26)、杯(G16)・鉢(G18)が出土した。南壁下の床面近くからも、裏破片が出土している。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

G区 3住居(第90・184図、PL.63・145)

検出位置 765-115付近で検出した。G区の西寄りで、路線のほぼ中央部に位置する。西側の2住居との最短距離は3.5mほど、東側の8住居との最短距離は11.5m、南側の5住居とは11m離れている。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石・ロームブロックを含む。中に黄褐色系の層がある。

壁 深さ36～67cmで深く、南西部がやや浅い。東西4.38m、南北4.58mで南北にやや長く、北辺4.27・東辺4.23・西辺4.14mであるのに対し、南辺のみ3.81mで台形を呈する。

床面 中央部のP1・P2・P3・カマドに囲まれた不整形の範囲が特に硬化していた。南辺中央部に接して

第4章 検出された遺構と遺物

1.57×1.07mの範囲が深さ7cm前後で浅く凹み、内側の西寄りさらには深く0.42×0.73m・深さ14cmで掘り込まれていた。その他の部分は平坦で、全体に踏み固められている。地山ローム層が堅くしまっている状態に近い。P1とP2の間、P3からカマドにかけて、焼土の分布が認められた。棒状の炭化物が住居西西部の床面近くから出土している。炭化物は屋根材の可能性もある。

主柱穴 P1・P2・P3を床面で検出した。P1:32×30・深さ61cm、P2:30×31・深さ56cm、P3:33×32・深さ55cm。それぞれの柱穴を結ぶ芯々距離は、P1～P2:1.93m、P2～P3:2.05mである。南東隅の主柱穴P4は掘り方で確認し、36×42cm・深さ記録なしであった。また、柱穴底部の芯々距離は、P1～P4:2.14m、P4～P3:1.89mである。

壁溝 なし。

カマド 東辺中央やや南に設置する。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり、カマド袖部の遺存は良好である。焼土は燃焼部の西寄りで検出されている。

貯蔵穴 略円形の南東部の掘り込みで、50×51・深さ81cmである。内部から15cm大の石が出土している。

掘り方 全体に細かい凹凸があり、壁際付近の凹凸が著しい。中央部は比較的平坦である。

その他 南辺中央部の壁際で検出された浅い掘り込みは、出入口施設の一部であった可能性がある。

遺物 カマド焼き口付近の床面から櫃(G31)、貯蔵穴上面から裏口縁部(G33)、カマド右脇の床面から杯(G29)が出土している。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

G区 4住居(第91図、PL.64)

検出位置 750-130付近で検出した。G区の南西端に位置する。北側の2住居との最短距離は9.5mほど、東側の5住居との最短距離は6mである。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石・ローム粒子を含む。中位に黒褐色系の層がある。

壁 深さ42～55cmで概ね50cm前後、南辺がやや浅い。東西3.23m、南北3.90mで南北に長く、北辺2.75・南辺2.74m、東辺3.31・西辺3.48mとほぼ長方形を呈する。

各隅は丸みをもつ。

床面 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

主柱穴 不明。床面・掘り方とも検出されなかった。

壁溝 カマド前を除き、全周する。幅19～29cm、深さ4～6cmで、底面幅は4～6cmである。

カマド 東辺中央やや南に設置する。燃焼部は住居壁ライン上にあり、平面形は細長い三角形を呈する。袖部は左側の方がより大きく遺存し、灰白色で固める。燃焼部両壁にも灰白色粘土を貼り付けている。左袖部の上位は焼土化している。

貯蔵穴 楕円形の南東部の掘り込みで、二段に掘り込まれ、66×77・深さ25cmである。

掘り方 全体に細かい凹凸があり、各隅近くが浅く略円形に掘り込まれている。北西隅付近は東西1.65×南北1.40m・深さ10cm前後の掘り込みである。

その他 床面はしっかりしているが、主柱穴が見当たらない。

遺物 小片のみ。持ち去られた可能性がある。

時代・時期 東側の5住居に規模が似ていること及びカマド構造などから、奈良時代の所産と推定する。

G区 5住居(第91・184・185図、PL.65・145)

検出位置 750-120付近で検出した。G区の西寄りに位置する。北側の3住居との最短距離は11mほど、西側の4住居との最短距離は6mである。東側の6住居との最短距離は10.5mで、5住居・6住居・7住居・8住居・3住居に囲まれた範囲には、遺構がない。

重複関係 なし。

覆土 大半は暗褐色系の土で埋没し、床直上10cmほどは黄褐色土が堆積する。

壁 深さ32～56cmで深く、北辺が深い。東西2.80、南北3.23mで南北に長く、南辺2.65・東辺2.83・西辺2.85mであるのに対し、北辺2.45mとやや短い。隅に丸みがあり、全体としては長方形を呈する。西辺中央部が外側にやや湾曲し、この部分のみ壁溝がない。

床面 中央部が堅くしめる。北辺の壁際東寄り壁溝内に10～25cm大の小穴があり、深さは3～10cmである。

主柱穴 不明。

壁溝 カマドの両脇、南西隅、西辺中央部を除き巡る。幅20～38cm、深さ1～6cmである。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半ばかかり、カマド袖部の遺存は不良である。燃焼部は浅い皿状を呈する。カマド内・付近からの土器片出土は少ない。

貯蔵穴 略円形の南東部の掘り込みで、55×55・深さ11cmである。

掘り方 全体に著しい凹凸がある。

その他 西辺中央部の壁溝が途切れていることと、西側に凸に湾曲していることから、西辺に出入口が推定される。

遺物 北辺沿いの東寄りて倒立状態の長甕(G46)・小型甕(G42)・杯3個(G38・39・41)が出土し、西寄りでは床面からやや浮いた状態で杯(G40)が出土している。また、カマド右脇の貯蔵穴上位から倒立状態の甕(G44)が出土している。倒立状態の出土が多いことと、カマドの遺存不良及び土器片が少ないことと関連性があるか、類型調査が必要であろう。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、奈良時代の8世紀中頃の所産と推定する。

G区 6住居(第92・185図、PL.66・145)

検出位置 742-108付近で検出した。G区のほぼ中央部だが、南寄りに位置する。西側の5住居とは10.5m離れるが、北東側の7住居との最短距離は3.7mである。屋根の葺き降しは接してしまう可能性が高い。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系と黒褐色系の土で埋没し、床直上5～10cmは茶褐色土が堆積する。壁際では、茶褐色土が断面三角形の堆積を示す。

壁 深さ38～50cmで深く、北辺が深い。東西2.63m、南北3.23mで南北に長く、南辺2.35・北辺2.32m、東辺2.91・西辺2.81mである。隅に丸みがあり、全体としては長方形を呈する。

床面 中央部が堅くしまる。

支柱穴 不明。掘り方では北東隅・北西隅・南東部に不整形の掘り込みが認められるが、柱穴として十分な深さが無い。

壁溝 カマド前から南東隅を除き全周する。幅21～35cm、深さ2～6cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半ばかかり、カマド袖部に30cm大の石と粘土を用いて

構築されていたが、天井部はなかった。床面中央部の床上5cmの高さと、南辺中央部のやや浮いた状態で、カマド材料になっていたと見られる石片が出土している。

貯蔵穴 不整形形の南東部の掘り込みで、50×53・深さ25cmである。二段に掘り込まれていた。

掘り方 全体に著しい凹凸があり、かつカマド前と北東・北西・南西の各隅付近に不整形の掘り込みが認められた。

その他 カマドは意図的に破壊された可能性がある。

遺物 西辺中央部の壁際で、床上5cm程度の高さから、鉄製鋤先(G53)が出土している。また、南辺の石の下からも土器片が出土している。

時代・時期 出土遺物は古墳時代のものを含むが、その他の遺物を勘案すると、カマド構造などから、奈良時代の8世紀前半の所産と推定する。

G区 7住居(第93・185・186図、PL.67・146)

検出位置 745-102付近で検出した。G区のほぼ中央部の南寄りに位置する。北側の8住居とは5.5m離れるが、南西側の6住居との最短距離は3.7mである。

重複関係 なし。

覆土 最上位に浅間山As-Bを含む暗褐色土が堆積し、掘り込み内は暗褐色系の土で埋没する。床直上5～10cmは茶褐色土が堆積する。

壁 深さ53～71cmで深く、北寄りがとくに深い。東西3.72m、南北3.66mで東西がわずかに長く、南辺3.66・北辺3.65m、東辺3.58・西辺2.88mである。隅に丸みがあり、全体としては台形を呈する。

床面 貯蔵穴とP1の中央部に不整形の硬化した面が認められた。

支柱穴 不明。掘り方ではカマド左脇で深さ22cmの掘り込みと、南辺に接して深さ13cmの掘り込みが認められたが、柱穴不足である。

壁溝 北辺西半部の壁際に幅27～42cm、深さ1～3cmの溝が認められた。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半ばかかり、カマド焚き口に長さ57・幅20cmの細長い天井石が両袖石に架かった状態で出土した。天井石・左袖石は動いている可能性がある。焚き口と奥壁・煙道部に焼土が分布する。燃焼部から奥壁にかけて、土師器甕破片が重なって出土している。道具にされた(本来の器

第4章 検出された遺構と遺物

ではない)土器の可能性はある。

貯蔵穴 楕円形の南東部の掘り込みで、116×98・深さ24cmである。掘り込み範囲はカマド前に及び、火を焚くには不都合な大きさである。

掘り方 全体に著しい凹凸があり、北東隅・南西隅付近に不整形の掘り込みが認められた。

その他 東辺のカマド北側から北辺にかけて、住居壁の外側にテラス状の平坦面が認められたが、浅間山As-Bを多量に含む土で埋没しており、本住居とは別の遺構と考えられる。

遺物 カマド燃焼部から奥壁にかけて2個体分の裏破片(G 68・69)が上位で出土し、カマド左脇で底部を上にした裏(G 67・70)2個体、焚き口手前で横倒し状態の裏(G 59)1個体、南辺壁近くでも裏破片がそれぞれ出土している。杯は完形に近いものが焚き口左脇から2個体(G 54・55)、中央部のやや高い水準から小片が出土している。比較的遺物量が多い。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、奈良時代の8世紀前半の所産と推定する。

G区 8住居(第94・186図、PL.68・146)

検出位置 755-102付近で検出した。G区のほぼ中央部に位置する。南側の7住居とは5.5m離れ、西側の3住居とは11.5m離れている。本住居の東側にはピット群があり、東へ24m離れて1掘立柱建物がある。

重複関係 カマド煙道部東端が13土坑と接している状態だが、8住居→13土坑の順に新しい。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。中に黒褐色系の層がある。床面はロームと暗褐色土の混土で形成する。

壁 深さ63～77cmで深く、北寄りかとくに深い。東西4.75m、南北4.45mで東西がやや長く、南辺4.25・北辺3.90m、東辺3.95・西辺4.02mである。隅に丸みがあり、全体としては長方形を呈する。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦である。

支柱穴 不明。掘り方では貯蔵穴西側で深さ20cmの掘り込み、北西隅で深さ28cmの掘り込み、北辺で深さ36cmの掘り込みがあった。

壁溝 カマド付近を除き、全周する。幅30～50cm、深さ2～8cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ライン

に半ばかかり、奥壁が斜めに立ち上がる。

貯蔵穴 略円形の南東部の掘り込みで、84×74・深さ20cmである。

掘り方 全体に著しい凹凸があり、東辺北半部壁下の掘り込みはギザギザの形である。北西隅・南西隅に不整形の掘り込みが認められた。

遺物 住居内の壁際近くに土師器小片が散乱する。十数cmの細長い石が10個ほど出土している。貯蔵穴内からも小片が出土している。

時代・時期 出土遺物が少ないので判然としなが、カマド構造、土器小片などから、飛鳥時代～奈良時代の7世紀末～8世紀初めの所産と推定する。

G区 9住居(第95・187図、PL.69・146)

検出位置 733-102付近で検出した。G区のほぼ中央部南端に位置し、南半部は調査区外にある。北東部の6住居とは7.5m離れ、東側の10住居との最短距離は7.5mである。重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。上位を白色軽石を多量に含む黒色土が覆う。

壁 深さ35～37cmで一定である。東西3.37m、南北は中央部で2.86m遺存する。東辺はカマドを除外すると2.30mで、カマドを含めると3.21mとなる。北辺2.97m、西辺は調査区内で2.00mまで確認した。調査区内の住居プランで推定すると、南北に長い長方形になると考えられる。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦である。

支柱穴 不明。北東隅付近に径60cm前後・深さ17cmのP1があるが、柱穴になるか不明である。また、掘り方では北東部に深さ20cm前後の不整形ピット、西辺寄りでは径30cm、深さ63cmのピットがある。

壁溝 カマド左脇を除き、検出範囲内で全周する。幅25～33cm、深さ2～11cm、底面幅6～11cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半ばかかり、奥壁が斜めに立ち上がる。住居確認面の直下の深さで、カマド燃焼部の周りに土師器裏の破片が多数検出され、記録を取った後、破片を取上げると、口縁部を斜めにした状態の土師器裏が燃焼部奥で検出された。焚き口付近には須恵器輪が正立に近い状態で出土している。燃焼部の壁には割れた面を残す20～30cm大

の石を埋め込み、カマドの構築材としていた。

貯蔵穴 不明。P1の可能性もあるが、他の住居の例を勘案すると、南側の調査区外にあると推定される。

掘り方 全体に著しい凹凸があり、不整形の掘り込みが北寄りに集中する。

その他 カマドの遺存が比較的良好である。南西部で出土した40×25cm大の石は、カマド焚き口天井部の石であった可能性がある。

遺物 住居内に小振りの石(割れた状態)と土器片が散布する。カマド内の焚き口付近から須恵器甕(G83)が、燃焼部から口縁部を上にした土師器甕(G84)が出土している(架けた状態に近い)。燃焼部上位の周囲に甕破片が密集する。カマド外の土器片はやや浮いた状態である。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

G区 10住居(第95・187図、PL.70・146)

検出位置 730-090付近で検出した。G区のほぼ中央部南端付近に位置する。北東部の11住居とは3.5m離れ、西側の9住居との最短距離は7.5mである。標高144.60mの線にのり、G区内では最も低い位置にある。重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。床面直上に茶褐色土が5cm程度堆積する。

壁 深さ18~30cmで一定である。東西3.07m、南北3.82mで、南北に長い長方形を呈する。南東隅と南西隅は隅切りしたように二つの角をもち、北東隅・北西隅も丸みがある。南辺2.50・北辺2.65m、東辺3.61・西辺3.29mである。

床面 細かい凹凸と10cm前後の小穴はあるが、概ね平坦である。

支柱穴 不明。掘り方で検出したピットは、深さ5cmで浅い。

壁溝 なし。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインの外側にある。奥壁が斜めに立ち上がる。奥壁の手前に15cm大の石が出土しているが、支脚になるか、燃焼部の構築材なのか不明。

貯蔵穴 不明。

掘り方 全体に著しい凹凸があり、中央部東寄りに径60

×80cm前後の浅いピットがある。

その他 全体に遺存状態は不良である。

遺物 南辺の床面近くから土器片が4個まとまって出土し、南西隅付近からも土器小片(G88)が出土した。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀代の所産と推定する。

G区 11住居(第96・187図、PL.71・146)

検出位置 735-085付近で検出した。G区のほぼ中央部南寄りに位置する。南西部の10住居とは3.5m離れ、北側の12住居との最短距離は5.8m、東側の2掘立柱建物との最短距離は4.5mである。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。

壁 深さ34~60cmで、北寄りが深い。東西3.52m、南北5.11mで、南北に長い長方形を呈する。南辺3.11・北辺3.00m、東辺4.82・西辺4.70mである。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、中央部が硬化している。

支柱穴 不明。P1・P2は柱穴の可能性もある。P1:58×63・深さ57cm二段、P2:57×81・深さ37cm・南隣接ピット深さ26cmで、P1~P2の芯々距離は2.89mである。カマド前のピットは41×43、深さ6cmで、柱穴ではないと推定される。

壁溝 なし。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半部ほどかかり、奥壁が斜めに立ち上がる。カマド内からのまとまった遺物出土はない。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みで、57×75・深さ32cmである。中から土器小片と杯類が出土している。

掘り方 カマド前1mと東辺北寄りに、径1.2mほどの不整形掘り込みがある。いずれも50cm前後の深さがある。西辺北平治いには幅0.7×長さ2.1m・深さ20cmほどの幅広の掘り込みが認められた。中央部は平坦なままで、ローム上面が堅く締まった状態である。

遺物 カマド左脇の掘り込みから出土した土器(G97)は、ほぼ床面水準である。同じく、カマド左脇から出土した土師器甕破片や、中央部から出土した小片は、床面から10cmほど浮いている。カマド前から南東隅にかけて出土した杯などの小片は、床下土坑と貯蔵穴からの出土であ

る。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

G区 12住居(第97・188図、PL.72・147)

検出位置 745-082付近で検出した。G区のほぼ中央部に位置する。北東部の1掘立柱建物とは8.5m離れ、南側の11住居との最短距離は5.8m、南東側の2掘立柱建物との最短距離は4.5mである。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。

壁 深さ17～32cmで、北寄りが深い。東西2.71m、南北3.55mで、南北に長い長方形を呈する。南辺2.44・北辺2.37m、東辺3.56・西辺3.46mである。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、北半部が硬化している。

主柱穴 不明。床面中央部のピットは深さ5cmと浅い。P1は43×47・深さ29cmで主柱穴の可能性があるが単独であり、掘り方でも柱穴に想定できるピットが見当たらない。

壁溝 カマド前と北辺東寄りを除き、全周する。幅26～37cm、深さ2～6cm、底面幅6～13cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインよりも外側にあり、奥壁が斜めに立ち上がる。袖部の遺存は不良である。カマド内からのまとまった遺物出土はない。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みで、63×59・深さ25cmである。南東の壁際から杯類が出土している。

掘り方 全体に凹凸が著しく、南東部と北東部は不整形に深さ10～20cm程度掘り下げられていた。

その他 カマドの遺存は不良だが、比較的遺物が多い。

遺物 カマド前から中央部にかけて出土した土器は、10～20cmほど床面から浮いた状態であった。南東部の壁際や北辺壁際で出土した杯類はほぼ床面水準である。カマド左脇出土の土師器杯(G106)は赤味が強い。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

G区 13住居(第98・188図、PL.73・147)

検出位置 742-072付近で検出した。G区の東寄りに位

置する。南側の2掘立柱建物との最短距離は1mほどで、とくに近接している。西側の12住居とは6.1m離れ、東側の14住居とは4m離れている。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。床面直上には茶褐色土が5～10cm堆積する。

壁 深さ23～48cmで、北寄りが深い。東西3.36m、南北4.00mで、南北に長い長方形を呈する。南辺3.15・北辺3.11m、東辺3.85・西辺3.82mである。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、北半部が硬化している。

主柱穴 不明。掘り方調査でも柱穴に想定可能なピットは検出されなかった。

壁溝 カマド前を除き、全周する。幅20～38cm、深さ1～7cm、底面幅1～7cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。作り替えがあったとみられ、南側の方が新しい。燃焼部は住居壁ラインよりも外側にあり、南カマドでは奥壁が斜めに立ち上がる。袖部の遺存は不良であり、南カマドから土器片が出土している。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みで、59×75・深さ27cmの卵形を呈する。

掘り方 細かい凹凸はあるが、全体に平坦である。

その他 北カマドの材料とみられる大きめの石が遺存していた。

遺物 カマド前から中央部にかけて出土した土器は、5～10cmほど床面から浮いた状態であった。南辺中央の壁際の杯(G121)・北西隅の土器は床面出土である。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

G区 14住居(第99・188・189図、PL.74・147)

検出位置 740-063付近で検出した。G区の東寄りに位置する。東側の3掘立柱建物との最短距離は1.2mほどで、近接している。西側の13住居とは4m離れている。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。

壁 深さ30～60cmで、北寄りが深い。東西3.80m、南北4.99mで南北に長い。南辺3.66・北辺3.21m、東辺4.68・西辺4.76mと北辺よりも南辺の方が長く、全体と

して台形を呈する。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、中央部が硬化している。

支柱穴 不明。掘り方調査では、南辺中央部付近の壁から1m離れた位置で、65×50・深さ20cmのピットが検出されたが、その他掘り込みは10cmたらずで、柱穴に想定可能なピットは検出されなかった。

壁溝 カマド前～南東隅を除き、全周する。幅27～49cm、深さ5～12cm、底面幅4～15cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインよりも外側にあり、奥壁近くに石が据えられ、奥壁にも石が埋め込まれていた。煙道部に焼土が分布する。袖部の遺存は不良であった。

貯蔵穴 南東隅の不整形掘り込みで、58×53・深さ20cmである。

掘り方 底面の凹凸が著しい。北西部・南西隅はやや深く掘り込まれる。

その他 カマド燃焼部の奥に据えられた扁平な石は、支脚の可能性がある。

遺物 カマド前から南辺にかけて土器片の出土が多い。カマド右脇から土師器杯(G125・128)が2点、南辺沿いの壁際で須恵器杯(G135～137)が3点出土し、西辺沿いの壁際から鉄滓が出土した。中央部北西寄りの床面から25cm大の大きめの石が出土した。作業台の可能性もある。時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、奈良時代の8世紀中頃の所産と推定する。

G区 15住居(第100・189図、PL.75・147)

検出位置 737-047付近で検出した。G区の東端に位置する。西側の3掘立柱建物との最短距離は6mほどである。標高144.80mと145.00mとの間にあり、G区のなかでは10住居に次いで低い位置にある。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。

壁 深さ28～51cmで、北寄りが深い。東西2.51m、南北3.28mで南北に長く、北東隅付近が攪乱により破壊されている。南辺2.30・北辺1.12m以上(推定2.39)、東辺3.01以上(推定3.25)・西辺3.10mである。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、北半部は硬化している。

支柱穴 不明。掘り方調査では、住居中央部に浅い不整形の掘り込みを検出したのみで、柱穴に想定可能なピットは見当たらなかった。

壁溝 北東隅を攪乱で破壊されているが、カマド前～南東隅を除き、全周するとみられる。幅19～33cm、深さ2～9cm、底面幅4～14cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半分程度かかる。燃焼部の左壁近くに扁平な石が斜めに立ち、右袖部相当の位置でも扁平な石が斜めに立っていた。カマド左脇の床面からカマド構築材とみられる20cm大の石が出土し、カマド前50cmの位置からは、床面からやや浮いた状態で25cm大の石が出土した。作業台の可能性もある。袖部の遺存は不良であった。

貯蔵穴 南東隅の略楕円形の掘り込みで、住居と壁を共有する。80×56・深さ9cmである。

掘り方 底面の凹凸が著しい。南辺沿い～西辺沿いではやや深く掘り込まれる。

その他 掘り方調査では、西辺の北半部が外側から不整形に掘り込まれ、攪乱とみられる。

遺物 全体に散布するが、カマド前から南辺にかけて土器片の出土がやや多い。南辺西寄りの壁際から土師器杯(G140)が出土している。北東寄りの床面から浮いた状態で、鉄滓が3個出土した。カマド前の20cm大の石は、カマド材料または台石とみられる。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

G区1面 1掘立柱建物(第101図、PL.76)

検出位置 755-073付近で確認した。G区の中央部北端に位置する。北東部は調査区外にあるため、全体の規模は不明だが、南北2間分・東西2間分を確認している。西側の8住居との間にピット群があり、南西部の12住居との最短距離は8.7mである。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P5で2間×2間分が調査区内にある。柱間は206～213cmで揃っている。

深さは40cm前後で、P4のみ28cmである。P1・P2・P3・P5は二段に掘り込まれている。

その他 全体の規模が不明だが、2掘立・3掘立と方位

に近い。

遺物 遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係から、平安時代と推定する。

G区1面 2掘立柱建物(第102図、PL.76)

検出位置 735-075付近で確認した。G区の東寄りに位置する。11・12・13・14住居に囲まれている。西側2mに2土坑、南側1.5mに3土坑がある。北東側3mには、やや大きめの5土坑がある。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P8で、2間×2間となる。中央部には柱穴がない。柱間は237～266cmである。P2～P6が500cm、P8～P4が530cmで、南北棟とみられる。深さは40cm前後が多く、P1：28cm、P2：24cmである。P4・P6・P7・P8は二段に掘り込まれている。

その他 13住居との最短距離は1mほどであるが、長軸方位が近い。

遺物 遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係から、平安時代と推定する。

G区1面 3掘立柱建物(第103図、PL.77)

検出位置 740-057付近で確認した。G区の東寄りに位置し、14住居と15住居との間にある。14住居との最短距離は1.4mほどである。

重複関係 1溝・2溝と重複し、溝の方が新しい。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P11で、2間×3間となる。北辺のP9・10・11がP7・8・1と平行し、P9はP5・6・7列の延長線からずれる。P8は他のピットに比較して小振りであり、P10が本来の柱穴と考えられる。柱間は204～233cmである。深さはP8を除き、40cm以上を測る。二段に掘り込まれるものが多い。

その他 北辺のP9・10・11を除くと、2掘立柱の規模に近い。

遺物 遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係から、平安時代と推定する。

G区1溝(第104図、PL.77)

検出位置 742～750-049～061にあり、ほぼ直角に曲る東西に延びる溝と、南北に延びる溝の両者である。曲がり角から東西走行の部分は3掘立柱建物と重複する。曲がり角付近から南へ延びる溝は2溝である。

重複関係 3掘立柱建物の北辺部ピットと重なり、3掘立柱建物→1溝の順に新しい。1溝と2溝との前後関係は判定できなかった。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 平安時代の土師器7点、須恵器4点が出土した。

時代・時期 埋没土、出土遺物・重複関係から、平安時代の所産と推定するが、時期を限定できない。

G区2溝(第104図、PL.77)

検出位置 733～745-059～061にあり、南北走行の溝である。1溝の曲がり角につながるように検出され、G区南端では検出できなかった。

重複関係 1溝と接する位置にあるが、両者の前後関係は判定できなかった。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 平安時代の土師器5点、須恵器1点が出土したが、小片のため割愛した。

時代・時期 埋没土、出土遺物から、平安時代の所産と推定するが、時期を限定できない。

G区3溝(第105図)

検出位置 744～766-090～127にあり、G区の西半部のなかで断続的に検出した。断面形状や幅、埋没土が同様であったことから、すべて3溝とした。

重複関係 他の遺構との重複はない。

覆土 新しい埋没土で、柔らかい。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 不明。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 なし。

時代・時期 規模、埋没土の状況等から、近世以降の耕作痕と推定する。

G区 土坑(第104・106・107図、PL.78・79)

検出位置 概ねG区中央部に分布する。1土坑は9・7・8・10・11・12住居に囲まれた緩やかな斜面上に単独で検出され、2m大の規模である。これに似た形状は5土坑が示す。6・7・8・10・13土坑は8住居の東側～ピット群の南西部に分布する。

重複関係 8住居→13土坑の順に新しい。1溝と14土坑との重複関係は判定できなかった。

覆土 暗褐色系の上で、白色軽石を含む。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 1土坑・5土坑が2m大の規模で、その他は1m前後または1m以下の規模である。

第9節 H区

H区の概要 (第108図、PL.80・110・111)

H区は市道を挟んでG区の西側に位置し、南西部に向かって低くなる地形である。上武道路の路線からみると、概ね南に向かって低くなる。調査区域の北側やや西寄りをもっとも高くして標高147.70m付近、南東端をもっとも低くて146.20mほどである。G区と同じく、北側にコンクリート擁壁が築かれ、南側は畠と宅地である。

南東端を調査区への出入口としたが、調査工程の都合で調査区東辺と北辺を西側I区への進入路としたため、進入路下の遺構調査を後回しとした。また、南西部の墓地跡は、年度末近くになって用地が明渡しとなり、14住居西半部の調査は次年度送りとなった。

竪穴住居は15軒が検出され、5号は欠番である。1・4・10・11・12・15・16住居は比較的規模が大きく、古墳時代の所産とみられる。8住居は遺物の遺存が良好で、完形に近い遺物が多い。ほかの住居と異なり、南東隅にカマドを設置する。11住居は北辺にカマドを設置し、カマド袖部・天井部に石を組み合わせて粘土で固めるという

遺物 1土坑から土師器2点・須恵器2点、13土坑から土師器6点が出土した。その他の土坑からの遺物出土はない。

時代・時期 埋没土、出土遺物・重複関係から、1土坑は平安時代の所産と推定するが、時期を限定できない。13土坑の土器片は、8住居のものが流れ込んだ可能性がある。

G区 ビット(第106・107図、PL.79)

G区のビットは中央部北寄りに集中して検出された。掘立柱建物としての組合せはできないが、比較的狭い範囲に集中していることから、この付近になんらかの施設があったと推定される。3・4・5ビットは直線的に並ぶ。各ビットの概要は、計測値表に示した。なお、15ビットは3掘立柱建物の北東隅になり、土師器片3点が出土した。

特異な構造をもつ。

H区西寄りに墓地跡の区域がある。改葬後に調査着手したところ、12基の土坑から人骨が出土した。副葬品等から、江戸時代の墓と推定される。墓坑とみられる60土坑を切って、1掘立柱建物があり、墓地への進入路が南西に延びていた。1掘立柱建物が2間×2間の総柱建物であることと併せると、1掘立柱建物は墓地内に建てられた堂宇と推定される。

調査区内から縄文土器の破片が表土掘削の時点で出土していることから、下層の縄文時代遺構の存否を確認するため、確認トレンチ1～4を設定して掘り下げたところ、縄文時代の土坑を検出した。1トレンチでは27土坑、3トレンチで32・33・34・36・42土坑、4トレンチで41土坑が縄文時代の所産とみられる。このほか縄文土器を出土した土坑は16・18・21・23・24・43・45・54・55・62・73土坑があり、このうち54・55・62・73は墓地内なので、後世の流入と考えられる。

H区 1住居(第108・109・189図、PL.81・147)

検出位置 760-155付近で検出した。H区の東南端付近に位置する。東側の15住居との最短距離は3.4mである。北東から北西に向かって緩やかに傾斜する地形の最も低い場所にあり、標高146.40mの等高線よりも低い。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ22～67cmで、北寄りが深い。東辺北半部は攪乱により破壊されている。南北4.64m、東西4.44mで竪穴は南北がやや長い。南西隅は調査区外にある。南辺1.47(推定4.4)・北辺4.32m、東辺4.30・西辺1.01m(推定4.5m)である。主柱穴の柱間寸法から、東西棟と考えられる。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、中央部のローム層が硬く踏み固められていた。

主柱穴 P1・P2・P3が主柱穴とみられ、いずれも二段に掘り込まれている。南西主柱穴は調査区外に想定される。P1:38×46・深さ48cm、P2:49×54・深さ74cm、P3:33×35・深さ76cmである。柱間は芯々距離でP1～P2:1.80m、P2～P3:2.09mである。

壁溝 カマド部分を除き、調査区内では全周する。幅21～47cm、深さ3～10cm、底面幅4～33cmである。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインの内側にある。袖部の粘土と左右の焚き口袖石が遺存していた。袖石の間の底面は強く焼けて硬化していた。袖石の手前には浅い20cm大の掘り込みが認められた。燃焼部中央やや左寄りに方柱状の焼けた石が立てた状態で出土し、カマド支脚と考えられる。カマド前と右袖部外の壁際に焼けた20cm大の石が出土し、カマド構築材の一部と推定される。

貯蔵穴 南東隅の略方形の掘り込みで、二段に掘り込まれている。91×94・深さ87cmである。一段目は床面から数cm下に相当し、二段目は底面まで下がる。蓋状の施設が想定される。中から土師器杯(H1)の完形に近いもの、土師器甕(H6)破片が出土した。

掘り方 カマド前で60cm大の浅い掘り込みが検出されたほか、小振りのピットが検出された。P8:20×20・深さ14cm。

その他 北辺沿いの床面でP5・P6・P7が検出された。出入口施設の可能性がある。P5:27×31・深さ6cm、

P6:18×19・深さ3cm、P7:28×22・深さ13cm。

遺物 カマド付近と北西部の床面から土器小片が出土した。南東隅の貯蔵穴内からは完形に近い土師器杯(H1)、甕(H6)破片が出土した。カマド付近の床面近くから出土した20cm前後の石は、カマドの構築材とみられる。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

H区 2住居(第110・189～191図、PL.82・147)

検出位置 780-140付近で検出した。H区の北東端付近に位置する。調査区進入路造成の都合で、二回に分けて調査を実施した住居である。西側の3住居とは4.8m離れている。

重複関係 1溝と重複し、2住居→1溝の順に新しい。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ18～45cmで、北寄りが深い。二回に分けて調査したためか、南辺の東半部の角度が不正確である。また、北西隅が攪乱で破壊されているため、南辺・西辺の長さが推定値となる。南北4.21m、東西3.22mで南北に長い長方形である。長軸の方が座標北、カマドの対象軸がこれと直交する東西方向の90度となった。北辺3.10・南辺2.88m(推定3.1m)、東辺3.77・西辺3.66m(推定4.0m)である。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、中央部のローム層が硬く踏み固められていた。

主柱穴 不明。P2は柱穴の可能性がある。P1:南北40cm・深さ11cm、P2:39×42・深さ22cm、西辺中央壁際の小ピット:15×20・深さ17cm。掘り方調査で、カマド左脇に38×51・深さ13cmの掘り込みが検出されているが、柱穴かどうか不明である。

壁溝 北辺と西辺北半部にあり、その他の範囲は床面で検出していない。幅24～46cm、深さ2～5cm、底面幅2～8cmである。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半分かかる。壁ラインにかかる位置の左右の壁に、40cm大の扁平な石が立てた状態で据えられていた。左袖部の石は内側へ傾いた状態で遺存していたが、右袖部の石は抜かれた状態であった。奥壁のやや上位に、トンネル状の煙道が一部遺存し、上面よりも外側へ10cmほどが延びていた。その外側は攪乱により破壊されたとき

られる。燃焼部は赤く焼けて硬化していた。掘り方調査では、燃焼部周囲に不整形の掘り込みが6個検出されている。石を据えた掘り方とみられるが、石が遺存していない掘り込みもあり、確証がない。

貯蔵穴 南東隅のP3の掘り込みで、内部にもピット状の掘り込みがあり、不整形である。全体としてP2を除外した範囲を貯蔵穴とすれば、121×95・深さ35cmで、東端は住居の壁の外へ向かって掘り込まれている。中から須恵器杯や土師器破片が出土した。

掘り方 カマド前～中央部にかけて不整形の150cm大・深さ24cmの掘り込みが検出された。東辺北半部の壁際では、床面でみられなかった壁溝が認められた。深さ5cm前後である。西辺中央部から南へ向かって溝状の遺構が認められたが、長さ約70cmを検出したのみで、南寄りの範囲は攪乱により破壊されていた。

遺物 カマド左袖前と南東部の貯蔵穴付近から土器片が出土した。貯蔵穴内からは須恵器杯(H13)が出土した。北西隅の床から浮いた状態で、25cm大の扁平な石が出土した。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

H区 3住居(第111・191図、PL.83・147)

検出位置 783-148付近で検出した。H区の北東端付近に位置する。東側の2住居とは4.8m離れ、南西側の4住居との最短距離は3.8mである。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ35～46cmで、東辺側がやや深い。南辺が直線的ではなく、東寄りですぐ外へ三角形に突出している。南辺1.65・北辺1.85m、西辺2.64・東辺2.59mで、やや歪んだ長方形を呈する。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、南に向かってやや低くなる。カマド前の床面中央部に、50～60cmの不整形の範囲で焼土が分布していた。

支柱穴 P2は柱穴の可能性があり、P2.27×40・深さ27cmである。P1は浅く、25×33・深さ16cmである。掘り方調査では、これらに対応するピットが検出されていない。

壁溝 北東隅から北西隅、西辺中央部、南辺の西半部の

壁直下に、それぞれ巡る。北東隅はやや幅広く、南東部の三角形突出部付近では内側の溝立上がりが消滅する。掘り方調査では壁溝を検出していない。幅20～44cm、深さ3～16cm、底面幅2～18cmである。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半分かかる。燃焼部の奥側に煙出しの孔が遺存しており、燃焼部と煙出しをつなぐ天井部が残っていた。天井部は灰黄褐色系の粘土で築かれていた。左右袖部の基部も、同様の粘土で形成されていた。燃焼部は赤く焼けている。煙出しの孔の周囲は、赤く焼けて焼土が分布する。

貯蔵穴 不明。本遺跡では通常カマド右脇に存在するが、3住居ではその位置に掘り込みが認められない。P1であった可能性がある。

掘り方 全体に著しい凹凸がある。北東隅、北西隅に深い掘り込みがあったほか、住居中央部にP3.40×50・深さ17cmの掘り込みが認められた。北西隅のP1は不整形で、60×73・深さ5～23cmである。

その他 本住居はH区内では最も小規模であるが、遺物も比較的多く、カマドの遺存が良好であった。特別な用途があったか、1～2人の住まいが想定される。また、南辺の三角形に突出する部分は、出入口施設の可能性がある。

遺物 カマド右袖部からは土師器杯(H26・27)、南西隅付近から土師器甕(H30)・杯(H25)土器片と須恵器蓋(H28)が出土し、東辺北寄りの床面から砥石(H31)と筒編み石のような小振りの石が出土した。北西部壁際出土の土師器甕(H29)は、床面から浮いた状態であるが、竪穴外側かつ屋根の内側にあったとみれば、住居に所属すると考えられる。

時代・時期 古墳時代の遺物もあるが、他の遺物やカマド構造などから、飛鳥時代～奈良時代の7世紀末～8世紀前半の所産と推定する。

H区 4住居(第112・113図、PL.84)

検出位置 777-154付近で検出した。H区の中央東寄りに位置する。北東側の3住居とは3.8m離れ、北西側の7住居との最短距離は0.7mである。

重複関係 なし。北東隅から東辺にかけて攪乱により破壊されている。

第4章 検出された遺構と遺物

覆土 黒褐色系の上で埋没する。床面直上に締まりのないにぶい黄褐色土が堆積する。

壁 深さ39～51cmで、北辺側がやや深い。北東隅付近は掘乱により破壊されている。東辺が西辺に比較してやや短く、北辺は南辺よりも短い。南辺3.68・北辺3.46m、西辺4.03・東辺3.80mで、台形を呈する。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、南に向かってやや低くなる。貯蔵穴の北側・西側が数cmほど帯状に盛り上がる。カマド袖部の手前に径20cmほどの不整形の範囲に焼土が分布し、床面中央部のP3にも焼土が分布していた。

支柱穴 不明。P3は49×44・深さ8cmで、柱穴と想定するには浅い。南辺中央部寄りの掘り込みは、95×68・深さ4cmで、こちらも柱穴とは想定しにくい。

壁溝 北東隅から南辺西寄りまでつながるが、南西隅はP2があり、途切れる。幅17～32cm、深さ1～5cmである。掘り方では、カマド両脇の北側へ長さ50cmほど、南側へ80cmほど検出した。

カマド 東辺中央部に設置する。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり、煙出しの孔が壁ラインにかかる。左袖部よりも右袖部の遺存が良好で、燃焼部奥の天井部が遺存し、燃焼部の両袖部内側と天井部下側が良く焼けていた。煙出しは径30cmほどの不整形を呈し、孔の底面は燃焼部奥壁につながり、良く焼けていた。燃焼部中央やや左寄りに、長さ16cm・一辺6cm前後の角柱状の石を据えて、支脚としていた。石は良く焼けていて、使込まれたものとみられる。燃焼部の底面幅35cm、奥行き90cmで、奥壁付近はやや細くなる。煙出しと支脚の位置、燃焼部の形状を勘案すると、カマドは住居壁に対して直角にならず、対象軸は壁に対して約20度傾いている。焚き口付近の底面には焼土が分布していた。カマドを構築する粘土は、地山のロームを利用している。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みP1とみられる。中央部床面に比較して数cmの高まりが、掘り込みを略方形に囲む。深さは89cmあり、上面径60cm前後に比較して深い。遺物は出土しなかった。南西隅に底面楕円形の掘り込みP2があり、住居壁を横伏状に掘り込み、全体として不整形を呈する。110×142・床面からの深さ46cmで、こちらも貯蔵穴の可能性がある。

掘り方 細かい凹凸はあるが、全体に平坦である。南辺

中央部壁際の掘り込みは浅い。住居壁の外側に不整形の土坑状掘り込みがあり、掘乱または出入口施設の可能性がある。

その他 南辺中央部屋内の土坑状掘り込みは、南辺外の不整形掘り込みの一部であった可能性も残る。南西隅の横伏状不整形の掘り込みP2は、貯蔵穴の項で若干記述したが、ほかの住居でも似た状態の掘り込みがあり、この住居固有の遺構ではない。「室」のような機能であったか。北東隅から北西隅にかけて、壁溝のなかに径15cm前後の不整形の小穴が5個認められた。深さ2～10cmである。住居内壁に関連する施設の一部とみられるが、不明遺構である。

遺物 カマド前から中央部にかけて、床面からやや浮いた状態で土器片が少量出土した。南東隅の貯蔵穴南寄りの壁際から15cm大の石が出土した。カマドの遺存は良好だが、遺物量が少ない。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀代の所産と推定する。

H区 6住居(第114図、PL.85)

検出位置 791-153付近で検出した。H区の中央北寄りに位置する。西側の9住居との最短距離は2.2mである。北東隅から住居中央部にかけて掘乱が入り、深く破壊されている。調査区北辺沿いの幅3m×長さ22.5mの範囲は、現代のゴミ穴が深く届いており、調査から除外した。重複関係 6住居の南辺は1溝と接するような状態であるが、1溝の上へは6住居の掘り込みを破壊しており、6住居→1溝の順に新しい。

覆土 黒褐色系の上で埋没する。

壁 深さ11～20cmで、東辺側がやや深い。北東隅付近は掘乱により破壊されている。全体の形状は不明だが、遺存分から推定すると東辺がやや長く、南辺が短い台形とみられる。南辺1.97・北辺0.45m(推定2.4m)、西辺2.93・東辺2.06m(推定3.3m)である。

床面 細かい凹凸があり、北西部の床面は比較的平坦であるが、カマドから南東隅にかけては、凹凸が多い。中央部が破壊されているので、全体状況の復元は困難である。

支柱穴 不明。P1は位置を勘案すると貯蔵穴とみられる。北西隅付近の掘り込みは、断面が三角形を呈し、深

さ15cm程度で、柱穴らしくない。北西部ピット:29×34・深さ15cm。南東部の不整形掘り込み:76×84・深さ7cm。壁溝 北西隅から西辺につながるが、南西隅にはない。幅17～25cm、深さ4～9cm、底面幅3～7cmである。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。左右の袖石が住居壁ラインにかかり、燃焼部の大半は壁ラインの外側にある。燃焼部壁・袖石とも良く焼けており、奥壁は二段に作られていた。遺物は土師器小片のみである。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みP1とみられる。29×30・深さ29cmで、やや小振りである。遺物は出土しなかった。掘り方 底面の凹凸が著しい。掘り方では南東部の不整形掘り込み中から、やや深いピットが検出された。P2:44×34・深さ189cm、P3:28×37・深さ33cmである。カマド燃焼部は深さ14cmほどの不整形の掘り込みとなった。

遺物 北西部の床面から土器小片が出土したほか、南西部の浅い掘り込みの底面から浮いた状態で土器片が出土した。遺物はごく少なく、掲載できるものがない。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の所産と推定する。

H区 7住居(第115・191図、PL.86・147)

検出位置 780-157付近で検出した。H区の中央やや東寄りに位置する。東側の4住居との最短距離は0.7m、北側の8住居との最短距離は3.5mである。北東隅から住居中央部にかけて現代ゴミ穴の攪乱が入り、深く破壊されている。

重複関係 なし。

覆土 白色軽石を含む褐色系の土で埋没する。重機による破壊が深いため、もとの埋没土が移動している可能性がある。

壁 深さ21～32cmで、概ね一定である。北東隅から中央部にかけて攪乱により破壊されている。全体の形状は不確定だが、遺存分から推定すると東辺がやや長く、南辺が短い台形と考えられる。南辺2.49・北辺0.65m(推定2.3m)、西辺3.11・東辺3.09m(推定3.7m)である。

床面 遺存範囲が狭いので不確定だが、カマド前から南東部にかけて貼床されており、おそらく全体も同様だったと推定される。

主柱穴 不明。P2は南北47・深さ9cmで、浅い。P1

は位置を勘案すると貯蔵穴と推定される。

壁溝 東辺のカマドよりも北側に検出された。幅38～46cm、深さ7～8cm、底面幅3～7cmである。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。燃焼部中央の左右が遺存し、それと対の位置で略楕円形の小ピット(28×17・深さ16cm)を検出した。左右は焼けており、元の位置にあるとみられる。粘土で築かれた左右の袖部の基部が遺存し、貼床の床面との間に炭化物・焼土粒子を含む黒褐色土が存在し、その上に明黄褐色の袖部構築粘土を載せていることが判明した。この土層の観察から、カマドは作り替えられていると考えられる。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みP1とみられる。44×56・深さ20cmで、東に凸の略三角形を呈する。

掘り方 遺存していた範囲で底面の凹凸が著しい。とくに南辺寄りには顕著である。

遺物 北西部の床上20cmほどから土師器片が出土したほか、カマド左脇から砥石(H33)が出土した。カマド内とその付近からの出土遺物は少なく、土器小片のみである。中央部が大きく深く破壊されていることを除外しても、もともと遺物は少なかったと推定される。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀後半の所産と推定する。

H区 8住居(第116・191・192図、PL.87・88・148)

検出位置 786-160付近で検出した。H区の中央やや北寄りに位置する。北側の9住居との最短距離は0.8m、西側の10住居との最短距離は0.3mである。隣接する住居との同時期存在は、連結される場合を除き、困難であろう。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ19～33cmで、北東辺がやや深い。各辺とも長さが異なり、全体として台形である。南東辺2.27・北西辺2.59m、南西辺2.92・北東辺3.38mである。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、中央部がやや凹む。床面は硬く踏み固められており、中央部は赤く焼けている。棒状の炭化物が北隅付近で出土したと併せ、焼失家屋の可能性はあるが、遺物は顕著な焼けた痕跡が見られない。

主柱穴 不明。P1:29×23・深さ21cmで、柱穴の可能

性があるが、ほかに組み合わせのピットがない。掘り方では北寄りでは3個のピットが並んで検出されたが、いずれも深さ4～7cmで、柱穴の想定がしにくい。

壁溝 南隅とカマドを設置する東隅を除き全周する。幅12～27cm、深さ1～9cm、底面幅2～5cmである。

カマド 本住居はほかの住居と異なり、東隅に設置する。対象軸は辺に直角または平行ではなく、東隅と西隅を結ぶ対角線方位に近い。左右の袖石が遺存し、左袖石は板状を呈し立てた状態で、右袖石は外側へ倒れた状態で、それぞれ出土した。両石とも内側が良く焼けていた。燃焼部はすべて住居壁の内側にあり、奥壁は住居隅の壁に一致する。燃焼部やや奥の右に、角柱状の石が据えられおり、支脚と考えられる。袖石よりも奥側は粘土で築かれていた。住居内西隅付近で、30cm大の焼けた細長い石が出土しており、焚き口天井部の石であったとみられる。西側の石は20cmほど浮いた状態であったが、東側の石は床面水準出土である。

貯蔵穴 床面では確認できなかった。掘り方調査で、南隅付近に78×63・深さ33cmの略楕円形の掘り込みP2を検出しており、貯蔵穴の可能性が高い。

掘り方 カマドの袖石と粘土を除去すると、80×130・深さ9cm前後の不整形掘り込みとなった。北隅付近に3個のピットが東西方向に並んで検出されたが、いずれも浅い。

その他 遺物の遺存が良好でありながら、カマド構築材の焼けた石が対角線方向の西隅から出土していることから、単純に使用停止—放置—廃棄された住居とは想定できない。遺物出土状況を勘案すると、北東辺に出入口が推定される。

遺物 出土遺物がとくに多い。カマド付近から南東辺にかけての遺物は床面出土が多く、北隅付近も同様である。中央やや北寄りの須恵器高杯(H37)は完形に近く床面から約5cm上、隣接の土師器甕(H42)も同じ程度である。西隅付近で出土した大きめの石のうち、南西部の二つは焼けており、カマド構築材であった可能性が高い。最大の35cm大の石は壁にかかる状態に近く、一部に平坦面をもっていることから、作業台に使われた可能性がある。主として北隅付近の床面からは棒状の炭化物が出土しており、屋根材であった可能性がある。カマド内と付近から土師器破片が出土しており、カマドに架けてあった土

師器甕が、カマド構築材の破片とみられる。左右の袖石は良く焼けており、左袖の石は立てた状態で出土しており、もとの位置に留まっていると考えられる。須恵器高杯(H37)はほぼ完形に近く、他の土師器とともに時期限定可能な一括土器と言えよう。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の5世紀後半の所産と推定する。

H区 9住居(第117・192図、PL.89・148)

検出位置 793—160付近で検出した。H区の中央北寄りに位置する。南側の8住居との最短距離は0.8m、東側の6住居との最短距離は2.2mである。

重複関係 1溝と重複し、9住居→1溝の順に新しい。

覆土 黒褐色系の上で埋没する。

壁 深さ27～42cmで、北辺がやや深い。各辺とも長さが異なり、全体として台形である。南辺3.21・北辺3.49m、西辺3.79・東辺3.18mである。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、床面は硬く踏み固められていた。北東隅から東辺にかけて掘削により破壊されていた。

主柱穴 P2及び北寄りの掘り込みのみ。P2:50×44・深さ28cm、北寄りの掘り込み:117×62・深さ31cmで、北寄りの掘り込みは柱抜き跡の可能性が高い。両者の芯々距離は1.85mである。

壁溝 北西隅～南辺中央部まで検出した。幅20～35cm、深さ2～4cm、底面幅4～11cmである。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。大半を掘削により失っており、燃焼部が壁ラインにかかると推定されるが、詳細は不明である。

貯蔵穴 南東隅の不整形掘り込みP1とみられる。42×37・深さ44cmである。

掘り方 中央部北寄りに略楕円形172×145・深さ28cmの掘り込み、これの南側に接して107×142・深さ20cmの掘り込み、西に接して137×100・深さ12cmの不整形掘り込みがある。南側の掘り込みの底面は凹凸が著しい。

遺物 カマド前から南辺にかけて、土器片が比較的多く出土した。カマド前で土師器甕の破片、南東隅付近で杯・甕破片が出土した。南辺中央部脇・南西部から出土した石は焼けており、カマド構築材の一部と考えられる。北東隅からカマド北半部は、現代ゴミ穴により破壊されて

いた。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

H区 10住居(第118・119・193図、PL.90・91・148・149)

検出位置 785—165付近で検出した。H区の中央北寄りに位置する。西側の11住居とは壁がほとんど接しており、東側の8住居との最短距離は0.3mである。

重複関係 なし。

覆土 上位は黒褐色系の土で、下位はにぶい黄褐色系の土で埋没する。

壁 深さ29～49cmで、北辺がやや深い。各辺とも長さが異なるが、全体として東西にやや長い長方形である。南辺3.98・北辺3.80m、西辺3.63・東辺3.27mである。東隅と南隅が丸味を帯びる。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、床面は硬く踏み固められていた。西辺に直交して床溝が検出された。

支柱穴 配置でみると、床面で検出したP3・P4・P5と、掘り方で検出したP6と考えられる。床面検出のP3とP5は浅く、柱穴らしくないが、掘り方では十分な深さがある。床面検出のP3:15×19・深さ4cm、P4:17×19・深さ29cm、P5:31×25・深さ14cm・二段掘り込みである。P3～P5:1.54m、P3～P4:1.84mで南北の柱間が長いことから、南北棟と推定される。掘り方検出のP3:39×45・深さ33cm・三段掘り込み、P4:36×35・深さ31cm、P5:28×36・深さ22cm、P6:29×26・深さ22cm、P3～P4:1.89m、P4～P6:1.53m、P6～P5:1.82m、P5～P3:1.61mである。そのほかの床面検出ピットの大きさ等は次の通り。P2:56×45・深さ21cm、P7:43×42・深さ12cm、P8:30×28・深さ7cm、P9:19×27・深さ15cm。

壁溝 カマド～貯蔵穴付近と南西隅を除き、全周する。幅15～27cm、深さ1～8cm、底面幅3～8cmである。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり、左右の焼けた袖石が遺存していた。焚き口天井部の石は、長さに比して薄い石で、二つに折れた状態で焚き口手前に遺存していた。また、燃焼部中央底面のやや右手に角柱状の石が据えられており、

支脚と考えられる。燃焼部の左右の壁は良く焼けており、奥壁は直に近い角度で立上り、壁外との落差は25cmである。カマド付近からは土師器裏破片がいくつか出土した。貯蔵穴 南東隅の略楕円形掘り込みP1とみられる。カマド右袖裾部から直線的に約1.4m西へ向かって床面よりも低くなる段差があり、直角に曲って1mで南辺の壁に至る。貯蔵穴を囲むように、深さ10～25cmの掘り込みが認められた。P1は二段に掘り込まれ、79×62・深さ51cmである。

掘り方 底面の凹凸が著しい。カマドの奥壁は住居壁よりも外へ向かって突出し、略三角形を呈する。

床溝 西辺の約1/3付近の南寄りの床面で検出した。幅9～13cm、深さ5～18cm、長さ95cm、底面幅は3～5cmである。P4との間は11cmを測る。この床溝と南辺に囲まれた範囲に、P7・P8・P9の浅いピットが分布する。

その他 南辺中央部の床面で検出されたP2は50cmほどの大きさで、壁に接するように掘り込まれている。出入口施設にかかわる掘り込みの可能性がある。住居の埋没土と床面から、滑石の小片が多く出土したが、製品とみられるものがほとんど見当たらない。滑石製品を作った工場の可能性が高い。

遺物 カマド前から南辺にかけて、土器片が比較的多く出土した。カマド前で土師器裏の破片、南辺中央部付近で小型裏破片が出土した。住居中央部の床面を中心として、滑石の小片が200カ所以上の集中心から出土し、そのうち7カ所は数mm程度のチップの集中する範囲で分布する。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の5世紀末～6世紀初めの所産と推定する。

H区 11住居(第120・121・194図、PL.92・93・149)

検出位置 783—169付近で検出した。H区の中央部に位置する。東側の10住居とは壁がほとんど接しており、北側の12住居との最短距離は3.8mである。

重複関係 南側の17土坑と重複しており、11住居→17土坑の順に新しい。56Pとの前後関係は確認できなかった。

覆土 最上位ににぶい黄褐色系の土がレンズ状に堆積

第4章 検出された遺構と遺物

し、その下位は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ30～45cmで、北側がやや深い。各辺とも長さが異なるが、全体として北東・南西がやや長い長方形である。全体の印象は正方形に近い。南西辺3.61・北西辺3.61m、北東辺3.50・南東辺3.90mである。西隅が丸味を帯びる。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、中央部床面は硬く踏み固められていた。

支柱穴 不明。P1・P2・P3の可能性があり、P2は貯蔵穴の可能性も残る。P1：39×53・深さ14cm、P2：58×72・深さ55cm、P3：36×40・深さ16cmである。掘り方調査では、これらの配置に適合する掘り込みは検出されなかった。

壁溝 カマド左脇と北西辺南部を除き、全周する。幅10～52cm、深さ2～9cm、底面幅2～9cmである。

カマド 本遺跡での通例とは異なり、北東辺中央のやや東寄りに設置する。全体の印象は北側に設置されているように見え、特殊な出土状態である。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり、左右壁に扁平に割れた石を5個並べている。右壁の一部は二段に積んでおり、左壁は一段で、それらのすき間には粘土を充填していた。奥に並べた石2個は、煙道側壁になるとみられ、焚き口側の石の外側は粘土で固めていた。焚き口の手前に焼けた面を上にして、長さ40cm大の石と20cm大の石が床面から出土した。焚き口天井部の石とみられる。燃焼部中央のやや奥に、細長い割り石が据えられ、支脚としていた。焚き口から煙出しまで、長さ約1.5mもあり、そのうち燃焼部の浅い掘り込みは0.9mほどである。住居内からはほかに大きな石が出土しており、それらは石組みの上部を覆ったものの可能性がある。焚き口天井部石の手前に甕(H124)、左袖部からやや離れて完形に近い甕(H122)、右袖前に甕口縁部、右袖付け根付近から有孔鉢(H121)が伏せた状態でそれぞれ出土した。

貯蔵穴 東隅付近の略楕円形掘り込みP2及び不整形のP4とみられ、両者の前後関係は判定できなかった。同時に利用されていた可能性もある。P4の底面近くから土器片が出土した。P2：58×72・深さ55cm、P4：73×71・深さ51cmである。

掘り方 底面の凹凸が著しい。カマドの煙出し部は燃焼部奥壁よりも一段浅くなって住居壁外に突出する。燃焼

部の両袖部のロームは、地山と区別できなかった。削り残しの可能性が高い。

南西辺に沿って、幅0.9m、長さ2.8mほどの浅い掘り込みを検出した。

その他 北向きカマドであること、カマド袖部に石組みを用いていること、貯蔵穴らしき掘り込みが2個あることなど、他の住居にはみられない特殊な要素がある。

遺物 カマド付近から南東辺にかけて、土器が多く出土した。カマド左脇床面から土師器甕(H122)の完形に近いもの、右袖部脇から有孔鉢(H121)が天地逆の状態、カマド前の床面から壺・甕、南西辺西寄りの床面から浮いた状態で手捏ね土器(H113)がそれぞれ出土した。西隅の鉢(H116)は床面から15cmほど浮いている。またP4の底面から10cmほど浮いた状態で、杯(H115)破片が出土した。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の5世紀後半の所産と推定する。

H区 12住居(第122・123・194・195図、Pl.94・95・149・150)

検出位置 792-170付近で検出した。H区の中央部のやや北寄りに位置する。南東側の10住居とは3.2m離れており、南側の11住居との最短距離は3.8mである。

重複関係 なし。北辺から中央部にかけて、攪乱により破壊されている。

覆土 黒褐色系の白色軽石を含む土で埋没する。中に堆積する黒褐色土中に、榛名山の噴火に伴うテフラHr-FAまたはFpとみられる5～10cm大のブロックが含まれる。

壁 深さ24～37cmで、北側がやや深い。各辺とも長さが異なるが、全体として東西に長い長方形である。南辺4.53・北辺4.44m、西辺3.68・東辺3.60mである。南東隅が丸味を帯びる。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、中央部床面は硬く踏み固められていた。

支柱穴 配置と深さで勘案するとP2・P4・P6とみられる。P2：36×35・深さ55cm、P4：63×51・深さ75cm、P6：53×58・深さ57cmで、いずれも二段に掘り込まれていた。柱穴間の距離は各々でP2～P4：1.94m、P4～P6：1.81mである。P1：47×48・深

さ35cm、P 7 : 42×47・深さ38cmで、これらも二段に掘り込まれていた。

壁溝 東辺のカマド右脇を除き、全周する。カマド右脇は幅のない底面を呈し、ここにも存在した可能性がある。幅16～28cm、深さ2～20cm、底面幅3～11cmである。カマド 東辺中央部に設置する。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり、左右の袖石は元の位置に遺存している可能性が高く、焼き口天井部の石は、カマド前床面から焼けた面を上にして出土した。カマド燃焼部から口縁部を焼き口に向けて倒れた状態の完形に近い裏が出土し、その底部の下位には伏せた状態の裏が出土した。カマドに据えられた裏が、焼き口側にゴロンと倒れたような状態である。伏せた状態の裏を除去すると、その内側から周囲の焼けた細長い石が、立てた状態のまま出土した。横倒しの裏と伏せた裏は、両者とも平底である。実験的に横倒し裏の底部を伏せ裏の底部に載せてみたところ、安定した状態になり、さらに焼き口天井石を袖石に載せてみたところ、写真のようになった。



12住カマド石復元

貯蔵穴 南東隅のP 3とみられる。東辺の壁との間に25cmほどの空間があり、ここに底部を置く状態で口縁部を欠く壺(H128)が出土した。体部は貯蔵穴の上空に位置する。中から鉢(H126)が出土した。P 3 : 74×75・深さ85cmで、二段に掘り込まれていた。

掘り方 底面の凹凸が著しい。カマド付近から中央部にかけて、幅1.2mほどの範囲が帯状に高くなっていった。

その他 西寄りの掘乱が深かったためか、4本目の柱穴は検出できなかった。

遺物 カマド内、南東隅、東辺北寄り付近から完形に近い土器が出土した。カマド左側床面の土器は土師器類

(H127)の完形に近いもの、南東隅では上半部を欠く壺(H128)のなかから土師器鉢(H126)が出土した。カマド燃焼部からは完形の裏(H130)が口縁部を焼き口に向け倒れた状態で出土し、その底部付近では、伏せた状態の裏(H131)が支脚となる石を蓋するような状態で(天地逆で)出土した。南西部の裏(H129)破片は床面から20cmほど浮いた状態である。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

H区 13住居(第124・195図、PL.96・150)

検出位置 780～185付近で検出した。H区の南西部に位置し、現代墓地の敷地に北西隅がかかっていた。周囲に住居がなく、もっとも近い11住居との最短距離は11.6mである。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の白色軽石を含む土で埋没する。

壁 深さ20～50cmで、北側が深い。各辺とも長さが異なるが、全体として東西がわずかに長い方形である。南辺2.80・北辺1.96m(推定2.7m)、西辺0.99(推定2.8)・東辺2.64mである。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、カマド前～中央部の床面は硬く踏み固められていた。

主柱穴 不明。北東隅のP 1は貯蔵穴の可能性はある。南辺寄りのP 2は小さく浅い。P 1 : 27×23・深さ7cm、P 2 : 21×12・深さ3cmである。掘り方では中央部に24×33・深さ24cmのビットを検出したが、柱穴かどうか不明。

壁溝 北東隅と南辺中央やや東寄りで検出した。幅19～34cm、深さ4～8cm、底面幅3～7cmである。北辺沿いに壁溝が推定されたが、明確な掘り込みにはならなかった。

カマド 東辺中央部やや南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半分かかる状態で、右袖石は2個、左袖石は1個が遺存していた。位置関係と大きさを勘案すると、北東隅で出土した石は、右袖の焼き口に据えられた石と推定される。燃焼部中央付近の底面に焼土が分布し、奥壁は斜めに立ち上がる。カマド内からは土器小片が出土したのみであった。

貯蔵穴 北東隅のP 1の可能性はある。本遺跡通例の南

第4章 検出された遺構と遺物

東隅では検出されなかった。

掘り方 底面の凹凸が著しい。カマド前から南半部にかけて、不整形の掘り込みがみられた。

その他 北西隅は墓地跡区域の調査では確認できなかった。

遺物 カマド前～中央部、南西部の床面よりやや上で土師器杯(H132～134)や小片が出土した。概ね5～10cmほど浮いた状態であった。北東隅付近から出土した焼けた石は30cm大で、カマドの構築材の一部とみられる。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、奈良時代の8世紀前半の所産と推定する。

H区 14住居(第125・195・196図、PL.97・150)

検出位置 780～202付近で検出した。H区の南西端に位置し、現代墓地への通路に北西部がかかっていた。

重複関係 H区85・86土坑と重複し、14住居→85・86土坑の順に新しい。道路下は調査進行の都合で住居を除いてI区に属しており、ここでは1区1・2・3土坑と重複し、14住居→1・2・3土坑の順に新しい。

覆土 黒褐色系の白色軽石を含む土で埋没する。

壁 深さ28～59cmで、北側が深い。いくつかの近世以降の土坑によって各辺が破壊されていたが、幸い各隅を確認することができた。各辺とも長さが異なり、東辺が長く西辺が短い台形を呈する。南辺4.59m・北辺4.68m、西辺4.24m・東辺4.73mである。

床面 東半部は85・86土坑による破壊で一部しか検出できなかったが、西半部ではP4・P5・P6で囲まれた範囲が踏み固められて硬化していた。

主柱穴 P2・P4・P5・P6とみられ、南北に長い楕が推定される。P2:35×42・深さ62cm、P4:35×39・深さ45cm、P5:40×39・深さ57cm、P2～P4:1.81m、P4～P5:2.27m、P5～P6:1.87m、P6～P2:2.28mである。いずれのピットも二段に掘り込まれている。

壁溝 西半部で検出した。幅17～31cm、深さ3～10cm、底面幅1～3cmである。東半部では検出できなかった。

カマド 不明。85土坑により破壊された可能性が高い。貯蔵穴 南東隅のP3とみられる。不整形の掘り込みで、79×69・深さ72cmである。掘り込みを取り巻くように、北側と西側に十数cmの段が巡る。

掘り方 底面の凹凸が著しい。中央部南寄りに深さ15cm前後の不整形の掘り込みが認められた。

その他 2年度にわたって調査したため、北東と南西に二分されており、記録写真は全体を示すものがない。

遺物 85土坑と86土坑の間から裏破片が出土した。近くに30cm大の石があり、西側の道路下からも15～40cm大の石が出土していることから、カマド構築材の石が床面近くに分布しているとみられる。東半部の床面近くから青緑色の石鑑形をした石製品が出土した。

時代・時期 出土遺物から、古墳時代の5世紀後半の所産と推定する。

H区 15住居(第126・196図、PL.98・150)

検出位置 760～145付近で検出した。H区の南東端に位置し、1住居との最短距離は3.4mである。H区への出入口付近にあり、北西隅付近は削平されていた。また、東側は現道に面していたため、カマド奥壁よりも東側は切断・破壊されていた。

重複関係 なし。

覆土 上位に白色軽石を含む灰黄褐色土があり、下位は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ24～52cmで、北側が深い。南東隅は現代道路側溝によって、西辺～北西隅は耕作等によって破壊されていた。全長の計測可能な辺はないが、概ね南北に長い台形と推定される。南辺3.57(推定4.2)・北辺2.92m(推定4.1m)、西辺1.6(推定4.5)・東辺2.38m(推定4.3m)である。

床面 細かい凹凸はあるが、カマド前から中央部にかけて、P1・P6・P7・P8に囲まれた範囲が硬く踏み固められていた。

主柱穴 P1・P6・P7・P8とみられ、南北に長い楕が推定される。P1:41×46・深さ46cm、P6:25×28・深さ38cm、P7:25×27・深さ44cm、P8:31×27・深さ53cm、P1～P6:1.93m、P6～P7:2.02m、P7～P8:1.73m、P8～P1:2.11mである。P7を除く3本は二段に掘り込まれている。

壁溝 カマド左脇から北辺、西辺から南辺中央部まで検出した。破壊された北辺～西辺にも存在したと推定される。幅12～33cm、深さ1～5cm、底面幅3～13cmである。カマド 東辺中央部やや南寄りに設置する。燃焼部は住

居壁ラインの内側にあり、焚き口の左右袖石に天井石が架かった状態で遺存していた。床面中央部に焼けた石が分布しており、カマド構築材の一部と考えられる。

貯蔵穴 南東隅のP3で、隅に丸味のある長方形を呈する。75以上×54・深さ87cmで、内側は方形に近い掘り込みとなる。中から完形に近い杯(H150)が出土した。

掘り方 底面の凹凸が著しい。カマド前・中央部・南西隅に1.3～1.5m大の不整形掘り込みが認められた。

その他 P1の東側、P6の北側、P7の東側、P8の北側に20～27cm、深さ7～15cmの小規模のピットが検出された。補助柱穴の可能性がある。

遺物 カマド焚き口の天井石が、左右の袖石に架かった状態で遺存していた。また、カマド前～中央部で焼けた石が出土し、その一部は接合した。北東部の床面からも30cm大の石が出土しているが、焼けていない。北半部の床面及び5cmほど浮いた状態で、裏破片と杯破片が出土し、南東隅付近の貯蔵穴内から、完形に近い杯(H150)が底面から20cmほど浮いた状態で出土した。

時代・時期 出土遺物から、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

H区 16住居(第127・197図、PL.99-150)

検出位置 803-173付近で検出した。H区の北西部に位置し、12住居との最短距離は6.1mである。I区への進入路下にあつたため、調査の着手が後回しとなった。北半部は調査区外にあり、現代ゴミ穴がカマド付近に入っていた。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。中位にHr-FAらしい軽石を含む厚さ5cmほどの層が、下に滑らかな凸状をなして堆積する。

壁 深さ19～45cmで、東側が深い。全体の約1/2程度を調査したとみられる。北東部から南辺にかけて、重機によるゴミ穴が掘られ、カマド付近を破壊していた。南辺は4.71mで、西辺2.63・東辺2.14mが遺存していた。やや歪んだ台形と推定される。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦である。

支柱穴 不明。P1は位置・深さから、支柱穴の可能性が高い。P1:31×27・深さ48cmである。

壁溝 南東隅から西辺まで検出した。幅14～29cm、深

さ2～8cm、底面幅4～9cmである。

カマド 東辺中央部南寄りに設置されていたと推定される。ゴミ穴の東側の土層では、カマド粘土らしきものと焼土が認められた。住居床面水準で27×33cmほどの不整形の範囲に焼土が分布していたことから、この付近がカマド燃焼部と考えられる。住居の壁外に浅く掘り込まれた部分があり、カマド煙道の残りともみられ、これらを勘案すると、カマド燃焼部は住居壁ラインの内側にあったと推定される。

貯蔵穴 南東隅のP2と考えられる。略円形の掘り込みで、70×71・深さ75cm、底面径は上バ径の1/3程度である。壁から20cm以上離れた位置にあり、壁直下には壁溝が巡る。

掘り方 底面の凹凸が著しい。西辺寄りに、70cm大・100cm大の不整形の掘り込みが認められた。

その他 全体の調査ができず、カマド付近も覆土により破壊されていたため、詳細な内容は不明である。

遺物 カマド燃焼部相当の位置から裏(H164)・杯(H162)が接した状態で出土し、南辺東寄りの壁際から、土師器杯(H157・158)と高杯脚部(H163)が出土した。中央部の破片は床面から5cmほど浮いている。

時代・時期 出土遺物と推定カマドから、古墳時代5世紀末の所産と推定する。埋没土中位に含まれるテフラがHr-FPならば、より新しい時期のものと考えられる。

H区 1掘立柱建物(第128・197図、PL.103・151)

検出位置 790～795-189～194の間にあり、概ねH区の西端中央部に位置する。平成19年の年度末直前に明渡しになり、調査を実施した元墓地内にある。

重複関係 59・60土坑と重複し、いずれも1掘立柱建物の方が新しい。

覆土 黒褐色系の土で埋没し、白色軽石を含む。上位に灰黄褐色土が入るピットもある。

規模 2間×2間の規模で、中央部にもピットがあり、総柱の建物である。全体の寸法から推定すると、東西方向に棟を持つとみられる。

その他 墓地への進入路である舗装された道が南西から北東の方向に延び、舗装の途切れた先に本建物が位置することを勘案すると、墓地の一角に建てられた簡易な「お堂」のような建物が推定される。

第4章 検出された遺構と遺物

遺物 なし。

時代・時期 埋没土・重複関係から、1掘立柱建物は江戸時代以降の所産と推定されるが、時期を限定できない。

H区1溝 (第129・130図、PL.101)

検出位置 776～792-138～165にあり、概ねH区の北東部を東西に蛇行して走行する。

重複関係 2住居・9住居と重複し、いずれも1溝の方が新しい。

覆土 灰黄褐色土系の土で、軽石を含まない。

壁 U字状に立ち上がる。

底面 凹凸あり。底面幅20～50cmで、東西端は丸く取まる。

遺物 なし。

時代・時期 埋没土・重複関係から、1溝は平安時代以降の所産と推定されるが、時期を限定できない。

H区土坑(第129～133・197～202図、PL.102～109・112・113・151～153)

大半の土坑は平安時代以降とみられるが、27・32・33・34土坑は縄文時代前期に属する土器片が出土している。また、H区西寄りの48～74土坑は墓地跡であり、中から人骨等が出土し、副葬品とみられる古銭等が出土したことから、江戸時代の墓と推定される。人骨については自然科学分析の章で記述し、副葬品と併せた調査成果は、まとめの章で考察したい。

H区ビット(第129・131・134～136図)

H区のビットは全体に分布する。番号を付して掘り下げを実施したが、底面状況の観察から樹木の根跡とみられるものは欠番扱いとした。12住居の周辺で検出されたビット群は、埋没土が12住居に類似し、検出位置が12住居の各辺に沿っているようにみられ、27P～33P、38P、40P～44Pは住居に伴うものと推定される。

第10節 I区

I区の概要 (第137図、PL.114・115)

I区は、H区の元墓地への参道を挟んだ西側に位置し、本遺跡調査区域の西端である。西側は急な崖となつて、鳥取松合下遺跡^{トリノマツカヘノシテ}の低地となる。I区は全体に南へ向かって低くなる地形で、東側のH区の地形に連なる。北辺のやや東寄りをもっとも高い147.60m、南辺の中央部で146.20mである。H区同様、北側にコンクリート擁壁があり、南側は島と宅地である。

I区南東端では、H区で検出した14住居の西西部を検出し、ほぼ全体を調査することができた。

古墳時代以降の住居は2～9住居の8軒である。1住居は当初、プラン確認の時点で「1住居」としたが、調査を進めたところ、井戸であることが判明し、そのまま番号を引き継いだ。したがって、I区の1住居は欠番である。2住居はやや大型で、出土土器の所見は5世紀代を示すが、住居床面水準から石製巡房が出土した。5住居はカマドの遺存が良好で、焚き口から煙出しまで調査することができ、床面には壁と直交する方向に床溝が認められた。9住居は南西辺中央部の住居内に斜路が遺存し、

南西辺外側にもビットが並んで検出され、出入口を検出したと考えられる。

1井戸は漏斗状の断面をもち、確認面よりやや下がった水準で4本の柱穴と考えられるビットを検出した。覆屋の存在が推定される。また、上位の浅い範囲に小穴が多数検出でき、何度が作り替えていた可能性がある。

I区では表土掘削の時点から縄文土器の出土が多く、遺構の存在を予測していたところ、いくつかの土坑の中から縄文土器が出土し、北西部では集中して出土する地点が認められた。1竪穴状遺構は、縄文土器が多数出土したことから遺構と想定されたが、「住居」と判断するに至らず、焼土・灰・床面とプランを確認できた時点で住居としたため、遺構名称の「竪穴」を引き継いだ。2竪穴も同様で、3竪穴は灰を確認できなかった。1竪穴が住居と認定できたことを勘案し、I区全体のロームへの漸移層を掘削して2面の調査を行なった。I区全体で大小の土坑を検出し、中から縄文土器を出土した土坑も多い。とりわけ、61・79・82・85・89・90・109・127・140・171土坑はまとまった量の土器が出土した。85・140土坑はフ

ラスコ状の断面を示し、上面の確認プランより底面が広がっており、比較的多くの土器が出土した。

1区 1井戸(もと1住居) (第137・138・202図、Pl.126・153)

検出位置 800-235付近で検出した。1区の南西部に位置し、2住居との最短距離は2.5mである。遺構確認時にはほぼ方形のプランが読み取れたことから、1住居と名前を付けた。掘り下げてみたところ、住居とは様相が異なり、「床面」が確認できず、さらに深くなることが分かり、底面に至って井戸であることが判明した。

重複関係 65・68土坑と重複し、65土坑→1井戸・68土坑の順に新しい。1井戸と68土坑との前後関係は不明である。北辺で12土坑と接した状態で、新旧関係は判定できなかった。南辺の一部は重機による擾乱が入り、破壊されていた。

覆土 上位は黒褐色系の土で埋没するが、中位に炭化物を多く含む層があり、これを境として下位にはふい黄褐色系の土で埋没する。最下層は黒色土ブロックを含む水分の多い層で、砂質土である。このことから、かつては井戸であったことが推定されるが、調査時には湧水しなかった。

壁 断面が漏斗状を呈し、最下端は下に凸の狭い掘り込みとなる。壁の傾斜は上位ほど急で、中位以下では45～60度ほどである。確認面からの深さは2.7mである。中央部の特に深い掘り込みは、98×84cmの規模である。柱穴 土層観察用のベルトを残して中位まで掘り下げたところ、斜面中位に4個の穴(P1・P2・P3・P4)が認められた。遺存の良好なP4では確認面から33cm下位、P1は85cm下位、P2は72cm下位、P3は58cm下位であった。これらを結ぶ線は台形を呈し、規模が概ね揃っていることから、井戸の覆屋のようなものの存在が推定される。P1:35×28・深さ85cm、P2:20×21・深さ40cm、P3:14×22・深さ58cm、P4:32×22・深さ146cm、P4～P1:2.69m、P1～P2:1.76m、P2～P3:1.97m、P3～P4:2.02m、P5:27×29・深さ14cmである。ベルトを除去したのち、さらに精査したところ、地山ローム面に多数の小穴が検出された。小穴の分布は上位の浅い範囲に多く、大きさは15～30cm前後が主で、40cm大は少ない。何度か覆屋を造

り替えた可能性が考えられる。

遺物 まとまった形状の遺物は少なく、破片が多い。墨書された土師器杯(P1)が出土した。

時代・時期 出土遺物から、平安時代の10世紀後半の所産と推定する。

1区 2住居(第139～141・202・203図、Pl.116・117・153)

検出位置 800-225付近で検出した。1区中央部の南寄りに位置し、3住居との最短距離は6.5mである。一边が7m前後で、1区のなかで最大の規模をもつ。西辺中央部付近から南西へむかう幅40cmほどの現代耕作痕が、床面を掘り込んで住居中央部まで破壊していた。

重複関係 カマド左脇の床面で輪郭が確認できた75土坑が認められ、縄文土器や石片が出土していることから、本住居以前の遺構である。

覆土 中央部の上位に浅間山As-B軽石を含む灰黄褐色系の土がレンズ状に堆積し、中位以下は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ23～49cmで、東側が深い。西辺中央部付近から直線的に現代耕作痕が住居中央部に伸び、床面を破壊していた。南辺6.43・北辺6.63m、西辺6.64・東辺6.36mで、東辺がやや短い台形であるが、全体として方形に近い。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦である。

主柱穴 位置・深さからP1・P2・P3・P4と考えられる。P1:43×52・深さ87cm、P2:48×53・深さ91cm、P3:54×61・深さ99cm、P4:45×40・深さ107cm、P1～P2:3.78m、P2～P3:3.75m、P3～P4:3.62m、P4～P1:3.90mである。なお、P5はP1～P4に比較して一回り大きく(79×77cm)、深さ22cmと浅い。

壁溝 東辺南寄りを除き、ほぼ全周するが、北辺中央やや東寄りで途切れた箇所がある。幅22～41cm、深さ2～9cm、底面幅2～6cmである。南辺の壁際から25cmほど離れた位置でも、直線的な溝(幅15～32cm、深さ7～13cm)を3.65mの長さで検出した。南辺をより南側へ広げた可能性がある。

カマド 東辺中央部やや南寄りに設置されていた。燃焼部の奥壁は住居壁ラインとほぼ並んでおり、煙道が短く外へ延びる。カマド前から中央部にかけて、割れた状態

の石がいくつか出土し、その一部は焼けた状態を示していたが、遺存していたカマド袖部には石が残っていないかった。

貯蔵穴 不明。カマド右脇の掘り込みの可能性はあるが、69×40（推定72）・深さ12cmとやや浅い。南東隅に近い掘り込みは深さ9cmである。

掘り方 細かい凹凸のほか、中央部がやや盛り上がり、四隅に向かって低くなる。

その他 南辺から西辺にかけての壁溝中に、径20～40cm、深さ10cm前後の小穴が並ぶ。

遺物 カマド前～中央部にかけて、破片状態の土器と割れた状態の石が多く出土し、南東部の壁際及び、西辺南寄りの壁から20cmほど離れた位置で、土師器甕（I19）破片が出土した。西辺寄りの土器片は床面のもと、5cmほど浮いた状態のものがある。中央部やや北寄りの床面水準から、完形に近い石製巡方（I21）が取り付け孔を上にして1点出土した。巡方の外観は黒色を呈する。

時代・時期 10世紀前半とみられる土器も出土しているが、他の多数の土器や住居の構造等から、古墳時代の5世紀中頃の所産と推定する。石製巡方は住居の年代観と一致せず、流入したものと考えられる。

1区 3住居(第141・142・204図、PL.118・154)

検出位置 808-218付近で検出した。1区中央部に位置し、2住居との最短距離は6.5mである。覆土からの土器片等の出土が異様に多く、規模が小さいという特徴をもつ。

重複関係 なし。北辺の一部は攪乱によって破壊されていた。

覆土 上位は白色軽石を含む灰黄褐色系の土で、下位は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ57～71cmで、北側がやや深い。壁は4辺とも床面から15～20cmまでは直に近く立ち上がるが、上位2/3程度は斜めに開くように立上り、最上部は不整形のプランとなる。最上位の各辺は、南辺2.73(2.38)・北辺2.50m(2.28m)、西辺2.84(2.53)・東辺3.21m(2.74m)である(括弧内は直に立ち上がる辺の長さ)。最上位では南北に長い不整形、中位では南北に長い長方形となる。床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、中央部に96×111・深さ15cmの掘り込みP2がある。

主柱穴 不明。P2の西側にある掘り込みは、20×18・深さ16cmである。

壁溝 北西隅付近を除き、ほぼ全周するが、溝状を呈するのは南辺～南西隅付近で、その他の部分は小ピットの連続である。幅16～32cm、深さ3～7cmで、底面幅は3～10cmである。

カマド 東辺中央部やや南寄りに設置されていた。燃焼部の奥壁は住居東辺の直に立ち上がる壁と同じであり、そのまま斜めに立ち上がる壁に沿って、幅20cm前後で上位に延びる煙道になる。住居覆土から出土した割れた状態の石が、カマド構築材になるか不明である。

貯蔵穴 カマド右脇のP1と考えられる。二段に掘り込まれた不整形のピットで、48×41・深さ65cmである。

掘り方 底面の凹凸が著しく、不整形の掘り込みがある。

北東・北西・南西の各隅に、小ピットが認められたが、規模が小さく、深さ9～17cmである。

その他 埋没土の断面観察では格別のことはなく、壁際から徐々に埋没し、中央部が最後に埋まっていることから、壁の断面形状は廃棄された時点で、上位が斜めになっていたと推定される。

遺物 浅い深さから土器片や割れた石が出土した。一回で記録が取れず、上位の遺物を取上げてから、下位の遺物の出土状態を記録した。上位では中央部から鉄製の鎌（I36）が出土した。下位でも遺物の出土水準が高く、床面近くでの出土品は少ない。平面的な位置はいずれも中央部付近からの出土で、壁際やカマド内からの出土は小片のみである。中央部の凹みに流れ込んだもの、または投げ込んだ可能性がある。

時代・時期 出土遺物の特徴から、飛鳥時代の7世紀後半の所産と推定する。

1区 4住居(第143・205図、PL.119・154)

検出位置 819-213付近で検出した。1区中央部の北端に位置し、3住居との最短距離は7.3mである。縄文時代3層穴遺構が東側に、土坑が西側にある。

重複関係 なし。調査区域の北限界まで広げて、範囲を確認した。

覆土 白色軽石を含む黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ20～47cmで、北側がやや深い。各辺とも長さが異なるが、東辺がやや短く、全体として台形を呈する。

南辺2.90・北辺2.79m、西辺3.21・東辺2.19mである。南北方向がやや長い。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、カマド前を中心とした南半部は硬化していた。

主柱穴 不確定。配置で勘案すると、P1・P2・P3・P5の組み合わせで良いが、P1はごく浅い。P2・P3・P4・P5の組み合わせは、規模・深さともほぼ同じだが、配置が住居プランと比較して整合性がない。P1:40×35・深さ1cm、P2:36×35・深さ39cm、P3:37×39・深さ32cm、P4:33×32・深さ36cm、P5:30×35・深さ32cm、P1～P2:1.81m、P2～P3:1.18m、P3～P5:1.93m、P5～P1:1.28mである。

壁溝 北辺の東西端に途切れる箇所があるが、ほぼ全周する。幅27～49cm、深さ2～8cm、底面幅3～12cmで、最大の底面幅は西辺の凸部下にある29cmで、底面は東に凸である。

カマド 東辺中央部南寄りに設置されていた。燃焼部は住居壁ラインに半分ほどかかる。焚き口天井部の一部が、凹んだ状態ながら一部遺存しており、よく焼けた状態であった。燃焼部奥側の天井部相当を慎重に精査したところ、軟質部分が概ね丸く抜け、東側の煙道に連なることが判明した。この丸い形状の孔は、糞等を据えたとときの抜き痕跡と考えられる。左右の袖部は粘土のみが遺存しており、袖石が据えてあったか不明である。住居内に散布する割れた状態の石が、カマド構築材であった可能性がある。

貯蔵穴 不明。本遺跡の通例では、南東隅付近の掘り込みが想定されるが、その位置にあるP2が主柱穴であった可能性が残る。P1・P2・P3・P5が主柱穴ならばP4が貯蔵穴の可能性、P2・P3・P4・P5が主柱穴ならばP1が貯蔵穴の可能性がある。

掘り方 底面の凹凸が著しい。中央部南寄り、北辺沿いに不整形の掘り込みがある。カマド焚き口の左右に30～40cm大の掘り込みが認められ、袖石掘り方の可能性がある。その他 西辺の北寄りでは、最上端で長さ165×33cmの湾曲部があり、西へ向かって凸である。この湾曲する部分は階段状を呈しており、出入口の可能性がある。

遺物 中央部から南東部にかけて、床面から浮いた状態の遺物が出土した。南辺沿いの杯(I37・40)は、壁際近

くから出土し、斜めに傾いた状態である。カマド前で出土した鉄鏝(I46)は30cmほど床面から浮いていた。割れた状態の石は、カマド前から中央部にかけて分布し、概ね床面から浮いた状態であった。南西部出土の杯(I42・43)は、10cmほど浮いた状態である。

時代・時期 出土遺物、カマドの構造などから、奈良時代の8世紀中頃の所産と推定する。

Ⅰ区 5住居(第144・145・205図、Pl.120・154)

検出位置 787～210付近で検出した。Ⅰ区南東部に位置し、7住居との最短距離は2.1mである。南西隅を現代ゴミ穴の攪乱によって破壊されていた。

重複関係 攪乱破壊のほかなし。

覆土 白色軽石を含む灰黄褐色系の上で埋没する。

壁 深さ41～62cmで、北側がやや深い。南東隅をゴミ穴による攪乱で破壊されていた。中央部付近で計測すると、南北がわずかに長くなるが、主柱穴間では東西方向が長い。南辺3.68(推定4.75)・北辺4.51m、西辺4.79・東辺3.15m(推定4.75m)である。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、カマド前から主柱穴に囲まれた範囲がとくに硬化していた。また、南辺中央部の壁際に、直径60cm前後で半円形の硬化した範囲が認められ、中央部が凹んだ状態であった。出入口と考えられる。

主柱穴 配置と深さから、P1・P2・P3・P4と考えられる。P1・P3・P4は二段に掘り込まれており、とくにP4は顕著である。P1:30×19・深さ52cm、P2:23×24・深さ51cm、P3:34×39・深さ39cm、P4:60×61・深さ49cm、P1～P2:2.26m、P2～P3:2.12m、P3～P4:2.25m、P4～P1:1.97mである。

壁溝 北東隅付近と破壊された南東隅を除き、ほぼ全周する。小ピットの連続のように並ぶ部分もある。幅18～34cm、深さ2～10cm、底面幅1～8cmである。

カマド 東辺中央部に設置されていた。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり煙出し部が壁ラインにかかる。左右の袖石と焚き口天井部の石が遺存し、天井石は割れていたが袖部に架かった状態であった。燃焼部中央のやや左寄りに細長い石が立てた状態で据えられ、その石を伏せた土師器甕(I53)で覆っており支脚と考えられる。伏せ

た裏の周囲の土を慎重に除去したところ、伏せ裏上位の粘土にはほぼ円形の孔があり、平面三角形の良く焼けた粘土天井部が遺存していた。裏の右側から正立状態の完形に近い杯(147)が出土した。遺存していた天井部粘土の形状から二つ架けカマドが推定復元される。この天井部粘土はよく焼けた状態で遺存し煙出しまでつながっていた。奥壁の底面幅は燃焼部中央の約半分であった。

貯蔵穴 南東隅に近い略長方形の掘り込みと考えられる。周囲の床面よりも一段(10数cm)低く掘り込んだ内側に、87×67・深さ76cmの掘り込みがあり、底面から土器片が出土した。

掘り方 カマド付近から北東隅にかけて、及び北西隅付近で不整形の掘り込みが認められた。

床溝 西辺に直交する方向で6本、北辺に直交して6本、東辺のP4に接する位置で1本を検出した。長さ45～101cm、幅12～26・深さ2～6cm、溝間隔は4～28cmである。北東・北西の隅には認められなかった。

その他 カマドと貯蔵穴の間に、35×35・深さ29cmの掘り込みがあり、壁に向かって斜めに掘られていた。カマド前から中央部付近がやや低くなっている。中央部付近の床面が焼けて、焼土化していた。

遺物 カマド前から中央部にかけて棒状の炭化物が床面から出土した。北西隅に近い床面から赤色顔料のような粉状物質が出土しており、酸化鉄と推定される。カマド燃焼部からは裏(153)が倒立した状態で出土し、内部には細かい石が立った状態で出土した。支脚の石に裏を伏せて、高さ等を調整したと考えられる。カマド左右の袖石が遺存し、焼き口天井部の50cm大の石が二つに割れた状態で架かったまま出土した。カマド右袖脇から土師器杯(147)の完形に近い土器が出土した。また、貯蔵穴内の底面から、土器片がまとまって出土し、南辺中央の壁近くから、土師器裏(154)の口縁部片が出土した。

時代・時期 出土遺物、カマドの構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

1区 6住居(第146・147・206図、PL.121・155)

検出位置 800-208付近で検出した。1区中央部の東寄りに位置し、南側の5住居との最短距離は6.9mである。南西隅・西辺北半部・北辺東寄りを現代ゴミ穴の攪乱によって破壊されていた。

重複関係 攪乱破壊のほかなし。

覆土 上位は白色軽石を含む灰黄褐色系の土、下位は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ44～66cmで、北側がやや深い。北辺中央・西辺北寄り・南東隅をゴミ穴による攪乱で破壊されていた。中央部付近で測測すると東西が長くなり、主柱穴間でも東西方向が長い。南辺4.22(推定4.65)・北辺4.69m、西辺5.09・東辺4.29m(推定4.8m)である。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、カマド前から南辺中央部にかけて硬化していた。また、南辺中央部の壁際の浅いピット(P2・P3)に挟まれた47×51cmの範囲が硬化しており、周囲に比較して1～2cmほど高くなっていた。出入口と考えられる。中央部に不整形の浅い掘り込みが認められた。192×142・深さ2～3cmである。

主柱穴 配置と深さから、P1・P4・P6・P7と考えられる。P6は二段に掘り込まれている。P1:34×38・深さ15cm、P4:35×37・深さ10cm、P6:37×34・深さ32cm、P7:38×33・深さ64cm、P1～P4:2.76m、P4～P6:2.43m、P6～P7:2.63m、P7～P1:2.58mである。P5はP4・P6の柱通りにあり、P5:30×33・深さ41cm、P4～P5:0.86m、P5～P6:1.60mである。

壁溝 南東隅付近を除き、ほぼ全周する。幅18～37cm、深さ2～9cm、底面幅1～13cmである。

カマド 東辺中央部やや南寄りに設置されていた。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり、煙出し部が壁ラインにかかる。左右の袖石と焼き口天井部の石が遺存し、天井石は袖部に架かった状態であった。燃焼部中央のやや南寄りに支脚の石が立った状態で掘えられ、その上に土師器裏(164)が天井石に寄りかかった正立の状態でも出土した。支脚石が燃焼部の左に寄っているためか、裏の口縁部は南西に傾いていた。右袖石は立った状態であるが、左袖石は焼き口側に傾いて出土した。焼き口前から30cm大の不整形の石が床面で出土し、カマド構築材または台石の可能性ある。袖粘土の内側は良く焼けていた。

貯蔵穴 南東隅に近い略長方形の掘り込みと考えられる。周囲の床面よりも一段(10数cm)低く掘り込んだ内側に、77×79・深さ82cmの掘り込みがあり、カマド側と西側が硬化していた。とくに西側は長さ110・幅20cmほどの帯状を呈し、表面はわずかに凸である。

掘り方 中央部から南西隅にかけて凹凸が著しい。また、北西隅には土坑1とP6を含んだ不整形で、深さ10cm前後の掘り込みが認められた。カマド掘り方は、燃焼部底面から奥壁にかけて断面が緩いV字形を呈し、煙出しの平面形は略三角形で壁外へ凸の形状であった。

床溝 北辺に直交する方向で、1本はP7に向かって延び、長さ73・幅12・深さ5cmである。もう1本は土坑1の東側で南北に延び、長さ63・幅15・深さ3cmである。掘り方ではP7に延びる床溝の存在が一層はつきりするが、幅が太く30cm以上になる。

その他 北西隅付近に101×73・深さ18cmの楕円形を呈する土坑1がある。これに近い北辺壁の中位に、幅47cm、奥行き11cm、天地21cmの略三角形の切り込みが認められた。この付近の壁高は66cmで、床面から切り込みまでの高さは16cmである。切り込み底面と壁外の遺構確認面との比高差は50cmほどになる。階段状を呈しているが、物入れの可能性もある。

遺物 カマド燃焼部から土師器甕(I64)が正立状態で出土した。甕は南西側に傾いた状態であるが、焚き口天井部の石に寄りかかり、甕の下には支脚の石があった。使用時に近い状態と考えられる。焚き口の手前には、30cm大の石があり、カマド構築材または台石と推定される。中央部では土師器杯(I65)、北辺寄りでは甕(I62)、南辺寄りでは杯(I60)が出土した。いずれも床面か、床上5cmほどの水準である。北東隅に近い床面から、底面を上にした状態で甕(I66)の下半部が出土した。

時代・時期 出土遺物、カマドの構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

Ⅰ区 7住居(第148・206図、PL.122・155)

検出位置 788-204付近で検出した。Ⅰ区南東部に位置し、西側の5住居との最短距離は2.1m、H区14住居とは2.5m、北東側の8住居とは3.2m離れている。西辺の一部は現代ゴミ穴の攪乱によって破壊されていた。

重複関係 攪乱破壊のほかなし。

覆土 上位は白色軽石を含む灰黄褐色系の土、下位は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ51～80cmで、北側がやや深い。西辺南寄りをゴミ穴による攪乱で破壊されていた。中央部付近で計測すると南北が長くなるが、全体に平行四辺形に歪んでお

り、各辺の長さが異なることから、プランは台形としておく。北辺から東辺のカマドまでの間は、住居壁の外側に幅50～60cmの平坦な面があり、土層断面の観察では埋没開始時には段があったと認められた。この空間も住居の内部とすれば、東西4.06(壁立上り3.51)・南北3.84m(壁立上り3.31m)となっており、東西に長いプランとなる。南辺3.22・北辺立上り2.76m、西辺3.11・東辺立上り2.90mである。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、カマド前から南辺中央部にかけて硬化していた。

支柱穴 不明。P1は柱穴の可能性はあるが、組み合わせる掘り込みが検出できなかった。P1:22×23・深さ22cmである。

壁溝 南東隅付近を除き、小ビットの連続または長さ50～60cmの溝が断続的に連なる。小ビット・溝の深さは1～11cmで、5cm前後の深さが多い。

カマド 東辺南寄りに設置されていた。燃焼部は住居壁ラインにかかり、燃焼部奥の天井部粘土が遺存し、粘土の内面は良く焼けていた。燃焼部幅25～30cmで、長さ70cmほど東へ延び、そこから煙道に向かって立ち上がる。煙出しは19×33cmの楕円形を呈し、焚き口付近は45×62cmの浅い掘り込みとなっていた。

貯蔵穴 南東隅の不整形の掘り込みと考えられる。93×55・深さ12cmである。

掘り方 東辺北半部から西辺にかけて、壁沿いに幅15～30cmほどの平坦な面があり、一段下がったその内側は概ね平坦である。南西隅付近のビットは18×33・深さ2cmの規模で、P1と対応する配置であるが、柱穴かどうか不明である。カマド粘土を慎重に除去したところ、左右の粘土の背後に地山ローンを平面的に削った壁が認められた。カマド掘り方底面も住居床面から10数cm高い平坦な面をもち、奥壁は中央部に半円筒状の掘り込みがあって煙出しにつながり、その左右の壁は直に近い平面であった。カマド掘り方は全体として、地山ローンを箱形に掘り下げた形状を呈する。

その他 左右の袖部粘土の掘り方調査で、不整形の深さ8cm程度の掘り込みが認められた。袖石を据えた痕の可能性はある。

遺物 カマド前の床上15cmほどの高さで土師器甕の体部片が出土したほか、南壁近くの床上15cmほどの高さで完

形の須恵器蓋(169)が出土した。外面を壁に向けた状態である。北西隅近くで出土した40cm大の石は、15cmほど浮いていた。台石の可能性がある。中央部で出土した割れた状態の石は床面から20～30cmほど浮いており、カマド構築材の可能性がある。

時代・時期 出土遺物、カマドの構造などから、奈良時代の8世紀前半の所産と推定する。

1区 8住居(第149・206図, PL.123・155)

検出位置 791-196付近で検出した。1区南東部に位置し、路線用地の東端にある。北側の9住居との最短距離は9.2m、南西側の7住居とは3.2m離れている。西辺の一部は現代ゴミ穴の攪乱によって破壊されていた。

重複関係 攪乱破壊のほかなし。

覆土 上位は白色軽石を含む灰黄褐色系の土、下位は黄白色軽石を含む黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ43～56cmで、北側がやや深い。西辺北半部をゴミ穴による攪乱で破壊されており、トレンチと思われる破壊が西辺南半部に認められた。各辺の長さが異なり、中央部付近で計測すると、南北にやや長い台形を呈する。南辺3.85・北辺3.37m(推定3.55m)、西辺2.26(推定3.84)・東辺3.98mである。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、カマド周辺から南辺中央部にかけて硬化していた。カマド前から北西隅にかけて、床面が部分的に焼土化していた。北東隅の北辺沿いに、151×73・深さ4cmの略長方形の掘り込みが認められた。他の住居では見られない施設である。

支柱穴 不明。P1は柱穴の可能性はあるが、配置・組合せに難点がある。P1:34×42・深さ38cm、P2:30×34・深さ9cm、P1～P2:1.11mである。

壁溝 南東隅付近を除き、小ピットの連続または長さ50～60cmの溝が断続的に連なる。小ピット・溝の深さは1～7cmで、3cm前後の深さが多い。

カマド 東辺南寄りに設置されていた。燃焼部は住居壁ラインの内側にある。焼き口天井部の石が、左右の袖石から内側に外れた状態で出土した。左袖石に接して杯(174)が出土したが、袖の一部であった可能性がある。燃焼部中央付近の底面から浮いた状態で、土師器杯(173)の完形に近いものが出土した。その下位には、燃焼部の左側に寄せて、細長い石が据えてあり、支脚と考えられ

る。燃焼部の奥壁は住居壁ラインに並び、斜めに立ち上がって平面三角形の煙出しに至る。

貯蔵穴 南東隅の略円形の掘り込みと考えられる。北側と西側に不整形の浅い掘り込みを伴い、これを除外すると73×66・深さ55cmである。

掘り方 南辺沿いと北辺沿いに不整形の掘り込みがあり、結果として中央部が高く、周辺が低い。P3:31×38・深さ27cmである。

遺物 カマド左袖石の左に隣接して土師器杯(174)が正立の状態出土した。カマド燃焼部からは底面から10cmほど浮いた状態で土師器杯(173)の完形に近いものが、右袖部の付け根付近から甕(177)底部片が出土した。南辺寄りの中央部から杯(175)、床面から20cm大のやや扁平な石(台石か)、住居中央部付近からは10～15cmの細長い石が床面からやや浮いた状態で出土したほか、カマド前・北西隅付近の床面から棒状の炭化物が出土した。時代・時期 出土遺物、カマドの構造などから、古墳時代の6世紀後半の所産と推定する。

1区 9住居(第150～152・206図, PL.124・125・155)

検出位置 805-193付近で検出した。1区北東部に位置し、路線用地の北東端にある。南側の8住居との最短距離は9.2m、南西側の6住居とは10.3m離れている。南西辺に近接してピットが並ぶ。

重複関係 なし。

覆土 黒色～黒褐色系の土で埋没する。上位に榛名山Hr-FAと推定されるブロックを含んだ層が5cmほどの厚さで堆積する。

壁 深さ31～61cmで、北側がやや深い。各辺の長さがわずかに異なり、中央部付近で計測すると、北西～南東がやや長い長方形を呈する。ただし、支柱穴間の寸法は北東～南西が長い。南西辺4.76・北東辺4.89m、北西辺4.48・南東辺4.49mである。

床面 細かい凹凸のほか、北東辺沿いに不整形の浅い範囲がある。その他は概ね平坦で、カマド左脇から南辺中央部にかけて、3.5×3.1mの四角形の範囲が硬化していた。この範囲はP4・P1を結ぶ線と、P4・P3を結ぶ線とに囲まれた範囲に等しい。カマド前に不整形の焼土化した範囲が認められた。P3とP2とを結ぶ線に添って、帯状の硬化した高まりがあり、住居中央部に向

かって低くなる傾斜をもつ。この帯状硬化面は南西辺の「出入口」の斜路の傾斜面に連なる。東隅と西隅には、上面長方形の高まりがあり、東隅と床面との差は9cm、西隅と床面との差は5cmである。この施設は上が凸の状態であり、壁溝の凹とは異なっていて、用途・機能が互いに想定できない。

支柱穴 P1・P2・P3・P4と考えられる。P3・P4は二段に掘り込まれ、P2の下は南西側にずれている。したがって、P2でこの傾斜のまま柱を据えると、上端はカマド側に傾く。柱抜き跡を示している可能性がある。P1:27×27・深さ69cm、P2:33×32・深さ65cm、P3:33×50・深さ68cm、P4:56×52・深さ85cm、P1～P2:2.17m、P2～P3:1.77m、P3～P4:2.05m、P4～P1:1.71mである。

壁溝 北東辺の東半部のみ検出した。幅30～40cm、深さ1～3cm、底面幅4～6cmである。

カマド 南東辺中央に設置されていた。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり、奥壁の下は住居壁の下ラインに一致する。左右の袖石が2個ずつ遺存していたが、焚き口天井部らしい大きめの石は、割れた状態で燃焼部に落ちていた。石の下から、土師器甕(188)が出土した。住居中央部の北寄り床面で出土した30cm大の石は、カマド構築材の可能性がある。カマド奥壁は斜めに・直線的に壁外へ向かって延び、平面的には略三角形を呈する煙出しとなる。

貯蔵穴 南隅の略円形の掘り込みと考えられる。北西側と南西側では直線的に一段掘り下げられ、全体として長方形の掘り込み内に円形の掘り込みがある形状となる。南西辺の直下には幅10cm前後の帯状の平坦面があり、直線的に一段掘り下げている。長方形掘り込み125×103cm、円形掘り込み101×87・深さ68cmである。

その他 南西辺中央部で「出入口」と考えられる施設を検出した。住居の土層観察用ベルトにかかっていたため、南東側を失ったが、北西側を調査することができた。土層を記録したのち、注意深く上位の土を除去したところ、住居外から内部へ降りる斜路(凹状)が現れ、その上面は何度も踏み固められた層が観察でき、斜路を降りた地点も硬化して床面中央部につながっていた。南西辺中央部を中心として、2×1mの住居内側の範囲が、幅20cmほどの硬い帯状の土で囲まれていた。斜路の

傾斜は住居壁の立りに直交して横切り、住居外の硬く踏み固められた平坦面につながっていた。斜路を上った平坦面の両側に、40ピット・42ピットが掘り込まれていた。住居の構造とかわかる可能性が高いので、周辺の土坑・ピットの寸法を列記しておく。36P:53×49・深さ25cm、37P:56×66・深さ16cm、38P:33×32・深さ27cm、39P:51×46・深さ33cm、40P:43×41・深さ25cm、41P:36×34・深さ27cm、42P:39×39・深さ29cm、43P:46×43・深さ27cm、31土坑:80×69・深さ23cm、45土坑:82×83・深さ35cm。出入口の掘り方調査では、1.8×1mほどの略長方形の掘り込みとなり、著しい凹凸のある範囲となった。南西辺と対の位置にある北東辺中央部にも、1.3×0.4mほどの半円形を呈する掘り込みが認められた。段の高さは床面から32cm、段から住居外との差は30cmである。遺構確認時点から黒い土があり、掘り込みは認識していたが、本住居と一連の遺構という認識はなかったため、掘り方調査時に掘り下げて範囲を確認した。ここでの住居床面は締まっていたが硬化とはいえず、住居外も格別硬い面を検出していない。出入口のほか、物置的な施設の可能性もある。

遺物 左右のカマド袖裾部からは土器片が出土し、カマド前の中央部からは30cm大のやや扁平な割れた石が出土した。この石はカマド構築材の可能性がある。南西辺の東寄り壁際の床面から5cmほど浮いた状態で破砕片が、西寄りの床面から杯小片が出土した。カマド燃焼部からは土師器甕(189・91)が出土した。掘り方の北隅付近からは、土師器杯(180)が押し潰された状態で出土した。時代・時期 10世紀前半とみられる土器もあるが、その他の土器や住居の構造などから、古墳時代の5世紀後半の所産と推定する。

Ⅰ区 1竪穴(第153・154・207～212図、PL.127・156～158)

検出位置 820～232付近で検出した。Ⅰ区北西部に位置し、用地の北西端にある。1層検出であるが、遺構は2層相当で、着手時点では住居跡との確認ができず、「竪穴状遺構」としていた。後にプランと火処が確認できたため、「竪穴」の名称を引き継いだものである。

重複関係 なし。

覆土 比較的締まった黄褐色系の土で埋没する。

壁 深さ13～66cmで、東側がやや深い。中央部付近で計測すると、北西～南東が長い長方形を呈する。南西辺6.50・北東辺5.69m、北西辺4.81・南東辺4.48mで、北隅・東隅が丸味を帯びる。

床面 概ね平坦で、北東辺寄りの床面が硬化していた。主柱穴 不明。P1～P18まで検出できたが、ピットの大きさと深さ・配置では主柱穴を特定できない。拡張があったとすれば、配置にズレが生じるが、特定は困難であった。各ピットの大きさ・深さを一覧で示す。

周溝 一部三重に巡る。周溝1はP16からはじまり、南東辺沿い～北東辺沿いに延びてP1の手前で止まる。周溝2aはP1からはじまり、北西辺沿い～南西辺沿いに延び、南東辺沿いの1/3程度でとまる。周溝2bは長さ112cmで、周溝2aとの間は119cmである。周溝3は南西辺のやや北寄りからはじまり、南東辺沿い～北東辺沿い～北西辺沿いに延びてほぼ一周するが、西隅から約190cmで途切れる。周溝1：幅15～30・深さ4～10・底面幅5～12cm、周溝2a：幅14～25・深さ6～9・底面幅2～13cm、周溝2b：幅15～19・深さ5～10・底面幅4～7cmである。

炬 P13は焼土粒子を含む埋没土で、炬になると考えられるが、P15の一部であった可能性もある。

その他 南東辺沿いでは周溝が三重を呈しており、拡張された可能性が高い。

遺物 埋没土中から土器片が多く出土し、出土状態の記録を取りながら掘り下げたところ、床面と考えられる平坦な面でもとまった遺物が出土した。中央部北寄りで深鉢(193)、南寄りでも深鉢(198)が出土し、10～15cm大の丸石のほか、石破片が出土した。

時代・時期 出土遺物の特徴から、縄文時代前期の黒浜式・有尾式の所産と推定する。

Ⅰ区 2 竪穴(第155・156・213～215図、PL.128・158・159)

検出位置 815～222付近で検出した。Ⅰ区北西部に位置し、1 竪穴との最短距離は6.0m、3 竪穴との距離は10.2mである。

重複関係 なし。

覆土 比較的締まった黄褐色系の上で埋没する。

壁 深さ49～65cmで、北側がやや深い。中央部付近で

計測すると、南北方向が長い台形を呈し、南西隅が突出する。南辺推定4.25・北辺3.03m、西辺4.70・東辺推定4.14mである。

床面 概ね平坦で、南東寄りの2.3×2.5mの範囲の床面が硬化していた。

主柱穴 規模と配置を勘案すると、P3・P5・P6・P9と考えられる。北側へ拡張したときは、P2とP11が追加されたように見える。P3～P5：1.79m、P5～P6：1.85m、P6～P9：1.65m、P9～P3：1.36mである。各ピットの大きさ・深さは、表の通りである。

周溝 北半部では二重に断続して巡る。周溝1aは土坑1の北側から延び、幅16cm、深さ9cm、底面幅6～7cmである。周溝1bは北東隅でL字状に曲り、幅14～17cm、深さ7～10cm、底面幅5～6cmである。周溝1cは北西隅でL字状に曲り、幅13～15cm、深さ4～7cm、底面幅6～7cmである。周溝1dは西辺沿いの短い溝で、幅14～16cm、深さ6～8cm、底面幅6～7cmである。1aと1d、1bと1cはそれぞれ対になる位置にあり、規模が似ている。周溝2aは北東隅に沿っていて、幅13～20cm、深さ5～6cm、底面幅4～13cmである。周溝2bは北辺から南西隅に沿って延び、幅14～28cm、深さ3～8cm、底面幅5～12cmである。周溝2cは南辺中央部沿いにあり、幅16～18cm、深さ4～6cm、底面幅6～9cmである。周溝2dは南東隅から土坑1まで、幅18～19cm、深さ6～8cm、底面幅6～9cmである。炬 中央部やや東寄りの床面に、64×49cmの略楕円形の範囲が焼土化していた。その北西側に88×54cmの不整形の掘り込みがあり、中央の最深部に焼土が詰まっていた。炬1とする。炬1の北側に接して、炬2がある。炬2は73×50cmの西側中央が凹む平面形で、南側に深鉢(190)が据えられ、北側には板状の石(1262)が立てた状態で出土し、深鉢には焼土が詰まっていた。

その他 土坑1は東辺中央部にあり、167×146・深さ22cmの規模で、下への東側は竪穴の壁外へ広がりが、中から土器片が出土した。

遺物 埋没土中から土器片等が300点以上出土し、出土状態の記録を取りながら掘り下げたところ、床面と考えられる平坦な面ですべてのままとった遺物が出土した。南東寄りでは完形で復元できる深鉢(1188)、土坑1

の中からも深鉢(1189)が出土し、埴2の南寄りからも深鉢が出土した。

時代・時期 出土遺物の特徴から、縄文時代前期の黒浜式・有尾式～諸磯a式の所産と推定する。

1区 3 竪穴(第157・216～219図、PL.129・160・161)
 検出位置 818～208付近で検出した。1区北辺の中央部に位置し、北半部は調査区外にある。2竪穴との最短距離は10.2mである。

重複関係 なし。

覆土 灰黄褐色系の土で埋没する。

壁 深さ51～67cmで、ほぼ同じである。調査区域内では東西4.35m、南北2.35mを検出した。やや歪みがある。南辺3.08m、西辺2.23m以上・東辺2.04m以上の規模となる。床面 概ね平坦だが、調査区内では硬化面は検出されなかった。

主柱穴 規模と配置を勘案すると、P1・P2は主柱穴の一部と考えられる。P1:48×44・深さ48cm、

P2:46×42・深さ42cm、P1～P2:1.89mである。周溝 不明。

埴 不明。

遺物 埋没土からの土器片出土は多いが、床面近い水準の出土遺物は少ない。埋没土中から土器片等が200点以上出土し、出土状態の記録を取りながら掘り下げたところ、床面と考えられる平坦な面から浮いた状態で、いくつかのまとまった遺物が出土した。調査範囲の中央部で深鉢が出土し、西辺寄りでも深鉢が出土した。

時代・時期 出土遺物の特徴から、縄文時代前期の諸磯a式が主体で、黒浜式・有尾式・諸磯b式の破片も出土している。

1区 土坑・ピット(第158～172・219～228図、PL.130～141・161～167)

1区の土坑・ピットは1～2面にわたり、多数検出しているため、それぞれの検出位置を示す図の一部に、計測値等を一覧表として示した。

第11節 遺構外出土の遺物

ここでは遺構に所属しない遺物について、補足説明する。表土掘削中の出土遺物、遺構の所属する時代と大幅に異なる時代の遺物、出土地点不明の遺物、遺構番号が欠番とされた遺物等を含む。

1 縄文土器(第229～236図)

各区ごとに、形式名の判るものを掲載した。1区の破片数をもっとも多い。

A区 条痕文系1点、称名寺式2点、堀之内2式で3点のほか、後期前葉のもの1点がある。計14点。

B区 燃糸文系2点、黒浜・有尾式1点、諸磯a式1点、加曾利E式1点、称名寺式1点、堀之内1式6点、堀之内2式22点がある。計156点。

C区 燃糸文系3点、田戸下層式14点、黒浜・有尾式15点、諸磯b式爪形1点、諸磯b式浮線8点、諸磯b式沈線1点、諸磯c式4点、称名寺式3点、堀之内1式2点、堀之内2式2点がある。計253点。

D区 黒浜・有尾式1点、諸磯a式1点、諸磯b式爪

形2点、諸磯b式浮線2点、諸磯b式沈線4点がある。計12点。

E区 黒浜・有尾式3点、諸磯a式1点、諸磯b式沈線11点、浮島式1点、加曾利E式2点、称名寺式3点が出土している。計32点。

F区 条痕文系1点、黒浜・有尾式9点、諸磯a式3点、諸磯b式沈線2点、諸磯b式浅鉢1点、加曾利E式16点、堀之内1式1点、堀之内2式17点がある。計56点。

G区 黒浜・有尾式10点、諸磯a式3点、諸磯b式浮線1点、諸磯b式沈線7点、加曾利E式36点、称名寺式7点が出土している。計85点。

H区 花積下層式7点、黒浜・有尾式754点、諸磯a式48点、諸磯b式爪形2点、諸磯b式浮線1点、加曾利E式58点、称名寺式1点、堀之内1式9点、堀之内2式5点が出土している。計955点。

I区 花積下層式2点、黒浜・有尾式1335点、諸磯a式664点、諸磯b式爪形4点、諸磯b式浮線22点、諸磯b式沈線27点、諸磯b式浅鉢1点、諸磯c式1点、加曾

利E式33点、堀之内1式4点が出土している。計2392点。

2 縄文時代石器(第236～239図、PL.168)

器種ごとに代表的なものを掲載した。

石鏃 8点 槍先形尖頭器 1点
石匙 4点 石錐 1点
削器 2点 打製石斧 10点
磨製石斧 1点 凹石 10点
磨石 6点 敲石 3点
石皿 3点 スタンプ型石器 1点
石製研磨具 2点 多孔石 3点

3 古墳時代以降の土器(第239図)

須恵器蓋 1点(外352)は、内外面に付着物があり、口縁部が打ち欠き加工されている。

須恵器椀 1点(外353)は、高台が剥離している。

4 その他石製品(第239図、PL169・170)

滑石製紡輪 1点(外350) 砥石 1点(外351)

石造物 4点(写真のみ掲載)

石仏(外354)紀年銘 享保十七年二月九日(1732年)

石仏(外356)紀年銘 享保四年四月七日(1719年)

石仏(外355)紀年銘 元禄十二年十月廿六日(1699年)

台座(外357)

第5表 住居一覽表

区画	番号	時代 時期	以上その 年代想定	平面形	形状	面積㎡		壁高cm	長軸方 位	壁高		主柱方 位	カマド			の竈穴			備考		
						計算面積	焼出面積			幅cm	深さcm		位置	対応方 位	構築材	位置	平面形	大きさ cm		深さcm	
A	1	古墳 前期	4世紀 前半	方形	5.01以上× 2.28以下	-	9.85	25	不明	なし	-	不明	壁北壁 り	-	不明	-	-	-	-	一部壁面に かまど	
C	1	古墳 前期	4世紀 前半	方形	5.84×5.57	32.53	39.02	31~52	不明	6~11	1~8	P1~P4 中央西 西寄り	-	-	P19	中段 方形	100×82	44	-	P5北壁外に掘 り込む	
C	1	古墳 前期	4世紀 前半	長方形	3.49×2.83	9.86	7.56	4~17	88度	なし	-	P1, P2, P5, P6	中央 西寄り	-	P3か	不整形	46×53	29	-	掘り方に小ビツ ト	
C	1	古墳 前期	4世紀 前半	長方形	4.76×3.32	18.66	11.68	12~49	87度	13~22	4~12	不明	中央 西寄り	-	-	不明	-	-	-	掘り込み外に ビツト	
C	1	古墳 前期	4世紀 前半	方形	3.09×4.13	15.24	30.66	39~80	96度	23~30	3~9	P6, P8	中央 西寄り	-	P1	不整形, 中段あり	70×54	62	-	大穴か	
C	1	古墳 前期	4世紀 前半	長方形	2.61×3.21	8.38	5.67	17~47	81度	なし	-	P1, P3	なし	-	-	不明	大穴なし	-	-	-	
C	1	奈良 前期	8世紀 前半	長方形	2.78×3.94	10.95	7.18	35~61	87度	13~20	3~7	不明	東道 中央 西寄り	882度	粘土+石 土	南東 隅	南東 隅	44×41	16	-	掘削本編より新 しい
C	1	不明	-	長方形	推定4.0× 3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	P1~P3	不明	-	-	-	-	硬化面のみ	
E	1	奈良 前期	8世紀 前半	方形	3.94×3.88	15.29	30.85	41~60	87度	29~42	1~7	不明	東道 中央 西寄り	870度	粘土+石 土	南東 隅	南東 隅	103×83	27	-	11日前は底面部 か
E	1	奈良 前期	8世紀 前半	長方形	3.17×3.98	12.62	5.50	34~46	81度	38~50	4~8	不明	東道 中央 西寄り	880度	粘土	南東 隅	南東 隅	59×48	35	-	-
E	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	4.78×3.58	17.11	30.74	41~61	88度	30~55	1~11	不明	東道 中央 西寄り	886度	石+粘土 土	南東 隅	南東 隅	64×50	15	-	カマド遺構の確 定
E	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	6.34×3.76	23.84	39.74	11~20	810度	なし	-	不明	東道 中央 西寄り	868度	石+粘土 土	不明	-	-	-	南北に長い	
E	1	平安 前期	9世紀 前半	方形	-	-	2.45	12~21	-	なし	-	不明	不明	-	-	不明	-	-	-	11日前の掘削部 か	
E	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	4.44×3.28	14.56	12.14	32~61	82度	なし	-	不明	東道 中央 西寄り	867度	石+粘土 土	不明	-	-	-	-	11日前に掘削 した
F	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	4.63×2.17	10.05	6.42	4~18	88度	なし	-	不明	東道 中央 西寄り	887度	不明	南東 隅	南東 隅	66×40	29	-	小規模
F	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	5.94×4.60	27.32	31.08	48~76	86度	26~50	2~8	P 1 ~ P 4	東道 中央 西寄り	882度	石+粘土 土	南東 隅	南東 隅	59×58	58	-	鉄製品工房か
F	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	4.04×3.51	14.18	9.18	63~89	85度	13~47	3~8	不明	東道 中央 西寄り	881度	石+粘土 土	南東 隅	南東 隅	44×32	49	-	内面寄りに炭化 物
F	1	奈良 前期	8世紀 前半	長方形	3.83×3.31	12.68	30.54	14~32	90度	21~40	2~7	不明	不明	-	-	南東 隅	南東 隅	73×43	14	-	大穴なし
F	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	3.81×3.27	12.46	8.32	30~65	85度	23~43	2~9	不明	東道 中央 西寄り	881度	粘土か	南東 隅	南東 隅	66×29	20	-	掘削より明確
F	1	奈良 前期	8世紀 前半	長方形	6.00×4.83 (7.25× 7.30外堀 掘削済)	28.98	25.45	30~54	81度	なし	-	P1~P4	東道 中央 西寄り	884度	粘土+石 土	南東 隅	南東 隅	72×4	4	-	外堀に掘削履 き込み
F	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	2.86×2.50 (2.98× 2.66外堀 掘削済)	7.15	5.18	24~45	82度	22~41	3~8	不明	東道 中央 西寄り	867度	粘土+石 土	不明	-	-	-	-	北道一方向部に 掘削履き込み
F	1	奈良 前期	8世紀 前半	長方形	6.76×5.37	37.45	28.05	49~83	816度	25~45	1~6	P1, P9, P10, P11	東道 中央 西寄り	863度	粘土+石 土	南東 隅	南東 隅	69×64	39	-	11日前・7日前よ り古い
G	1	古墳 前期	4世紀 前半	長方形	4.28×3.99 (4.28× 4.31北道 掘削済)	17.08	13.35	56~79	814度	22~38	1~6	不明	東道 中央 西寄り	873度	粘土+石 土	南東 隅	南東 隅	81×72	57	-	北道に掘削履 き込み
G	1	古墳 前期	4世紀 前半	長方形	4.25×4.10	17.42	13.39	41~66	877度	21~30	3~9	P1, P2	東道 中央 西寄り	878度	粘土+石 土	南東 隅	南東 隅	78×77	56	-	南寄り柱穴は掘 り方確定
G	1	古墳 前期	4世紀 前半	方形	4.38×4.58	20.06	36.02	36~67	813度	なし	-	P1~P4	中央 西寄り	887度	粘土	南東 隅	南東 隅	90×51	81	-	床面中央部確 定・P4は掘り方 確定
G	1	奈良 前期	8世紀 前半	長方形	3.23×3.90	12.59	8.77	42~55	813度	19~29	4~6	不明	東道 中央 西寄り	889度	粘土	南東 隅	南東 隅	66×77	25	-	遺物少ない
G	1	奈良 前期	8世紀 前半	長方形	2.80×3.25	9.04	5.92	32~56	822度	20~38	1~6	不明	東道 中央 西寄り	889度	粘土	南東 隅	南東 隅	55×55	11	-	-
G	1	奈良 前期	8世紀 前半	長方形	2.83×3.23	9.49	5.48	38~50	86度	21~35	2~6	不明	東道 中央 西寄り	883度	石+粘土 土	南東 隅	南東 隅	50×53	25	-	鉄鋸片。6世紀 後半の土器あり
G	1	奈良 前期	8世紀 前半	長方形	3.72×3.66	11.82	10.00	53~71	887度	27~42	1~3	不明	東道 中央 西寄り	889度	石+粘土 土	南東 隅	南東 隅	116×98	24	-	カマド・土器多 い
G	1	奈良 前期	8世紀 前半	長方形	4.75×4.45	21.13	13.22	63~77	885度	30~50	2~8	不明	東道 中央 西寄り	889度	粘土	南東 隅	南東 隅	84×74	20	-	遺物少ない。掘 削は石1個
G	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	3.37×2.86 (以上)	-	6.98	35~37	83度	25~33	2~11	不明	東道 中央 西寄り	889度	石+粘土 土	不明	-	-	-	-	カマド付近土器 掘削済
G	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	3.07×3.82	11.72	9.90	18~30	84度	なし	-	不明	東道 中央 西寄り	881度	石+粘土 土	不明	-	-	-	-	遺物少ない
G	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	3.52×5.11	17.98	14.19	34~60	814度	なし	-	不明	東道 中央 西寄り	873度	粘土か	南東 隅	南東 隅	57×75	32	-	柱穴不確か
G	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	2.71×3.55	9.62	6.89	17~32	812度	26~37	2~6	不明	東道 中央 西寄り	874度	不明	南東 隅	南東 隅	63×59	25	-	カマド遺存不詳
G	1	平安 前期	9世紀 前半	長方形	3.36×4.00	13.44	9.84	23~48	83度	20~38	1~7	不明	東道 中央 西寄り	887度	石+粘土 土	南東 隅	南東 隅	39×75	27	-	カマド作り替え

第4章 検出された遺構と遺物

区画	時刻	時代	白土その年代想定	平面形	規模	面積㎡		壁高cm	長軸方位	壁遣		主柱方	カマド			貯蔵穴			備考			
						計算面積	検出面積			幅cm	深さcm		位置	対称軸方位	構築材	位置	平面形	大きさcm		深さcm		
G	14	奈良	8世紀中期	台形	3.80×4.99	18.36	13.38	30~60	N120度E	27~49	3~12	不明	東道中央寄寄り	N70度E	石・粘土か	南東隅	不整形	58×53	20	南寄り→遺物多		
G	15	平安	9世紀前半	長方形	2.51×3.28	8.23	5.56	28~51	N130度E	19~33	2~9	不明	東道中央寄寄り	N70度E	石・粘土か	南東隅	略楕円形	80×56	9	瓦製品		
H	1	古墳	9世紀前半	長方形	4.64×4.44	20.60	11.85	22~67	N67度E	21~47	3~10	P1~P1	東道中央寄寄り	N66度E	石・粘土	南東隅	略方形	91×94	87	床面硬化		
H	1	2	平安	9世紀中期	長方形	4.21×3.22	13.35	9.62	18~45	N30度E	24~46	2~5	不明	東道中央寄寄り	N90度E	石・粘土	南東隅	不整形	121×95	35	瓦製品、貯蔵穴内へ延伸	
H	1	3	奈良	7世紀末~8世紀前半	長方形	2.15×2.82	6.06	3.35	35~46	N28度E	20~44	3~16	不明、P1、P2か	東道中央寄寄り	N70度E	粘土	不明	-	-	-	カマド推定天井部遺存、6世紀前半の上寄り	
H	1	4	古墳	6世紀代	台形	3.80×4.06	15.42	11.91	39~51	N33度E	17~32	1~5	不明	東道中央寄寄り	N72度E	粘土	南東隅	不整形	84×61	89	カマド推定天井部遺存	
H	1	5	欠番																			
H	1	6	平安		台形	2.55×3.12	7.95	3.44	11~20	N60度E	17~25	4~9	不明	東道中央寄寄り	N87度E	粘土+G	南東隅	略門形	29×30	29	北東隅→中央部傾瓦により破壊	
H	1	7	平安		台形	3.00×3.53	10.59	2.34	21~32	N38度E	38~46	7~8	不明	東道中央寄寄り	N88度E	粘土+石	南東隅	略三角形	14×56	20	北東隅→中央部傾瓦により破壊	
H	1	8	古墳	9世紀後半	台形	2.75×3.40	9.35	6.59	19~33	N22度E	12~27	1~9	不明	東道中央寄寄り	N71度E	粘土+G	南東隅	略門形	78×63	53	遺物多い	
H	1	9	平安		9世紀中期	台形	3.53×3.57	12.60	9.83	27~42	30度E	26~35	2~4	P2及び北寄りビット	東道中央寄寄り	不明	不明	不明	不整形	42×37	44	北東隅→カマド傾瓦による破壊
H	1	10	古墳	5世紀末~6世紀前期	長方形	4.24×4.04	17.12	13.09	29~49	N66度E	15~27	1~8	P3、P4、P5、P6	東道中央寄寄り	N65度E	粘土+G	南東隅	略楕円形	79×62	51	滑石工用か	
H	1	11	古墳	9世紀後半	長方形	3.90×3.39	15.36	11.09	30~45	N30度E	10~52	2~9	P1~P2	東道中央寄寄り	N30度E	粘土+石多い	東隅	略楕円形	P2:58×55, P1:72, P4:73×71	55, 51	石筋の北カマド	
H	1	12	古墳	6世紀前半	長方形	4.81×3.98	19.14	11.20	24~37	N78度E	18~28	2~20	P2、P4、P6	東道中央寄寄り	N73度E	粘土+石	南東隅	不整形	74×75	85	カマド土器遺存	
H	1	13	奈良	9世紀前半	方形	3.03×2.99	9.05	6.20	20~30	N88度E	19~34	4~8	不明	東道中央寄寄り	N88度E	粘土+石	南東隅	不整形	27×23	7	北西隅欠	
H	1	14	古墳	5世紀後半	台形	4.77×4.84	23.08	6.08	28~59	N23度E	17~31	3~10	P2、P4、P5、P6	不明	-	南東隅	不整形	79×69	72	カマド不明、85土坑が破壊か		
H	1	15	古墳	6世紀後半	台形	4.31×4.61	19.86	14.12	24~52	N18度E	12~33	1~5	P1、P5	東道中央寄寄り	N87度E	石・粘土	長方形	73×54	81	南東部→北西隅欠		
H	1	16	古墳	5世紀末	台形	4.98×2.56	12.74×2.46	7.46	19~45	-	14~29	2~8	IP	東道寄寄り	-	粘土か	南東隅	略門形	70×71	75	北平部は調査区外	
I	1	11	平安	10世紀後半			20.22													もと住居		
I	1	2	古墳	9世紀中期	方形	7.10×6.81	48.35	38.97	23~49	N73度E	22~41	2~9	P1~P2	東道中央寄寄り	N79度E	石・粘土	カマド石組み	不整形	89×40	12	石製蓋方出土、10世紀前半の土器あり	
I	1	3	飛鳥	7世紀後半	長方形	3.19×3.61	11.51	5.40	57~71	N73度E	16~32	3~7	不明	東道中央寄寄り	N73度E	粘土	南東隅	不整形	68×41	65	障土遺物多い	
I	1	4	奈良	9世紀中期	台形	3.24×3.49	11.30	6.80	20~47	N2度E	27~49	2~8	P1~P2	東道中央寄寄り	N89度E	粘土	不明	-	-	-	カマド天井部一部残	
I	1	5	古墳	6世紀後半	方形	5.01×4.91	24.59	18.98	41~62	N90度E	18~34	2~10	P1~P4	東道中央寄寄り	N90度E	石・粘土	南東隅	略長方形	87×67	76	カマド遺存良好、成造あり	
I	1	6	古墳	6世紀後半	長方形	4.92×4.58	22.53	19.55	44~66	N84度E	18~37	2~9	P1、P4、P6、P7	東道中央寄寄り	N85度E	石・粘土	南東隅	略長方形	77×97	82	北壁に穴ナフ遺構、若成土層に高まり、南出入口	
I	1	7	奈良	8世紀前半	台形	3.51×3.31	11.61	8.04	51~80	N8度E	小ビット	1~11	不明	東道寄寄り	N83度E	粘土+石	南東隅	不整形	93×55	12	北東部壁外に幅50~60cmの平出部	
I	1	8	古墳	9世紀後半	台形	3.93×4.26	16.74	12.38	43~56	N95度E	小ビット	1~7	不明	東道寄寄り	N81度E	粘土+G	南東隅	略門形	73×66	55	床面→障土化	
I	1	9	古墳	9世紀後半	長方形	5.17×4.80	24.81	20.54	31~61	N49度E	30~40	1~3	P1~P4	東道中央寄寄り	N47度E	粘土+G	南隅	略門形	101×87	68	南西出入口、10世紀前半の土器あり	
I	2	1	縄文前期	張式	長方形	6.73×5.89	38.29	23.92	13~66	N20度E	縄溝	2~4	不明	伊	-	-	-	-	-	-	張式・有式	
I	2	2	縄文前期	張式	台形	5.01×4.71	23.59	12.98	49~65	N5度E	縄溝	2~4	不明	伊	-	-	-	-	-	-	張式・有式	
I	2	3	縄文前期	張式	不整形	4.35×2.35	10.22×1.1	6.39	51~67	-	不明	-	不明	P1、P2	伊不明	-	-	-	-	-	張式・有式	

#1 計算面積-計測可能な住居中央部付近の上層・土層で縦×横を計測し、その積の小數点第3位を四捨五入した計算値

#2 検出面積-住居床面に検出した範囲の面積を、プランメーター（PLANK）で測計し、その平均値の小數点第3位を切り捨てた値。

ビット・土坑面積を含むが、カマド面積・壁遣面積を含むない。

第6表 遺物観察表

番号	持回 P.L	種 器 種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
A区1住居							
A1	173	土師器 白付表	P1内-7 胴部	高台径8.4	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐色	外面はハケ日後、撫で。内面はハケ目(1cmに8本)。胴端部はヘラ削り、 胴部内面に直肌。	
B区SSピット							
B1	173	多孔石 焼陶器	B内-15	径20.5高さ15.2 厚12.8重5184.1	粗粒輝石安山岩	表裏面とも平らな確面に多数の孔を穿つ。このほか孔は側面にも数方 ある。	
B2	173	瀬戸・美濃 陶器片1.1鉢	樽上中部	底径8.1	淡黄	高台外面は高いが、内面の縁は浅い。内面から高台外面に直肌。底部 内面に目地1ヶ所残る。	江戸時代
C区1住居							
C1	173	土師器 高杯	西壁寄り-2 口縁片	口径15.8	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄褐色	内外面に丁寧なヘラ磨き後、赤色塗彩。	
C2	173	土師器 杯	埋没土 口縁片	口径12.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/赤褐色	内外面に丁寧なヘラ磨き。	
C3	173	土師器 小形丸底甕	埋没土 底部	—	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄褐色	底部は内外面ヘラ撫で。内外面赤彩。	
C4	173	土師器 高杯	北東部+14 胴部	脚底10.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐色	胴部外面は縦のヘラ磨き。内面は撫で。	
C5	173	土師器 白付表	埋没土 口縁片	口径14.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのハケ目(1cmに6本)。内面は横の ヘラ撫で。	
C6	173	土師器 白付表	西壁寄り+6 胴部	口径14.8	細砂粒・軽石/良好/稍	口縁部は横撫で。胴部外面はハケ目(1cmに7本)。内面は撫で。	
C7	173	石製模造品 有孔刀型	埋没土	長1.8891.8 厚0.2重1.6	滑石	表裏面とも研磨され、多方向の鋭角面が残る。体部に彫り取り整形 面が残る。径1.0mmの孔を片側穿孔。	
C8	173	石製模造品 有孔刀型	北部-1	長1.8891.8 厚0.3重1.7	滑石	表裏面とも研磨され、多方向の鋭角面が残る。体部に彫り取り整形 面が残る。径1.0mmの孔を片側穿孔。	
C9	173	石製模造品 写玉	中央部+39	長1.9860.5 厚0.7重1.0	滑石	板状素材を用いる。表裏面とも正面に穿孔孔を印した痕跡が残る。	
C10	173	銅片 棒状遺物	P1期+10	長17.1幅4.7 厚4.6重598.5	変質玄武銅	小1部先端に鋭利面がある。表面は摩耗して光沢を帯びているが、石 材が埋没で機械的に研磨できない。	
C11	173	鉄製品 筒状鉄片	南壁脚+12	径5.9幅3.25 厚2.2重60.0	—	柄首部は環状を呈する。寸ゆるぎ筒状である。刃部は両刃で基部 と比べて厚くつくられている。	
C区2住居							
C12	173	土師器 杯	西壁寄り+10 口縁片	口径8.8	細砂粒/良好/浅黄褐色	口縁部外面は縦のハケ目(1cmに6本)。内面は横のハケ目後、撫で。	
C13	173	土師器 杯	西壁寄り+4 底	—	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄褐色	口縁部から頸部は横撫で。胴部外面はハケ目(1cmに6本)。内面は丁 字単撫で。	
C区3住居							
C14	173	土師器 高杯	北西壁寄り+12 口縁-胴部	口径14.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/稍	口縁部は横撫で。杯部外面は横のヘラ磨き。内面は斜角射状ヘラ磨き。 底部内面中央に窪み。内外面はヘラ磨き。	
C15	173	土師器 杯	埋没土 底部片	底径2.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄褐色	杯部外面はヘラ磨き。胴部外面は縦のヘラ磨き。内面はヘラ撫で。	
C16	173	土師器 高杯	南内廊+9 杯底部-胴部	—	細砂粒・粗砂粒・軽石・ 角閃石/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で後、斜めのハケ目(1cmに10本)。胴部内面は横のハケ目。 口縁部外面に直肌付。	
C17	173	土師器 杯	埋没土 口縁部	口径16.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。頸部は斜めのハケ目(1cmに7本)。内面は撫で。	
C18	173	土師器 杯	北壁脚+7 口縁片	口径15.7	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。胴部は斜めのハケ目(1cmに7本)。内面は撫で。	
C19	173	土師器 杯	西部-3 口縁-胴部	口径11.8	細砂粒・軽石/良好/ 明赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのハケ目(1cmに6本)。胴部内面は 横のヘラ削り。胴部内面は横のハケ目(1cmに10本)。	
C区4住居							
C20	173	土師器 手捏ね土甕	P1内+14 口縁欠	底径3.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐色	手捏ねで外面に直肌。内面はハケによる撫で。吸込。	
C21	173	土師器 杯	埋没土 胴部-底部	—	細砂粒・角閃石/良好/稍	口縁部外面は縦のヘラ磨き。底部は手持ちヘラ削り。口縁部内面はハ ケ目(1cmに9本)。内面直肌付。	
C22	174	土師器 小形丸底甕	埋没土 胴部	口径12.9	細砂粒・角閃石/良好/ 赤オリーブ	口縁部は横撫で。胴部外面は縦の磨きヘラ磨き。体部外面は横のヘラ 磨き。内面は斜めのハケ目(1cmに8本)。	
C23	174	土師器 杯	P1内+11 胴部-底部	底径3.0	細砂粒・軽石/良好/赤褐色	胴部外面はヘラ削り。底部もヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
C24	174	土師器 杯	P1内+2 口縁-胴部	口径14.8	細砂粒・粗砂粒/良好/赤	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のハケ目(1cmに10本)後、撫で。胴部 内面ヘラ削り。胴部内面は斜めのハケ目(1cmに12本)。	
C25	174	土師器 丸形土甕	P1内+17 口縁-胴部	口径10.6高さ9.9 脚径3.7重40.4	細砂粒/良好/明黄褐色	厚手作りで紡錘形の体部を左右動かし合わせて成形しており、内外面に 後口金を残す。口縁部は直肌直縁で作りは粗い。紡錘形の体部の一端 には径4mmの窪みがある。	
C26	174	砥石? 磨石	P2期脚	長38.幅13.8 厚13.6重2150.0	粗粒輝石安山岩	表面が平坦で狭い。背面面エッジに平面面があり、砥石と似た。大部 分が磨粉脱落しており、詳細は不明。	
C27	174	砥石 切り砥石	北西-括	長(6.4)幅(0.8) 厚(0.9)重3.3	珪質頁岩	砥石部は縦片で、薄型の部部に入る。石材は細粒質で、仕上げ風とい うことになる。	
C区5住居							
C28	174	土師器 杯	南西廊+11 1/2	口径12.9	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。 内面直肌付。	
C29	174	土師器 杯	南西廊+8 1/2	口径15.5高さ4.2 器高4.0	細砂粒/良好/稍	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで間に撫での部分を残す。内 面は撫で。ハゼ、外面磨肌。	
C30	174	直流甕 杯	埋没土 1/2	口径15.2底径10.0 器高4.0	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転車切り無調整。厚手で作る作り。	
C31	174	須恵系 高台杯	カマ下左外+15 底部	底径10.8	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。体部下端は回転ヘラ削り。底部回転ヘ ラ削り後の付高台。底部に自然肌。	
C32	174	土師器 杯	カマ下内+4 胴部	—	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい赤褐色	胴部外面は縦のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。	
C区20土坑							
C33	174	加工面ある 薄片 小型副片	東部+4	長1.8幅1.5厚0.6 重1.3	黒曜石	打点の両側縁を粗磨き加する。薄片は打点の振り幅の広い石片割片 片を用いる。打点遺物の戻入か。	
E区1住居							
E1	175	土師器 杯	北西壁脚+8 口縁-底部	口径12.3器高3.9	細砂粒/良好/稍	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで間に撫での部分を残す。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持戻P/L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
E 2	175 142	土師器 杯	内腹面・2 底面・底面	口径11.5器高3.4 底径9.0	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部横溝で、底部は手持ちへう割り。内面は横で、内外面に黒褐色の塗彩が施されている。	
E 3	175 142	須恵器	中央部南寄り・7 口縁一部	口径12.6底径6.8 器高3.9	細砂粒・粗砂粒/還元焼成/灰	ロクロ整形(左回転)。底部は回転糸切り無調整。	
E 4	175 142	須恵器	埋没土 口縁	口径12.6底径7.7 器高3.7	細砂粒・粗砂粒/還元焼成/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。底部にヒビ割れ。	
E 5	175	須恵器 杯	埋没土 口縁	口径13.7	細砂粒/還元焼成/灰	ロクロ整形(右回転)。	
E 6	175	土師器 白付巻	カマド・2 胴部一部	高径19.8	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面は斜めのへう割り。内面はへう割で、胴部は丁寧な彫付。	
E 7	175 142	土師器 丸付巻	東寄り・3 底面	口径13.8器高14.3 底径6.0	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横溝で、胴部外面は斜めのへう割り。内面は横で、胴部下位に1ヶ所外側からの穿孔。	
E 8	175	鉄製品 釘か?	北東部・2	径3.3φ0.3 φ0.3重1.5		断面四角形で先細りになっている。両端を欠損しているため、種類としないが、紡錘車の軸の可能性もある。	
E 9	175	鉄製品 鎌	北東部・5	径3.8φ2.5 φ0.3重38.4		先鋒半分と基部の一部を欠損する。残存する方は両面しており、刃がみられる。	
E 区 2 住居							
E 10	175 142	土師器	東寄り・1 口縁一部	口径12.6器高3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横溝で、底部は手持ちへう割りで、間に横での部分を残す。内面は横で。	
E 11	175 142	土師器	南寄り・14 口縁一部	口径11.5器高3.3	細砂粒/良好/に・い・赤褐	口縁部は横溝で、体部も横で。底部は手持ちへう割り。内面は横で。	
E 12	175	土師器 杯	埋没土 口縁	口径12.8器高3.7	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横溝で、体部も横で。外面の巻面顯著。	
E 13	175	須恵器 杯	埋没土 胴部一部	底径9.0	細砂粒/還元焼成/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。底部は回転糸切り無調整。	
E 14	175	土師器 杯	北西側部・25 口縁	口径12.0底径10.2 器高3.1	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横溝で、体部は斜な横で。底部は手持ちへう割り。内面は横で。	
E 15	175 142	土師器	中央部北寄 口縁	口径13.6底径9.2 器高4.4	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横溝で、体部も横で。底部は手持ちへう割り。内面は横で。底部に巻書、文字不明。	
E 16	175 142	須恵器	南東隅寄り・3 口縁一部	口径13.1底径8.5 器高3.5	細砂粒/還元焼成/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部外面吸込。底部周辺は粗粒顯著。	
E 17	175	須恵器 杯	埋没土	底径15.5	細砂粒・粗砂粒・片貝 還元焼成/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
E 18	175	土師器 丸	カマド内・8 口縁一部	口径19.9	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横溝で、外面に輪筋のみ。胴部外面は横。胴部は斜めのへう割り。内面は横のへう割で。	
E 19	175	須恵器 丸	東寄り・12 口縁一部	口径19.9	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横溝で、外面に輪筋のみ。胴部外面は横のへう割で。胴部外面に彫付着。内面はへう割で。	
E 20	175	土師器 丸	カマド内・4 胴部	—	細砂粒/良好/赤褐	胴部外面は斜めから縦のへう割り。内面は横のへう割で、接合面。	
E 21	175	土師器 丸	カマド内・3 胴部一部	底径5.2	細砂粒/良好/に・い・赤褐	胴部外面は斜めからのへう割り。彫付着。内面は横で、接合面。	
E 22	142	磁石 押込磚	南西側部0	長15.5幅5.0 厚4.3重45.8		小1号南面に数行の、特に上端の小1号の縦行が著しい。断面三角形を示す。	
E 区 3 住居							
E 23	176 142	土師器	南東隅寄り・1 口縁一部	口径12.8器高4.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横溝で、底部は手持ちへう割りで、間に横での部分を広く残す。内面のへう割で。	
E 24	176 142	土師器	南東隅寄り・1 口縁	口径15.6器高5.1	細砂粒・雲母/良好/ に・い・赤褐	口縁部は横溝で、底部は手持ちへう割り。内面は横で。	
E 25	176 142	土師器	西部・1 胴部一部	口径21.3底径3.3 器高3.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横溝で、胴部外面は斜めから縦のへう割り。内面は横のへう割で。	
E 26	176	須恵器	中央部東寄り・1 胴部一部	—	細砂粒/還元焼成/灰	明き整形。外面は平行明き後、明き目を横で消す。内面の当て具は青海波文。外面わずかに自然塗。	
E 27	176	須恵器	南東部・10 胴部一部	—	細砂粒/還元焼成/灰白	明き整形。外面平行明き。内面当て具は青海波文。	
E 28	176 142	灰石 煉瓦	中央部・5	長10.7幅5.1 厚2.9重289.0		背面側平出面が摩耗して突起を帯びる。石材は縦置で、縦線表面は見られない。	
E 29	176	石製品 不明	中央部南寄り・1 不明	長(13.3)幅(16.9) 0.2重623.8		二ツ並軽石	断面が全周を覆い、本来の形状は不明。背面側に研磨・整形した平出面が残る。
E 区 4 住居							
E 30	176	土師器 杯	カマド前・12 口縁	口径11.4	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横溝で、体部は斜な横で。内面は横で。外面粉っぽい土。	
E 31	176	土師器 杯	カマド内・20 口縁	口径11.8底径7.9 器高3.0	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横溝で、体部は斜な横で。底部は手持ちへう割り。内面は横で。	
E 32	176	土師器	南東隅寄り・7 口縁	口径13.0底径7.7 器高3.0	細砂粒/酸化焼成/明赤褐	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
E 33	176	土師器 杯	カマド前 口縁	口径19.7	細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横溝で、胴部外面は斜めのへう割り。内面は横のへう割で。	
E 34	176	土師器	カマド前・9 口縁一部	口径21.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横溝で、胴部外面は横。胴部外面は斜めのへう割り。内面は横で。	
E 35	177	土師器	南東隅寄り・9 口縁一部	口径19.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横溝で、胴部外面は斜めから縦のへう割り。内面は横のへう割で、彫付着。	
E 36	177	土師器	カマド前・8 口縁一部	口径19.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横溝で、胴部外面は横。胴部外面は斜めのへう割り。内面は横のへう割で。	
E 37	177	鉄製品 丸鋸	埋没土	径1.8幅2.3φ0.3 重1.8		鋸歯で高さ3.5mmの穿孔が穿孔されている。表面から側面および底面の痕跡は線状整形されており、表面の粗粒研磨が施されている。内面は顕明を残し、2ヶ所に径1mmの断基部が残存している。	
E 38	177	鉄製品 刀子	カマド	径3.5φ0.4 幅1.4重4.3		基部と刃先を欠損する。柄区と刃区は比較的良好に残存している。	
E 区 5 住居							
E 39	177	土師器 丸	北寄り・5 口縁一部	口径19.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横溝で、内外面に輪筋のみ。胴部外面は横のへう割り。内面は横のへう割で。	
E 40	177	鉄製品 鎌	北東部0	長19.7幅3.1 φ0.25重75.3		刃先と基部の一部が欠損し錆化が進んでいる。基部背面に柄の本質がわずかに残存している。	
E 区 6 住居							
E 41	177	土師器 杯	南寄り・2 口縁	口径11.5底径8.0 器高3.0	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横溝で、歪み顯著。体部は斜な横で。底部は手持ちへう割り。内面は横で。	

番号	持回P.L	種別	出土位置	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
E 42	177 143	土師器 丸底貯3 杯	南院際-3 底径6.4	底径6.4	細砂粒/酸化層/箱	口ロコ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。内面は丁寧なヘラ書き後、黒色染層。外部外面に「平」の磨痕。	
E 43	177	土師器 杯	カマド内+15 2/3	口径14.8	細砂粒・角閃石/良好 にふいぶ焼	口縁部は横溝で、外部外面は横の手持ちヘラ削り。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、黒な放射状。暗文。	
E 44	177	須恵器 杯	南内院-3 底径6.0	口径12.0底径6.0 器高3.8	細砂粒・粗砂粒/還元層 /灰	口ロコ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
E 45	177	須恵器 杯	南院際+20 2/3	口径16.9横2.8 器高3.7	細砂粒・粗砂粒/片岩/還元層/灰	口ロコ整形(右回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。胴みはボタン状で天井部回転ヘラ削りの跡が残付。	
E 46	177	須恵器 杯	カマド内+35 高付穴	口径15.0	細砂粒・粗砂粒/還元層 /灰口	口ロコ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台で、胎付部から欠損。内面に黒むき肌。黒部高。	
E 47	177	須恵器 杯	埋土上 2/3	口径13.1底径9.0 器高4.0	細砂粒・粗砂粒・片岩/還元層/灰	口ロコ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
E 48	177 143	須恵器 杯	中央部+2 2/3	口径14.9底径7.8 器高6.7	細砂粒・粗砂粒・石英/還元層/灰	口ロコ整形(右回転)。高台端部に凹溝が走り、底部回転糸切り後の付高台。	
E 49	177 143	須恵器 杯	中央部+36 口縁一部欠	口径14.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/還元層/灰口	口ロコ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台で、胎付部から剥離。内面に黒むき肌。	
E 50	177	土師器 杯	中央部東寄り +9底径5.0	底径5.0	細砂粒/良好/箱	胴部外面下端はヘラ削り。底部もヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
E 51	177	土師器 杯	南院際+4 口縁部片	口径19.7	細砂粒/良好/にふいぶ黄緑	口縁部は横溝で。	
E 52	177	土師器 杯	カマド内+44 口縁部片	口径17.7	細砂粒/良好/箱	口縁部は横溝で、胴部外面は斜めのヘラ削り。	
E 53	177	土師器 杯	カマド内+23 口縁部片	口径19.7	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横溝で。	
E 54	177	土師器 杯	中央部+2 口縁部片	口径19.8	細砂粒/良好/箱	口縁部は横溝で、外面に輪指み痕。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
E 55	177	土師器 杯	南部+14 口縁部片	口径18.7	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横溝で、胴部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。胴部外面に輪指み痕。	
E 56	178	土師器 杯	カマド内+18 口縁片	口径19.4	細砂粒・角閃石/良好/明赤褐	口縁部は横溝で、胴部外面は横。胴部は縦のヘラ削り。内面は撫で。	
E 57	178	土師器 杯	カマド左袖-1 口縁-胴部	口径20.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/明赤褐	口縁部は横溝で、胴部外面は横から斜め。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
E 58	178	土師器 杯	南院際-17 製印片	底径4.6	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。	
E 59	178	土師器 杯	カマド内+17 口縁片	口径19.6	細砂粒/良好/箱	口縁部は横溝で、胴部外面は横。胴部は斜めのヘラ削り。内面は撫で。	
E 60	178	土師器 杯	南部+10 胴下部片	底径3.8	細砂粒・角閃石/良好/明赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。底部外面磨滅。	
E 61	178	土師器 杯	中央部東寄り+11 底部片	—	細砂粒/良好/にふいぶ赤	杯底面が手持ちヘラ削り。内面は撫で。内面に磨痕。文字不明。	
E 62	178 143	鉄製品 刀子	中央部西寄り+22 長3.7幅1.1厚0.3 重4.6	長3.7幅1.1厚0.3 重4.6	—	軸区は残存するが刃区は完全にない。某と切先磨欠損する。	
F区1住居							
F 1	143	須恵器 杯	東院際+5 1/2	口径12.8底径6.4 器高3.7	細砂粒/還元層/灰	口ロコ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。外部内面に「長」の磨痕。	
F区2住居							
F 2	178	土師器 杯	南院際+2 3/4	口径12.1	細砂粒/良好/箱	口縁部は横溝で、外部外面は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。赤むき肌。	
F 3	178 143	土師器 杯	カマド右袖+13 3/4	口径12.1	細砂粒・粗砂粒/良好/箱	口縁部は横溝で、外部外面は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 4	178	土師器 杯	南院際+2 1/8	口径12.0器高3.6 明赤褐	細砂粒・角閃石/良好/明赤褐	口縁部は横溝で、外面に輪指み痕。胴部外面は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 5	178	土師器 杯	中央部東寄り-3 1/3	口径11.9器高2.7	細砂粒/良好/箱	口縁部は横溝で、外部外面は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 6	178	須恵器 杯	北院際-9 1/4	口径15.8	細砂粒/還元層/灰白	口ロコ整形(右回転)。外面天井部は回転ヘラ削り。外面に環の黒むき肌。	
F 7	178	須恵器 杯	西院際+39 口縁部片	口径11.8底径7.6 器高3.4	細砂粒・粗砂粒/還元層/灰口	口ロコ整形(回転方向不明)。底部切り磨しは不明。	
F 8	178	須恵器 杯	中央部-1 1/8	口径11.4底径7.6 器高3.4	細砂粒/還元層/灰白	口ロコ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
F 9	178	須恵器 杯	中央部+36 1/4	口径11.8底径7.2 器高5.9	細砂粒/還元層/灰	口ロコ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。横し。	
F 10	178 143	須恵器 杯	北内院-11 5/6	口径12.8底径6.5 器高4.3	細砂粒・針状鉱物/還元層/にふいぶ黄	口ロコ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。内外面に火跡。一部酸化。南むき肌。	
F 11	178	須恵器 杯	南内院-38 高台部	底径8.0	細砂粒/還元層/灰	口ロコ整形(右回転)。底部は回転ヘラ起こし無調整。	
F 12	178	須恵器 杯	西部+2 高台部	底径7.3	細砂粒/還元層/灰	口ロコ整形(右回転)。高台は底部静止糸切り後の付高台。	
F 13	178	須恵器 杯	北内院寄り+36 底部	—	細砂粒/還元層/灰	口ロコ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
F 14	178	土師器 杯	南院際+2 口縁部3/4	口径20.6	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横溝で、胴部外面は横から斜め。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。横指痕。	
F 15	178 143	土師器 杯	南院際寄り+3 1/8	口径20.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ にふいぶ黄	口縁部は横溝で、外面に輪指み痕。胴部外面は横。胴部は縦のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。	
F 16	178	土師器 杯	南部-1 胴部-底部	底径4.2	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り。底部はヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
F 17	178	須恵器 杯	南院際寄り+2 胴部-胴部片	—	細砂粒/還元層/灰	口ロコ整形。胴部外面に三条の沈線を通らし、間にクシの刺突文を施文。胴部外面に自然釉。	
F 18	179	須恵器 杯	南部+3 口縁部片	口径24.0	細砂粒・粗砂粒/還元層/灰	口ロコ整形(右回転)。口縁部の剥離が目立つ。	
F 19	179	土師器 杯	南院際寄り+11 王研	径2.2幅2.0 厚2.2	細砂粒・角閃石/良好/ にふいぶ黄	器面に指の整形痕。	
F 20	143	砂輪 小判型	南院部-2 1尺1.4厚40.8	径5.0幅4.3 厚1.4厚40.8	黒沢石	器面が厚く不明瞭だが、左縁部の平坦面は炭石内産品としての可能性を感じる。径7mmの孔を内側穿し。	
F 21	143	鉄製品 磨か	中央部西寄り +39	径2.9幅0.5 厚0.3重3.6	—	残存する端部の断面形状は長方形を呈しており磨であるとするは某部と考えられる。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持回P.L	種類	出土位置	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
F22	179	鉄製品 不明	南西面-35	長4.6幅0.5 厚0.2重3.4		断面は三角形を呈しているが、刀子にしては薄い。鋸の可能性もあるが全体的に分からないため不明。	
F23	179	鉄製品 143	中央部-42	長5.6幅0.5 厚0.6重7.1		鋸と鋸の一部が残存する。刃部形状は不明。	
F24	179	鉄製品 143	東側溝り+3	長6.6幅0.7 厚0.2重8.6		刃部形状は不明であるが長方形刃部と可能性が有る。角剛を有するが厚の長さが短い。	
F25	179	鉄製品 U字 型鋸・鋸先	東側溝内+7	長15.6幅0.2 厚0.5重100.0		側面が残存したもので刃部は欠損か、断面はY字状で鈍化が進んでいる。	
F26	179	砥石 143	確認面	長7.4幅4.0 厚3.6重141.9	砥石	西面使用。小川部に整形痕を残す他、よく使込まれている。磨面は糸巻状を呈する。上端部を欠け。	
F区 13住居							
F27	179	土師器 143	南部-5 底部分	口径12.0底径3.4	細砂粒・雲母/良好/橙	口縁部は横溝で、体部は指押入。底部は手持ちヘラ削り。内面は横溝で、内面は横溝。	
F28	179	須恵器	北島陽+47 1/4 底部	口径11.8底径5.2 高さ3.6	細砂粒/還元焰/灰	口縁部(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
F29	179	須恵器	西側溝り+71 底部	口径8.2	細砂粒/還元焰/黄	口縁部(左回転)。底部は回転ヘラ削り。底部内外面に酸化部分が残る。	
F30	179	土師器	南面 口縁部分	口径20.6	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横溝で、胴部は横のヘラ削り。内面はヘラ削り。胴部外面に輪筋が施す。	
F31	179	須恵器	中央北側溝り+5 底部付	口径13.4	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	明き整形。胴部外面は格子押さ、下端ヘラ削り。内面に炭文の当て具残。底部内外面に自然焼。	
F32	179	須恵器	南部-1 頸部+ 胴部・底部付	口径14.8	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元焰/灰	口縁部(右回転)。胴部に厚の押さえ筋。底部ヘラ削り。	同上復元
F33	179	紡輪 143	中央部溝り+9 逆台形状	長5.0幅5.3 厚2.0重72.3	砥石	側面側面を粗く面取り整形する。孔2が重複。穿孔されており、軸孔径は不明。穿孔孔径は9mm程度と推定。	
F区 14住居							
F34	180	須恵器	中央部-3 底部+体部	底径7.0	細砂粒/還元焰/灰	口縁部(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
F35	180	須恵器	中央部-1 底部+体部	底径6.4	細砂粒/還元焰/灰	口縁部(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
F36	180	土師器	北側溝り+3 1/2	口径20.2底径3.6 高さ27.4	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横溝で、外面に輪筋が施す。胴部外面は横、胴部は斜めのヘラ削り。内面は横溝で、接合面。	
F区 15住居							
F37	180	土師器	北東部-2 口縁+胴部付	口径20.1	細砂粒/良好/ぶい・黄緑	口縁部は横溝で、胴部外面は横のヘラ削り。内面は横溝で、	
F38	180	土師器	カマ下内+14 口縁+胴部付	口径20.6	細砂粒/良好/ぶい・赤黒	口縁部は横溝で、胴部外面は横ヘラ削り後腹の横溝で、内面は横溝で、	
F区 16住居							
F39	180	土師器	一括 口縁+体部	口径11.8	細砂粒/良好/ぶい・黄緑	口縁部は横溝で、底部は手持ちヘラ削り。胴に横溝の部分を残す。内面は横溝。	
F40	180	土師器	カマ下内+2 1/4	口径13.8底径2.8	細砂粒/良好/ぶい・赤	口縁部は横溝で、底部は手持ちヘラ削り。内面は横溝で、見込み部中央測線。	
F41	180	土師器	カマ下右側+10 口縁+体部	口径12.8	細砂粒・角閃石/良好/ ぶい・赤	口縁部は横溝で、底部は手持ちヘラ削りで指で押さえた面筋が残る。内面は横溝。	
F42	180	須恵器	一括 口縁部分	口径12.9	細砂粒/還元焰/灰白	口縁部(右回転)方向不明。内面のかさはシャープさを欠く。	
F43	180	須恵器	南側溝り+10 1/2	口径14.5底径10.2 高さ3.5	細砂粒/還元焰/灰白	口縁部(左回転)。体部下端ヘラ削り。底部は手持ちヘラ削り	
F44	180	須恵器	埋没土 口縁部分	口径16.0	細砂粒/還元焰/灰	口縁部(回転方向不明)。	
F45	180	土師器	中央部-16 口縁部分	口径19.7	細砂粒/良好/ぶい・赤	口縁部は横溝で、外面に輪筋が施す。胴部外面は横のヘラ削り。内面は斜めのヘラ削り。	
F46	180	須恵器	埋没土 口縁部分	口径31.1	細砂粒/還元焰/灰 断面セピア色	胴部外面は押し不明。内面は当て具、背曲線。胴部外面・口縁部内面に自然焼。	
F47	180	新製品 143	一括	長2.8幅1.69厚0.2 重1.5		構造上寸法を欠損する。表面の平面及び内面に平面に研がれ先端部に狭い面取りが見られる。漆の残存は見られない。内面は銅板を残し、2方所に径1mm程度の鋸筋が残存している。	
F区 17住居							
F48	180	土師器	カマ下内+1 1/4	口径11.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ ぶい・赤黒	口縁部は横溝で、内面に備付着。体部は横溝で、底部は手持ちヘラ削り。内面は横溝。	
F49	180	土師器	南下内+18 口縁部分	口径12.0	細砂粒・角閃石/良好/ ぶい・黄緑	口縁部は横溝で、体部外面は横溝で、底部は手持ちヘラ削り。内面は横溝で、	
F50	180	須恵器	南側溝り+18 1/4	口径17.2底径3.9	細砂粒/還元焰/灰白	口縁部(右回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。溝みは帯状に貼付け。厚手の作り。	
F51	180	須恵器	中央部東側溝り+5 143	口径17.2底径3.7 高さ7.8	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ ぶい・黄緑	口縁部(右回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。溝みはボロン状のみで貼付け。内外面の重ねが施す。	
F52	180	須恵器	南側溝り+8 143	口径12.8底径6.0 高さ3.4	細砂粒/還元焰/ ぶい・黄緑	口縁部(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部外面に「一」の墨書。	
F53	180	須恵器	カマ下内+2 口縁+体部	口径13.0底径7.3 高さ3.3	細砂粒/還元焰/灰	口縁部(右回転)。底部は回転糸切り無調整。見込み部磨面。	
F54	180	須恵器	カマ下内+1 口縁+体部	口径12.8底径6.5 高さ3.2	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰/黄緑	口縁部(右回転)。底部は回転糸切り無調整。口縁部外面に噴沢。	
F55	180	須恵器	南側溝り+3 143	口径15.8底径10.0 高さ6.8	細砂粒/還元焰/灰	口縁部(右回転)。高台は底部回転ヘラ削り後の付合台。体部外面に出の墨書。	
F56	181	土師器	南側溝り+3 胴部+底部分	口径11.2	細砂粒・雲母/良好/ ぶい・赤黒	胴部下半の外面は横のヘラ削り。内面は横溝で、胴部は貼付け。胴部内面に「二」。	
F57	181	土師器	カマ下内+1 口縁+胴部 3/4・底部欠	口径13.8底径4.2	細砂粒/良好/ぶい・赤	口縁部は横溝で、胴部外面は横溝で、胴部下半は縦のヘラ削り。内面は横溝で、胴部内面下半は側面磨面。	
F58	181	砥石 143	中央部-1 切り砥石	長(6.7)幅4.2 厚0.8重299.3	砥石	西面使用。両側面の使用面は粗く、整形痕が残る。下端・小川部は粗い磨き整形。	
F59	181	磨石 143	南部-6 山形半環	長17幅11.1 厚1.1重134.1	粗粒輝石燧山岩	表面磨石とも部分別に黒く光沢を帯び、滑り摩擦しているように見える。長径部は直線。石目が粗粒質。	
F60	181	鉄製品 143	中央部-3 基部一部欠	長14.4幅0.3 厚3.5重15.8		輪部、刃区に現存は良好である。刃部は研ぎ減りややや湾曲がみで短く欠けている。	

番号	持因 P.L	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
F区7・8住居							
F61	181	土師器 杯	7住南外・8住 北1/4	L径12.4底径7.9 器高3.3	細砂粒/良好/に ぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 体部外面に指の押さえ。 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で。	
F62	181	土師器 甕	7住南段階・8住 一坊 L縁→胴部	L径13.0	細砂粒・雲母/良好/赤	L縁部は横撫で、 胴部外面は横から斜めのへう割り。 内面は横のへう 撫で。	
F区8住居							
F63	181	土師器 杯	一括 L縁→体部	L径12.0	細砂粒・輝石/良好/ にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 胴に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
F64	181	土師器 杯	北部7 1/2	L径12.8器高3.1	細砂粒/良好/稍	L縁部は横撫で、 内外面の一部に喫炭。 底部は手持ちへう割りで、 胴に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
F65	181	土師器 杯	南東部寄り・36 L縁→体部	L径12.0	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で、 粉っぽい胎土。 内面は撫で。	
F66	181	土師器 杯	南東部寄り・1 1/4	L径13.1	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 胴に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
F67	181	土師器 杯	西部47 1/4	L径12.7	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 胴に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
F68	181	土師器 杯	東部25 1/4	L径11.8	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 胴に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
F69	181	土師器 杯	東部階・49 1/4	L径12.8器高4.1	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 胴に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
F70	181	土師器 杯	一括 L縁→体部	L径11.6	細砂粒/良好/灰褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で。	
F71	181	土師器 甕	東部階・53 L縁→体部	L径13.9	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 胴に粗い撫での部分を残す。 内面は撫で、 内外面磨滅。	
F72	181	土師器 杯	P区内32 L縁→体部	L径12.4	細砂粒/良好/明赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で、 粉っぽい胎土。 内面は撫で。	
F73	181	土師器 甕	北西部・32 L縁→体部	L径14.8	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で、 磨滅している。	
F74	181	土師器 甕	一括 L縁→体部	L径14.7	細砂粒/良好/稍	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 胴にわずかに撫での部分 を残す。内面は撫で。	
F75	181	土師器 杯	一括 1/4	L径12.8	細砂粒/良好/稍	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 外縁はほとんど見られない。 内面は撫で。	
F76	181	土師器 甕	西部115 L縁→体部	L径13.8器高3.5	細砂粒/良好/稍	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 胴に粗い撫での部分が見 られる。内面は撫で、 磨滅顯著。	
F77	181	土師器 甕	一括 2/3	L径16.0器高3.4	細砂粒/良好/稍	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で。	
F78	181	土師器 甕	一括 2/3	L径15.8	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で、 粉っぽい胎土。 内面は撫で。	
F79	181	土師器 甕	南東部・5 1/4	L径15.9	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で。	
F80	181	土師器 杯	一括 L縁→体部	L径14.8	細砂粒/良好/稍	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り、 胴に僅かに撫での部分を残す。 内面は撫で。	
F81	181	土師器 杯	西部50 L縁→体部	L径16.9	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で、 磨滅。	
F82	181	土師器 杯	東部階・6 1/4	L径14.3器高4.8	細砂粒/良好/稍	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 胴に撫での部分を残す。 内面は撫で、 粉っぽい胎土。 内面は撫で。	
F83	181	土師器 杯	中央部北東寄り 1/3	L径16.4器高5.2	細砂粒/良好/稍	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割りで、 胴に撫での部分を残す。 内面は撫で、 内外面の磨滅顯著。	
F84	181	土師器 甕	南東部寄り・20 1/4	L径17.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/稍	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で。	
F85	181	須恵器 杯	西部48 1/4	L径10.6底径4.0 器高3.3	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。 底部は回転へう起こし後の 回転へう割りと考えら れる。体部外面の部分的に 回転へう割り。	
F86	181	土師器 浅鉢	西部4 L縁→胴部片	L径17.6	細砂粒・角閃石/良好/稍	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で、 磨滅著。	
F87	181	須恵器 中央部南寄り・49 胴部→体部	直径3.8	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰褐色	ロクロ整形(左回転か)、 縮みは縦状のみで、 天井部外面の回転へう割 り後の磨滅。		
F88	181	土師器 甕	中央部南寄り・48 L縁→胴部片	L径17.6	細砂粒・粗砂粒・輝石/ 良好/にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 胴部外面は横のへう割り。 内面は撫で。	
F89	181	土師器 甕	北部6 L縁→胴部片	L径23.6	細砂粒・粗砂粒・輝石・角 閃石/良好/にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 胴部外面は横のへう割り。 内面は撫で。	
F90	181	土師器 甕	北西部・3 L縁→胴部片	L径16.0	細砂粒/良好/明赤褐色	L縁部は横撫で、 胴部外面は斜めのへう割り。 内面は撫で、 ハゼ顯著。	
F91	181	土師器 甕	一括 L縁→胴部片	L径23.6	細砂粒/良好/稍	L縁部は横撫で、 胴部外面は横のへう割り。 内面は横のへう割りで、 磨滅。	
F92	182	土師器 甕	北部3 L縁→胴部片	L径24.7	細砂粒・粗砂粒・輝石/ 良好/稍	L縁部は横撫で、 胴部外面は横のへう割り。 内面は横のへう割りで、 磨滅著。	
F93	182	須恵器 刀子	中央部6 基部	長4.3器高6 厚0.2重1.9		基部だけが残存。	
F94	182	須恵器 刀子	P3内・38	長7.9重1.6 厚0.4重9.1		基部と切先を欠損する。 柄部の残存は良好で刃区は 判然とし、肉付き減り減り が著しい。	
F区1溝							
F95	182	須恵器 甕	西部南立寄り・6 胴部片	—	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形。胴部外面に 自然回転軸。	
F96	182	須恵器 甕	西部南立寄り・3 胴部→底部片	—	細砂粒/還元焰/浅黄褐色	外面は方向を変えて平 行円錐をききすることで 格子状。内面の当て貝は 青黄変色。	
F区2溝							
F97	182	須恵器 杯	北部 底部片	底径5.9	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。 高台は底部回転軸系切り 後の付高台。内外面にわ ずかに自然軸。	
F区3溝							
F98	182	須恵器 釘か	埋没土	長3.5器高0.6 厚5.5重3.1		両端を欠損するが先端 が見られることから先 端に近い部位と見られ る。	
G区1住							
G1	184	土師器 杯	東部・37 完形	L径12.5器高5.5	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	L縁部は横撫で、 底部は手持ちへう割り。 内面は撫で。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持坪P.L	種別	出土位置 存残率	計測値(cm,g)	粘土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
G 2	182 144	土師器 杯	南東部-38 I.1線一部区	I.1径12.5器高5.1	細砂粒/良好/明赤褐	I.1線部は横溝で、底部は手持ちへら削り。内面は横で、I.1線部に凹縁が認められる。底面中央突縁。	
G 3	182	土師器 土師付焚	北東部-4 I.1線一部区	高径8.6	細砂粒/良好/明赤褐	脚部は丁寧な削付。	
G 4	182 144	土師器 杯	南東部-46 I.1線一部区	I.1径17.8底径8.0 器高19.6	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/相	I.1線部は横溝で、外面に輪積み痕。体部外面は縦のへら削りで、内面は斜めのへら削り。	
G 5	182	土師器 甕	南東部-5 胴部一部区	I.1径5.6	細砂粒・軽石/良好/ に赤い黄褐	胴部外面は斜めのへら削り。底部はへら削り。内面は横で、胴部内面の付着物。底面内面に赤い黄褐色。	
G 6	182	土師器 甕	南東部-1 胴部一部区	I.1径17.2	細砂粒/良好/に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、胴部外面は斜めのへら削り。内面は横で、	
G 7	182	土師器 甕	カマド内+6 胴部一部区	—	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、胴部外面上半は横で、下半は斜めのへら削り。黒泥と焼熱による変色。内面は斜めのへら削りで、輪積み痕。	
G 8	182 144	土師器 甕	カマド内+6 I.1線一部区	I.1径17.9底径6.8 器高23.1	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/明赤褐	I.1線部は横溝で、胴部外面は斜めのへら削り。内面は斜めで、下半は横から斜めのへら削りで、内面は横で、ハゼ面露。	
G 9	182 144	土師器 甕	カマド内+6 胴部欠	I.1径17.7底径6.7 器高22.4	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、胴部外面上半は横から斜めのへら削りで、下半は斜めのへら削り。内面は横のへら削りで、輪積み痕。底部はへら削り。	
G 10	183 144	土師器 甕	南東部-1 胴部一部区	I.1径17.4底径6.0 器高33.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、胴部外面は縦のへら削り。内面は斜めの横で、下に接合痕。	
G 11	183 144	土師器 甕	カマド内+5 胴部一部区	I.1径18.8底径5.8 器高37.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、胴部外面上半は横、下半は斜めのへら削り。内面は横で、下半のハゼ面露。	
G区 2 住居							
G 12	183 144	土師器 杯	カマド内0 完形	I.1径13.2器高4.9	細砂粒/良好/赤褐	内斜I.1線部でI.1線部は横溝で、底部は横で、内面は丁寧な横で後、斜射状のシャープなへら削り。継ぎなし。	
G 13	183 144	土師器 杯	南東部-9 I.1線一部区	I.1径13.1器高4.8	細砂粒・粗砂粒/良好/相	I.1線部は横溝で、底部はへら削り。内面は横で、内外面露。	
G 14	183 144	土師器 杯	カマド内+1 完形	I.1径12.4器高5.4	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/相	シャープな削りでI.1線部は横溝で、I.1線部には凹縁が認められる。底部は手持ちへら削り。内面は横で、	
G 15	183 144	土師器 杯	カマド内+16 完形	I.1径12.4器高5.1	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/相	I.1線部は横溝で、I.1線部には凹縁が認められる。底部は手持ちへら削り。内面は横で、	
G 16	183 144	土師器 杯	北部-2 I.1線一部区	I.1径11.6高5.7	細砂粒・粗砂粒・石英 良好/明赤褐	I.1線部は横溝で、底部はへら削り。内面は横で、I.1線部外面から底部の一部塗布あり。	
G 17	183 144	土師器 杯	中東部西寄り+1 I.1線一部区	I.1径11.8器高5.2	細砂粒・軽石/良好/ 明赤褐	I.1線部は横溝で、底部は横で、へら削り。外面塗布あり。内面は横で、凹縁。	
G 18	183 144	土師器 鉢	カマド内-3 I.1線一部区	I.1径9.3底径7.4 器高8.8	細砂粒・角閃石/良好/ に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、体部外面から底部は横で、底面付着。凹縁。内面は横で上半はへら削り。	
G 19	183 144	土師器 有孔鉢	カマド内+11 I.1線欠	I.1径13.2底径4.9 器高11.4	細砂粒・角閃石/良好/ 相	I.1線部は横溝で、体部外面は横で、縦のへら削り。内面は横で、縦の溝の横へら削り。灰色付着物。	
G 20	183 144	土師器 鉢	カマド内+9 底部欠	I.1径11.8	細砂粒・角閃石・軽石 良好/相	I.1線部は横溝で、胴部外面は横で、へら削り。内面は横で、ハゼ。	
G 21	183	土師器 甕	南東部-9 I.1線一部区	I.1径11.0	細砂粒・角閃石/良好/ に赤い黄褐	厚手でやや雑な作り。I.1線部は横溝で、胴部外面は横で、へら削り。内面はへら削り。	
G 22	183	土師器 甕	カマド内+3 I.1線一部区	I.1径14.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、胴部外面は縦のへら削り。内面は斜めのへら削りで、	
G 23	183 144	土師器 甕	カマド内+2 I.1線一部区	I.1径12.0底径6.4 器高11.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石 軽石/良好/明赤褐	厚手で雑な作り。I.1線部は横溝で、胴部外面は縦のへら削り。底部はへら削り。内面は斜めのへら削り。	
G 24	183 144	土師器 甕	カマド内+6 I.1線一部区	I.1径12.0	細砂粒・軽石/良好/相	横で厚手の作り。I.1線部は横溝で、胴部外面は縦の横で、へら削り。内面は縦の横で、後、雑なへら削り。	
G 25	183	土師器 甕	南東部-1 胴部一部区	底径5.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ に赤い黄褐	胴部外面は縦のへら削り。内面は横で、	
G 26	183 145	土師器 甕	カマド内+3 I.1線一部区	I.1径18.1底径8.1 器高20.7	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/明赤褐	I.1線部は横溝で、胴部外面は縦のへら削り。内面は横で、胴部外面から胴部下面に黒泥。	
G 27	183	土師器 甕	南東部-9 I.1線一部区	I.1径25.0	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、胴部外面は縦のへら削り。内面は横で、胴部内面に付着物。	
G 28	183 145	土師器 甕	カマド内+7 I.1線一部区	I.1径19.0底径6.0 器高34.1	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/明赤褐	I.1線部は横溝で、胴部外面は縦のへら削り。内面は横で、胴部内面に下に接合痕。	
G区 3 住居							
G 29	184	土師器 杯	南東部-10 I.1線一部区	I.1径11.2器高5.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、底部は手持ちへら削り。内面は横で、ハゼ。	
G 30	184	土師器 杯	東東部-10 I.1線一部区	I.1径12.0	細砂粒・角閃石/良好/ 相	I.1線部は横溝で、I.1線部には凹縁が認められる。内面は横で、外面は凹縁面露。	
G 31	184 145	土師器 甕	カマド内-5 完形	I.1径24.0底径8.7 器高31.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、胴部外面は縦のへら削り。内面は縦のへら削りで、下半は縦のへら削りで、外面に輪積み痕。接合痕。	
G 32	184	土師器 甕	北東部南寄り+2 I.1線一部区	I.1径12.6底径7.7 器高16.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ 相	I.1線部は横溝で、胴部外面はへら削り。上半に塗布付着。内面に横のへら削りで、下に輪積み痕。	
G 33	184	土師器 甕	南東部 I.1線一部区	I.1径17.9	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、胴部外面は縦のへら削り。内面は横のへら削りで、	
G 34	184	土師器 甕	南部-7 I.1線一部区	I.1径20.1	細砂粒・角閃石/良好/ に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、胴部は横のへら削り。	
G 35	184	土師器 甕	北部-14 I.1線一部区	I.1径16.8	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、中に段を有する。I.1線部凹縁。胴部外面は縦のへら削り。内面は斜めのへら削りで、ハゼ面露。	
G 36	184	土師器 甕	東東部-1 I.1線一部区	I.1径15.4	細砂粒・雲母/良好/ に赤い黄褐	I.1線部から胴部外面は横で、へら削り。内面は横で、ハゼ面露。	
G 37	184 145	灰石 扁平角縁	一括	長6.7幅6.1 厚2.3重88.4	粗粒輝石安山岩	背面側平ら面に縦位の浅い方ならし痕が残る。縁は黒く焼けて、焼熱している。	
G区 5 住居							
G 38	184 145	土師器 杯	北東部南寄り+14 完形	I.1径13.6器高4.2	細砂粒/良好/に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、底部は手持ちへら削り。凹に横での部分を残す。内面は横で、灰色付着物。	
G 39	184 145	土師器 杯	北東部南寄り+10 完形	I.1径13.2器高3.9	細砂粒/良好/に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、底部は手持ちへら削り。凹に横での部分を残す。内面は横で、	
G 40	184 145	土師器 杯	北東部南寄り+9 完形	I.1径12.5器高3.6	細砂粒・軽石/良好/相	I.1線部は横溝で、底部は手持ちへら削り。凹にわずかに横での部分を残す。内面は横で、	
G 41	184 145	土師器 杯	北東部南寄り+8 完形一部区	I.1径12.8器高3.9	細砂粒/良好/に赤い黄褐	I.1線部は横溝で、底部は手持ちへら削り。凹に横での部分を残す。内面は横で、	
G 42	184 145	土師器 甕	北部-5 完形	I.1径14.7底径7.5 器高13.9	細砂粒/良好/相	I.1線部は横溝で、外面に輪積み痕。胴部外面は横。胴部は斜めのへら削り。内面はへら削り。	

番号	持回P.L	種類	出土位置 層 存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
G-43	184	土師器 甕	町成穴5 I.1線一胴部片	I.1径21.7	細砂粒/良好/赤褐色	I.1線部は横撫で、胴部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
G-44	184	土師器 甕	町成穴5 胴部下半一底部	底径5.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄褐色	胴部外面は斜めのヘラ削り。底部もヘラ削り。内面は横のヘラ撫で、 接合部。	
G-45	184	須恵器 長瓶	南部-18 胴部	—	細砂粒・小礫/還元焼/灰白	ロクロ整形(右回転)。胴部の粘土板の厚肉付調整。	
G-46	185	土師器 甕	西部-3 I.1線一部欠	I.1径19.7,底径5.4 器高28.5	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄褐色	I.1線部は横撫で、胴部外面は横のヘラ削り。内面は斜めの撫で。胴部 外面はI.1線部から底部まで帯状に喫炭(黒炭)が。I.1線部外面及び胴部 内面に輪組み跡。	
G区 6 佐藤							
G-47	185	土師器 杯	一括 I.1線一胴部片	I.1径13.0	細砂粒/良好/赤褐色	I.1線部は横撫で、I.1線部内面には凹線部を穿らす。底部は手持ちヘラ削り、 内面は丁寧な撫で。	
G-48	185	土師器 杯	一括 底部	底径10.0	細砂粒/還元焼/灰白	ロクロ整形(右回転)。底面は回転ヘラ削り起し加調整。	
G-49	185	須恵器 瓶	南校西-7 胴部片	—	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。胴部下半にヘラ削り。	
G-50	185	須恵器 長瓶	一括 I.1線一胴部	I.1径12.6	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	
G-51	185	土師器 甕	一括 I.1線部片	I.1径27.0	細砂粒・粗砂粒/良好/褐色	I.1線部は横撫で、胴部は横のヘラ削り。雑な作り。	
G-52	185	鉄製品 刀子	一括 刃部	長12.9幅11.1 厚0.6重7.7		刃部の刀子で1金が残存しているが柄の本質は鉄部端部にわずかに認め られた。軸孔は直角。刃先は傾斜しているものと考えられる。刃部の 研ぎ減りはあまり顕著ではない。	
G-53	185	鉄製品 鋸先	西校西	長20.6幅10.8 厚0.6重188.0		断面が残存したもので刃先は欠損する。装着部断面はY字形を呈し、刃部 は鉄板を張り固めて形成している事がわかる。	
G区 7 佐藤							
G-54	185	土師器 杯	カマド内+2 刃部	I.1径11.2器高4.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	I.1線部は横撫で、底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
G-55	185	土師器 杯	カマド前0 刃部	I.1径12.3器高3.1	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐色	I.1線部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で、磨滅。	
G-56	185	土師器 杯	北部-11 1/2	I.1径13.4	細砂粒/良好/明赤褐色	I.1線部は横撫で、底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
G-57	185	土師器 杯	南西陣西青+14 I.1線一底部	I.1径13.3	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	I.1線部は横撫で、下外面に輪組み跡。底部は手持ちヘラ削りで、間に 撫での部分を残す。内面は撫で。	
G-58	185	土師器 鉢	南校西+6 I.1線一底部	I.1径19.2底径7.8 器高13.6	細砂粒・軽石・雲母/良好/ にぶい黄褐色	I.1線部は横撫で、体部上半は縦・下半は斜めのヘラ削り。底部はヘラ 削り。内面は磨滅。	
G-59	185	土師器 有孔鉢	町成穴+22 I.1線一部欠	I.1径20.2底径4.5 器高13.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/褐色	I.1線部は横撫で、体部外面は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
G-60	185	須恵器 甕	一括 1/3	I.1径14.8器高5.0 器底3.0	細砂粒/還元焼/灰白	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。縁は環状縁のみで、 天井部に高低の切欠込みを入れた後の厚肉付。	
G-61	185	須恵器 甕	一括 1/2	I.1径13.6	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。体部下端及び底部は回転ヘラ削り。体部外面 及び底部に自然磨滅跡。	
G-62	186	土師器 甕	南東陣+50 I.1線一胴部	I.1径13.2	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	I.1線部は横撫で、胴部外面はヘラ削り、磨滅。内面は撫で、爪痕。	
G-63	186	土師器 甕	一括 I.1線一胴部	I.1径13.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐色	I.1線部は横撫で、胴部外面は横のヘラ削り。内面はヘラ撫で、外面削れ、 胴部内面に輪組み跡。	
G-64	186	須恵器 長瓶	P15内+34 胴部	底径8.7	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。胴部下端は回転ヘラ削り。高台は付高台で、端 部に凹線が穿る。底部内面磨滅。	
G-65	186	須恵器 甕	中央西青+16 胴部一胴部	—	細砂粒/還元焼/灰白	内外面はロクロの撫で。	
G-66	186	須恵器 甕	一括 胴部	—	細砂粒/還元焼/灰	内外面はロクロの撫で、胴部下端は回転ヘラ削り。	
G-67	186	土師器 甕	東部-2 胴部一部欠	I.1径30.0底径4.7 器高25.2	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄褐色	I.1線部は横撫で、胴部外面は縦、下縁は横のヘラ削り。内面は横の撫で、 下半は白色の付着物。	
G-68	186	土師器 甕	カマド内+4 1/2	I.1径25.6底径3.5 器高41.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐色	I.1線部は横撫で、外面に輪組み跡。胴部外面は横のヘラ削り。内面は 斜めのヘラ撫で。	
G-69	186	土師器 甕	カマド内+4 I.1線一胴下部	I.1径21.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐色	I.1線部は横撫で、胴部外面は横、胴部下半は斜めのヘラ削り。内面は 横のヘラ撫で、I.1線部外面、胴部内面に輪組み跡。下位に接合部。	
G-70	186	土師器 甕	東部-4 3/4	I.1径18.2底径4.6 器高27.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい赤褐色	I.1線部は横撫で、胴部外面は横のヘラ削り。内面は横の撫で、ハゼ、 外面磨滅。	
G-71	186	須恵器 甕	カマド一括 胴部	—	細砂粒/還元焼/灰白	外面に平行沈線と5本単位のカシ溝状文状文、自然磨滅。	
G-72	186	砥石 切り砥石		長(10.2)幅4.8 厚3.6重228.3	砥石部	西面使用。表裏面とも研ぎ減り、糸巻状の断面形状を呈する。右側面 に刃なし箇所がある。被研破損部。	
G区 8 佐藤							
G-73	186	土師器 杯	一括 底部片	—	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	体部外面は手持ちヘラ削り。墨書、文字不明。	
G-74	186	土師器 甕	東校西青+12 I.1線一底部	I.1径16.1器高3.5	細砂粒・軽石/良好/褐色	I.1線部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
G-75	186	土師器 甕	東校西青+13 I.1線一底部	I.1径18.8	細砂粒/良好/明赤褐色	I.1線部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
G-76	186	土師器 甕	カマド内+7 I.1線一底部	I.1径16.8	細砂粒・軽石/良好/ にぶい赤褐色	I.1線部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
G-77	186	須恵器 杯	一括 底部片	底径11.0	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部の横ヘラ削り後の削り出し高台。底 部の切り磨しは不明。	
G-78	186	須恵器 長瓶	一括 胴部片	—	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形。胴部の破片で、沈線間に13本単位のカシ状工具の刻突	
G-79	186	磁石 棒状磁	東校西青-0	長11.7幅5.4 厚3.6重300.9	珩質白磁	小口部内端および左辺部に最打痕がある。先端が右側に折れる。	
G区 9 佐藤							
G-80	187	須恵器 甕	カマド-11 1/2	I.1径15.6器高2.3	細砂粒・粗砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は回転糸削り後、風道を回転ヘラ削り、 縁みぞ部の磨滅はないと考えられる。	
G-81	187	須恵器 甕	中央西青+4 底部	底径6.0	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸削り加調整。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持附P.L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
G-82	187	須恵器 甕	北西・28 底径0.8	—	細砂粒/還元焰/灰	クロク整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。高台は貼付部分に著痕。	
G-83	146	須恵器 杯	カマ下内・4 上縁一部欠	上径15.8,底径8.9 器高6.4	細砂粒/還元焰/灰	クロク整形(右回転)。高台は底部回転へう起こし後の付高台。	
G-84	146	土師器 杯	カマ下内・2 上縁一部欠	上径18.9	細砂粒・粗砂粒/良好 明赤褐	上縁部は横撫で。外面に輪積み痕。胴部外面は横。胴部は縦のへう削り。内面は横のへう削り。下位に接合痕。	
G-85	187	土師器 蓋	カマ下内・3 上縁一部欠	上径18.8	細砂粒/良好/明赤褐	上縁部は横撫で。胴部外面は横。胴部外面は縦のへう削り。内面は横のへう削り。	
G-86	187	土師器 蓋	カマ下内・3 上縁一部欠	上径18.8	細砂粒/良好/明赤褐	上縁部は横撫で。胴部外面は斜めのへう削り。内面は横で、磨滅。	
G区10住居							
G-87	187	黒色土器 杯	南東・9 上縁1/2	上径12.0,底径5.8 器高3.7	細砂粒/還元焰/灰黄褐	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。内面は丁寧なへう磨き後、黒色処理。	
G-88	187	須恵器 直縁	南内面・1 上縁一部欠	上径12.1,底径5.1 器高4.2	細砂粒/還元焰/褐灰	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。内面磨滅。内外面横し。	
G-89	187	黒色土器 杯	南東・9 上縁1/2	—	細砂粒/還元焰/灰黄褐	クロク整形(右回転)。内面は丁寧なへう磨き後、黒色処理。高台は底部回転糸切り後の付高台。	
G-90	187	黒色土器 蓋	西・1 上縁一部欠	上径16.0	細砂粒/還元焰/灰黄褐	クロク整形(回転方向不明)。内面は丁寧なへう磨き後、黒色処理。口縁外部面に磨滅。	
G-91	187	灰石 多面砥石	カマ下内・9	長22.3,幅13.2 厚14.9,重423.2	粗粒輝石(安山岩)	背面・側面に扁平状の凹部。裏面に浅い凹部がある。各面とも研ぎ減が著しい。小凹部に刃状し傷。	
G区11住居							
G-92	187	須恵器 杯	一括 底部欠	底径8.0	細砂粒/還元焰/オリーブ	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
G-93	187	須恵器 中央部・14 底部一部欠	底径7.5 高径9.7	—	細砂粒/還元焰/オリーブ	クロク整形(右回転)。高台は三日月高台状で、底部回転糸切り後の付高台。	
G-94	187	須恵器 杯	一括 上縁	上径14.4,底径7.0 器高3.7	細砂粒・粗砂粒/還元焰 /灰黄褐	クロク整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。外面磨滅。	
G-95	187	須恵器 杯	カマ下左端・9 高台部分欠	上径13.6	細砂粒・粗砂粒/還元焰 /灰白	クロク整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台で、貼付部分から著痕。	
G-96	187	土師器 付台費	防範穴・9 底部	上径8.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐	胴部外面は縦のへう削り。内面へう削り。即脚は丁寧な貼付け	
G-97	187	須恵器 杯	東院際・11 上縁・高台部分欠	—	細砂粒/還元焰/灰黄褐	クロク整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台で、貼付部分から著痕。内外面にハズレ。外面の高部著痕。	
G-98	187	土師器 中央部南寄り・7 上縁一部欠	上径18.8	—	細砂粒/良好/相	上縁部は横撫で。外面に輪積み痕。胴部外面は横のへう削り。内面は横。	
G-99	187	土師器 杯	カマ下左端・9 上縁一部欠	上径19.7	細砂粒/良好/相	上縁部は横撫で。胴部外面は横から斜めのへう削り。内面はへう削り。	
G-100	187	土師器 中央部南寄り・34 費	上径19.4	—	細砂粒/良好/明赤褐	上縁部は横撫で。胴部は横のへう削り。内面は横のへう削り。	
G-101	187	土師器 防範穴・9 底部	底径8.0	—	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面は縦のへう削り。底部もへう削り。内面は横のへう削り。	
G区12住居							
G-102	188	土師器 杯	一括 上縁一部欠	上径11.2	細砂粒・雲母/良好/ にぶい赤褐	上縁部は横撫で。底部は手持ちへう削り。内面は横。	
G-103	147	土師器 杯	カマ下内・1 3/4	上径12.1,底径8.4 器高3.6	細砂粒/良好/相	上縁部は横撫で。体部は横で。底部は手持ちへう削り。内面は横で。上縁部から体部外面に「丁」の墨書。	
G-104	188	土師器 杯	カマ下内・15 上縁一部欠	上径12.8,底径6.8 器高3.9	細砂粒・粗砂粒/片岩 /還元焰/にぶい黄褐	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
G-105	188	土師器 杯	北院際・10 上縁一部欠	上径12.1,底径8.7 器高3.2	細砂粒/良好/明赤褐	上縁部は横撫で。体部は横で。底部は手持ちへう削り。内面は横で。上縁部から体部外面に墨書。文字不明。	
G-106	188	土師器 杯	カマ下内・17 上縁一部欠	上径11.5,底径8.2 器高3.0	細砂粒・粗砂粒/良好 明赤褐	上縁部は横撫で。体部外面に指押さの痕跡。底部は手持ちへう削り。内面は横。	
G-107	147	土師器 杯	一括 胴部一部欠	—	細砂粒・角閃石/良好 にぶい赤褐	上縁部は横撫で。体部外面も横で。底部は手持ちへう削り。内面は横で。内面に墨書「十」付。	
G-108	188	須恵器 杯	龍方一括 上縁部欠	上径12.8	細砂粒・粗砂粒/還元焰 /灰	クロク整形(回転方向不明)。	
G-109	188	須恵器 杯	一括 上縁一部欠	上径12.8	細砂粒/還元焰/灰白	クロク整形(右回転)。	
G-110	147	須恵器 杯	一括 上縁一部欠	上径12.2,底径6.2 器高3.3	細砂粒/還元焰/褐灰	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
G-111	147	須恵器 杯	カマ下内・15 2/3	上径13.2,底径6.6 器高3.6	細砂粒・粗砂粒/還元焰 /明黄褐	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
G-112	188	須恵器 杯	中央部南寄り・29 杯	上径12.0,底径6.4 器高3.5	細砂粒・粗砂粒/還元焰 /灰	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
G-113	188	須恵器 杯	西寄・7 上縁一部欠	上径13.2,底径6.6 器高3.2	細砂粒/還元焰/灰白	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
G-114	188	須恵器 杯	中央部・11 上縁一部欠	上径13.0,底径7.0 器高3.8	細砂粒/還元焰/灰黄褐	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部外面に墨書。文字不明。	
G-115	188	須恵器 杯	防範穴・23 上縁一部欠	上径13.0,底径6.1 器高4.0	細砂粒・粗砂粒/還元焰 /にぶい赤褐	クロク整形(右回転)。	
G-116	188	須恵器 杯	中央部・6 上縁一部欠	上径15.2,底径8.6 器高6.0	細砂粒/還元焰/灰白	クロク整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。見込み部著痕。	
G-117	188	灰輪陶器 杯	防範穴・12 1/2	上径17.4,底径9.3 器高4.0,幅台8.9	細砂粒/還元焰/灰	クロク整形(右回転)。体部下端は回転へう削り。高台は角高台で、底部はへう削り後の付高台。磨滅は内面にのみ強く。磨滅は内面にのみ強く。	脇段
G-118	188	土師器 杯	中央部北寄り・6 上縁一部欠	上径19.8	細砂粒/良好/明赤褐	上縁部は横撫で。胴部外面は横から斜めのへう削り。中に指状に傷付き。下手は斜めのへう削り。粘土付着。内面は斜めのへう削りで、接合痕。	
G-119	188	灰石 切り砥石	東院周溝内・12	長(7.5)幅5.3 厚1.5,重73.8	砥石	西面使用。表裏面とも研ぎ減。砥石としては薄く、使用の際の管理は行き届いていない。	
G区13住居							
G-120	188	土師器 杯	カマ下・8 上縁一部欠	上径12.8	細砂粒・角閃石/良好 にぶい赤褐	上縁部は横撫で。体部も横で。底部は手持ちへう削り。内面は横。	
G-121	188	須恵器 杯	南東寄り・3 上縁一部欠	上径13.0,底径8.3 器高3.8	細砂粒/還元焰/灰白	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。見込み部著痕。	
G-122	188	土師器 杯	一括 上縁部欠	上径18.8	細砂粒/良好/にぶい黄褐	上縁部は横撫で。胴部外面は横のへう削り。内面はへう削り。	

番号	持戻P/L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
G123	188	土師器	カマド内10 土師部分	1径19.8	細砂粒・角閃石/良好/赤黒	土師部は横撫で、胴部は斜めのへら削り。内面はへら撫で。	
G区14区							
G124	188	土師器	南西側・20 2/3	1径12.8	細砂粒・角閃石/良好/赤黒	土師部は横撫で、底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
G125	188	土師器	南西側・23 147	1径12.6器高3.4	細砂粒・雲母/良好/明赤黒	土師部は横撫で、底部は手持ちへら削りて、胴に撫での部分を残す。内面は撫で。	
G126	188	土師器	南西側・29 土師一底部片	1径12.8	細砂粒・輝石/良好/赤黒	土師部は横撫で、底部は手持ちへら削りて、胴に撫での部分を残す。内面は撫で。	
G127	188	土師器	一括 1/1	1径12.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/赤黒	土師部は横撫で、底部は手持ちへら削りて、胴に撫での部分を残す。内面は撫で。	
G128	188	土師器	南西側・19 1/5	1径12.0	細砂粒・粗砂粒/良好/赤黒	土師部は横撫で、底部は手持ちへら削りて、胴に撫での部分を残す。内面は撫で。	
G129	188	土師器	南西側・18 147	1径13.4底径7.2 器高3.5	細砂粒/良好/稍	土師部は横撫で、底部は手持ちへら削りて、胴に撫での部分を残す。内面は撫で。土師部外面に大欠の遺書。	
G130	188	土師器	カマド右袖4 1/3	1径18.8	細砂粒/良好/稍	土師部は横撫で、底部との境に体線が1条通らせる。底部は手持ちへら削りて、土師部との間に撫での部分を残す。	
G131	188	須恵器	南西側・28 147	1径18.5底径4.2 器高3.3	細砂粒/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。土師部外面に回転へら削り。狭みは環状狭みで貼付け。	
G132	188	須恵器	南西側・18 147(取用破)	1径14.8器高4.7 器高3.4	細砂粒・粗砂粒/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。土師部外面に回転へら削り。狭みは環状狭みで貼付け。内面を砥面として使用。砥の残存なし。	
G133	188	須恵器	南西側・29 147	1径13.9底径8.0 器高3.6	細砂粒/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。土師部外面に回転へら削り。狭みは環状狭みで貼付け。	
G134	189	須恵器	中心部4 147	1径13.7底径7.3 器高4.2	細砂粒・粗砂粒/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部下端は回転へら削り。内外面一部砥面。	
G135	189	須恵器	南西側・2 147	1径12.5底径8.2 器高3.4	細砂粒/還元塩/焼灰	クロク整形(右回転)。底部は回転へら起こし無調整。	
G136	189	須恵器	東側青り・27 1/2	1径14.2底径8.5 器高4.0	細砂粒/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。底部は回転へら起こし無調整。	
G137	189	須恵器	南西側・24 147	1径12.8器高3.4	細砂粒・粗砂粒/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。底部及び体部下端は回転へら削り。土師部下端に自然撫で。	
G138	189	灰石	南西側溝内14 147	径4.1幅7.1 厚4.0重380.3	灰石	四面使用。背面側と右側面が著しく研ぎ減る。この他、小1号重347で切り取られている。	
G区15区							
G139	189	土師器	東側側・9 1/3	1径11.4器高2.5	細砂粒・輝石/良好/赤黒	土師部は横撫で、内外面に覆付着。底部は手持ちへら削りて、胴に撫での部分を残す。内面は撫で。大七蓋蓋。	
G140	189	土師器	南西側・16 2/3	1径11.9器高3.4	細砂粒・角閃石/良好/赤黒	土師部は横撫で、体部は撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で、器面に磨面なし。	
G141	189	須恵器	南西側・3 147	1径14.3底径7.2 器高4.0	細砂粒・粗砂粒/片岩/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台で、器部に同軸状の窪みがある。	
G142	189	土師器	西側青り・20 147	1径20.6	細砂粒/良好/稍	土師部は横撫で、胴部外面は横のへら削り。内面は横のへら撫で。	
G区14区							
G143	147	灰石	CK区北東部車輪付付近	長さ2.2幅22.0 厚16.2重2050.0	粗粒輝石安山岩	角柱状を見出し、表面面とも平坦面がある。平坦面は光沢を帯びており、ここには環状石と認められる。	
H区1区							
H1	189	土師器	P4内13 1/3	1径13.0	細砂粒/良好/明赤黒	土師部は横撫で、底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
H2	189	土師器	P4内20 土師部分	1径15.9	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤黒	土師部は横撫で、底部はへら撫で。内面は撫で。外縁はシャープさを欠く。	
H3	189	土師器	P4内2 147	1径11.8	細砂粒・角閃石/良好/稍	土師部は横撫で、体部周辺は手持ちへら削り。内面は撫で、外部側に脚との接合のためのソケット残存。	
H4	189	土師器	一括 147	底径10.0	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤黒	外面は撫で。内面はへら削り。	
H5	189	土師器	東側青り・1 147	底径4.2	細砂粒・角閃石/良好/明赤黒	胴部外面は撫で、底部はへら削り。内面はへら撫で。外面磨面。	
H6	189	土師器	P4内20 土師部分	1径18.0	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤黒	土師部は横撫で、内面に覆付着。胴部外面は横のへら削り。内面は横撫で。	
H区2区							
H7	189	土師器	P3一括 1/1	1径13.0	細砂粒・角閃石/良好/明赤黒	土師部は横撫で、体部外面は撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
H8	189	土師器	東側1 147	1径11.0器高3.9	細砂粒・角閃石/良好/明赤黒	土師部は横撫で、体部外面は指の押さえ。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
H9	189	須恵器	北西側・22 土師一底部片	1径15.7	細砂粒/還元塩/灰	クロク整形(左回転)。土師部外面に回転へら削り。狭みは欠損するが回転糸切り後の貼付け。外面に環の痕跡が僅か。	
H10	189	須恵器	南西側・7 147	1径12.2底径6.5 器高3.4	細砂粒/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部内外面とも手持りによる磨面が。	
H11	189	須恵器	南西側・11 147	1径12.4底径6.4 器高3.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
H12	189	須恵器	東側3 147	1径13.6底径7.9 器高4.0	細砂粒/還元塩/灰白	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
H13	189	須恵器	南西側・24 147(取用破)	1径15.2底径9.8 器高5.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/還元塩/灰白	クロク整形(右回転)。高台は底部回転へら削り後の付高台で、貼付け部から割断。見込み部を砥面として使用。	
H14	189	須恵器	P3一括 147	1径12.7底径6.6 器高3.6	細砂粒・粗砂粒/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。土師部内面に同軸状の窪みがある。	
H15	189	須恵器	中心部青り6 147	1径11.8底径5.4 器高3.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
H16	189	須恵器	南西側0 147	1径12.7底径7.0 器高3.4	細砂粒/還元塩/灰	クロク整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
H17	190	土師器	カマド一括 土師部分	1径19.0	細砂粒・粗砂粒/良好/稍	土師部は横撫で、外面に磨面が。胴部外面は横のへら削り。内面は横のへら撫で。	
H18	190	土師器	東側7 土師部分	1径20.0	細砂粒・角閃石/良好/稍	土師部は横撫で、胴部外面は横のへら削り。内面はへら撫で。	
H19	190	土師器	東側6 147	1径20.6	細砂粒/良好/赤黒	土師部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り。粘土付着。内面は横のへら撫で。	
H20	190	土師器	カマド一括 土師一胴部	1径18.8	細砂粒・粗砂粒/良好/赤黒	土師部は横撫で、外面に輪磨き。胴部外面は斜めのへら削り。内面は斜めのへら撫で。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持戻 P/L	種類	形状	出土位置 発見層	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H21	190	土師器	カマド一居 土師一胴部	—	口径21.2	細砂粒・角閃石/良好/褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り、内面は横のへら削りで接合。	
H22	147	土師器	甕口 L1線-1	—	口径20.4底径3.8 器高28.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り、甕付着。底部もへら削り、内面はへら削りで接合。	
H23	190	須恵器	南東隅-7 胴部	—	—	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰オリーブ	型整形。外面は平打削り。内面の当て具は素文。	
H24	191	須恵器	南東隅-8 胴部	—	—	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元焰/灰オリーブ	型整形。外面は平打削り。内面の当て具は素文。	
H区3住居								
H25	191	土師器	南西隅寄り+2 L1線-一部	—	口径12.8	細砂粒・石英/良好/ にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、底部は手持ちへら削り。内面は横撫で。	
H26	191	土師器	南東隅寄り0 完形	—	口径12.6器高4.0	細砂粒・粗砂粒/良好/褐色	口縁部は横撫で、底部は手持ちへら削りで間に撫での部分を残す。内面は横撫で。	
H27	191	土師器	南東隅寄り+3 L1線-1	—	口径12.6器高3.9	細砂粒/良好/褐色	口縁部は横撫で、底部は手持ちへら削りで間に撫での部分を残す。内面は横撫で。	
H28	191	土師器	南西隅寄り+3 一部欠	—	口径19.7器高7.4 器高4.4	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰 器高4.4	口縁部は横撫で、胴部外面は回転削り。端みは環状溝で貼付け。外面色薄く自然焼。	
H29	191	土師器	南西隅寄り-2 L1線-1	—	口径11.9底径5.3 器高11.5	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り。内面は横撫で、ハゼ。	
H30	191	土師器	南西隅寄り+28 胴部-底部	—	底径16.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄褐色	胴部外面は縦のへら削り。内面は斜めのへら削りで、ハゼ。	
H31	191	灰石	東東隅+2 切り灰石	—	径長25.3 厚2.2重103.1	灰石	内面使用。上端欠損後乱れを穿つ、背面割捨し研ぎ減る。裏面側は整形面が著しい。	
H区7住居								
H32	191	須恵器	西寄隅+21 L1線-一部	—	口径13.0底径6.8 器高3.0	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰 器高3.0	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り。内面は横撫で、後斜射状へら削り。外面に帯状凸縁付着。	
H33	191	灰石	東東隅+3 切り灰石	—	径長19.3 厚1.6重36.6	灰石	四面使用。小口側は粗く巻き整形。薄く平厚で、機能部管理は行き届いている。焼熱面。	
H区8住居								
H34	148	土師器	南西隅寄り-2 L1線-一部欠	—	口径12.4器高5.2	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で、底部はへら削りで手持ちへら削り。黒泥。内面は横撫で後斜射状へら削り。内外面に帯状凸縁付着。	
H35	148	土師器	北東隅+12 L1線-一部欠	—	口径13.4器高5.4	細砂粒/良好/褐色	口縁部は横撫で、底部はへら削りで手持ちへら削り。内面は横撫で後斜射状へら削り。	
H36	148	土師器	南西隅-1 L1線-一部欠	—	口径13.5器高5.2	細砂粒・角閃石/良好/褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は横撫で。底部はへら削りで、内面は丁字車な横撫で。斜射状に凸縁部へら削り。黒泥。	
H37	148	須恵器	中央部-5 一部欠	—	口径17.3底径10.0 器高12.2	細砂粒/還元焰/陶灰	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り。外縁は二層でシヤープな作りで、体腔にクランク溝を形成して強度を上げる。1か所に部を貼付。胴部は四方の1段溝から内外面による自然焼。内面に反応したガラス質の塊が散在。	
H38	148	土師器	カマド+7 L1線-1	—	口径13.8底径5.9 器高10.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は縦のへら削りで、内面は横のへら削りで、底部に部。	
H39	148	土師器	南東隅寄り0 L1線-1	—	口径18.4底径8.5 器高30.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削りで、下半は縦のへら削り。黒泥。内面は横撫で、下半に縦のへら削り。	
H40	148	土師器	西側-1 L1線-1	—	口径13.3底径6.0 器高20.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は横撫で、下半は縦のへら削りで、胴部内面は横撫で。上部に輪組み。下部に接合面。	
H41	191	土師器	南西隅寄り0 完形	—	口径13.0底径6.8 器高17.1	細砂粒・軽石/良好/ にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削りで、下半は斜めのへら削りで、胴部内面は横撫で、下部に接合。	
H42	192	土師器	北部-9 L1線-前部	—	口径16.2	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は縦のへら削り。内面は横撫で、内面も別工具による横のへら削りで、輪組み。	
H43	192	土師器	南西隅寄り-2 L1線-一部	—	口径18.2	細砂粒・粗砂粒/良好/褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は横のへら削り。内面は横のへら削りで、	
H44	192	土師器	南西隅寄り+2 完形	—	口径17.6底径7.2 器高30.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は縦のへら削りで、内面は横のへら削りで、ハゼ。底面著。	
H45	192	土師器	西側 L1線-胴部	—	口径17.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐色	口縁部に稜を有する。内外面共に黒部砂質で整形不明。胴部内面に輪組み。	
H46	192	土師器	カマド+15 L1線-胴上位	—	口径16.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は横のへら削りで、内面も横のへら削りで、輪組み。	
H区9住居								
H47	192	土師器	南東隅-4 L1線-1	—	口径11.5底径9.0 器高3.4	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は横撫で。	
H48	148	須恵器	西側+1 L1線-一部欠	—	口径12.4底径6.6 器高3.5	細砂粒/還元焰/陶灰	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り。内面は横撫で、後斜射状へら削り。見込み部や中層減。	
H49	192	須恵器	南東隅-16 L1線-一部	—	口径15.6	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り。内面は横撫で。	
H50	148	須恵器	一括 L1線-一部	—	口径14.8	細砂粒/還元焰/灰	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り。内面は横撫で。	
H51	192	土師器	一括 L1線-一部	—	底径13.6	細砂粒/良好/明赤褐色	胴部外面は縦のへら削り。甕付着。内面はへら削りで、わずかにハゼ。	
H52	192	土師器	東東隅-2 胴部-底部	—	底径15.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	胴部外面は縦のへら削り、甕付着。内面はへら削りで。	
H53	192	土師器	一括 L1線-胴上位	—	口径18.2	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り。内面は横撫で、口縁部外面及び胴部内面に輪組み。	
H54	192	土師器	東東隅+1 L1線部	—	口径19.2	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で、外面に輪組み。胴部外面は横のへら削り。内面は横のへら削りで。	
H55	192	土師器	南東隅寄り+2 L1線部	—	—	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り、甕付着。内面はへら削りで、接合面。胴部は接合面から分離。	
H56	192	土師器	東東隅-3 胴部-底部	—	底径4.3	細砂粒/良好/明赤褐色	胴部外面は縦のへら削り。底部はへら削り、下部端部に炭化物付着。内面は横撫で。	
H57	192	土師器	中央部-2 L1線-胴部	—	口径19.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は横。胴部下半は内側のへら削り。内面はへら削りで、接合。	
H区10住居								
H58	148	土師器	カマド+2 L1線部	—	口径11.2器高5.4	細砂粒/良好/褐色	口縁部は横撫で、底部はへら削りで、内面は丁字車な横撫で、斜射状へら削り。	
H59	148	土師器	南東隅寄り+1 L1線部	—	口径13.6器高6.3	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は斜めのへら削り。底部はへら削り。内面は横撫で。	
H60	148	土師器	南東隅寄り+2 完形	—	口径14.3器高8.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部外面は横。胴部下半は内側のへら削り。内面は横撫で、斜射状へら削り。内面にハゼ。	

番号	持回 P/L	種 類	出 土 位 置 存 分	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H61	193	土師器 土加蓋	南部+11 底面1/2	底径5.2	細砂粒/良好/明赤褐色	製部外面下端は横のへう痕で、底部上1/3底状、内面の粗れ顕著。	
H62	193	土師器 土加蓋	カマド内+3 胴部-底部2/3	底径8.4	細砂粒・粗砂粒/良好/粗	製部外面上半は斜めのへう痕り、下半は斜めのへう痕で、下部に黒泥、内面は横のへう痕で、下半に接合痕。	
H63	193 148	土師器 土加蓋	カマド内+2 1口縁-胴部	1口径19.1	細砂粒・粗砂粒・軽石 良好/不良/明赤褐色	1口縁部は横溝で、製部外縁は横から縦のへう痕で、上部に黒泥、内面は斜めのへう痕で。	
H64	193 148	模造品素材 板状	折り方一括	径2.1x幅1.6 厚0.7x重2.77	滑石	背面側は平坦で、粗く磨き整形するのに対し、表面側は縁があり、稜部のみ磨きする。	
H65	193 148	模造品素材 板状	折り方一括	径(2.1x幅(1.1)) 厚0.6x重1.42	滑石	表面側とも磨きする。左辺部エッジは磨き残りに丸味を帯び、右辺部を欠損する。	
H66	193 148	模造品素材 板状	折り方一括	径(1.8x幅(1.3)) 厚0.6x重1.20	滑石	断面三角形を呈し、背面側の縁部が磨き残る。表面側も弱く磨きしているが、人為的磨きか不明。	
H67	193 148	模造品素材 板状	南部-2	径4.8x幅2.6 厚0.5x重0.80	滑石	原石を打ち欠いて得た板状断片、背面側部分的に磨き残している。	
H68	193 148	模造品素材 板状	南部-2	径3.5x幅1.9 厚0.6x重0.58	滑石	縁部に整形面があるほか、背面側にノミ状の工具痕を残す。表面側は部分的に磨かれている。	
H69	193 148	模造品素材 板状	P2内+30	径3.8x幅1.3 厚0.7x重1.45	滑石	両面とも縁が弱く、磨き面が広がる。線条痕は確認されない、形態的特徴から模造品素材と見なされる。	
H70	193 148	模造品素材 板状	北西部0	径3.0x幅3.5 厚0.4x重10.44	滑石	表面側とも刀子状工具による整形面が広がる。整形面は縁が残る、素材としては初期段階の状態を示す。	
H71	193 148	模造品素材 柱状	北部-1	径2.4x幅2.7 厚0.4x重6.20	滑石	背面側に研磨面が残る。表面側も部分的に研磨されているが、途中研磨を放棄している。	
H72	193 148	模造品素材 板状	南壁際-2	径1.9x幅0.8 厚0.8x重2.05	滑石	未製品。体部は整形面に覆われているが、部分的に未整形の折断面が残る。体部の平足はタガネ状工具痕。	
H73	193 148	模造品素材 柱状	折り方一括	径1.9x幅0.9 厚0.4x重0.92	滑石	未製品。穿孔時に縦位線条痕が顕著に残る。破断面は表面側より、背面側が粗く見られる。	
H74	193 149	石製模造品 白玉	南部-3	径(0.9x幅(0.5)) 厚0.4x重0.19	滑石	表面側とも研磨、側面は折り取られたままで、未整形。穿孔時に破断した可能性が高い。孔径は不明。	
H75	193 149	石製模造品 白玉	南部-3	径(0.8x幅(0.6)) 厚0.3x重0.12	滑石	背面側・側面を弱く磨き整形する。表面側は見えない。径2mmの孔を穿つ。	
H76	193 149	石製模造品 白玉	南壁際-2	径(0.6x幅(0.4)) 厚0.2x重0.06	滑石	表面側とも丁寧に研磨、部分的に残る側面の整形も丁寧に、穿孔時に破断した可能性が高い。孔径は不明。	
H77	193 149	石製模造品 白玉	埋没土一括	径0.8x幅(0.6) 厚0.4x重0.19	滑石	表面側とも粗く磨き整形する。側面は折り取り後に研磨され、比較的形状は整った。孔径は不明。	
H78	193 149	石製模造品 白玉	埋没土一括	径0.7x幅(0.5) 厚0.4x重0.13	滑石	表面側とも磨き整形、側面は比較的丁寧に研磨されている。孔は斜向して穿たれ、孔径は不明。	
H79	193 149	石製模造品 白玉	南部-3	径(0.9x幅(0.4)) 厚(0.2)x重0.06	滑石	背面側に粗く磨き整形面が残る。表面側は測して形状は不明。側面は折り取り整形。	
H80	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径1.0x幅0.9 厚0.3x重0.36	滑石	表面側とも磨き整形。側面は折り取り後、部分的に磨き整形を行う。径1.5mmの孔を穿つ。	
H81	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径1.0x幅0.9 厚0.4x重0.29	滑石	表面側とも粗く磨き整形。側面は折り取り整形。中央に径1.5mmの孔を穿つ。	
H82	193 149	石製模造品 白玉	南部-3	径(0.9x幅(0.5)) 厚(0.3)x重0.11	滑石	背面側に平坦面が残る他、いずれも破断して形状は不明。径1.5mmの孔を穿つ。	
H83	193 149	石製模造品 白玉	南部-3	径1.0x幅(0.7) 厚0.3x重0.26	滑石	表面側とも研磨されるほか、側面には部分的に面取り整形面がある。孔径(径2mm)は途中で止まる。穿孔時破断。	
H84	193 149	石製模造品 白玉	南壁際-2	径(0.6x幅(0.6)) 厚0.4x重0.16	滑石	完成状態。表面側とも粗く磨き整形。側面整形は縁で、粗く縦位線条痕が残る。径2mmの孔を穿つ。	
H85	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径(0.7x幅(0.7)) 厚0.4x重0.27	滑石	完成状態。表面側とも磨き整形。側面整形は丁寧に、粗く縦位線条痕は見られない。径1.5mmの孔を穿つ。	
H86	193 148	石製模造品 白玉	南壁際-2	径(0.7x幅(0.7)) 厚0.3x重0.21	滑石	完成状態。表面側とも粗く磨き整形。側面には粗く縦位線条痕が残る。径2mmの孔を穿つ。側面は横状。	
H87	193 149	石製模造品 白玉	南壁際-2	径(0.9x幅(0.8)) 厚0.4x重0.39	滑石	表面側とも磨き整形されているが、側面は折り取られたままである。穿孔(径1.5mm)は途中で放棄されている。	
H88	193 149	石製模造品 白玉	カマド左袖+8	径(0.7x幅(0.9)) 厚0.8x重0.39	滑石	表面側とも磨き整形。背面側は傾斜しており、穿孔位置が分かる程度で粗く孔の端縁が粗い。孔径は不明。	
H89	193 149	石製模造品 白玉	カマド左袖+3	径1.1x幅1.1 厚0.4x重0.57	滑石	表面側とも粗く磨き整形。側面は折り取り後、部分的に研磨されている。	
H90	193 149	石製模造品 白玉	南壁際-2	径(0.9x幅(0.5)) 厚0.3x重0.20	滑石	背面側のみに弱く磨き。側面は折り取り整形。穿孔時に破断したもので、孔径は不明。	
H91	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径1.0x幅1.0 厚0.5x重0.67	滑石	表面側とも磨き整形、側面は折り取り後、刀子状工具による面取り整形。径1.5mmの孔を穿つ。	
H92	193 149	石製模造品 白玉	南部+1	径1.0x幅0.9 厚0.4x重0.44	滑石	表面側とも磨き整形。側面は部分的に整形されているが、折り取り整形が残る。径2mmの孔を穿つ。	
H93	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径(0.9x幅(0.9)) 厚0.4x重0.50	滑石	表面側とも磨き整形。側面は粗く折り取り整形。残存部に孔は見られない。	
H94	193 149	石製模造品 白玉	カマド左袖間+5	径(0.8x幅(0.8)) 厚0.8x重0.43	滑石	表面側とも磨き整形。側面は粗く折り取り整形。孔径(径2mm)の穿孔は途中で放棄されている。	
H95	193 149	石製模造品 白玉	南部-2	径1.0x幅0.9 厚0.4x重0.44	滑石	表面側とも磨き整形。側面は折り取り整形。径2mmの孔を穿つ。	
H96	193 149	石製模造品 白玉	西部-1	径(0.9x幅(0.8)) 厚0.4x重0.28	滑石	表面側とも研磨。側面を折り取り縁形を作出。側面に平坦な整形面が残る。径1.5mmの孔を穿つ。	
H97	193 149	石製模造品 白玉	埋没土一括	径1.1x幅(0.8) 厚0.5x重0.46	滑石	表面側とも磨き整形、側面は折り取り後に磨き整形。径1.5mmの孔を穿つ。	
H98	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径1.0x幅0.6 厚0.4x重0.26	滑石	背面側には稜部があり、弱く磨きする。これに対し、表面側は平坦で研磨整形が明瞭。孔径は2mm。	
H99	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径1.0x幅(1.4) 厚0.4x重0.37	滑石	表面側とも粗く磨き整形。側面は折り取り後、磨き整形する。残存部に孔は見られない。	
H100	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径1.0x幅0.7 厚0.4x重0.28	滑石	表面側とも磨き整形。側面は折り取り後、部分的に磨き整形を行う。径1.5mmの孔を穿つ。	
H101	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径(0.9x幅(0.8)) 厚0.4x重0.32	滑石	表面側とも粗く磨き整形。側面は折り取り整形。穿孔時に破断した可能性が高い。孔径は不明。	
H102	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径(0.9x幅(0.8)) 厚0.4x重0.36	滑石	背面側は平坦で、部分的に未整形部が残る。表面側の縁は高く、稜部のみに弱く研磨。孔径は不明。	
H103	193 149	石製模造品 白玉	折り方一括	径(0.9x幅(0.6)) 厚0.4x重0.29	滑石	表面側とも磨き整形。側面は磨き整形されており、粗く縦位線条痕を残す。孔径は不明。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持戻P.L	種類	出土位置 層・存	計測値(cm,g)	粘土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H104	193	石製模造品	南壁際-2	L1:0.96(0.9) P9:3.0(0.29)	滑石	裏面側は平坦だが、背面側には摩耗した残りが残る。径2mmの孔を穿つ。	
H105	149	石製模造品	白土	L1:0.96(0.6) P9:4.0(0.30)	滑石	表面側とも磨き整形。側面は折り取り後、部分的に刀状工具による面取り磨き。孔径不明。	
H106	149	石製模造品	白土	L1:1.9(1.1) P9:5.0(0.77)	滑石	表面側とも磨料する。側面整形は面取り整形に近く、刀状工具によるものと見られる。	
H107	149	石製模造品	白土	L1:2.8(1.2) P9:4.0(0.88)	滑石	表面側とも磨き整形。側面は折り取り後、部分的に刀状工具による面取り磨き。径1.5mmの孔を穿つ。	
H108	193	石製模造品	南西部-1	L1:1.9(1.0) P9:4.0(0.40)	滑石	表面側とも研磨。両辺を折り取り後整形を作出。側面に平坦な整形面が残る。径1.5mmの孔を穿れず。	
H109	149	石製模造品	西壁際-1	L1:0.9(1.0) P9:4.0(0.46)	滑石	表面側とも平坦だが裏面側研磨は不明瞭。両辺を折り取り後整形を作出。径1.5mmの孔を僅く穿孔する。	
H110	149	石製模造品	南西部-3	L1:0.9(0.7) P9:4.0(0.27)	滑石	表面側とも強く磨き整形。側面は折り取られたままで大型。孔(径2mm)は途中で止まる。穿孔時の破損。	
H111	193	石製模造品	白土	L1:0.8(1.0) P9:0.3(0.6)	滑石	背面側のみ強く磨き整形。側面は折り取り磨き。穿孔時に破損したもので、孔径は不明。	
H112	149	石製模造品	白土	L1:0.6(0.5) P9:0.2(0.17)	滑石	背面側のみ磨き整形。表面側は風化して不明瞭だが薄く、測落した可能性が高い。側面は折り取り磨き。	
H区12住層							
H113	194	土師器	南壁寄り+3	L1F5.0底径4.1 器高4.6	細砂粒/良好/明赤褐色	外面は指先による磨き整形で、内外面は割めの強い磨いで。	
H114	150	土師器	カマド内-2	L1F12.2器高5.9 L/2	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、体部外面に輪筋のみ。底部は手持ちへう割り。内面は撫で後、雑な斜射状へう磨き。	
H115	194	土師器	P内+12	L1F12.8	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、体部外面に輪筋のみ。底部は手持ちへう割り。内面は撫で後、放射状へう磨き。	
H116	194	土師器	南内側寄り+3	L1F12.1器高8.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/白・黄褐色	L1縁部は横溝で、体部外面は撫で後、へう磨き。内面は撫で後、放射状へう磨き。	
H117	149	土師器	東壁際+26	L1F12.0	細砂粒・粗砂粒/良好/白・黄褐色	L1縁部は横溝で、体部は雑なへう磨き。底部はへう割りで後、雑なへう磨き。内面は撫で後、放射状へう磨き。	
H118	194	土師器	カマド内-5	L1F14.8	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、体部外面は横のへう磨き。内面は撫で後、放射状へう磨き。	
H119	149	土師器	東壁寄り+11	L1F14.2	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、体部は雑な横のへう磨き。底部は撫で、内面は撫で後、雑な斜射状へう磨き。	
H120	194	土師器	カマド内-2	L1F13.5	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、体部外面は雑な横のへう磨き。内面は横のへう割りで、底部は尖り。胴部内面に明確な輪筋のみ。	
H121	194	土師器	カマド右側+11	L1F13.5底径2.7 器高0.8	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、胴部内面に横のへう割りで、下半は縦のへう割りで灰色付着物。	
H122	194	土師器	カマド左側+1	L1F19.7底径3.9 器高2.1	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、体部は弱の撫で。胴部外面は縦の雑なへう割りで後、下半はへう磨き。内面は割めのへう割り。	
H123	194	土師器	カマド内-4	底径6.2	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤褐色	胴部外面は雑な横の撫で、内面は縦の撫で。	
H124	149	土師器	カマド内-1	L1F14.4底径7.2 器高3.2	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/白・黄褐色	L1縁部は横溝で、胴部外面はハケ目(1mmに4本)後、雑な撫で、内面は横のハケ目。ハゼ。胴部内外面に接合痕顯著。凸凹割れてる。	
H区12住層							
H125	194	土師器	一括	L1F12.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、底部は雑なへう磨き。内面は撫で、放射状へう磨き。	
H126	194	土師器	カマド内+1	L1F13.2器高0.3	細砂粒・軽石/良好/白・赤褐色	L1縁部は横溝で、体部外面は横のへう割りで、上半部はへう割りで輪筋があるが不明瞭。	
H127	194	土師器	北東側寄り-2	L1F30.4底径8.9 器高2.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、体部外面上半は縦のへう割りで、下半は縦のへう磨き。内面は割めのへう割りで下部に接合痕。	
H128	194	土師器	南壁際+1	底径—	細砂粒/良好/浅黄褐色	胴部外面はへう割りでへう磨き。内面はへう割りで、下部に炭化物付着。内外金磨き。	
H129	195	土師器	南西部+17	L1F18.2	細砂粒・粗砂粒・石英/良好/白・黄褐色	L1縁部は横溝で、胴部外面も撫で。内面は横のへう割りで、磨減。	
H130	195	土師器	カマド内+1	L1F15.6底径6.9 器高2.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、胴部外面は縦から斜めのへう割りで、内面は横のへう割りで、ハゼ。底部はへう割り。	
H131	195	土師器	カマド内+1	L1F17.2	細砂粒・粗砂粒/良好/明黄褐色	胴部外面は縦のへう割りで、内面は横のへう割りで、下に接合痕。	
H区13住層							
H132	195	土師器	南内側寄り+3	L1F12.4器高3.7	細砂粒/良好/稍	L1縁部は横溝で、底部は手持ちへう割りで、間にわずかに撫で部分を残す。内面は撫で。	
H133	195	土師器	中央部+3	L1F13.2器高3.7	細砂粒/良好/白・赤褐色	L1縁部は横溝で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で。赤み濃縮。	
H134	195	土師器	中央部+7	L1F17.8器高5.2	細砂粒/良好/明赤褐色	L1縁部は横溝で、底部は手持ちへう割りで、間に撫で部分を残す。内面は撫で。	
H区14住層							
H135	195	土師器	西部+1	L1F12.0器高5.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/白・赤褐色	L1縁部は横溝で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で。L1縁から底部外面に接合痕。	
H136	195	須恵器	西部+24	L1F12.0	細砂粒/還元焼成/黒灰	ロケタ整形(両向き不明)。作りはシヤベでL1層部に凹線が認められる。胴部外面にケシ面と波状文。L1縁部内面に自然磨。	
H137	195	土師器	西西部	L1F12.8	細砂粒・角閃石/良好/稍	L1縁部は横溝で、胴部外面は斜めのへう割り。内面は割めのへう割りで、外面被熱によるものが粗粒が顕著。	
H138	195	土師器	西部+1	L1F13.5底径5.5 器高1.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/稍	L1縁部は横溝で、胴部外面上半は撫で、下半は斜めのへう割り。内面は撫で、割れてる。胴部内面に輪筋のみ。	
H139	195	土師器	一括	L1F12.9底径6.2 器高1.5	細砂粒・角閃石/良好/白・赤褐色	L1縁部は横溝で、胴部外面上半は撫で、下半は斜めのへう割り。内面は撫で。	I区3土坑
H140	195	土師器	西西部	底径6.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤褐色	胴部外面上半は縦のへう割りで、下半はへう磨き。内面は縦のへう磨き、ハゼ。	
H141	195	土師器	西部+2	底径6.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石・軽石/良好/明赤褐色	胴部外面上半は横のへう割りで、下半は斜めのへう割りで、内面は斜めのへう割りで、わずかにハゼ。底部両辺測磨。	H区85土坑 基部
H142	195	土師器	一括	L1F17.6	細砂粒・輝石・軽石/良好/白・黄褐色	L1縁部は横溝で、胴部外面は縦のへう割りで、被熱による変色。内面は横のへう割りで。	
H143	195	土師器	一括	L1F17.1	細砂粒・粗砂粒・片岩/良好/白・黄褐色	L1縁部は横溝で、胴部外面は雑なへう割りで、黒味。内面は撫で、ハゼ顯著。	H区85土坑 下部に接合痕。
H144	196	土師器	西部+2	L1F17.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石・軽石/良好/稍	L1縁部は横溝で、胴部外面は横のハケ後、雑な横のへう割りで、内面ハゼ显著で輪筋のみを残す。	

番号	持回 P/L	種 器	型 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H145	196 150	土師器 甕	一括	54土坑 1/2	L径17.2底径6.6 高さ30.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/明赤褐色	L線部は横撫で、胴部外面は斜めのヘラ撫で、内面は撫で。	黒地、L区1土坑、R区3土坑
H146	196 150	石製模造品 銅型	南宮寄り+13		L径:8.8 厚:1.7重3.6	ようろう石	基部部に彫が残り、彫が深層して形状作出は不充分。刀子状工具による整形痕が残り、緑色石材。	
H147	196 150	石製模造品 銅型	一括		長(2.5)幅(1.5) 厚(0.6)重2.7	滑石	背面側中央に斜め方向の刀子状工具痕が残り、背面側と比べ裏面側の整形痕は部分的である。	
H148	196 150	灰石 礫破石	中央部北西寄り+17		長16.8幅(17.9) 厚7.3重357.6	粗粒輝石安山岩	やや窪んだ背面側表面の中央付近が摩耗して光沢を帯びる。裏面側面にススが付着、被熱破損。	
H区15土坑								
H149	196 150	土師器 杯	一括 L線一部		L径11.6	細砂粒/良好/赤褐色	L線部は横撫で、L胴部には凹線を施す。外縁は沈線で強調している。底部は手持ちヘラ削り、内面は撫で。	
H150	196 150	土師器 杯	P3+21 L線一部欠		L径11.5高さ5.1	細砂粒・角閃石/良好/明赤褐色	シャープな作り、L線部は横撫で、L胴部には凹線が深層。底部は手持ちヘラ削り、内面は撫で。	
H151	196 150	土師器 杯	一括 1/3		L径11.8高さ4.7	細砂粒/良好/明赤褐色	L線部は横撫で、L胴部は平削り。外縁はシャープな作りで底部は手持ちヘラ削り、内面は丁軍な撫で。	
H152	196 150	土師器 杯	南内宮寄り+5		L径12.3	細砂粒・角閃石/良好/赤褐色	L線部は横撫で、外縁はシャープな作りで、底部は手持ちヘラ削り、手すれによるものか光沢がある。内面は撫で。	
H153	196 150	土師器 高杯	中央部東寄り0 L線一部		L径13.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙	L線部は横撫で、体部はヘラ削り、内面は撫で。	
H154	196 150	土師器 高杯	北東部0 L線一部		L径19.2底径7.8 L線一部	細砂粒・粗砂粒/良好/ にふい/黄褐色	L線部は横撫で、胴部外面は撫で後、窪なヘラ磨き。器面磨滅。	
H155	196 150	粘土 一括			幅4.2厚1.6	細砂粒・角閃石/良好/ にふい/橙	不整楕円形で一端を欠損する。片面の器面は撫で。	
H156	196 150	灰石 礫破石	一括		長16.6幅7.5 厚6.1重748.3	粗粒輝石安山岩	板状を呈する平坦な表面に縦位の粗い刃ならし傷が集中する。	
H267	150	内石 磨石	中央部		長(30.5)幅24.4 厚16.2重1742.0	粗粒輝石安山岩	中央付近で破損、被熱して破損部に近い背面側の表面が大きく剥落するほか、裏面にススが付着する。	
H区16土坑								
H157	197 150	土師器 杯	南東側+15 L線一部		L径12.2高さ5.0	細砂粒・角閃石/良好/ にふい/赤褐色	L線部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り、黒地。内面は撫で後、斜射状及び横のヘラ磨き。	
H158	197 150	土師器 杯	南東側+7 2/3		L径12.8高さ5.5	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	L線部は横撫で、底部はヘラ撫で、内面は撫で後、斜射状ヘラ磨き。	
H159	197 150	土師器 杯	中央部南寄り+5 2/3		L径13.0高さ5.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐色	L線部は横撫で、底部はヘラ磨き、内面は撫で後、窪な斜射状ヘラ磨き、内外面磨滅。	
H160	197 150	土師器 杯	南東側+2 L線一部		L径12.6	細砂粒/良好/明赤褐色	L線部は横撫で、L胴部内面に半凹削り。外縁はシャープな作りで底部は手持ちヘラ削り後、撫で、内面は撫で。	
H161	197 150	土師器 杯	一括 1/4		L径13.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐色	L線部は横撫で、内面に細かなハゼ。底部は手持ちヘラ削り、内面は撫で後、斜射状ヘラ磨き。	
H162	197 150	土師器 杯	南東側+8 L線一部欠		L径11.0高さ6.6	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	L線部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り、内面は撫で、粗粒顕著。	
H163	197 150	土師器 高杯	南東側+13 杯底部一部		脚径8.3	細砂粒・角閃石/良好/ にふい/赤褐色	杯内面に放射状ヘラ磨き。脚部外面は撫で、内面は指先撫で。	
H164	197 150	土師器 高杯	南東側+1 L線一部		L径10.7	細砂粒/良好/明赤褐色	L線部は横撫で、胴部外面は縦のヘラ削り後、横の窪な撫で、内面は横のヘラ磨き。	
H165	197 150	土師器 杯	南東側+1 1/4		L径15.4	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐色	L線部は横撫で、胴部外面は縦の撫で、内面は撫で、輪郭み痕。	
H区1土坑								
H166	197 151	火打石 板状	P3一括		長(2.4)幅(2.0) 厚1.3重4.1	玉髄	背面側エッジ・側面下端側エッジが使用され、磨削痕が集中する。左辺側を欠損する。	
H区1土坑								
H167	197 151	土師器 杯	L線部		L径13.2	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐色	L線部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り、内面は撫で、外面に覆付着。	
H168	197 151	土師器 杯	2/3		L径12.8高さ5.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐色	L線部は横撫で、窪かなハゼ、L胴部には凹線を施す。底部は手持ちヘラ削り、中央に黒地、内面は撫で。	
H169	197 151	土師器 杯	2/3		L径14.8高さ5.9	細砂粒/良好/にふい/赤褐色	L線部は横撫で、L胴部には凹線を施す。底部は手持ちヘラ削り、内面は撫で、覆付着。内外面磨滅。	
H170	197 151	土師器 杯	胴部一部破片		—	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/にふい/黄褐色	L線部は横撫で、胴部内面はヘラ削り、胴部外面はヘラ撫で。	
H区4土坑								
H171	197 151	土師器 杯	L線部		L径9.6	細砂粒/良好/明赤褐色	L線部の一部内外面に焼戻。内外面は窪なヘラ撫で、粉っぽい粘土。	
H区15土坑								
H172	197 151	土師器 甕	底部		底径6.7	細砂粒・粗砂粒・石英 /良好/明黄褐色	胴部外面は縦のヘラ削り後、窪な撫で、内面の粗粒顕著。	
H区16土坑								
H173	197 151	深鉢	一括 胴部破片		—	細砂・白色粒・黒色粒・緑 縞・ふつう・にふい/黄褐色	R L、L Rを引伏施文する。	黒底・有尾
H区17土坑								
H174	197 151	土師器 杯	L線一部		L径11.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ 赤褐色	L線部は横撫で、底部は手持ちヘラ削り後、ヘラ磨き。内面は撫で、L線部と内面手すれによるものか僅かに光沢あり。	
H区18土坑								
H175	197 151	深鉢	胴部破片		—	細砂・白色粒・黒色粒・ 縞縞・ふつう・明赤褐色	R L、L Rを引伏施文する。	黒底・有尾
H176	197 151	深鉢	胴部破片		—	粗砂・縞縞・良好/橙	R Lを横伏施文する。	黒底・有尾
H区21土坑								
H177	197 151	深鉢	L線部破片		—	細砂・黒色粒/良好/ にふい/赤褐色	小突起を付す波状凹線、刻みを伴う隆線を2条めぐらし、鎖状隆線で連結させる。	黒底・内2式
H178	197 151	深鉢	胴部破片		—	細砂・黒色粒/良好/ にふい/赤褐色	斜行する帯状凹線を施し、L Rを充填施文する。	黒底・内2式
H区22土坑								
H179	197 151	深鉢	胴部破片		—	細砂・白色粒・黒色粒・石英 縞縞・ふつう・にふい/黄褐色	L Rを横伏施文する。	黒底・有尾
H区23土坑								
H180	197 151	深鉢	胴部破片		—	粗砂・黒色粒・石英・縞 縞・ふつう・にふい/黄褐色	無筋L r、R lを変形施文する。	黒底・有尾

第4章 検出された遺構と遺物

番号	探検 P.L	種類 種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H181	197 151	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/ 明赤褐色	R Lを横位施文する。	諸磯a式
H区24土坑							
H182	197 151	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英 繊維/ふつう/にぶい黄褐色	O段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
H183	197 151	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/橙	L Rを横位施文する。	諸磯a式
H184	197 151	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/ふつう/橙	L Rを横位施文する。	諸磯a式
H185	197 151	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい黄褐色	横位、縦位の陣帯を施し、L Rを縦位充填施文する。	加納利E 3式
H186	197 151	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい黄褐色	沈線による懸垂文を施し、R Lを充填施文する。	加納利E 3式
H区32土坑							
H187	197 151	深鉢	口縁部破片		細砂、黒線、繊維/ふつう/ 黒褐色	皮状口縁、斜位の平行沈線を施す。	有尾式
H188	197 151	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ 明赤褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
H189	197 151	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/明赤褐色	R Lを横位施文する。H192と同一個体。	黒浜・有尾
H190	197 151	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/橙	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
H191	198 151	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐色	O段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
H192	198 151	深鉢	胴部破片		H189と同一	H189と同一個体。	黒浜・有尾
H193	198 151	深鉢	胴部破片		細砂、石英、繊維/ふつう/ にぶい黄褐色	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
H区33土坑							
H194	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、石英、 繊維/良好/橙	平行沈線、コンパス文を横位多段にめぐらす。	黒浜式
H区34土坑							
H195	198 151	深鉢	口縁部破片	L径33.1 現存器高33.4	細砂、繊維/ふつう/ 明赤褐色	平縁、胴中位が膨らみ、頸部でくびれてL線が開口部、O段多条R L、 L Rを羽状施文する。胴中位に接合痕が明瞭に残る。	黒浜式
H196	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	皮状口縁でL内削ぎ。R L、L R羽状施文を地文とし、平行沈線による 菱形モチーフを描く。交点に内文を描く。	有尾式
H197	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐色	R Lを地文とし、縦位、斜位、弧状の平行沈線を施す。尖頭状のL内 に凸みを付す。	黒浜・有尾
H198	198 151	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐色	R L、L R羽状施文を地文とし、C字状押し沈線をめぐらす。	黒浜式
H区36土坑							
H199	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	皮状口縁、平行沈線により菱形モチーフを描く。内削ぎのL内削ぎ に内削ぎのL内削ぎを施す。	有尾式
H200	198 151	深鉢	胴部破片		細砂、石英粒、繊維/ふつう/ 明赤褐色	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
H区41土坑							
H201	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/ にぶい黄褐色	平行沈線によるこの状のモチーフを描く。外Lと同一個体。	黒浜式
H202	198 151	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/にぶい黄褐色 /ふつう	附加条2種R L+L、Lを横位施文する。	黒浜式
H区42土坑							
H203	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/明赤褐色	L内削ぎ。L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
H区43土坑							
H204	198 151	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
H区45土坑							
H205	198 151	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	2条巻の懸垂文r・rを施す。	黒浜式
H208	199 151	多孔石 棺口縁		長37.0㎝30.3 厚18.4重2330.0	粗粒輝石安山岩	背面に孔5、裏面に孔2を穿つ。左辺側が大きく破損しているが、 被熱によるものか不明。	
H区48土坑							
H206	199 151	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて同一文銭で枚数諸。判読可能な銭貨は新寛永1枚。表面に布 目付着。	
H207	199 151	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて同一文銭で枚数諸。判読可能な銭貨は古寛永1枚。	
H208	199 151	煙草 灰	完形	火皿径1.68 小L径1.11 筒返し径0.65		小Lから筒返しはなだらかに移行する。筒返しの高さは殆どなく、火 皿幅狭体もない。煙竹の一部残存。	
H209	199 151	煙草 灰	完形	小L径1.14 L径径0.41径0.47		煙竹一部残存。小LからL口付まではなだらかに移行する。	
H210	199 151	鉄製品 火打金	完形	長6.4幅2.4 厚0.4		中央上部を鋭く削ぐ。中央に孔を穿ける携帶用火打金。玉髓製火 打金の痕跡なし。外側に華装風の直線が筋となっており、火打金は下 部の裏面に明瞭な使用痕がある。	
H211	199 151	火打石	完形	径2.3幅2.1 厚1.0重5.6	玉髓	両面を側面内に明瞭な使用痕。裏面に接縁が付着し、火打金に接して いたと考えられる。	
H区49土坑							
H212	199 152	瀬戸・美濃 陶製御室	完形	L径9.9底径5.0 厚6.4	淡黄	外面に須賀で簡略化した山水文を描く。相對する外面には3条の線を斜 交して描く。内面から高台部に灰輪、線が、貫入が入る。高台部は幅狭状。 すべて同一文銭で枚数諸。判読可能な銭貨は新寛永1枚。	18世紀前半
H213	199 152	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて同一文銭で枚数諸。判読可能な銭貨は新寛永1枚。	
H214	199	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて同一文銭で5枚諸。判読した1枚は新寛永。	
H区53土坑							
H215	199 152	銭貨	完形	径2.52幅2.538 厚0.091-0.1	寛永通寶	背文、寛文8(1668)年初鋳。	重2.91

番号	持回 P.L	種 器	類 種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H区54土坑								
H216	199	土師器	高林杯	杯部	—	無砂粒・軽石/良好/赤	杯部外面はハケ目(1cmに6本)。内面に横溝で、内外面赤色塗彩。	
H区6土坑								
H218	199	ガラス製品	小玉	完形	径0.523径0.373 重0.18	無色透明	考古により表面を細かく同心の窪みがある。円孔付近は扇状の窪みが円孔を囲むように同心円状を見える。気泡含む。	
H219	199	鉄製品	釘	頭部付近	—	—	頭部付近のみ残存。断面は方形。端部を薄く延ばした後削り削りで頭部とする。木質付着。	
H220	199	152	瓦葺	完形	—	青水通貫など	すべて素一文瓦で1枚積着。判読できる2枚とも新瓦水。表裏2枚は文瓦ではないであろう。	
H区68土坑								
H221	200	152	瓦葺	完形	—	青水通貫など	すべて素一文瓦で3枚積着。一部に布残存。判読した1枚は青水通貫の青瓦。	
H222	200	152	瓦葺	完形	直径120～2.202 径0.106～0.11	念仏瓦	表面に「南無阿弥陀佛」の文字を捺出。表裏に紙状の繊維付着。副瓦。	重2.27
H223	200	152	瓦葺	完形	—	青水通貫など	すべて素一文瓦で4枚積着。瓦文が判読できる面を除き、平織りの布で覆われる。瓦文が見える1枚の直径は25.14mm。	
H224	200	152	ガラス製品	小玉	径0.437径0.341 重0.11	淡青半透明	本邦は白色半透明とされるが、起部付近より緑した部分があり、表面に1箇所赤みが認められ、気泡による膨らみ部分が認められる。白濁部が赤みと同様のよう。同心円状に見え、窪みは同心円状にあり、気泡含む。	
H区69土坑								
H225	200	152	煙管 燻管	完形	火筒径0.96 小径1.62 敷道径0.64	—	燻管一部残存。小径から敷道まではなだらかに移行する。敷道は密く、火皿燻管体も認められない。	
H226	200	152	煙管 燻口	完形	小径1.06 小径径0.34 径0.21	—	燻管一部残存。小径から口付まではなだらかに移行する。	
H227	200	152	鉄製品 火打金	完形	径0.37	—	上部の盛り上がり部分を袖で叩いて薄く延ばし、中央部に円孔をあける。ソフテックス写真によると、使用によると考えられる中央部の塊れが認められる。表裏には華菱と推定される火打金が積着する。火打行や火口の積着は認められない。	
H228	200	152	瓦葺	完形	—	青水通貫など	すべて素一文瓦で1枚積着。判読できる1枚は新瓦水。直径や厚さにばらつきがある。	
H229	200	152	瓦葺	完形	—	青水通貫など	すべて素一文瓦で6枚積着。瓦文が判読できる1枚は新瓦水。1枚のみ直径が25mmを越える。	
H区70土坑								
H230	200	152	美術陶器 土師	口縁1/5欠	口径12.5底径5.8 高3.0	灰黄	外面の口縁部以下は回転造り。削出し高付で、断面三角形状を見し、やや内傾する。内面から口縁部外面に凸條。底部内面に高付輪部との垂直線。口縁部外側に沿って溝の跡が認められる。	17世紀中～後半
H231	200	152	煙管 燻管	完形	火筒径0.98 小径1.62 敷道径0.52	—	小径から敷道まではなだらかに移行する。敷道の立ち上がりは低い。火皿燻管体付着。火皿は高さがあり、密な格子。燻管の下部は、燻管から敷道の上は凹んで若干平直となる。下部には植物繊維が付着する。	重0.6
H232	200	152	煙管 燻口	完形	小径径0.97 小径径0.12 径0.15	—	燻管一部残存。燻管の段がなく、小径から口付まではなだらかに移行する。	重3.8
H233	200	152	鉄製品 火打金	完形	径0.75輪径2.56	—	中央部分がなだらかに盛り上がる山形を見える。頂上部には円孔を設ける。両端部の反りはなく丸くおさまる。頂上部は薄い。刃部中央は厚く、両端は薄い。	
H234	200	152	瓦葺	完形	直径515～2.525 径0.14～0.147	青水通貫	硝化やや進行する。古瓦水。	重3.08
H235	200	152	瓦葺	完形	—	不詳	すべて素瓦。5枚積着。平織りの布が残り、布の上に硝が1本残る。	
H236	200	152	瓦葺	完形	—	青水通貫など	すべて素一文瓦で5枚積着。判読可能な1枚は古瓦水。平織りの布で包まれる。硝條と考えられる木片と重なって出上。	
H区71土坑								
H237	201	152	煙管 燻口	両端欠損	小径1.10 小径径0.32	—	小径と口付端部欠損。燻管一部残存。燻管下部は凹んで外面に横線。硝は凹んで凹んで口付に付いている。	
H238	201	152	鉄製品 火打金	完形	径2.51	—	いわゆる捻り型。縦く延ばした両端を刃部端で折り曲げ上部で左方にねじる。両端部は上部で折れ合わせるように見えるが、ソフテックス写真では折した後に両端を下に丸めているようである。	
H239	201	152	瓦葺	完形	—	青水通貫など	すべて素一文瓦で9枚積着。瓦文の一部のみ確認できるが、古瓦水か新瓦水かは不明。平織りの布で包まれるが、口は縦く1辺と2辺との間が空く部分がある。	
H240	201	152	瓦葺	完形	—	青水通貫	すべて素瓦でH241～H246の6枚積着していたが、赤水通貫が認められたために判読しない。	
H241	201	152	瓦葺	完形	直径2.442～2.480 径0.104～0.111	赤水通貫	隅部の角がなく、縁は丸みを持つ。方形穴の縁もやや歪で不整。瓦文はやや変形。右1明神の板積瓦もしくは口付明神での使用による子連れか。硝條付着。	重2.56
H242	201	152	瓦葺	完形	直径2.321～2.304 径0.104～0.112	青水通貫	新瓦水。	重2.72
H243	201	152	瓦葺	完形	直径2.292～2.283 径0.118～0.132	青水通貫	新瓦水。方形穴は大きく、縁不足で一部変形。	重2.40
H244	201	152	瓦葺	完形	直径2.462～2.450 径0.098～0.102	青水通貫	新瓦水。	重3.18
H245	201	152	瓦葺	完形	直径2.258～2.208 径0.098～0.108	青水通貫	新瓦水。高津青(元)瓦。寛保元年(1741)以降製造。磁性強い。	重1.82
H246	201	152	瓦葺	完形	直径2.332～2.308 径0.101～0.109	青水通貫	新瓦水。	重2.16
H区72土坑								
H247	201	152	瓦葺	完形	—	青水通貫など	副瓦で2枚積着。瓦文判読可能な1枚は古瓦水。判読不可能な瓦葺の直径は23.20mmと小さい。一部に紙状の繊維付着。	
H区73土坑								
H248	201	153	瓦葺	完形	—	青水通貫など	すべて素瓦で6枚積着。瓦文が判読できる1枚は新瓦水。判読できない1枚は直径が24.01mmと大きく、古瓦水の可能性もある。	
H249	201	153	瓦葺	完形	—	青水通貫	径25を測られた。瓦文が判読できる1枚は新瓦水。	
H250	201	153	瓦葺	完形	—	青水通貫など	すべて素瓦と推定され、12枚前後積着。瓦文が判読できる1枚は新瓦水。周囲に布付着。中の1枚はやや変形し、縦條の跡がある。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持回P.L	種類	出土位置	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H251	201	鉄製品	一部欠	長4.86幅1.87		板状製品で下部は直で上部がやや湾曲。右端部は小さく突き出し、左上端も突き出し部分の一部分が残存。底面に付いた火打石の凹みがある。	
H252	201	火打石		長1.6幅2.5	玉髄	青褐色・黒緑のエッジに使用に伴う縦方向の割線が残る。エッジに鉄跡が付着する。	
H253	153	分銅		長1.6幅13.0			
H区74土坑							
H253	202	埴管	一部欠	小径1.512 付径0.96高0.78		断面の湾曲は弱く、端部が上方に向けた直後に火皿を付ける。断面と両部の直径差は少ない。火皿は機状を呈するが、挿入部は認められない。	
H254	202	埴管	一部欠	小径0.902 付径0.46高0.68		両部から1付き部になだらかに移行する。1付き部に機織りが斜状につき出しており、1付き部が一部欠損している。縦方向に一部残存。取り1付時に2256から1枚割断。割断できる1枚は古土色。	
H255	202	銭貨	完形		青水透貫	すべて割断で1枚残存。取り1付時に1枚割断。割断できる1枚は古土色。割断している10枚は銭文が半読できないが、貨幣の年代と銭径から新貨水と考えられる。内面の銭径は23.26mmと23.45mm。	
H256	202	銭貨	完形		青水透貫など	基部の一边は5mm。頭部は薄くのびた端部を折り返したような形状を呈する。頭部から15mm付近以下に直交する木質(年輪層)が残る。	
H257	202	鉄製品	先端欠			釘と直交方向に木質(年輪層)が残る。	
H258	202	鉄製品	両端欠			釘と同方向に木質(年輪層)が残る。	
H259	202	鉄製品	両端欠			釘と同方向に木質(年輪層)が残る。	
H260	202	鉄製品	両端欠			釘と同方向に木質(年輪層)が残る。	
H261	202	鉄製品	両端欠			釘と同方向に木質(年輪層)が残る。	
H262	202	鉄製品	完形	長9.9幅2.0		上部が尖った角があり、両側は直線的。右部も直線的だが、使用直前か直前に一部がやや湾曲している。表面に鉄跡が認められる。	
H263	202	鉄製品	完形	長2.0幅2.0	玉髄	両面表側角に明顯な使用痕。裏面に鉄跡が付着し、火打石に接していたと考えられる。	
H264	202	鉄製品	完形	長2.8幅1.8高0.9	玉髄	背面側の縁、エッジに使用に伴う縦方向の割線が残る。再生後の割片を再び火打石として使用したもの。	
H265	202	銭貨	完形	直径2.56±2.529 厚0.065±0.102	青水透貫	新貨水。文銭。寛文8年(1668)鋳造開始。	庫.13
H区77土坑							
H264	202	鉄製品	完形	長2.8幅1.8高0.9	玉髄	背面側の縁、エッジに使用に伴う縦方向の割線が残る。再生後の割片を再び火打石として使用したもの。	
H区墓跡跡							
H265	202	銭貨	完形	直径2.56±2.529 厚0.065±0.102	青水透貫	新貨水。文銭。寛文8年(1668)鋳造開始。	庫.13
2トレンチ							
H266	202	土製門板	完形	長7.2幅7.6 厚1.3	細砂粒・角閃石/良好/ぶい/黄緑	裏の底部周辺を打ち欠いた整形	
1区1井戸							
1.1	202	須恵器	2/3	径11.7底径6.8	細砂粒/酸化塩/ぶい/黄緑	ロクロ整形(右回転)。底部は回転方向不明。器内面に磨き、文字不明。	
1.2	202	須恵器	口縁~胴部	径13.4	細砂粒/酸化塩/ぶい/黄緑	ロクロ整形。口縁部は機織で、胴部内外面はロクロで。	
1区2住居							
1.3	202	土師器	カマド内・8/1/2	径13.4器高3.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤	口縁部は機織で、底部は手持ちへう割り。内面は機で、斜紋状のハケ掛け。内外面磨き。	
1.4	202	土師器	南東側-17/1/4	径14.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤	口縁部は機織で、底部は手持ちへう割り。内面は機で、斜紋状の二段ハケ掛け。	
1.5	202	土師器	南東側-17/1/4	径14.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤	口縁部は機織で、底部は手持ちへう割り。内面は機で、斜紋状及び斜紋状の二段ハケ掛け。	
1.6	202	土師器	一括 口縁~胴部	径14.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/明赤	口縁部は機織で、体部から底部は手持ちへう割り。内面は機で、	
1.7	202	土師器	南東側-8/1/4	径15.6	細砂粒・軽石/良好/赤黒	口縁部は機織で、体部外面は機で、内面は機で、口縁部と胴部外面に機織み。	
1.8	202	土師器	一括 胴部	底径10.6	細砂粒・角閃石/良好/赤黒	胴部外面は機で、端部は機織で、内部はへう割り。	
1.9	202	灰釉陶器	南東側-6/1/4	径13.8	細砂粒/還元塩/ぶい/黄緑	ロクロ整形(回転方向不明)。施釉はハケ掛け。	東遺
1.10	202	灰釉陶器	南西~一括 口縁部	径16.8	細砂粒/還元塩/ぶい/黄緑	ロクロ整形(回転方向不明)。施釉はハケ掛け。	東遺
1.11	202	灰釉陶器	南東~一括 胴部	底径7.1	細砂粒/還元塩/ぶい/黄緑	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は三月目高台で底部切り離し後の付高台。	東遺
1.12	202	土師器	カマド前0/1/6	径18.6底径9.3器高21.7	細砂粒/良好/明赤	口縁部は機織で、胴部外面は機で、内面は機で、内面も斜めのへう割りで、粉っぽい粘土。	
1.13	202	土師器	カマド前0/1/6	径18.6底径9.3器高21.7	細砂粒/良好/明赤	口縁部は機織で、胴部外面は機で、内面は機で、内面も斜めのへう割りで、粉っぽい粘土。	
1.14	202	土師器	北東側-29/1/2	径11.5底径5.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/赤黒	口縁部は機織で、胴部外面は機で、内面は機で、	
1.15	202	土師器	北東側-26/1/2	径13.1底径6.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/赤黒	口縁部は機織で、胴部外面は機で、内面は機で、	
1.16	202	土師器	カマド前0/1/2	径12.8底径6.8器高11.7	細砂粒・粗砂粒/良好/赤黒	口縁部は機織で、胴部外面は機で、内面は機で、内外面磨き。	
1.17	202	土師器	西側前-2 胴部~底部	底径6.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤	胴部外面は機で、胴部外面は機で、下半は横から縦の細かなへう割りで、内面も横のへう割りで、輪切みと細かなへう割りで、	
1.18	202	土師器	西側前-1 胴部~底部	底径8.4	細砂粒・粗砂粒/片角閃石/良好/ぶい/黄緑	口縁部は機織で、胴部外面も機で、下半の斜紋磨き。内面は機で、	
1.19	202	土師器	カマド内3/4	径17.1底径8.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/ぶい/黄緑	口縁部は機織で、胴部外面は機で、内面も機で、	
1.20	202	土師器	カマド内3/4	径18.8底径7.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/ぶい/黄緑	口縁部は機織で、胴部外面は機で、内面も機で、	
1.21	202	土師器	中内区北寄り1	長4.2幅4.5 厚0.8高3.4	珪質白灰	略方形だが3mmほど幅が広い。背面側は光沢を帯びているが、裏面側は縦線が残る。滑り孔を縦位置に。	
1区3住居							
1.22	202	土師器	P2内+0/3/4	径11.0器高3.3	細砂粒・角閃石/良好/赤黒	口縁部は機織で、底部は手持ちへう割りで、輪切みで、	

番号	持因P/L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
123	204	土師器 杯	P内+28 4/5	口径12.6器高4.0	細砂粒・角閃石/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割りで、間に撫での部分を残す。外面は横撫で、粉っぽい。焼土。	
124	204	土師器 杯	P内+41 3/4	口径14.6器高4.3	細砂粒/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割りで、間にわずかに撫での部分を残す。	
125	204	土師器 杯	P内+16 2/3	口径11.9器高3.5	細砂粒/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で、粉っぽい。焼土。	
126	204	土師器 杯	一括 1/4	口径12.8	細砂粒/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で、粉っぽい。焼土。	
127	204	土師器 罎	P内+29 口縁一部	口径15.4	細砂粒・輝石/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で。	
128	204	土師器 杯	P内+63 3/4	口径12.3器高4.2	細砂粒/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で。	
129	204	土師器 杯	P内+44 口縁片	口径11.8器高3.1	細砂粒・粗砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(左回転)。体部下端及び底部は回転へう割り。	
130	204	須恵器 はそう	P内+40 胴部一部	—	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形。注1)底部は粘土を削付した上に穿孔し、胴部に平行穴線とクシの刺交を施す。胴部に厚く自然釉。	
131	204	土師器 鉢	P内+10 口縁一部	口径20.6	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤釉	口縁部は横撫で、体部外面は手持ちへう割り。内面は撫で、内外面滑潤。	
132	204	須恵器 長須壺	P内+51 口縁一部	口径10.7	細砂粒・粗砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。口縁部から胴部内面に自然釉。	
133	204	土師器 甕	P内+27 口縁一部	口径23.8	細砂粒・角閃石/良好/赤釉	口縁部は横撫で、胴部外面は横から斜へう割り。内面はへう撫で。	
134	204	土師器 杯	P内+64 胴部上縁一部	口径5.3	細砂粒・粗砂粒/良好/稍赤	胴部外面は撫で、下端に敷付着。内面は撫で、焼戻。底部に木葉痕。	
135	204	土師器 罎	P内+23 胴部一部	口径7.4	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい赤釉	胴部外面は斜めのへう割り。下端から底部に黒環。内面は横のへう割りで、下に凸出部。	
136	204	須製品 罎	P内+70 底縁	径26.3器高5.8 厚0.2重136	—	大型の製品で中央で折れている。実測値の部を研いでいたものと思われるが、鍋のため判別としない。基調に柄の本質の残存は見られない。	
I区4住居							
137	204	土師器 杯	P内+23 口縁一部	口径11.3器高3.7	細砂粒・角閃石/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で、粉っぽい。焼土。	
138	205	土師器 杯	中央部西寄り+1 口縁一部	口径12.2	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で。	
139	205	土師器 杯	南西部の9 口縁一部	口径11.3器高3.9	細砂粒・輝石/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で、内外面滑潤。	
140	205	土師器 杯	南寄り+15 完形	口径12.2器高3.5	細砂粒・角閃石/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で、内面滑潤。	
141	205	土師器 罎	P内+28 口縁一部	口径14.3器高3.6	細砂粒・角閃石/良好/明赤釉	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で。	
142	205	土師器 罎	西部-6 4/5	口径14.3器高3.9	細砂粒・角閃石/良好/にぶい赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で。	
143	205	須恵器 杯	西部部-17 器高4.0	口径12.6口径7.4 器高4.0	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転へう割りし無調整。外面から底部の反面に自然釉。	
144	205	土師器 罎	一括 口縁一部	口径17.6	細砂粒・粗砂粒・輝石/還元焼/良好/にぶい赤	ロクロ整形(右回転)。胴部外面はロクロの撫で、胴部外面は横から斜めのへう割りで、内面は滑潤。内面滑潤。	
145	205	土師器 罎	一括 口縁一部	口径19.6	細砂粒・角閃石/良好/灰	口縁部は横撫で、外面に輪轆み。胴部外面は横のへう割り。内面は斜めのへう割りで。	
146	205	須製品 罎	中央部西寄り+5 厚0.2重132	径26.3器高5.8 厚0.2重132	—	有稜筒状須製品類に分類されるもので前方先端と茎を欠損している。胴径が急んでおり口ひび割れが顕著。	
I区5住居							
147	205	土師器 杯	カマ内+2 完形	口径12.4器高5.1	細砂粒/良好/稍赤	比較的シャープな作りで、口縁部は横撫で、口内面は平皿。底部は手持ちへう割り。内面は撫で、粉っぽい。焼土。	
148	205	土師器 杯	南寄り+32 1/4	口径12.8器高5.0	細砂粒/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。滑潤。内面は撫で。	
149	205	土師器 杯	カマ内+1 1/3	口径12.6器高5.9	細砂粒・粗砂粒/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面はへう撫で、口縁部から底部外面に敷付着。	
150	205	土師器 罎	町蔵六-2 胴部一部	口径12.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で、内外面ハゼ。	
151	205	土師器 罎	中央部-5 胴部一部	口径19.0	粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄緑	胴部外面は斜めのへう割り。内面は横のへう割りで、下手に接合痕と輪轆み痕。	
152	205	土師器 罎	カマ内+8 口縁一部	口径12.8器高6.2	細砂粒・角閃石/良好/赤釉	口縁部は横撫で、体部は横のへう割り。底部はへう撫で。内面もへう撫で。	
153	205	土師器 罎	町蔵六-2 2/3	口径14.3口径5.1 器高12.1	細砂粒・角閃石/良好/稍赤	口縁部は横撫で、胴部外面は横撫で、接合痕明瞭。底部はへう割り。内面は撫で、内外面滑潤。	
153	205	土師器 罎	町蔵六-2 2/3	口径14.3口径5.1 器高12.1	細砂粒・角閃石/良好/稍赤	口縁部は横撫で、胴部外面は横撫で、接合痕明瞭。底部はへう割り。内面は撫で、内外面滑潤。	
154	205	土師器 罎	南寄り+1 口縁部	口径15.0	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄緑	口縁部は横撫で、外面敷付着。胴部外面は横のへう割り。内面は撫で。	
155	205	土師器 罎	北部-14 胴部一部	口径16.2	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい赤	胴部外面は斜めのへう割り。内面はハゼ顕著。下端から底部に黒環。	
156	205	土師器 罎	一括 胴部一部	口径16.0	粗砂粒・小礫/良好/にぶい赤	胴部外面及び底部はへう割り。内面はへう撫で。外面滑潤。	139併
157	205	土師器 罎	中央部-27 底縁	口径16.3	細砂粒・粗砂粒・石英/良好/にぶい黄緑	胴部外面及び底部はへう割り。内面は滑々な撫で。	
158	205	底石 礫底石?	南寄り+8	径27.8器高1 厚5.5重1971.0	砂岩	四面使用。裏面に可なりし傷がある。小3部内端には靴・型形痕が残る。	
I区6住居							
159	206	土師器 杯	埋土1 口縁一部	口径12.8	細砂粒/良好/稍赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割りで、間に撫での部分を残す。	
160	206	土師器 杯	カマ内-1 口縁一部	口径12.1器高5.7	細砂粒・軽石/良好/稍赤	シャープな作りで口縁部は横撫で、口内面には凹線を施す。底部は手持ちへう割り。内面は撫で。	
161	206	土師器 杯	中央部西寄り+4 底縁	口径12.2器高5.7	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい赤	口縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り後、へう巻。内面は滑々な撫で。	
162	206	土師器 罎	北寄り+9 完形	口径25.1口径19.2 器高31.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄緑	口縁部は横撫で、胴部外面は横のへう割り。上段に黒環。下半は斜径のへう割り。内面は縦の丁字な撫で、下端に茶色の付着物。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持戻P 1	種類 土器	形状 一底	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
163	206	土師器	一底	底径3.9	縦径13.9 底径4.3	織物粒・粗砂粒・角閃石/良好/赤褐色	胴部外面は斜めのへう割り。内面はへう割で、底部に本葉皿。	
164	206	土師器	カマド内・2 上縁一部欠	上径17.9 底径4.3	縦径13.9 底径4.3	織物粒・粗砂粒・軽石/良好/赤褐色	上縁部は横撫で、底部は斜めのへう割り。内面は撫で、ハゼ。下平に接合部。外面直線。	
165	206	土師器	中央部・1 胴中部～底部	底径5.8	縦径13.9 底径4.3	織物粒・粗砂粒・軽石/良好/赤褐色	胴部外面は縦から斜めのへう割り。内面は撫で、ハゼ面。	
166	206	土師器	志保書り・1 胴下平～底部	底径4.7	縦径13.9 底径4.3	織物粒・粗砂粒・軽石/良好/赤褐色	胴部外面は斜めのへう割り。内面は斜めの撫で、接合部。	
I 区7住居								
167	206	土師器	南部・5 上縁一部欠	上径13.3 底径4.3	縦径13.3 底径4.3	織物粒・軽石/良好/赤褐色	上縁部は横撫で、外面直線。底部は手持ちへう割り。内面は撫で、ハゼ。	
168	206	土師器	一底	上縁一部欠	上径14.9	縦径14.9	上縁部は横撫で、底部は手持ちへう割りです。撫で部の部分を残す。内面は撫で、使用によるものか強い光沢あり。	
169	206	須恵器	南内面書り・15 底面	上径12.2 底径0.5	縦径12.2 底径0.5	織物粒/還元焼成/灰	クロク回転(右回転)。天井部外面に回転へう割り。狭みは環状溝みで貼付け。内面に重ね書き。	
170	206	須恵器	南へルト一拵 胴部～底部	—	—	織物粒/還元焼成/灰白	クロク回転(右回転)。天井部外面に回転へう割り。狭みは環状溝みで貼付け。	
171	206	須恵器 上面直線	南部・24 底面	—	—	織物粒/還元焼成/灰白	クロク回転。整形はやや雑。胴部外面の一部に自然釉。	
172	206	磁石 棒状遺	中央部・11	長14.9 幅7.2 厚3.8 重632.0	—	粗粒輝石/安山岩	小口部両端・両側面に黒目痕が残る。小口部には敲打痕と摩粒痕が混在する。	
I 区8住居								
173	206	土師器	カマド内・11 上縁一部欠	上径12.6 底径5.5	縦径12.6 底径5.5	織物粒・粗砂粒・角閃石/良好/赤褐色	上縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り後、丁寧なへう割で、内面は丁寧なへう割で、やや厚い直線状のへう書き。ハゼ面。	
174	206	土師器	カマド内・11 上縁一部欠	上径12.1 底径5.1	縦径12.1 底径5.1	織物粒・粗砂粒・角閃石/良好/赤褐色	上縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で、ハゼ面。	
175	206	土師器	南側面・4 1/2	上径12.2 底径4.8	縦径12.2 底径4.8	織物粒・粗砂粒・軽石/良好/赤褐色	上縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で、内外面直線。	
176	206	土師器	一拵 底部	底径5.6	縦径12.2 底径4.8	織物粒・粗砂粒/良好/灰黄褐色	胴部外面は縦のへう割り。内面はへう割り。内面はへう割。	
177	206	土師器	カマド右袖・9 胴部～底部	底径5.6	縦径12.2 底径4.8	織物粒・粗砂粒/良好/赤褐色	胴部外面は縦のへう割で、底部はへう割で、輪積み面。	
I 区9住居								
178	206	土師器	カマド内・3 2/3	上径11.2 底径4.9	縦径11.2 底径4.9	織物粒・角閃石/良好/明赤褐色	上縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で後、斜紋状へう書き。	
179	206	土師器	北西部・2 1/2	上径14.0 底径5.2	縦径14.0 底径5.2	織物粒・粗砂粒/良好/赤褐色	上縁部は横撫で、底部は手持ちへう割り。内面は撫で後、斜紋状へう書き。	
180	206	土師器	カマド内・3 上縁一部欠	上径13.5 底径5.9	縦径13.5 底径5.9	織物粒/良好/粗	外縁は沈線で成形。上縁部は横撫で、外面に輪積み。底部は手持ちへう割り。内面は撫で、内外面直線。	
181	206	土師器	カマド一拵 上縁一部欠	上径14.0	縦径14.0	織物粒/良好/赤褐色	上縁部は横撫で、内面は撫で、斜紋状へう書き。外面及び上縁部内面にハゼ。	
182	206	土師器	カマド内・3 1/2	上径15.8 底径7.1	縦径15.8 底径7.1	織物粒/良好/明赤褐色	上縁部は横撫で、底部は撫でなへう割り。内面は撫で後、斜紋状へう書き。	
183	206	土師器 白付鉢か	カマド内・7 胴部	上径15.3 底径19.4	縦径15.3 底径19.4	織物粒/良好/赤褐色	胴部外面は斜めのへう書き。内面は撫で、ハゼ。胴部外面上に覆付着。	
184	206	土師器	一拵 上縁一部欠	上径14.4 底径6.5	縦径14.4 底径6.5	織物粒・粗砂粒/良好/粗赤褐色	上縁部は横撫で、底部は斜めのへう割り。高台は付高台。内面は丁寧なへう書き後の黒色処理。一部焼き戻り変色。	
185	206	粘土土	カマド一拵	長3.9 幅6.6 厚3.1	縦径3.9 幅6.6 厚3.1	織物粒・角閃石/良好/粗	粘土土を先でつぶした状態状態で焼成されている。	
186	206	石製榨油道具 白玉	南側面・1	径0.6 重40.6 厚0.3 重0.2	—	滑石	完成状態。南端の滑石面は丁取で磨成されている。平型な土仕が、体部には縦位の軌・線痕が残る。	
187	207	土師器	カマド内・1 胴部下部～底部	底径8.4	縦径12.2 底径4.8	織物粒・粗砂粒・軽石/良好/赤褐色	胴部外面は縦のへう割で、底部はへう割り。内面はハゲ目(1cmに2本か)。	
188	207	土師器	上縁部 上縁～胴部	上径17.5	縦径17.5	織物粒・軽石/良好/赤褐色	上縁部は横撫で、胴部は斜めのへう割り。内面は撫で、ハゼ面。	
189	207	土師器	カマド内・15 上縁一部欠	上径17.3	縦径17.3	織物粒・角閃石/良好/粗	上縁部は横撫で、胴部外面は縦から斜めのハゲ目(1cmに4本)。内面は横のへう割で。	
190	207	土師器	南内面・2 上縁一部欠	上径19.4	縦径19.4	織物粒・粗砂粒・角閃石/良好/赤褐色	上縁部は横撫で、胴部外面はハゲ目工具による横の撫で後、斜めのへう割り。内面は横のへう割り。輪積み面。	
191	207	土師器	カマド内・1 上縁一部欠	上径14.8	縦径14.8	織物粒・角閃石/良好/灰白	上縁部は横撫で、胴部内面は撫で後、上平は縦のへう書き。下平は不明。粗粒面。内面は灰白。	
I 区10								
192	207	深鉢	上縁～胴下位	上径(31.0) 現存器高32.6	縦径(31.0) 現存器高32.6	粗砂粒・織物・繊維/ふつう/明赤褐色	平縁。胴中部が膨らみ、胴部でぐくられて縁が閉鎖する器形。屈曲部に横位平行沈線を含め、文様帯内に変形文を横位に並べ替える。内側きのL内側部に半横竹筒内皮による筋が付着。屈曲部下はR上、L Rを引状施文。	有底式
193	207	深鉢	上縁～胴下位	上径29.0 現存器高30.3	縦径29.0 現存器高30.3	粗砂粒・繊維/ふつう/明赤褐色	平縁で縁が外周する器形。屈曲部に横位平行沈線を含め、文様帯内に変形文を横位に並べ替える。L内側部に筋が付着。屈曲部下はR上L Rを引状施文。	有底式
194	207	深鉢	上縁～胴下位	上径19.6 現存器高24.9	縦径19.6 現存器高24.9	粗砂粒・織物・繊維/ふつう/明赤褐色	平縁で縁が外周する器形。屈曲部に横位平行沈線を含め、文様帯内に変形文を横位に並べ替える。L内側部に筋が付着。屈曲部下はR上L Rを引状施文。	有底式
195	207	深鉢	上縁部破片	上径(30.5)	縦径(30.5)	粗砂粒・織物・繊維/ふつう/明赤褐色	縁やかな破片上縁で、縁が外周する器形。上縁下、屈曲部に横位平行沈線を含め、文様帯内に変形文を横位に並べ替える。L内側部に筋が付着。屈曲部下はR上L Rを引状施文。	有底式
196	208	深鉢	胴部破片	上径(28.0)	縦径(28.0)	粗砂粒・繊維/ふつう/赤褐色	胴下位がくくられた器形。胴部で外周する器形。屈曲部に横位平行沈線を含め、文様帯内に変形文を横位に並べ替える。L内側部に筋が付着。屈曲部下はR上L Rを引状施文。	有底式
197	208	深鉢	上縁～胴下位	上径(14.0) 現存器高10.4	縦径(14.0) 現存器高10.4	粗砂粒・繊維/ふつう/赤褐色	小形。縦い破片上縁で、くくられた器形。O段多素L R L Rを引状施文を地文とし、上縁下に横位に平行沈線を2条づつめぐる。	有底式
198	208	深鉢	上縁～胴下位	上径(28.0)	縦径(28.0)	粗砂粒・黒色粒・繊維/ふつう/赤褐色	平縁。ほぼ直立し、上縁が閉鎖し内湾する。無筋L Rを引状施文する。	黒底式
199	208	深鉢	上縁～胴下位	上径(36.0)	縦径(36.0)	粗砂粒・繊維/ふつう/赤褐色	ボウル状の器形。無筋L Rを引状施文する。上縁下に横位に平行沈線を2条づつめぐる。胴中部には無文として地文がない。挿付痕あり。	黒底式
199	208	深鉢	上縁～胴部	上径(36.0)	縦径(36.0)	粗砂粒・黒色粒・繊維/ふつう/赤褐色	無筋L R R 1を引状施文する。	黒底式
199	208	深鉢	上縁～胴部	上径(11.4)	縦径(11.4)	粗砂粒・黒色粒・繊維/ふつう/粗	小形。縦い破片上縁。斜斜する2条きの横素文R・Lを斜位施文する。	黒底式

番号	持回 P.L	種 類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 102	208 156	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄褐色	くの字状に外陥する器形。無節R L、L rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 103	208 156	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、繊維/ふつう/ /粗	R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 104	208 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ふつう/ /にぶい黄	無節L r、R lを成形施文する。	黒灰・有尾
I 105	208 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ /にぶい赤褐色	波状口縁で口内所貫。連続爪形文により変形文を幅く。	有尾式
I 106	208 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ /にぶい黄褐色	連続爪形文を横位にめぐらす。	有尾式
I 107	208 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、片岩、繊維/ふつう/ /黄灰	波状口縁、口縁に沿った斜行する平行沈線を施す。	有尾式
I 108	208 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維、繊維/ふつう/ /灰黄褐色	縦い波状口縁。平行沈線により変形文を幅く。	有尾式
I 109	208 157	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、繊維/ふつう/ /にぶい黄褐色	平行沈線により変形モチーフを幅く。	有尾式
I 110	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/良好/ /にぶい黄褐色	平行沈線により変形モチーフを幅く。	有尾式
I 111	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維、片岩、繊維/ /ふつう/赤褐色	波状口縁で口内所貫。R L、O段多条L R羽状施文を地文とし、口縁に沿った斜行する平行沈線を多段に施す。	有尾式
I 112	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/良好/粗	縦い波状口縁で口内所貫。無節R L、L r羽状施文を地文とし、連続爪形文を横位にめぐらす。	有尾式
I 113	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ /にぶい黄褐色	平行沈線により変形モチーフを幅く。I 114と同一個体。	有尾式
I 114	209 157	深鉢	胴部破片		I 113と同一	R Lを地文とし、縦位平行沈線をめぐらす。I 113と同一個体。	有尾式
I 115	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、繊維/ふつう/ /黒褐色	縦く外収する器形。口縁下に2条の平行沈線をめぐらし、以下、縦位の平行沈線を充填施文する。I 116と同一個体。	黒灰式
I 116	209 157	深鉢	口縁部破片		I 115と同一	I 115と同一個体。	黒灰式
I 117	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ /にぶい黄褐色	沈線により斜格子文を幅く。	黒灰式
I 118	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/粗	横位、縦位、斜行する平行沈線を施す。I 119と同一個体。	黒灰式
I 119	209 157	深鉢	胴部破片		I 118と同一	I 118と同一個体。	黒灰式
I 120	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、繊維/ふつう/ /灰黄褐色	口縁が縦く外収。R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 121	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、白色粒、 繊維/ふつう/黄褐色	無節L r、R lを羽状施文する。	黒灰式
I 122	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維、白色粒、繊維/ /ふつう/にぶい黄褐色	無節R L、L rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 123	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、白色粒、 石莖、繊維/ふつう/粗	無節L Rを横位施文する。	黒灰・有尾
I 124	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、繊維/ふつう/ /赤褐色	縦い波状口縁で口内所貫。O段多条L Rを横位施文する。	有尾式
I 125	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ /にぶい黄	口縁がくの字状に短く外収。R Lを横位施文する。	黒灰式
I 126	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ /灰黄褐色	斜行する2条色の隠糸文・RとL・Lを横位施文する。	黒灰式
I 127	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、繊維/ふつう/ /黄褐色	2条色の隠糸文・RとL・Lを横位施文する。口内にも施文。	黒灰式
I 128	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ /にぶい赤褐色	結節の無節R lを横位施文する。I 153と同一個体。	黒灰式
I 129	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、繊維/ふつう/ /にぶい黄褐色	O段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 130	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、白色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 131	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、白色粒、 繊維/ふつう/明黄褐色	R L、L Rを成形施文する。	黒灰・有尾
I 132	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ /ふつう/にぶい赤褐色	無節L r、R lを成形施文する。	黒灰・有尾
I 133	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/粗	O段多条R L、L Rを成形施文する。	黒灰・有尾
I 134	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、白色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄	無節L r、R lを羽状施文する。内面研磨。	黒灰・有尾
I 135	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、白色粒、 繊維/ふつう/明赤褐色	R L、無節L rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 136	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、白色粒、 繊維/ふつう/灰黄褐色	無節L rを横位施文する。	黒灰・有尾
I 137	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、繊維/ふつう/ /黒褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 138	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ /ふつう/灰黄褐色	無節R L、L rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 139	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、白色粒、 石莖、繊維/ふつう/明赤褐色	O段多条R L、L Rを成形施文する。	黒灰・有尾
I 140	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、白色粒、繊維/ /ふつう/にぶい赤褐色	無節L rを横位施文する。	黒灰・有尾
I 141	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、白色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄褐色	L Rを横位施文する。I 142と同一個体。	黒灰・有尾
I 142	210 157	深鉢	胴部破片		I 141と同一	I 141と同一個体。	黒灰・有尾
I 143	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ /ふつう/にぶい黄	L Rを横位施文する。	黒灰・有尾
I 144	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ /ふつう/粗	胴下位の膨らむ器形。無節R lを横位施文する。	黒灰・有尾

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持戻P/L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
1145	210	157	深鉢	胴部破片	粗砂、繊維/ふつう/橙	無胎R1を横位施文する。	黒灰・有尾	
1146	210	157	深鉢	胴部破片	粗砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐	R1を横位施文する。	黒灰・有尾	
1147	210	157	深鉢	胴部破片	粗砂、繊維/ふつう/ にふい/橙	附加条3種軸研不明・Rを横位施文する。	黒灰式	
1148	210	157	深鉢	胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にふい/黄緑	附加条2種L・R・L・L・R・L・Rを羽状施文する。	黒灰式	
1149	211	157	深鉢	胴部破片	粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/赤褐	上半に無胎R1、下半に2条巻の標文R・Rを横位施文する。1150 ・151と同一個体。	黒灰式	
1150	211	157	深鉢	胴部破片	1149・151と同一	1149・151と同一個体。	黒灰式	
1151	211	157	深鉢	胴部破片	1149・150と同一	1149・150と同一個体。	黒灰式	
1152	211	157	深鉢	胴部破片	粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐	2条巻の標文Rを横位施文する。	黒灰式	
1153	211	157	深鉢	胴部破片	1128と同一	1128と同一個体。	黒灰式	
1154	211	157	深鉢	胴部破片	粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/橙	無胎R1を斜位施文する。	黒灰・有尾	
1155	211	157	深鉢	底部破片	底径(10.0)	底部面に横位平行洗線をめくらずに区画、区画内は底状平行洗線を横 位多段に施す。内面研磨。	黒灰式	
1156	211	157	深鉢	底部破片	粗砂、繊維/良好/明赤褐	R・L・Rを羽状施文する。	黒灰・有尾	
1157	211	157	深鉢	底部破片	底径(11.0)	粗砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/良好/橙	無胎L・R1を羽状施文する。	黒灰・有尾
1158	211	157	深鉢	底部破片	底径11.0	粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/良好/橙	無胎R1を横位施文する。	黒灰・有尾
1159	211	157	深鉢	底部破片	底径9.5	粗砂、繊維/ふつう/橙	上げ底気味。R1を横位施文する。	黒灰・有尾
1160	211	158	深鉢	底部破片	底径6.8	粗砂、繊維、繊維/ふつう/ にふい/橙	残存部は無文。	黒灰・有尾
1161	211	158	深鉢	底部破片	底径7.5	粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にふい/橙	無胎R1を横位施文する。	黒灰・有尾
1162	211	158	深鉢	底部破片	底径6.4	粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/橙	—	黒灰・有尾
1163	211	158	深鉢	底部破片	底径(12.4)	粗砂、黒色粒、繊維/ふつう/ 橙	—	黒灰・有尾
1164	211	158	石造 四基無蓋墓		黒色頁岩	完成状態。裏面側の加工が浅く、背面側加工は深い。断面D状を呈 する。		
1165	211	158	石造 四基無蓋墓		珪質頁岩	完成状態? 飾輪整形は粗く、先端部作出は甘い。断面D字状を呈する。 ?		
1166	211	158	石造 四基無蓋墓		チャート	完成状態。横して薄く作出され、完成度は高い。先端部を欠損する。 欠損理由は不明。		
1167	211	158	石造 魔型		チャート	側片周辺に浅い凹溝を施し、器体を完成させる。光沢の強い、チョコレー ト頁岩を用いる。		
1168	211	158	石造 魔型		黒色頁岩	側片の打面側に飾り部を作出する。飾輪加工は貧弱で、形状を整える 程度。		
1169	211	158	陶器 幅広割片		黒色頁岩	石造器体先を強く加工して、裏状の刃部を作出する。石造器体・飾輪加 工の属性は片打石片に近い。		
1170	211	158	石造 厚型割片		黒色頁岩	各面とも粗く加工した後、エッジを細部加工する。先端が鋭く摩耗、 敲打目的に使用か。断面三角形状。		
1171	211	158	磨製石斧 乳刃状		玄玄武岩	完成状態。頭部・側縁に未研磨部分を残す。背面面でも刃側欠く。		
1172	212	158	石造 厚型割片		黒色頁岩	各面とも粗く加工した後、エッジを細部加工する。先端は内端とも破 断している。断面三角形状。		
1173	212	158	石造 厚型割片		黒色頁岩	断面三角形状を呈す。背面側を粗く加工した後、裏面側を浅く平削 磨して石部を作出する。製作意図は不明。		
1174	212	158	石造 扁平楕円鏃		粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、鏃中央・両側縁に浅い敲打痕がある。よく使 込まれている。		
1175	212	158	石造 扁平楕円鏃		粗粒輝石安山岩	石材が粗く不明瞭だが、表裏面とも摩耗する。背面側の敲打痕は広く 広がる。		
1176	212	158	石造 扁平楕円鏃		粗粒輝石安山岩	石材が粗く不明瞭だが、表裏面とも摩耗する。敲打痕は背面側の中央 付近に立つ。		
1177	212	158	石造 扁平楕円鏃		粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、扁斗状の孔がある。小・大・側縁の打痕は 著しい。		
1178	212	158	磨石 扁平楕円鏃		粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗する。背面側・下端側の小・大部に浅い敲打痕がある。		
1179	212	158	石造 扁平楕円鏃		粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、扁斗状の孔がある。小・大・側縁の打痕は 著しい。		
1180	212	158	磨石 扁平楕円鏃		粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、中央付近に敲打痕がある。磨石として激しく 使込まれた。焼成が生じている。		
1181	212	158	磨石 幅広割片		粗粒輝石安山岩	表裏面を打ち欠き閉鎖状の刃部を作出後、エッジを敲打して、エッジ は敲打され、部分的に再生し摩耗する。		
1182	212	158	磨石 磨製石輪型		玄質玄武岩	刃部を破損したのちに再生を試みたものだが、最終的には敲打具として 使用したのも。		
1183	212	158	多孔石 楕円鏃		粗粒輝石安山岩	背面側平坦面に多数の孔を穿つ。裏面側の孔については不明だが、破 損部の端に扁斗状の孔の痕跡が残る。		
1184	212	158	多孔石 扁平鏃		粗粒輝石安山岩	断面三角形状を呈す背面側扁斗状の孔を穿つ。飾輪縁は丸味を帯びる 程度で、河床礫とは異なる。		
1185	212	158	石製品 鉢型		軽石	体部から1層にかけて内湾する。底部平直。体部外面は研磨による面 取り整形を施す。		
1186	212	158	砥石 扁平鏃		牛伏砂岩	石材が粗く、線条部は確認できないが、砥石周辺部が研ぎ減る。中 央付近が裏面側とも浅く窪む。		

番号	持回P1	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1187	158	石製押付片 扁平押付片		径6.6横5.8 厚2.7重187.0	粗粒輝石安山岩	表裏面ともと摩耗する。右製網番具とするにはやや厚く、磨石とすべきかもしれない。	
I区2層穴							
1188	213 158	深鉢	口縁~胴下位	口径18.5 現存器高23.1	粗砂、繊維/ふつう/ 明赤褐色	O段多条の複折L R Lと前段外反折R L Lを引状施文する。胴下位に横合線が見られ、下位はR L Lのみが施文される。	諸儀a式
1189	213 158	深鉢	口縁~腹部	口径(26.0)	粗砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/黒褐色	無節R L、L Rを引状施文する。	黒瓦式
1190	213 158	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石 英、繊維/ふつう/明赤褐色	くの字状に外組する器形。R L、L Rを引状施文。部分的に菱形状に施文する。	黒瓦式
1191	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/に黄褐色	縦い溝状1周。口縁に沿った斜行する平行沈線を多段に施す。口内 磨き	有尾式
1192	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ 明赤褐色	横線、斜行する平行沈線を施す。	有尾式
1193	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ に黄褐色	R L 横位施文を地文とし、横線、斜行する平行沈線を施す。口内内磨き	有尾式
1194	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/に黄褐色	L R、R L 引状施文を地文とし、横線、斜行する平行沈線を施す。	有尾式
1195	213 158	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ 明赤褐色	くの字状に外組。横線、斜行する平行沈線を施す。	有尾式
1196	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、石英、繊維/ ふつう/に黄褐色	口縁が縦く内湾。小突起を付す。連続爪形文により米字文状モチーフ を描き、刺突を施す。	黒瓦式
1197	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ に黄褐色	間隔の空く連続爪形文を複数2条めぐらす。内面磨き。	黒瓦式
1198	213 158	深鉢	胴部破片		粗砂、石英、繊維/ふつう/ に黄褐色	連続爪形文による縦位区画。楕円状や斜位のモチーフを描く。	黒瓦式
1199	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、繊維/ふつう/ に黄褐色	口縁が縦く内湾。横位施文をめぐらして輪状に1周部文様帯を区画。 文様帯内に斜刺文を充填施文する。胴下帯はR L横位施文。	前期前葉
1200	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/に黄褐色	口縁が縦く内湾。L Rを横位施文し、L R 下下に間隔の空く連続爪形文 を2条めぐらす。口内磨、内面磨き。	黒瓦式
1201	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/に黄褐色	口縁が縦く内湾。R Lを横位施文し、L R 下下に1条の平行沈線をめぐ らす。	黒瓦式
1202	213 158	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/に黄褐色	L R、R L 引状施文を地文とし、複数条の連続爪形文を横位帯状にめ ぐるす。一部平行沈線も見られる。	黒瓦式
1203	213 158	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/に黄褐色	L R、R L 引状施文を地文とし、連続爪形文を横位、斜位に施す。	有尾式
1204	213 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石 英、繊維/ふつう/明赤褐色	くの字状に外組。L R、L Rを引状施文する。	黒瓦・有尾
1205	213 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/明赤褐色/ふつう	くの字状に外組。L R、L Rを引状施文する。横位平行沈線を施す。	黒瓦・有尾
1206	213 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/明赤褐色	無節R L、L Rを引状施文する。内面磨き。	黒瓦式
1207	213 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/黒褐色	口縁が縦く内湾。無節R L、L Rを引状施文する。	黒瓦式
1208	213 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/に黄褐色	R L、O段多条L Rを引状施文する。	黒瓦式
1209	213 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/に黄褐色	R L、L Rを引状施文する。	黒瓦式
1210	214 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、石英、 繊維/赤褐色/ふつう	L R、R Lを引状施文する。内面磨き。1215と同一個体。	黒瓦式
1211	214 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/黒褐色	R L、L Rを引状施文する。	黒瓦式
1212	214 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/黒	口縁に小突起を付す。R L、L Rを引状施文する。	黒瓦式
1213	214 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/に黄褐色	L R、無節R Lを引状施文する。	黒瓦式
1214	214 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/に黄褐色	L Rを横位施文する。	黒瓦式
1215	214 159	深鉢	口縁部破片		1210と同一	R Lを横位施文する。内面磨き。1210と同一個体。	黒瓦式
1216	214 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ に黄褐色	R Lを横位施文する。	黒瓦式
1217	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/に黄褐色/ふつう	くの字状に外組。R L、L Rを引状施文する。	黒瓦・有尾
1218	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/明赤褐色	くの字状に外組。R L、L Rを引状施文する。内面磨き。	黒瓦・有尾
1219	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/に黄褐色	くの字状に外組。L R、R Lを引状施文する。	黒瓦・有尾
1220	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/明赤褐色	くの字状に縦く外組。無節L Rを横位施文する。	黒瓦・有尾
1221	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、黒色粒、繊維/ ふつう/に黄褐色	無節L R、R Lを引状施文する。内面磨き。	黒瓦・有尾
1222	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/黒褐色	L R、R Lを引状施文する。	黒瓦・有尾
1223	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石 英、繊維/ふつう/明赤褐色	R L、L Rを菱形施文する。	黒瓦・有尾
1224	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、白色粒、繊維/ ふつう/に黄褐色	無節L R、R Lを引状施文する。	黒瓦・有尾
1225	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/明赤褐色	無節L R、R Lを引状施文する。	黒瓦・有尾
1226	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、石英、 繊維/良好/明赤褐色	無節R L、L Rを菱形施文する。	黒瓦・有尾
1227	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/に黄褐色	附加条1種R L Rを横位施文する。	黒瓦式
1228	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ 明赤褐色	R Lを横位施文する。	黒瓦・有尾

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持戻P/L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 229	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐色	附加条1種R・Lを横位施文する。	黒点式
I 230	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ にぶい赤褐色/暗赤褐色	R Lを横位施文する。内面研磨。	黒点・有尾
I 231	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/暗赤褐色	R Lを横位施文する。	黒点・有尾
I 232	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/黒褐色	無印L r、R lを引状施文する。	黒点・有尾
I 233	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/暗赤褐色	無印R lを横位施文する。	黒点・有尾
I 234	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英 繊維/ふつう/にぶい赤褐色	L Rを横位施文する。	黒点・有尾
I 235	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐色	無印L rを横位施文する。	黒点・有尾
I 236	214 159	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/黒褐色	無印L rを横位施文する。	黒点・有尾
I 237	215 159	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/良好/ 暗赤褐色	附加条2種L r・L・L、R l・R・Rを引状施文する。	黒点式
I 238	215 159	深鉢	底部破片	底径7.7	粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/赤褐色	無印L rを横位施文する。底面研磨。	黒点・有尾
I 239	215 159	深鉢	底部破片	底径9.2	細砂、繊維、繊維/ふつう/ にぶい赤褐色	R lを横位施文する。	黒点・有尾
I 240	215 159	深鉢	口縁～胴部	口径(12.0)	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐色	胴部で外反し、口縁が緩く内湾する器形。口縁下、頸部に2条の連続 弧状文をめぐらして口縁部文様帯を区画。文様帯内に条線による帯状 文を施す。横位のみは凹形突起、平行沈線。尖状の口縁部に粘み をめぐらす。内面研磨。	溝轆a式
I 241	215 159	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒/良好/ 暗赤褐色	R L横位施文を地文とし、平行沈線による米字状のモチーフを描く。 縦位沈線下に凹形突起を施す。	溝轆a式
I 242	215 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐色	口縁下に連続弧状文を2条施し、R Lを横位施文する。	溝轆a式
I 243	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/良好/にぶい赤褐色	R L横位施文を地文とし、連続弧状文を横位にめぐらす。	溝轆a式
I 244	215 159	深鉢	口縁部破片		細砂/良好/にぶい赤褐色	口縁が緩く外反。結節の反転L lを横位施文する。	溝轆a式
I 245	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐色	L Rを横位施文する。	溝轆a式
I 246	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、片岩/良好/ にぶい赤褐色	反転L lを横位施文する。	溝轆a式
I 247	215 159	深鉢	胴部破片		I 246・248～250と同一	I 246・248～250と同一個体。	溝轆a式
I 248	215 159	深鉢	胴部破片		I 246・247・249・250 と同一	I 246・247・249・250と同一個体。	溝轆a式
I 249	215 159	深鉢	胴部破片		I 246～248・250と同一	I 246～248・250と同一個体。	溝轆a式
I 250	215 159	深鉢	胴部破片		I 246～249と同一	I 246～249と同一個体。	溝轆a式
I 251	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/暗 赤褐色	異条R lを横位施文する。	溝轆a式
I 252	215 159	深鉢	胴部破片		I 251と同一	I 251と同一個体。	溝轆a式
I 253	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/にぶい赤 褐色	異段R(L・L・L)を横位施文する。I 257と同一個体。	溝轆a式
I 254	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒/ふつう/ にぶい赤褐色	異段R(L・L・L)を横位施文する。	溝轆a式
I 255	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、片岩/良好/ 明赤褐色	L Rを横位施文する。	溝轆a式
I 256	215 159	深鉢	底部破片		粗砂/良好/にぶい赤 褐色	R lを横位施文する。底面研磨。	溝轆a式
I 257	215 159	深鉢	胴部破片		I 253と同一	I 253と同一個体。	溝轆a式
I 258	215 159	打製石片 短冊型		長(9.8)幅(6.4) 厚(2.6)重(37.6)	ホルンフェルス	未製。刃部・縁縁のエッジは新鮮。器体上半部を欠損する。ホルンフェ ルスとして社会化が著しい。	
I 259	215 159	凹石 扁平楕円體		長(7.0)幅(7.9) 厚(4.4)重(464.5)	粗粒輝石安山岩	表面とも摩耗するほか、背面中央付近に敲打面が集中する。	
I 260	215 159	凹石 扁平楕円體		長(10.0)幅(8.9) 厚(4.4)重(630.3)	粗粒輝石安山岩	表面とも摩耗するほか、中央付近に敲打面がある。押痕を部分的に 破損する。	
I 261	215 159	凹石 扁平棒状體		長(7.4)幅(6.0) 厚(2.6)重(192.8)	ホルンフェルス	小凹部に敲打面が明確に現れる。器体の上半部のみ残り、以下を大きく 破損する。	
I 262	215 159	石皿 有縁		長(12.7)幅(9.5) 厚(2.8)重(350.0)	粗粒輝石安山岩	背面ノ縁および裏面側に漏斗状の凹部。機能部は浅く窪む程度で、使 用痕は低い。底面研磨。	
I 263	215 159	多孔石 楕円體		長(20.0)幅(14.3) 厚(10.5)重(327.2)	粗粒輝石安山岩	全面に孔を穿つ。孔はランダムに穿たれ、特定の場所に集中するはない。 裏面側の中実付近が破損。	

I区36穴

I 264	216 160	深鉢	口縁部破片	口径(21.5)	粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/にぶい赤褐色	口縁の小突起を付す。R Lを地文とし、平行沈線を間隔を空けて横位 に複数条、口縁下に波状文を2条めぐらす。	溝轆a式
I 265	216 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐色	R Lを地文とし、連続弧状文をめぐらして胴上位に文様帯を区画。文 様帯内に連続弧状文による木葉文を描く。胴縁下に凹形突起を施す。	溝轆a式
I 266	216 160	深鉢	口縁～胴部	口径(16.6)	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/淡赤褐色	1条の横位平行沈線をめぐらして口縁部文様帯を区画。文様帯内に横 位、斜行する平行沈線を施す。	溝轆a式
I 267	216 160	浅鉢	口縁～底部	口径(20.7)底径(8.6) 器高13.1	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐色	口縁の水平でないゆがみだんテール状を呈す。無印L rを地文とし、胴 上半に平行沈線による木の葉状などの幾何学モチーフを描く。	溝轆a式
I 268	216 160	深鉢	口縁～胴部	口径22.2	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐色	口縁が緩く凹く器形。R lを横位施文する。	溝轆a式
I 269	216 160	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/暗 赤褐色	R lを横位施文する。部分的に結節が見られる。	溝轆a式
I 270	216 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/暗	結節R lを横位施文する。	溝轆a式

番号	持戻 P.L	種 類	出 土 位 置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1271	216 160	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	R Lを横位施文を地文とし、横位、斜位の平行沈線を施す。	有尾式
1272	216 160	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/地粉、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい赤褐色	コンパス文(変形爪形文)を横位にめぐらす。	黒山式
1273	216 160	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ /にぶい赤褐色	R Lを横位施文する。	黒山式
1274	216 160	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/赤褐色	L Rを横位施文する。	黒山式
1275	216 160	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐色	附加条1種 L・Rを横位施文する。	黒山式
1276	216 160	深鉢	胴部破片		細砂、地粉、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐色	附加条1種 L・R・Rを横位施文する。	黒山式 a
1277	216 160	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ /にぶい赤褐色	無附加条 Lを横位施文する。	黒山・有尾
1278	216 160	深鉢	底部破片	底径(11.0)	粗砂、繊維、黒色粒、 繊維/ふつう/明赤褐色	付付き。R Lを横位施文する。	黒山式
1279	216 160	深鉢	底部破片		細砂、繊維、繊維/ふつう/ /にぶい赤褐色	付付き。残存部は無文。	黒山式
1280	216 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐色	L縁に厚附した小突起を付す。横位、波状の条線をめぐらし、円形刺突を縦位に配す。	協議 a 式
1281	216 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/黒褐色	L縁が縦く外反。横位、波状の条線を多段に施す。	協議 a 式
1282	216 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐色	横位、波状の条線をめぐらし、円形刺突を垂下させる。	協議 a 式
1283	216 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐色	横位、波状の条線を交互多段に施す。	協議 a 式
1284	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐色	横位、波状の条線を交互多段に施し、円形刺突を縦位に配す。下平は R Lを横位施文。1284・286と同一個体。	協議 a 式
1285	217 160	深鉢	胴部破片		1284・286と同一	1284・286と同一個体。	協議 a 式
1286	217 160	深鉢	胴部破片		1284・286と同一	1284・286と同一個体。	協議 a 式
1287	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/明赤褐色	横位、波状の条線を交互多段に施し、刺突を縦位に配す。文様帯下は R Lを横位施文。	協議 a 式
1288	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐色	横位、波状の条線を交互多段に施す。	協議 a 式
1289	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐色	横位、波状の条線を交互多段に施す。	協議 a 式
1290	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/ /にぶい赤褐色	L縁が縦く外反。集合沈線により米字文様モチーフを描く。縦位区画は1条の沈線を垂下。	協議 a 式
1291	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/明赤褐色	条線により米字文様モチーフを描く。縦位区画は円形刺突を垂下。	協議 a 式
1292	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、片割/良好/ /にぶい赤褐色	多条沈線により米字文様モチーフを描く。文様帯下は R Lを横位施文。	協議 a 式
1293	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐色	山形の波状L縁で1割肥厚。L縁に沿って連続爪形文を施し、波頂部下に円孔を穿つ。	協議 a 式
1294	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、石英/良好/ /赤褐色	山形の波状L縁。L縁に沿って連続爪形文を施し、波頂部下に円孔を穿つ。	協議 a 式
1295	217 160	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐色	L縁が縦く外反。L縁下2条の連続爪形文をめぐらし、以下、R Lを横位施文する。内面研磨。	協議 a 式
1296	217 160	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐色	L縁が縦く外反。連続爪形文を横位多段に施す。内面研磨。	協議 a 式
1297	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐色	L縁が縦く外反し、口外削ぎ。連続爪形文を横位多段にめぐらし、円形刺突を施す。	協議 a 式
1298	217 160	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐色	L縁が縦く外反。連続爪形文を横位多段に施し、間隙に円形刺突を縦位に配す。	協議 a 式
1299	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維、白色粒、 黒色粒/良好/浅黄褐色	L縁に條帯をめぐらして段帯部を作出。頂部に斜位の布目を付す。横位平行沈線を多段に施す。	協議 a 式
1300	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/明 赤褐色	刺突列を横位多段に施す。	協議 a 式
1301	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/赤褐色	斜位斜状、横位の連続爪形文を施す。	協議 a 式
1302	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつう/橙	横位、扇状の連続爪形文を施す。文様帯下は R Lを横位施文。	協議 a 式
1303	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつう/浅黄褐色	連続爪形文をめぐらして文様帯を区画。文様帯内に横位、斜位の平行沈線を施す。文様帯下は R Lを横位施文。	協議 a 式
1304	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、片割/良好/ /にぶい赤褐色	波状L縁でL縁外面肥厚。肥厚部に連続爪形文をめぐらし、頂部に斜位の布目を付す。肥厚部下は R Lを地文とし、連続爪形文や平行沈線により木葉文、変形文など幾何学モチーフを描いて地文を磨り消す。	協議 a 式
1305	217 160	浅鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐色	地径に R L を施し、1条の平行沈線をめぐらして胴部文様帯を区画。文様帯内は横位平行沈線による木葉文など幾何学モチーフを描き、地文を磨り消す。	協議 a 式
1306	217 160	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒/ふつう/橙	L縁下に1条の連続爪形文をめぐらしてL縁部文様帯を区画。R L を地文とし、平行沈線による木葉文を描き、地文を一部磨り消す。	協議 a 式
1307	217 160	浅鉢	胴部破片		粗砂/良好/橙	浮線を2条めぐらし、連続爪形文による木葉文を描く。浮線上位に円孔を配す。	協議 a 式
1308	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ /明赤褐色	連続爪形文による幾何学文を描き、間隙に円形刺突を施す。地文は R Lを横位施文で磨り消し手法。	協議 a 式
1309	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐色	連続爪形文による木葉文を描き、間隙に円形刺突を施す。地文は R Lを横位施文で磨り消し手法。内面研磨。	協議 a 式
1310	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつう/にぶい赤褐色	平行沈線による木葉文を描き、間隙に円形刺突を施す。地文は R Lを横位施文で磨り消し手法。	協議 a 式
1311	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/ /にぶい赤褐色	連続爪形文による木葉文を描き、間隙に円形刺突を施す。地文は R Lを横位施文で磨り消し手法。	協議 a 式
1312	217 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐色	連続爪形文をめぐらして文様帯を区画。文様帯内に連続爪形文による木葉文など幾何学モチーフを描く。間隙に円形刺突を施文。地文は R Lを横位施文で磨り消し手法。	協議 a 式

第4章 検出された遺構と遺物

番号	探検P/L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1.313	217	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	連続孔形文による木葉文を描き、胴部に凹形刺突を施す。地文はR L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯a式
1.314	217	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	連続孔形文による木葉文を描く。地文はR L 横位施文で磨り消し手法。内面研磨。	諸磯a式
1.315	217	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石莖/ふつう/稍	連続孔形文による木葉文を描く。地文はR L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯a式
1.316	217	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	連続孔形文による木葉文を描く。地文はR L 横位施文で磨り消し手法。内面研磨。	諸磯a式
1.317	217	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	連続孔形文による木葉文を描く。地文はR L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯a式
1.318	217	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	連続孔形文による木葉文を描く。地文はR L 横位施文で磨り消し手法。内面研磨。	諸磯a式
1.319	217	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	連続孔形文による木葉文を描く。	諸磯a式
1.320	217	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/稍	同位、弧状の連続孔形文を施す。	諸磯a式
1.321	217	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/ふつう/稍	平行沈線による木葉文を描く。	諸磯a式
1.322	217	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒/良好/にぶい/赤褐	平行沈線による木葉文を描く。地文はR L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯a式
1.323	217	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい/稍	R L 横位施文を地文とし、横位、斜位の平行沈線を帯状に施して内部を磨り消す。交点に凹形刺突を施文。	諸磯a式
1.324	217	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	連続孔形文を横位にめぐらし、凹形刺突を縦位に配す。地文にR L 横位施文。	諸磯a式
1.325	217	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石莖/良好/稍	R L 横位施文を地文とし、連続孔形文を横位にめぐらす。	諸磯b式
1.326	217	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	R L 横位施文を地文とし、連続孔形文を横位にめぐらす。	諸磯a式
1.327	217	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ふつう/稍	斜位に切みを付した隆帯、連続孔形文を横位にめぐらす。	諸磯a式
1.328	217	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	屈曲する器形。屈曲部に連続孔形文をめぐらし、凹形刺突を施す。横位孔形文下はR L 横位施文。	諸磯a式
1.329	217	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	R L 横位施文を地文とし、連続孔形文を横位にめぐらす。	諸磯a式
1.330	217	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/赤褐	屈曲する器形。屈曲部に弧状、横位平行沈線をめぐらす。横位平行沈線下はR L 横位施文。	諸磯a式
1.331	217	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい/黄褐	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.332	217	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	口縁が緩く外反。R L を横位施文する。	諸磯a式
1.333	217	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/暗赤褐	口縁が緩く外反。R L を横位施文する。	諸磯a式
1.334	218	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石莖/良好/稍	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.335	218	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石莖/良好/にぶい/赤褐	R L を横位施文する。補修孔あり。	諸磯a式
1.336	218	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい/稍	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.337	218	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.338	218	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、片割/良好/稍	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.339	218	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/稍	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.340	218	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	R L を横位施文する。1.354と同一個体。	諸磯a式
1.341	218	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/稍	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.342	218	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、片割/良好/稍	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.343	218	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/暗赤褐	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.344	218	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.345	218	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.346	218	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい/黄褐	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.347	218	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/稍	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.348	218	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/明赤褐	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.349	218	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/明褐	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.350	218	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい/稍	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.351	218	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい/黄褐	R L を横位施文する。	諸磯a式
1.352	218	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	反転R R を横位施文する。	諸磯a式
1.353	218	浅鉢	胴部破片		粗砂、細砂/ふつう/にぶい/稍	同の部位。強く屈曲する器形。	前期後葉
1.354	218	深鉢	底部破片	底径(7.7)	1.340と同一	底部付近は断面調整による凹凸顕著。1.340と同一個体。	諸磯a式
1.355	218	深鉢	底部破片	底径(10.6)	粗砂/良好/暗赤褐	R L を横位施文する。	諸磯a式

番号	持回P.L.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1336	218 161	深鉢	底部破片	底径8.0	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐色	R Lを横位施文する。	諸磯a式
1337	218 161	深鉢	底部破片	底径(4.7)	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐色	R Lを横位施文する。	諸磯a式
1338	218 161	深鉢	底部破片	底径(6.0)	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい赤褐色	R Lを横位施文する。	諸磯a式
1339	218 161	深鉢	底部破片	底径(8.9)	粗砂、黒色粒/良好/赤褐色	R Lを横位施文する。	諸磯a式
1360	218 161	深鉢	底部破片	底径6.5	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつう/にぶい赤褐色	多岐竹宮内皮による沈層を縦位、弧状に施す。	諸磯a式
1361	218 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、石英/ふつう/明赤褐色	浮線による横帯構成。胴位の切みを付した3条1単位位の浮線と、肩周位の切みを付した2条1単位位の浮線を交互に多段に施すようだ。地文に結節R L横位施文。	諸磯b式
1362	218 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒/ふつう/明赤褐色	浮線による横帯構成。横帯部に渦巻状、X字状の浮線を施す。地文にR L横位施文。1363と同一個体。	諸磯b式
1363	218 161	深鉢	胴部破片		1362と同一	1362と同一個体。	諸磯b式
1364	218 161	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒/ふつう/灰黄褐色	浮線による横帯構成。地文に無節L r、R lの結束羽状縦文を横位施文。	諸磯b式
1365	218 161	深鉢	底部破片	底径11.1	粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい赤褐色	浮線による横帯構成。	諸磯b式
1366	219 161	打製石斧 分銅型?		長(6.9)幅6.1 厚2.2重108.5	細粒輝石安山岩	完成状態。左辺エッジは摩耗、右辺エッジは新鮮で、再生の可能性あり。上半部欠損。	
1367	219 161	打製石斧 短型型		長(3.2)幅(3.3) 厚1.2重12.7	黒色頁岩	断面破片で、詳細は不明。細粒のエッジは新鮮であり、製作途上の破損である可能性が高い。	
1368	219 161	石磯 凹基無蓋織		長(1.8)幅(0.9) 厚0.4重0.3	雲母石	本製品。約離途中。先端部・左側縁から基部部が剥離し部を欠損する。	
1369	219 161	門石 扁平楕円盤		長17.3幅9.7 厚3.7重1046.9	新粒輝石安山岩	表面面とも著しく摩耗するほか、敲打痕がある。側面も敲打され、平坦面が形成されている。	
1370	219 161	磁石 柱状體		長13.0幅3.7 厚3.2重213.3	砂岩	やや薄い小口部先端に敲打痕、これに伴う歪折の跡がある。	
1371	219 161	台石 扁平楕円盤		長(18.3)幅(24.7) 厚1.3重3814.6	新粒輝石安山岩	表面面とも著しく摩耗する。台石というより無縁の石盤として捉えるべきだろう。	
1372	219 161	多孔石 楕円盤		長15.0幅(11.0) 厚8.6重1633.1	新粒輝石安山岩	横中央付近に漏斗状の孔を穿つ。部分的にススが付着しており、表面面とも磨面は荒れている。	
I区1集石							
1373	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐色	口縁が縦く外縁、標赤文Rを縦位施文する。口内面にも施文。補修孔あり。1378と同一個体。1374、補修孔あり。	井草目式
1376	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/赤褐色	口縁が縦く外縁、標赤文Rを縦位施文する。口内面にも施文。	井草目式
1378	219 161	深鉢	胴部破片		1373～375と同一	1373～375と同一個体。	井草目式
1379	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、石英/良好/明赤褐色	標赤文Rを縦位施文する。口縁下に協衆体L Rを印捺する。1380と同一個体。	夏島式
1380	219 161	深鉢	胴部破片		1379と同一	1379と同一個体。	夏島式
1381	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、細礫、ふつう/橙	無節L r、R lを羽状施文する。	黒浜式
1382	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、細礫、ふつう/橙	R Lを横位施文する。	黒浜式
1383	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、細礫、ふつう/にぶい赤褐色	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I区15土坑							
1384	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつう/にぶい赤褐色	無節R lを横位施文する。	黒浜・有尾
1385	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/良好/橙	L Rを横位施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
1386	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂、石英/ふつう/にぶい赤褐色	R lを横位施文する。	加賀利E3式
I区17土坑							
1387	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、細礫/ふつう/にぶい赤褐色	C字状切実を横位多段に施す。	黒浜・有尾
1388	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつう/にぶい赤褐色	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
1389	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/橙	横位隆帯をめぐらしてL R無文帯を区画、隆帯下にL Rを施文する。	加賀利E4式
I区26土坑							
1390	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/明赤褐色	R lを横位施文する。	諸磯a式
I区28土坑							
1391	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、細礫/ふつう/にぶい赤褐色	波状平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式
1392	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、細礫/ふつう/明赤褐色	R lを横位施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
1393	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、細礫/ふつう/にぶい赤褐色	R l、斜行する標赤文Lを羽状施文する。	黒浜・有尾
1394	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつう/橙	R l、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I区37土坑							
1395	220 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつう/にぶい赤褐色	附加条1種R l+L、L R+Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
1396	220 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒、細礫/良好/にぶい赤褐色	R lを横位施文する。	黒浜・有尾
I区40土坑							
1397	220 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、細礫/ふつう/にぶい赤褐色	無節L rを横位施文する。	黒浜・有尾

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持回 P.L	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I区41土坑							
I 398	220 161	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒/良好/赤褐色	R Lを横位施文する。	諸磯a式
I区42土坑							
I 399	220 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒粒、織羅/ふつう/相	波状口縁で口内削り、L、R、L羽状施文を地文とし、平行沈線による変形状モチーフを描く。	有尾式
I 400	220 161	深鉢	胴部破片		粗砂、織羅/ふつう/相	未施器付 L Rを横位施文する。	黒浜式
I 401	220 161	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、織羅/ふつう/相	0段多条L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 402	220 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂、黒色粒、織羅/ふつう/黒褐色	R L、L Rを変形施文する。	黒浜・有尾
I区44土坑							
I 403	220 162	深鉢	口縁部破片		粗砂、織羅/ふつう/ふい・黄褐色	口内削り。R L横位施文を地文とし、平行沈線により変形状モチーフを描く。	有尾式
I 404	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、織羅/ふつう/ふい・黄褐色	波状平行沈線を横位多段に施す。一部変形爪形文のように押し引いている。	黒浜式
I 405	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、織羅/ふつう/黄褐色	無節 L r、R lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 406	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、織羅/ふつう/相	斜行する2条色の帯系文・Lを横位施文する。	黒浜式
I 407	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、石英/良好/明赤褐色	横位多段に条線を施す。以下、R L横位施文。	諸磯a式
I 408	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、石英/ふつう/相	連続爪形文により変形モチーフを描く。	諸磯a式
I 409	220 162	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/明赤褐色	口内やや肥厚。R Lを横位施文する。	諸磯a式
I区45土坑							
I 410	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/ふい・赤褐色	R Lを横位施文する。	諸磯a式
I区51土坑							
I 411	220 162	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、織羅/ふつう/相	無節 L r、R lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 412	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、織羅/ふつう/灰黄褐色	傾曲する器形。帯系文 Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 413	220 162	深鉢	底部破片	底径(9.4)	粗砂、黒色粒、織羅/ふつう/ふい・黄褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I区56土坑							
I 414	220 162	深鉢	口縁部破片	口径(35.0)	粗砂、白色粒、黒色粒、織羅/ふつう/赤褐色	口縁が縦く内湾。R L、L Rを変形施文する。	黒浜式
I 415	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、石英、織羅/ふつう/ふい・赤褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 416	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、織羅/ふつう/ふい・相	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 417	220 162	甌長剥片		長9.2横5.8 厚1.6重105.9	黒色頁岩	平削打面より剥離。背面物の剥離面構成は横が横行し、右対技法によるものに見える。	
I区58土坑							
I 418	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、織羅/ふつう/相	隆帯をめぐらしているのか若干の盛り上がりあり。隆帯側面1面を横位に押し送る。高まりの上位には隆帯側面1面を横位多段に押し送し、下位は0段多条R Lを横位施文するようた。	前期前葉
I 419	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、石英、織羅/ふつう/相	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I区60土坑							
I 420	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐色	R Lを横位施文する。	諸磯a式
I 421	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、織羅/ふつう/相	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉
I区61土坑							
I 422	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、織羅/ふつう/相	胴部でくびれる器形。R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 423	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、織羅/ふつう/灰黄褐色	R L、L Rを変形施文する。	黒浜・有尾
I区72土坑							
I 424	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、織羅/ふつう/ふい・黄褐色	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 425	221 162	磨石 磨石/扁平盤		長(5.3)幅(11.8) 厚(4.5)重315.8	粗粒輝石安山岩	表面磨とも摩耗するほか、上端面を残して大きく破損する。破損理由は不明。	
I区73土坑							
I 426	221 162	深鉢	胴部～底部	底径5.8 現存器高12.3	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/相	小形の深鉢。R L横位施文を地文とし、胴上部に連続爪形文による束字状モチーフを描く。	諸磯a式
I 427	221 162	深鉢	胴部～底部	底径6.5	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐色	R Lを横位施文する。	諸磯a式
I 428	221 162	深鉢	底部破片	底径6.2	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐色	L Rを横位施文する。	諸磯a式
I区74土坑							
I 429	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、織羅/ふつう/ふい・黄褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 430	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、織羅/ふつう/相	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 431	221 162	磨製石斧 乳刃状		長(7.7)幅(6.2) 厚4.1重209.8	変質玄武岩	刃部隆体部に接した剥離面のエッジに磨痕が残る。再生を止め、最終的に磨製したものと視えた。	
I 432	221 162	石製研習員 扁平楕円盤		長7.0幅6.6厚1.8 重60.7	珉質頁岩	表面磨とも磨製痕があり、特に縦縁の光沢が著しい。縦縁の縁条痕は長幅に直交する。	

番号	持回 P.L	種 器	類 種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I区75土坑								
I 433	221 162	深鉢	口縁部破片			粗砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/赤褐色	無節R1、Lrを菱形施文する。I434と同一個体。	黒浜・有尾
I 434	221 162	深鉢	胴部破片			I433と同一	I433と同一個体。	黒浜・有尾
I 435	221 162	深鉢	胴部破片			粗砂、繊維、黒色粒、 繊維/ふつう/赤褐色	R1、無節Lrを引状施文する。	黒浜・有尾
I区78土坑								
I 436	221 162	深鉢	胴部破片			粗砂/良好/粗	R1を横位施文する。	諸磯a式
I区79土坑								
I 437	221 163	深鉢	口縁部破片			細砂、繊維、繊維/ふつう/ にふい/黄褐色	波状口縁で口内所着。1条の平行沈線、2条の連続孔形文を口縁に 含む。	有尾式
I 438	221 163	深鉢	口縁～底部		口径34.3底径33.3 器高(43.7)	細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にふい/黄褐色	波状口縁、胴中位が膨らみ、底部でくの字状に外屈。口縁は縁や内に 肉す。胴中部に平行沈線をめぐらして文様帯を区画、文様帯内に 菱形文を描く。文様帯下はR1、Lrを引状施文。	有尾式
I区81土坑								
I 439	221 163	深鉢	口縁～底部		口径15.0	細砂、繊維、繊維/ふつう/ にふい/粗	R1、Lrを菱形施文する。	黒浜式
I区82土坑								
I 440	222 163	深鉢	口縁～胴部		口径(37.3) 現存器高29.9	細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐色	底部で緩くの字状に外屈する器形。無節Lr、R1を引状施文する。	黒浜式
I区84土坑								
I 441	222 163	深鉢	口縁部破片			粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/粗	無節R1、Lrを引状施文する。	黒浜・有尾
I 442	222 163	深鉢	胴部破片			細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にふい/黄褐色	無節Lrを横位施文する。	黒浜・有尾
I 443	222 163	深鉢	胴部破片			細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐色	無節R1、Lrを引状施文する。	黒浜・有尾
I区85土坑								
I 444	222 164	深鉢	口縁～底部		口径22.5底径11.3 器高18.5	細砂、繊維/ふつう/粗	6断面波状口縁で球制形。胴部に斜行状器系Rを横位施文する。屈 曲部1位は丸んでいるが、同様の器系文を施文しているようだ。補綴 孔あり。	大木2a式
I 445	223 164	深鉢	口縁部破片			粗砂、繊維、繊維/ふつう/ にふい/赤褐色	波状口縁で緩く外屈する器形。R1、Lr引状施文を地文とし、平行 沈線による菱形文を描く。口内面に筋みを付す。	有尾式
I 446	223 164	深鉢	口縁部破片			粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/赤褐色	波状口縁で口内所着。無節Lrを地文とし、平行沈線による菱形状 モチーフを描く。	有尾式
I 447	223 164	深鉢	胴部破片			細砂、繊維/ふつう/ 明赤褐色	Lrを横位施文する。	黒浜・有尾
I 448	223 164	深鉢	胴部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/粗	R1を横位施文する。	黒浜・有尾
I区87土坑								
I 449	223 163	深鉢	胴部破片			細砂、繊維/ふつう/粗	緩く外屈する器形。R1横位施文を地文とし、横位平行沈線を施す。	有尾式
I 450	223 163	深鉢	胴部破片			粗砂、繊維/ふつう/ にふい/粗	R1、Lrを引状施文する。	黒浜・有尾
I 451	223 163	深鉢	胴部破片			細砂、繊維/ふつう/ にふい/粗	Lrを横位施文する。	黒浜・有尾
I区89土坑								
I 452	223 163	深鉢	口縁～胴部		口径(36.0)	粗砂、繊維、繊維/ふつう/ 粗	波状口縁で口内所着。胴部が膨らみ、くの字状に外屈する。屈曲部 上位を文様帯とし、平行沈線により菱形文を描く。胴部はR1、Lr を菱形施文。口縁外端に筋みを付す。	有尾式
I 453	223 164	深鉢	口縁～胴下部		口径(39.6) 現存器高40.0	粗砂、片岩、繊維/ふつう/ 明赤褐色	波状口縁、口縁下に3条、胴部に2条の平行沈線をめぐらして口縁部 文様帯を区画、文様帯内に2条の平行沈線による菱形文を描く。地文 に無節R1、Lrを引状施文するが、胴下部1位を菱形文。	有尾式
I 454	223 164	深鉢	ほぼ完形		口径28.1底径18.0 器高30.3	粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/粗	平縁、胴中位が膨らみ、底部でややすぼまって口縁が開く器形。R1、 0段多条Lrを引状施文する。	黒浜式
I区91土坑								
I 455	224 165	深鉢	胴部破片			細砂、石英、繊維/ふつう/ にふい/粗	R1、Lrを引状施文する。	黒浜・有尾
I区94土坑								
I 456	224 165	深鉢	胴部破片			粗砂、繊維/ふつう/ にふい/黄褐色	R1を横位施文する。	黒浜・有尾
I区95土坑								
I 457	224 165	深鉢	口縁部破片		口径(37.0)	粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/にふい/粗	無節R1を横位、斜位施文する。	黒浜式
I 458	224 165	深鉢	胴部破片			粗砂、黒色粒/良好/赤褐色	R1を横位施文する。	諸磯a式
I 459	224 165	深鉢	胴部破片			粗砂/良好/粗	R1を横位施文する。	諸磯a式
I区99土坑								
I 460	224 165	深鉢	口縁部破片		口径(26.9)	粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/粗	R1を横位施文する。内面研磨。	黒浜式
I 461	224 165	深鉢	口縁部破片			粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/にふい/黄褐色	直前段多条Lrを横位施文する。内面研磨。	黒浜式
I 462	224 165	深鉢	胴部破片			細砂、繊維、繊維/ふつう/ にふい/粗	R1、Lrを引状施文する。	黒浜・有尾
I 463	224 165	磨石 扁平門礎			長11.1幅10.9 厚4.7重823.9	粗粒輝石安山岩	表面面とも滑しく使込まれ著しく摩耗、溝中央付近に磨痕が残る。 磨石の磨痕が著しい。	
I 464	224 165	磨石 扁平門礎			長(18.0)幅(15.7) 厚9.8重3142.4	粗粒輝石安山岩	表面面に磨痕がある。石材が粗く不明瞭だが裏面側表面は平坦で、 摩耗しているようにも見える。	
I区100土坑								
I 465	224 165	深鉢	胴部破片			細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/明赤褐色	R1を地文とし、弧状の平行沈線を施す。	黒浜式

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持回 P.L	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I区103土坑							
I 466	224 165	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にふい/黄褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 467	224 165	深鉢	胴部破片		細砂、繊維、繊維/ふつう/ にふい/黄褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I区106土坑							
I 468	224 165	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ 灰黄褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I区109土坑							
I 469	224 165	深鉢	胴部→底部	底径(8.0) 現存器高39.0	細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/粗	R L、L Rを羽状施文する。	有尾式
I区110土坑							
I 470	224 165	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/粗	無節L r、R lを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 471	224 165	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/粗	無節L rを横位施文する。	黒灰・有尾
I 472	224 165	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にふい/粗	縦く外屈する器形で胴部に平行沈線をめくらし、沈線間に刺突を施す。以下、無節L r横位施文。	有尾式
I区112土坑							
I 473	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/灰黄褐色	R lを横位施文する。	黒灰・有尾
I区114土坑							
I 474	225 165	深鉢	L1線部破片		細砂、繊維/ふつう/ にふい/粗	無節L rを横位施文する。	黒灰・有尾
I 475	225 165	深鉢	L1線部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にふい/粗	R L、L Rを菱形施文する。	黒灰・有尾
I 476	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、繊維、繊維/ふつう/ にふい/赤褐色	無節L rを横位施文する。	黒灰・有尾
I区115土坑							
I 477	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/赤褐色	無節L r、R lを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 478	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、繊維、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐色	無節L r、R lを羽状施文する。	黒灰・有尾
I区119土坑							
I 479	225 165	深鉢	L1線部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にふい/赤褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 480	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/粗	R lを横位施文する。円孔を穿つ。	語彙a式
I区120土坑							
I 481	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/粗	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I区121土坑							
I 482	225 165	深鉢	L1線部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にふい/黄褐色	平行沈線、コンパス文を横位多段にめぐらす。	黒灰式
I 483	225 165	深鉢	底部破片	底径7.0	細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/灰黄褐色	横位平行沈線をめくらす。	黒灰式
I 484	225 165	磨石?		長(12.7)幅(9.1) 厚7.6重1232.6	粗粒輝石安山岩	表面とも使込まれ、摩耗が著しい。被熱して、周辺部が割れている。	
I区123土坑							
I 485	225 165	深鉢	底部破片		細砂、繊維、繊維/ふつう/ にふい/粗	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I区126土坑							
I 486	225 165	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にふい/黄褐色	無節L rを横位施文する。	黒灰・有尾
I区127土坑							
I 487	225 165	深鉢	L1線→底部	L1径24.2底径11.7 器高26.8	細砂、繊維/ふつう/赤褐色	4単位の小突起を付す。胴部でくの字状に縦く外屈、L1線は縦く内湾する。L1線下に2条の平行沈線をめくらし、端部にC字刺突を挿入して閉じている。地文にR L、真裏L Rを羽状施文する。	黒灰式
I 488	225 165	深鉢	L1線→胴下位	L1径(30.0) 現存器高27.2	粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/粗	ほぼ直立する器形で、L1線に4単位の小突起を付す。R L、L Rを菱形施文する。波面部から垂下する割り付け用の沈線が一部残る。	黒灰式
I 489	225 165	深鉢	L1線部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にふい/黄褐色	L1線が縦く内湾、R L、L Rを羽状施文する。	黒灰式
I 490	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ 明赤褐色	R lの縦文帯を併んで上下2部の文線帯が存在する。上位は横位、L1線状のC字状押引文を施し、下位は平行沈線による波状文を描く。	黒灰式
I 491	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にふい/赤褐色	くの字状に外屈する器形。0段多条R L、L Rを羽状施文する。内面研磨。	黒灰・有尾
I 492	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にふい/赤褐色	小刻みな波状の条線を施す。	大木2 aか
I 493	226 166	台石 磨石		長(21.1)幅(10.9) 厚10.6重3000.8	粗粒輝石安山岩	背面側平面が摩耗する。断面形状は三角形を呈し、埋め込んで使用した可能性が高い。	
I区128土坑							
I 494	226 166	深鉢	L1線部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/黒褐色	L1線が外反、R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I 495	226 166	深鉢	L1線部破片		細砂、繊維/ふつう/ にふい/黄褐色	無節L rを横位施文する。L1料部に指面押除けの形を付す。	黒灰・有尾
I 496	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にふい/黄褐色	R L、L Rを羽状施文する。	黒灰・有尾
I区130土坑							
I 497	226 166	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/にふい/粗	波状平行沈線を横位多段に施す。	黒灰式
I 498	226 166	深鉢	L1線部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/灰黄褐色	R lを横位施文する。L1料部、内面研磨。	黒灰・有尾
I 499	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/灰黄褐色	横位平行沈線をめくらし、以下、R L、L Rを羽状施文する。	有尾式

番号	持戻 P/L	種 器 種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1区131土坑							
I500	226 166	深鉢	口縁部破片		磁砂、繊維/ふつう/ 暗赤褐	附加条1種R・Lを横位施文する。口内面、内面研磨。	黒底式
1区132土坑							
I501	226 166	深鉢	底部破片	底径12.0	粗砂、繊維、白色粒、 繊維/ふつう/明赤褐	やや上り底。R・L、0段多条L・Rを羽状施文する。接合面が段が残る。	黒底・有尾
1区133土坑							
I502	226 166	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/暗	口内内面肥厚。波状、横位の条線を多段に施す。	黒底式
I503	226 166	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石 英、繊維/ふつう/暗赤褐	附加条1種R・L・L・L・Rを羽状施文する。	黒底式
I504	226 166	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	0段多条R・Lを横位施文する。	黒底・有尾
I505	226 166	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	R・L・L・Rを羽状施文する。1506と同一個体。	黒底・有尾
I506	226 166	深鉢	胴部破片		1505と同一	1505と同一個体。	黒底・有尾
1区134土坑							
I507	226 166	深鉢	口縁・胴下位	口径(17.1) 器高(22.5)	粗砂、繊維、黒色粒、 繊維/ふつう/赤褐	口縁がくの字状に外反し、長胴状のような器形を呈す。外反する口縁部は無文帯とし、胴部に無節R・L・L・Rを羽状施文する。胴下位はR・Lを無文	黒底・有尾
I508	226 166	打製石斧 片月		長2.8幅5.0 厚2.4重91.1	黒色頁岩	刃部両生が著しく、刃部の後退が著しい。側縁加工は裏面側が平面側面に近く、背面側加工の角度は厚い。	
1区135土坑							
I509	226 166	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石 英、繊維/ふつう/にぶい赤褐	L・Rを横位施文し、口縁下にC字状研突をめぐらす。	黒底式
I510	226 166	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/黒褐	無文。内面研磨。	黒底・有尾
I511	226 166	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/暗	附加条1種L・Rを横位施文する。内面研磨。	黒底式
1区136土坑							
I512	227 166	深鉢	口縁・胴部	口径(21.9)	粗砂、白色粒、黒色粒、石 英、繊維/ふつう/にぶい赤褐	L・R、直前段多条R(L・L・R)を菱形施文する。	黒底式
1区137土坑							
I513	227 166	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい暗	無節R・L横位施文を地文とし、平行沈線により菱形モチーフを描く。	有尾式
I514	227 166	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、繊維/ふつう/ 赤褐	L・Rを横位施文する。	黒底・有尾
1区138土坑							
I515	227 166	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/赤褐	幅広い工具による押引き状の文様が見られるが詳細不明。	黒底・有尾
1区140土坑							
I516	227 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい暗	くの字状に外屈する器形。無節R・Lを横位施文する。	黒底・有尾
I517	227 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	L・Rを横位施文する。口内面研磨。	黒底・有尾
I518	227 167	打製石斧 短冊型?		長(7.8)幅(6.3) 厚2.4重141.3	粗粒輝石安山岩	完成状態で右側縁のエッジが滑れ摩耗しており、再生時に破損したものの。	
I519	227 167	砥石 扁平楕		長(7.2)幅(5.4) 厚1.3重53.7	凝灰質砂岩	背面側に多方向の浅い溝状の研摩痕が見える。側縁は表裏面ともよく研磨され、エッジはシャープ。	
1区141土坑							
I520	227 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/暗赤褐	R・L・L・Rを羽状施文する。1521と同一個体。	黒底・有尾
I521	227 167	深鉢	胴部破片		1520と同一	1520と同一個体。	黒底・有尾
I522	227 167	深鉢	底部破片	底径8.1	粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/赤褐	L・Rを横位施文する。	黒底・有尾
1区149土坑							
I523	227 167	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	R・L・L・Rを羽状施文する。	黒底・有尾
1区151土坑							
I524	227 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	平行沈線、コンパス文を横位多段にめぐらす。	黒底式
I525	227 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい黄褐	R・Lを横位施文し、口縁下に1条の沈線をめぐらす。内面研磨。	黒底式
I526	227 167	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	R・Lを横位施文する。	黒底・有尾
1区152土坑							
I527	227 167	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	L・R横位施文を地文とし、平行沈線により菱形モチーフを描く。	有尾式
I528	227 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	口内内面肥厚で口縁が緩く外反。R・Lを横位施文する。	黒底・有尾
I529	227 167	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/暗	2条色の帯状文R・Lを横位施文する。	黒底式
I530	227 167	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/黒褐	無節L・Rを横位施文する。	黒底・有尾
1区154土坑							
I531	227 167	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	R・Lを横位、斜位施文する。	黒底・有尾
I532	227 167	石鏝 平基無条線		長(2.0)幅1.6 厚0.4重1.1	チャート	完成状態。加工は丁寧で、基部加工が細粒加工に先行する。先端部を欠損する。	
I533	227 167	打製石斧 短冊型		長(10.3)幅(5.1) 厚1.8重101.7	黒色頁岩	被焼した剥落部分が多く、製作状態・使用状態についての詳細は不明。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持回P.L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I区158±坑							
I 534	228 167	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粘/良好/ 明赤褐	R Lを横位施文する。	諾磯a式
I区162±坑							
I 535	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/黒褐	無筋L r、R lを引状施文する。	黒浜・有尾
I 536	228 167	深鉢	底部破片	口径(8.0)	細砂、繊維/ふつう/ にぶい・黄褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I区163±坑							
I 537	228 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粘、黒色粘、 繊維/ふつう/明赤褐	無文。	黒浜・有尾
I区165±坑							
I 538	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、細砂、繊維/ふつう/ にぶい・黄褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 539	228 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粘、繊維/ ふつう/にぶい・赤褐	無文。	黒浜・有尾
I 540	228 167	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粘、石英、 繊維/ふつう/にぶい・黄	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I区166±坑							
I 541	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂・正地粘、黒色粘、石英、 繊維/ふつう/にぶい・赤褐	R L、L Rを引状施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
I 542	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粘、黒色粘、 石英、繊維/ふつう/赤褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 543	228 167	深鉢	胴部破片		細砂、白色粘、石英、 繊維/ふつう/粗	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 544	228 167	深鉢	底部破片	口径(13.0)	細砂・正地粘、黒色粘、石英、 繊維/ふつう/にぶい・黄褐	R Lを横位施文する。底面研磨。	黒浜・有尾
I区167±坑							
I 545	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粘、繊維/ ふつう/にぶい・赤褐	無筋L R、R Lを引状施文する。	黒浜・有尾
I 546	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、石英、繊維/ふつう/ 粗赤褐	波状L線、L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 547	228 167	深鉢	底部破片	口径5.3	細砂、黒色粘、繊維/ ふつう/にぶい・赤褐	無筋L R、L Rを引状施文する。	黒浜・有尾
I区168±坑							
I 548	228 167	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/明 黄褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I区169±坑							
I 549	228 167	深鉢	胴部破片		粗砂、石英、繊維/ふつう/ 粗赤褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 550	228 167	石皿 有縁		長(13.4)幅(10.1) 5.6底径3.8	粗粒輝石安山岩	機能部は埋めが著しい。裏面側には孔があるほか研磨面があり、砥石として使用されている。	
I区170±坑							
I 551	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粘、石英、繊維/ ふつう/にぶい・黄褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I区17±坑							
I 552	228 167	深鉢	口縁～胴部	口径(26.2)	粗砂、白色粘、石英、 繊維/ふつう/黒褐	R L、L Rを引状施文する。	黒浜式
I 553	228 167	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい・黄褐	R L、L R引状施文を地文とし、横位、斜位の平行沈線を施す。	有尾式
I区172±坑							
I 554	228 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粘、繊維/ ふつう/粗赤褐	L線に小突起を付す。平行沈線による斜状文やコンパス文など横位多 段横線を施す。	黒浜式
I 555	228 167	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂、片岩、繊維/ ふつう/にぶい・赤褐	0段多糸L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
A区遺構外							
外 1	229	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粘、繊維/ ふつう/にぶい・黄	内外面に染目を施す。	染目文系
外 2	229	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粘、黒色粘/ ふつう/にぶい・黄褐	波状L線で、口縁内外面を肥厚させて段帯部を作出、円孔を穿つ。帯 状沈線により三角形モチーフを描きL Rを充填施文する。	埴之内2式
B区遺構外							
外 3	229	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粘/良好/ 明赤褐	標準文Rを斜位施文する。L凹部にも無文。	井戸2式
外 4	229	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粘、黒色粘、 石英/良好/明赤褐	標準文Rを横位施文する。	井戸・夏島
外 5	229	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粘、石英、 繊維/ふつう/明黄褐	R Lを横位施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
外 6	229	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂、石英/良好/ 明赤	結節L Rを横位施文する。	前期木葉
外 7	229	深鉢	底部破片		粗砂、黒色粘、繊維/良好	横位平行沈線をめぐらして区画、区内内に斜位、弧状の平行沈線を施す。	黒浜式
外 8	229	深鉢	口縁部～胴部	口径(17.5)	粗砂、黒色粘/良好/ 灰赤褐	縦くぼむる凹部で、L線に双凹の凹部を付す。L線内外面を肥厚させ、縁部 短沈線帯を作出。横位沈線をめぐらしてL線凹部文帯を区画し、底面側から垂 下する筋帯と並行、円形凹部を斜位に配す。文帯帯にL線による三角形状 の凹部を施し、帯にL線に斜位を充填文す。L線凹部を施す。文帯帯にも 平行沈線をめぐらして斜位文帯帯を区画、同時に斜位沈線を充填し、三角形 を施す。斜位筋帯凹部を縦位施文するが、平行沈線による標準文も見られる。	五箇ヶ台式
外 9	229	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂、片岩/良好	横位平行沈線をめぐらして区画、区内内にL Rを縦位帯状施文し、斜 位の列点を施す。	五箇ヶ台式
外10	229	深鉢	胴部破片		粗砂、片岩/良好/ にぶい・赤褐	横位、斜行する平行沈線を施す。	五箇ヶ台式
外11	229	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂、白色粘、黒 色粘、石英/ふつう/粗	横位筋帯をめぐらしてL線凹部無文帯を区画、筋帯下にL Rを縦位充填 施文する。	加納例E 4式
外12	229	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂・正地粘、黒色粘、 石英/ふつう/にぶい・黄褐	縦位、斜位の沈線を施す。	埴之内1式

番号	持回P.L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外13	229	深鉢	口縁部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒, 石英ふつうにふい, 黄褐色	帯状沈線により三角形モチーフを描き, L Rを充填施文, 沈線を重ね書きする。底の字附付文を付す。	堀之内2式
外14	229	深鉢	口縁部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒, 石英ふつうにふい, 黄褐色	帯状沈線により三角形モチーフを描き, L Rを充填施文する。	堀之内2式
外15	229	深鉢	口縁部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒, 良好/赤褐色	柄みを付した浮線をめぐる。沈線により三角形モチーフを描き, L Rを充填施文する。	堀之内2式
外16	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 黑色粒/良好/灰褐色	帯状沈線により円, 三角形など幾何学モチーフを描き, L Rを充填施文, 沈線を重ね書きする。	堀之内2式
外17	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒, 石英ふつうにふい, 黄褐色	帯状沈線により変形モチーフを描き, L Rを充填施文, 沈線を重ね書きする。内部にもL Rを充填施文する。	堀之内2式
外18	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 黑色粒, 石英ふつう/灰褐色	帯状沈線により幾何学モチーフを描き, L Rを充填施文する。余白に帯位の沈線を充填。	堀之内2式
外19	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒, 石英良好/灰褐色	帯状沈線により三角形モチーフを描き, L Rを充填施文する。	堀之内2式
外20	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒/ふつう/にふい, 黄褐色	帯状沈線によりV字モチーフを描き, L Rを充填施文する。	堀之内2式
外21	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒, 石英ふつうにふい, 黄褐色	文様帯下端でく字状に縦く内帯, 帯状沈線により楕円モチーフを描く。	堀之内2式
C区遺構外							
外22	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 黑色粒/良好/赤褐色	口縁が縦く外反, 摺文Rを縦位施文する。外23・24と同一個体。	夏島式
外23	229	深鉢	胴部破片		外22・24と同一	外22・24と同一個体。	夏島式
外24	229	深鉢	口縁部破片		外22・23と同一	外22・23と同一個体。	夏島式
外25	229	深鉢	口縁部破片		粗砂, 黑色粒/良好/にふい, 黄褐色	口縁下に斜行する沈線を描し, 余白に長楕圓線を充填施文, 以下, 横位沈線を施す。外26・29と同一個体。	皿戸下層式
外26	229	深鉢	口縁部破片		外25・27・29と同一	外25・27・29と同一個体。	皿戸下層式
外27	229	深鉢	胴部破片		外25・26・28・29と同一	外25・26・28・29と同一個体。	皿戸下層式
外28	229	深鉢	胴部破片		外25・27・29と同一	胴下位の太沈線を帯位する。外25・27・29と同一個体。	皿戸下層式
外29	229	深鉢	胴部破片		外25・28と同一	外25・28と同一個体。	皿戸下層式
外30	229	深鉢	底部破片		粗砂, 黑色粒/ふつうにふい, 黄褐色	尖底, 残存部は無文。	皿戸下層式
外31	229	深鉢	口縁部破片		粗砂, 繊維/良好/明赤褐色	無施L Rを横位施文する。	黒浜式
外32	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維/ふつうにふい, 黄褐色	R L, L Rを引状施文する。	黒浜・有尾
外33	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維/ふつうにふい, 黄褐色	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
外34	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒, 石英良好/明赤褐色	口縁が強く内湾する器形, 浮線による横帯構成で, 横帯間に縦位や弧状の浮線を貼付する。	溝橋b式
外35	229	深鉢	胴部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒/ふつう/相	浮線による横帯構成。地文にR L横位施文。	溝橋b式
外36	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維, 黑色粒/良好/明赤褐色	縦位縦帯の集合沈線を施す。	溝橋c式
外37	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒, 石英良好/赤褐色	斜位の調整面により器面の凹凸顯著。	前南末葉
外38	230	深鉢	口縁部破片		粗砂, 片岩/良好/相	L Rを横位施文し, 結節浮線をL Rからめぐる。	前南末葉
外39	230	深鉢	口縁部破片		粗砂, 片岩/良好/明赤褐色	口縁がく字状に外反, L Rを横位施文し, 結節浮線をL Rから垂下させる。	前南末葉
外40	230	深鉢	口縁部破片		粗砂, 繊維/良好/赤褐色	口縁が縦く外反, 結節L Rを横位施文する。	前南末葉
外41	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維, 片岩/良好/明赤褐色	L Rを横位施文する。	前南末葉
外42	230	深鉢	口縁部破片		粗砂, 繊維, 片岩/良好/明赤褐色	口縁の内面側, L R下に2条の平行沈線を描めぐるし, 以下, 縦位の平行沈線を充填施文する。L R部に柄みを付す。	五領ヶ台式
外43	230	深鉢	口縁部破片		粗砂/良好/赤褐色	L R下に2条の平行沈線を描めぐるし, 結節文を横位施文する。	五領ヶ台式
外44	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維/良好/明赤褐色	平行沈線により幾何学モチーフを描き, 斜格子目沈線を充填施文, 余白に印刻を施す。	五領ヶ台式
外45	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維/良好/明赤褐色	平行沈線により幾何学モチーフを描き, 格子目沈線を充填施文, 余白に印刻を施す。	五領ヶ台式
外46	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維/良好/赤褐色	平帯沈線を描めぐるしして横帯区画し, 斜格子目沈線を充填施文, 部分的に三角形区画を描き, 印刻を施す。外47と同一個体。	五領ヶ台式
外47	230	深鉢	胴部破片		外46と同一	外46と同一個体。	五領ヶ台式
外48	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維/良好/明赤褐色	平帯沈線を垂下させて縦位区画し, 縦位縦帯の集合沈線を充填施文	五領ヶ台式
外49	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維, 黑色粒, 石英良好/にふい, 赤褐色	L Rを横位施文し, 貼付文を縦位に配す。	五領ヶ台式
外50	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維/良好/明赤褐色	結節L Rを横位施文する。	五領ヶ台式
外51	230	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/明赤褐色	結節の結束線文を横位施文する。	五領ヶ台式
外52	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 繊維, 片岩/良好/明赤褐色	L Rを横位帯状施文する。	五領ヶ台式
外53	230	深鉢	底部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒/ふつうにふい, 黄褐色	底部が張り出す器形, 結節L Rを横位施文する。	五領ヶ台式
外54	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 白色粒, 黑色粒, 石英ふつうにふい, 黄褐色	屈曲面に縦位沈線を描めぐるして区画, 以下, 弧状, 蛇行する沈線を垂下させ, L Rを充填施文する。	堀之内1式
外55	230	深鉢	胴部破片		粗砂, 黑色粒/良好/灰褐色	斜行する沈線を描し, L Rを充填施文する。	堀之内1式

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持回 P.L	種別 器種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	釉土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
9456	230	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/黄褐色	斜位の帯状沈線を施し、L Rを充填施文する。	堀之内2式
9457	230	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、石英/ふつう/灰黄	斜位の帯状沈線を施し、L Rを充填施文する。	堀之内2式
D区遺構外							
9458	230	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/良好/明黄褐色	組紐を地文とし、コンパス文をめぐらす。	岡山2式
9459	230	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/稍	平行沈線による肋骨文を施す。間隙に門形刺突を施す。縦位区画は平行沈線、門形刺突。外60・61と同一個体。	諸磯a式
9460	230	深鉢	胴部破片		外59・61と同一	外59・61と同一個体。	諸磯a式
9461	230	深鉢	胴部破片		外59・60と同一	外59・60と同一個体。	諸磯a式
9462	230	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/暗赤褐色	横位集合沈線を施す。	諸磯b式
9463	230	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/にぶい/稍	浮線による横帯構成。	諸磯b式
9464	230	深鉢	口縁部破片		粗砂/良好/にぶい/黄稍	斜位の集合沈線を施す。口唇部に斜位の刻みを付す。	浮島式
E区遺構外							
9465	230	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/良好/稍	横位平行沈線、C字刻突を施す。	黒浜式
9466	230	深鉢	口縁部破片		細砂/白色粒、黒色粒、石英、繊維/ふつう/明黄褐色	口縁が緩く内湾。連続孔形文により米字文モチーフを描く。縦位区画文と位置に門形刺突を施す。地文にR L、L R羽状施文。	黒浜式
9467	230	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐色	反摺L Lを横位施文する。外60と同一個体。	諸磯a式
9468	230	深鉢	胴部破片		9467と同一	9467と同一個体。	諸磯a式
9469	230	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/にぶい/稍	鋭先状の波状L線で、波頂部の両端に刺突を付す。平行沈線により波頂部下に風車状人組み文を描き、貼付文を付す。沈線の上から過点状に刺突を重ねる。外71と同一個体。	諸磯b式
9470	230	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、片岩/良好/明赤褐色	集合沈線による横帯構成。横帯部にワラビ手状、弧状の集合沈線を施す。地文にL R横位施文。	諸磯b式
9471	230	深鉢	胴部破片		外69と同一	9469と同一個体。	諸磯b式
9472	230	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐色	集合沈線による横帯構成。地文にR L横位施文。	諸磯b式
9473	231	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/良好/稍	2条の変形孔形文をめぐらして文様帯を区画。文様帯内は平行沈線によるモチーフを描く。文様帯下は結節刺突を横位施文する。	浮島式
9474	231	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/にぶい/黄稍	沈線による懸垂文を施し、複摺L R Lを縦位充填施文。蛇行懸垂文を施す。	加賀川E 3式
9475	231	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/浅褐色	波頂部の山形状突起で環状を呈す。帯状沈線を施し、列点を充填施文する。地文にL R横位施文。	称名寺2式
9476	231	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐色	沈線による斜行、蛇行する懸垂文を施す。	堀之内1式
F区遺構外							
9477	231	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/赤褐色	横位、斜位の平行沈線を施す。	有尾式
9478	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、繊維/ふつう/明赤褐色	R Lを横位施文する。	黒浜式
9479	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐色	R Lを横位施文する。	諸磯a式
9480	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/暗赤褐色	口縁が内湾。横位集合沈線を施す。地文に無摺L Rを横位施文。	諸磯b式
9481	231	浅鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい/黄稍	胴部下の部位。	前期後葉
9482	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい/稍	結節R Lを横位施文する。	前期後葉
9483	231	深鉢	口縁部破片		粗砂/ふつう/稍	R Lを地文とし、横位、弧状の沈線を施す。	逆弘文系
9484	231	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐色	2条の沈線による懸垂文、蛇行懸垂文を施す。	加賀川E 3式
9485	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい/黄稍	斜位の腕帯を施し、L Rを充填施文する。	加賀川E 4式
9486	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/にぶい/赤褐色	R Lを縦位、斜位施文する。	後期後葉
9487	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい/黄稍	肋骨を付した胸線をめぐる。横位帯状沈線を施し、L Rを充填施文する。外88・89と同一個体。	堀之内2式
9488	231	深鉢	口縁部破片		外87・89と同一	胸線に8の字貼付文を付す。外87・89と同一個体。	堀之内2式
9489	231	深鉢	胴部破片		外87・88と同一	外87・88と同一個体。	堀之内2式
9490	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつう/にぶい/黄稍	帯状沈線により三角形モチーフを描き、L Rを充填施文する。	堀之内2式
9491	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつう/にぶい/黄稍	横位帯状沈線を施し、L Rを充填施文する。	堀之内2式
9492	231	深鉢	底部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい/稍	無文。	堀之内2式
G区遺構外							
9493	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/灰黄褐色	2条色の懸垂文・L Lを横位、斜位施文する。	黒浜式
9494	231	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/黄灰	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
9495	231	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維、繊維/ふつう/にぶい/稍	0段多条L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
9496	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐色	連続孔形文により幾何学モチーフを描き、間隙に門形刺突を施文。地文L R横位施文で垂り消し手法。	諸磯a式
9497	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒/良好/にぶい/黄稍	浮線による横帯構成。地文にR L横位施文。	諸磯b式
9498	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/赤褐色	集合沈線による横帯構成。横帯部に斜位の集合沈線を充填施文する。	諸磯b式
9499	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/赤褐色	集合沈線による横帯構成。地文にR L横位施文。	諸磯b式

番号	持回 P.L	種 類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	粘土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
95100	231	深鉢	胴部破片	底径(7.0)	粗砂/良好/明赤褐色	傾斜平行沈線を施す。地にR.L横位施文。	諸磯b式
95101	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒、石英/良好/赤褐色	帯系文Rを縦位施文する。	中階中葉
95102	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黑色粒、石英/ふつ/粗	傾斜沈線を施し、前々段段帯R.L.Lを充填施文する。	加判利E3式
95103	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒/良好/粗	沈線による懸垂文を施し、R.Lを縦位充填施文する。	加判利E4式
95104	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒、石英/良好/にぶい黄褐色	沈線による懸垂文を施し、R.Lを縦位充填施文する。	加判利E3式
95105	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒、石英/良好/粗	斜位の降帯を施し、R.Lを充填施文する。	加判利E3式
95106	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒/ふつ/にぶい粗	2条の降帯により弧状モチーフを施し、L.Rを充填施文する。	加判利E3式
95107	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黑色粒/ふつ/にぶい黄褐色	傾斜降帯をめぐらし、L海部無文帯を区画、降帯を垂下させる。	加判利E4式
95108	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒、石英/良好/明赤褐色	1条の降帯により弧状モチーフを施し、前々段段帯L.R.Rを充填施文する。	加判利E3式
95109	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒/ふつ/にぶい黄褐色	帯状沈線により弧状モチーフを施し、R.Lを充填施文する。	称名寺1式
95110	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒/良好/粗	縦位帯状沈線を施し、L.Rを充填施文する。	称名寺1式
95111	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黑色粒/ふつ/にぶい黄褐色	帯状沈線により幾何学モチーフを描く。	称名寺2式
95112	232	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒、石英/良好/にぶい黄褐色	幅広い横位帯状沈線を施し、L.Rを充填施文する。	堀之内2式
95113	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、細砂、黑色粒、石英/良好/灰褐色	縦い流状口縁で底部を囲す。L海下に1条の沈線を沿わせて横文帯を作出。帯状沈線により幾何学モチーフを描き、L.Rを充填施文する。	堀之内2式
H区遺物類							
95114	232	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒、繊維/ふつ/粗	0段多条R.Lを縦長変形施文する。95115・116と同一個体。	花箱下層式
95115	232	深鉢	胴部破片		95114・116と同一	95114・116と同一個体。	花箱下層式
95116	232	深鉢	胴部破片		95114・115と同一	95114・115と同一個体。	花箱下層式
95117	232	深鉢	底部破片		粗砂、黑色粒、繊維/ふつ/灰褐色	尖底。0段多条R.Lを縦位施文する。	花箱下層式
95118	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつ/にぶい黄褐色	波状口縁で波面下に貼付文を付す。斜行する条線を施す。	有尾式
95119	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつ/にぶい黄褐色	波状口縁。斜行する条線を施す。	有尾式
95120	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、細砂、繊維/ふつ/にぶい赤褐色	L内面削ぎで、くの字状に外組する器形。連続爪形文を横位多段に施す。	有尾式
95121	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、黑色粒、繊維/ふつ/にぶい赤褐色	L縁が縦く外組、平行沈線によりゆるぎ状のモチーフを描く。R301と同一個体。	黒矢式
95122	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、黑色粒、繊維/ふつ/にぶい赤褐色	L縁下に点列を3条めぐらし、コンパス文を施す。	黒矢式
95123	232	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂、白色粒、黒色粒、繊維/ふつ/黒褐色	くの字状に外組。横位、斜行する平行沈線を施す。	有尾式
95124	232	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつ/にぶい黄褐色	先端のさきくねった幅広L海により斜格子目状モチーフを描き、隙間にコンパス文を施す。	黒矢式
95125	232	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつ/にぶい黄褐色	横位、斜位の平行沈線、円形列突を施す。地に斜行帯系文Rを横位施文。	黒矢式
95126	232	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつ/にぶい赤褐色	横位、弧状の条線を施す。	有尾式
95127	232	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒、繊維/ふつ/にぶい赤褐色	縦くびれる器形。屈曲部上位に文様帯を配し、横位、縦位、扇面状の平行沈線を多段に施す。文様帯下は無彫R.L横位施文。	黒矢式
95128	232	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつ/にぶい粗	コンパス文を横位多段に施す。	黒矢式
95129	232	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、石英、繊維/良好/にぶい黄褐色	くの字状に外組。R.L、L.Rを引状施文し、屈曲部にコンパス文をめぐらす。	黒矢式
95130	232	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、石英、繊維/ふつ/にぶい黄褐色	末端置付L.Rを横位施文する。	黒矢式
95131	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、繊維/ふつ/にぶい赤褐色	縦い流状口縁で口縁が縦く外組。R.L、L.Rを変形施文する。	黒矢・有尾
95132	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、石英、繊維/ふつ/にぶい粗	附加条1種L.R+L、R.L+を引状施文する。口縁下にC字状列突をめぐらす。内面研磨。	黒矢式
95133	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつ/にぶい粗	L.R、附加条2種L.R+L・Lを引状施文する。	黒矢式
95134	232	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂、黑色粒、繊維/ふつ/粗	0段多条L.R、無彫R.Lを引状施文する。	黒矢・有尾
95135	232	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂、白色粒、繊維/ふつ/灰黄褐色	R.L、L.Rを変形施文する。	黒矢・有尾
95136	232	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつ/にぶい黄褐色	L.R、無彫R.Lを引状施文する。	黒矢・有尾
95137	232	深鉢	胴部破片		粗砂、黑色粒、石英、繊維/ふつ/にぶい粗	R.L、附加条1種L.R+Lを引状施文する。	黒矢式
95138	232	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつ/にぶい粗	縦く外組する器形。屈曲部に扇面状工具による縦位点状列突を横位にめぐらし、R.Lを横位施文する。	有尾式
95139	232	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつ/にぶい赤褐色	附加条2種L.R+L・L、L.R+Rを引状施文する。	黒矢式
95140	232	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黑色粒、石英、繊維/ふつ/粗	無彫L.Rを横位施文する。	黒矢・有尾
95141	233	深鉢	胴部破片	底径(11.6)	粗砂、黑色粒、石英、繊維/ふつ/にぶい粗	無彫L.Rを横位施文する。	黒矢・有尾
95142	233	深鉢	底部破片	底径(7.8)	粗砂、白色粒、黑色粒、繊維/ふつ/粗	0段多条L.R、L.Rを引状施文する。底面にも施文。	前期扇葉
95143	233	深鉢	口縁部破片		粗砂/良好/ふつ/粗	横位、扇面状の条線を施す。	諸磯a式
95144	233	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂、片割/良好/粗	条線により動物文を描く。縦位区画は円形列突施文。	諸磯a式

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持回 P.L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
9r145	233	深鉢	胴部破片		粗砂、片引/良好/明赤褐色	集合沈殿により米子文状モチーフを描く。履帯区画は1条の沈線を垂下。	活版a式
9r146	233	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/明赤褐色	連続孔形文により幾何学モチーフを描き、R.Lを充填施文する。	活版a式
9r147	233	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/明赤褐色	R.Lを横位施文する。	活版a式
9r148	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/ふつ/ふい黄褐色	口縁に小突起を付す。R.L横位施文を地文とし、連続孔形文を横位、履帯に施す。	活版b式
9r149	233	深鉢	胴部破片		粗砂/ふつ/ふい黄褐色	口縁が内折、波状口縁で突起部を付すと思われる。浮線による構成で、間隙に内折角突を施す。	活版b式
9r150	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒/良好/相	幅広い扁平な履帯によりモチーフを描き、帯系文Rを施す。	帯版式
9r151	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/ふつ/ふい黄褐色	横位、履帯の履帯を施す。	加得利E3式
9r152	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつ/ふい黄褐色	斜行する2条の履帯を施し、R.Lを充填施文する。	加得利E3式
9r153	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつ/ふい黄褐色	横位、逆U字状の沈線を施し、R.Lを充填施文する。	加得利E4式
9r154	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつ/ふい黄褐色	横位沈線をめぐらし、以下、R.Lを充填施文する。	加得利E4式
9r155	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐色	履帯によるU字状モチーフを施し、L.Rを充填施文する。	加得利E4式
9r156	233	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒/良好/相	履帯による懸垂文を施し、L.Rを横位充填施文する。	加得利E4式
9r157	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/ふい黄褐色	口縁が短く内折、R.Lを斜位施文し、筋状履帯を垂下させる。9r158・161・162と同一個体。	履之内1式
9r158	233	深鉢	胴部破片		9r157・161・162と同一個体	内折角突を伴う筋状履帯を垂下させ、横位、弧状の沈線を施す。9r157・161・162と同一個体。	履之内1式
9r159	233	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/ふつ/灰黄褐色	口内凹欠損、口縁を肥厚させ、門形角突を施す。肥厚部に履帯沈線、列点を施す。	履之内1式
9r160	233	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/ふつ/ふい黄褐色	多条沈線により逆U字状の懸垂文を施す。	履之内1式
9r161	233	深鉢	胴部破片		9r157・158・162と同一個体	R.L斜位施文を地文とし、斜行する多条沈線を施す。9r157・158・162と同一個体。	履之内1式
9r162	233	深鉢	胴部破片		9r157・158・161と同一個体	9r157・158・161と同一個体。	履之内1式
9r163	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつ/相	多条の沈線による懸垂文を施し、L.Rを充填施文する。9r165と同一個体。	履之内1式
9r164	233	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒、石英/ふつ/ふい黄褐色	斜行する沈線を施す。	履之内1式
9r165	233	深鉢	胴部破片		9r163と同一個体	履之内1式	
9r166	233	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/相	細沈線による斜格字日文を施す。	履之内1式
9r167	233	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/ふい黄褐色	初みを伴う履帯、沈線をめぐらし、内折部に8字取付文を付す。	履之内2式
9r168	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつ/灰黄褐色	横位、弧状の沈線を施す。	履之内2式
9r169	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、石英/良好/ふい黄褐色	横位筋状沈線を施し、L.Rを充填施文する。	履之内2式
9r170	233	深鉢	底部破片	底径(12.8)	粗砂、細礫、石英/良好/明赤褐色	底面に刷代痕。	履之内2式
9r171	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつ/ふい黄褐色	波状口縁、斜行する沈線を施す。	—
I区遺構外							
9r172	234	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐色	帯系文L、筋条体条線を履帯施文する。口縁下に筋条体圧痕を押し除す。	夏島式
9r173	234	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/明赤褐色	帯系Rを履帯施文する。	井草・夏島
9r174	234	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐色	帯系Rを履帯施文する。	井草・夏島
9r175	234	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、細礫/ふつ/相	R.Lを履帯、斜位施文する。	花婿下層式
9r176	234	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒、石英、細礫/良好/明赤褐色	R.Lを斜位施文する。下層はナデ。	花婿下層式
9r177	234	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつ/相	等間隔短柱な末端部内凹文を履帯多段に施す。	前南島葉
9r178	234	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつ/相	組組を履帯施文する。	地山口式
9r179	234	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、細礫/ふつ/ふい黄褐色	波状口縁で口内内折ぎ。口縁に沿った斜行する平行沈線を3条施す。	有尾式
9r180	234	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、細礫/ふつ/ふい黄褐色	波状口縁、口縁に沿った斜行する平行沈線を1条、連続孔形文を2条施す。	有尾式
9r181	234	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、細礫/ふつ/ふい黄褐色	横位、斜行する平行沈線を施す。	有尾式
9r182	234	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつ/赤褐色	口内内折ぎで、口縁が縁で外折、口縁下に1条の履帯平行沈線をめぐらし、逆U字状の平行沈線を施す。	有尾式
9r183	234	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、細礫/ふつ/ふい黄褐色	C字状角突を履帯多段に施す。	黒山式
9r184	234	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、細礫/ふつ/ふい黄褐色	口縁が短く内折、口縁下から平葎竹管によるC字状突、押し引き短沈線、平行沈線をめぐらし、内面研削。	黒山式
9r185	234	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつ/ふい黄褐色	口縁が短く内折、口縁下にR.L横位施文を地文とし、口縁下に2条の連続孔形文をめぐらし、内面研削。	黒山式
9r186	234	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、細礫/ふつ/赤褐色	横位平行沈線をめぐらして文様帯を区画、文様帯内に平行沈線による変形文を重畳するモチーフを描く。	有尾式
9r187	234	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつ/ふい黄褐色	連続孔形文により変形モチーフを描く。	有尾式
9r188	234	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、細礫/ふつ/浅黄褐色	平行沈線により肋骨文状のモチーフを描く。斜位する平行沈線の端部はC字状角突で閉じ、履帯沈線に内折角突を施す。	黒山式
9r189	234	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、細礫/ふつ/ふい黄褐色	平行沈線を履帯多段に施す。	黒山式

番号	持回P.L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外190	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/橙	横位、弧状の条線、進点状刻突を施す。	有尾式
外191	234	深鉢	胴部破片		細砂、細線、繊維/ふつう/橙	附加条1種R L+Lを横位施し、前述べたコンパス文を横位にめぐらす。	黒点式
外192	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/良好/明赤褐色	横位平行沈線、コンパス文をめぐらす。	黒点式
外193	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/にぶい黄褐色	横位平行沈線、コンパス文をめぐらす。	黒点式
外194	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/良好/橙	文様帯内に斜格子状沈線を施し、文様帯下にR Lを横位施文する。文様帯を両側で区画文は施されない。	黒点式
外195	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい黄褐色	平行沈線を縦位施文する。外196と同一個体。	黒点式
外196	234	深鉢	胴部破片		外195と同一	外195と同一個体。	黒点式
外197	234	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄褐色	R L横位施文を地文とし、連続爪形文による米字文状モチーフを描く。	黒点式
外198	234	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/にぶい黄褐色	R Lを地文とし、平行沈線による米字文状モチーフを描く。平行沈線間は磨り消している。	黒点式
外199	234	深鉢	口縁～胴部		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄褐色	くの字状に縦く外延する器形。無筋L rを横位、斜位施文する。	黒点式
外200	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい赤褐色	附加条1種L R+R、R L+Lを引状施文する。	黒点式
外201	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい黄褐色	附加条1種L R+r、R L+lを引状施文する。	黒点式
外202	234	深鉢	胴部破片		粗砂、石英粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/にぶい赤褐色	無筋L rを横位施文する。	黒点・有尾
外203	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/ ふつう/橙	無筋R lを横位施文する。	黒点・有尾
外204	234	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐色	結節R lを横位施文する。	黒点式
外205	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐色	附加条3種R L+rを横位施文する。	黒点式
外206	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐色	2条巻の標赤文L・LとR・Rを引状施文する。	黒点式
外207	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ 明赤褐色	附加条2種R L+R、R L+Lを引状施文する。	黒点式
外208	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい赤褐色	2条巻の標赤文R・Lを横位施文する。	黒点式
外209	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐色	2条巻の標赤文R・Lを横位施文する。	黒点式
外210	234	深鉢	底部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/明赤褐色	底部付近に列点を横位多段に施す。	黒点式
外211	234	深鉢	底部破片	底径(8.0)	細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐色	0段多条L Rを横位施文する。	黒点・有尾
外212	234	深鉢	底部破片	底径(10.6)	粗砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/にぶい黄褐色	L R、R Lを引状施文する。	黒点・有尾
外213	234	深鉢	底部破片	底径(9.0)	細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/明赤褐色	やや上げ底、無筋L rを横位施文する。底面研磨。	黒点・有尾
外214	235	深鉢	口縁～胴部	底径(29.7)	粗砂、細線/ふつう/橙	縦く外延する器形。口縁から胴中にかけて幅状の文様帯を掛け、横位、深位の条線を交互多段に施して円形刻突を縦位に配す。文様帯下はR L横位施文。	諸磯a式
外215	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/橙	口縁が縦く外延。横位、波状の条線を交互多段に施し、円形刻突を施す。	諸磯a式
外216	235	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒/ふつう/ 明赤褐色	口縁下に横位1条の条線をめぐらし、以下、多段に波状条線を描く。	諸磯a式
外217	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/にぶい赤褐色	横位、波状の条線を交互多段に施す。	諸磯a式
外218	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、石英/ ふつう/明赤褐色	斜行する条線を多条に施す。	諸磯a式
外219	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐色	R Lを横位施文し、円形刻突を縦位に配す。	諸磯a式
外220	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/赤褐色	条線により筋付文を描く。縦位区画は円形刻突施文。	諸磯a式
外221	235	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/ にぶい黄褐色	条線により筋付文を描く。縦位区画は円形刻突施文。	諸磯a式
外222	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/明赤褐色	R L横位施文を地文とし、平行沈線による筋付文を描く。縦位区画は平行沈線、円形刻突。	諸磯a式
外223	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/橙	横位2条のC字状刻突をめぐらし、文様帯を区画。平行沈線による筋付文を描く。縦位区画は円形刻突施文。	諸磯a式
外224	235	深鉢	胴部破片		粗砂、片岩/良好/明赤褐色	R L横位施文を地文とし、平行沈線による筋付文を描く。縦位区画は平行沈線、円形刻突。	諸磯a式
外225	235	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/赤褐色	山形状の波状口縁で口内やや肥厚。口縁に沿った斜行する連続爪形文を描く。底面帯下に2孔。円形刻突を施す。	諸磯a式
外226	235	深鉢	口縁部破片		粗砂/良好/橙	口縁が縦く外延。口縁下に3条の連続爪形文をめぐらし、円形刻突を施す。内面研磨。	諸磯a式
外227	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐色	口縁下に3条の連続爪形文をめぐらす。	諸磯a式
外228	235	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐色	口縁肥厚。肥厚部下に3条の連続爪形文をめぐらす。	諸磯a式
外229	235	浅鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/橙	口縁下に2条の連続爪形文をめぐらし、以下、R Lを横位施文する。外241と同一個体。	諸磯a式
外230	235	浅鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐色	縦く内湾する器形で、口内内面肥厚。連続爪形文により木葉文を描く。地文R L横位施文で磨り消し手法。口内研磨。内面研磨。	諸磯a式
外231	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/明赤褐色	連続爪形文による木葉文を描く。地文R L横位施文で磨り消し手法。	諸磯a式
外232	235	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/ふつう/ にぶい黄褐色	連続爪形文による木葉文を描く。地文R L横位施文で磨り消し手法。	諸磯a式

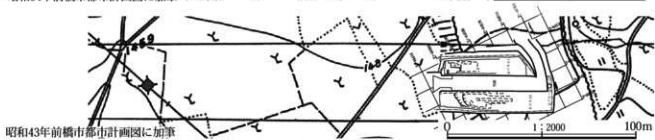
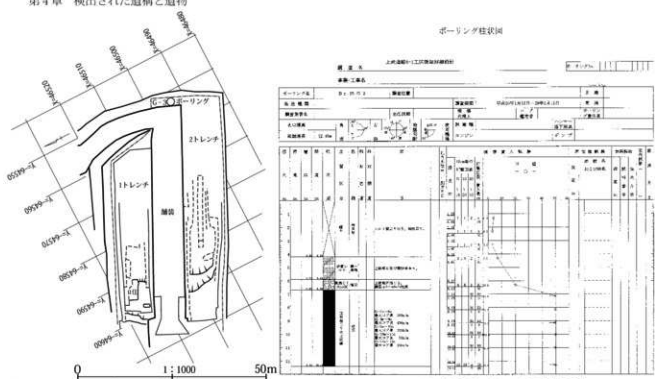
第4章 検出された遺構と遺物

番号	持回P.L	種類	出土位置 層 存 分	計測値(cm,g)	土質/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
9x233	235	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/稍	連続円形文による本業文を描く。地文R.L横位施文で磨り消し手法。	諸磯a式
9x234	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	連続円形文による本業文を描き、間隔に円形刺突を施す。地文R.L横位施文で磨り消し手法。	諸磯a式
9x235	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐	連続円形文による本業文を描き、間隔に円形刺突を施す。	諸磯a式
9x236	235	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/稍	R.L横位施文を地文とし、縦位平行沈線、連続円形文による本業文状のモチーフを描く。交点に円形刺突施文。	諸磯a式
9x237	235	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ふつう/稍	横位、縦両状の平行沈線を施す。	諸磯a式
9x238	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/稍	横位連続円形文をめぐらし、以下、R.Lを横位施文する。	諸磯a式
9x239	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/赤褐	R.Lを横位施文し、連続円形文を横位にめぐらす。	諸磯a式
9x240	235	深鉢	胴部破片		細砂/ふつう/にふい黄褐	くの字状に内括する器形。R.Lを横位施文し、屈曲部に連続円形文をめぐらす。	諸磯a式
9x241	235	浅鉢	胴部破片		外250と同一	屈曲する器形。外250と同一個体。	諸磯a式
9x242	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/にふい赤褐	L.R横位施文を地文とし、2条の連続円形文を垂下させる。	諸磯a式
9x243	235	深鉢	胴部破片		細砂/良好/明赤褐	R.L横位施文を地文とし、縦位区画、縦位の平行沈線を施す。	諸磯a式
9x244	235	深鉢	口縁部破片		粗砂/良好/稍	結節R.Lを横位施文する。	諸磯a式
9x245	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/にふい赤褐	R.Lを横位施文し、円形刺突を縦位に配す。	諸磯a式
9x246	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/赤褐	結節R.Lを横位施文し、円形刺突を縦位、斜位の短沈線を横位に施す。短沈線下の横文を横位にナゲ消す。外250と同一個体。	諸磯a式
9x247	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にふい稍	R.Lを横位施文し、C字状刺突を縦位に配す。	諸磯a式
9x248	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	R.Lを横位施文し、半環状内皮による刺突を縦位に配す。	諸磯a式
9x249	235	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/明赤褐	R.Lを横位施文し、半環状内皮による刺突を縦位に配す。	諸磯a式
9x250	235	深鉢	胴部破片		外247と同一	外247と同一個体。	諸磯a式
9x251	235	浅鉢	胴部破片		細砂/良好/稍	くの字状に内括する器形。屈曲部下にL.Rを横位施文する。器型3anと類似。	諸磯b式
9x252	235	深鉢	底部破片	底径7.0	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	R.Lを横位施文する。	諸磯a式
9x253	235	深鉢	底部破片	底径(7.8)	粗砂、黒色粒/良好/にふい稍	R.Lを横位施文する。	諸磯a式
9x254	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/にふい黄褐	L線がくの字状に屈曲。R.L横位施文を地文とし、横位平行沈線を施す。	諸磯a式
9x255	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/にふい稍	斜行する集合沈線を施す。	諸磯b式
9x256	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/にふい稍	浮線による横帯構成。地文にR.L横位施文。口唇部に刻みを付す。	諸磯b式
9x257	235	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/ふつう/明赤褐	屈曲する器形。浮線による横帯構成で、屈曲部に縦位、X字状の浮線を帯びます。地文にR.L横位施文。	諸磯b式
9x258	235	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、片岩/ふつう/明赤褐	浮線による横帯構成。地文にR.L横位施文。	諸磯b式
9x259	235	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/稍	浮線による横帯構成。横帯間に結節R.Lを横位施文。	諸磯b式
9x260	235	深鉢	胴部破片		細砂/良好/明赤褐	集合沈線による横帯構成。地文にR.L横位施文。	諸磯b式
9x261	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ふつう/稍	集合沈線による横帯構成。	諸磯b式
9x262	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/稍	大袋状突起。L線に沿った斜行する集合沈線を施し、対弧状の集合沈線を施す。	諸磯b式
9x263	235	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂/良好/赤褐	浮線による横帯構成。横帯間に浮線による幾何学モチーフを描き、地文にR.L横位施文。	諸磯b式
9x264	236	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/明赤褐	横位集合沈線を施し、斜付文を付す。	諸磯c式
9x265	236	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/明赤褐	横位、縦両状の集合沈線を施す。隙間にV字状集合沈線を施文。	前期本業
9x266	236	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/赤褐	横位沈線により区画、区画内に弧状平行沈線、逆V字状集合沈線を施す。	前期本業
9x267	236	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂/良好/明赤褐	半円弧線状の集合沈線により対弧状モチーフを描き、三角凹部を沿わせる。	前期本業
9x268	236	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂/ふつう/明赤褐	半円弧線状の平行沈線、半環状内皮による刺突を施した隆線を横位にめぐらす。	前期本業
9x269	236	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒/良好/黒褐	折り返し状の肥厚L線、肥厚部下に横位、円状の集合沈線を施す。	前期本業
9x270	236	深鉢	胴部破片		粗砂、細砂/良好/赤褐	横位平行沈線をめぐらして区画、区画内に三角凹部を充填する。	前期本業
9x271	236	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/明赤褐	横位沈線めぐらし区画、上位は平行沈線による弧状モチーフを描き、斜位の平行沈線を充填施文。下位はR.L横位施文を地文とし、沈線による内皮モチーフを描く。区画沈線下に三角凹部を沿わせる。	前期本業→中期前頭
9x272	236	深鉢	口縁部破片		粗砂、細砂/良好/にふい赤褐	折り返し状の肥厚L線、肥厚部に前後体線を斜位に押接する。口唇部にも施文。	前期本業
9x273	236	深鉢	胴部破片		細砂/良好/稍	ロッキングを横位施文する。	浮凸・網津
9x274	236	深鉢	口縁部破片	口径(6.2)	粗砂/良好/明赤褐	小形、口縁内凹。無文。	前期後業
9x275	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にふい黄褐	L.Rを斜位施文する。下手は擦取器蓋。	前期後業
9x276	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にふい黄褐	結節R.Lを横位施文する。	前期後業
9x277	236	深鉢	底部破片		粗砂、細砂、片岩/良好/明赤褐	縦位、弧状の平行沈線を施す。	前期本業→中期前頭
9x278	236	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/稍	脈系文を横位施文する。	加判利E1式
9x279	236	深鉢	口縁部破片		粗砂、細砂、白色粒、黒色粒/良好/稍	横位、逆V字状の沈線を施し、R.Lを充填施文する。	加判利E3式

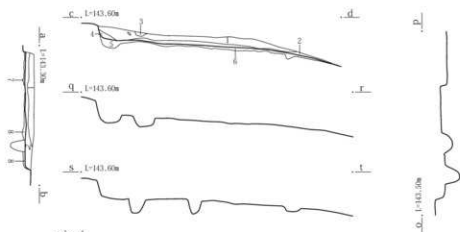
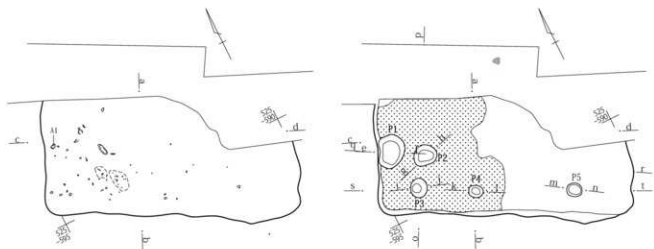
番号	持回 P.L	種 器	類 種	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外280	236	深鉢	口縁部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、石灰・良好/よい・黄褐色	横位沈線をめぐるして口縁部無文帯を区画、沈線下に縦位の沈線を充満施文する。	加得利E 3式
外281	236	深鉢	口縁部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、ふつう/よい・黄褐色	横位、逆U字状の沈線を施し、R1を充満施文する。	加得利E 3式
外282	236	深鉢	口縁部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、ふつう/よい・黄褐色	R1を縦位、斜位施文する。	加得利E 3式
外283	236	深鉢	胴部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、石灰・ふつう/よい・黄褐色	沈線による懸垂文を施し、無彫R1を縦位充満施文する。	加得利E 3式
外284	236	深鉢	胴部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、ふつう/よい・黄褐色	隆帯による弧状モチーフを施し、R1を縦位充満施文する。	加得利E 3式
外285	236	深鉢	胴部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、ふつう/よい・黄褐色	隆帯による懸垂文を施し、L Rを縦位充満施文する。	加得利E 4式
外286	236	深鉢	胴部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、良好/相	帯状沈線により弧状モチーフを描き、乳点を充満施文する。	称名方式
外287	236	深鉢	口縁部破片			細砂、白色粒、黒色粒、石灰・良好/相	口縁外面肥厚。肥厚部に2条の沈線をめぐる。	堀之内1式
外288	236	深鉢	胴部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、石灰・良好/相	横位沈線をめぐるして区画、弧状の集合沈線を垂下させる。	堀之内1式
外289	236	深鉢	胴部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、石灰・良好/相	縦位、弧状の集合沈線を施し、L Rを充満施文する。	堀之内1式
外290	236	深鉢	胴部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、石灰・ふつう/浅黄	横位、弧状の沈線を施し、L Rを充満施文する。	堀之内1式
外291	236	深鉢	胴部破片			細砂、黒色粒/ふつう/よい・黄褐色	蛇行懸垂文を施す。	堀之内1式
外292	236	深鉢	胴部破片			細砂、白色粒、黒色粒、ふつう/相	帯状沈線により幾何学モチーフを施し、L Rを充満施文する。	堀之内2式
外293	236	深鉢	胴部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、ふつう/よい・黄褐色	斜位の帯状沈線を施し、L Rを充満施文する。	堀之内2式
外294	236	注口土器	胴部破片			粗砂、白色粒、黒色粒、ふつう/よい・黄褐色	算盤玉状の彫形、胴部下部に沈線による同心円文など幾何学モチーフを描く。外295と同一個体。	堀之内2式
外295	236	注口土器	胴部破片				外294と同一個体。	堀之内2式
外296	236	石磯 四基無蓋鉢		長1.98(1.4) 径0.5(0.8)		黒曜石	完成状態。右辺側「返し」を欠く。加工は丁寧で、裏面中央付近に継ぎを残す。	
外297	236	石磯 四基無蓋鉢		長(2.2)幅1.6 径0.3(0.7)		チャート	完成状態。基部を深く抉り込み、「返し」は細い。先端部欠損する。	
外298	236	石磯 凸基有蓋鉢		長2.2(1.1) 径0.4(0.6)		黒曜石	完成状態。継ぎの継ぎに小さな窪みが付く。小形品だが、やや断面は厚い。	
外299	236	石磯 凸基有蓋鉢		径3.0(1.1) 径1.5(1.6)		チャート	完成状態。形状の整う極品で、継ぎに比べ蓋は著しく小さい。「返し」は良く、基部形状は平基盤に近い。	
外300	236	石磯 平基無蓋鉢		長1.9(1.2) 径0.4(0.7)		チャート	完成状態。小形品を良く周辺加工して形状を整える。加工状態は粗く、継ぎは残存されている。	
外301	236	石磯 四基無蓋鉢		長(2.0)幅(1.6) 径0.6(1.2)		黒曜石	本製品。右辺側「返し」を欠損する。形制的には完成されているが、断面は厚く本製品と捉えたい。	
外302	236	石磯 四基無蓋鉢		長2.0(1.5) 径1.5(1.0)		黒曜石	本製品。表裏両面とも、継ぎの中央付近が研ぎきれぬ。先端部・基部には加工研磨後、再加工品か。	
外303	236	石磯 平基無蓋鉢		径3.0(1.2) 径1.0(1.5)		チャート	未加工。形制的には石磯としての属性を備えているが、全体として加工が浅く、断面も厚い。	
外304	236	磨先土器 器 柳型		長(5.6)幅1.7 径0.6(1.0)		チャート	背面側は全面加工。裏面側は周辺加工。先端に衝撃痕跡がある。基部欠損。	
外305	237	石磯 割型		長(2.8)幅1.5 径0.6(1.2)		黒曜石	小形割片を用いる。形状作中の加工は端み部の周辺に限られ、対部は割片のエッジを加工作せずそのまま利用。	
外306	237	石磯 割型?		長(6.6)幅(3.8) 径0.9(1.2)		黒色頁岩	背面側に浅く割線を施し、器体を作出す。割片内部に打撃面が残り、加工時に被損した可能性が高い。	
外307	237	石磯 割型		長(4.5)幅2.0 径0.8(1.7)		チャート	裏面側は押し剥離されているが、背面側縁線の加工は粗く、リタクマされている可能性が高い。	
外308	237	石磯 割型		長(6.0)幅(3.8) 径1.7(重4.7)		黒色頁岩	幅広割片の対面側に溝み部を作出す。割片端部を加工せず、そのまま対部と使用している。	
外309	237	石磯 幅広割片		長(6.9)幅(3.4) 径1.3(重3.2)		黒色頁岩	割片端部に機能部を作出す。機能部先端は短く、三角形状を呈し、再生されている可能性が高い。	
外310	237	打製石斧? 不明		長(9.5)幅(7.3) 径1.9(重129.6)		黒曜石(安山岩)	エッジは著しく摩耗する。器内が薄く、打製石斧としての分類が妥当か、判断は難しい。	
外311	237	磨製 石片		長11.9(幅5.5) 径2.0(重95.5)		黒色頁岩	背面側縁線の縁上を鋭く剥離した割片の右側縁を浅く加工して対部を作出する。下部に器の痕跡あり。	
外312	237	打製石斧 分製型		長12.1(幅7.6) 径2.2(重229.7)		黒曜石(安山岩)	完成状態。対部摩耗・擦痕が著しい。土壌部対部は再生され、対部が直刃状に変形している。	
外313	237	打製石斧 片刃		長11.0(幅6.2) 径1.9(重129.6)		黒色頁岩	完成状態。裏面側を薄く、背面側を厚く剥離する。対部は弱く摩耗する。	
外314	237	打製石斧? 分製型?		長(9.5)幅(7.3) 径2.8(重225.5)		黒曜石(安山岩)	体部のエッジが著しく摩耗。縁線のノッチを重複して石斧に分類。剥離面の縁は新鮮で、敲打目とすべからず。	
外315	237	打製石斧 短型		長10.3(幅5.2) 径1.9(重104.7)		珪質頁岩質	完成状態。対部摩耗あり。裏面側縁線を大きく打ち欠き、対部再生する。	
外316	237	打製石斧 短型		長14.1(幅7.6) 径1.8(重137.3)		黒色頁岩	横長割片を縦位に削り、両側縁を加工して石斧を作出す。対部は断面を取り込んだ割片のエッジを利用。	
外317	237	打製石斧 短型		長11.5(幅5.7) 径2.8(重178.5)		黒色頁岩	完成状態。両側縁のエッジが鋭く弱く摩耗するのに対し、対部再生され、エッジは新鮮である。	
外318	237	打製石斧 薄片		長7.0(幅4.7) 径1.4(重69.3)		珪質頁岩	完成状態。表裏面を浅く剥離して対部を作出す。対部は弱く摩耗する。	
外319	237	打製石斧 短型		長12.3(幅5.8) 径1.7(重95.2)		砂岩	完成状態。両側縁のエッジが鋭く弱く摩耗するのに対し、対部再生され、エッジは新鮮。体部中央で破損。	
外320	237	打製石斧 短型		長10.2(幅4.3) 径2.1(重85.7)		黒色頁岩	完成状態。対部摩耗等は不明瞭。対部裏面側の再生加工が失脱して、変形されたものか。	
外321	237	打製石斧 分製型?		長5.2(幅3.5) 径2.3(重89.6)		黒曜石(安山岩)	完成状態。右辺側は弱く、摩耗が集中する。左辺側は摩耗が見られず、対部再生されている可能性が高い。	
外322	237	磨製石斧 片刃状		長(5.9)幅(5.7) 径(2.8)重127.0		黒曜石(安山岩)	完成状態。表裏面とも研磨痕が良好に残り、後も明確である。使用途中、断面側で破損する。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	持回P.L	種類	出土位置 残存率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
9k323	237	門石 櫛門礎		長13.1幅8.4 厚5.2重721.2	粗粒輝石安山岩	表裏面扁漏斗状の孔2を穿ち、摩耗が著しい。側縁の敲打が著しく、平坦化している。	
9k324	237	門石 扉平櫛門礎		長15.5幅8.1 厚4.1重378.8	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、櫛中央付近に浅い漏斗状の孔がある。側縁・小口部に敲打がある。	
9k325	238	門石 扉平櫛門礎		長10.4幅8.8 厚4.5重526.6	粗粒輝石安山岩	磨り使ひ込まれ表裏面とも摩耗は顕著。小口部を除く側縁に敲打がある。漏斗状の孔2を表裏面に穿つ。	
9k326	238	門石 扉平櫛門礎		長13.3幅7.7 厚3.4重173.5	変質安山岩	表裏面とも摩耗するほか、背面側中央付近に漏斗状の凹部・集合打痕がある。右側縁の摩耗が著しい。	
9k327	238	門石 石櫛型		長12.0幅7.2 厚4.4重502.7	石英閃緑岩	表裏面とも著しく摩耗している。側縁・小口は敲打・摩耗が激しく、平坦化している。背面側に漏斗状の孔を穿つ。	
9k328	238	門石 扉平櫛門礎		長13.4幅8.7 厚4.0重667.6	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、背面側中央付近に漏斗状の凹部・集合打痕がある。右側縁の摩耗が著しい。	
9k329	238	門石 櫛門礎		長13.5幅8.2 厚(4.1)重617.6	粗粒輝石安山岩	背面側・両側縁に敲打・摩耗痕がある。特に両側縁の摩耗痕が著しい。裏面側は破損。	
9k330	238 168	門石 扉平櫛門礎		長9.9幅8.7 厚4.1重498.0	粗粒輝石安山岩	表裏面の摩耗は、とりわけ背面・右辺端で著しく、使用者の動き手を示唆する。敲打痕は側縁部に著しい。	
9k331	238 168	門石 扉平櫛門礎		長9.3幅7.8 厚4.1重399.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、漏斗状の孔2がある。側面・小口部の使用痕は低い。	
9k332	238	門石 櫛門礎		長10.5幅6.2 厚3.7重333.9	石英閃緑岩	背面側の中央付近・小口部内端に敲打痕が集中する。背面側に熱割落痕がある。	
9k333	238	磨石 櫛門礎		長13.2幅6.7 厚6.9重789.0	粗粒輝石安山岩	側面を主体に敲打・摩耗しており、「穀磨石」に似た属性を有する。	
9k334	238 168	磨石 扉平櫛門礎		長13.8幅10.7 厚3.8重899.5	ひん岩	表裏面とも摩耗するほか、敲打痕が著しい。側縁・小口部の敲打痕は乏しい。	
9k335	238	磨石 扉平櫛門礎		長12.0幅8.8 厚4.2重630.9	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、下端側小口部・側縁に敲打痕がある。	
9k336	238 168	磨石 扉平櫛門礎		長12.5幅8.1 厚4.3重898.9	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗痕・敲打痕があるほか、下端側小口部に集中して敲打・摩耗痕がある。	
9k337	238 168	磨石 櫛門礎		長12.4幅6.7 厚5.2重607.6	粗粒輝石安山岩	背面側平坦面が激しく使ひ込まれ摩耗するほか、小口部・側縁に敲打痕がある。	
9k338	238	磨石 扉平櫛門礎		長11.9幅8.2 厚5.1重621.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、特に両側縁を敲打して激しく使ひ込んでおり、側縁は平坦化している。	
9k339	238	敲石 磨好石(丸打)		長10.9幅8.5 厚3.7重306.3	変質玄武岩	左辺側の側縁に敲打痕を有する。下端端が大きく割断されているが、磨好石とは本質的。	
9k340	238 168	敲石 棒状礎		長14.8幅5.6 厚4.3重530.6	石英閃緑岩	背面側に強い積が遺る。この境目に打痕があるほか、小口部内端・側縁に打痕がある。	
9k341	238 168	磨石 櫛門礎		長15.0幅8.2 厚6.8重1091.5	粗粒輝石安山岩	右側縁は敲打・摩耗して平坦面が形成されている。左側縁・小口部内端に敲打痕がある。	
9k342	238	石皿 有縁		長(13.7)幅(13.8) 厚5.7重1159.4	粗粒輝石安山岩	表裏面に漏斗状の孔がある。使用面の摩耗は弱く、使用可能な状態にある。近似的楕圓形。	
9k343	238	石皿 盤状礎		長(24.5)幅(21.1) 厚6.5重3399.1	粗粒輝石安山岩	背面側平坦面が弱く摩耗。裏面に多数の孔を穿ち、属性的に右皿類に似たものと思えた。	
9k344	239 168	石皿 櫛門礎		長35.1幅33.3 厚10.6重12300.0	粗粒輝石安山岩	背面側側面・裏面側平坦面に多数の孔を穿つ。機能部は深く窪み、球形の磨石とセットで使われたものだろう。	
9k345	239	スタンピング 石磨 棒状礎		長8.8幅6.8 厚3.9重381.3	石英閃緑岩	底部部分割面に摩耗痕・打痕が残る。機能部に続く体部側縁には敲打に伴う割落痕が著しい。	
9k346	239	石製磨石具 扉平櫛門礎		長4.4幅3.1 厚1.3重24.6	ホルンフェルス	表裏面とも線条痕が顕著を覆う。背面側は磨らみ、端面は光沢を帯びる。	
9k347	239	石製磨石具 扉平櫛門礎		長7.6幅3.7 厚1.6重63.6	細粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗する。端面は光沢を帯び、器体長軸に直交する線条痕が著しい。	
9k348	239	多孔石 球形礎		長11.8幅10.5 厚8.7重1440.5	粗粒輝石安山岩	背面側中央に漏斗状の孔1を穿つ。孔周辺の摩耗が著しいほか、側縁に打痕が目立つ。	
9k349	239	多孔石 櫛門礎		長19.9幅13.9 厚12.4重5901.3	粗粒輝石安山岩	背面側の平坦な櫛面中央に孔を穿つ。側縁部・側面に孔を穿つ。熱割成り。	
9k350	239	磨輪 逆台形状		長4.5幅(4.3) 厚2.0重44.2	磨石	体部側面に縦型整形痕が残る。上面の欠損部は摩耗。欠損後の使用は確認。径7mmの孔を両側面穿らす。表裏面とも縦位のわずかな積がある。	
9k351	239	砥石 礫砥石		長7.4幅4.2 厚1.1重139.4	凝灰質砂岩	表裏面とも著しく使ひ込まれ、鋭い側縁のエッジが形成されている。	
9k352	239	遺患器 椀	1/2	幅3.7	細砂粒/還元焼/灰白	ロコロ型(右回転)。端みは環状溝みで丁寧な磨り掛け。内外面に微化鉄粉の付着。付着物は微細化した時点で付いており付着後に縁辺を磨くことになる。	
9k353	239	遺患器 椀	2/3	11710.8直径6.2 高さ4.9	細砂粒/還元焼/灰白	ロコロ型(右回転)。高台は底部部軸心切り付の高台で、取付け部から顕著。	
9k354	169	磨石(磨石)磨石 磨石(磨石)磨石	磨地跡	高さ2.4幅36.8 厚17.5重28340.0	粗粒輝石安山岩	磨石に「享保十七(1732)年壬子二月九日(日)右に取付(空)字享神定実(磨)」を刻む。裏面は粗く成形されている。	
9k355	169	磨石(磨石)磨石 磨石(磨石)磨石	磨地跡	高さ(5.4)幅33.1 厚17.2重30380.0	粗粒輝石安山岩	磨石に「元禄十二(1699)年癸十月廿六日(右)に「如月真取神定実(磨)」を刻む。磨石の一部黒色摩耗。	
9k356	170	磨石(磨石)磨石 磨石(磨石)磨石	磨地跡	高さ5.0幅28.0 厚17.2重28660.0	粗粒輝石安山岩	磨石に「享保四(1719)年己酉三月廿七日(右)に「法蓮神定実(磨)」を刻む。裏面は粗く成形されている。	
9k357	170	台座	磨地跡	高さ3.8幅38.2 厚134.8重52580.0	粗粒輝石安山岩	上面・正面・両側面に削り・油成形。上面中央部を浅く皿状に磨り込む。所々にタガ状の工具痕を残す。	

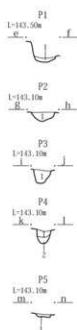


第15図 A区旧地形の推定復元



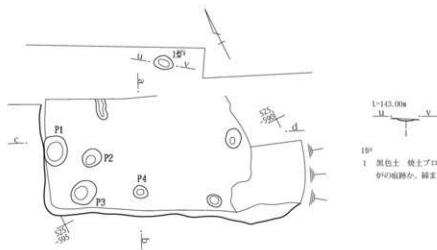
a-b,c-d

- 1 黒色土 5~10cm程度の白色軽石が多い。締まっている。
- 2 黒褐色土 白色軽石を少量含む。締まっている。
- 3 黒褐色土 にごい、黒褐色土のブロックを含む。土層の土がゆがみがある。
- 4 黒褐色土 白色軽石を少量含む。2より締まりなし。
- 5 黒色土 白色軽石を少量含む。層く締まっている。床面を形成する土。
- 6 黒色土 5に比べてやや軟。床面の土らしくない。
- 7 5と同じ。
- 8 6と同じ。



P1~5

- 1 黒褐色土 黄白色軽石(○P10か)を含む。
- 2 黒色土 1に比べ軽石ごくわずか。

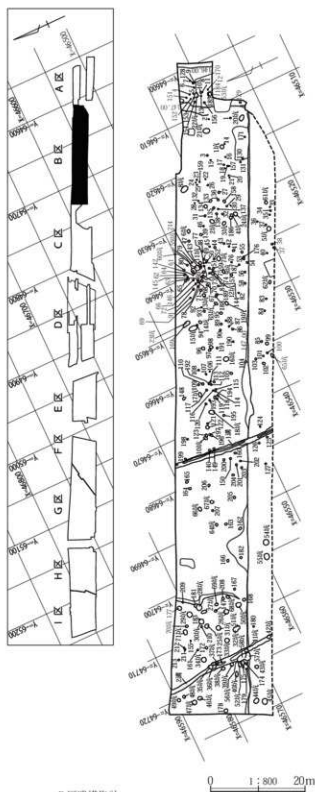


P10

- 1 黒色土 黄土ブロック・白色軽石を少量含む。砂の粗粒が。締まっている。

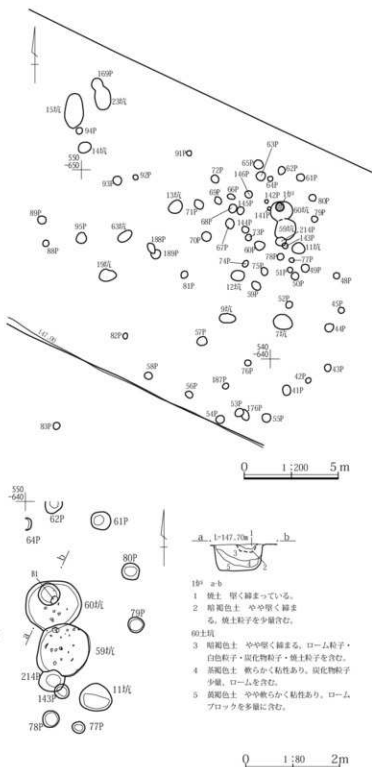
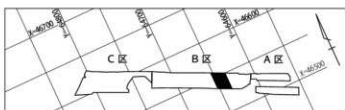
第16図 A区1住居

0 1:80 2m

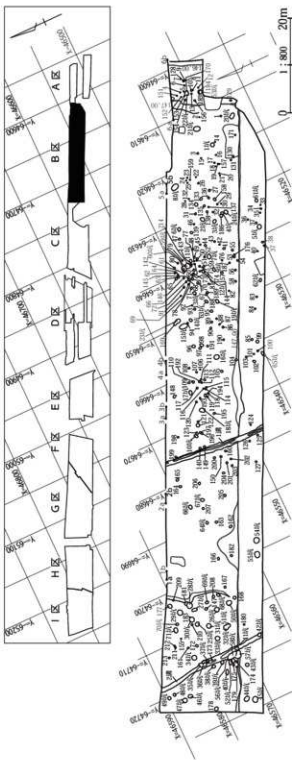


B区遺構集計

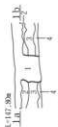
	1面	小計
柱礎	0	0
礎	1	1
面倉柱建物	0	0
溝	2	2
土坑	71	71
	No.1~71	
ピット	214	214
	No.1~214	
道	0	0



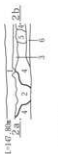
第17図 B区全体図, 1面



道構図(B区)



説明 1a-1b
 1 におい、黄褐色土、2-5cmのローム状ロツク、2-3cmの褐色土プロツクを含む。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 2 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 3 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 4 黄褐色土、ロームプロツクを含む。細まっている。今や、4への露頭。Aa-に代る。



説明 2a-2b
 1 灰褐色土、白色結石を含む。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 2 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 3 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 4 黄褐色土、2-3cmのロームプロツクを含む。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 5 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 6 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。



説明 3a-3b
 1 におい、黄褐色土、白色結石を含む。土中に灰色の土、または土一薄層の土、ロームプロツクも含む。中層-中硬層-加色系の土、白色結石多量に含む。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 2 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 3 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。



説明 4a-4b
 1a 灰褐色土、白色結石を含む。細い。
 1b 黄褐色土、土中に白色結石、中に1の下にロームプロツク含む。基岩面直下の現代風化層。
 2 におい、黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 3 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 4 2と同じ。
 5 3と同じ。
 6 におい、黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。



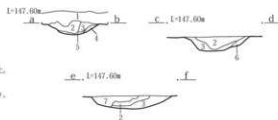
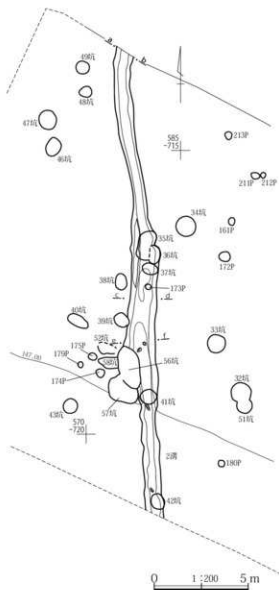
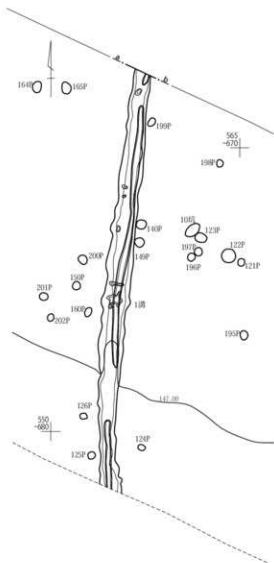
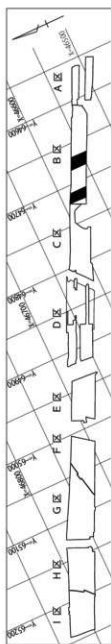
説明 5a-5b
 1 灰褐色土、白色結石を含む。土中は現代風の土、土中に白色結石、中に1の下にロームプロツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 2 におい、黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 3 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 4 明黄褐色土、白色結石、土中に白色結石を含む。



説明 6a-6b
 1 におい、黄褐色土、土中に白色結石、中に1の下にロームプロツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 2 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 3 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 4 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 5 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 6 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 7 におい、黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 8 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 9 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 10 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。
 11 黄褐色土、土中に白色結石、中に1のフツク入り。基岩面直下の現代風化層。細まりなし。

第18図 B区北壁土層断面

第4章 検出された遺構と遺物



1溝 a-b

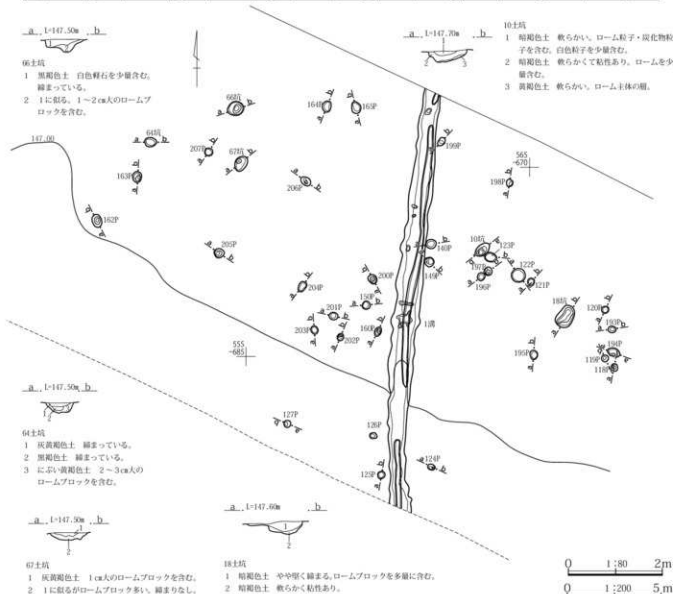
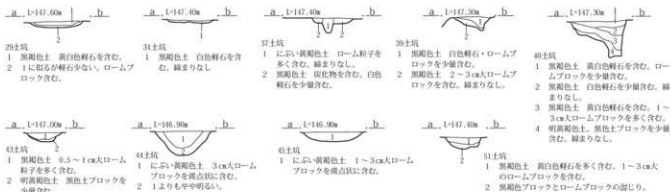
- 1 灰黄褐色土 白色軽石を含む。表土。締まりなし。軽半円造りで動いている土。
- 2 灰黄褐色土 白色軽石・淡黄褐色砂質土ブロックを含む。締まっている。
- 3 灰黄褐色土 白色軽石を含む。砂質。As 軽石を多量に含む。アッシュあり。締まりなし。
- 4 黒褐色土 白色軽石を含む。
- 5 黒褐色土 白色軽石を少量含む。堅く締まっている。水流ありか。周囲している。
- 6 3に似るが白色軽石極く少量。As を多く含む。黒色土と混じる。
- 7 4と同じ。
- 8 5と同じ。中に7に似る層が入る。
- 9 黄褐色土 黒色土ブロックを含む。

2溝 a-b,c-d,e-f

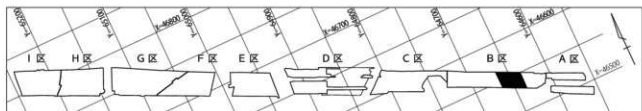
- 1 灰黄褐色土 白色軽石・黄色軽石を含む。動いている土。
- 2 灰黄褐色土 黄白色軽石を含む。締まっている。
- 3 黒色土 黄白色軽石を含む。締まっている。
- 4 濃い黄褐色土 灰黄褐色土ブロック・白色軽石を含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロックを含む。軟。締まりなし。
- 6 明黄褐色土 黒色土ブロックを含む。締まりなし。壁際の崩れた土か。
- 7 黒褐色土 1~2cm程度のロームブロック混入状に入る。56土坑埋没土。

第19図 B区1・2溝

第4章 検出された遺構と遺物



第21図 B区土坑・ピット(2)



- 14土坑
- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。
 - 2 暗褐色土 やや硬く締まる。1よりも明るい。炭化物粒子を少量含む。
 - 3 黄褐色土 やや硬く締まる。ローム主体の層。

- 15土坑
- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
 - 2 黒褐色土 硬く締まり粘性あり。ローム粒子を含む。
 - 3 暗褐色土 やや硬く締まり、粘性あり。ロームブロックを含む。
 - 4 黄褐色土 硬く締まり粘性あり。ロームを多量に含む。

- 23・62土坑・169P
- 1 黄褐色土 やや硬く締まる。粘性あり。ロームを多量に。炭化物粒子を少量含む。
 - 2 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
 - 3 暗褐色土 やや硬く締まり、粘性強い。ロームブロックを含む。
 - 4 茶褐色土 やや硬く締まる。ロームブロック・白色粒子を含む。
 - 5 黒褐色土 白色軽石を含む。
 - 6 1とロームブロックの混在。

- 214P 59坑 60坑
- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ロームを少量含む。
 - 2 黄褐色土 やや軟らかく粘性あり。ロームブロックを多量に含む。
 - 3 に近い黄褐色土 壁に比べて汚れている。締まっている。
 - 4 灰黄褐色土 ブロック状。
 - 5 に近い黄褐色土 ロームブロックを塊状状に含む。締まっている。

- 62土坑
- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム・白色粒子・炭化物粒子を少量含む。
 - 2 黄褐色土 やや軟らかく粘性あり。ロームブロックを多量に含む。
 - 3 に近い黄褐色土 壁に比べて汚れている。締まっている。
 - 4 灰黄褐色土 ブロック状。
 - 5 に近い黄褐色土 ロームブロックを塊状状に含む。締まっている。

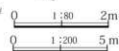
- 11土坑
- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム・白色粒子・炭化物粒子を少量含む。
 - 2 黄褐色土 1よりも軟らかく粘性あり。ロームを多量に含む。

- 7土坑
- 1 暗褐色土 やや軟らかい。ローム・炭化物粒子を少量含む。
 - 2 茶褐色土 やや硬く締まる。ロームを多量に含む。

- 9土坑
- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム・炭化物粒子を少量含む。
 - 2 茶褐色土 やや硬く締まる。粘性あり。ロームを多量に含む。

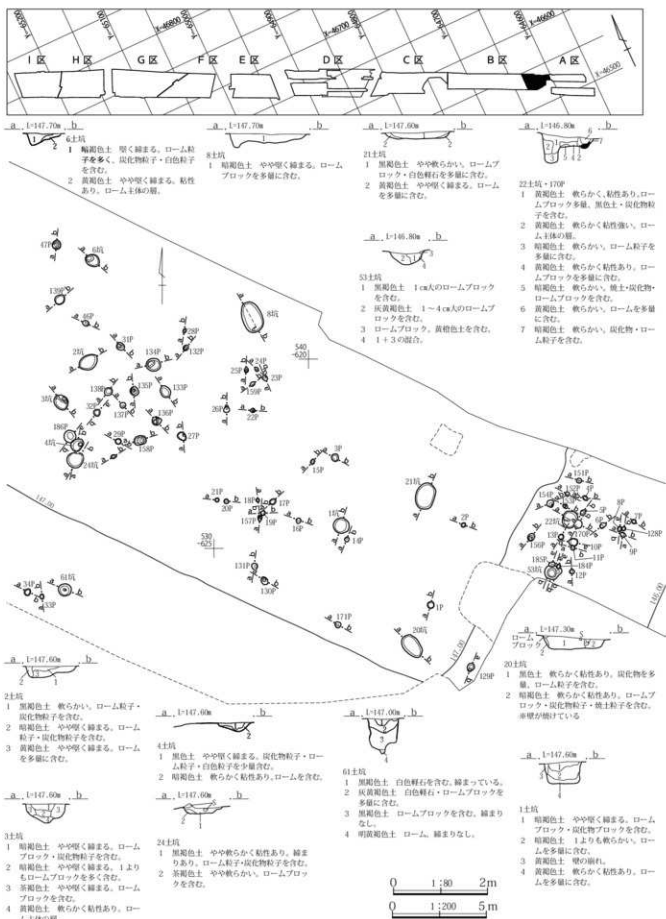
- 65土坑
- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。締まっている。
 - 2 ロームと1の混在。

- 5土坑
- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・炭化物粒子・白色粒子を含む。



第22図 B区土坑・ピット(3)

第4章 検出された遺構と遺物



第23図 B区土坑・ピット(4)



1ビット

- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 やや硬く締まる。ローム多量。炭化物粒子を少量含む。



2ビット

- 1 黄褐色土 やや硬く締まる。ロームを多量。黒色土を含む。



3ビット

- 1 ロームブロック。
- 2 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 3 黄褐色土 2層よりも軟らかい。ロームを多量に含む。



4ビット

- 1 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ローム粒子を含む。



5ビット

- 1 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ロームを多量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性非常にあり。ロームを含む。



6ビット

- 1 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ロームを多量に含む。



7P

7・8ビット

- 1 黄褐色土 軟らかく締まりよい。ロームブロックを含む。



8P



9P

9・10ビット

- 1 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ロームを多量に含む。



10P



11ビット

- 1 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ロームを多量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性非常にあり。ロームを含む。



12ビット

- 1 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロック・炭化物粒子を含む。
- 2 黄褐色土 非常に軟らかく粘性あり。ローム粒子を多量に含む。



13ビット

- 1 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 軟らかく粘性あり。ロームを多量に含む。



14ビット

- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 黄褐色土 硬くすべ。
- 3 暗褐色土 やや硬く締まり粘性あり。ロームブロックを少量含む。



15ビット

- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 暗褐色土 1層よりも軟らかい。ロームブロックを含む。



16ビット

- 1 黒色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 黒色土 1層よりも軟らかく。ローム粒子を多く含む。
- 3 黄褐色土 軟らかい。ローム主体の層。



17ビット

- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・炭化物粒子・白色粒子を含む。
- 2 黄褐色土 やや硬く締まる。粘性あり。ロームを多量に含む。



18ビット

- 1 黒色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 黄褐色土 ローム主体の層。



19～21ビット

- 1 黒色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 黒色土 1層よりも軟らかい。ロームブロックを含む。



21P 20P



22ビット

- 1 黄褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子を多量に含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。



23～25ビット

- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロックを含む。



24P



25P



26P



27ビット

- 1 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒子を含む。
- 2 茶褐色土 やや硬くしまり。粘性あり。
- 3 黄褐色土 ローム主体の層。



28ビット

- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロックを含む。



29ビット

- 1 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 2 暗褐色土 軟らかい。
- 3 茶褐色土 ローム主体の層。



30ビット

- 1 暗褐色土 軟らかい。白色粒子を含む。
- 2 暗褐色土 軟らかい。



31ビット

- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロックを含む。



32ビット

- 1 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 黄褐色土 軟らかい。ローム主体の層。



33P



34P



35P



36ビット

- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 2 暗褐色土 軟らかく粘性あり。ロームブロックを含む。



37ビット

- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土 1層よりも軟らかい。ロームブロックを含む。



38～40ビット

- 1 暗褐色土 やや硬く締まる。ローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土 1層よりも軟らかい。ロームブロックを含む。



39P



40P



41ビット

- 1 暗褐色土 軟らかい。
- 2 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子・白色粒子を含む。
- 3 黄褐色土 軟らかい。ローム主体の層。

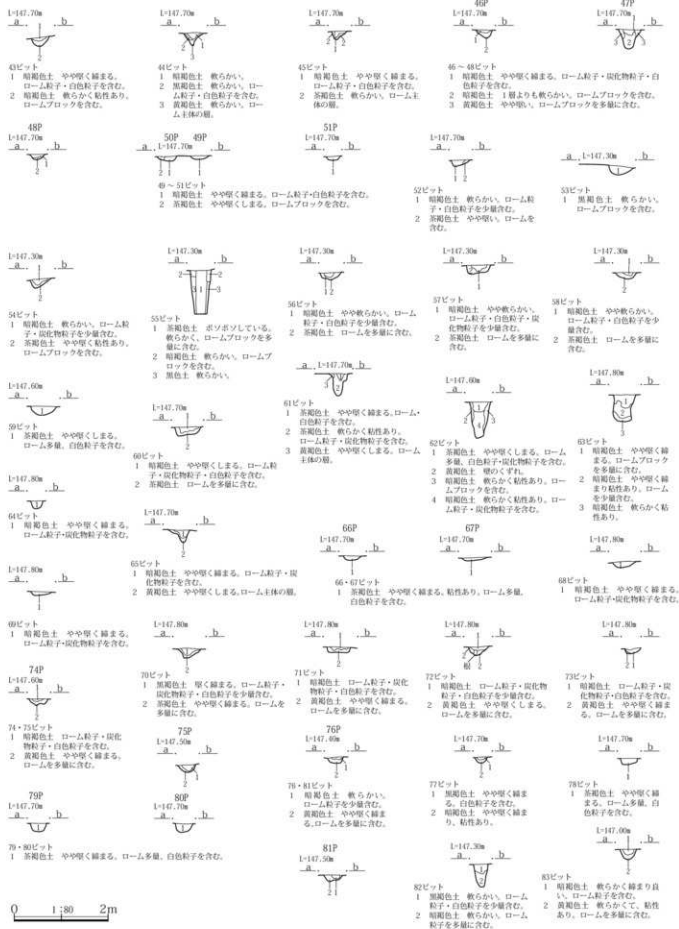


42ビット

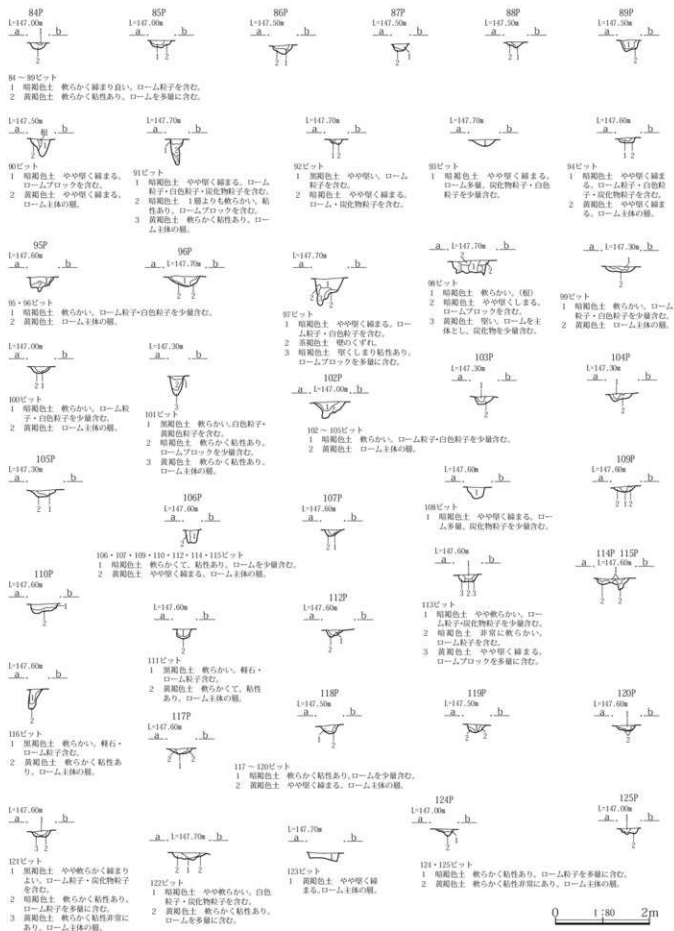
- 1 暗褐色土 軟らかい。ローム粒子を含む。

0 1:80 2m

第4章 検出された遺構と遺物



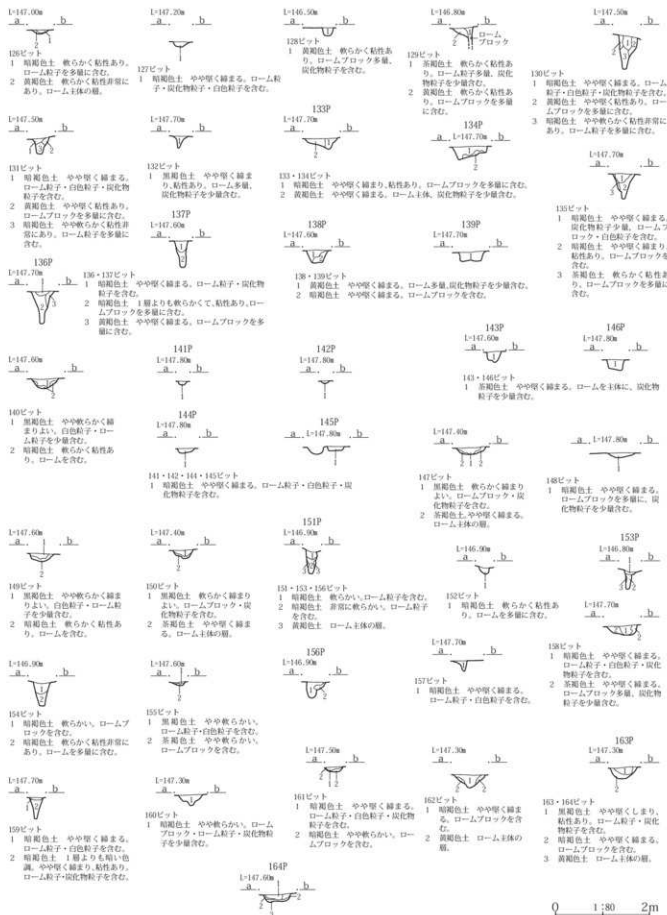
第25図 B区43～83ピット断面図



第26図 B区84~125ビット断面図

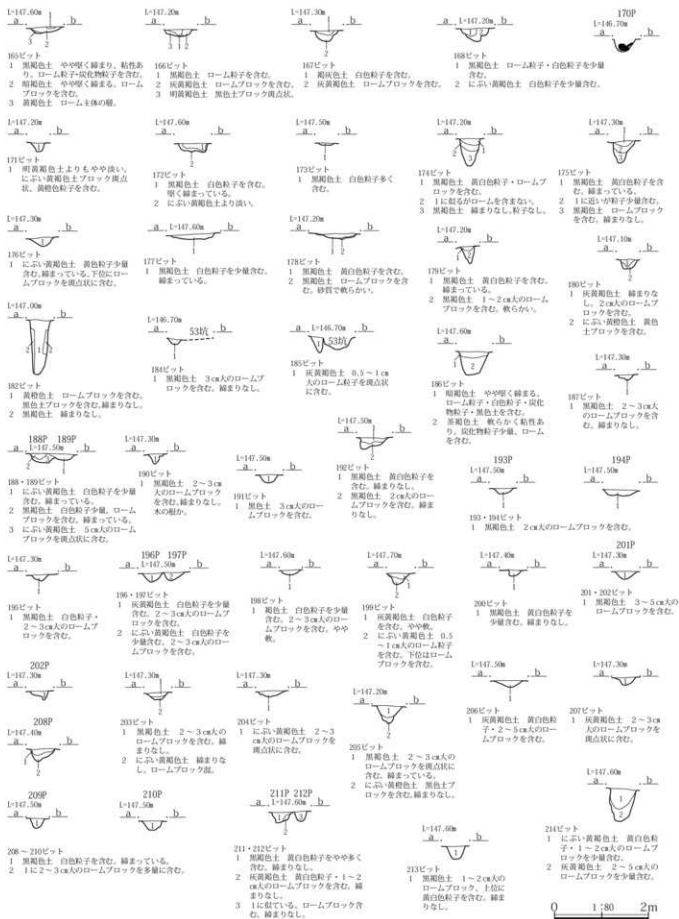
0 1:80 2m

第4章 検出された遺構と遺物



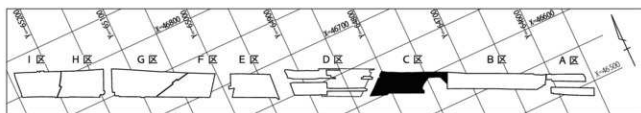
第27図 B区126～164ピット断面図

0 1:80 2m



第28図 B区165~214ビット断面図

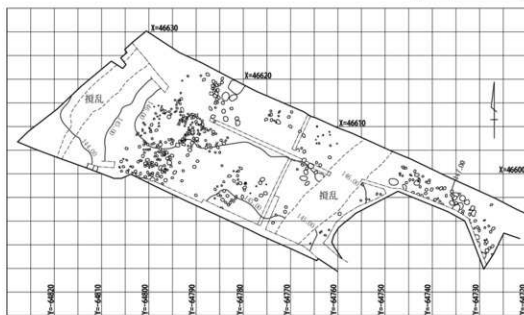
0 1:80 2m



C区1面

C区遺構集計

	1面	2面	小計
土居	3	0	3
掘立建物	5	0	5
溝	13	0	13
土坑	No.1 ~ 70	No.21 ~ 245	245
ピット	118	No.123 ~ 359	359
竪	1	0	1

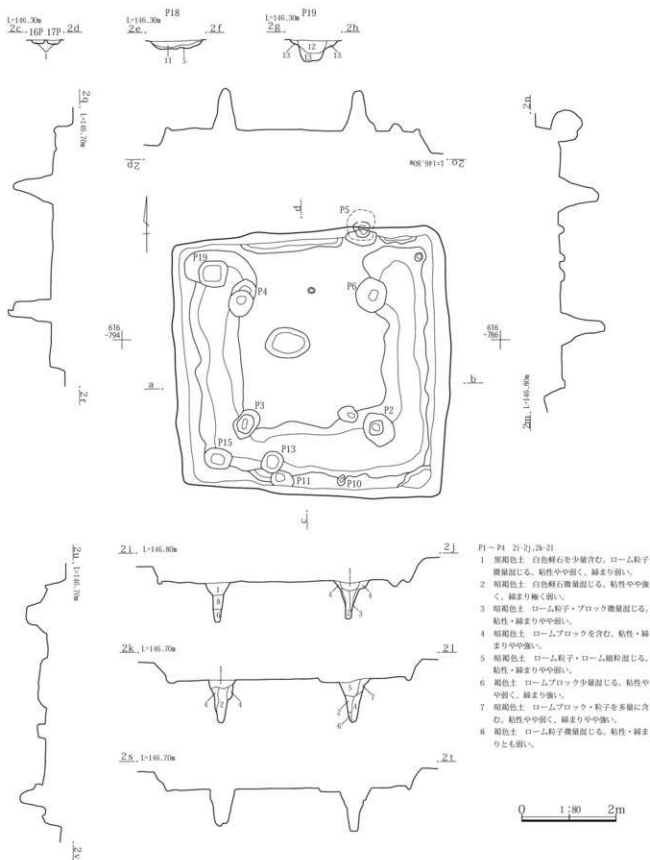


C区2面

0 1:800 40m

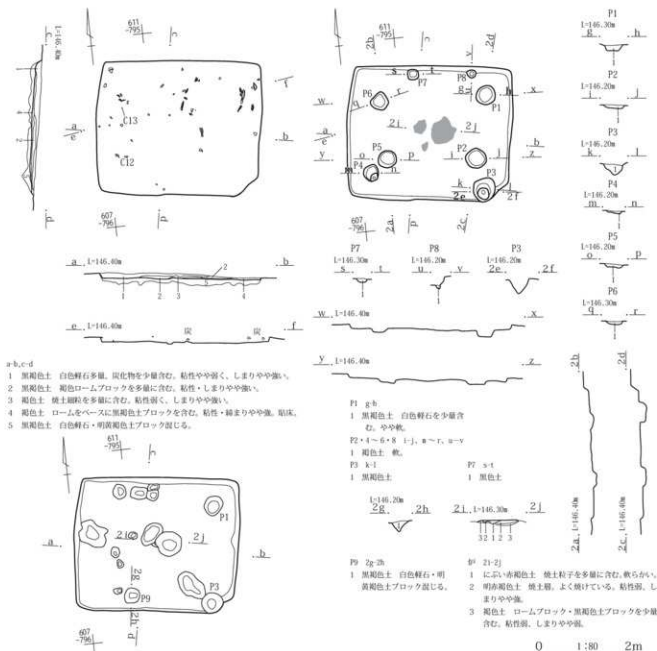
第29図 C区全体図

第4章 検出された遺構と遺物



- P1-P4 2i-2j, 2k-2l
- 1 黒褐色土 白色輝石を少量含む。ローム粒子微量混じる。粘性やや弱く、締まり弱い。
 - 2 暗褐色土 白色輝石微量混じる。粘性やや強く、締まり極く弱い。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・ブロック微量混じる。粘性・締まりやや強い。
 - 4 暗褐色土 ロームブロックを含む。粘性・締まりやや強い。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・ローム細粒混じる。粘性・締まりやや弱い。
 - 6 褐色土 ロームブロック少量混じる。粘性やや弱く、締まり強い。
 - 7 暗褐色土 ロームブロック・粒子を多量に含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 - 8 褐色土 ローム粒子微量混じる。粘性・締まりとも弱い。

第31図 C区1住居(2)



a, b, c, d

- 1 黒褐色土 白色軽石を多量、炭化物を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
- 2 黒褐色土 褐色ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりやや強い。
- 3 黒褐色土 黄土細砂を多量に含む。粘性弱く、しまりやや強い。
- 4 黒褐色土 ロームをベースに黒褐色土ブロックを含む。粘性・締まりやや強い。暗床。
- 5 黒褐色土 白色軽石・明黒褐色土ブロック混じる。

- P1 g, b
1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。やや軟。
- P2 1-6・8 1-1, a-r, s-u
1 黒褐色土 軟。
- P3 k-1
1 黒褐色土
- P7 s-t
1 黒褐色土

- P9 2g, 2h
1 黒褐色土 白色軽石・明黒褐色土ブロック混じる。
- P10 2i-2j
1 にふい・赤褐色土 黄土粒子を多量に含む。軟らかい。
2 明赤褐色土 黄土層。よく焼けている。粘性弱。しまりやや強い。
3 褐色土 ロームブロック・黒褐色土ブロックを少量含む。粘性弱。しまりやや強い。

3住居外P w-x

- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。ロームブロックを少量含む。粘性やや弱く、締まり強い。
- 2 黒褐色土 白色軽石・ローム粒を少量含む。粘性・締まり弱い。
- 3 黒褐色土 白色軽石・ローム粒を少量含む。粘性・締まり強い。
- 4 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- 5 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘性・締まりやや強い。

外P y-z

- 外P1 y-z
1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性・締まりやや強い。

外P2 1-j

- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、締まり強い。
- 2 黒褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む。粘性やや弱く、締まり強い。
- A 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘性やや強い。壁溝に切られるため、床面より古くなる。

外P4 k-1

- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- 2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。粘性・締まりやや強い。1とは別ビット。往戻より古い。

外P5 2a-2b

- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、締まり強い。
- 2 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。粘性・締まりやや強い。

3住居外P 2c-2d

- 1 暗褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- 2 褐色土 粘性やや強く、締まり強い。地山の。
- 3 暗褐色土 粘性・締まりやや強い。地山の。

外P 2e-2f

- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- 2 黒褐色土 粘性・締まりやや強い。

外P 2g-2h

- 外P 2g-2h
1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性・締まりやや強い。

外P 2i-2j

- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- 2 黒褐色土 粘性・締まりやや強い。

外P 2k-2l

- 外P 2k-2l
1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性・締まりやや強い。

外P 2m-2n

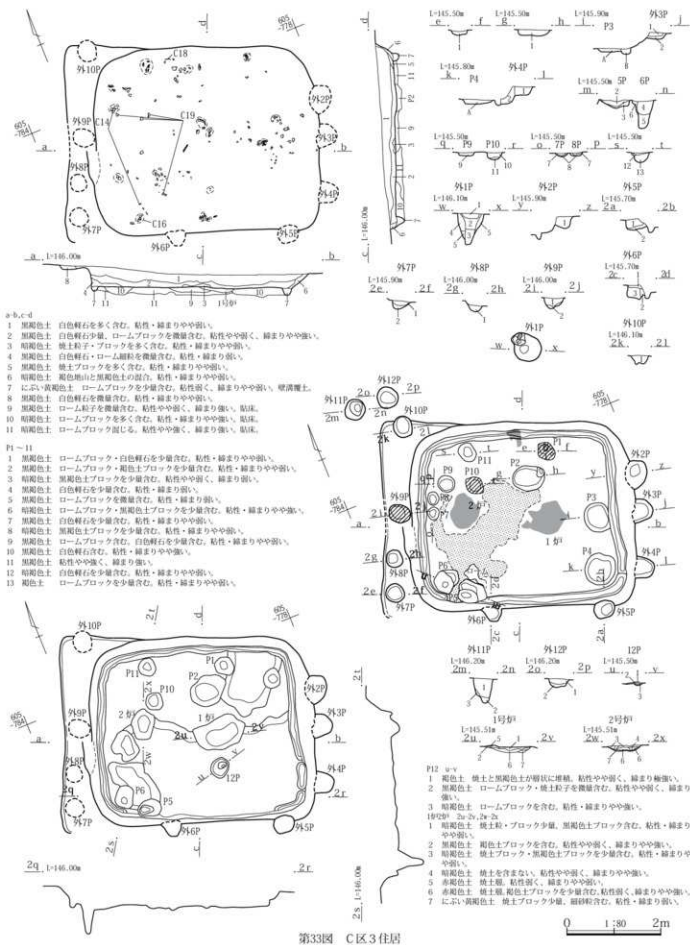
- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- 2 黒褐色土 粘性・締まりやや強い。
- 3 暗褐色土 粘性・締まりやや強い。地山に混る。

外P 2o-2p

- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- 2 黒褐色土 暗褐色土ブロックを含む。粘性・締まりやや強い。

第32図 C区2住居、3住居外ビット土層

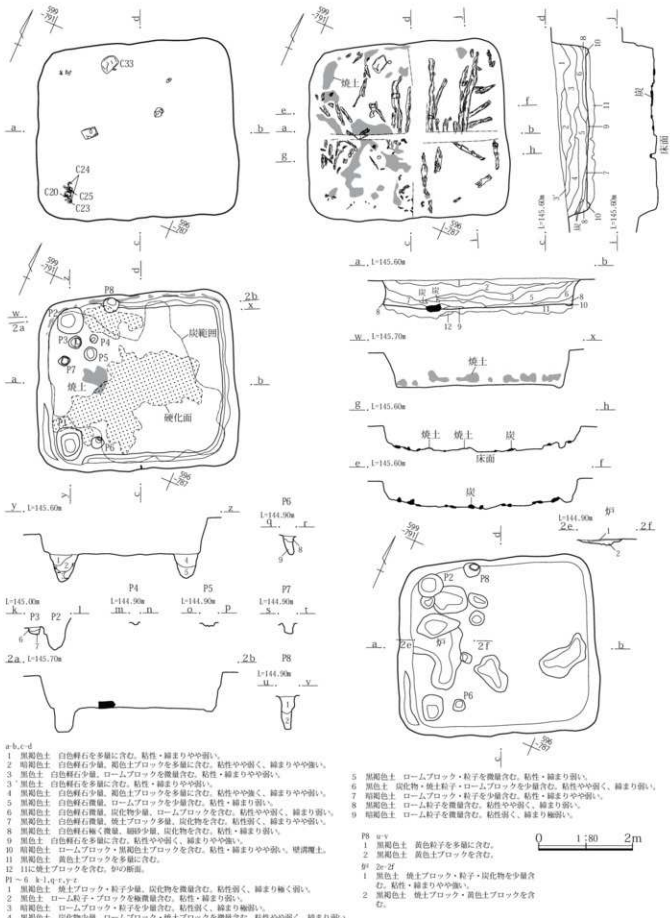
第4章 検出された遺構と遺物



- a, b, c, d
- 1 黒褐色土 白色軽石を多く含む。粘性・締まりやや弱い。
 - 2 黒褐色土 白色軽石少量。ロームブロックを微量含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 - 3 暗褐色土 焼土粒子・ブロックを多く含む。粘性・締まりやや強い。
 - 4 黒褐色土 白色軽石・ローム細粒を微量含む。粘性・締まり弱い。
 - 5 黒褐色土 焼土ブロックを多く含む。粘性・締まりやや弱い。
 - 6 暗褐色土 褐色地山と黒褐色土の混合。粘性・締まりやや弱い。硬質礫土。
 - 7 に云・黄褐色土 ロームブロックを少量含む。粘性弱く、締まり弱い。
 - 8 黒褐色土 白色軽石を微量含む。粘性・締まりやや弱い。
 - 9 黒褐色土 ローム粒子を微量含む。粘性やや弱く、締まり強い。
 - 10 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。粘性・締まりやや強い。粘床。
 - 11 暗褐色土 ロームブロック混じり。粘性やや強く、締まり強い。
- P1~11
- 1 黒褐色土 ロームブロック・白色軽石を少量含む。粘性・締まりやや弱い。
 - 2 黒褐色土 ロームブロック・褐色土ブロックを少量含む。粘性・締まりやや弱い。
 - 3 暗褐色土 黒褐色土ブロックを少量含む。粘性やや弱く、締まり強い。
 - 4 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性・締まり弱い。
 - 5 黒褐色土 ロームブロックを微量含む。粘性・締まり強い。
 - 6 暗褐色土 ロームブロック・黒褐色土ブロックを少量含む。粘性・締まりやや強い。
 - 7 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性・締まりやや弱い。
 - 8 暗褐色土 黒褐色土ブロックを少量含む。粘性・締まりやや強い。
 - 9 黒褐色土 ロームブロックを含む。白色軽石を少量含む。粘性・締まりやや弱い。
 - 10 黒褐色土 白色軽石を含む。粘性・締まり強い。
 - 11 黒褐色土 粘性やや強く、締まり強い。
 - 12 暗褐色土 白色軽石を少量含む。粘性・締まりやや弱い。
 - 13 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。粘性・締まりやや弱い。

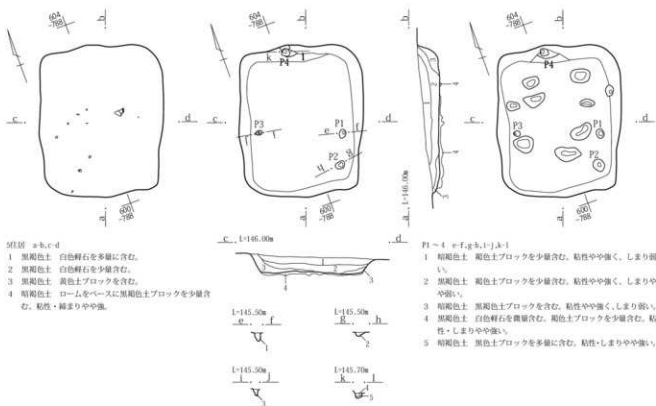
- P12 ~ v
- 1 黒褐色土 焼土と黒褐色土が層状に堆積。粘性やや弱く、締まり極強い。
 - 2 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性やや弱く、締まり強い。
 - 3 暗褐色土 ロームブロックを含む。粘性・締まりやや強い。
 - 1000P 2a, 2b, 2c, 2d
 - 1 暗褐色土 焼土・ブロック少量。黒褐色土ブロックを含む。粘性・締まりやや弱い。
 - 2 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 - 3 暗褐色土 焼土ブロック・黒褐色土ブロックを少量含む。粘性・締まりやや弱い。
 - 4 暗褐色土 焼土を含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 - 5 赤褐色土 焼土。粘性弱く、締まりやや強い。
 - 6 赤褐色土 焼土。褐色土ブロックを少量含む。粘性弱く、締まりやや強い。
 - 7 に云・黄褐色土 焼土ブロック少量。細粒砂を含む。粘性・締まり弱い。

第33図 C区3住居

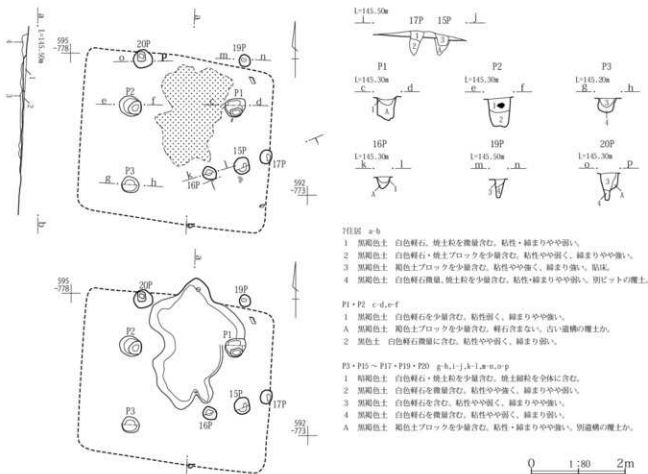


第34図 C区4住居

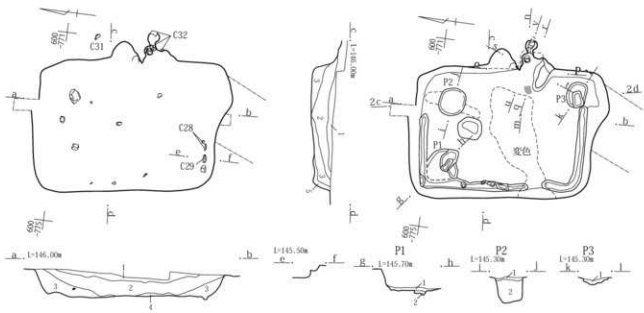
第4章 検出された遺構と遺物



7住居



第35図 C区5・7住居



a-b, c-d

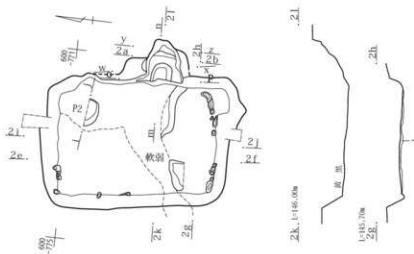
- 1 黒色土 白色軽石を多量に含む。
- 2 黒褐色土 白色軽石を含む。1に比べ黄色味あり。
- 3 黒色土 白色軽石を少量含む。
- 4 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 5 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。

P1 g-h

- 1 褐色土
 - 2 黄褐色土
- P2 i-j
- 1 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。
 - 2 黒色土 下層の土坑層土。
- P3 k-l
- 1 褐色土 黄色土ブロックを多量に含む。

2c, 1:146.00m

.2d



掘り方 2c-29, 2e-2f

- 1 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。表面は堅く締まっている。床面を形成する土。取戻。
- 2 黒色土 軽石を含まない。軟らかい。上面に自然床面の破断した明い面がある。

21, 1:146.00m

.21

1:145.00m

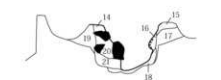
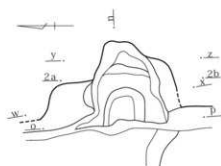
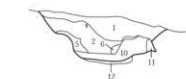
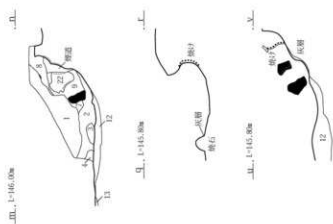
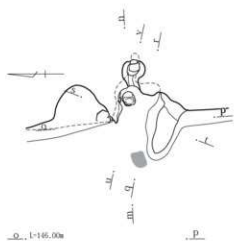
2e.

.2f

0 1:80 2m

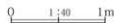
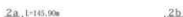
第36図 C区6住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物

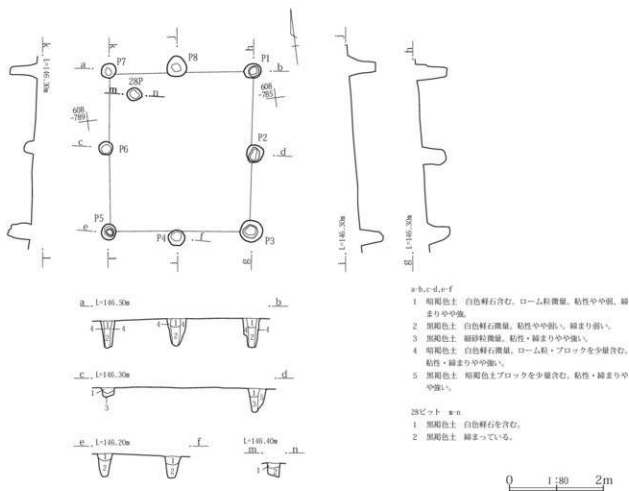
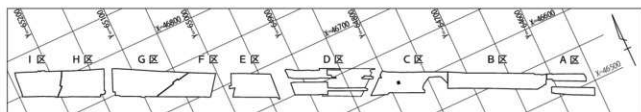


※6, 9, 9, 9, 9, 9, 9

- 1 黒褐色土 焼土粒を少量、白色輝石を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 2 黒褐色土 焼土ブロック・粒を含む。粘性やや弱く、しまり弱い。
- 3 黒褐色土 焼土粒・炭化物・褐色土ブロックを少量含む。粘性・しまり弱い。
- 4 黒褐色土 焼土ブロックを含む。粘性・しまりやや強い。
- 5 黒褐色土 炭化物を多量に含む。
- 6 2に近いが、焼土ブロックを多量に含む。
- 7 に近い黄褐色土 黄白色粘土ブロック・焼土粒を含む。文面編理段土。
- 8 に近い黄褐色土 焼土粒を多量に含む。カマド煙道の埋設土。
- 9 2に似るが、焼土多い。
- 10 に近い黄褐色土 焼土ブロックを含む。カマド施設部。
- 11 黒褐色土 黄色土ブロック・カマド粘土ブロックを含む。
- 12 黒褐色土 灰多量、焼土粒を含む。カマド底部の灰層。
- 13 黒褐色土 住居床面を形成する厚い層。
- 14 明黄褐色土 焼土粒を少量含む。カマド左端粘土。下に礫石。
- 15 黒褐色土 黄色土ブロック(カマド粘土)・焼土粒を少量含む。
- 16 黒褐色土 焼土ブロック多量、炭化物を含む。
- 17 黒褐色土 焼土粒を少量含む。地山に近い。
- 18 黒褐色土 炭化物多量、焼土粒を少量含む。カマド底面～側面。
- 19 に近い黄褐色土 黄色土ブロック・焼土粒を含む。カマド左端の一部。
- 20 7に似る。
- 21 2に同じ。
- 22 2に似るが、焼けて固くしまっている。



第37図 C区6住居(2)



第38図 C区I掘立柱建物

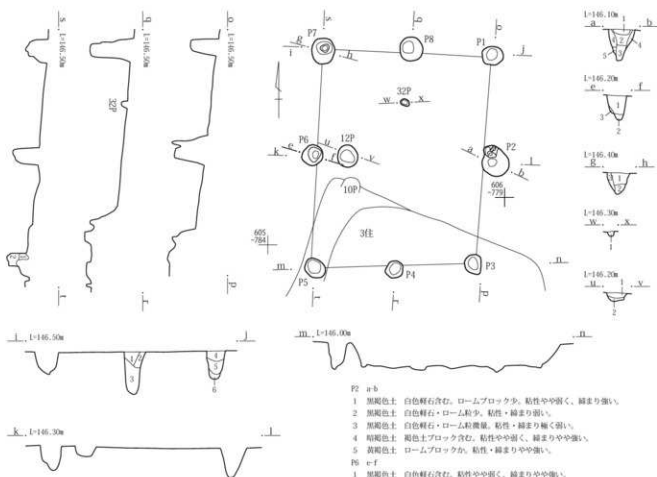
第7表 C区I掘立柱建物計測表

平面形 長方形		規模 2間×2間		長軸方位N-7°-E				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	屋根				
				番号	上ノミ長径×短径	下ノミ長径×短径	深さ cm	備考
P1-P3:338	P1-P2:307	P1-P2:177	P1-P8:163	1	33×31	17×14	69	
P8-P4:356	P2-P6:313	P2-P3:162	P8-P7:144	2	38×35	24×9	52	
P9-P3:339	P3-P5:298	P7-P6:164	P3-P2:157	3	42×40	24×20	51	
		P6-P9:177	P4-P5:142	4	35×32	22×19	50	
				5	33×30	13×10	49	
				6	30×28	20×18	23	
				7	32×30	16×13	58	
				8	44×41	21×17	61	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値

※2 柱穴間の距離は志々で計測

第4章 検出された遺構と遺物



- P5 s-t
- 1 黒褐色土 白色軽石を多く含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 - 2 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性・締まり弱い。
- P1・P8・窓ビツト t-j, w-x
- 1 黒褐色土 白色軽石を多く含む。
 - 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。
 - 3 2に似るがローム粒子多い。
 - 4 黒褐色土 白色軽石を含む。
 - 5 黒褐色土
 - 6 黒褐色土 ローム粒子多い。

- P2 a-b
- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。ロームブロック少。粘性やや弱く、締まり強い。
 - 2 黒褐色土 白色軽石・ローム粘土。粘性・締まり弱い。
 - 3 黒褐色土 白色軽石・ローム粘壤土。粘性・締まり弱い。
 - 4 暗褐色土 褐色土ブロックを含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 - 5 黄褐色土 ロームブロックか。粘性・締まりやや強い。
- P6 e-f
- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 - 2 黒褐色土 粘性・締まりやや弱い。
 - 3 暗褐色土 粘性・締まりやや弱い。地山に似る。
- P7 g-h
- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。粘性やや弱く、締まり弱い。
 - 2 黒褐色土 白色軽石を微量含む。粘性弱く、締まり弱い。
 - 3 黒褐色土 ロームブロックを微量含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- P12 u-v
- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 - 2 黒褐色土 暗褐色土ブロックを含む。粘性・締まりやや強い。

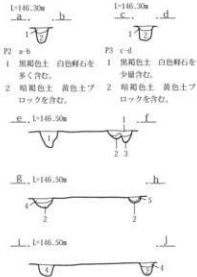
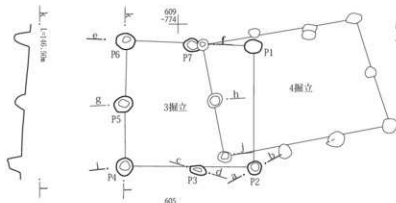


第39図 C区2掘立柱建物

第8表 C区2掘立柱建物計測表

平面形 長方形				掘幅 2間×2間		柱軸方位N-3°-E			
前行 cm	後行 cm	前行柱間 cm	後行柱間 cm	番号	上×cm(柱径×間径)	下×cm(柱径×間径)	埋込cm	備考	
P1-P3: 442	P1-P7: 353	P1-P2: 228	P1-P8: 178	1	46×39	28×22	63		
P6-P4: 468	P2-P6: 373	P2-P3: 217	P6-P7: 176	2	69×55	19×18	70		
P7-P5: 464	P3-P6: 336	P7-P6: 206	P3-P4: 165	3	41×38	28×20	42	3E/F1	
		P6-P5: 239	P4-P5: 172	4	38×37	22×21	30	3E/F1D	
				5	48×37	32×27	26	6, 2, 10P	
				6	65×41	19×12	58	6, 2, 11P	
				7	55×49	113×19	49	6, 2, 14P	
				8	30×48	25×24	94		

#1 計測値は1/20間隔から起こした数値
 #2 柱穴間の距離は志で計測



四～七 e, f, g, h, i, j

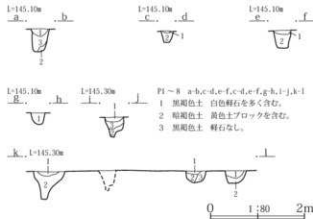
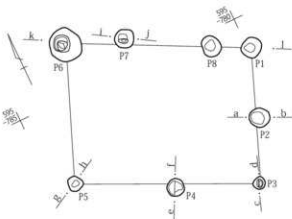
- 1 黒色土 白色輝石を多く含む。
- 2 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。軟らかい。
- 3 2よりも黄色土ブロック多い。
- 4 黒色土 白色輝石を少量含む。
- 5 黒褐色土 白色輝石を多く含む。

第9表 C区3掘立柱建物計測表

平面形	長方形	幅	2間×2間	長軸方位N-87°-W				
				幅	番号	上ノcm径柱×短柱	下ノcm径柱×短柱	深さcm
P1-P6: 268	P1-P2: 258	P1-P7: 129	P6-P5: 135	1	38×30	23×30	37	
P2-P4: 277	P7-P3: 283	P7-P6: 139	P5-P4: 132	2	30×28	18×17	35	もと3P
	P6-P4: 267	P2-P3: 122		3	38×20	18×7	39	もと3P
		P3-P4: 155		4	38×35	21×19	27	
				5	40×33	25×16	24	
				6	40×34	16×13	33	
				7	-×29	-×18	15	

※1 計測値は1/20縮図から起こした数値

※2 柱ノ間の距離は志々で計測



四～八 a, b, c, d, e, f, g, h, i, j, k, l

- 1 黒褐色土 白色輝石を多く含む。
- 2 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 輝石なし。

第10表 C区5掘立柱建物計測表

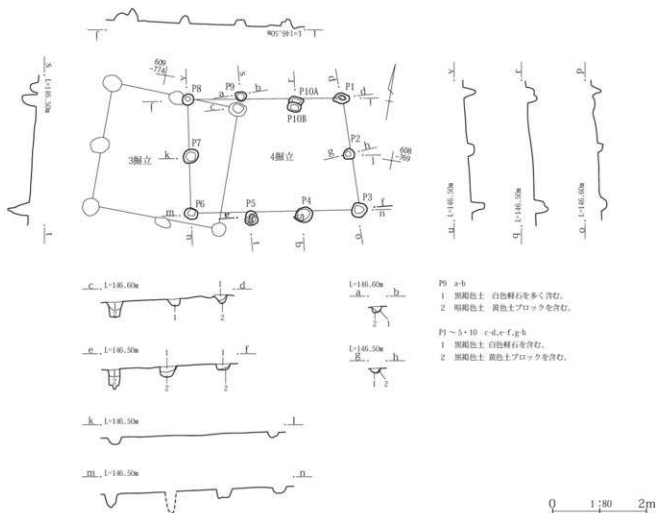
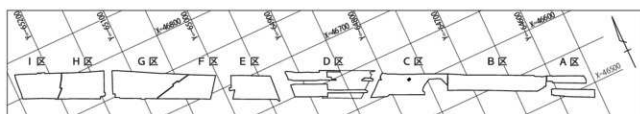
平面形	長方形	幅	2間×2間	長軸方位N-64°-W				
				幅	番号	上ノcm径柱×短柱	下ノcm径柱×短柱	深さcm
P1-P6: 400	P1-P3: 289	P1-P8: 85	P1-P2: 150	1	45×43	23×19	30	
P3-P5: 294	P6-P5: 294	P8-P7: 185	P2-P3: 140	2	44×41	31×26	52	
		P7-P6: 133		3	27×26	13×6	25	
		P3-P4: 182		4	38×37	29×25	38	
		P4-P5: 211		5	33×31	17×12	25	
				6	72×67	18×10	60	
				7	43×41	9×6	53	
				8	45×38	24×22	31	

※1 計測値は1/20縮図から起こした数値

※2 柱ノ間の距離は志々で計測

第40図 C区3・5掘立柱建物

第4章 検出された遺構と遺物

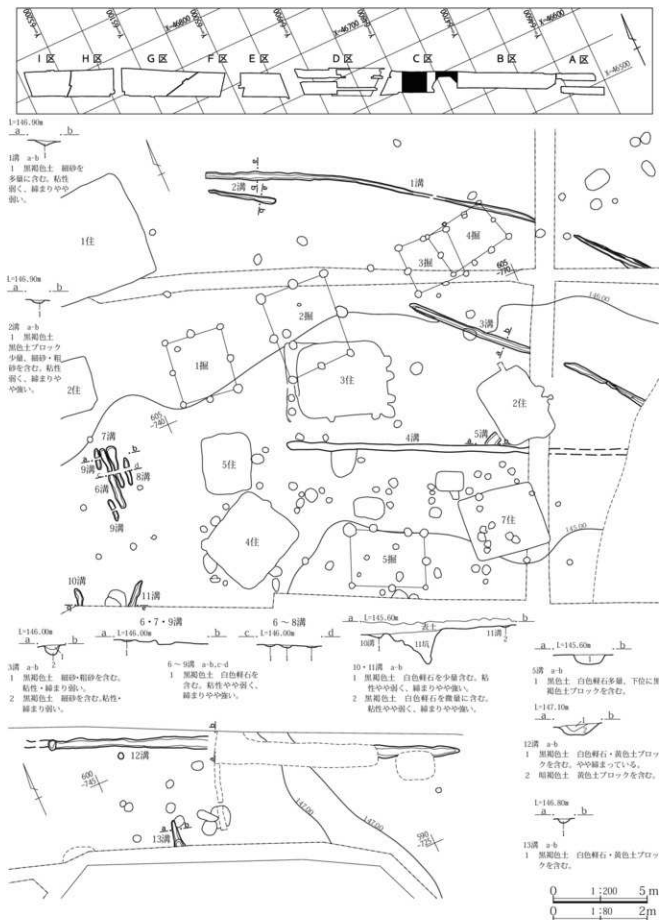


第11表 C区4号掘立柱建物計測表

平面形 長方形		間隔 3間×2間		方位方位N-90°-E					
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	間隔	高さ	L×cm長径×短径	下×cm長径×短径	深さ cm	備考
P1-P8: 327	P1-P3: 239	P1-P10A: 98	P1-P2: 120	1	35×23	9×8	20		
P2-P7: 331	P10A-P4: 239	P1-P10B: 103	P2-P3: 120	2	24×23	12×12	12		
P3-P6: 354	P10B-P4: 226	P10A-P9: 118	P8-P7: 121	3	33×30	21×17	15		
	P9-P5: 259	P10B-P9: 116	P7-P6: 120	4	37×31	27×23	23		
	P8-P6: 240	P9-P8: 112		5	31×27	16×3	68		
		P3-P4: 117		6	29×23	18×15	29		
		P4-P5: 113		7	34×29	20×20	16		
		P5-P6: 125		8	25×24	12×9	27		
				9	25×20	16×14	16		もとは3P
				10A	32×-	19×-	19		
				10B	29×20	18×12	23		

※1 計測値は1/20倍図から起こした数値

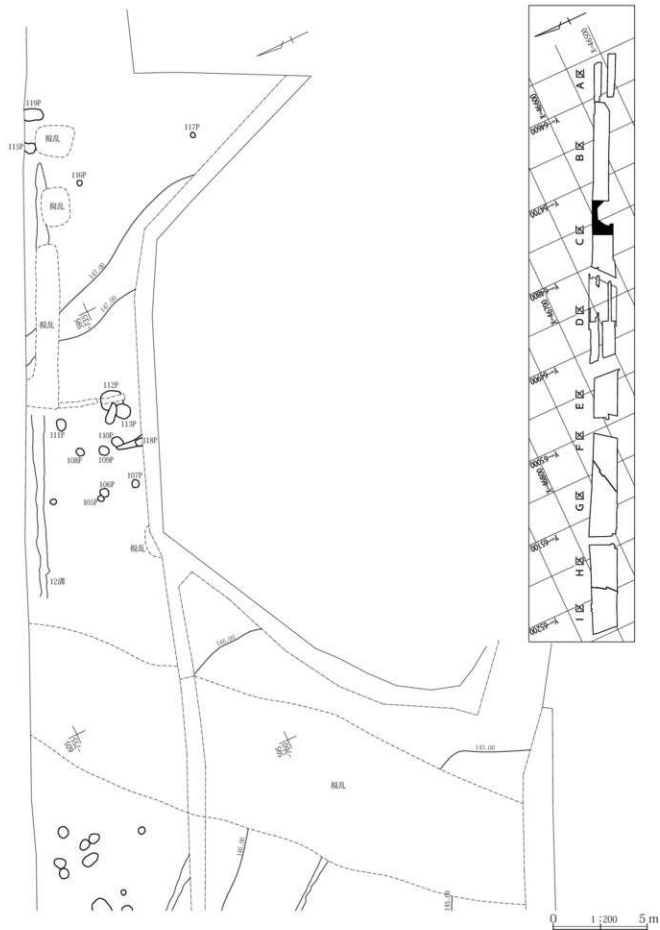
※2 柱穴間の距離は志々々で測



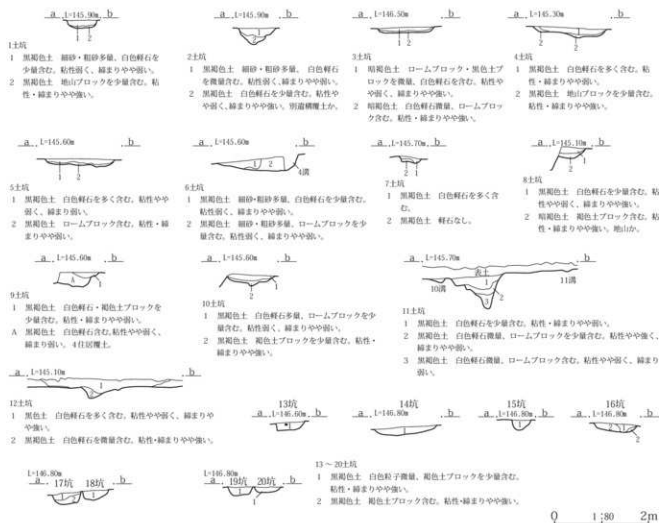
第42図 C区溝

第4章 検出された遺構と遺物





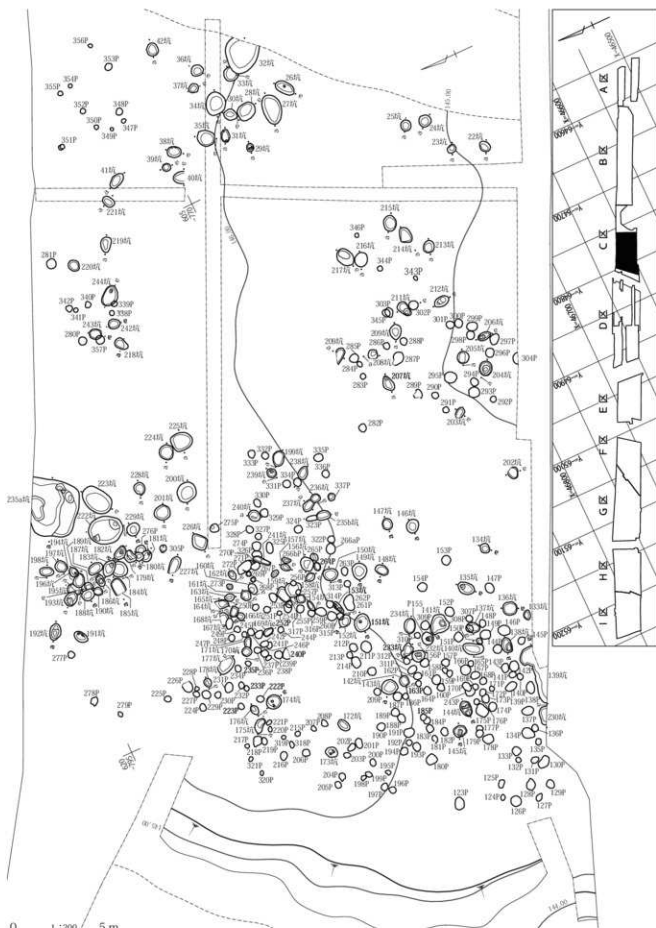
第4章 検出された遺構と遺物



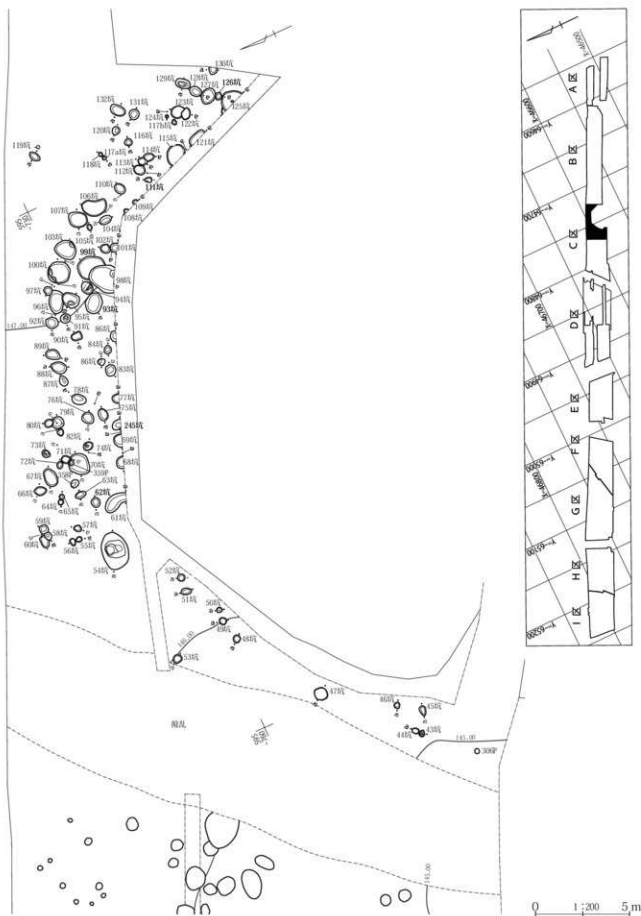
第45図 C区1面土坑断面図

第12表 C区1面土坑計測表

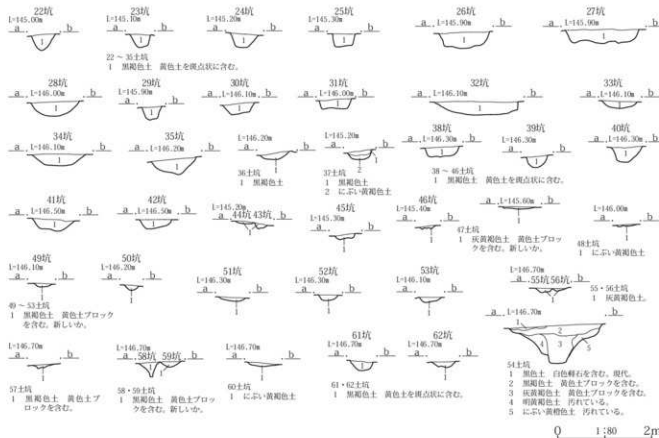
番号	遺構	区	確認	掘り位置	X-Y	重複関係	目-新	長×短(深)(cm)	遺物目録	破片	時期・時代	備考
1	土坑	C	1	602-776				68×62×20		土器I		
2	土坑	C	1	599-772		2坑→6坑		81×63×40				
3	土坑	C	1	610-795		2坑と重複		122×90×16				
4	土坑	C	1	596-782				162×113×41		土器I		
5	土坑	C	1	596-777		6坑→5坑		149×103×20		縄文不明		
6	土坑	C	1	599-782		5坑と重複		132×32				
7	土坑	C	1	598-790		4坑→7坑		61×50×16		土器I		
8	土坑	C	1	595-787		4坑と重複		55×33				
9	土坑	C	1	599-787		4坑→7坑		62×54×16		土器I		土器露外面刷毛目
10	土坑	C	1	597-790		4坑と重複		110×70×34		土器I		
11	土坑	C	1	597-796				111×86				
12	土坑	C	1	591-782				88×31				
13	土坑	C	1	606-764				60×50×27		縄文不明		
14	土坑	C	1	607-764				133×89×21				
15	土坑	C	1	607-759				60×53×26				
16	土坑	C	1	607-761				91×31×21				
17	土坑	C	1	606-760				61×68×27				
18	土坑	C	1	607-760				58×68×22				
19	土坑	C	1	608-761				53×69×21				
20	土坑	C	1	608-760				62×50×16				



第46図 C区2面土坑・ピット位置図(1)



第47図 C区2面土坑・ピット位置図(2)

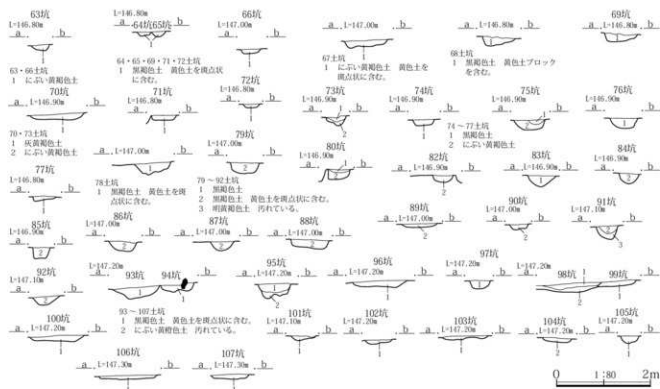


第48図 C区2面土坑断面図(1)

第13表 C区2面土坑計測表(1)

番付	遺構	区	緯経度	出土位置	1-1	垂径(単位)	径×深(単位)	遺物登録	备注	時期・時代	備考
21	土坑	C	1	565							
22	土坑	C	2	589-773			63×31×40				
23	土坑	C	2	591-773			50×42×34				
24	土坑	C	2	592-771			64×64×47				
25	土坑	C	2	593-771			58×34×33				
26	土坑	C	2	596-766			108×60×47				
27	土坑	C	2	599-767			158×98×31				
28	土坑	C	2	600-766			103×85×32				
29	土坑	C	2	600-768			43×37×42				
30	土坑	C	2	601-766			70×60×28				
31	土坑	C	2	601-767			67×45×21				
32	土坑	C	2	599-763	33坑→32坑		176×18		土壁跡1.横文不明2		
33	土坑	C	2	600-764	33坑→32坑		75×27				
34	土坑	C	2	601-765			123×102×26				
35	土坑	C	2	602-767			96×82×37				
36	土坑	C	2	601-763			65×60×17				
37	土坑	C	2	602-764			51×49×23				
38	土坑	C	2	604-767			72×58×21				
39	土坑	C	2	605-767			44×41×25				
40	土坑	C	2	605-768			65×33				
41	土坑	C	2	608-767			91×54×27				
42	土坑	C	2	603-761			68×60×22				
43	土坑	C	2	587-763			30×33×12				
44	土坑	C	2	587-763			38×30×7				
45	土坑	C	2	587-762			53×34×18				
46	土坑	C	2	588-761			35×31×14		横文不明1		
47	土坑	C	2	591-759			67×62×9				
48	土坑	C	2	594-755			42×37×7				
49	土坑	C	2	594-754			40×38×10				
50	土坑	C	2	594-753			30×27×13				
51	土坑	C	2	587-763			51×36×12				
52	土坑	C	2	599-750			40×32×15				
53	土坑	C	2	597-754			47×43×10				
54	土坑	C	2	598-747			195×137×98				
55	土坑	C	2	599-746			34×26×9				
56	土坑	C	2	600-746			41×28×9				
57	土坑	C	2	599-746			42×35×8				
58	土坑	C	2	601-749	59+60坑→58坑		43×35×24				
59	土坑	C	2	601-745	58坑→59坑		50×49×13				
60	土坑	C	2	601-746	60坑→58坑		67×45×5				
61	土坑	C	2	597-745			70×15				
62	土坑	C	2	598-745			52×46×14				

第4章 検出された遺構と遺物

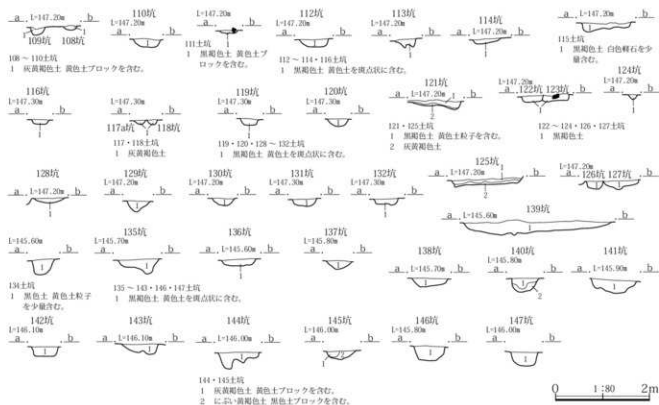


第49図 C区2面土坑断面図(2)

第14表 C区2面土坑計測表(2)

番付	遺構	区	確認地	検出位置 X・Y	重複関係 旧・新	長×幅×深(cm)	遺物付録	破片	時期・時代	備考
63	土坑	C	2	598-744		49×35×14				
64	土坑	C	2	599-744		30×28×9				
65	土坑	C	2	599-744		30×27×13				
66	土坑	C	2	600-743		65×57×10				
67	土坑	C	2	599-743		98×67×21				
68	土坑	C	2	596-744		68×18				
69	土坑	C	2	595-743		70×17				
70	土坑	C	2	598-743	706坑→71坑, 359坑→70坑	117×105×24			前期末葉～中期初頭	
71	土坑	C	2	598-742	706坑→71坑, 359坑→71坑	54×41×12				
72	土坑	C	2	599-742		40×31×8				
73	土坑	C	2	597-742		47×37×15				
74	土坑	C	2	597-742		54×53×24				
75	土坑	C	2	595-741		96×68×24				
76	土坑	C	2	596-741		67×57×24				
77	土坑	C	2	594-740		52×18				
78	土坑	C	2	596-740		77×55×24				
79	土坑	C	2	598-740	796坑→80坑	68×62×26				
80	土坑	C	2	598-740	796坑→80坑	49×42×25				
81	土坑	C	2	598-741		39×34×14				
82	土坑	C	2	594-739		61×57×25				
83	土坑	C	2	594-738		46×38×21				
84	土坑	C	2	594-738		40×37×27				
85	土坑	C	2	593-737		59×11				
86	土坑	C	2	597-739		57×42×21				
87	土坑	C	2	597-738		40×41×23				
88	土坑	C	2	597-737		80×65×10				
89	土坑	C	2	595-734		58×41×13				
90	土坑	C	2	595-736		53×47×29				
91	土坑	C	2	596-735		69×60×18				
92	土坑	C	2	593-735		111×86×26				
93	土坑	C	2	593-735		70×59×27				
94	土坑	C	2	594-735		95×75×33				
95	土坑	C	2	595-735	96坑→95坑	122×75×19				
96	土坑	C	2	599-734	96坑→95坑, 97坑	46×45×14				
97	土坑	C	2	592-734	96坑→95坑	146×33				
98	土坑	C	2	593-734	99坑→98坑	145×14				
99	土坑	C	2	593-734	99坑→98坑	121×118×113				
100	土坑	C	2	594-733		50×10				
101	土坑	C	2	592-733		54×49×8				
102	土坑	C	2	594-732		115×99×17				
103	土坑	C	2	592-732		69×43×14				
104	土坑	C	2	592-732		36×25×19				
105	土坑	C	2	591-731		132×81×10				前期末葉～中期初頭、 破文不明
106	土坑	C	2	591-731		105×81×17				
107	土坑	C	2	591-731						

遺構図 (C区)

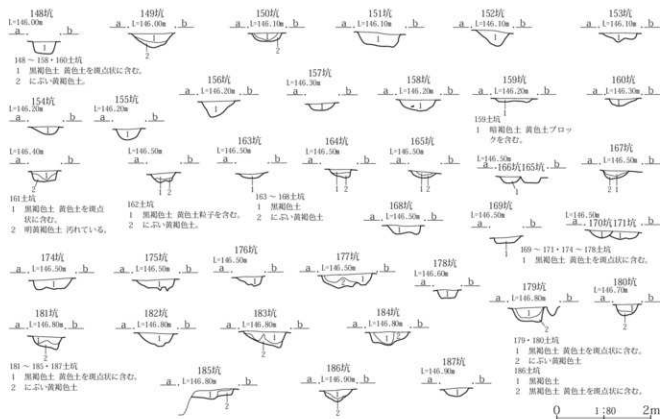


第50図 C区2面土坑断面図(3)

第15表 C区2面土坑計測表(3)

番号	遺構	区	確認者	検出位置	X・Y	遺構関係	目・新	長×短×深(cm)	遺物登録	照片	時期・時代	備考
108	土坑	C	2	590-732				29×7				
109	土坑	C	2	589-731				29×15				
110	土坑	C	2	590-731				62×50×17				
111	土坑	C	2	588-731				40×26×10				
112	土坑	C	2	588-730				63×50×17				
113	土坑	C	2	588-730		114坑-112坑		49×42×18				
114	土坑	C	2	588-730		114坑-113坑		55×44×9				
115	土坑	C	2	588-730				112×11		断面後装1		
116	土坑	C	2	588-728				41×40×11				
117a	土坑	C	2	590-729				23×20×9				
117b	土坑	C	2	588-729				30×25×18				
118	土坑	C	2	590-728				25×21×9				
119	土坑	C	2	593-727				64×40×14				
120	土坑	C	2	588-728				45×40×17				
121	土坑	C	2	585-730				106×14				
122	土坑	C	2	585-728		123坑-122坑		64×47×13				
123	土坑	C	2	585-728		123坑-122坑		78×64×14				
124	土坑	C	2	588-728				18×17×9				
125	土坑	C	2	583-728				42×35×22				
126	土坑	C	2	582-729				15×26				
127	土坑	C	2	583-728				63×70×20				
128	土坑	C	2	588-728				66×51×13				
129	土坑	C	2	589-727				79×50×19				
130	土坑	C	2	588-727				44×12				
131	土坑	C	2	582-727				56×52×18				
132	土坑	C	2	588-727				82×54×14				
133	土坑	C	2	598-797				52×36×11				
134	土坑	C	2	598-793				56×50×37				
135	土坑	C	2	600-794				91×60×36				
136	土坑	C	2	598-796				75×70×18				
137	土坑	C	2	600-796		308P-137坑		72×35×19				
138	土坑	C	2	599-798				81×55×27				
139	土坑	C	2	598-799				315×25				
140	土坑	C	2	600-797				110×59×30				
141	土坑	C	2	600-795				113×95×30				
142	土坑	C	2	600-797				56×40×28				
143	土坑	C	2	600-797				85×73×24				
144	土坑	C	2	603-800				87×56×39				
145	土坑	C	2	603-801				68×58×25				
146	土坑	C	2	601-790				73×62×34				
147	土坑	C	2	602-789				62×53×32				

第4章 検出された遺構と遺物

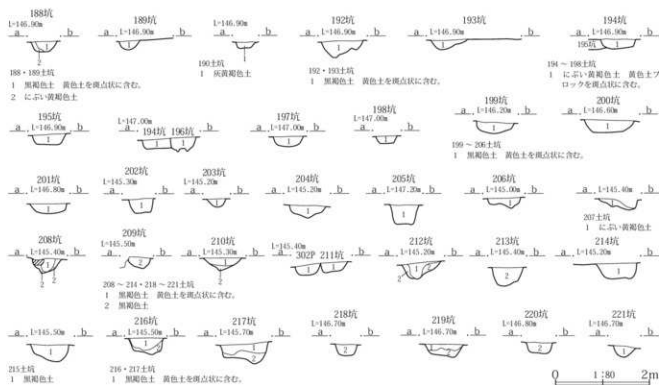


第51図 C区2面土坑断面図(4)

第16表 C区2面上土坑計測表(4)

番号	遺構	区	確認者	検出位置	X-Y	重複関係	目一新	長×型×深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
148	土坑	C	2	604-791				72×30×28				
149	土坑	C	2	605-791				88×77×34	黒土・有灰土			
150	土坑	C	2	606-791				78×64×25				
151	土坑	C	2	606-794				96×85×46				
152	土坑	C	2	606-793		315P→1325坑		70×55×35		横文不明		
153	土坑	C	2	606-792				73×28×12				
154	土坑	C	2	608-792				60×29×19				
155	土坑	C	2	607-790				54×43×25				
156	土坑	C	2	607-789				80×65×35				
157	土坑	C	2	608-789				54×34×18				
158	土坑	C	2	608-790		158坑→256・257P		87×77×33				
159	土坑	C	2	609-790				80×56×9				
160	土坑	C	2	610-789				61×42×21				
161	土坑	C	2	611-790				53×52×40				
162	土坑	C	2	611-788				54×35×27				
163	土坑	C	2	611-789				51×40×14				
164	土坑	C	2	612-789				44×17				
165	土坑	C	2	612-790				55×30×16				
166	土坑	C	2	611-791				44×40×17				
167	土坑	C	2	612-791		168P→367P		59×36×25				
168	土坑	C	2	612-790		168P→367P		71×23				
169	土坑	C	2	610-792				57×38×17				
170	土坑	C	2	612-792		171P→170P		30×49×19				
171	土坑	C	2	612-792		171P→170P		35×19				
172	土坑	C	2	609-790				70×48×19				土層不明
173	土坑	C	2	615-790				71×55×25				土層不明
174	土坑	C	2	617-785				80×74×36				
175	土坑	C	2	618-790				82×41×21				
176	土坑	C	2	618-795				56×38×26				
177	土坑	C	2	613-793				106×31				
178	土坑	C	2	614-793				45×38×20				
179	土坑	C	2	615-785		179坑→182坑, 180坑→179坑		65×34				
180	土坑	C	2	615-785		180坑→179坑, 181坑→279P→180坑		42×25				
181	土坑	C	2	615-785		181坑→180坑, 279P→181坑		61×53×29				
182	土坑	C	2	616-785		179坑→182坑		78×51×31				
183	土坑	C	2	617-785		184坑→183坑		92×60×37				
184	土坑	C	2	616-786		184坑→183坑		83×80×27				
185	土坑	C	2	617-786				61×31				
186	土坑	C	2	617-786				62×41×29				
187	土坑	C	2	617-785				82×53×22				

遺構図 (C区)

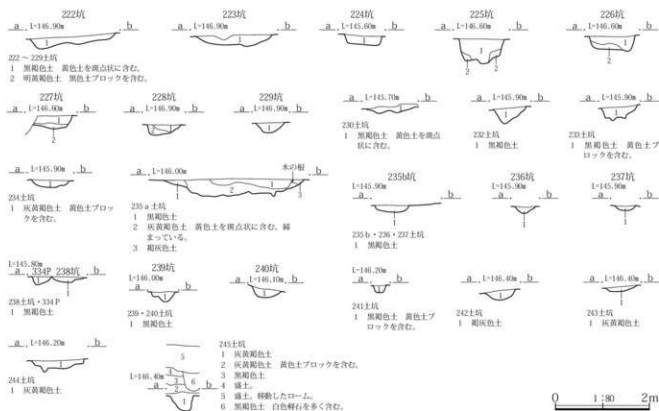


第52図 C区2面土坑断面図(5)

第17表 C区2面土坑計測表(5)

番号	遺構	区	調査面	埋点位置	X・Y	遺物種類	目-新	目×別×深(cm)	遺物群録	照片	時期・時代	備考
188	土坑	C	2	618-785		189・190坑→188坑		67×58×25				
189	土坑	C	2	618-786		188坑→189坑		40×20				
190	土坑	C	2	618-786		188坑→189坑		48×35×17				
191	土坑	C	2	619-788				79×30×40				
192	土坑	C	2	622-787				90×38×38				
193	土坑	C	2	619-788		195坑→193坑		80×61×24				
194	土坑	C	2	618-785		195坑→194坑, 194坑→196坑		73×38×23				
195	土坑	C	2	619-785		195坑→193・194坑		72×25				
196	土坑	C	2	618-785		194坑→196坑		56×43×33				
197	土坑	C	2	619-784				65×38×22				
198	土坑	C	2	620-784				72×47×19				
199	土坑	C	2	606-784				81×39×26				
200	土坑	C	2	611-783				110×100×38				
201	土坑	C	2	613-784				86×78×24				
202	土坑	C	2	596-785				55×43				
203	土坑	C	2	596-785				41×23				
204	土坑	C	2	594-784				77×66×29				
205	土坑	C	2	595-783				65×61×42				
206	土坑	C	2	593-782				73×60×25				
207	土坑	C	2	599-782				80×53×40		透視(正面)		
208	土坑	C	2	599-781				53×30×36				
209	土坑	C	2	601-780				45×27				
210	土坑	C	2	598-780				82×60×31				
211	土坑	C	2	597-779				86×35×29				
212	土坑	C	2	595-780				85×31×38				
213	土坑	C	2	594-777				65×60×42				
214	土坑	C	2	595-776				87×64×37		横文(不明)		
215	土坑	C	2	595-775				82×67×44				
216	土坑	C	2	596-775				77×67×34				
217	土坑	C	2	598-776				103×76×42				
218	土坑	C	2	611-775				74×32×29				
219	土坑	C	2	610-770				81×32×20				
220	土坑	C	2	612-770				64×36×26				
221	土坑	C	2	609-768				68×47×25				

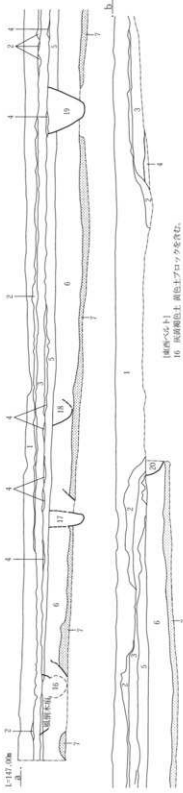
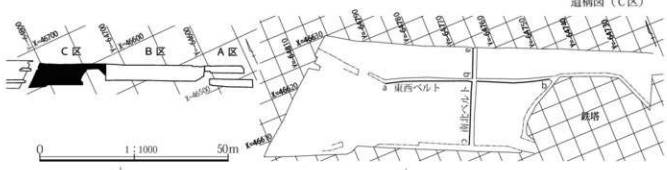
第4章 検出された遺構と遺物



第53図 C区2面土坑断面図(6)

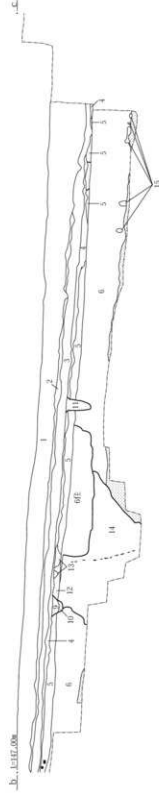
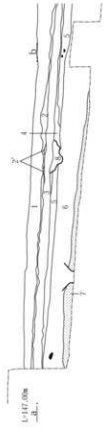
第18表 C区2面土坑計測表(6)

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X・Y	重層関係 目・新	長×短×深(cm)	遺物発見	鋪片	時期・時代	備考
222	土坑	C	2	635-783		184×148×43				
223	土坑	C	2	635-782		171×116×24		陶文不明		
224	土坑	C	2	631-781		90×77×27				
225	土坑	C	2	633-781		110×93×47				
226	土坑	C	2	632-786		99×80×38				
227	土坑	C	2	633-787		53×30				
228	土坑	C	2	633-782		70×58×25				
229	土坑	C	2	633-784		72×63×21				
230	土坑	C	2	599-802		98×12				
231	土坑	C	2	穴番						平面不明
232	土坑	C	2	404-796	232坑→150P	69×60×38				
233	土坑	C	2	404-796		82×51×32				
234	土坑	C	2	403-795		80×59×18				
235a	土坑	C	2	638-781		300×45				土跡跡目、陶文不明
235b	土坑	C	2	605-787	32P→235坑	74×49×17				
236	土坑	C	2	605-786	237坑→236坑	50×45×14				
237	土坑	C	2	606-786	237坑→236坑	47×14				
238	土坑	C	2	605-785		72×48×10				
239	土坑	C	2	407-784		53×47×24				前附未要→中期初頭
240	土坑	C	2	408-786		65×57×25				
241	土坑	C	2	409-788	32P→241坑	98×32×15				
242	土坑	C	2	631-774		63×52×23				
243	土坑	C	2	632-774	243坑→357P	64×55×13				
244	土坑	C	2	631-772	339P→244坑	113×77×30				
245	土坑	C	2	395-742		90×32				



- 【遺構(セクト)】
- 16 灰褐色土 黄色土プロックを含む。
 - 17 黒色土 赤いセクト。
 - 18 黒褐色土 土砂の覆土。
 - 19 黒色土 20以上層土。
 - 20 黒褐色土 瓦塔は建ち直り築造後の遺構表。

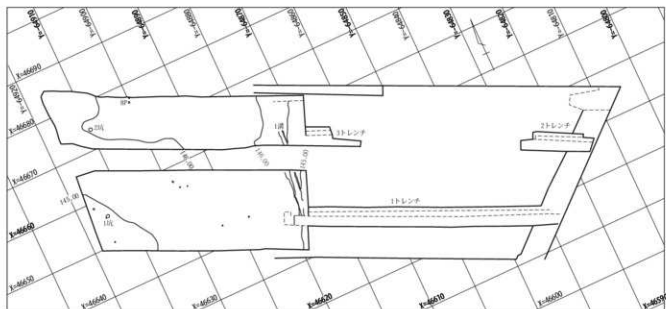
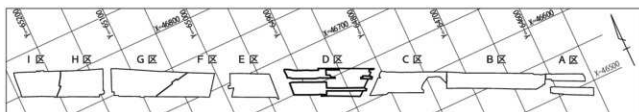
- 【遺構(セクト)・相違セクト】
- 1 黒褐色土 崩れたロームの埋土。黒褐色土プロック・礫が一部に混じる。粘性・締まりやや強い。工後建設の埋中築造風土。礫は5%程度。
 - 2 明褐色土 細砂・粗砂土。黒褐色土を層状に混入する。粘性・締まり強い。崩壊し表面積合同。約0.5m厚程度築造直後の土。片層積層の痕跡が、昭和49年出現。
 - 3 黒褐色土 白色土質・細砂土。ローム粒子(礫)少量。ローム粒子(礫)少量。明褐色土の埋土。ワイヤロープ埋土(4層より深い)。
 - 4 黒褐色土 白色土質・細砂土を少量含む。黒色土(5層)人が少量混入する。粘性・締まりやや強い。4層より深い。
 - 5 黒色土 白色土質を多く含む。粘性・締まり強い。一部に平石時代の埋積層土。
 - 6 明褐色土 粗砂土。粗砂土。



- 【遺構(セクト)】
- 12 黒褐色土 ロームをベースに黒褐色土プロック多量に混じる。粘性・締まりやや強い。
 - 13 黒褐色土 粗砂土。白色土質を少量含む。粘性・締まり強い。
 - 14 黒褐色土 白色土質を少量含む。細砂土・粗砂土混入する。粘性・締まり強い。
 - 15 灰褐色土 黄色土プロック(1~3m)人が混入する。
- 【ワイヤロープ埋土】
- 8 1層 黒褐色土 細砂土。粗砂土を多く含む。粘性・締まり強い。
 - 9 3層1 黒褐色土 粗砂土少量。白色土質を少量含む。粘性・締まりやや強い。
 - 9 3層2 黒褐色土 ローム・プロック(0.3~2cm)人が混入する。粘性・締まり強い。
 - 10 4層 明褐色土 黒褐色土。黒褐色土(1~3m)人が混入する。粘性・締まりやや強い。
 - 11 4層 明褐色土 黒褐色土。黒褐色土(1~3m)人が混入する。粘性・締まりやや強い。

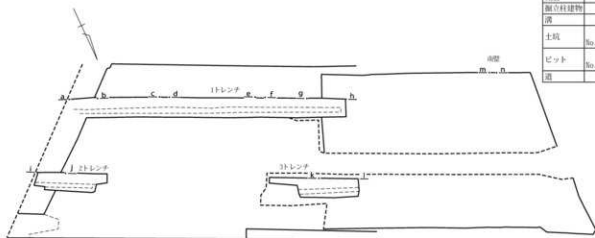
第54図 C区東西・南北ベルト

第4章 検出された遺構と遺物



D区遺構集計

	1画	小計
住居	0	0
副官科建物	0	0
溝	1	1
土坑	No. 1~2	2
ピット	No. 1~9	9
道	0	0



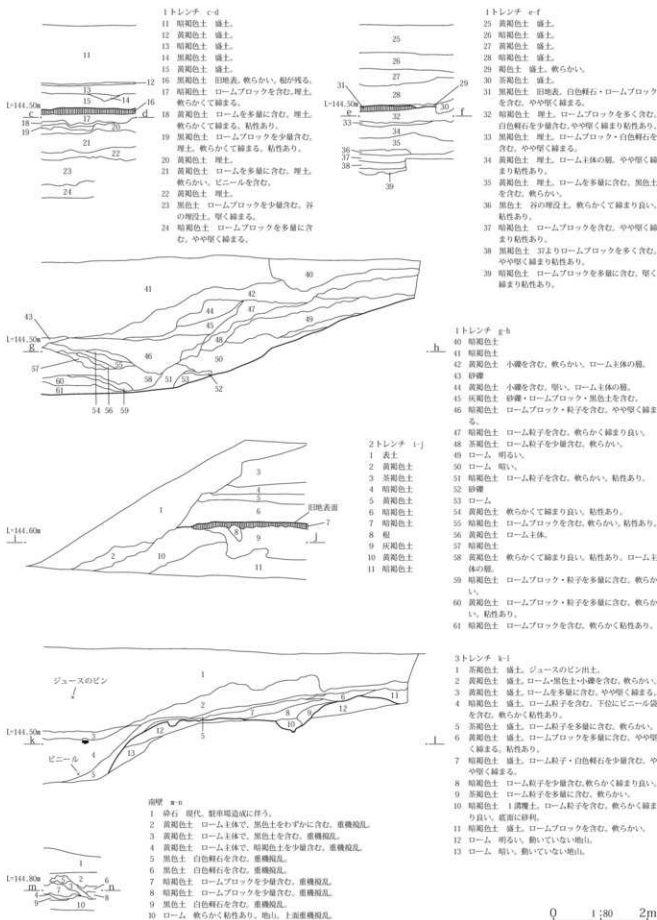
0 1:800 20m



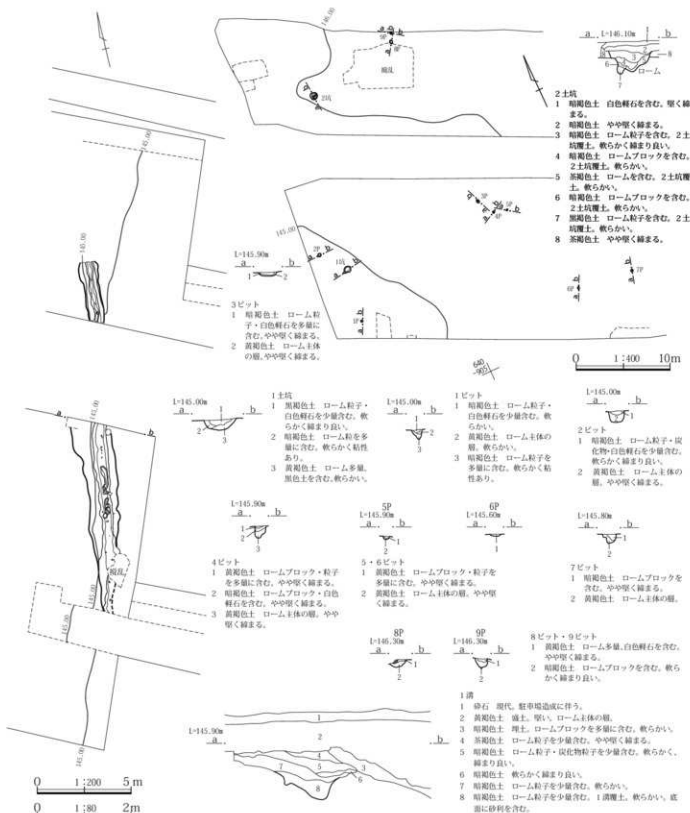
- 1 トレンチ a-b
- 1 表土
- 2 赤褐色土 盛土
- 3 黄褐色土 盛土
- 4 黄褐色土 盛土
- 5 暗褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかい。粘性あり。
- 8 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。やや堅く締まり粘性あり。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。軟らかく粘性あり。
- 10 暗褐色土 やや堅く締まり粘性あり。

0 1:80 2m

第55図 D区全体図、トレンチ位置図

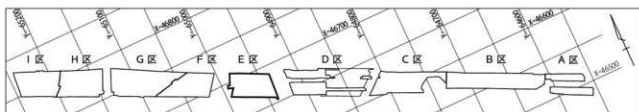


第56図 D区トレンチ土層断面図



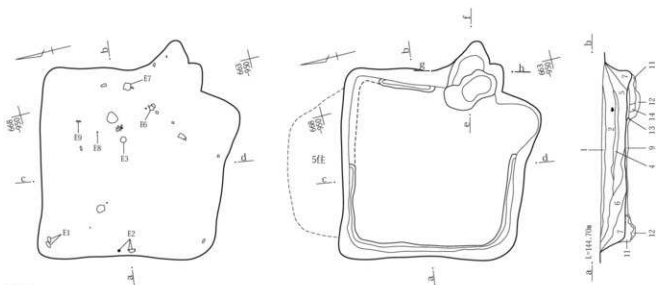
第57図 D区1溝・ピット

遺構図(E区)



	1画	小計
住居	6	6
掘立柱建物	1	1
溝	0	0
土坑	No.1 ~ 28	10
ピット	No.1 ~ 28	28
道	0	0

0 1:800 20m



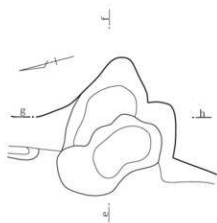
a-b, c-d

- 1 暗褐色土 ローム粒子・軽石を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・軽石を含む。軟らかく粘性あり。
- 3 赤褐色土 軽石少。軟らかい。
- 4 黒褐色土 ローム粒子・軽石を含む。軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・粒子多量。軽石を少量含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 6 黒色土 ローム粒子多量。軽石を含む。軟らかく粘性あり。
- 7 赤褐色土 ロームブロック多量。炭化物粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 8 黄褐色土 硬の崩れ。
- 9 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土。やや硬く締まる。
- 10 黄褐色土 ロームを多量に含む。やや硬く締まる。
- 11 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土。軟らかく締まり良い。
- 12 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく粘性あり。
- 13 暗褐色土 ロームブロック・灰・炭化物を含む。やや硬く締まる。
- 14 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく粘性あり。

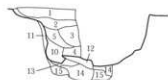
0 1:80 2m

第58図 E区全体図、1住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



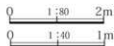
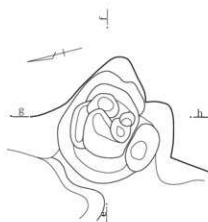
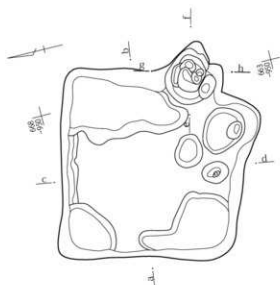
B, L=144.70m



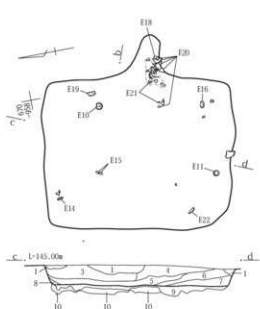
A, L=144.70m

カマド e-f, g-h

- 1 暗褐色土 ロームブロック・軽石を含む、やや固く締まる。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・軽石を含む、軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物粒子・焼土粒子を少量含む、軟らかく粘性あり。
- 4 灰色土 灰を多量、焼土粒子・ローム粒子を少量含む、軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を含む、軟らかい。
- 6 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む、軟らかい。
- 7 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む、軟らかく締まり良い。
- 8 暗褐色土 軟らかく締まり良い。
- 9 黒褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む、軟らかく締まり良い。
- 10 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む、軟らかく粘性あり。
- 11 茶褐色土 ローム粒子を含む、軟らかく締まり良い。
- 12 赤褐色土 焼土・灰・ロームを含む、非常に軟らかく粘性あり。
- 13 暗褐色土 焼土ブロック・灰・ローム粒子を含む、非常に軟らかく粘性あり。
- 14 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む、上層よりも明るい色調、非常に軟らかく粘性あり。
- 15 黄褐色土 ロームを多量に含む、非常に軟らかく粘性あり。
- 16 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多く含む、非常に軟らかく粘性あり。

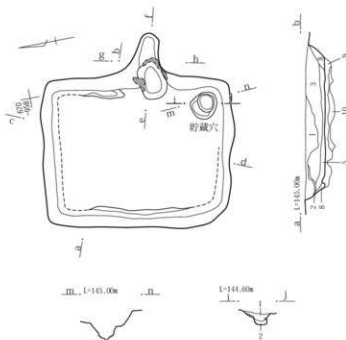


第59図 E区1住居(2)



a, b, c, d

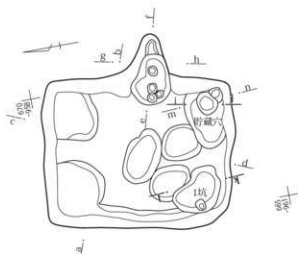
- 1 暗褐色土 軽石を含む。軟らかい。現代耕作痕あり。
- 2 暗褐色土 軽石を含む。軟らかい。現代耕作痕あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・軽石を含む。軟らかく粘性あり。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量。焼土粒子・炭化物を含む。3よりも明るい。やや堅く締まり。粘性あり。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 6 褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を含む。やや堅く締まり。粘性あり。



貯蔵穴-1

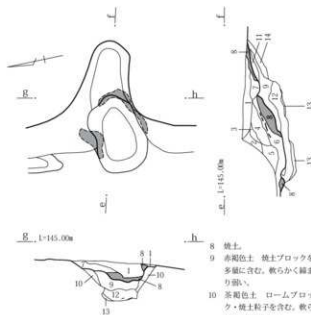
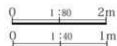
- 7 暗褐色土 炭化物粒子・ロームブロック・焼土粒子を含む。やや堅く締まり。粘性あり。
- 8 茶褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。
- 9 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土。軟らかく粘性あり。
- 10 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく強い粘性あり。

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 2 黄褐色土 ローム多量。焼土粒子を少量含む。赤褐色に軟らかく粘性あり。



k, l, 145.00m

- 1 土坑
- 2 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・炭化物を含む。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを含む。1よりもやや明るい。軟らかく粘性あり。
- 4 黄褐色土 ロームブロック多量。焼土ブロックを含む。軟らかく粘性あり。



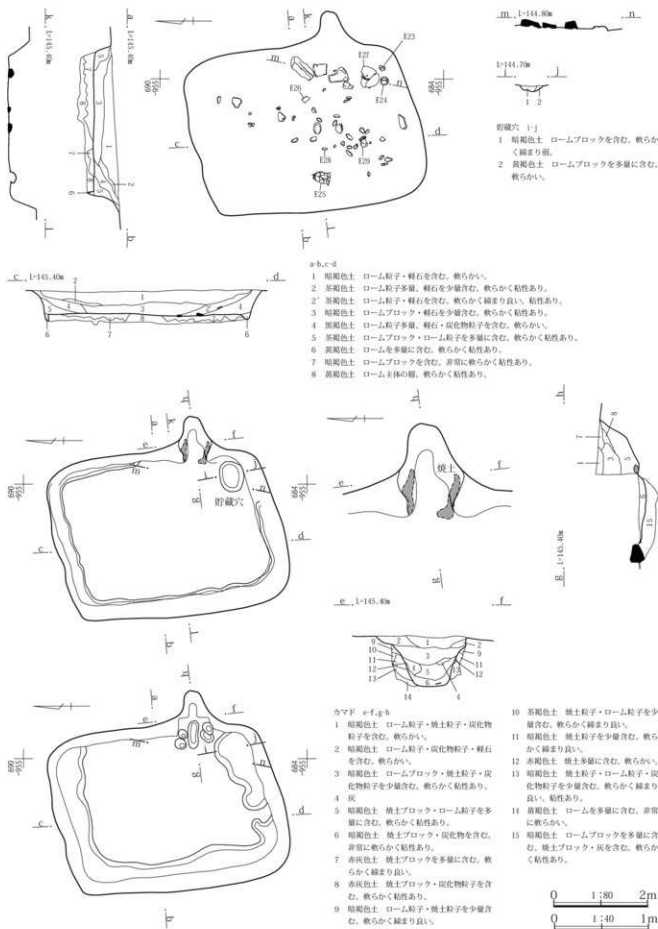
カマド e, f, g, h

- 1 暗褐色土 焼土ブロックを含む。耕作痕。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む。軟らかく締まりよい。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。
- 4 黄褐色土 ロームブロック・焼土粒子・白色粘土を含む。軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 6 黄褐色土 焼土・ローム・白色粘土を含む。軟らかく強い粘性あり。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかい。

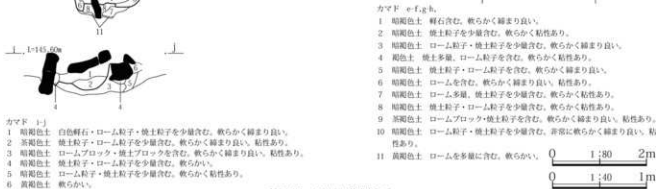
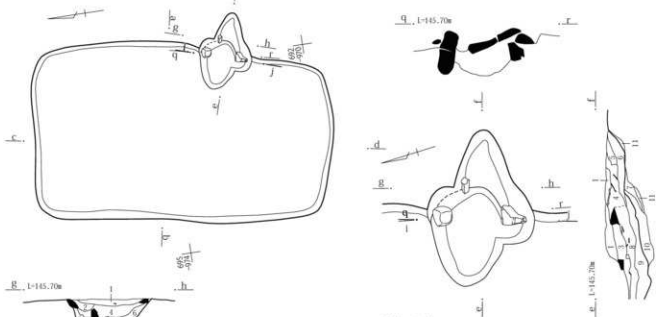
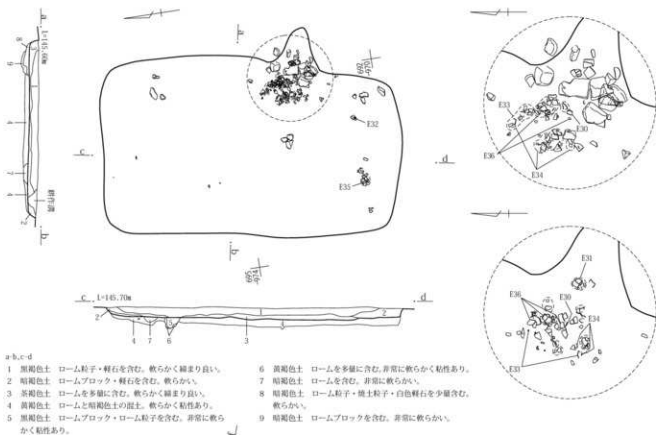
- 8 焼土
- 9 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。軟らかく締まりよい。粘性強い。
- 10 茶褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。軟らかく締まりよい。
- 11 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。軟らかく締まりよい。粘性あり。
- 12 暗褐色土 焼土粒子・炭化物・ローム粒子を含む。軟らかく締まりよい。
- 13 茶褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。赤褐色に軟らかく粘性あり。
- 14 褐色土 焼土粒子を多量に含む。軟らかく締まりよい。粘性あり。

第60図 E区2住居

第4章 検出された遺構と遺物



第61図 E区3住居



カマフ i, j

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 2 茶褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 4 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む。軟らかい。
- 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 6 黄褐色土 軟らかい。

第62図 E区4住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



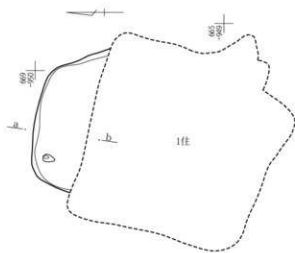
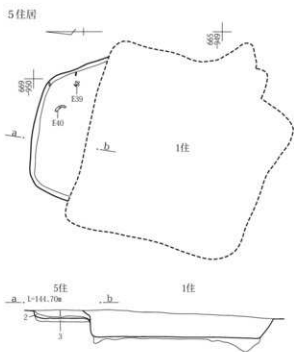
- 4住居P1 k-1
- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく粘性あり。
 - 2 茶褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性あり。
 - 3 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく締まり悪い。



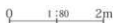
- P2 n-n
- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
 - 2 茶褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性あり。



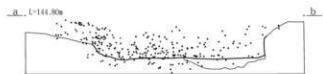
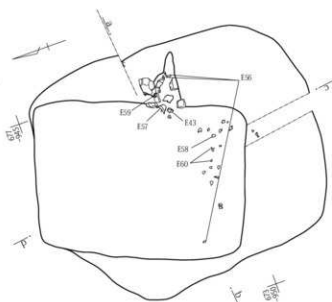
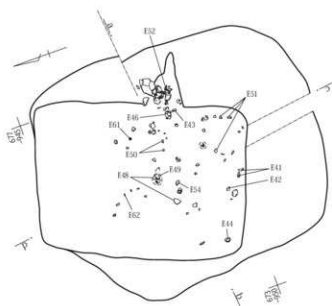
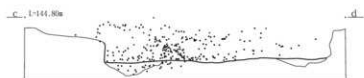
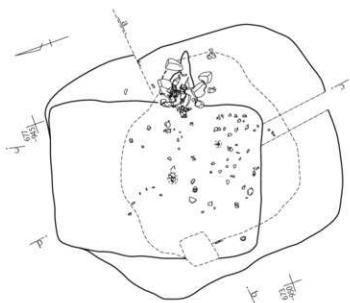
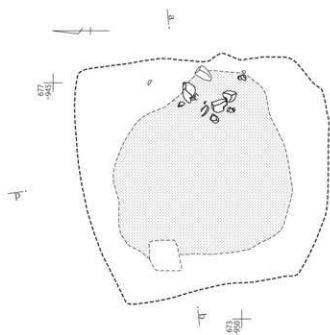
- P3 o-p
- 1 暗褐色土 ローム粒子・白色輝石を含む。軟らかい。
 - 2 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく粘性あり。



- 5住居 n-b
- 1 暗褐色土 輝石多い。軟らかく締まり良い。
 - 2 茶褐色土 軟らかく締まり良い。粘性あり。
 - 3 茶褐色土 ロームと暗褐色土の混土。やや硬い。



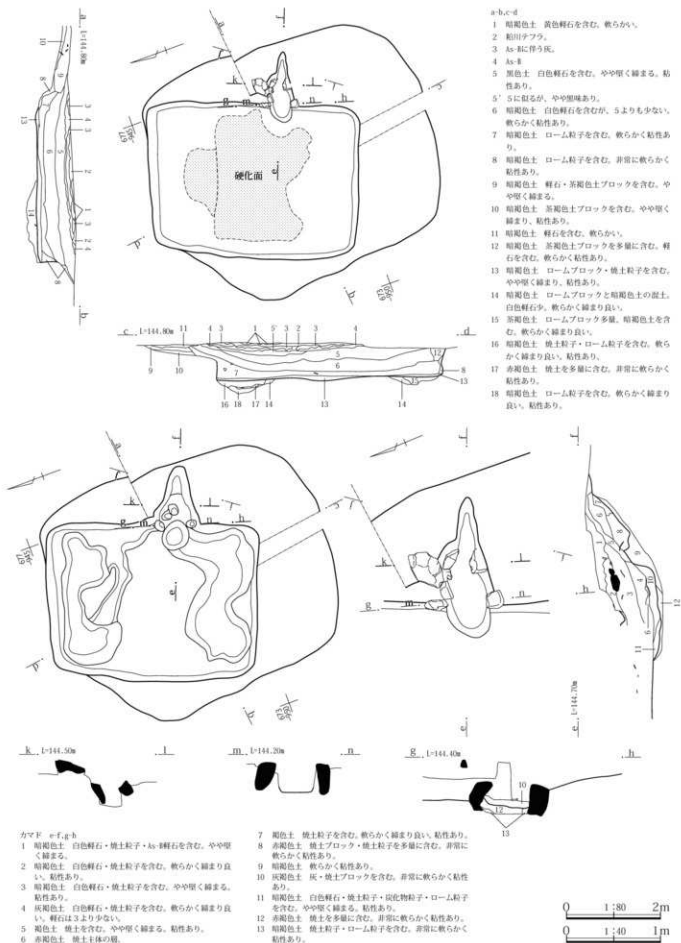
第63図 E区4住居(2)、5住居



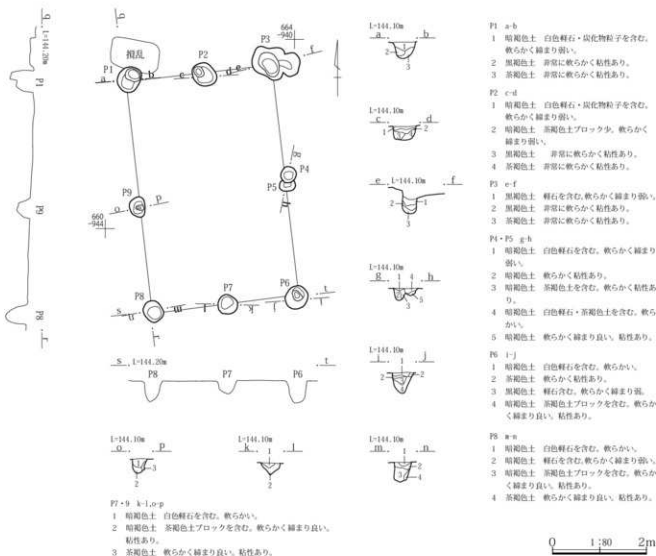
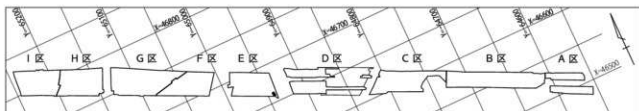
0 1:80 2m

第64図 E区6住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第65図 E区6住居(2)



第66図 E区1掘立柱建物

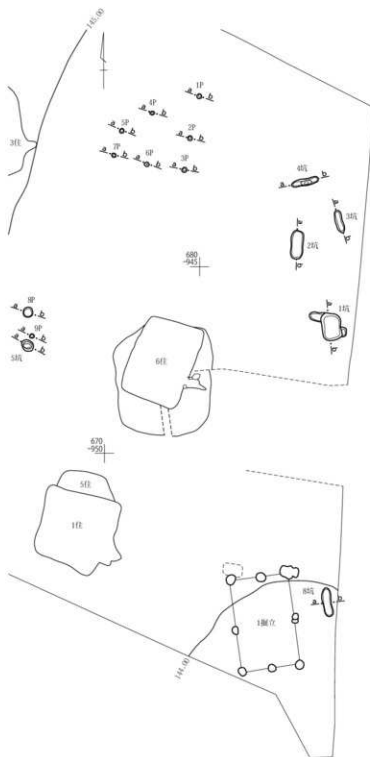
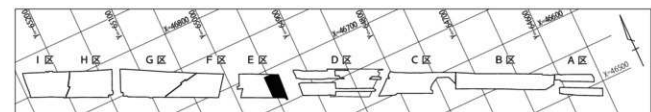
第19表 E区1掘立柱建物計測表

平面形 長方形		間隔 2間×2間		長軸方位N-6°-W				
掘行 cm	築行 cm	掘行柱間 cm	築行柱間 cm	番号	上1cm長径×短径	下1cm長径×短径	深さcm	備考
P1-P8: 505	P1-P3: 288	P1-P9: 282	P1-P2: 137	1	55×47	24×17	47	
P2-P7: 492	P9-P4: 323	P9-P8: 224	P2-P3: 151	2	55×45	14×10	34	
P3-P6: 488	P9-P5: 319	P9-P4: 234	P6-P7: 154	3	101×68	34×24	57	
	P9-P6: 304	P9-P5: 253	P7-P6: 150	4	34×33	19×17	40	
		P4-P6: 254		5	34×-	16×-	23	
		P5-P6: 236		6	49×48	13×9	47	
				7	42×41	27×23	24	
				8	45×39	29×27	46	
				9	42×32	9×4	40	

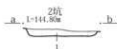
※1 計測値は1/20倍図から起こした数値

※2 柱行間の距離は名目で計測

第4章 検出された遺構と遺物



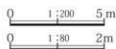
- 1土坑
 1 暗褐色土 軽石・ローム粒子を含む。
 敷らかく締まり弱い。
 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。
 敷らかく粘性あり。



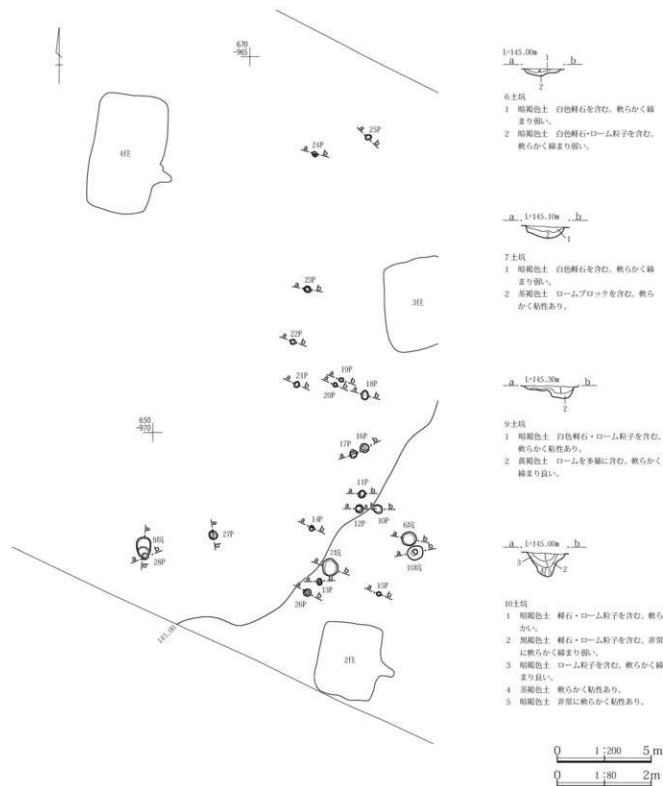
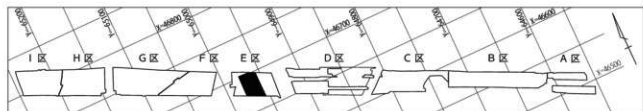
- 2・3・4・8土坑
 1 暗褐色土 白色軽石を含む。
 敷らかく締まり弱い。



- 5土坑
 1 暗褐色土 ローム粒子・軽石含む。敷らかく締まり弱い。
 2 黒褐色土 ローム粒子・軽石含む。敷らかく締まり弱い。
 3 暗褐色土 ロームブロック・粒子を含む。敷らかく粘性あり。
 4 茶褐色土 茶褐色土を多量に含む。敷らかく粘性あり。

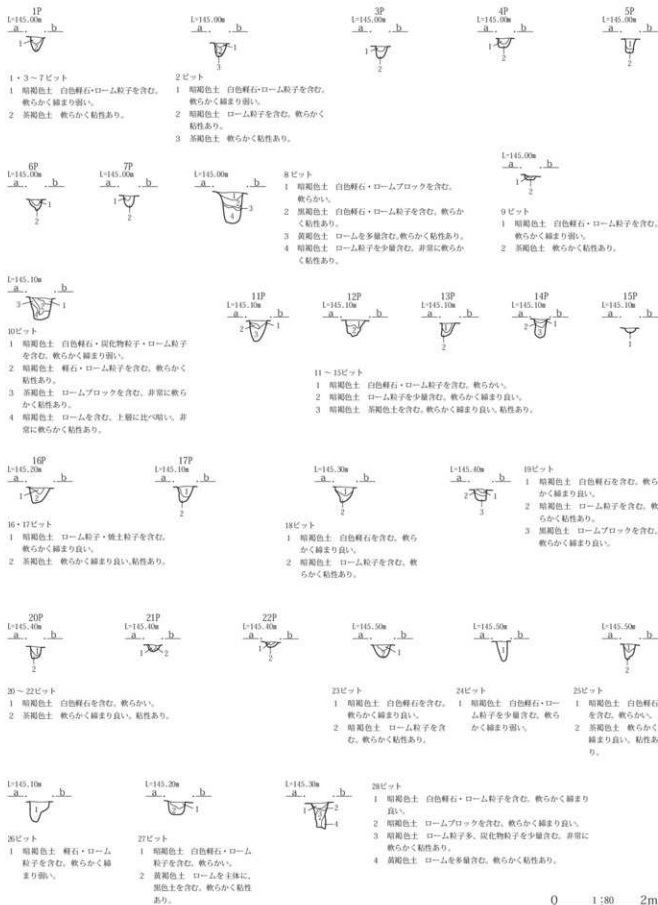


第67図 E区東部土坑・ピット位置図、土坑断面図



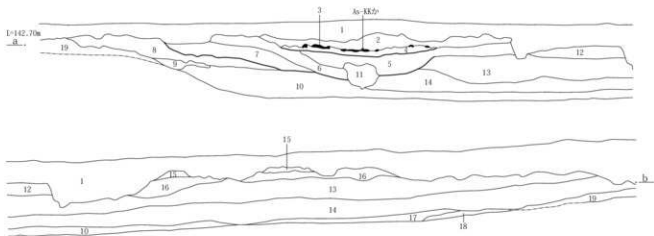
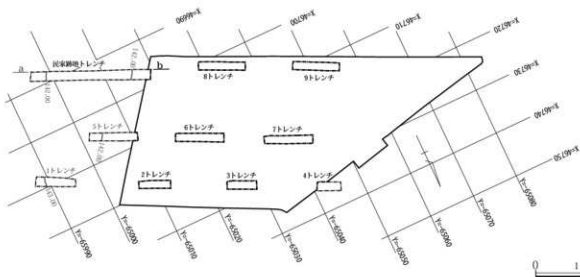
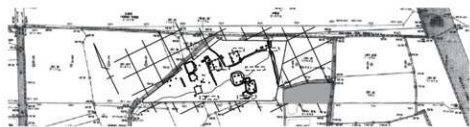
第68図 E区中央部土坑・ピット位置図、土坑断面図

第4章 検出された遺構と遺物



0 1:80 2m

第69図 E区ビット断面図



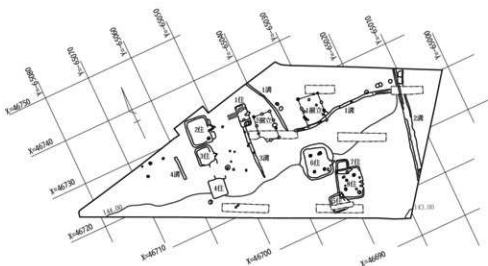
民家跡地トレンチ a-b

- 1 表土
- 2 暗褐色土 As-8輝石を含む。軟らかくしまり良い。
- 3 灰 As-8デフラに伴う灰層。小豆色-ピンク。
- 4 As-8輝石
- 5 黒褐色土 白色輝石を含む。やや硬くしまる。
- 6 暗褐色土 白色輝石を含む。やや硬くしまる。粘性あり。
- 7 暗褐色土 白色輝石を少量含む。やや硬くしまる。粘性あり。
- 8 黒褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。
- 9 茶褐色土 茶褐色土ブロックを含む。軟らかい。
- 10 暗褐色土 軟らかく粘性強い。

- 11 階段 木の組
- 12 黒褐色土 白色輝石を含む。軟らかくしまり良い。
- 13 暗褐色土 やや硬くしまる。粘性強い。
- 14 暗褐色土 軟らかく粘性強い。
- 15 黒褐色土 白色輝石を多量含む。やや硬くしまる。
- 16 黒褐色土 白色輝石を少量含む。軟らかくしまり良い。
- 17 暗褐色土 軟らかく粘性強い。
- 18 茶褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性強い。
- 19 ローム層

0 1:80 2m

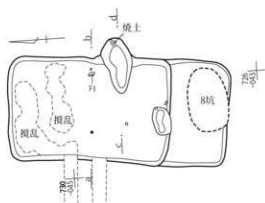
第70図 F区民家跡地トレンチ



F区遺構集計

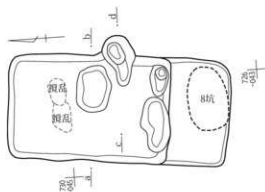
	1画	小計
住居	8	8
独立柱建物	2	2
溝	4	4
土坑	11	11
ピット	No.1 ~ 12, 7ヶ番	19
道	No.1 ~ 20, 17ヶ番	0

0 1:800 20m



a b

- 1 暗褐色土 白色輝石・焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。やや硬く締まる。
- 3 茶褐色土 ロームブロックを多量に含む。やや硬く締まる。



カマド c-d

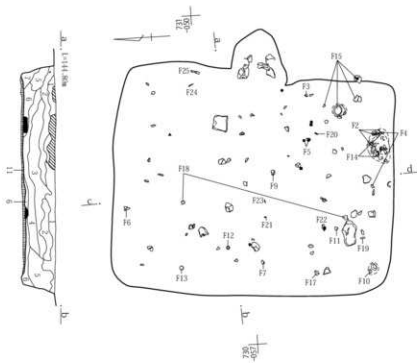
- 1 暗褐色土 白色輝石・焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 黄褐色土 ローム主体の層で、焼土ブロックを少量含む。やや硬く締まる。粘性あり。
- 3 黄褐色土 2よりもロームの混入少ない。やや硬く締まる。
- 4 暗褐色土 灰を含む。やや硬い。
- 5 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 6 赤褐色土 焼土ブロック多い。軟らかい。
- 7 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 8 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。

0 1:80 2m

0 1:40 1m

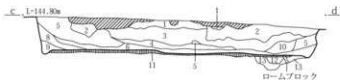
第71図 F区全体図, 1住居

遺構図(F区)



※b,c,d

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・焼土粒子を含む。やや硬く締まる。
- 2 暗褐色土 茶褐色土ブロック多い。白色軽石・ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 焼土粒子多い。白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多い。焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 5 暗褐色土 灰褐色土ブロックを多量。白色軽石・焼土粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 7 黒色土 ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 8 暗褐色土 灰褐色土ブロック多量。白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 9 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 10 暗褐色土 灰褐色土ブロック多量。焼土ブロック・白色軽石・ローム粒子を含む。5に似る。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 11 暗褐色土 灰土。ロームと暗褐色土の混土。やや硬く締まる。
- 12 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 13 灰褐色土 ロームブロック多量。焼土粒子を含む。軟らかく粘性強い。



1:143.70m

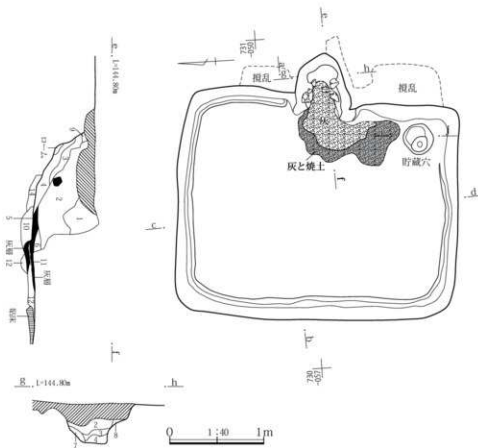


貯蔵穴 1-1

- 1 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 2 灰褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

カマド a-f,g,h

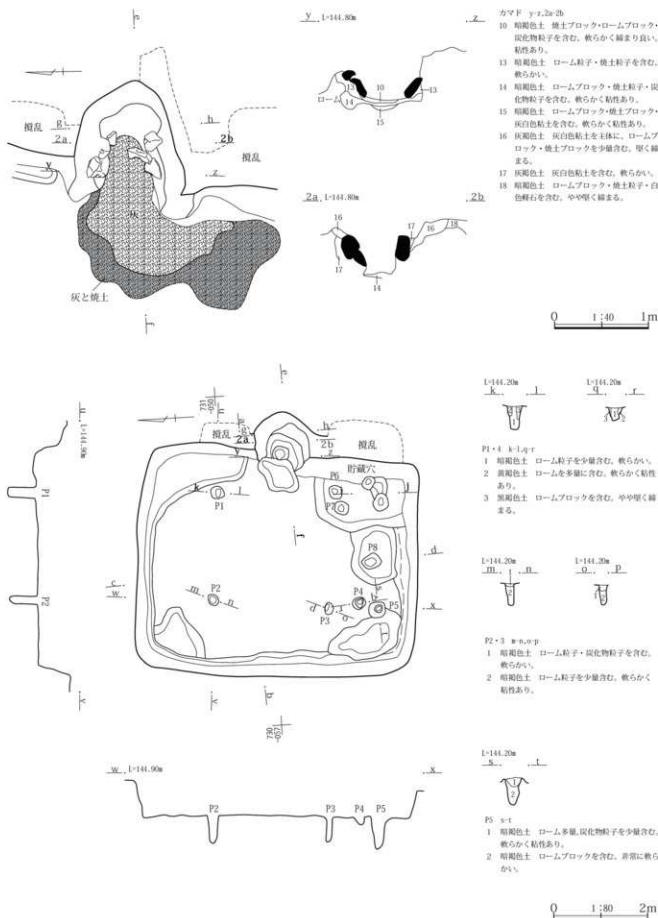
- 1 暗褐色土 茶褐色土ブロック多量。白色軽石・焼土粒子を含む。やや硬く締まる。
- 2 赤褐色土 茶褐色土ブロック・焼土ブロック・ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 焼土を多量に含む。軟らかい。
- 4 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・灰を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 5 灰
- 6 赤褐色土 焼土多量。ロームブロックを含む。軟らかい。
- 7 灰褐色土 壁の崩れ。軟らかい。
- 8 灰褐色土 壁を含む。軟らかく粘性あり。
- 9 灰褐色土 壁の崩れ。軟らかい。
- 10 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 11 灰 灰色粘土・焼土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 12 暗褐色土 ロームブロックを含む。やや硬く締まる。



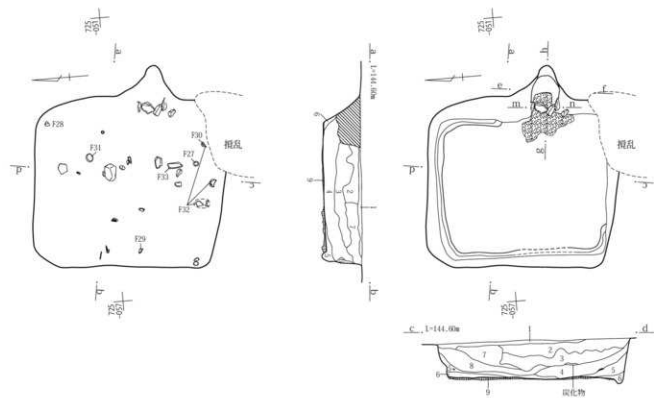
第72図 F区2住居(1)

0 1:80 2m

第4章 検出された遺構と遺物

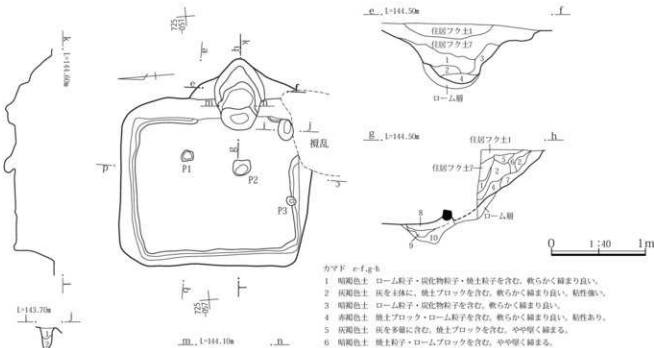


第73図 F区2住居(2)



a-b,c-d

- 1 暗褐色土 白色軽石多量、ローム粒子を含む、軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 茶褐色土ブロック多量、白色軽石を含む、軟らかい。
- 3 黒褐色土 茶褐色土ブロック・白色軽石・焼土粒子を含む、軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 茶褐色土ブロック・ロームブロックを含む、軟らかく締まり良い、粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む、非常に軟らかく粘性あり。
- 6 暗褐色土 ロームを多量に含む、非常に軟らかく粘性あり。
- 7 暗褐色土 茶褐色土ブロックを多量に含む、白色軽石・ローム粒子を含む、軟らかく締まり良い。
- 8 黄褐色土 ローム主体の層、灰化物を含む、軟らかい。
- 9 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土、焼土粒子を含む、粘厚、やや硬く締まる。



貯蔵穴 ト

- 1 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む、非常に軟らかく粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む、非常に軟らかく粘性あり。

104

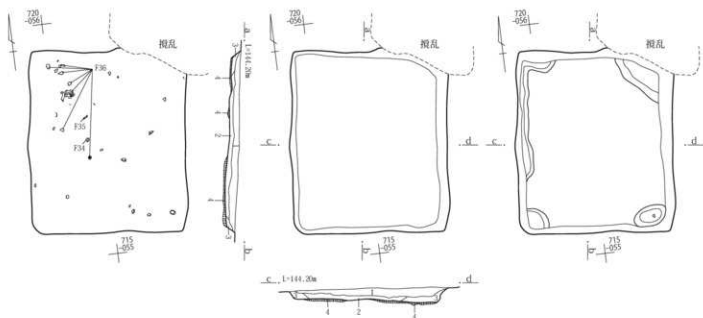
カマド e-f, g-h

- 1 暗褐色土 ローム粒子・灰化物粒子・焼土粒子を含む、軟らかく締まり良い。
- 2 灰褐色土 灰を主体に、焼土ブロックを含む、軟らかく締まり良い、粘性強い。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・灰化物粒子を含む、軟らかく締まり良い。
- 4 赤褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む、軟らかく締まり良い、粘性あり。
- 5 灰褐色土 灰を多量に含む、焼土ブロックを含む、やや硬く締まる。
- 6 暗褐色土 焼土粒子・ロームブロックを含む、やや硬く締まる。
- 7 暗褐色土 焼土ブロックを含む、軟らかく締まり良い、粘性あり。
- 8 暗褐色土 焼土粒子・灰化物粒子・ロームブロックを含む、軟らかく締まり良い、粘性あり。
- 9 黄褐色土 ロームブロック・粒子多量、焼土粒子を含む、非常に軟らかく粘性あり。
- 10 黄褐色土 ローム主体の層、軟らかく粘性あり。

0 1:80 2m

第74図 F区3住居

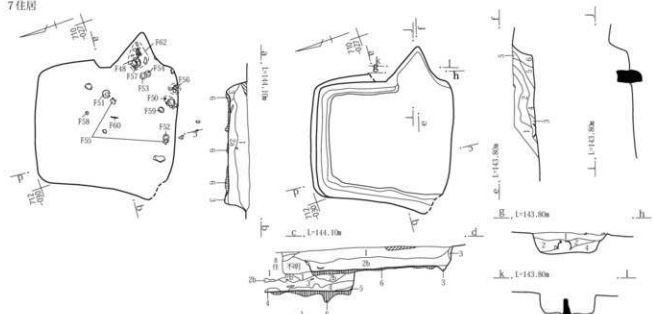
第4章 検出された遺構と遺物



6住居 a,b,c,d

- 1 暗褐色土 白色軽石多量、ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 白色軽石少量、ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い、粘性あり。
- 3 黒褐色土 白色軽石少量、ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを多量に含む。堅硬、やや強い。

7住居



7住居 a,b,c,d

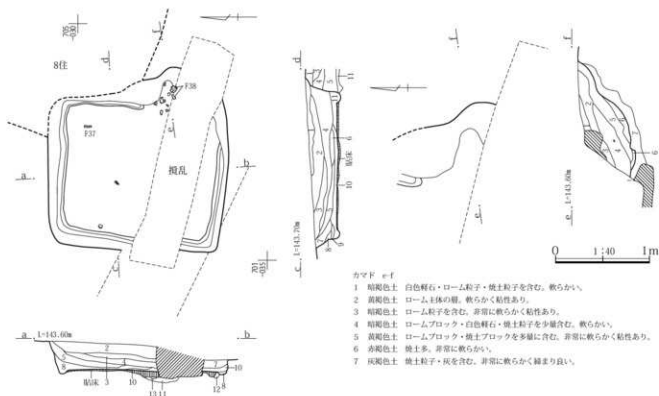
- (7住居)
- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
 - 2a 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を少量含む。軟らかく締まり良い、粘性あり。
 - 2b 黄褐色土 ロームブロック多量、暗褐色土を含む。軟らかく粘性あり。
 - 3 暗褐色土 ロームブロック・黄土ブロックを含む。軟らかく締まり良い、粘性あり。
- (8住居)
- 4 黄褐色土 ロームブロック主体の層。軟らかく粘性あり。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い、粘性あり。
 - 6 暗褐色土 堅硬、ロームと暗褐色土の混土。硬く締まる。

カマド e,f,g,h

- 1 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを少量含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 灰色粘土・ローム粒子・黄土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 黄土粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 4 赤褐色土 黄土多量、ローム粒子・炭化物粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 5 暗褐色土 黄土粒子・ローム粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 6 暗褐色土 黄土粒子・ローム粒を少量含む。非常に軟らかく粘性あり。

0 1:80 2m

第75図 F区4・7住居

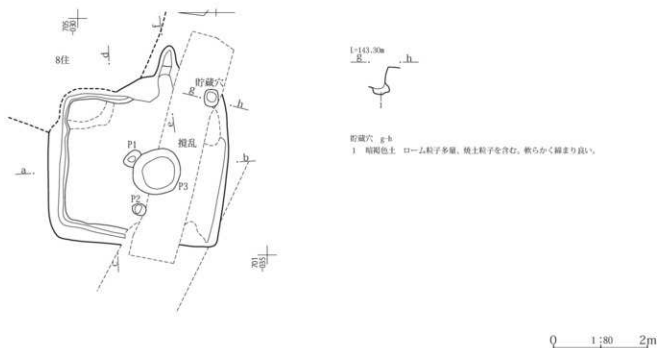


a-b, c-d

- 1 暗褐色土 灰褐色土ブロック多量。白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 2 暗褐色土 白色軽石多量。ローム粒子を含む。やや軟らかく締まり良い。
- 3 黒褐色土 白色軽石少量。ローム粒子を含む。やや軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量。炭化物粒子を少量含む。軟らかい。
- 5 暗褐色土 軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 7 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 8 暗褐色土 ロームブロック・軽石を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 9 赤褐色土 壁の崩れ。軟らかく粘性あり。

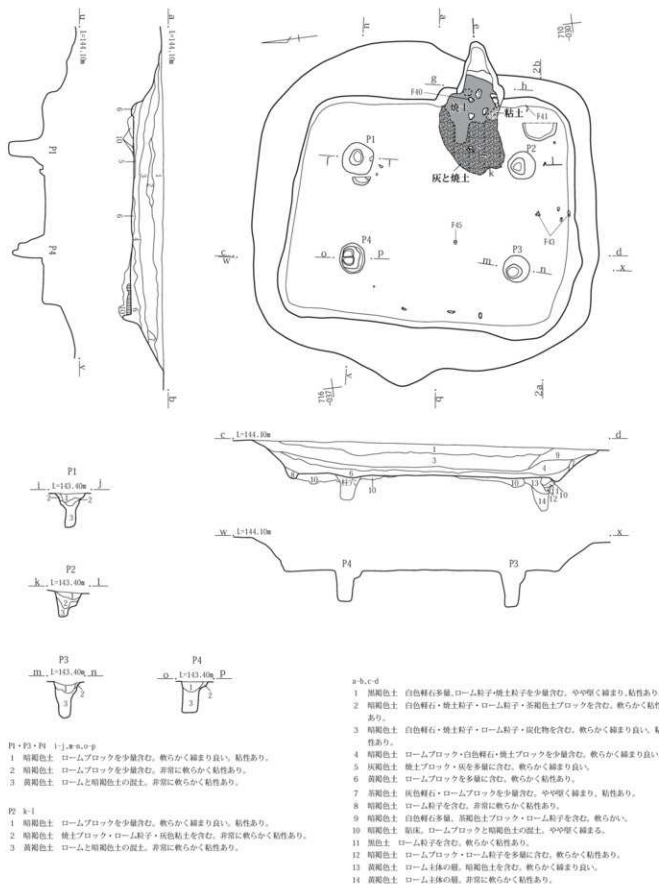
- 10 暗褐色土 ローム粒子・軽石を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 11 暗褐色土 焼土ブロック多量。炭化物・ロームブロックを含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 12 暗褐色土 ロームブロック・粒子を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 13 ロームブロック

掘込 暗褐色土 ロームと暗褐色土の混土。

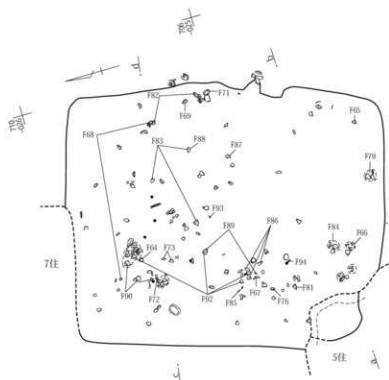


第76図 F区5住居

第4章 検出された遺構と遺物

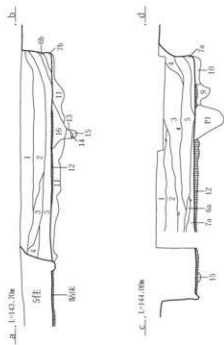
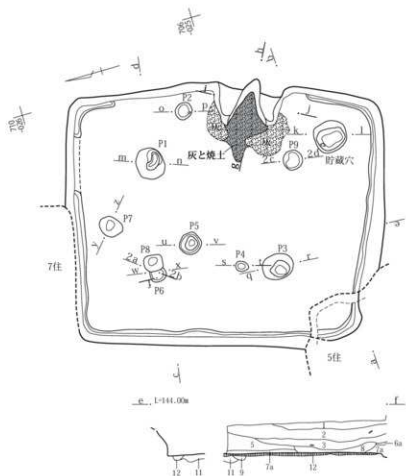


第77図 F区6住居(1)



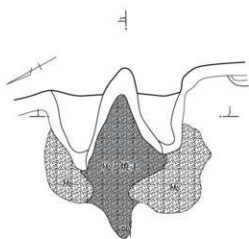
a-b,c,d,e-f

- 1 前期土 白色軽石多量、ローム粒子・埴土粒子を含む。軟らかく締まりよい。
- 2 前期土 白色軽石・埴土粒子・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく締まりよい。
- 3 前期土 白色軽石・埴土粒子・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 4 前期土 茶褐色土ブロック・白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかく締まりよい。
- 5 前期土 白色軽石・ロームブロック・灰白色粘土ブロック・炭化物を含む。軟らかい。
- 6a 前期土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 6b 前期土 灰白色粘土を多量に含む。ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 7a 前期土 ロームブロック・炭化物を含む。軟らかく粘性あり。
- 7b 前期土 非常に軟らかく粘性あり。硬くすべり。
- 8 前期土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 9 前期土 ロームブロック・粒子を多量に含む。軟らかい。
- 10 前期土 ローム土塊の層。やや硬く締まる。
- 11 前期土 ロームと前期土混土。やや硬く締まる。
- 12 前期土 黒土。ロームと前期土の混土。
- 13 前期土 黒土。ローム粒子を含む。軟らかく締まりよい。
- 14 前期土 ロームブロックを含む。軟らかく粘性あり。
- 15 黒土 ローム粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 16 前期土 ロームブロック・茶褐色土ブロック・黒土の混土。やや硬く締まる。

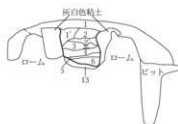


0 1:80 2m

第79図 F区8住居(1)



1:143.70m



1:143.70m



断面穴 1-1

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 黒色土 ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 4 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。やや硬く締まり、粘性あり。



F1・2・4・5・6 s.m.o.p.s.l.u.v.v.x

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 黄褐色土 ローム主体で、暗褐色土を含む。軟らかく粘性あり。



F7 7-4

- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。

F8 2a-2b

- 1 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 2 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性強い。



P3 9-7

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 3 黄褐色土 ローム主体の層。非常に軟らかく粘性あり。
- 4 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。非常に軟らかく粘性あり。

カマド 8h.1-j

- 1 暗褐色土 灰色粘土・焼土ブロック・ローム粒子・白色軽石を含む。やや硬く締まり、粘性あり。
- 1' 灰白色土 暗褐色土と灰色粘土の混土。
- 2 灰白色粘土 焼土ブロックを少量含む。カマド天井部の崩落。やや硬く締まり、粘性強い。
- 2' 灰色土 焼土ブロックを含む。カマド天井部の崩落。軟らかく締まり良い。
- 3 黒褐色土 灰化物・焼土・灰色粘土を含む。
- 4 灰褐色土 焼土ブロックを少量含む。粘性強い。
- 5 灰
- 6 灰褐色土 4と同じ。
- 7 灰褐色土 焼土ブロック・灰を含む。軟らかく粘性強い。
- 8 暗褐色土 焼土ブロック・灰化物を含む。軟らかく粘性強い。
- 9 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・灰白色粘土を含む。やや硬く締まり、粘性強い。

10 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子・灰白色粘土を含む。軟らかく、粘性強い。

11 暗褐色土 灰・焼土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

12 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

13 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

14 灰 焼土ブロックを含む。

15 灰 ローム粒子を含む。

16 灰 非常に軟らかい。

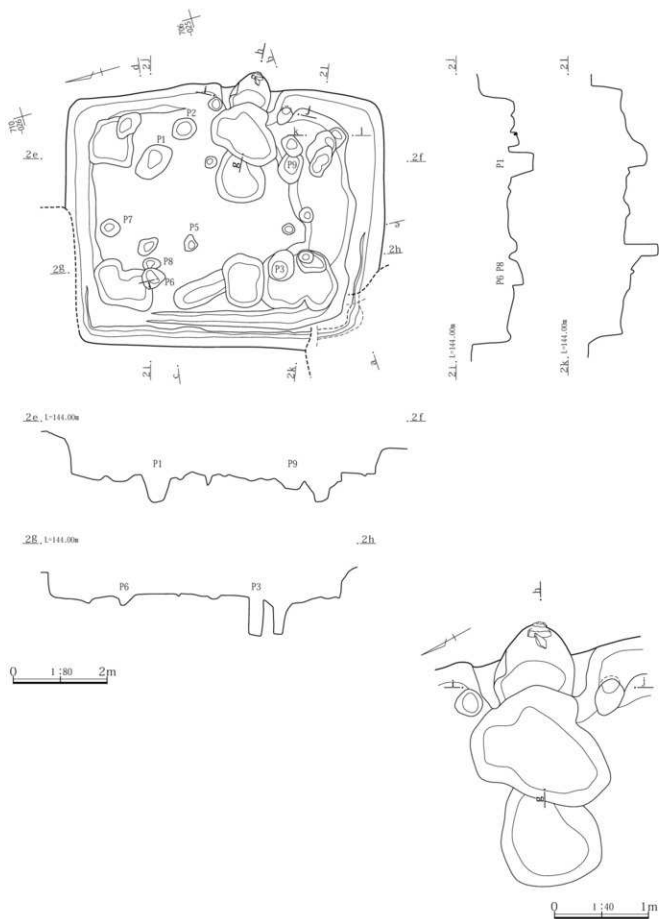
17 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。やや硬く締まり。

18 灰白色土 灰白色粘土を主体に、焼土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

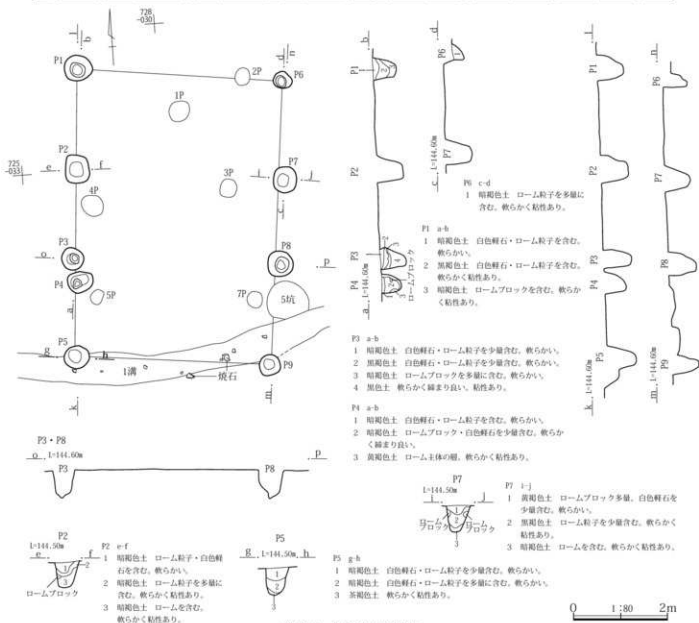
0 1:40 1m

0 1:80 2m

第80図 F区8住居(2)



第81図 F区8住居(3)



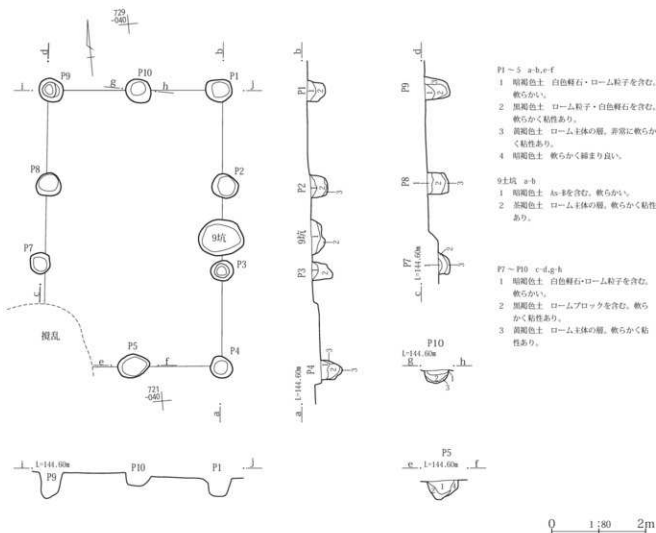
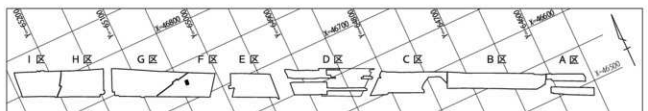
第82図 F区1掘立柱建物

第20表 F区1掘立柱建物計測表

平面形 長方形		幅横 3間×1間		計測方位N-3°-E					
取付 ㎝	梁行 ㎝	筋行柱間 ㎝	梁行柱間 ㎝	幅横	高さ	上ノミ位置×筋厚	下ノミ位置×筋厚	深さ㎝	備考
P1-P5: 605	P1-P6: 434	P1-P2: 211	P1-P2: 211	1	38×55	22×20	22×20	38	一段
P6-P9: 599	P2-P7: 438	P2-P3: 189	P2-P3: 189	2	40×50	31×27	31×27	39	一段
	P3-P8: 438	P2-P4: 242	P2-P4: 242	3	30×46	13×11	13×11	61	二段
	P4-P8: 433	P3-P5: 205	P3-P5: 205	4	35×44	10×9	10×9	47	二段
	P5-P9: 411	P4-P5: 152	P4-P5: 152	5	32×49	27×27	27×27	62	一段
		P6-P7: 208	P6-P7: 208	6	41×35	20×14	20×14	56	二段
		P7-P8: 189	P7-P8: 189	7	35×49	28×23	28×23	46	一段
		P8-P9: 212	P8-P9: 212	8	27×54	20×16	20×16	61	二段
				9	44×43	22×22	22×22	40	

※1 計測値は1/20縮尺から取った数値

※2 柱穴間の距離は必ずで計測



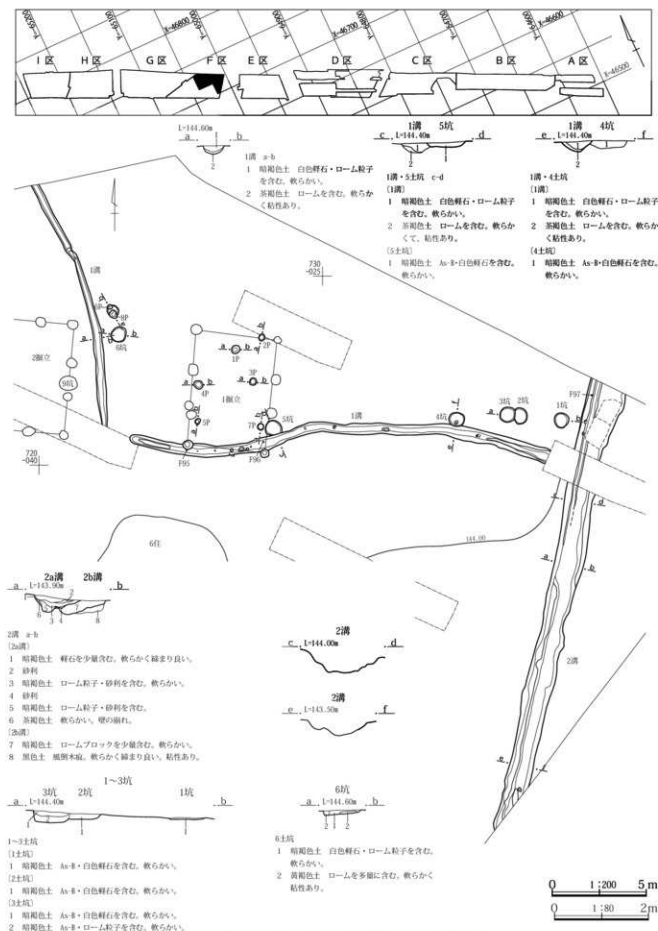
第83図 F区2掘立柱建物

第21表 F区2掘立柱建物計測表

平面形 長方形		間隔 3間×2間		柱軸方位N-7°-E				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	番号	上/下m径径×短径	下/上m径径×短径	深さ cm	備考
P1-P4: 589	P1-P9: 362	P1-P2: 206	P1-P10: 175	1	55×48	35×32	48	
P10-P5: 588	P2-P8: 378	P2-P3: 180	P10-P9: 187	2	36×52	41×37	44	
-	P3-P7: 385	P3-P4: 204	P4-P5: 184	3	49×42	20×18	46	
-	-	P9-P8: 199	-	4	47×45	29×28	50	
-	-	P8-P7: 172	-	5	60×49	53×41	43	
-	-	-	-	7	45×42	30×28	27	
-	-	-	-	8	53×49	41×35	47	
-	-	-	-	9	54×51	21×16	38	
-	-	-	-	10	37×52	32×28	30	

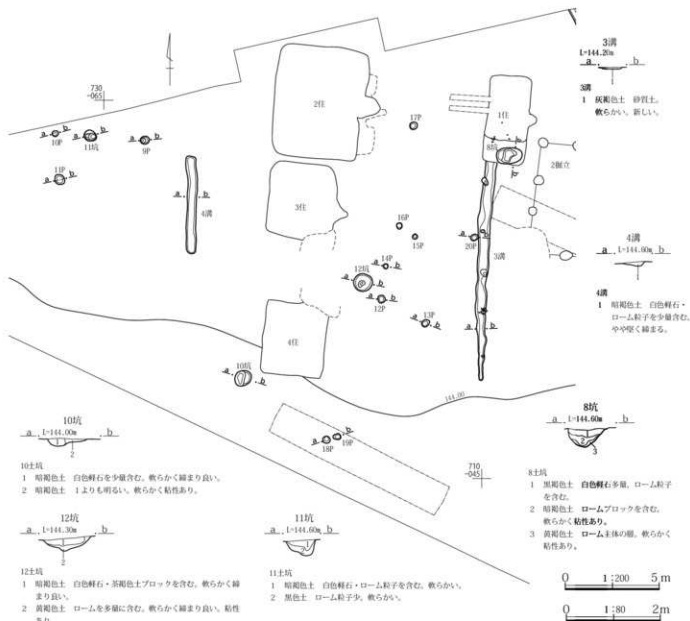
※1 計測値は1:30縮尺から取った数値

※2 柱穴間の距離は全てで計測



第84図 F区東半部溝・土坑・ピット位置図、溝・土坑断面図

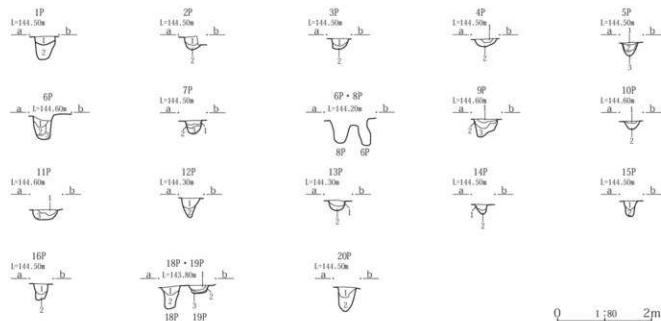
第4章 検出された遺構と遺物



第85図 F区西半部溝・土坑・ピット位置図、溝・土坑断面図

第22表 F区土坑計測表

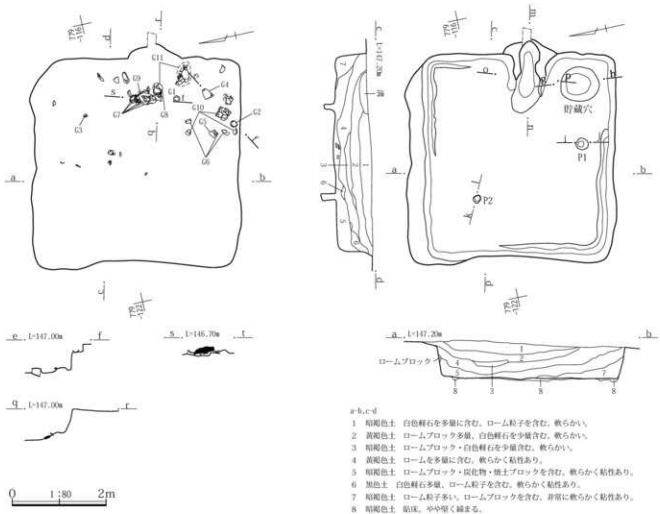
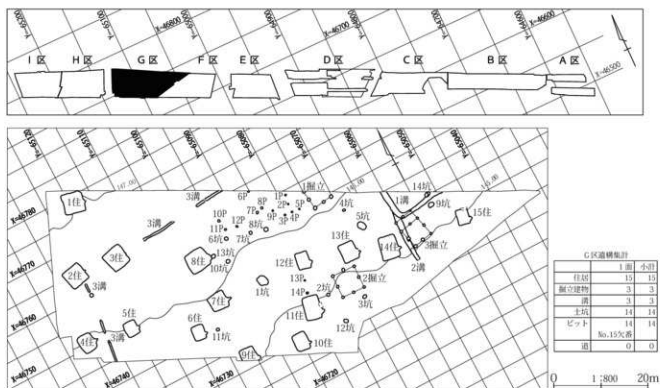
番号	遺構	区	確認者	検出位置	X-Y	重複関係	図-新	長×短×深(cm)	遺物登録	縮尺	時期・時代	備考
1	土坑	F	I		722-482			80×78×10				
2	土坑	F	I		722-484	2坑→3坑		88×68×12	土器器4			
3	土坑	F	I		722-485	2坑→3坑		80×78×24	土器器19, 須恵器1		奈良平安	
4	土坑	F	I		722-488	4土坑→1溝→5土坑		83×74×15	土器器18		奈良平安	
5	土坑	F	I		722-487	1窟立・4土坑→1溝→5土坑		90×80×11	土器器13		奈良平安	
6	土坑	F	I		727-483			86×76×14				
7	土坑	F	次巻									
8	土坑	F	I		727-493	11住→8土坑		136×85×60				
9	土坑	F	I		724-438	2窟立と重複		96×76×29	土器器16, 須恵器1		奈良平安?	第83図に掲載
10	土坑	F	I		715-457			80×81×17				
11	土坑	F	I		728-965			68×58×39				
12	土坑	F	I		729-494			100×94×27	土器器18		奈良平安	



第86図 F区ピット断面図

第23表 F区ピット計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X・Y	重層関係	目→面	長×短×深(cm)	土層説明	遺物目録	照片	時期・時代	備考
1	ピット	F			726-029	1層立と重層	目→面	49×43×54	1層褐色土 ロームブロック多。A ₂ 層少。軟らかい。2層褐色土 ローム粒子多。非常に軟らかく粘性あり。				
2	ピット	F			726-028	1層立と重層	目→面	36×31×30	1層褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。軟らかい。2層褐色土 ローム粒子多。軟らかく粘性あり。				
3	ピット	F			724-028	1層立と重層	目→面	39×35×25	2ピットと同じ。				
4	ピット	F			724-031		目→面	51×43×22	1層褐色土 白色軽石含む。軟らかくしまり良い。2層褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。				
5	ピット	F			722-031		目→面	31×25×29	1層褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。2層褐色土 白色軽石・ローム粒子多。軟らかい。3層褐色土 軟らかく粘性あり。				
6	ピット	F			728-036	7B1→6P	目→面	27×26×60	1層褐色土 ローム粒子・白色軽石少。軟らかくしまり良い。2層褐色土 ロームブロック多。軟らかい。3層褐色土 ロームブロック多。軟らかく粘性あり。				
7	ピット	F			722-038	1層立と重層	目→面	36×33×29	1層褐色土 白色軽石含む。軟らかい。2層褐色土 ローム土様の層。軟らかく粘性あり。3層褐色土 ローム粒子含む。軟らかく粘性あり。				
8	ピット	F			728-036	7B1→6P	目→面	46×37×35					
9	ピット	F			727-062		目→面	50×43×41	1層褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。2層褐色土 ローム粒子少。軟らかい。3層褐色土 黒色土を含む。軟らかく粘性あり。				
10	ピット	F			728-067		目→面	35×31×21	9ピットと同じ。				
11	ピット	F			725-067		目→面	61×52×24	9ピットと同じ。				
12	ピット	F			719-050		目→面	41×38×46	1層褐色土 白色軽石多。茶褐色土との混土。2層褐色土 白色軽石少。非常に軟らかい。				
13	ピット	F			718-048		目→面	45×36×23	12ピットと同じ。				
14	ピット	F			721-050		目→面	28×25×23	12ピットと同じ。				
15	ピット	F			722-048		目→面	28×28×36	12ピットと同じ。				
16	ピット	F			723-049		目→面	34×30×38	12ピットと同じ。				
17	ピット	F			728-048		目→面	43×40×43					
18	ピット	F			712-053		目→面	40×38×49	1層褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。2層褐色土 ローム粒子少。非常に軟らかい。				
19	ピット	F			712-052		目→面	42×32×38	1層褐色土 ローム粒子・白色軽石少。軟らかくしまり良い。2層褐色土 ロームブロックを含む。非常に軟らかい。3層褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。				
20	ピット	F			722-045		目→面	42×31×52	1層褐色土 茶褐色土ブロック・白色軽石を含む。軟らかい。2層褐色土 ローム粒子を含む。				



第87図 G区全体図、1住居(1)



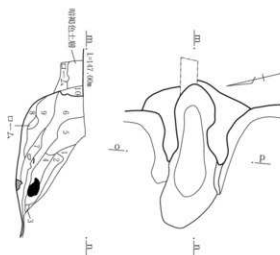
貯蔵穴 g8

- 1 赤褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 4 黄褐色土 壁の崩れ。



P1・P2 f1, k1

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・白色軽石を含む。軟らかく締まりよい。
- 2 黄褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性あり。



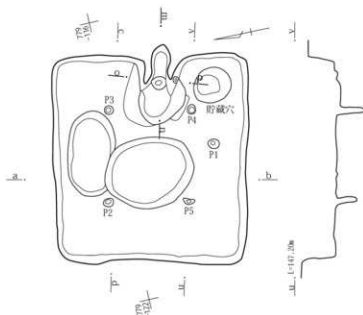
1.147.00m



カマド #n,o,p

- 1 黄褐色土 ローム主体の壁。軟らかく粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。
- 4 赤褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 5 黄褐色土 ローム主体の壁。
- 6 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 7 赤褐色土 焼土多量。ロームブロックを含む。軟らかい。
- 8 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む。軟らかく粘性あり。
- 9 暗褐色土 ロームブロック・粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 10 黄褐色土 ロームを土主体として焼けている。やや堅く締まる。
- 11 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。非常に軟らかく粘性あり。

0 1:40 1m

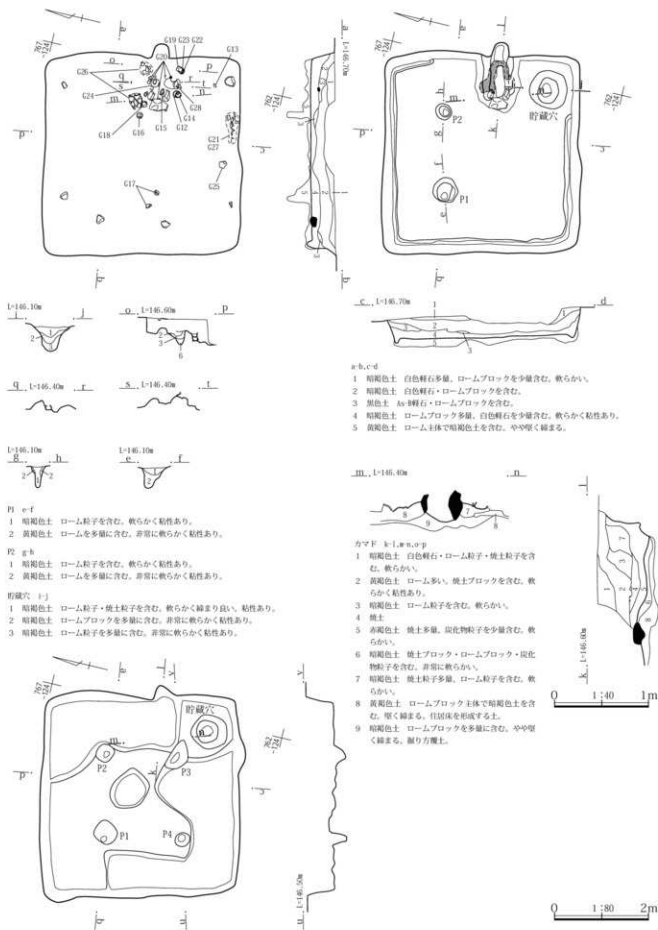


1.147.20m

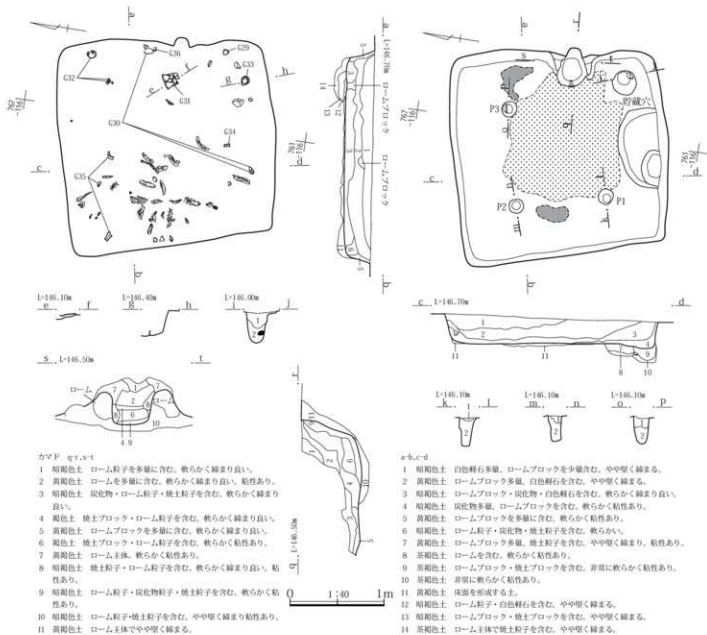
0 1:80 2m

第88図 G区1住居(2)

第4章 検出された遺構と遺物

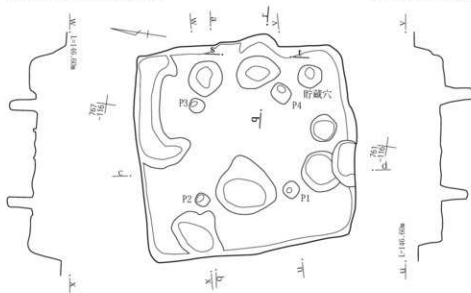


第89図 G区2住居



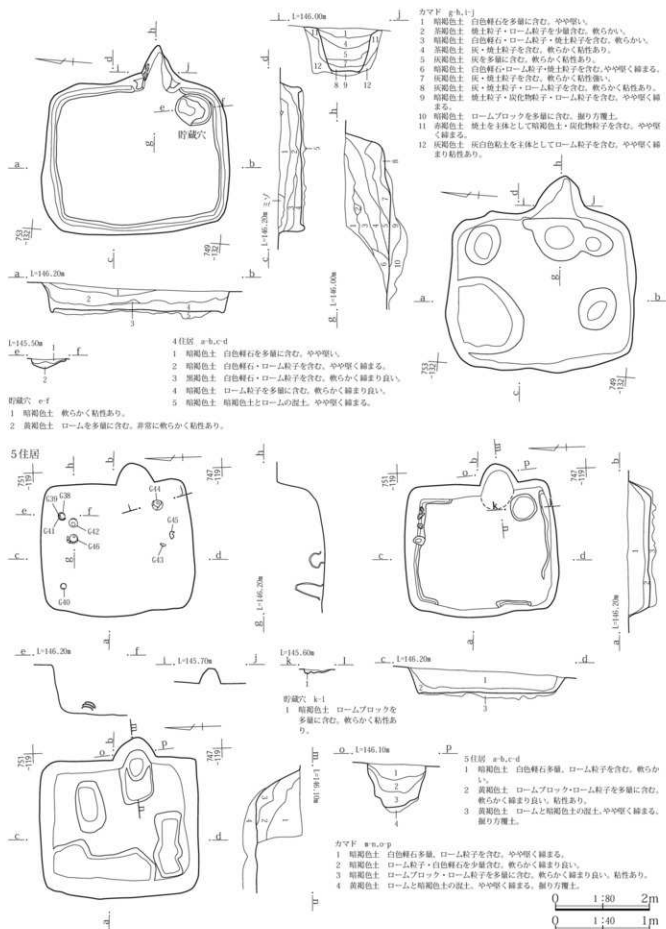
a,b,c,d

- 1 暗褐色土 白色輝石多量。ロームブロックを少量含む。やや硬く締まる。
- 2 黄褐色土 ロームブロック多量。白色輝石を含む。やや硬く締まる。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・炭化物・白色輝石を含む。軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 炭化物多量。ロームブロックを含む。軟らかく粘性あり。
- 5 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・炭化物・焼土粒子を含む。軟らかい。
- 7 黄褐色土 ロームブロック多量。焼土粒子を含む。やや硬く締まり。粘性あり。
- 8 茶褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性あり。
- 9 茶褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 10 茶褐色土 非常に軟らかく粘性あり。
- 11 黄褐色土 床面を形成する土。
- 12 暗褐色土 ローム粒子・白色輝石を含む。やや硬く締まる。
- 13 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む。やや硬く締まる。
- 14 茶褐色土 ローム主体で焼土粒子を含む。やや硬く締まる。

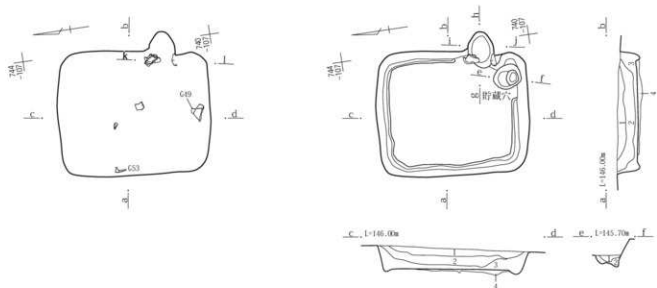


第90図 G区3住居

第4章 検出された遺構と遺物



第91図 G区4・5住居



a-b, c-d

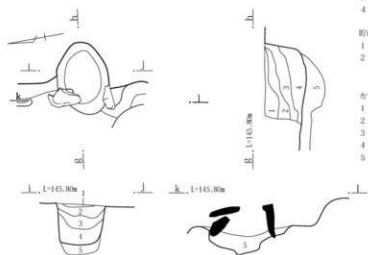
- 1 暗褐色土 白色軽石多量、ローム粒子を含む、やや硬。
- 2 黒褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む、軟らかい。
- 3 茶褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む、軟らかく締まり良い。
- 4 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土、やや硬く締まる、振り方覆土。

貯蔵穴 e-f

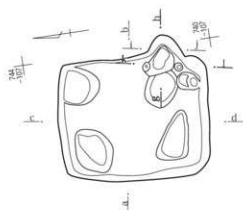
- 1 暗褐色土 ロームブロック・炭化物を含む、軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物を含む、非常に軟らかく粘性あり。

カマド g-h, i-j

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・茶褐色土ブロックを含む、やや硬く締まる。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む、やや硬く締まる。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む、軟らかく締まり良い、粘性あり。
- 4 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む、軟らかく締まり良い、粘性あり。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・暗褐色土の混土、やや硬く締まる、振り方覆土。



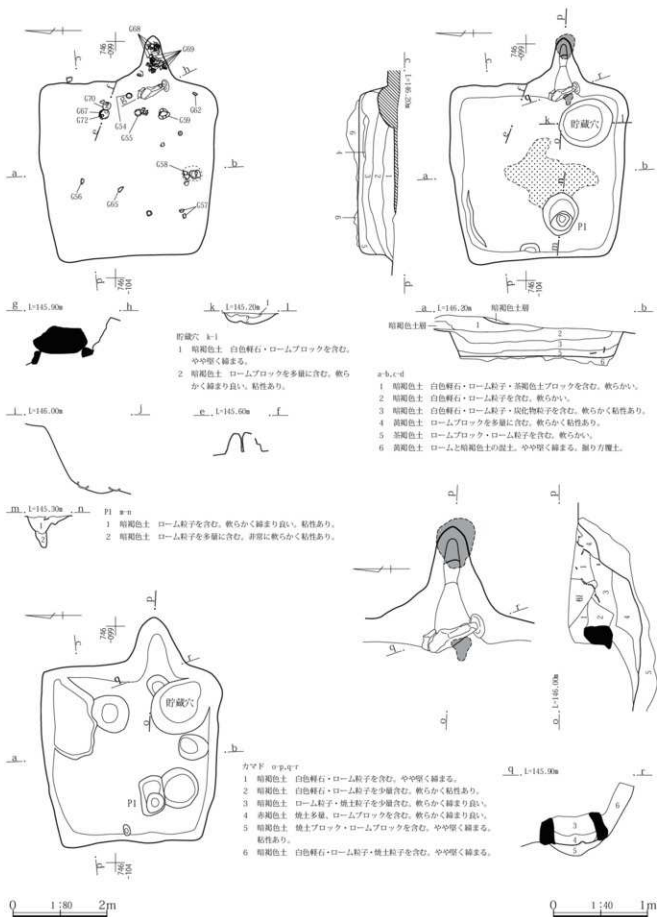
0 1:40 1m



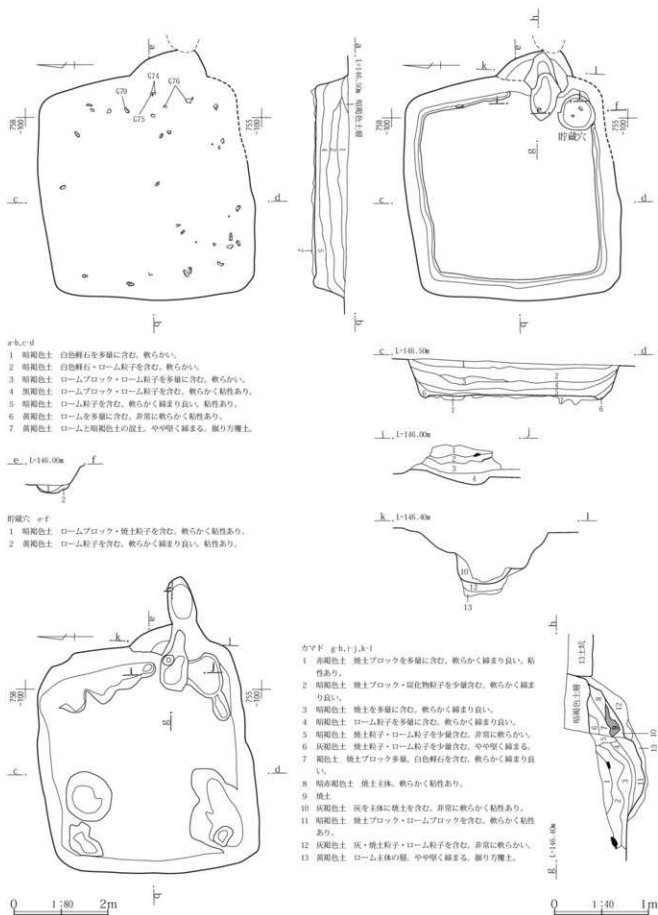
0 1:80 2m

第92図 G区6住居

第4章 検出された遺構と遺物

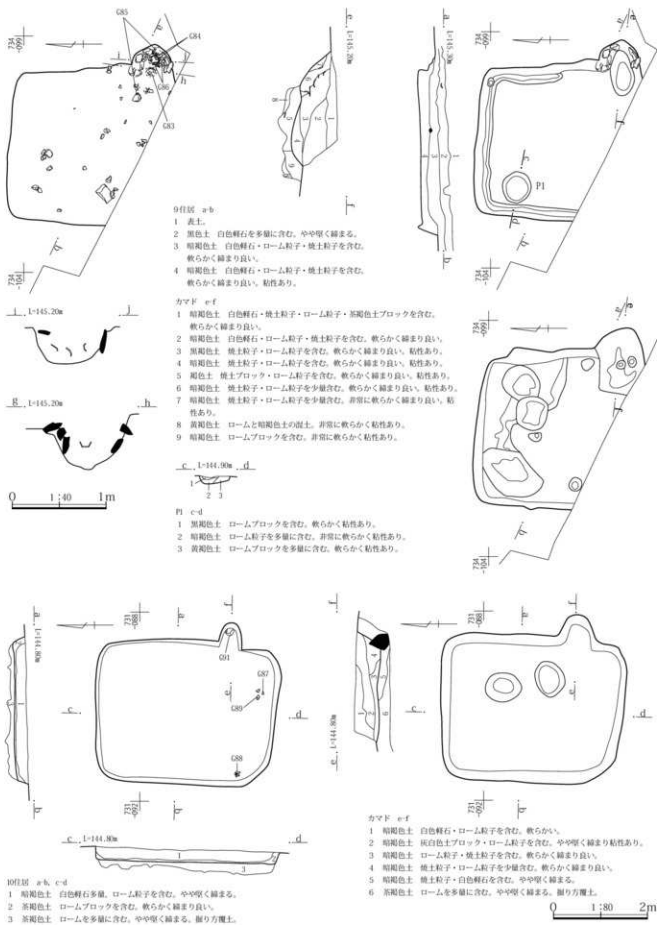


第93図 G区7住居

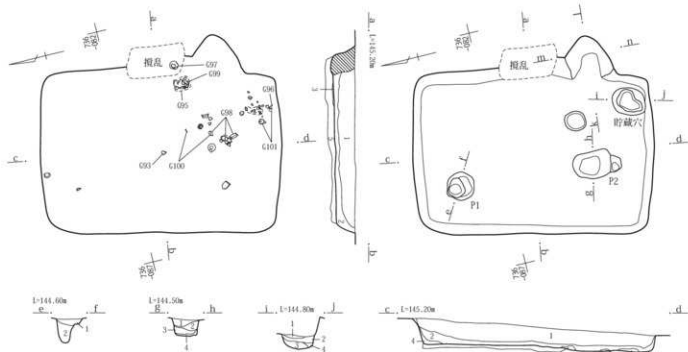


第94図 G区8住居

第4章 検出された遺構と遺物



第95図 G区9・10住居



a, b, c, d

- 1 褐褐色土 白色軽石多量、茶褐色土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 褐褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 3 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 4 茶褐色土 軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 5 黄褐色土 ローム主体で褐褐色土を含む。やや硬く締まる。
- 6 褐褐色土 ロームブロックを多量に含む。やや硬く締まり粘性あり。
- 7 褐褐色土 白色軽石・黒色土を含む。軟らかくて締まり良い。粘性あり。

貯蔵穴 (1)

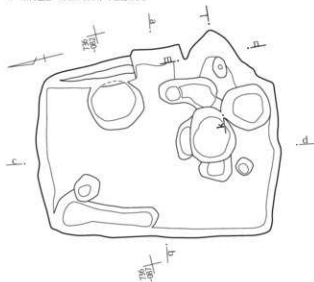
- 1 褐褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを少量含む。非常に軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 2 褐褐色土 ロームブロックを含む。軟らかい。
- 3 褐褐色土 軟らかく粘性あり。
- 4 茶褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性あり。

P1・P2 e, f, g, h

- 1 褐褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかい。
- 2 黄褐色土 ローム主体、焼土を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 3 褐褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 4 茶褐色土 非常に軟らかく粘性あり。

カマド h-l, m

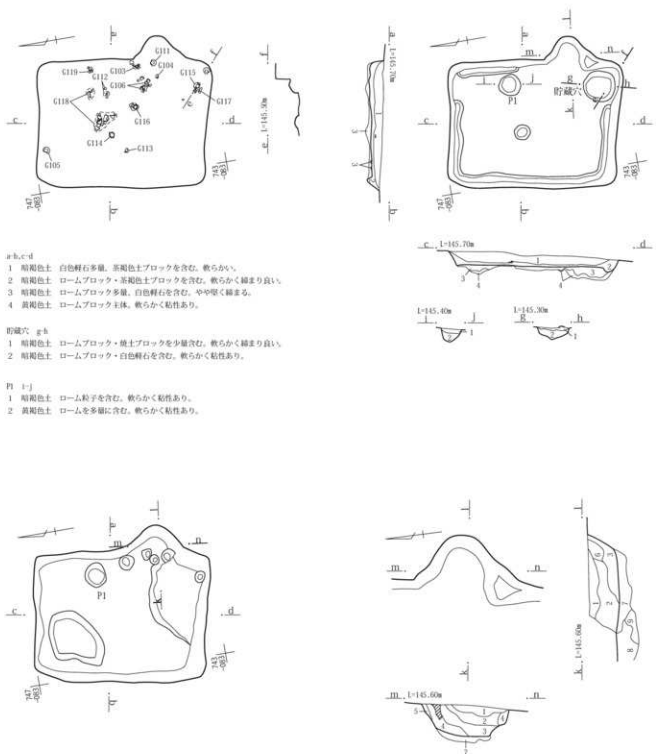
- 1 褐褐色土 白色軽石・ローム粒子・茶褐色土を含む。
- 2 黄褐色土 ローム多量。焼土ブロックを含む。軟らかく粘性あり。
- 3 褐褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 4 焼土 わずかにロームを含む。
- 5 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。軟らかい。
- 6 褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。
- 7 焼土
- 8 茶褐色土 焼土粒子を多量に含む。非常に軟らかい。
- 9 黄褐色土 やや硬く締まる。固り方硬土。
- 10 褐褐色土 ローム粒子・白色軽石・焼土粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 11 黄褐色土 ローム層、地山。



0 1:40 1m

0 1:80 2m

第4章 検出された遺構と遺物



a,b,c,d

- 1 明褐色土 白色軽石多量、赤褐色土ブロックを含む、軟らかい。
- 2 明褐色土 ロームブロック・赤褐色土ブロックを含む、軟らかく締まり良い。
- 3 明褐色土 ロームブロック多量、白色軽石を含む、やや堅く締まる。
- 4 黄褐色土 ロームブロック主体、軟らかく粘性あり。

貯蔵穴 g,h

- 1 明褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを少量含む、軟らかく締まり良い。
- 2 明褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む、軟らかく粘性あり。

P1 j

- 1 明褐色土 ローム粒子を含む、軟らかく粘性あり。
- 2 黄褐色土 ロームを多量に含む、軟らかく粘性あり。

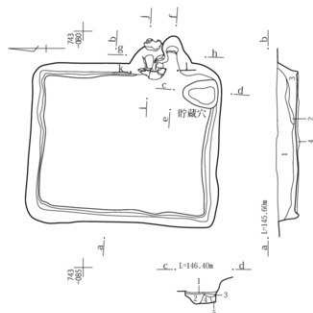
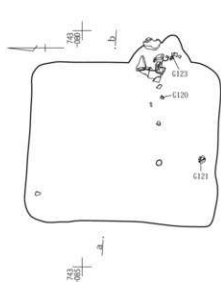
カマド k-l,m

- 1 明褐色土 白色軽石多量、焼土粒子・ローム粒子を少量含む、軟らかく締まり良い。
- 2 明褐色土 白色軽石・赤褐色土ブロック・焼土粒子を含む、軟らかく締まり良い。
- 3 赤褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む、軟らかい。
- 4 明褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む、軟らかく締まり良い、粘性あり。
- 5 明褐色土 焼土粒子を少量含む、軟らかく締まり良い。
- 6 赤褐色土 焼土多量、ローム粒子を含む、やや堅く締まる。
- 7 褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む、軟らかく締まり良い。
- 8 明褐色土 ロームブロック多量、白色軽石を含む、やや堅く締まる、振り方覆土。
- 9 黄褐色土 ロームブロック主体、軟らかく粘性あり、振り方覆土。

0 1:80 2m

0 1:40 1m

第97図 G区12住居

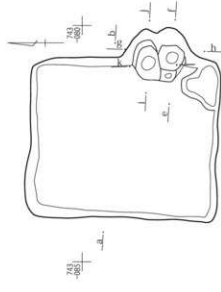
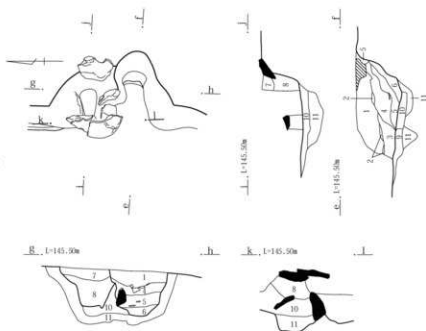


#b

- 1 暗褐色土 白色軽石多量、茶褐色土ブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む、やや硬い。
- 2 黄褐色土 ロームを多量に含む、軟らかく締まり良い。
- 3 茶褐色土 ローム粒子を多量に含む、軟らかく締まり良い、粘性あり。
- 4 黄褐色土 ロームブロック主体、やや硬く締まる、掘り方層土。

貯蔵穴 c-d

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・焼土粒子を含む、やや硬く締まる。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量、焼土ブロックを少量含む、軟らかく締まり良い、粘性あり。
- 3 黒色土 白色軽石を含む、やや硬く締まる。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む、軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を含む、軟らかく粘性あり。

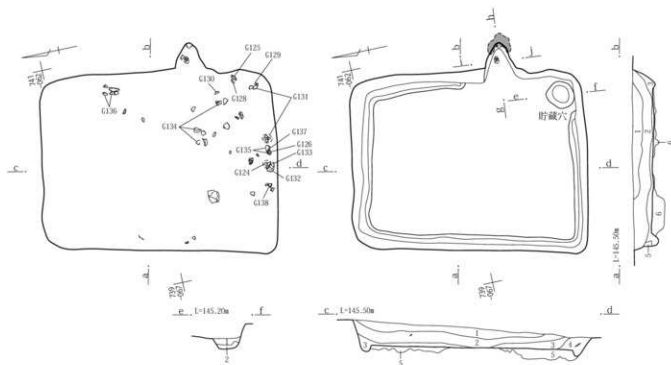


0 1:40 1m

カマド e-f,g,h,i,j,k-l

- 1 暗褐色土 白色軽石・茶褐色土ブロック・ローム粒子を含む、軟らかく締まり良い。
- 2 灰
- 3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む、やや硬く締まる。
- 4 黄褐色土 焼土ブロック・焼土粒子を多量に含む、やや硬く締まり粘性あり。
- 5 赤褐色土 焼土を多量に含む、軟らかく締まり良い。
- 6 黄褐色土 焼土粒子を多量に含む、軟らかく粘性あり。
- 7 暗褐色土 白色軽石を多量に含む、軟らかく締まり良い。
- 8 暗褐色土 ローム粒子を含む、軟らかく締まり良い。
- 9 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを含む、非常に軟らかく締まり良い。
- 10 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・灰化物粒子を含む、非常に軟らかく締まり良い。
- 11 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む、軟らかく粘性あり。

第4章 検出された遺構と遺物

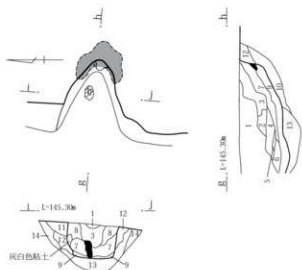


a,b,c,d

- 1 暗褐色土 白色輝石多量。茶褐色土ブロックを含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 白色輝石・茶褐色土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 茶褐色土ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を含む。やや硬く締まり粘性あり。
- 4 暗褐色土 粘土・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 5 暗褐色土 軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 6 暗褐色土 暗褐色土とロームの混土。やや硬く締まる。

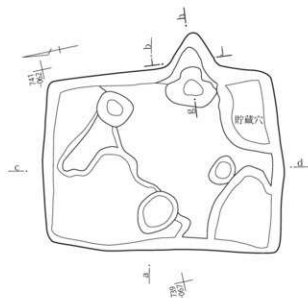
貯蔵穴 e,f

- 1 暗褐色土 粘土粒子・ロームブロック・白色輝石を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ロームを多量を含む。非常に軟らかく粘性あり。



カマド g,h,i

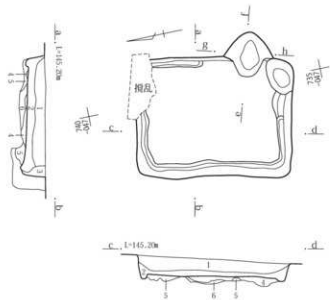
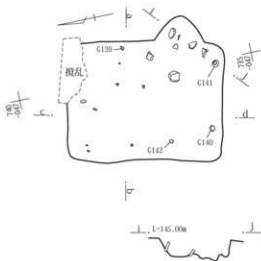
- 1 灰褐色土 白色輝石・ローム粒子・焼土粒子・灰白色土ブロックを含む。やや硬く締まる。
- 2 灰褐色土 灰を含む。やや硬く締まる。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。軟らかい。
- 4 暗褐色土 焼土ブロック・灰を含む。軟らかい。
- 5 灰 軟らかい。
- 6 暗褐色土 焼土粒子を含む。やや硬く締まり粘性あり。
- 7 赤褐色土 焼土を多量を含む。軟らかく粘性あり。
- 8 暗褐色土 炭化物・焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 9 灰白色土 灰白色粘土を主体に焼土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 10 暗褐色土 ロームブロックを多量を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 11 暗褐色土 白色輝石・ローム粒子を含む。やや硬く締まる。
- 12 赤褐色土 焼土ブロックを多量を含む。軟らかく締まり良い。
- 13 灰褐色土 灰白色粘土・焼土粒子・白色輝石を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 14 暗褐色土 ローム粒子・白色輝石を少量含む。やや硬く締まる。



0 1:80 2m

0 1:40 1m

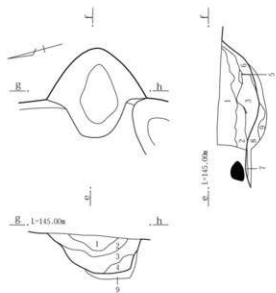
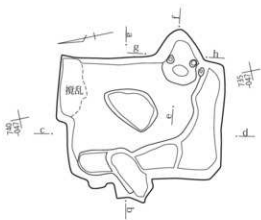
第99図 G区14住居



a-b, c-d

- 1 暗褐色土 白色軽石・赤褐色土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 赤褐色土ブロック・ローム粒子を少量含む。軟らかい。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。やや堅く締まる。
- 5 黄褐色土 暗褐色土とロームの混土。
- 6 黄褐色土 ローム主体。

0 1:80 2m

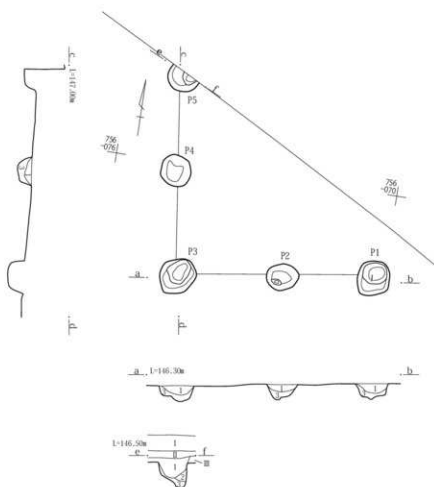
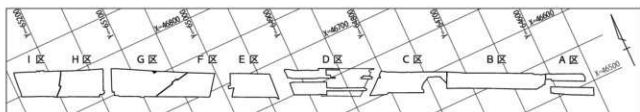


a-b, c-d, e-f, g-h

- 1 暗褐色土 赤褐色土ブロック多量、白色軽石・焼土粒子を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を少量含む。軟らかい。
- 3 褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 4 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 5 灰褐色土 灰を多量に含む。焼土粒子を含む。
- 6 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 7 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子・白色軽石を含む。堅く締まる。
- 8 黄褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 9 黄褐色土 ローム主体、やや堅い。

0 1:40 1m

第4章 検出された遺構と遺物



P1 ~ P4 a-b, c-d

- 1 黄褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。やや固く締まる。
- 2 黄褐色土 ローム粒子を含む。1よりもろい。
- 3 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。

P5 e-f

1 ~ 3は、a-b土層と同じ。

- I 表土
- II 黄褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。
- III 赤褐色土 ローム層砂。

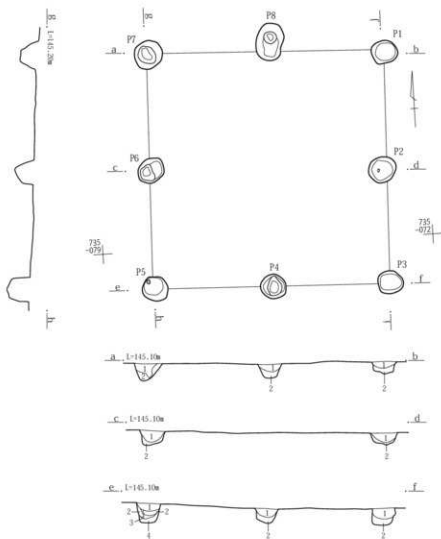
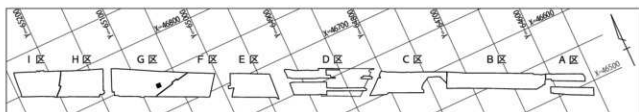
0 1:80 2m

第101図 G区1掘立柱建物

第24表 G区1掘立柱建物計測表

平面形 長方形		屋根 2間×一間		長軸方位N-5°-W				
桁行 cm	梁行 cm	桁行材間 cm	梁行材間 cm	屋根 番号	上ノcm長径×短径	下ノcm長径×短径	深さcm	備考
P1-P3: 417	P3-P4: 211	P1-P2: 213	P2-P3: 206	1	81×74	36×27	43	
				2	69×55	9×6	38	
				3	86×72	40×29	29	
				4	70×65	6×37	28	
				5	—	—	—	

※1 計測値は1/200原図から起こした数値
 ※2 柱穴間の距離は全てで計測



P1～P4・P6～P8 a,b,c,d,e,f

- 1 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく粘性あり。

P5 e-fの左端

- 1 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。軟らかい。
- 3 黄褐色土 ローム主体。
- 4 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

0 1:90 2m

第102図 G区2掘立柱建物

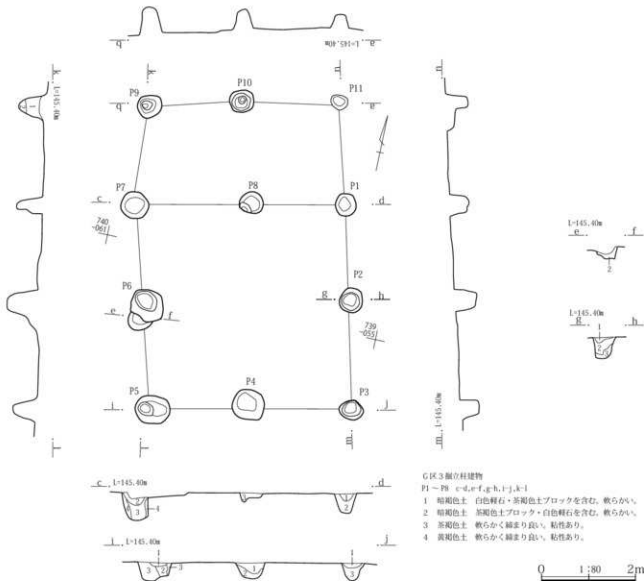
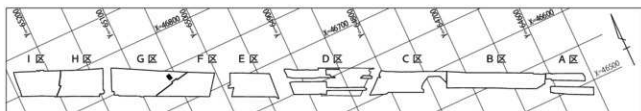
第25表 G区2掘立柱建物計測表

平面形 長方形		幅横 2間×2間		長軸方位N-3°-E				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	階層	1/4m長径×短径	下1/4m長径×短径	深さcm	備考
P1-P3: 488	P1-P7: 906	P1-P2: 251	P1-P8: 245	1	56×53	43×38	28	
P8-P4: 530	P2-P6: 900	P2-P3: 237	P8-P7: 266	2	60×53	43×42	24	
P7-P5: 490	P3-P5: 902	P7-P6: 249	P3-P4: 248	3	54×49	46×34	37	
		P6-P5: 242	P4-P5: 256	4	55×52	26×17	33	
				5	56×52	40×37	47	
				6	61×49	19×16	37	
				7	61×50	28×15	42	
				8	79×55	15×10	52	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値

※2 柱穴間の距離は必ずで計測

第4章 検出された遺構と遺物



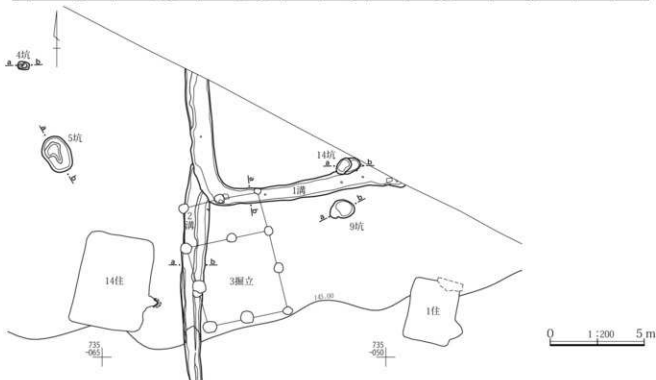
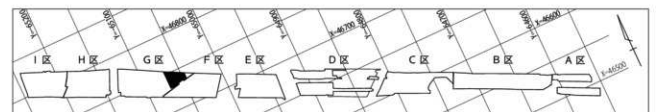
第103図 G区3掘立柱建物

第26表 G区3掘立柱建物計測表

平面形 長方形		幅横 3間×2間		長軸方位N-12°-W				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	掘柱番号	上/5cm長径×短径	下/5cm長径×短径	深さ cm	備考
P11-P1: 651	P11-P9: 410	P11-P1: 220	P11-P10: 204	1	48×44	30×25	42	
P10-P4: 642	P1-P7: 443	P1-P2: 201	P10-P9: 206	2	52×49	29×26	47	
P9-P5: 640	P2-P6: 433	P2-P3: 226	P1-P8: 212	3	52×42	28×24	42	
	P3-P5: 435	P10-P8: 223	P8-P7: 233	4	73×60	44×34	48	
		P8-P4: 400	P3-P4: 220	5	75×59	26×17	53	
		P9-P7: 211	P4-P5: 215	6	92×74	39×27	74	
		P7-P6: 204		7	58×56	42×35	64	
		P6-P5: 229		8	50×48	14×8	29	
				9	53×48	11×9	61	13P
				10	53×52	9×9	45	
				11	37×30	25×18	49	

※1 計測値は1/20縮尺から起こした数値

※2 柱穴間の距離は芯々で計測



0 1:200 5m



- 1 溝
1 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかい。
2 黄褐色土 ロームを多量に含む。



- 2 溝
1 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を少量含む。軟らかい。
2 茶褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。



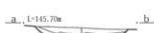
- 4 土坑
1 暗褐色土 白色軽石を含む。軟らかい。
2 暗褐色土 茶褐色土ブロック多量。白色軽石を含む。軟らかい。
3 黄褐色土 ロームを多量に含む。やや硬く締まる。



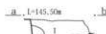
- 9 土坑
1 暗褐色土 白色軽石・茶褐色土ブロックを含む。軟らかく締まり弱い。
2 黄褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかい。
3 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。軟らかく締まり強い。
4 暗褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。



- 14 土坑
1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を少量含む。軟らかい。
2 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。



- 14 土坑
1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。やや硬い。
2 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかく粘性あり。
3 黄褐色土 ロームを多量に含む。やや硬く粘性あり。



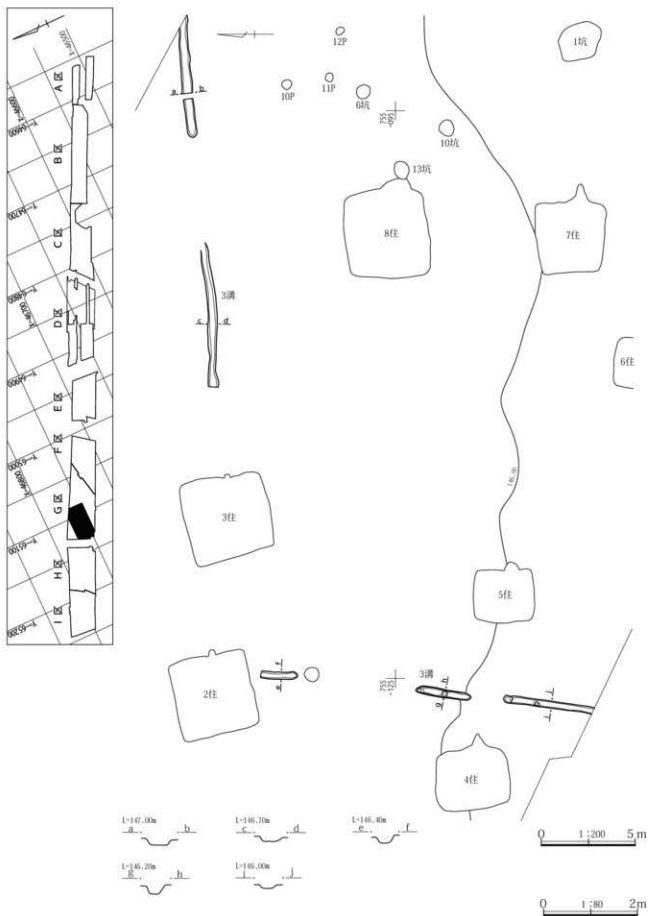
- 14 土坑
1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。やや硬い。
2 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかく粘性あり。
3 黄褐色土 ロームを多量に含む。やや硬く粘性あり。

0 1:80 2m

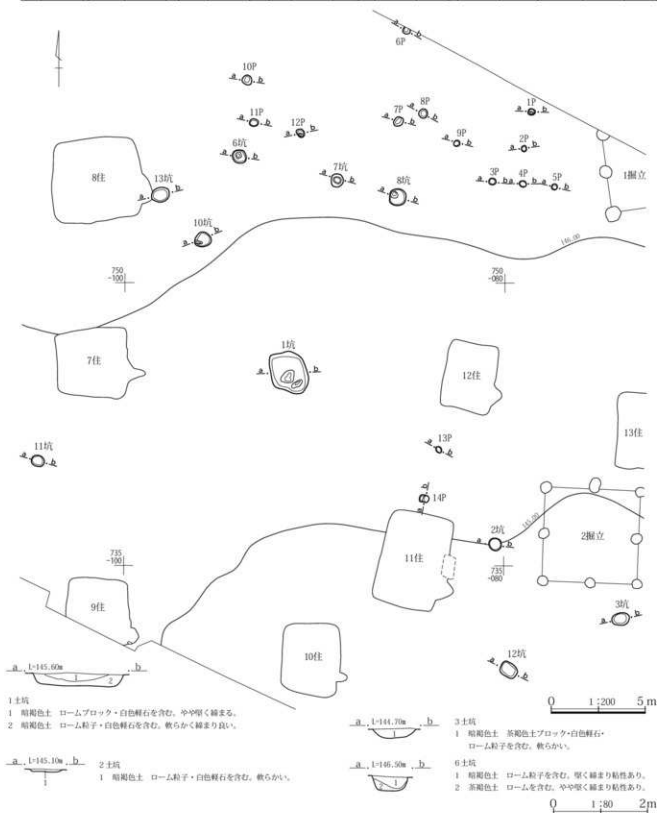
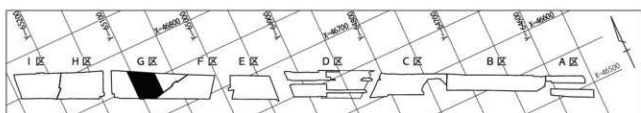
第104図 G区1・2溝、4・5・9・14土坑

第27表 G区溝計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	参照関係	目一新	長さ・幅・深さ(m・cm・cm)	遺物・伴出	層土	破片	時期・時代	備考
1	溝	G	I	743	750-049 ~ 000	1溝→14坑, 3掘立と重複		17.48 × 36-129 × 5-27			土師器I, 須恵器I 須恵器I	平安	須恵器残片1, 須恵器杯 底面1, 須恵器杯底面1
2	溝	G	I	733	745-059 ~ 060	3掘立と重複		11.50 × 64-134 × 4-13			土師器I, 須恵器I	奈良平安	
3	溝	G	I	744	766-000 ~ 126			23.82 × 17-54 × 4-15					



第105図 G区3溝



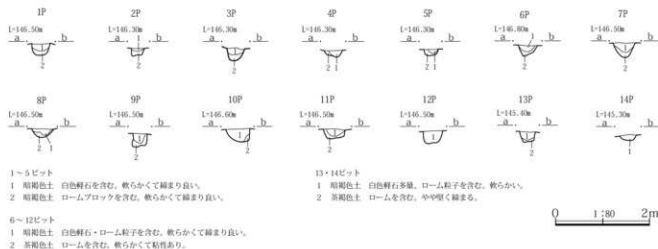
第106図 G区中央部土坑・ピット位置図、1～3・6土坑断面図

第4章 検出された遺構と遺物



第28表 G区土坑計測表

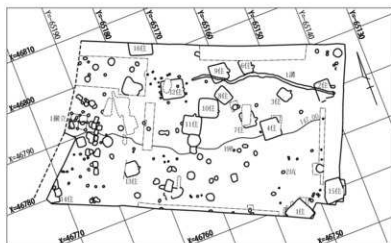
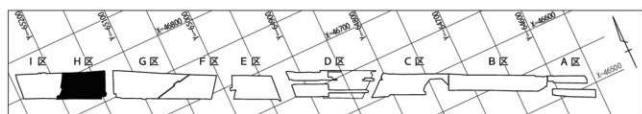
番号	遺構	区	緯度	緯度位置	X-Y	重埋関係	旧→新	長さ×深さ(m)	遺物登録	切片	時期・時代	備考
1	土坑	G			745-001			215×189×60		土坑段点+70g, 3g 重埋	奈良平安	須藤昭吉1, 3g重 器機1, 土器器機2
2	土坑	G			736-080			67×65×10				
3	土坑	G			732-023			93×68×21				
4	土坑	G			730-009			61×61×50				
5	土坑	G			745-067			105×140×31				
6	土坑	G			736-094			79×71×39				
7	土坑	G			755-088			68×63×33				
8	土坑	G			754-063			87×86×73				
9	土坑	G			742-052			133×98×71				
10	土坑	G			752-065			87×86×23				
11	土坑	G			740-104			70×58×37				
12	土坑	G			729-079			96×72×23				
13	土坑	G			734-068			98×78×25		土器器機		
14	土坑	G			745-052			130×83×71				



第29表 G区ピット計測表

番号	遺構	区	緯度	緯度位置	X-Y	重埋関係	旧→新	長さ×深さ(m)	遺物登録	切片	時期・時代	備考
1	ピット	G			759-078			41×35×32				
2	ピット	G			757-079			34×36×35				
3	ピット	G			755-080			40×37×35				
4	ピット	G			755-079			39×35×28				
5	ピット	G			757-075			32×32×26				
6	ピット	G			763-085			41×28				
7	ピット	G			758-085			56×46×42				
8	ピット	G			756-084			49×47×36				
9	ピット	G			757-082			35×31×32				
10	ピット	G			760-083			55×51×41				
11	ピット	G			758-083			46×40×30				
12	ピット	G			757-080			48×36×38				
13	ピット	G			741-083			57×29×34				
14	ピット	G			738-084			48×38×48				

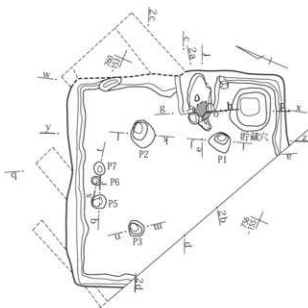
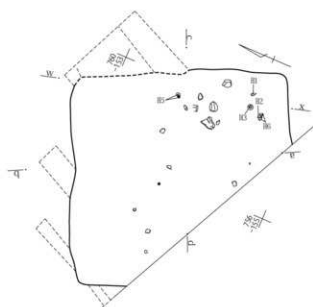
第107図 G区7・8・10～13土坑、1～14ピット断面図



H区遺構集計

	1画	2画	合計
柱礎	15	0	15
掘立柱建物	1	0	1
溝	1	0	1
土坑	57	15	72
ピット	91	0	91
溝	0	0	0

0 1:900 20m



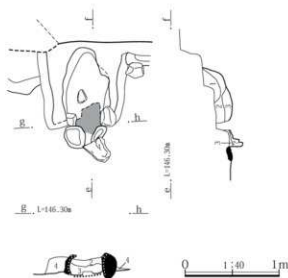
0 1:80 2m

a,b,c,d

- 1 黒褐色土 におい黄褐色土を顔点状、白色軽石を多く含む。締まっている。
- 2 黒褐色土 黄褐色軽石を含む。
- 3 におい黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。
- 4 黄褐色土 汚れたローム。
- 5 3よりもロームブロック多い。

第108図 H区全体図,H区1住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



カマド e, f, g, h

- 1 に近い黄褐色土 焼土ブロックを含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 3 灰黄褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 4 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。釉の粘土。



P1, P2 L=145.80

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 に近い黄褐色土 汚れたローム。



P3 a-b



P5 a-b

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。緑まりなし。



P4 a-p

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。緑まりなし。



P7 q-r, s-t



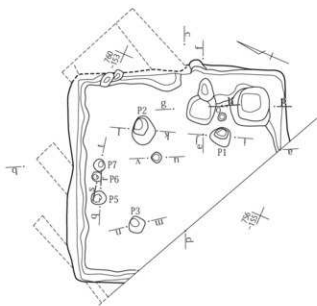
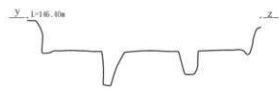
P5 ~ P7 q-r, s-t

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。



P8 u-v

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。



2a, L=146.40m



2a-2b

- 1 ロームブロック 灰黄褐色土ブロックを含む。釉の片塵土。

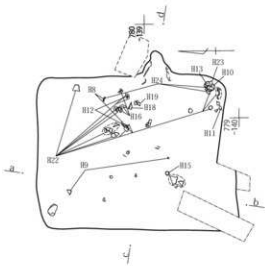
2c, L=146.40m



2d

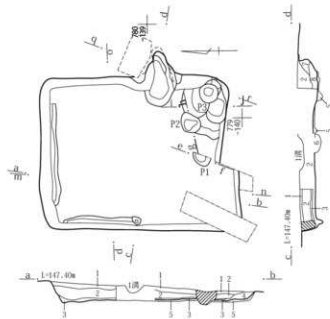
0 1:80 2m

第109図 H区1住居(2)



a, b, c, d

- 1 黒褐色土 黄白色軽石を含む。締まっている。
- 2 黒褐色土 灰黒褐色土ブロック(頂点状)・黄白色軽石を含む。締まっている。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 4 ロームブロックと近い・黄褐色土の凝土。ローム多い。
- 5 3に似る。堅い。球を形成する土。
- 6 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。凝り方の上。
- 7 黒褐色土 2にロームブロック・焼土粒子を少量含む。
- 8 黒褐色土 2に焼土粒子・炭化物を含む。



1:147.00m



P1 e-f

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。締まっている。

1:147.30m



P3 j-j'

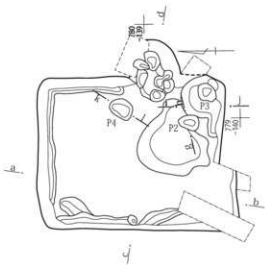
- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。締まりなし。
- 2 1に似るがロームブロック多い。締まりなし。

1:147.30m



P2 g-h

- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。締まりなし。
- 2 1よりもローム粒子少ない。締まりなし。



1:147.00m



P4 k-l

- 1 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。

m, 1:147.60m



o, 1:147.30m

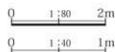
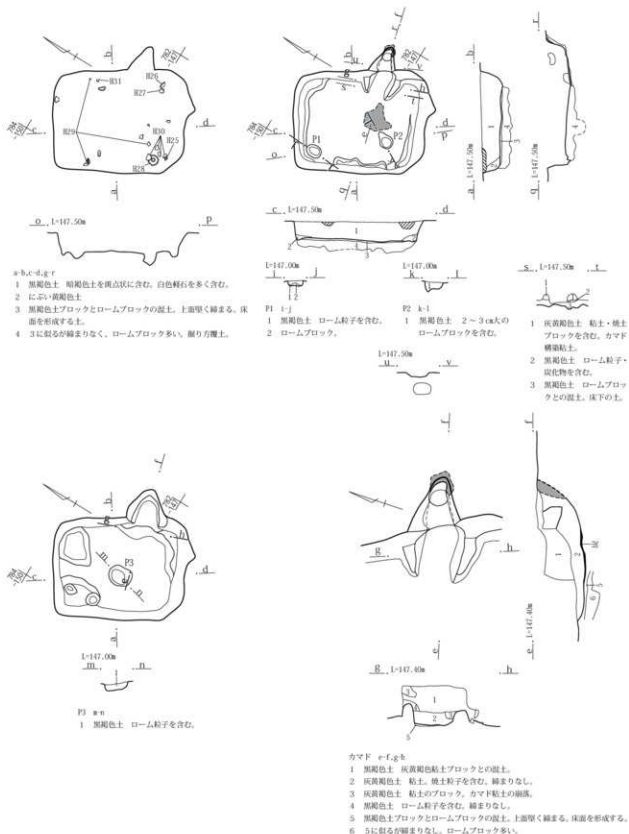


q, 1:147.50m

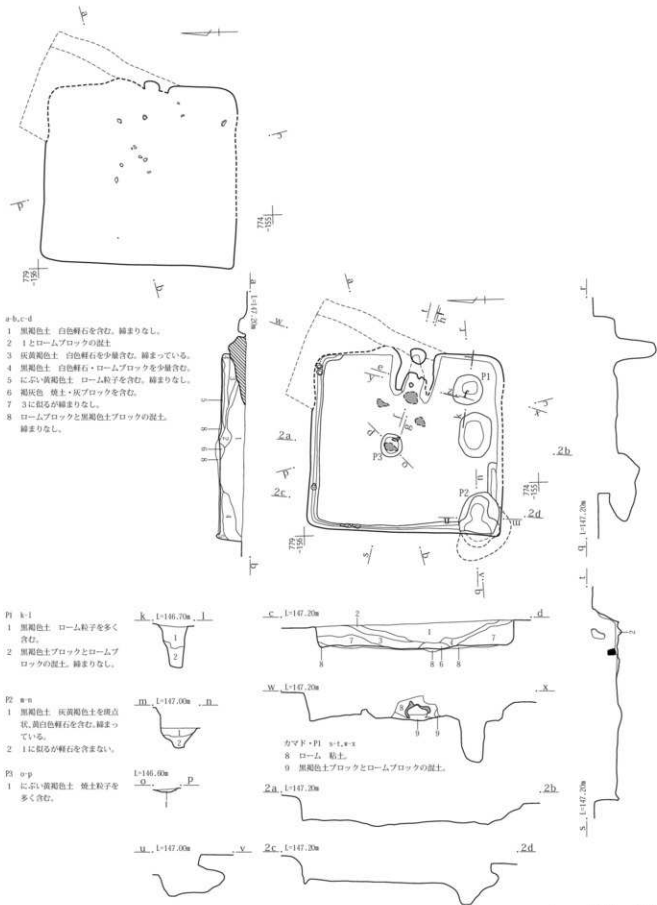


0 1:80 2m

第4章 検出された遺構と遺物

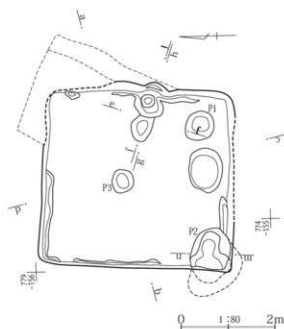
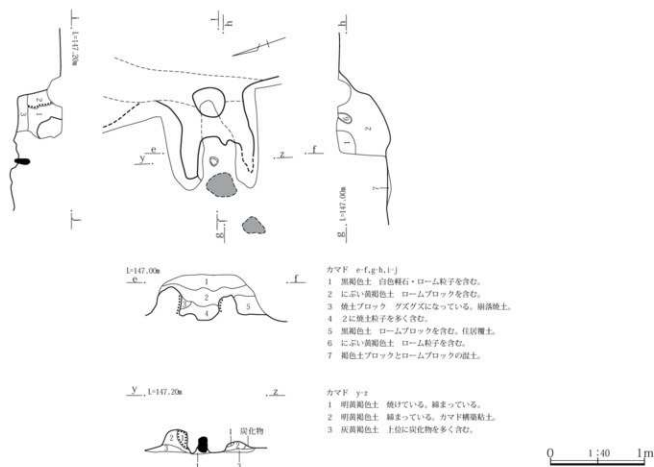


第111図 H区3住居

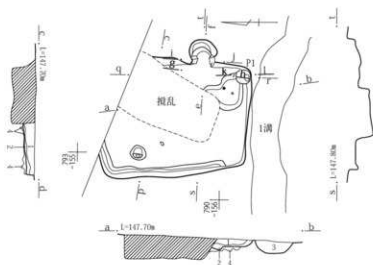


第112図 H区4住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第113図 H区4住居(2)



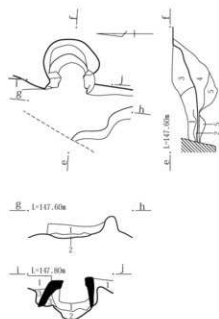
※b,c,d

- 1 黒褐色土 黄白色軽石を含む。締まっている。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 濃い・黄褐色土 やや灰色。締まりなし。1溝覆土。
- 4 2に似るが締まりなし。上面は堅く締まる。床下の土。



Pl 3-1

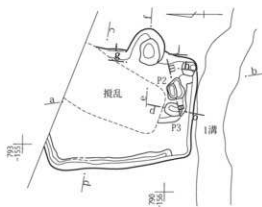
- 1 黒褐色土 炭化物・ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 濃い・黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。



カマド ※f,g,h,i,j

- 1 黒褐色土 焼土粒子を含む。締まりなし。
- 2 1にロームブロックを含む。
- 3 灰黄褐色土 焼土粒子を多く含む。上位にロームブロック含む。
- 4 灰黄褐色土 焼土粒子を含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロックを含む。

0 1:40 1m



L-147.80m
m

L-147.80m
p

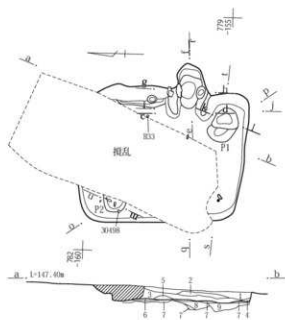
P2 ※n,o,p

- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

0 1:80 2m

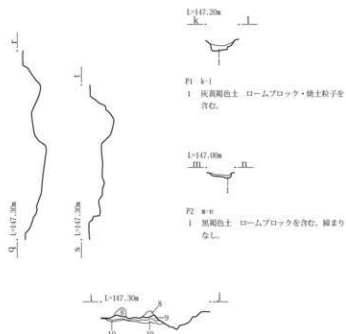
第114図 H区6住居

第4章 検出された遺構と遺物



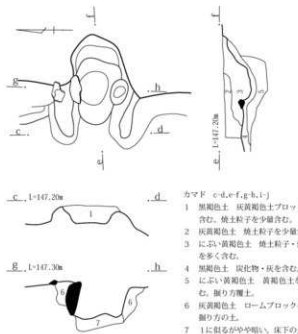
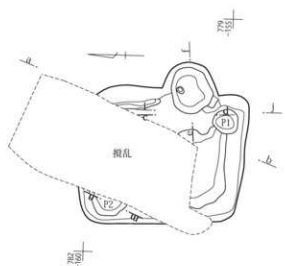
a-b

- 1 灰黄褐色土 白色軽石を含む。
- 2 にぶい黄褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。
- 3 暗褐色土 白色軽石を含む。2よりも暗い。締まっている。
- 4 3にロームブロックを含む。締まりなし。
- 5 ロームブロック・暗褐色土ブロック・焼土粒子の混土。
- 6 黒褐色土 ローム粒子を含む。締まっている。上面凹凸。床面を形成する土。
- 7 6に似る。
- 8 にぶい黄褐色土ブロックとロームブロックの混土。床下の土。
- 9 黒褐色土 白色軽石・焼土粒子を多く含む。



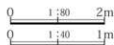
カマド 1-j

- 8 明黄褐色土 焼土粒子を含む。カマド施設粘土。
- 9 灰褐色土 炭化物・焼土粒子を含む。
- 10 明黄褐色土 汚れたローム。



カマド c-d,e-f,g-h,1-j

- 1 黒褐色土 灰黄褐色土ブロックを複数状に含む。焼土粒子を少量含む。
- 2 灰黄褐色土 焼土粒子を少量含む。
- 3 にぶい黄褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。
- 4 黒褐色土 炭化物・灰を含む。
- 5 にぶい黄褐色土 黄褐色土を複数状に含む。振り方難土。
- 6 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。焼土粒子方の土。
- 7 1に似るがやや暗い。床下の土。



第115図 H区7住居

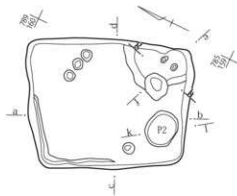
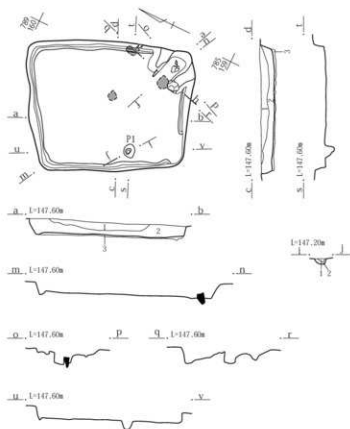


a b, c d

- 1 黒褐色土 褐色土を横点状、黄白色軽石を含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック2~5cm大を含む。
- 3 2に似るが厚く締まっている。床面を形成する土。

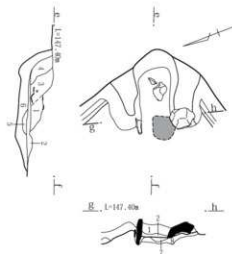
P1 1-1

- 1 黒褐色土 ローム粒土を含む。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。



P2 k-l

- 1 黄褐色土 ローム粒土を含む。締まりなし。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。



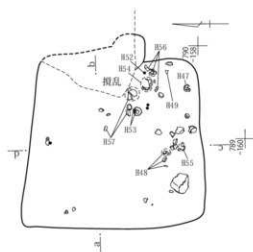
カマド e-f, g-h

- 1 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒土を含む。締まりなし。
- 2 黒褐色土 ローム粒土・焼土粒土を含む。締まりなし。
- 3 に近い黄褐色土 焼土粒土を含む。
- 4 3に焼土ブロックを含む。
- 5 焼土
- 6 3にロームブロックを多く含む。
- 7 2に近い。
- 8 ロームブロック 汚れている。

0 1:80 2m

0 1:40 1m

第4章 検出された遺構と遺物



a b, c, d

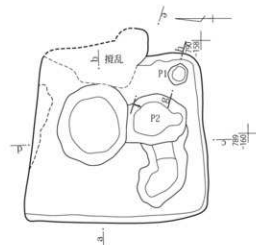
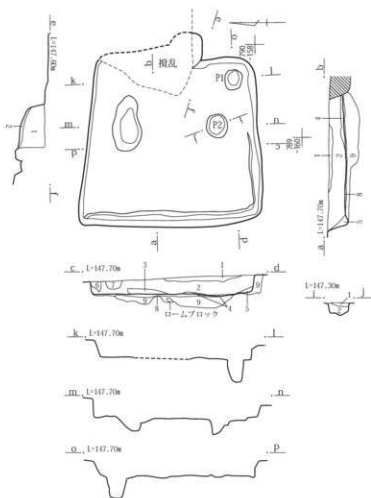
- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。
- 2 1にぶい黄褐色土を塊点状、ローム粒子を含む。締まっている。
- 3 灰黄褐色土 ローム粒子を含む。2よりも細かい。締まりなし。
- 4 3と同じ
- 5 3にロームブロックを含む。
- 6 灰黄褐色土 締まりなし。軽石なし。
- 7 1と同色。6に似る。締まりなし。
- 8 黒褐色土 ロームブロックを含む。床面を形成する土。上層明け。
- 9 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。締まりなし。

カマF e-f

- 1 灰黄褐色土 黄白色軽石を含む。締まっている。
- 2 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を含む。ロームブロックを少量含む。

P2 1-2

- 1 灰黄褐色土。
- 2 1にロームブロックを多く含む。締まりなし。

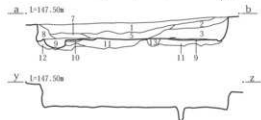
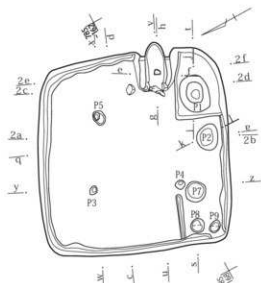
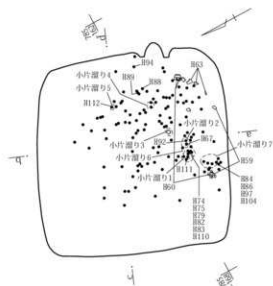
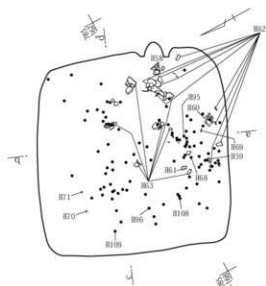


P1 g-h

- 1 黒褐色土 ぶい黄褐色土ブロックを塊点状に含む。締まっている。
- 2 ロームブロック。
- 3 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。

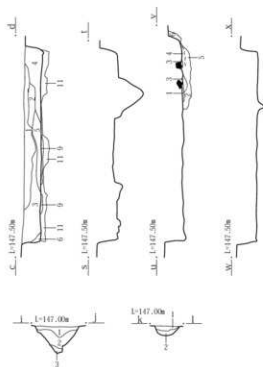
0 1:80 2m

第117図 H区9住居



a-b, c-d

- 1 黒褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。締まっている。
- 2 1に灰化物ブロックを含む。
- 3 近い黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 4 3に似る。
- 5 4に灰化物粒子を含む。4よりやや細かい。
- 6 近い黄褐色土 ロームブロックを含まない。やや軟弱。
- 7 2に似る。
- 8 黒褐色土 ローム粒子を含む。
- 9 黒褐色土 ロームブロックを含む。上面は堅く締まる。床面を形成する土。
- 10 9に似るが白色軽石を含む。締まりなし。
- 11 黒色土とロームブロックの混土。振り方覆土。締まりなし。
- 12 11に似るがローム少ない。11より粗い。締まりなし。
- 13 11に似るが白色軽石を含む。



P10 縦穴 1-j

- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。締まりなし。
- 2 黒褐色土 ロームブロック1-5cm人多く含む。締まりなし。
- 3 近い黄褐色土 汚れたローム。

P2 k-l

- 1 灰黄褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。振り方覆土か。

u-v

- 1 黒褐色土 ローム粒子・灰化物を含む。床面の土。
- 2 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。締まりなし。振り方覆土。
- 3 焼土ブロック
- 4 黒褐色土 焼土粒子を含む。ロームブロックを少量含む。
- 5 4よりもロームブロックが多い。
- 6 灰黄褐色土 煙道廻りの覆土。

0 1:80 2m

第4章 検出された遺構と遺物

2a, I-147.50m

2c, I-147.50m

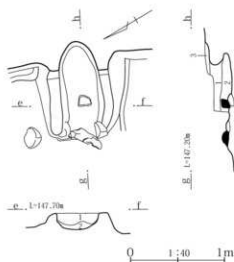
2b-2d

- 1 焼土ブロックとロームブロックの混合。カマド上部の崩落。
- 2 黒褐色土 焼土粒子を含む。
- 3 焼土ブロック 締まりなし。カマド底面。
- 4 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。締まりなし。掘り方覆土。
- 5 ロームブロックと褐色土ブロックの混土。掘り方覆土。

2e, I-147.50m

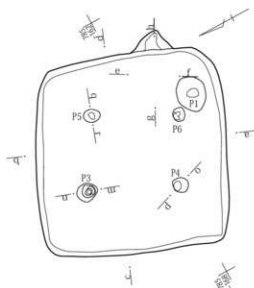
2b-2f

- 1 明黒褐色土 焼土ブロックを含む。カマド構築粘土。
- 2 灰黒褐色土 炭化物・ロームブロックを含む。カマド底面。
- 3 2に似る。
- 4 黒褐色土 焼土粒子を含む。
- 5 黒褐色土 3～5cmのロームブロックを多く含む。
- 6 5より明るい。ロームブロック多い。



カマド e-f, g-h

- 1 灰黒褐色土 炭化物粒子・ロームブロックを含む。焼土粒子を少量含む。
- 2 灰黒褐色土 焼土粒子を含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒子を含む。



I-147.00m



I-147.00m



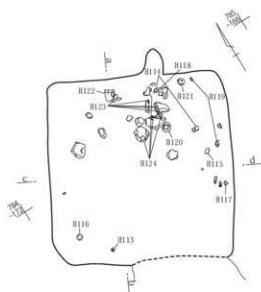
I-147.00m



- P3～P5 m, o, p, q, r
- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。
 - 2 ロームブロック。

0 1:80 2m

第119図 H区10住居(2)



a b, c, d

- 1 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。腐乱の土か。締まりなし。
- 2 黒褐色土 白色輝石を含む。ロームブロックを少量含む。締まっている。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。締まっている。早稲刈。
- 4 3よりもロームブロック多い。
- 5 黒褐色土ブロックとロームブロックの混。上面は床面。

P1 i-j

- 1 灰黄褐色土 ロームブロックを少量含む。締まりなし。

P2 k-l

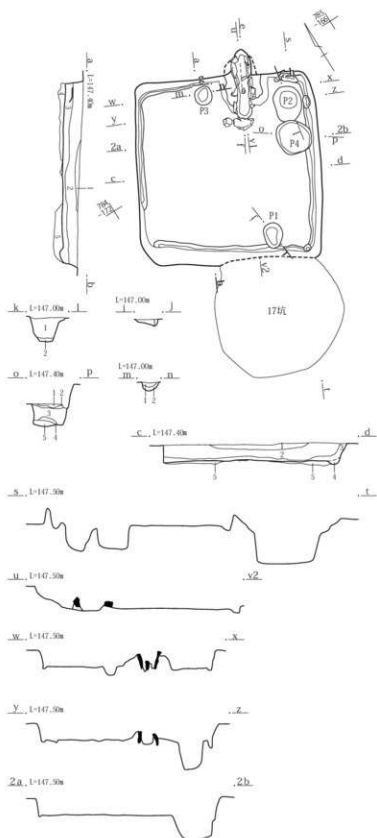
- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 1に炭化物を帯状に含む。締まりなし。

P3 m

- 1 灰黄褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 2 灰黄褐色土 焼土粒子を少量含む。締まりなし。

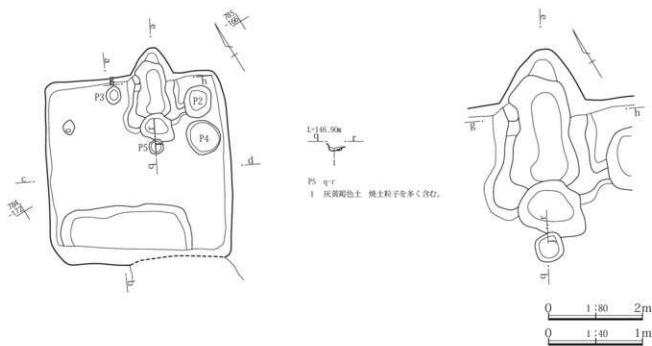
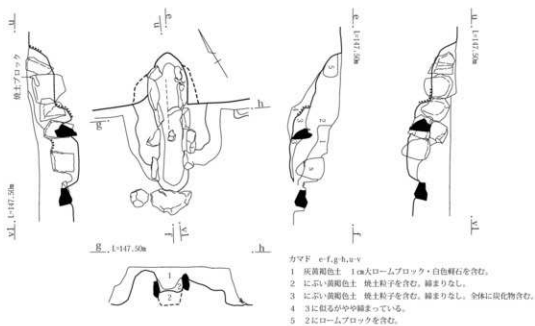
P4 o-p

- 1 黒褐色土 10cmのロームブロックを少量含む。締まりなし。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 3 2に焼土粒子を含む。
- 4 2に近い。焼土粒子を少量含む。
- 5 3に似る。

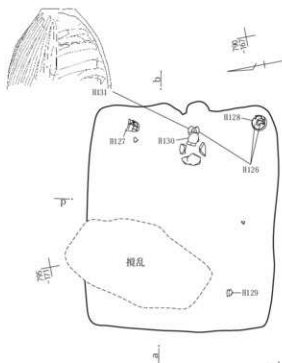


第120図 H区H11住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第121図 H区11住居(2)



a-b, c-d

- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。締まっている。
- 2 1に赤-FAまたはF Pのブロック(3~10cm大)を含む。
- 3 黒褐色土 黄白色軽石を含む。ロームブロックを少量含む。締まっている。
- 4 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。
- 5 4に似る。締まりなし。上面は床面。掘り方覆土。
- 6 4に似る。締まりなし。上面は土多し。掘り方なし。
- 7 汚れたローム。締まりなし。



P1 j

- 1 黒褐色土 焼土粒子を含む。



P2 k-1

- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 濃い黄褐色土 締まりなし。



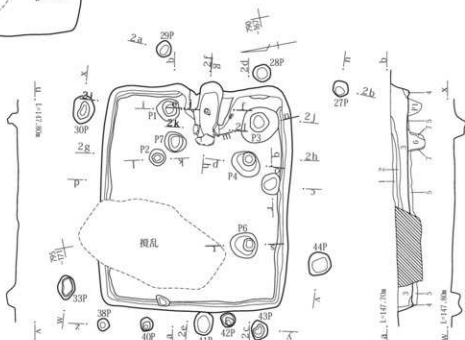
P3 m

- 1 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。締まりなし。
- 2 灰黄褐色土 1のブロックを含む。締まりなし。



P4 o-p

- 1 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。締まっている。掘り方覆土。
- 2 黒褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 3 灰黄褐色土 締まりなし。柱抜き跡小。



c, 1-147.70m

y, 1-147.50m

2a, 1-147.50m

s, 1-147.30m

P6 s-t

- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む。
- 2 黒褐色土とロームブロックの混土。締まっている。掘り方覆土。
- 3 濃い黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。



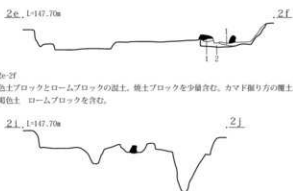
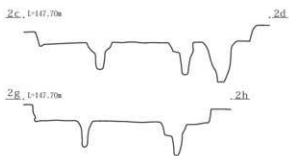
P5 q-r

- 1 黒褐色土 締まりなし。
- 2 濃い黄褐色土 焼土粒子を多く含む。
- 2' 2よりも暗い。
- 3 1とロームブロックの混土。締まりなし。

0 1:80 2m

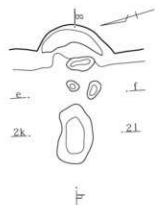
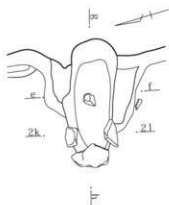
第122図 H区12住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



カマド 2e-2f

- 1 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。焼土ブロックを少量含む。カマド側方の雑土。
- 2 灰黄褐色土。ロームブロックを含む。



カマド e-f, g-h

- 1 黒褐色土。黄白色砂石を含む。
- 2 灰黄褐色土。ロームブロック-焼土ブロックを含む。
- 3 黒褐色土。ロームブロックを含む。床面を形成する土。上面積まっている。
- 4 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。

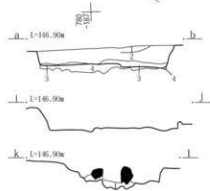
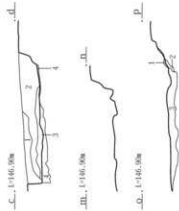
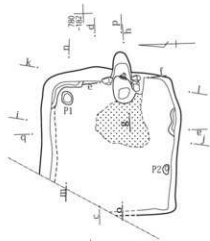
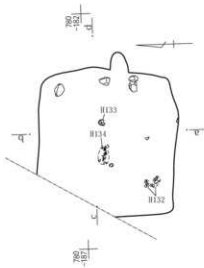


カマド 2k-2l

- 1 黒褐色土。焼土ブロックを含む。
- 2 ローム
- 3 1と2の混土。
- 4 2に似る。



第123図 H区12住居(2)



a, b, c, d

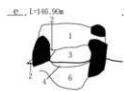
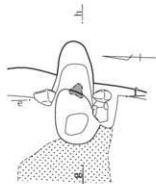
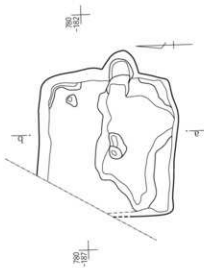
- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。締まりなし。現代陥瓦の土。
- 2 黒褐色土 黄白色軽石を含む。
- 3 2にロームブロックを多く含む。
- 4 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。上部は床面。張り方礫土。

カマド k-1

- 1 灰黄褐色土ブロックとロームブロックの混土。

カマド o-p

- 1 焼土
- 2 灰黄褐色土 黒褐色土ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。締まりなし。



カマド e, f, g, h

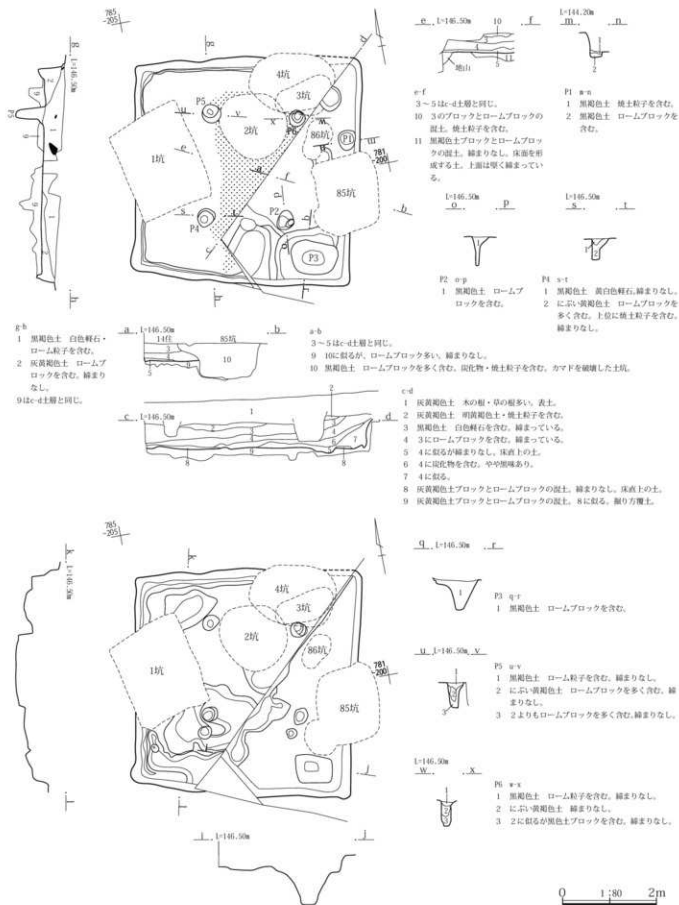
- 1 黒褐色土 黄白色軽石を含む。締まっている。一部に灰色粘土ブロックを多く含む。
- 2 1に似る。
- 3 灰黄褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。締まりなし。
- 4 3よりも焼土粒子多い。締まりなし。
- 5 灰黄褐色土 軽石土。白色軽石を含む。
- 6 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。

0 1:80 2m

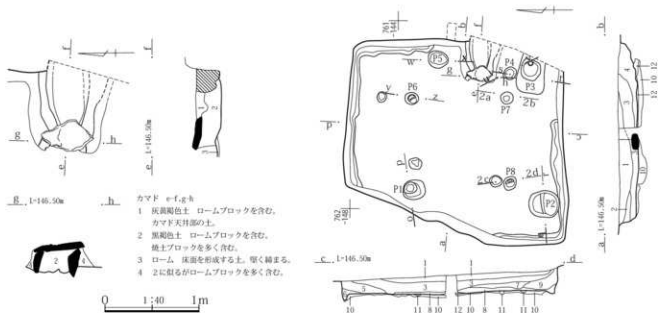
0 1:40 1m

第124図 H区13住居

第4章 検出された遺構と遺物



第125図 H区14住居



g, l-146.50m

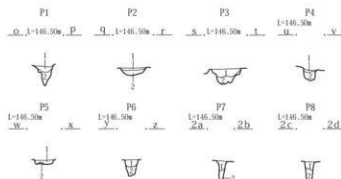
h. カマド e-f.g.キ

- 1 灰黄褐色土 ロームブロックを含む、カマド天井部の土。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを含む、粘土ブロックを多く含む。
- 3 ローム 床面を形成する土、堅く締まる。
- 4 2に似るがロームブロックを多く含む。



0 1:40 1m

c, l-146.50m



a-b,c-d

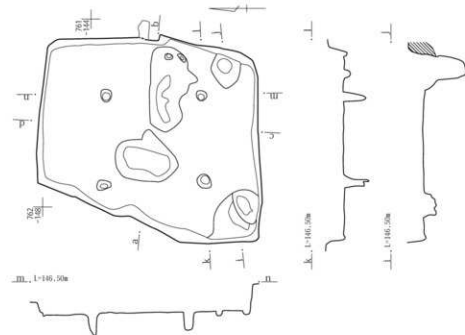
- 1 灰黄褐色土 ロームブロックを含む、白色軽石を多く含む、締まっている。
- 2 1よりも明るい、ロームブロックを多く含む。
- 3 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。
- 4 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 3に似るが軽石を含まない、締まりなし。
- 6 5に応じ物を含む、締まりなし。
- 7 1に似るが軽石含まない。
- 8 灰黄褐色土 ロームブロックを含む、床面上の土。
- 9 6に似る。
- 10 灰黄褐色土 ロームブロックを含む、掘り方壁土。
- 11 黒褐色土 締まりなし。
- 12 灰黄褐色土 堅く締まる、床面を形成する土。

P1, P2 o-p,q,r

- 1 黒褐色土 ローム砂子を含む、締まりなし。
- 2 1にロームブロックを多く含む、締まりなし。

P3~P8, s-t,u,v,w,x,y,z,2a-2b,2c-2d

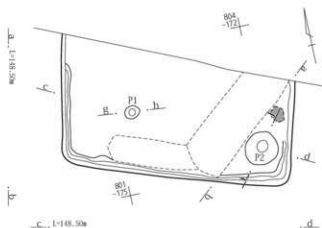
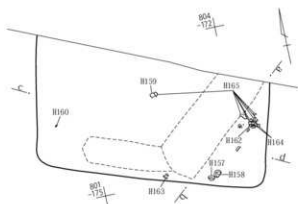
- 1 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 1よりもロームブロックを多く含む。



第126図 H区15住居

0 1:80 2m

第4章 検出された遺構と遺物



a-b, c-d

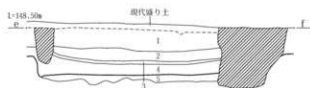
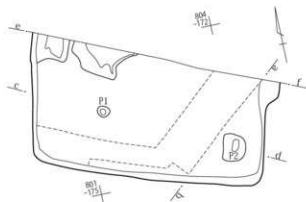
- 1 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 2 灰黄褐色土 焼土粒子を極く多量含む。破壊されたカマドの一部。
- 3 ロームブロック
- 4 黒褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを含む。カマド右脇の崩壊土。
- 5 黒褐色土 ロームブロック2cm厚・炭化物を含む。カマド底面。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを含む。焼土なし。傾り方層土。
- 7 地山ローム ゴミ穴の壁。

P1 g-h

- 1 灰黄褐色土 ローム粒子を多く含む。
- 2 ロームブロック

P2 貯蔵穴 1-1

- 1 黒褐色土 ローム粒子を多く含む。締まりなし。



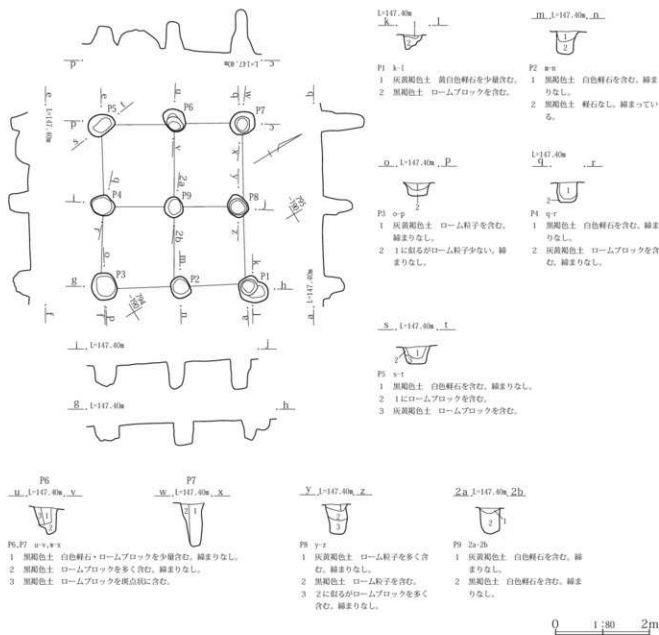
北壁 e-f

- 1 黒褐色土 灰黄褐色土を斑点状に含む。耕作土。上位に現代盛り上あり。
- 2 黒褐色土 白色軽石を含む。
- 3 2に深い黄褐色軽石を含む。Hr-fAa。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
- 5 ロームブロックと灰黄褐色土ブロックの混り。傾り方層土。

0 1:80 2m

第127図 H区16住居

遺構図 (H区)



第128図 H区1掘立柱建物

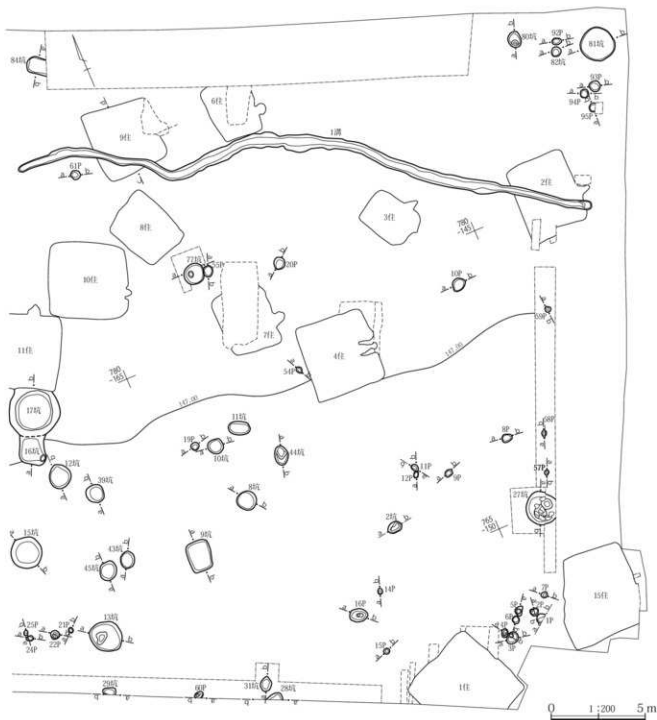
第30表 H区1掘立柱建物計測表

平面図		縦横 2間×2間		長軸方位N-61°-W				
前行	後行	前行柱間	後行柱間	編号	上1/4m長径×短径	下1/4m長径×短径	深さ	備考
P1-P1: 344	P7-P5: 295	P7-P8: 177	P7-P6: 144	1	96×53	26×24	44	
P6-P2: 380	P8-P4: 287	P8-P1: 108	P6-P5: 152	2	47×44	34×31	53	
P5-P3: 340	P1-P3: 305	P6-P9: 171	P8-P9: 133	3	80×55	46×42	35	
		P9-P2: 168	P9-P4: 154	4	52×44	42×30	42	
		P5-P4: 170	P1-P2: 144	5	57×45	40×29	39	
		P4-P3: 170	P2-P3: 161	6	53×43	25×17	62	
				7	54×47	27×22	91	
				8	49×42	31×28	62	
				9	44×39	33×26	54	

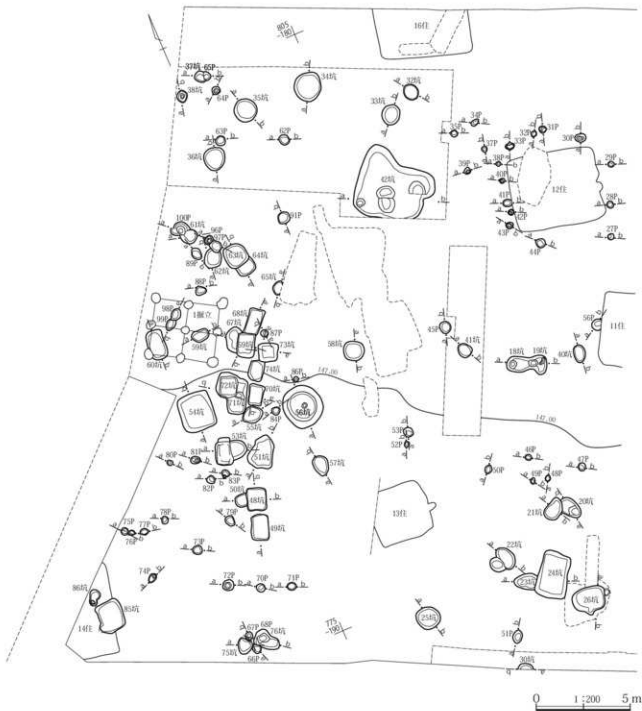
※1 計測値は1/20縮図から起こした数値

※2 柱4間の曲線は必ず計測

第4章 検出された遺構と遺物

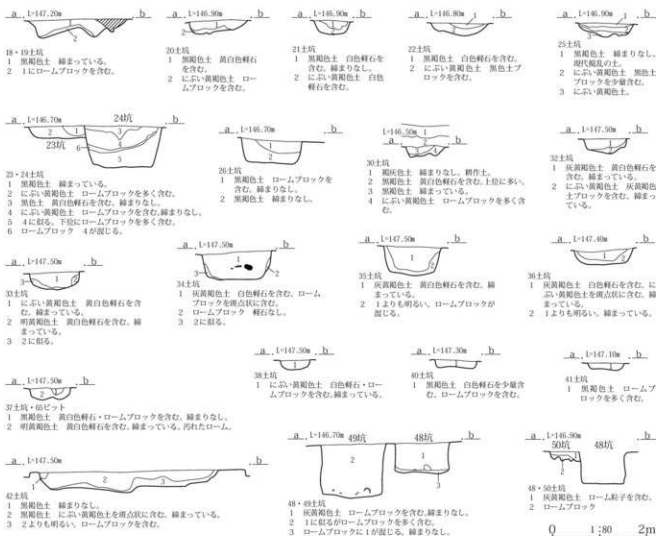


第129図 H区東半部溝・土坑・ピット位置図



第131図 H区西半部土坑・ピット位置図

遺構図 (H区)



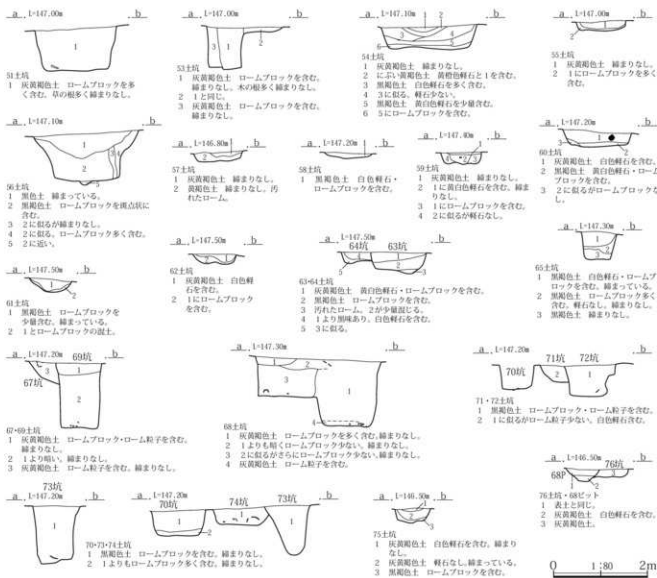
第132図 H区西半部土坑断面図(1)

第33表 H区土坑計測表(2)

番号	遺構	区	確認面	横出位置	垂直関係	前→新	長×短×深(cm)	遺物・砂鉄	硬片	時期・時代	備考
18	土坑	Ⅱ		783-174	18坑・19坑		164×82×43	黒75, 黒76	黒片	有尾2	
19	土坑	Ⅱ		783-174	18坑・19坑		102×54×43			黒片	有尾2
20	土坑	Ⅱ		775-173	20坑・21坑		131×87×36			土師器, 黒片・有尾1, 磁之片	
21	土坑	Ⅱ		776-176	20坑・21坑		122×83×33	黒77, 黒78		土師器, 黒片・有尾1, 磁之片	
22	土坑	Ⅱ		774-180			127×73×27	黒79		黒片	有尾3
23	土坑	Ⅱ		773-179	23坑・24坑		127×89×27	黒80, 黒81		土師器, 加曾利1	
24	土坑	Ⅱ		772-177	23坑・24坑		246×165×96	黒82 ~ 黒86		土師器, 黒片・有尾3, 加曾利1, 後編(磁器)	
25	土坑	Ⅱ		773-184			131×118×29				
26	土坑	Ⅱ		770-176			172×148×35			土師器(土)	110坑
30	土坑	Ⅱ		769-181			85×31×23				土師器(土)
32	土坑	Ⅱ		799-175			88×75×31	黒87 ~ 黒93		黒片	有尾18
33	土坑	Ⅱ		798-176			106×94×38	黒94		黒片	有尾8
34	土坑	Ⅱ		801-179			158×142×60	黒95 ~ 黒98		黒片	有尾29
35	土坑	Ⅱ		801-183			124×119×57				
36	土坑	Ⅱ		800-185			121×113×37	黒99, 黒100		黒片	有尾4
37	土坑	Ⅱ		804-185	P65と重複		63×57×28				
38	土坑	Ⅱ		804-185			66×57×31				
40	土坑	Ⅱ		783-172			93×62×20			黒片	有尾1, 加曾利1
41	土坑	Ⅱ		785-177			79×67×15	黒101, 黒102		黒片	有尾3
42	土坑	Ⅱ		793-176			408×372×47	黒103		黒片	有尾3
48	土坑	Ⅱ		782-190	50坑・48坑		118×107×72				土師器
49	土坑	Ⅱ		780-191			137×94×118				土師器
50	土坑	Ⅱ		783-191	50坑・48坑		68×62×22				土師器

※ 46・47土坑 欠番

第4章 検出された遺構と遺物



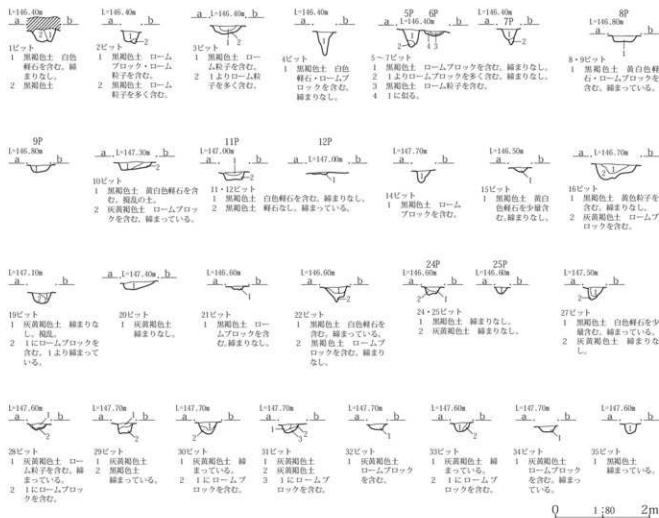
第133図 H区西半部土坑断面図(2)

第34表 H区土坑計測表(3)

番号	遺構	区	確認者	掘出位置	垂直関係	部一断面	長×幅×深(m)	遺物・層様	断片	時期・時代	備考
51	土坑	H		784-189			176×134・97				人骨出土
53	土坑	H		785-191			148×93・78	黒炭・有尾1			人骨出土
54	土坑	H		787-191			204×178・58	土師器②(540g)、花柄下駄1	古溝?		内外面赤彩高杯、内外面赤彩内陸艇1、赤彩取り上げ土器有り
55	土坑	H		786-189			112×92・29	花柄下駄1			
56	土坑	H		785-186			229×214・123	土師器⑤			
57	土坑	H		782-187			107×78・25				
58	土坑	H		787-183			110×101・30	土師器①			
59	土坑	H		791-190	1層上と重なる		94×82・35				
60	土坑	H		792-192	60坑・1層存否		158×94・37	土師器④、黒炭・有尾2			
61	土坑	H		796-188	61坑→P100		89×77・24	黒炭・有尾1、焼酎前葉1			
62	土坑	H		795-188	62坑→P97		102×88・22	焼酎前葉1			
63	土坑	H		794-186	63坑→60坑		122×119・37	土師器②、黒炭・有尾3			
64	土坑	H		794-186	64坑→60坑		102×76・24				
65	土坑	H		792-185	ゴミ7坑に切られている		77×46・61				
67	土坑	H		790-188	67坑→60坑		129×91・48				人骨出土
68	土坑	H		791-187	68坑→60坑		135×78・86	土師器②、黒炭・有尾4			人骨出土
69	土坑	H		790-188	67・60坑→60坑		128×95・137				人骨出土
70	土坑	H		787-188			108×78・60	土師器⑤、黒炭・有尾3			人骨出土
71	土坑	H		787-189	71坑→72坑		196×103・56				人骨出土
72	土坑	H		788-189	71坑→72坑		136×112・73				人骨出土
73	土坑	H		789-187	73坑→72坑		104×99・133	土師器①、黒炭・有尾5			人骨出土
74	土坑	H		788-188	74坑→72坑		112×77・47				人骨出土
75	土坑	H		775-194			89×76・33				
76	土坑	H		775-193	P96→76坑		138×92・34				
85	土坑	H		779-200	141坑→85坑		164×139・78				第125号等類
86	土坑	H		781-201	141坑と重なる		86×54・30				セクションなし

※ ②・66・78・79土坑 欠番

遺構図 (H区)



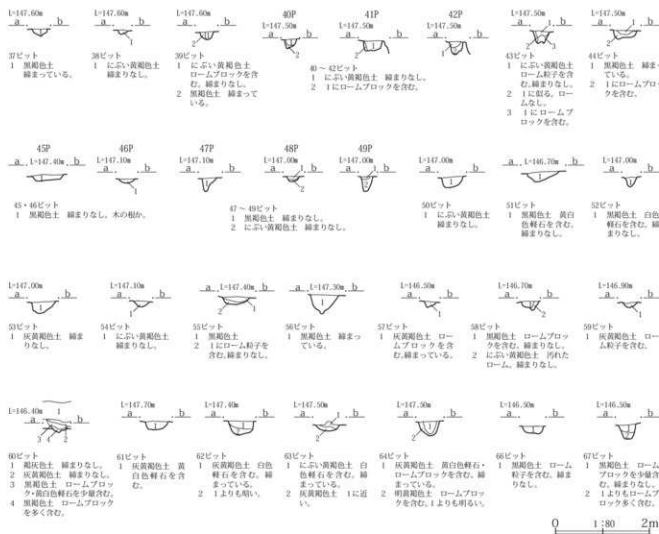
第134図 H区1~35ピット断面図

第35表 H区1~35ピット計測表

番号	遺構	区	縮尺	検出位置	遺構関係	目一新	長×短×深(m)	層土	遺物・層	破片	時期・時代	備考
1	ピット	H		759-149			55×43×24					
2	ピット	H		760-149			44×39×39					
3	ピット	H		759-151			68×59×29					
4	ピット	H		759-151			46×32×52			土師器I		
5	ピット	H		760-150			52×41×34					費片1
6	ピット	H		760-150			41×36×14					
7	ピット	H		760-149			35×31×43					
8	ピット	H		769-147			54×44×18					
9	ピット	H		768-151			42×34×19					
10	ピット	H		777-146			72×65×28					
11	ピット	H		769-152			44×32×19					
12	ピット	H		769-152			33×23×8					
14	ピット	H		764-156			33×24×25					
15	ピット	H		761-157			33×32×9					
16	ピット	H		763-158			97×70×14					
18	ピット	H		772-177			43×43×25					
20	ピット	H		782-154			66×62×36					
21	ピット	H		768-172			29×24×12			土師器I		
22	ピット	H		768-172			49×46×32					
24	ピット	H		769-154			38×30×20					
25	ピット	H		769-175			28×22×24					
27	ピット	H		788-168			35×33×28					
28	ピット	H		789-167			49×35×13			土師器I		
29	ピット	H		791-167			34×31×22					
30	ピット	H		793-167			60×41×26					
31	ピット	H		795-169			41×32×21					
32	ピット	H		795-170			35×31×9					
33	ピット	H		794-171			90×32×22					
34	ピット	H		796-172			46×39×17					
35	ピット	H		796-174			38×34×19					

※ 13・17・18・23・26・36ピット 欠番

第4章 検出された遺構と遺物

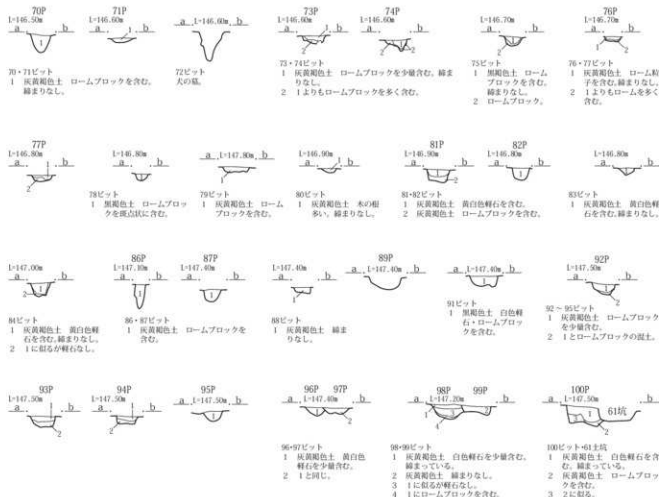


第135図 H区37～67ビット断面図

第36表 H区37～67ビット計測表

番号	遺構	区	緯度	検出位置	遺構関係	目一新	長×短×深(cm)	層土	遺物・磁片	時期・時代	備考
37	ビット	Ⅱ	795-172				38×20×19				
38	ビット	Ⅱ	794-172				26×25×11				
39	ビット	Ⅱ	794-174				35×31×17				
40	ビット	Ⅱ	793-172				29×21×21				
41	ビット	Ⅱ	792-172		P41→172I		50×42×32				
42	ビット	Ⅱ	791-173				52×40×25				
43	ビット	Ⅱ	791-173				39×36×30				
44	ビット	Ⅱ	789-172				53×48×19				
45	ビット	Ⅱ	787-178				64×58×17				
46	ビット	Ⅱ	779-177				36×31×21				
47	ビット	Ⅱ	777-174				44×37×32		土師器I		
48	ビット	Ⅱ	778-176				35×28×16				
49	ビット	Ⅱ	778-177				35×24×23				
50	ビット	Ⅱ	779-179				48×37×27				
51	ビット	Ⅱ	776-181				71×47×20		土師器I		
52	ビット	Ⅱ	782-182				30×25×11				
53	ビット	Ⅱ	782-182				56×50×27				
54	ビット	Ⅱ	776-176				39×20×12				
55	ビット	Ⅱ	783-158				59×52×20		土師器I		
56	ビット	Ⅱ	784-170				63×46×38				
57	ビット	Ⅱ	766-146				30×24×11				
58	ビット	Ⅱ	768-145				39×36×19				
59	ビット	Ⅱ	774-142				34×32×12		土師器I		
60	ビット	Ⅱ	762-162				50×36×20				
61	ビット	Ⅱ	790-163				51×48×20				
62	ビット	Ⅱ	779-182				56×49×30				
63	ビット	Ⅱ	801-185				54×52×17				
64	ビット	Ⅱ	803-184				45×41×34				
65	ビット	Ⅱ	804-184			37坑と重複	47×39×26				第132図に複製
66	ビット	Ⅱ	775-194			78坑→P66	53×44×17				
67	ビット	Ⅱ	776-194				44×38×34				

遺構図 (H区)



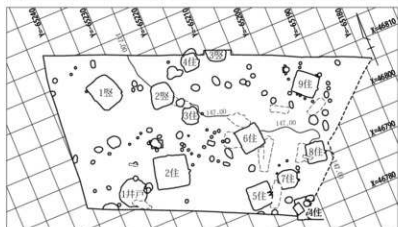
0 1:80 2m

第136図 H区70～100ピット断面図

第37表 H区68～100ピット計測表

番号	遺構	区	確認者	横川位置	遺構関係	目一新	長×短×深(cm)	層土	遺物・砂	破片	時期・時代	備考
68	ピット	H		776-193		76坑と重なり	68×48×24					
70	ピット	H		776-777			48×43×39					
71	ピット	H		776-776			49×42×43					
72	ピット	H		779-194			60×56×54					天骨出土
73	ピット	H		781-195			53×40×46					
74	ピット	H		781-197			52×37×25					
75	ピット	H		784-198			49×38×21					
76	ピット	H		784-198			34×26×10					
77	ピット	H		783-197			46×33×45					
78	ピット	H		783-196			40×33-18					
79	ピット	H		782-192			56×47×46					
80	ピット	H		786-194			32×27×18					
81	ピット	H		786-193			52×39×36					
82	ピット	H		784-788			45×42×32					
83	ピット	H		784-787			43×36×26					
84	ピット	H		786-198			45×43×26					
86	ピット	H		785-186			29×26×53					
87	ピット	H		790-187			43×37×25					
88	ピット	H		794-189			57×40×27					
89	ピット	H		795-189			68×51×29					
91	ピット	H		795-184			70×64×30					
92	ピット	H		787-136			59×34×29					
93	ピット	H		784-135			59×57×28					
94	ピット	H		784-136			46×43×18					
95	ピット	H		783-136			50×42×26					
96	ピット	H		796-188		P97→P96	51×48×30					
97	ピット	H		796-187		62坑・P96→P97	67×57×49					
98	ピット	H		793-191		P99→P98	72×51×32					
99	ピット	H		793-191		P99→P98	60×48×22					
100	ピット	H		797-189		61坑→P100	88×76×44					

※ 90・95・96ピット 欠番

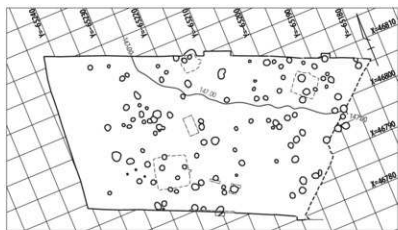


1区遺構集計

	1面	2面	小計
住居	8	3	11
掘立柱建物	0	0	0
溝	0	0	0
土坑	58	113	171
ピット	43	6	49
道	0	0	0
井戸	1	0	1
集石	0	1	1

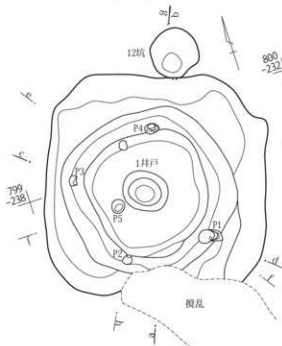
* 2面(1054・1074)

1区1面



1区2面

0 1:800 20m

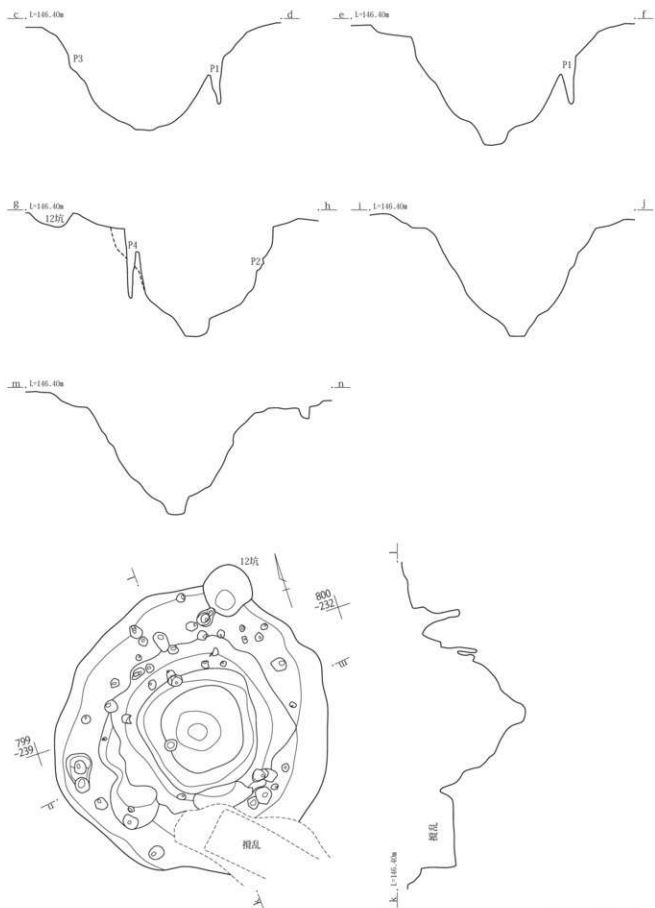


- 1 井戸・12土坑
 - 1 黒褐色土 As・S輝石を多く含む。
 - 2 黒褐色土 濃い黄褐色土(As・Sアッシュ)をブロック状に含む。Bのビンクアッシュの上に黄褐色アッシュあり。締まりなし。
 - 3 黒褐色土 黄白色輝石を含む。1・2に比べ締まっている。
 - 4 灰褐色土 ロームブロックを含む。
 - 5 濃い黄褐色土 ロームブロックを含む。粗乱の埋め土。
 - 6 黒褐色土 白色輝石を含む。底部に炭化物を多く含む。締まっている。
 - 7 濃い黄褐色土 ロームブロックを含む。
 - 8 灰黄褐色土 炭化物を含む。
 - 9 7に近いがローム粒を含む。締まりなし。
 - 10 8と同じ。
 - 11 7と同じ。
 - 12 濃い黄褐色土 締まりなし。11よりも粗い。
 - 13 9と同じ。
 - 14 暗褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。
 - 15 12に近い。
 - 16 暗褐色土 ロームブロック・黒色土ブロックを含む。締まりなし。水分多い。砂質。
- 12土坑
- 1 黒褐色土 締まりなし。
 - 2 1にロームブロックを含む。締まりなし。

0 1:80 2m

第137図 1区全体図、1井戸(1)

遺構図(1区)



第138图 1区1井戸(2)

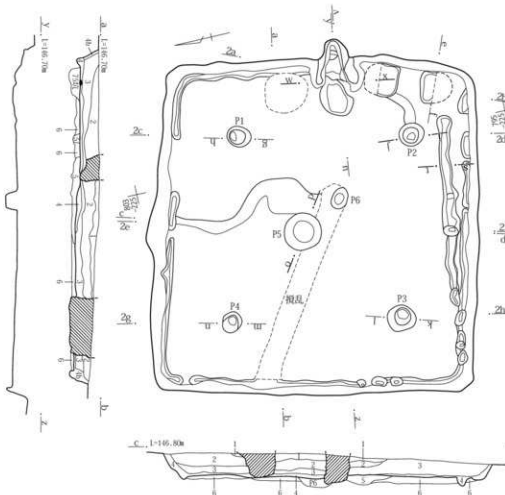
0 1:90 2m

第4章 検出された遺構と遺物



第139図 1区2住居(1)

遺構図(1区)



a-b, c-d

1 灰黄褐色土 As-輝石を多く含む。

2 黒褐色土 黄白色輝石を含む。

3 黒褐色土 黄白色輝石を含む。2よりも明るく茶色味あり。

4 褐色土 ロームブロック・ローム粒子を含む。

4b 4よりロームブロック多い。

5 黒褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。

6 5に似るがやや明るい。



ヒット(貯蔵穴) e-f

1 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。

2 黒褐色土ブロックとロームブロックの混在。締まりなし。



P1 g-h

1 灰黄褐色土 ローム粒子を含む。

2 黒褐色土 ローム粒子を含む。

3 に近い黄褐色土 ローム粒子を多く含む。締まりなし。



P2 i-j

1 黒褐色土 ロームブロックを含む。

2 に近い黄褐色土 ローム粒子を多く含む。締まりなし。



P3 k-l

1 黒褐色土 ローム粒子を含む。

2 に近い黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。



P4 m-n

1 黒褐色土 ローム粒子を含む。

2 に近い黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。



P5 o-p

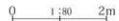
1 黒褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。

2 灰黄褐色土 ローム粒子を多く含む。締まりなし。



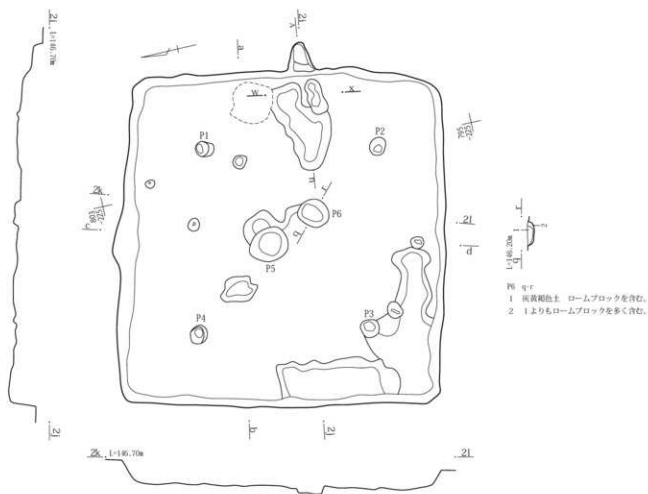
溝 q-r

1 黒褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。

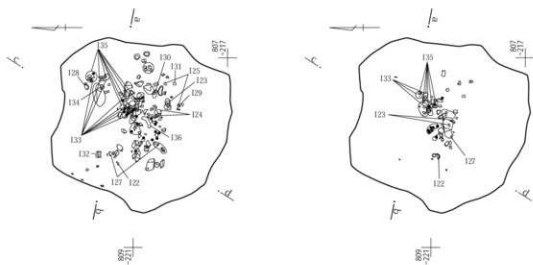


第140図 1区2住居(2)

第4章 検出された遺構と遺物



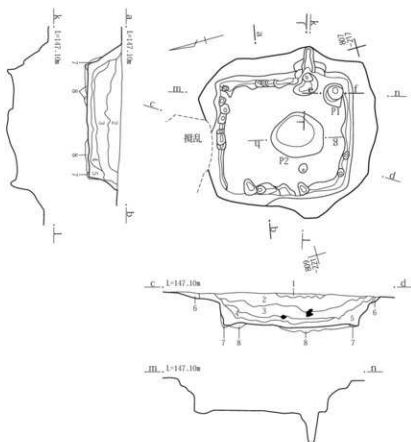
3住居



第141図 1区2住居(3)、3住居(1)

0 1:80 2m

遺構図(1区)



P2 g-h

- 1 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 2 1に青灰色粘土ブロック・炭化物を含む。

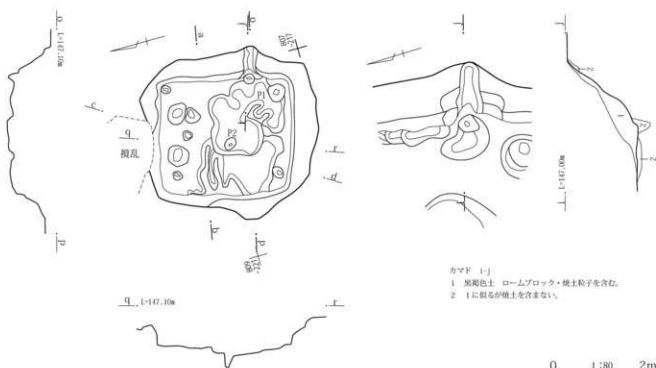


P1 e-f

- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。

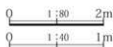
a-b, c-d

- 1 褐色土 白色軽石を含む。
- 2 灰黄褐色土と褐色土の混土。白色軽石を含む。
- 3 黒褐色土 黄白色軽石を含む。
- 4 黒褐色土 3よりも黄白色軽石を多く含む。
- 5 褐色土 ロームブロックを含む。
- 6 褐色土 5よりもロームブロックを多く含む。
- 7 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。
- 8 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。張り方礫土。



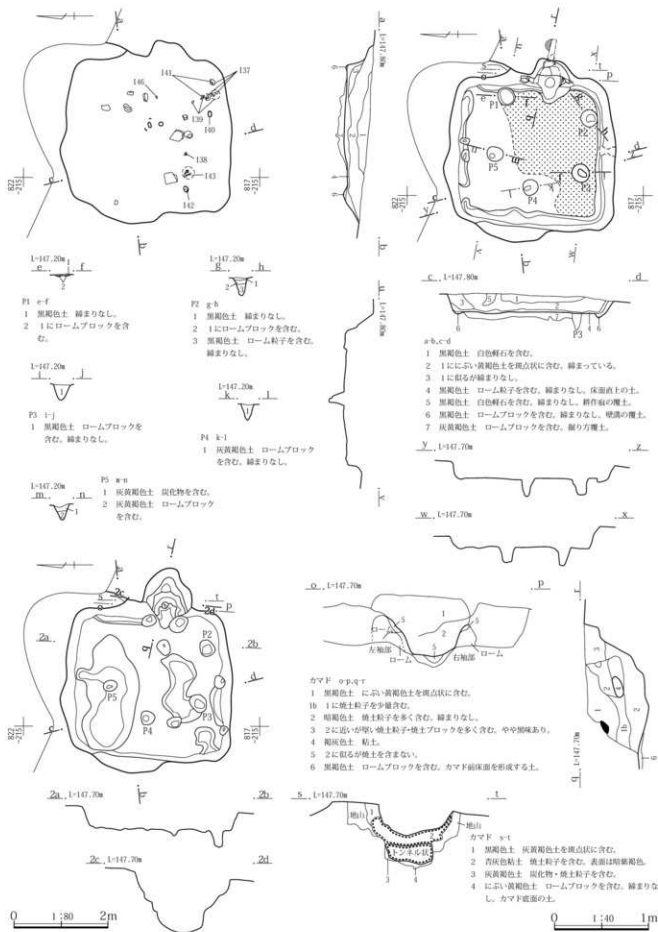
カマド i-j

- 1 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。
- 2 1に似るが粘土を含まない。

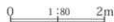
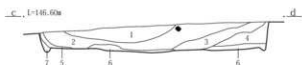
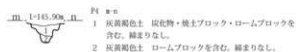
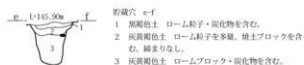
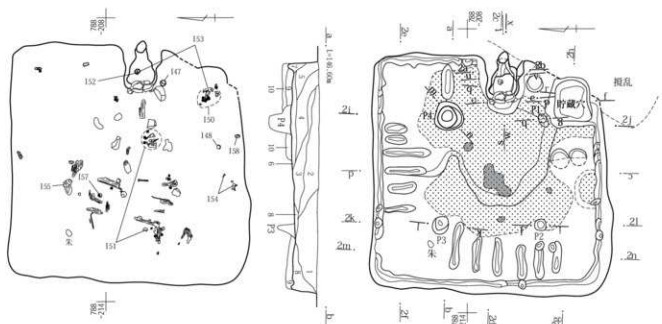


第142図 1区3住居(2)

第4章 検出された遺構と遺物

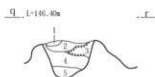
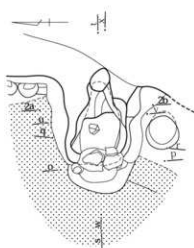


第143図 1区4住居



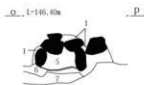
第144図 1区5住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



カマド q+r

- 1 灰黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 より明るい。ロームブロックを含む。
- 3 黄土ブロック よく焼けて堅い。
- 4 に近い黄褐色土 黄土ブロックを含む。締まりなし。
- 5 暗褐色土 炭化物・黄土粒子を含む。底面に灰層あり。



カマド o,p,s,t,u,v

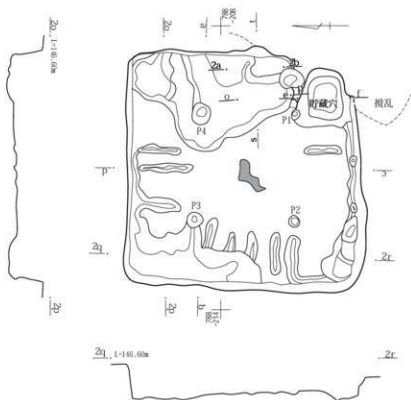
- 1 明黄褐色土 粘土。天井部を形成し石を囲む。
- 2 黒褐色土 黄土ブロックを含む。
- 3 2に近いがやや明るい。
- 4 黒褐色土 黄土粒子・炭化物粒子を含む。底面は灰が広がる。
- 5 暗褐色土 黄土粒子を多量に含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを含む。床面を形成する土。堅い。
- 7 黒褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。廻り方覆土。
- 8 6に似るがロームブロックが大きい。
- 9 7に近い。廻り方の土。
- 10 8に近い。

カマド 2a-2b

- 1 明黄褐色土 カマド粘土。一部焼けている。
- 2 に近い黄褐色土 炭化物・ロームブロックを含む。船頭跡。
- 3 黒褐色土とロームブロックの混り。締まりなし。廻り方覆土。
- 4 に近い黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。廻り方覆土。
- 5 4に近いロームブロックを含む。廻り方覆土。

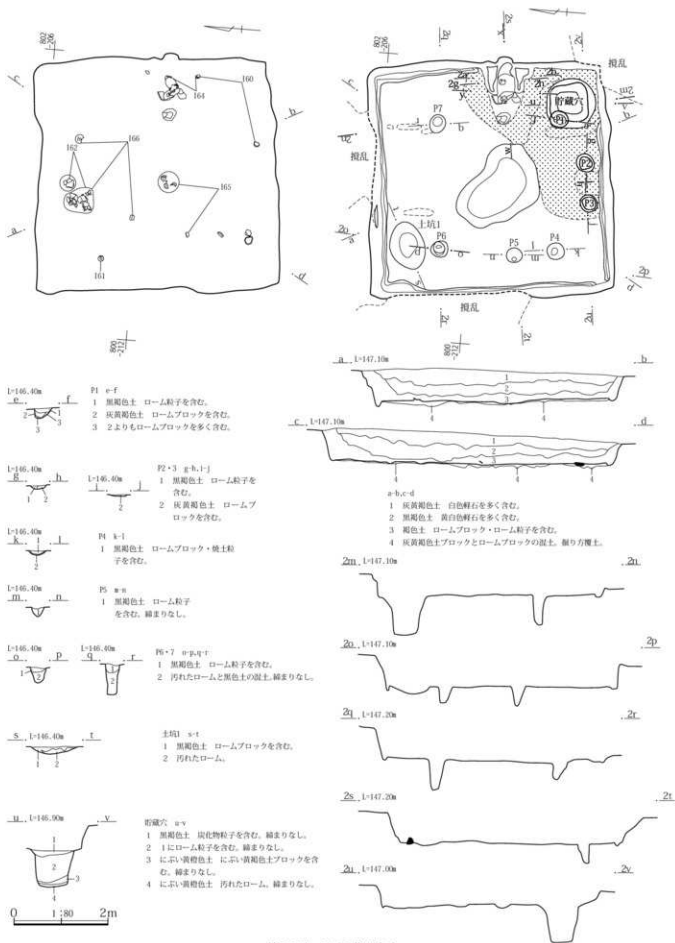


0 1:40 1m



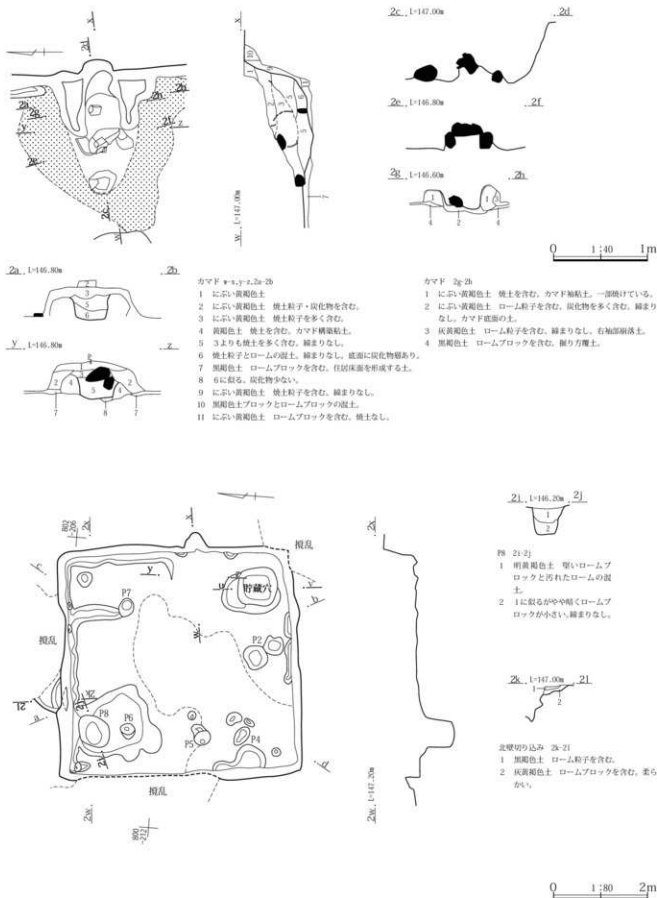
0 1:80 2m

第145図 1区5住居(2)

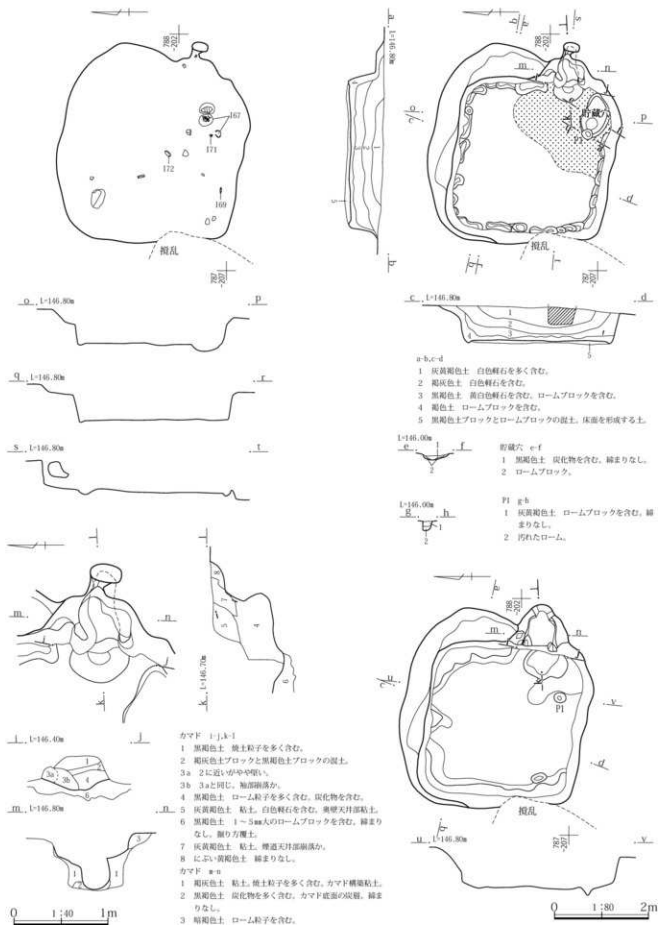


第146図 1区6住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物

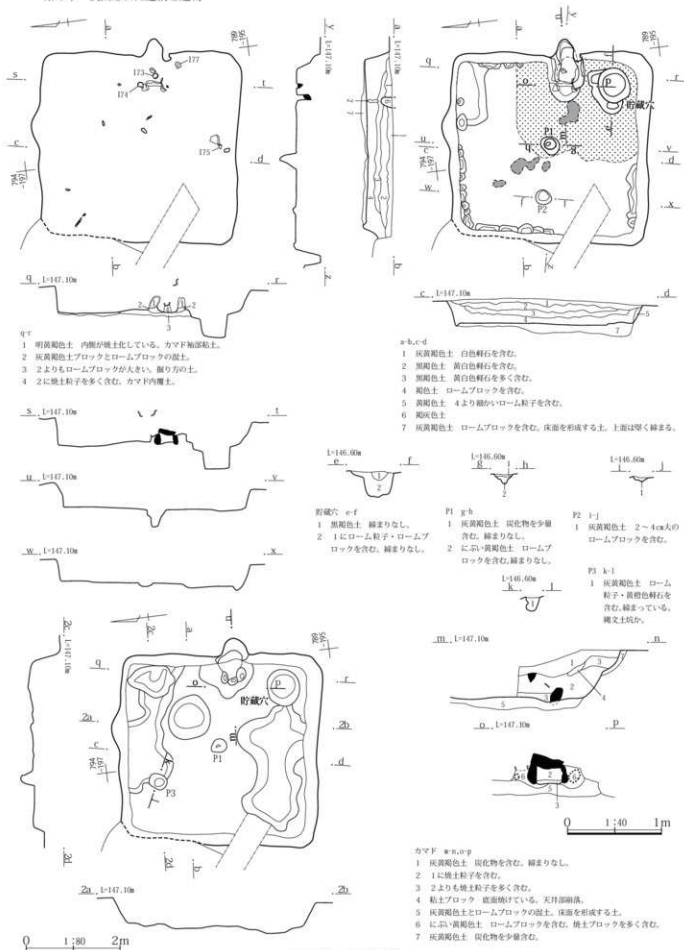


第147図 1区6住居(2)

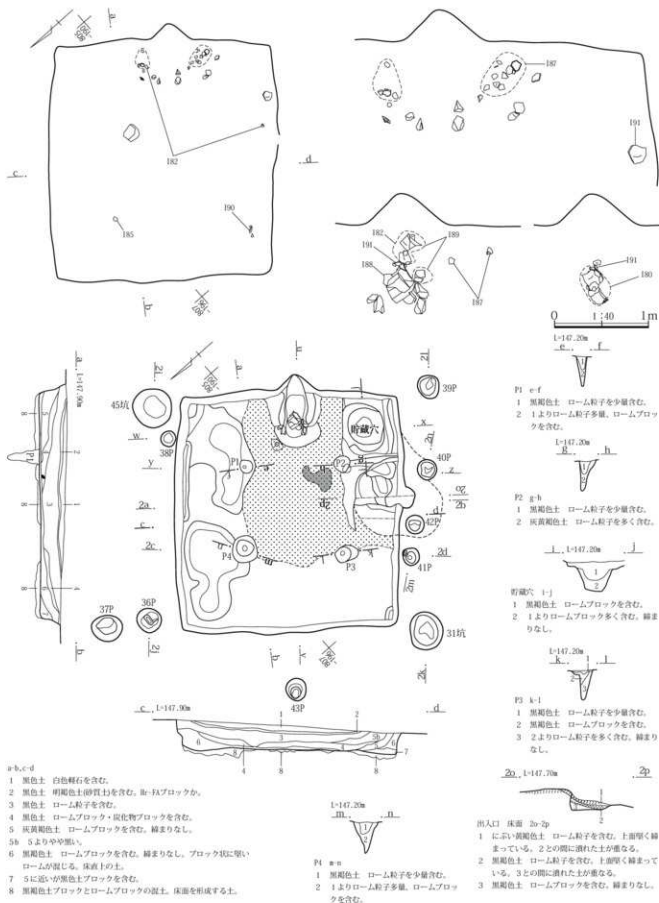


第148図 1区7住居

第4章 検出された遺構と遺物

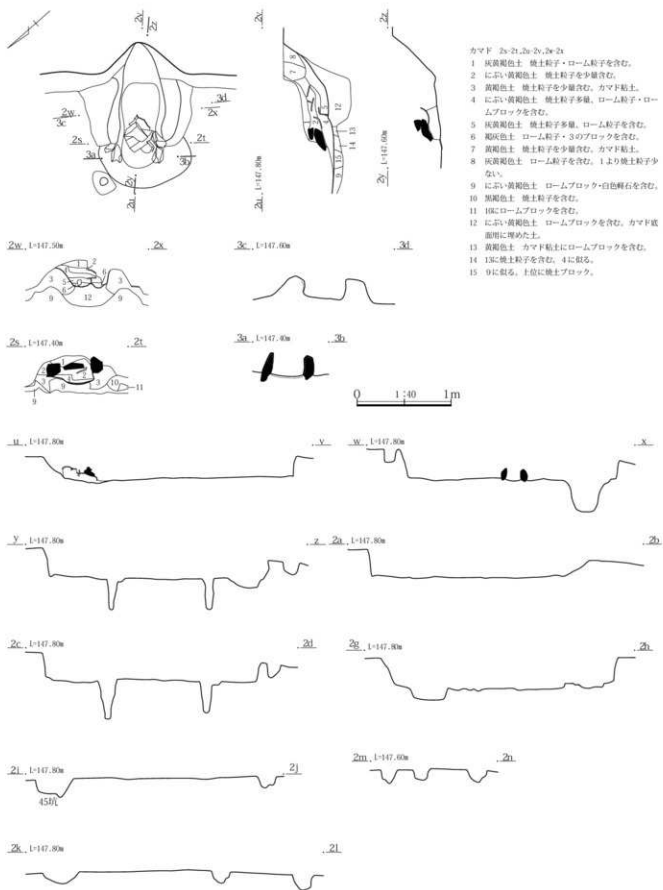


第149図 1区8住居

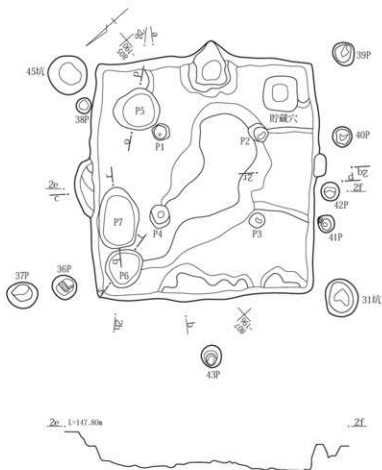
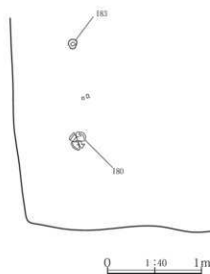
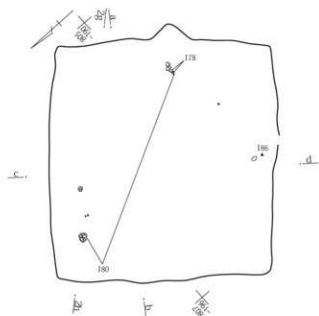


第150図 1区9住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



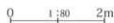
第151図 1区9住居(2)



P6・7 等r.s.t
1 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。締まりなし。

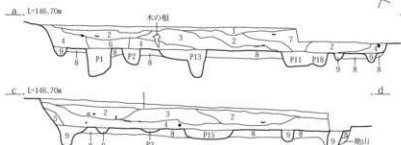
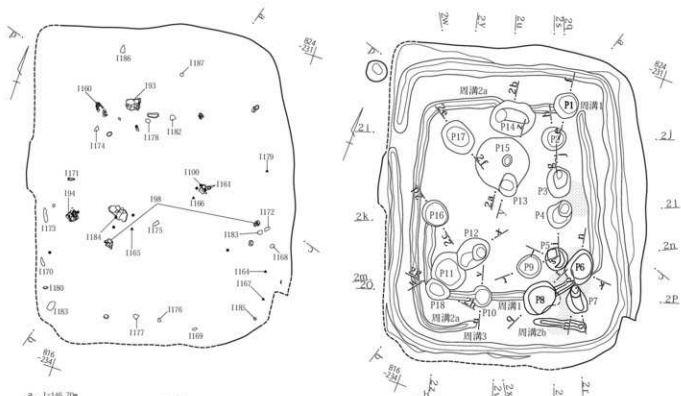


- 出入口 廻り方 2q・2r
- 1 黒色土 ローム粒子を少量含む。
 - 2 明黄褐色土 灰黄褐色土ブロックを含む。特に強い。住居床面につながる。
 - 3 黒色土ブロックとロームブロックの混土。締まっている。
 - 4 にない黄褐色土 やや軟質。



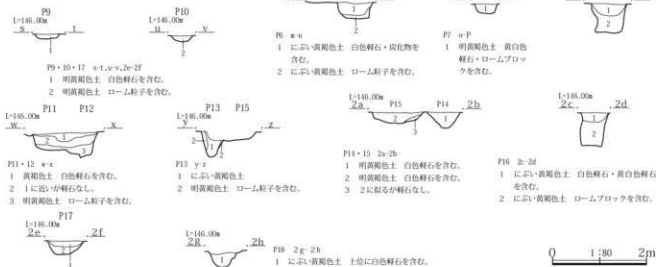
第152図 1区9住居(3)

第4章 検出された遺構と遺物



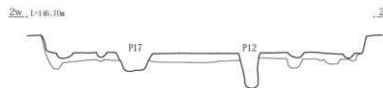
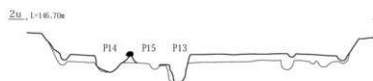
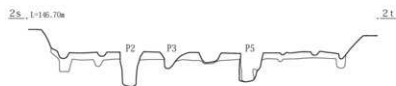
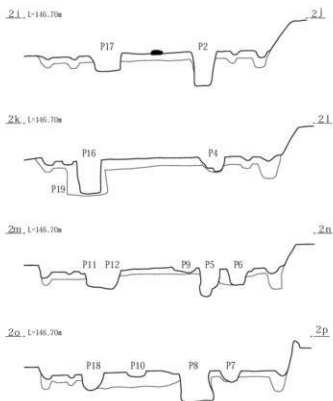
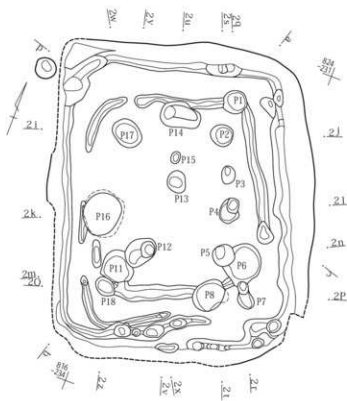
a,b,c,d

- 1 灰黄褐色土 軽石含まない。締まりなし。
- 2 黒褐色土 白色軽石・炭化物粒子を含む。締まっている。
- 3 濃い黄褐色土 ロームブロックを重点的に含む。白色軽石を含む。締まっている。
- 4 濃い黄褐色土 白色軽石を含む。締まっている。3に似るがやや粗い。
- 5 明黄褐色土 汚れたローム。
- 6 黒褐色土 濃い黄褐色土ブロックを重点的に含む。
- 7 濃い黄褐色土 炭化物粒子・白色軽石を含む。
- 8 明黄褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。
- 9 8より粗い。



第153図 1区1整穴(1)

遺構図(1区)

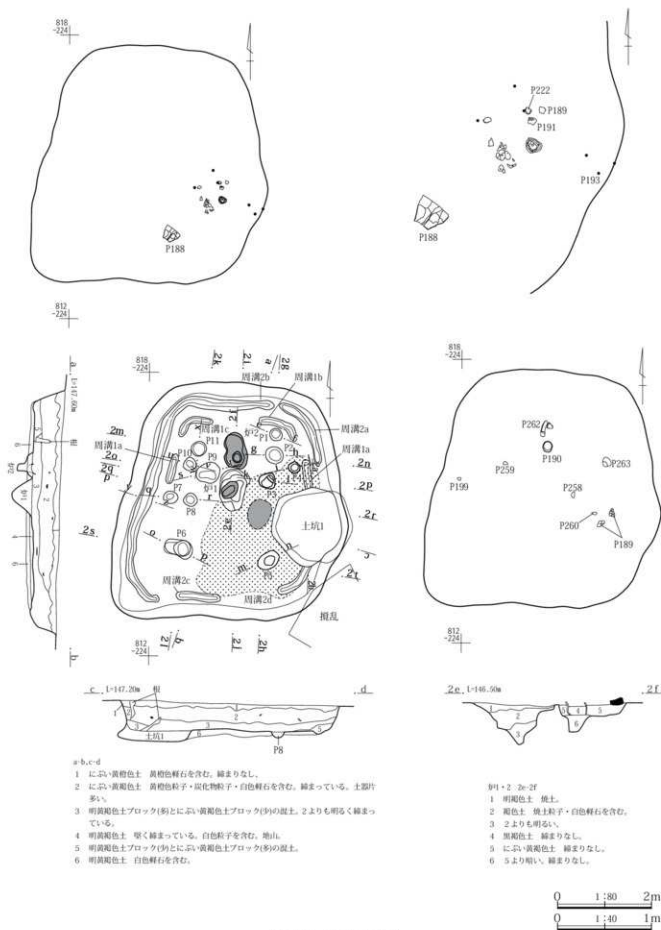


ピット番号	1 堀穴		ピット規模	
	長さcm	幅cm	深さcm	備考
P1	96	51	58	
P2	50	49	72	
P3	65	50	28	
P4	62	51	28	二段
P5	69	48	38	
P6	71	54	33	
P7	57	41	27	二段
P8	77	62	62	
P9	51	48	13	
P10	45	42	14	
P11	79	76	36	
P12	78	55	71	二段
P13	47	36	57	機土履じり
P14	91	71	40	二段
P15	111	109	32	二段
P16	59	52	70	
P17	75	60	39	
P18	55	40	35	

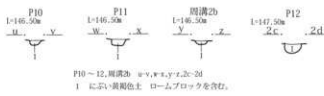
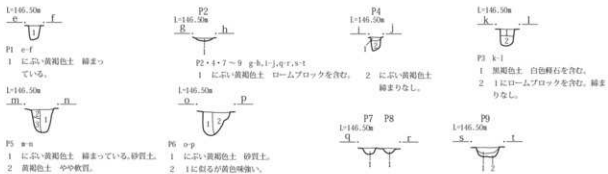
第154図 1区1 堀穴(2)

0 1:80 2m

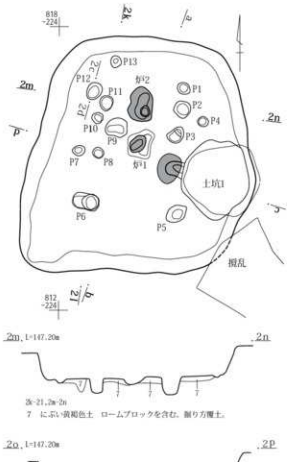
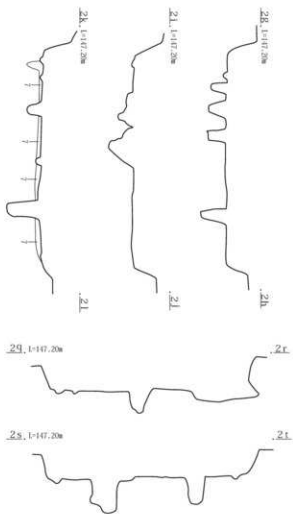
第4章 検出された遺構と遺物



第155図 1区2聖穴(1)

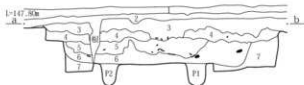
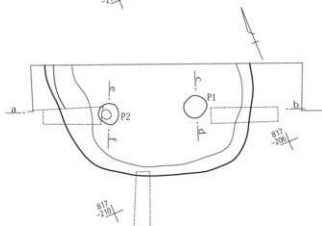
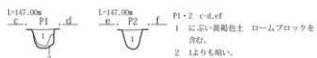
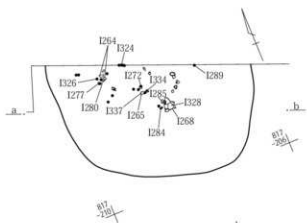
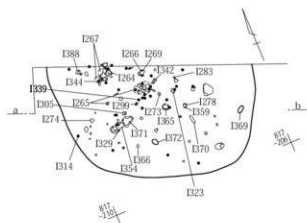


1区	2階穴	ピット規模	備考
P1	27×25	33	
P2	38×35	35	
P3	37×34	42	2段
P4	25×25	36	
P5	49×34	59	
P6	60×36	69	2段
P7	30×26	17	
P8	27×27	13	
P9	51×44	24	
P10	28×26	14	
P11	32×31	13	



第156図 1区2階穴(2)

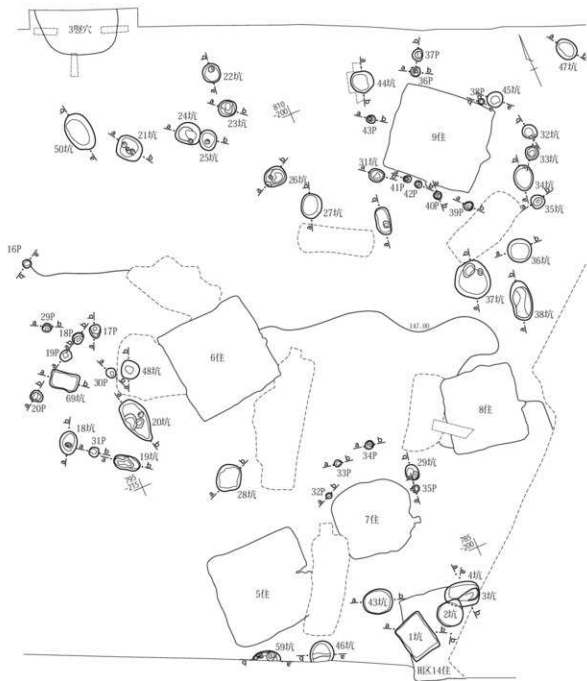
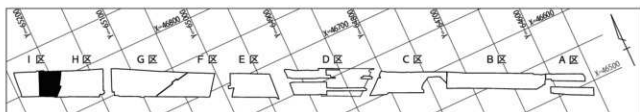
第4章 検出された遺構と遺物



a-b

- 1 相褐色土 表土。
- 2 黒褐色土 白色軽石・黄白色軽石を含む。締まりなし。
- 3 黒褐色土 2より白色軽石少ない。土の粒子細かい。
- 4 灰黄褐色土 ローム粒子を含む。
- 5 灰黄褐色土 白色軽石を含む。4より赤味あり。
- 6 濃い黄褐色土 白色軽石・ローム粒子・ロームブロックを含む。締まっている。
- 7 濃い黄褐色土 ロームブロックを含む。締まっている。

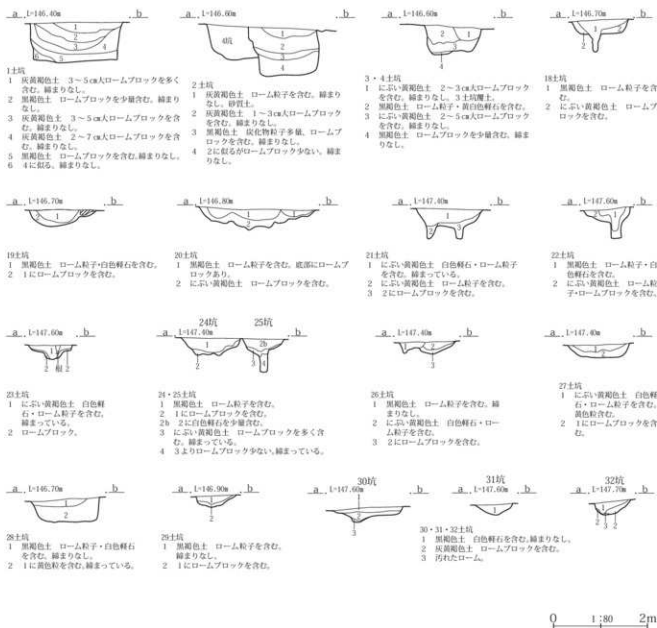
0 1:80 2m



0 1:200 5m

第158図 1区東半部1面土坑・ピット位置図

第4章 検出された遺構と遺物

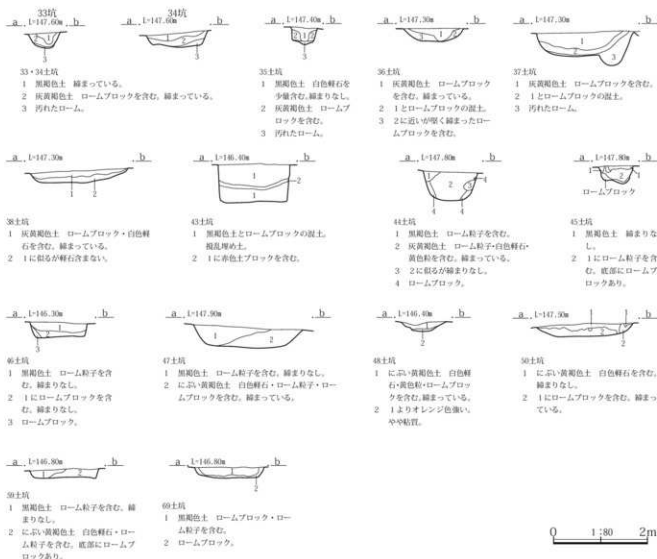


第159図 1区東半部1面土坑断面図(1)

第38表 1区1面土坑計測表(1)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係	田一新	長×短×深(m)	遺物種類	破片	時期・時代	備考
1	土坑	1	1面	780-203			田区14区と重複	207×163・78				
2	土坑	1	1面	781-201			3・4区、田区14区と重複	152×137・104				
3	土坑	1	1面	782-200			2・4区、田区14区と重複	131×62・28				
4	土坑	1	1面	782-200			2・3区、田区14区と重複	182×127・68				
18	土坑	1	1面	798-217				119×94・73		土師器1		土師器類
19	土坑	1	1面	795-214				143×73・41				
20	土坑	1	1面	797-213				246×128・49				
21	土坑	1	1面	811-207				147×124・86				
22	土坑	1	1面	813-202				98×69・67				
23	土坑	1	1面	811-202				97×91・35				
24	土坑	1	1面	810-204				127×113・42				
25	土坑	1	1面	809-204				107×92・69				
26	土坑	1	1面	806-201				121×107・29	1300			漆器1
27	土坑	1	1面	804-200				132×110・29				
28	土坑	1	1面	792-209				152×135・53	1301, 1302, 1303, 1304			黒石・有灰瓦
29	土坑	1	1面	789-201				85×71・35				
30	土坑	1	1面	802-197				148×77・35				
31	土坑	1	1面	804-196				79×71・23				
32	土坑	1	1面	803-188				82×73・35				

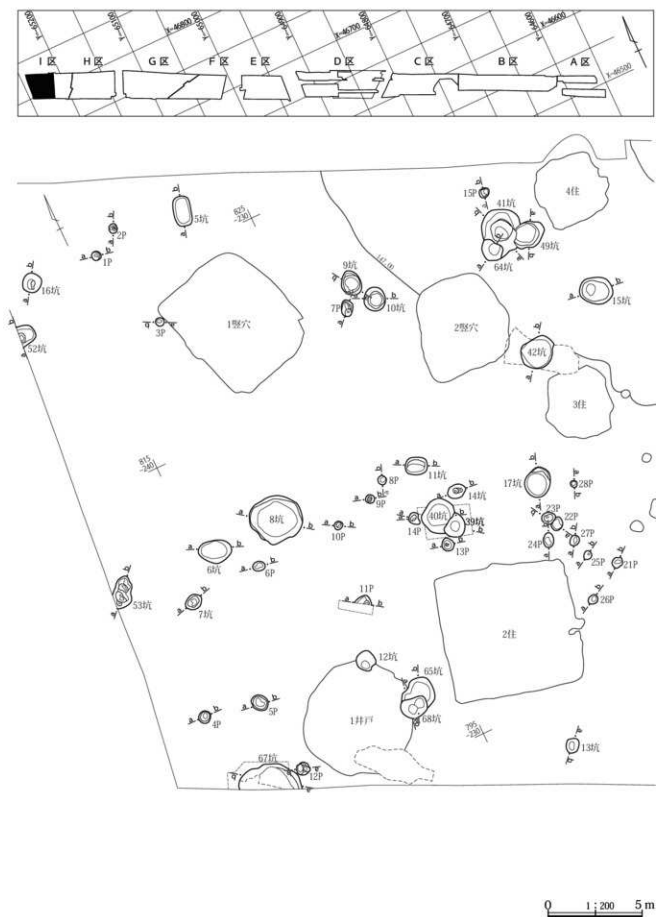
遺構図(1区)



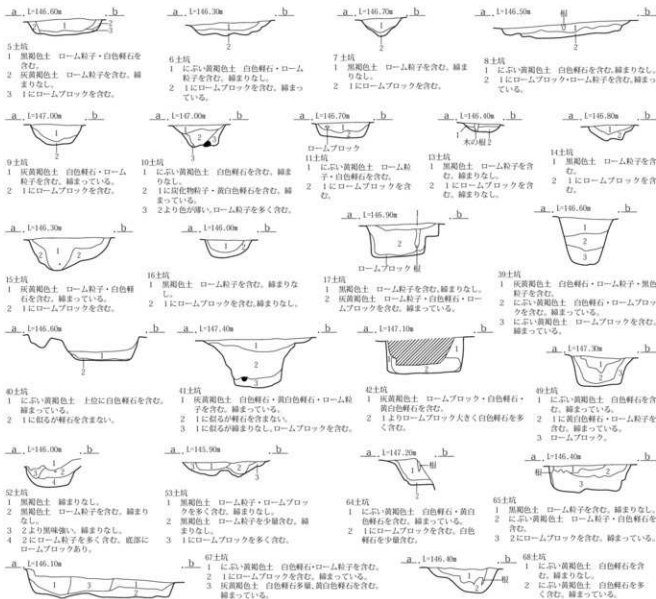
第160図 1区東半部1面土坑断面図(2)

第39表 1区1面土坑計測表(2)

番号	遺構	区	確認地	掘出位置	X-Y	重複関係	目-筋	長×短・深(cm)	遺物登録	照片	時期・時代	備考
33	土坑	1	1層	802-188				72×31・35				
34	土坑	1	1層	801-189				138×98・35				
35	土坑	1	1層	800-189				70×70・37				
36	土坑	1	1層	797-191				129×127・28				
37	土坑	1	1層	797-193				204×187・53	1395, 1396	黒土・有尾3		
38	土坑	1	1層	794-192				212×110・32				
43	土坑	1	1層	783-205				156×132・82				
44	土坑	1	1層	809-195				120×117・62	1404, 1405, 1406, 1407, 1408	黒土・有尾17 25歳4, 前田俊良1		
45	土坑	1	1層	806-189				84×81・35				
46	土坑	1	1層	782-209				124×104・34	1410	沼津3		
47	土坑	1	1層	806-184				120×96・23				
48	土坑	1	1層	800-212				100×98・20				
50	土坑	1	1層	812-209				208×137・29				
59	土坑	1	1層	783-211				148×52・63				
60	土坑	1	1層	801-215				149×96・29				



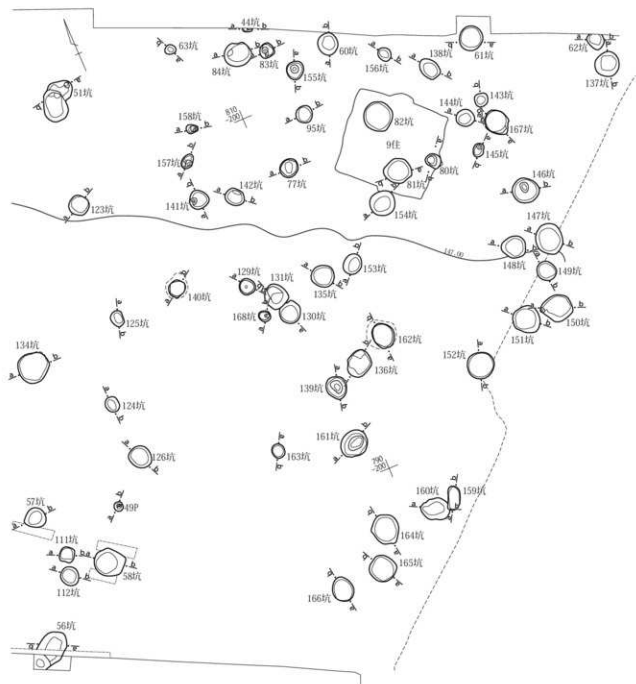
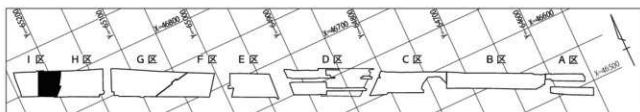
第161図 I区西半部1面土坑・ピット位置図



第162図 1区西平部1面土坑断面図

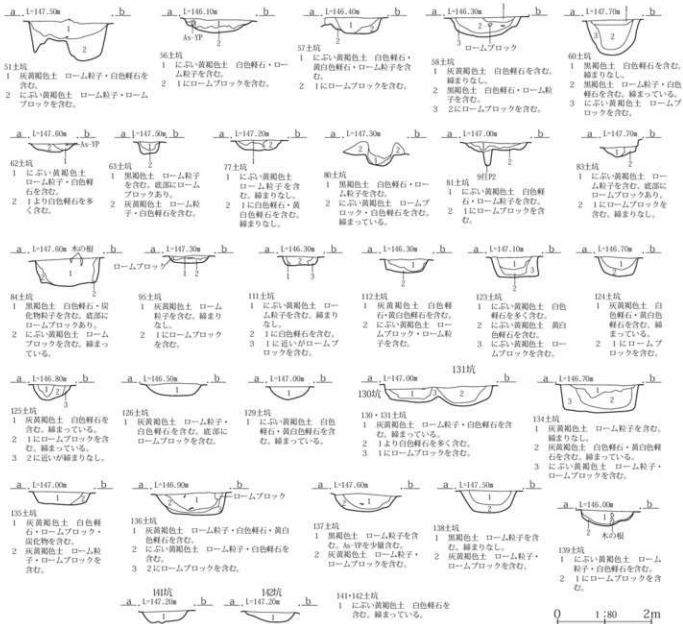
第40表 1区1面土坑計測表(3)

番号	遺構	区	確認面	樹形位置	X-Y	重複関係	図-新	長×短×深(m)	遺物伴録	鏡片	時期・時代	備考
5	土坑	1	1層		826-232			158×93×37				
6	土坑	1	1層		809-238			174×123×32				
7	土坑	1	1層		807-240			80×73×39				
8	土坑	1	1層		808-234			284×261×25				
9	土坑	1	1層		819-226			131×107×43				
10	土坑	1	1層		817-225			125×114×51				
11	土坑	1	1層		808-226			113×96×32				
13	土坑	1	1層		792-225			78×67×28				
14	土坑	1	1層		806-225			98×71×30				
15	土坑	1	1層		813-214			177×142×69	1384,1385,1386			黒炭・有尾2 前期放棄1
16	土坑	1	1層		826-241			166×97×49				
17	土坑	1	1層		805-221			160×133×70	1387,1388,1389			黒炭・有尾10 縄文土層1
39	土坑	1	1層		805-226		00坑と重複	127×113×98				
40	土坑	1	1層		805-226		00坑と重複	181×151×58	1397			黒炭・有尾1
41	土坑	1	1層		817-217		09・64坑と重複	230×208×112	1398			前期放棄1
42	土坑	1	1層		811-218			187×158×79	1399,1400,1402			黒炭・有尾10
49	土坑	1	1層		817-216		01坑と重複	174×137×72				
52	土坑	1	1層		823-242			111×85×47				
53	土坑	1	1層		808-243			128×99×38				
64	土坑	1	1層		817-219		01坑と重複	132×103×59				
65	土坑	1	1層		797-231		63坑-68坑-111坑?	184×133×41				
67	土坑	1	1層		796-236			332×133×71				
68	土坑	1	1層		797-232		02坑-68坑-111坑?	139×120×51				



第163図 1区東半部2面土坑・ピット位置図

遺構図(1区)

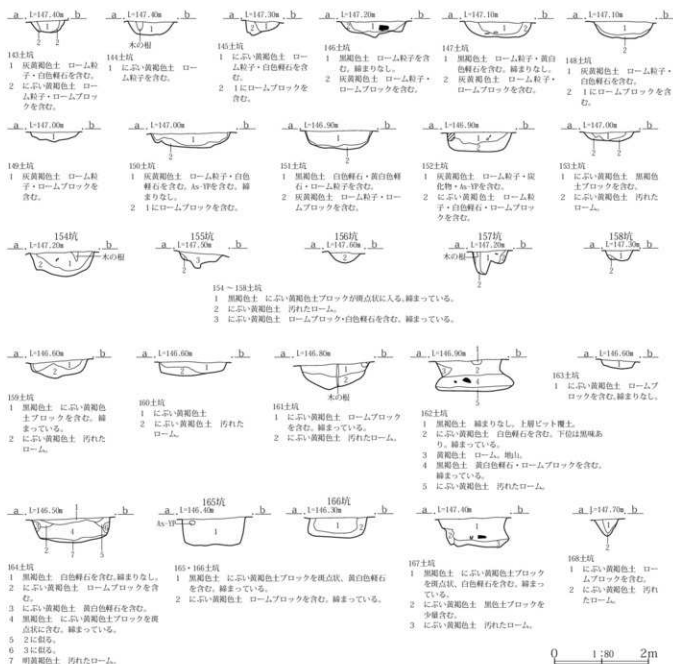


第16図 1区東半部2面土坑断面図(1)

第1表 1区2面土坑計測表(1)

図号	土坑	区	面	位置	X	Y	遺構図	田一	計	縦×横×高	遺物層	層序	時期・時代	備考
51	土坑	1	2面		813-207					214×140×56	1411, 1412, 1413	埋没	有(鉄) 弥生末	
56	土坑	1	2面		787-219					243×137×35	1414, 1415, 1416	埋没	有(砂)	
57	土坑	1	2面		725-217					111×104×31				
58	土坑	1	2面		790-214					166×141×42	1418, 1419	前部埋没	有(鉄)	
60	土坑	1	2面		811-183					116×108×65	1420, 1421	埋没	有(土) 弥生末	
62	土坑	1	2面		806-180					92×81×14				
63	土坑	1	2面		814-201					56×52×23				
67	土坑	1	2面		805-188					102×56×26				
70	土坑	1	2面		801-196					83×58×35				
81	土坑	1	2面		803-182					150×128×34	1430	埋没	有(鉄)	
83	土坑	1	2面		812-197					83×71×40	1431, 1442, 1443	埋没	有(鉄)	
84	土坑	1	2面		812-198					121×94×28	1432	埋没	有(鉄)	
85	土坑	1	2面		808-196					91×83×41	1433, 1458, 1459	埋没	有(鉄) 弥生末	
111	土坑	1	2面		791-217					88×83×29				
112	土坑	1	2面		792-217					121×94×28	1473	埋没	有(鉄)	
123	土坑	1	2面		808-209					109×108×53	1485	埋没	有(鉄)	
124	土坑	1	2面		798-211					83×70×31				
125	土坑	1	2面		802-210					96×58×34				
126	土坑	1	2面		794-211					123×111×27	1486	埋没	有(鉄)	
129	土坑	1	2面		801-202					88×83×31				
130	土坑	1	2面		793-201					115×110×32	1491, 1498, 1499	埋没	有(鉄)	
131	土坑	1	2面		800-203					136×121×43	1500	埋没	有(鉄)	
134	土坑	1	2面		801-214					170×138×60	1501	埋没	有(鉄)	
135	土坑	1	2面		800-188					172×136×31	1508, 1510, 1511	埋没	有(鉄)	
136	土坑	1	2面		795-198					149×126×43	1512	埋没	有(鉄)	
137	土坑	1	2面		808-180					133×128×30	1513, 1514	埋没	有(鉄)	
138	土坑	1	2面		800-189					172×136×30	1515	埋没	有(鉄)	
139	土坑	1	2面		794-200					172×130×35	1511	埋没	有(鉄)	
141	土坑	1	2面		806-201					102×101×56				
142	土坑	1	2面		801-203					104×87×24				

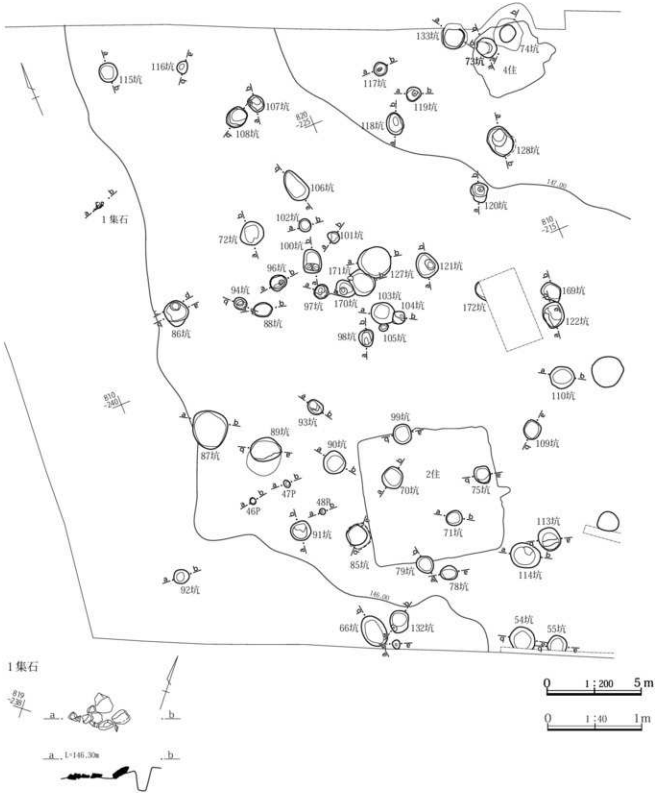
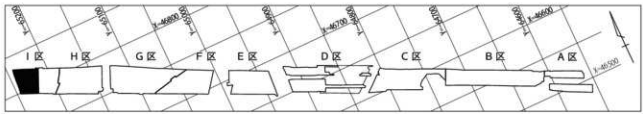
第4章 検出された遺構と遺物



第165図 1区東半部2面土坑断面図(2)

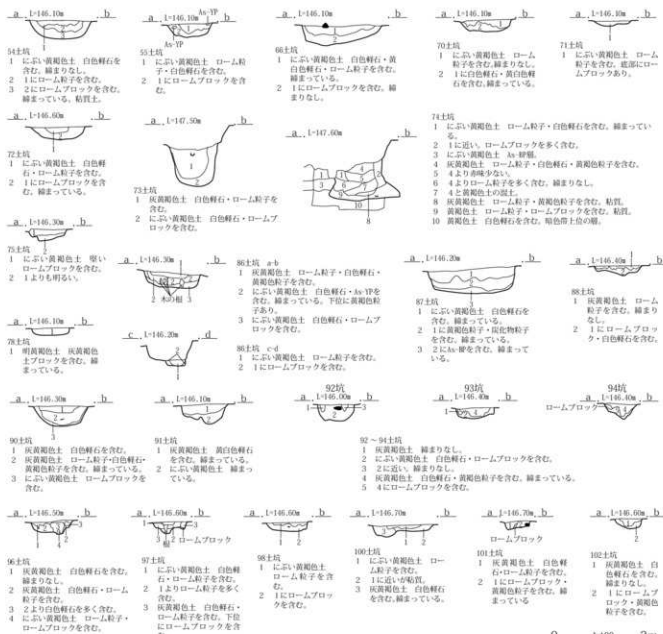
第42表 1区2面土坑計測表(2)

表号	遺構	区	緯度面	検出位置	X-Y	重積関係	旧-新	長×幅×深(cm)	遺物記録	調査	時期・時代	備考
143	土坑	2面	2面	805-187				73×72×29				
144	土坑	2面	2面	805-188				98×90×29				
145	土坑	2面	2面	803-188				73×54×32				
146	土坑	2面	2面	800-187				143×133×36				
147	土坑	2面	2面	792-185				156×141×39	1520, 1521, 1522	埋土・有灰7		
148	土坑	2面	2面	797-188				126×116×32				
149	土坑	2面	2面	795-187				114×100×23	1529	埋土・有灰1		
150	土坑	2面	2面	793-187				172×141×31				
151	土坑	2面	2面	793-189				131×137×36	1524, 1525, 1526	埋土・有灰15		
152	土坑	2面	2面	792-192				143×140×41	1527, 1528, 1529, 1530	埋土・有灰10		
153	土坑	2面	2面	800-197				109×97×21				
154	土坑	2面	2面	803-194				139×133×39	1531	埋土・有灰11		
155	土坑	2面	2面	810-195				97×92×36				
156	土坑	2面	2面	809-191				73×64×29				
157	土坑	2面	2面	808-203				81×37×53				
158	土坑	2面	2面	819-202				63×47×29	1534	埋土2		
159	土坑	2面	2面	796-197	160B(←199B)			124×66×37				
160	土坑	2面	2面	796-199	160B(←199B)			152×113×35				
161	土坑	2面	2面	791-200				155×134×63				
162	土坑	2面	2面	795-197				107×93×64	1535, 1536	埋土・有灰12		
163	土坑	2面	2面	792-204				76×69×18	1537	埋土・有灰13		
164	土坑	2面	2面	796-200				171×139×51				
165	土坑	2面	2面	784-201				144×138×38	1538, 1539, 1540	埋土・有灰11		
166	土坑	2面	2面	784-204				132×108×45	1541, 1542, 1543, 1544	埋土・有灰17		
167	土坑	2面	2面	803-187				147×122×58	1545, 1546, 1547	埋土・有灰16		
168	土坑	2面	2面	799-202				65×55×51	1548	埋土・有灰14		



第166図 1区西半部2面土坑・ピット位置図、集石

第4章 検出された遺構と遺物



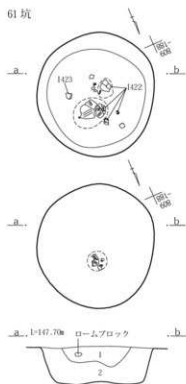
第167図 1区西西部2面土坑断面図(1)

第43表 1区2面土坑計測表(3)

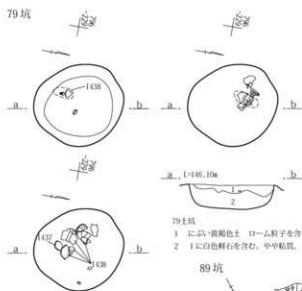
番付	面積	区	経度	緯度	X-Y	重複関係	田一画	長×短×深(cm)	遺物種類	層位	時期・時代	備考
54	1	280	789	224				130×125×80				
55	1	280	789	227				101×95×82				
66	1	280	793	231				172×121×41				
70	1	280	800	227				114×107×22				
71	1	280	797	225				80×81×12				
72	1	280	815	229				129×115×28	1425			黒土・有灰I
73	1	280	819	234				111×95×95	1426, 1427, 1428			黒土・有灰I, 漆塗3
74	1	280	819	232				179×155×64	1429, 1430			黒土・有灰I, 粘羽積層I
75	1	280	798	223				98×86×21	1433, 1434, 1435			黒土・有灰5
76	1	280										
78	1	280	794	226				90×76×16	1436			漆塗1
86	1	280	812	234				134×124×55				黒土・有灰5, 漆塗4
87	1	280	805	235				203×192×56	1449, 1450, 1451			黒土・有灰5
88	1	280	811	230				98×74×17				
89	1	280	803	230				121×114×45				
91	1	280	799	223				106×103×41	1455			黒土・有灰3
92	1	280	800	240				82×73×35				
93	1	280	805	230				88×70×30				
94	1	280	812	231				71×63×32	1456			黒土・有灰1
96	1	280	812	229				92×81×28				
97	1	280	811	227				79×76×24				
98	1	280	808	226				91×75×37				
100	1	280	812	227				127×92×30	1465			黒土・有灰2
101	1	280	813	225				64×58×17				
102	1	280	814	227				68×65×24				

第4章 検出された遺構と遺物

61坑



79坑

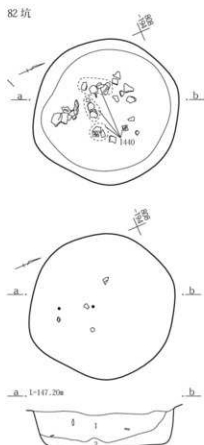


79土坑
1 に濃い黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
2 1に白色軽石を含む。やや粘乳。

61土坑

1 に濃い黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
2 1にロームブロック・白色軽石を含む。

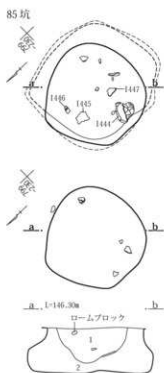
82坑



82土坑

1 黒褐色土 白色軽石・黄白色軽石を含む。
2 に濃い黄褐色土 白色軽石・黄白色軽石・ロームブロックを含む。

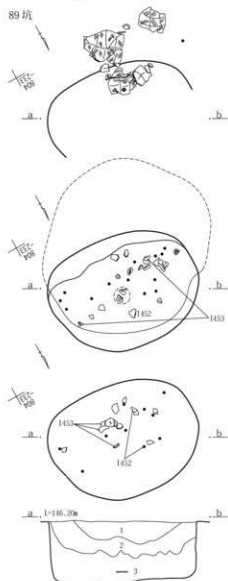
85坑



85土坑

1 灰黄褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。締まっている。
2 1にロームブロック・炭化物粒子を含む。

89坑



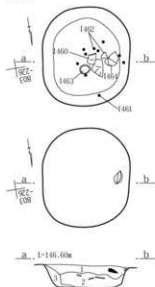
89土坑

1 に濃い黄褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。締まっている。
2 1に黄色粘・炭化物粒子を含む。締まっている。
3 黒褐色土 白色軽石・黄色粘・ロームブロック・炭化物粒子を含む。締まっている。

第169図 1区2面61・79・82・85・89土坑

0 1:40 1m

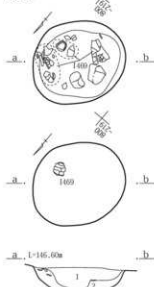
99坑



99土坑

- 1 にふい・黄褐色土 白色輝石を含む。締まりなし。
- 2 1に黄色粒を含む。
- 3 にふい・黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子を含む。

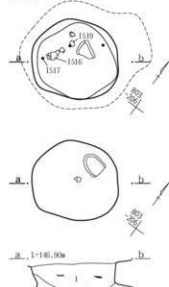
109坑



109土坑

- 1 灰黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 にふい・黄褐色土 ローム粒子を含む。下にロームブロックを含む。締まりなし。

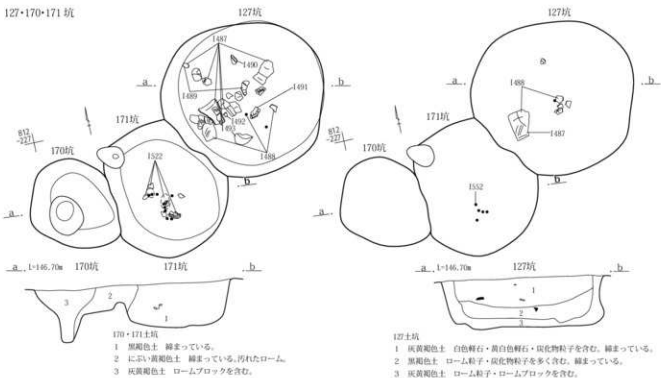
140坑



140土坑

- 1 灰黄褐色土 白色輝石を含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子・白色輝石を含む。
- 3 2にロームブロックを含む。

127・170・171坑



170・171土坑

- 1 黒褐色土 締まっている。
- 2 にふい・黄褐色土 締まっている。汚れたローム。
- 3 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。

127土坑

- 1 灰黄褐色土 白色輝石・黄白色輝石・炭化物粒子を含む。締まっている。
- 2 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。締まっている。
- 3 灰黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを含む。

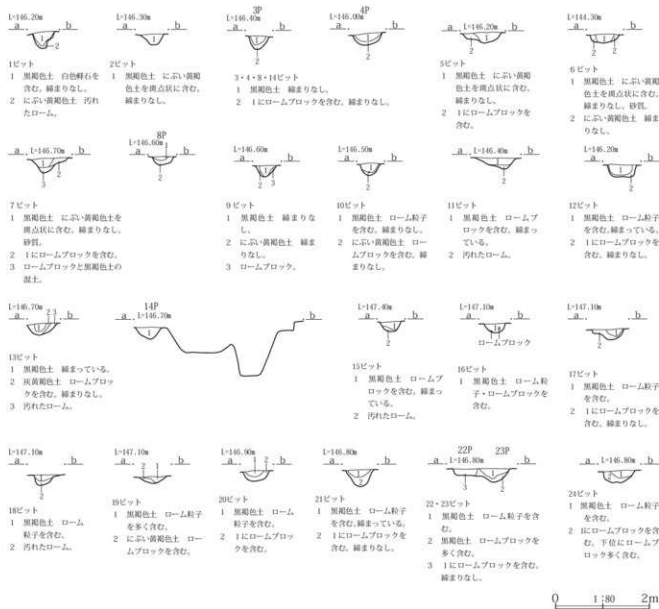
第170図 1区2面99・109・127・140・170・171土坑

0 1:40 1m

第45表 1区2面土坑計測表(5)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複回数	目一新	長×短×深(m)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
61	土坑	1	2面	808-185				130×128×40	1422, 1423	黒土・有尾13		
79	土坑	1	2面	795-227		2目と重複		96×85×27	1437, 1438	黒土・有尾2		
82	土坑	1	2面	806-192		9目と重複		162×153×42	1440	黒土・有尾10		
85	土坑	1	2面	798-200				137×132×49	1444, 1445, 1446 1447, 1448	黒土・有尾10		
89	土坑	1	2面	803-233				203×168×67	1452, 1453, 1454	黒土・有尾50		
99	土坑	1	2面	802-226		2目と重複		108×96×35	1460, 1461, 1462	黒土・有尾12		
109	土坑	1	2面	800-219				102×90×27	1469	黒土・有尾1		
127	土坑	1	2面	811-223		171坑と重複		174×163×53	1487, 1488, 1489	黒土・有尾2		
140	土坑	1	2面	802-206				139×115×52	1516, 1517	黒土・有尾11		
170	土坑	1	2面	810-226		171坑と重複		107×89×60		黒土・有尾6		
171	土坑	1	2面	810-225		127・170坑と重複		152×123×49	1552, 1553	黒土・有尾29		

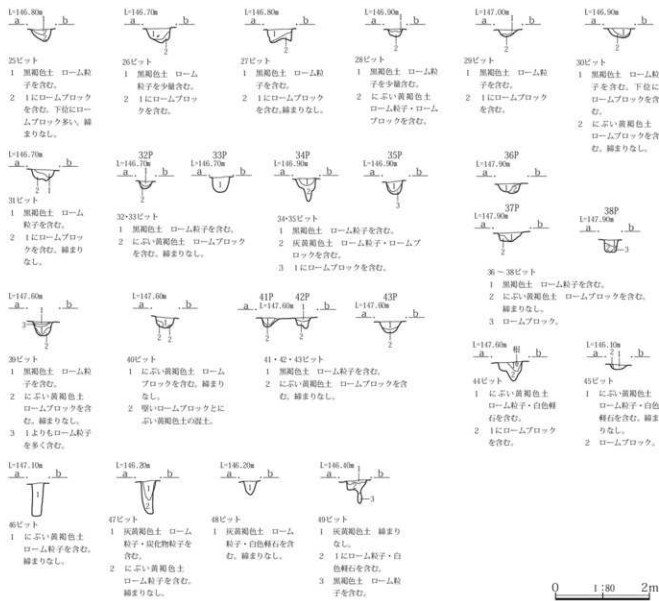
第4章 検出された遺構と遺物



第171図 I区1面ビット断面図

第46表 I区1面ビット計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	東端間隔 旧→新	長×幅×深(cm)	覆土	遺物登録	破片	時期・時代	備考
1	ビット	I	1層	826-238		51×48×39					
2	ビット	I	1層	827-236		50×43×30					
3	ビット	I	1層	821-238		46×41×32					
4	ビット	I	1層	801-242		66×63×31					
5	ビット	I	1層	800-239		91×77×22					
6	ビット	I	1層	807-236		63×53×17					
7	ビット	I	1層	818-227		85×67×42					
8	ビット	I	1層	809-229		46×41×19					
9	ビット	I	1層	808-230		50×41×27					
10	ビット	I	1層	808-232		47×42×27					
11	ビット	I	1層	803-232	トレンチに切られて いる	89×47×17					
12	ビット	I	1層	796-239		71×68×27					
13	ビット	I	1層	804-227		71×63×34					
14	ビット	I	1層	806-238		67×39×30					
15	ビット	I	1層	820-218		57×53×25					
16	ビット	I	1層	808-215		47×42×23					
17	ビット	I	1層	803-213		71×56×27					
18	ビット	I	1層	803-214		63×53×23					
19	ビット	I	1層	802-215		62×50×19					
20	ビット	I	1層	801-217		69×58×24					
21	ビット	I	1層	800-219		60×53×37					
22	ビット	I	1層	803-221		73×38×14					
23	ビット	I	1層	803-221		75×63×34					
24	ビット	I	1層	802-222		76×35×25					

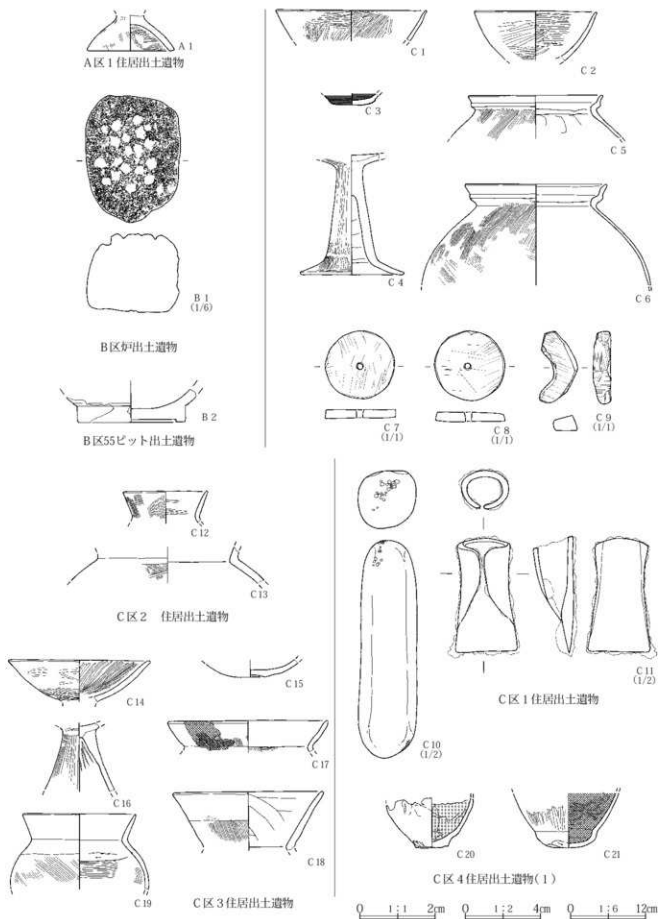


第172図 I区1・2面ピット断面図

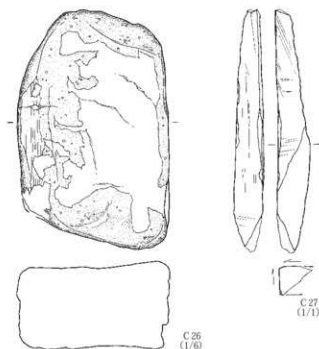
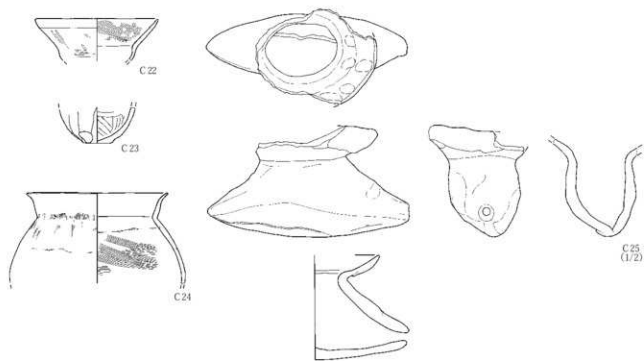
第47表 I区1・2面ピット計測表

番付	遺構	区	縦断面	横断位置	X-Y	重層関係	形→番	長×短(深[m])	層土	遺物群様	磁片	時期・時代	備考
25	ピット	1	1層	801-229				47×39×29					
26	ピット	1	1層	798-221				56×45×36					
27	ピット	1	1層	802-221				55×48×24					
28	ピット	1	1層	804-220				35×33×17					
29	ピット	1	1層	804-215				51×45×20					
30	ピット	1	1層	800-213				54×31×22					
31	ピット	1	1層	797-216				55×31×20					
32	ピット	1	1層	799-205				33×29×19					
33	ピット	1	1層	791-204				39×34×35					
34	ピット	1	1層	792-203				46×43×52					
35	ピット	1	1層	788-201				40×38×29					
36	ピット	1	1層	809-192				52×49×23					
37	ピット	1	1層	809-192				64×35×24					
38	ピット	1	1層	806-190				33×31×27					
39	ピット	1	1層	801-193				49×45×33					
40	ピット	1	1層	802-194				43×40×25					
41	ピット	1	1層	804-195				38×35×19					
42	ピット	1	1層	803-195				39×38×25					
43	ピット	1	1層	807-195				47×43×27					
44	ピット	1	2層	814-197				54×38×40					
45	ピット	1	2層	792-213				47×27×42					
46	ピット	1	2層	802-235				57×39×21					
47	ピット	1	2層	802-233				41×35×14					
48	ピット	1	2層	800-232				30×28×31					
49	ピット	1	2層	793-213				51×48×86					

第4章 検出された遺構と遺物



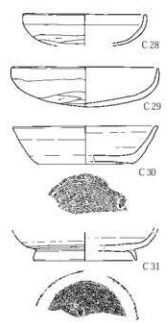
第173図 A区1住居、B区55ピット、C区1~4住居(1)出土遺物



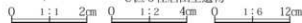
C区4住居出土遺物(2)



C区201土坑出土遺物

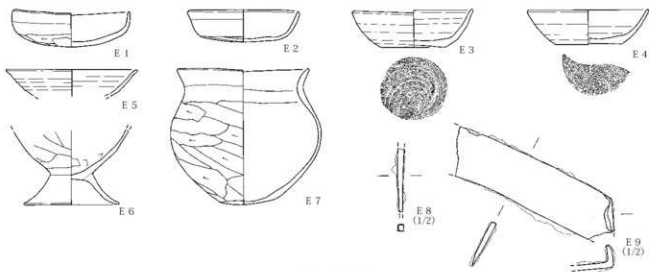


C区6住居出土遺物

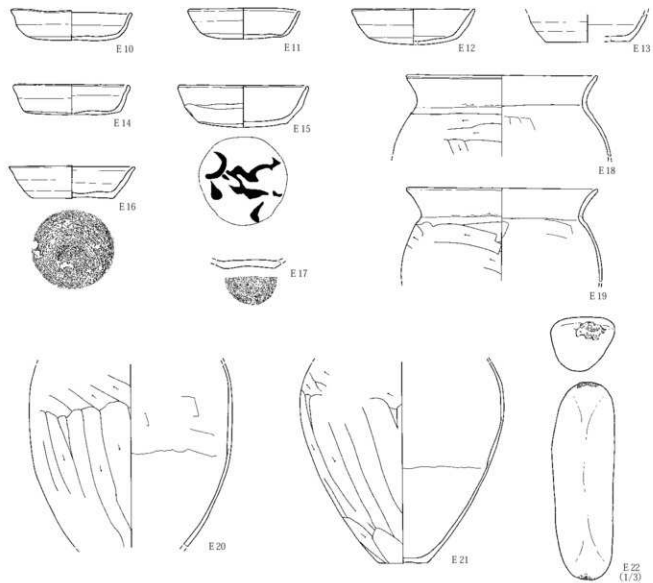


第174图 C区4住居(2)、6住居、201土坑出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

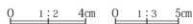


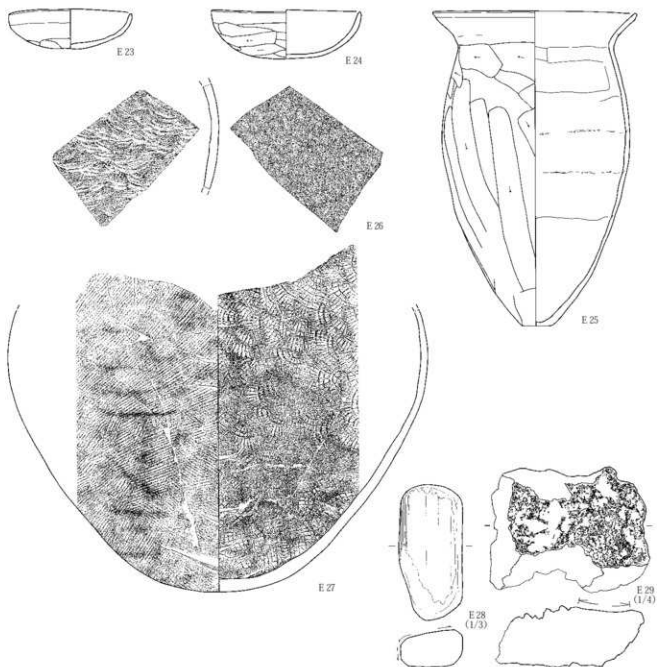
E区1住居出土遺物



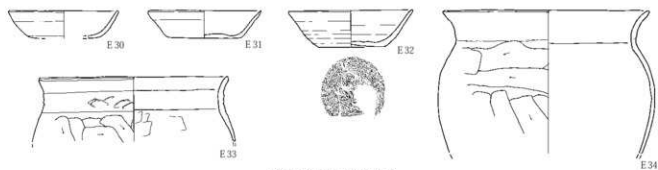
E区2住居出土遺物

第175図 E区1・2住居出土遺物





E区3住居出土遺物

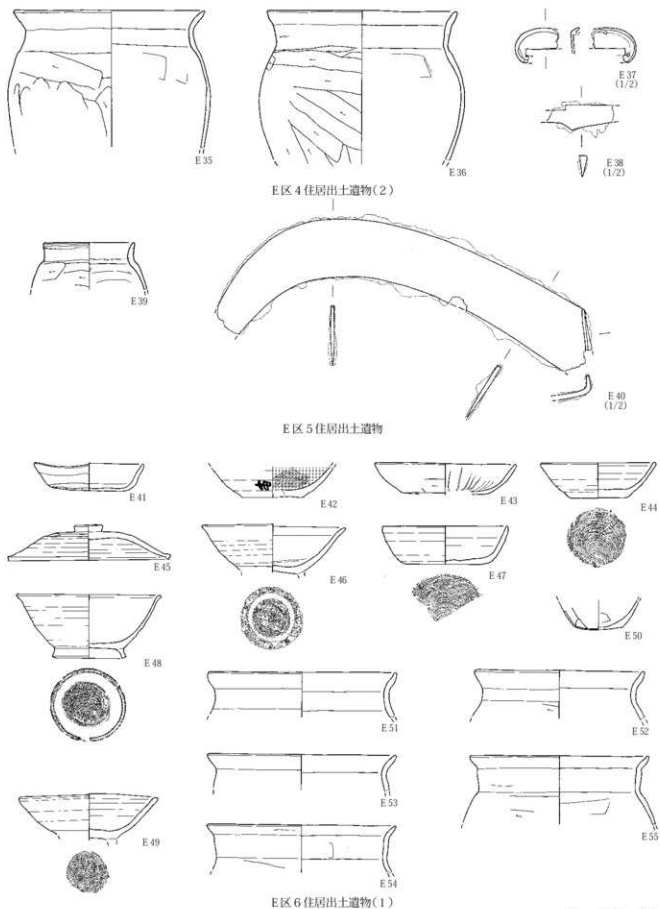


E区4住居出土遺物(1)

0 1:3 5cm 0 1:4 8cm

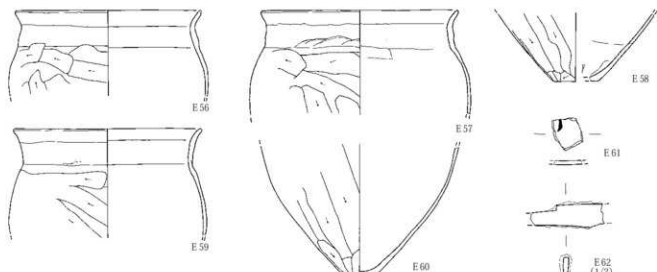
第176图 E区3住居、4住居(1)出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

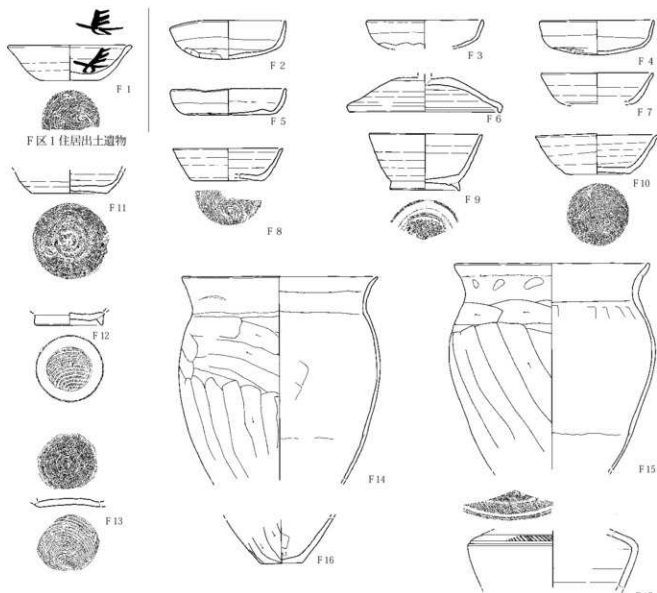


第177図 E区4住居(2)、5住居、6住居(1)出土遺物

遺物図(E・F区)



E区6住居出土遺物(2)

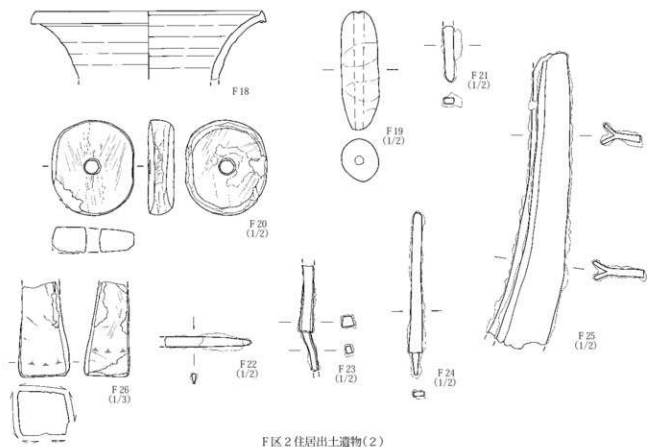


F区2住居出土遺物(1)

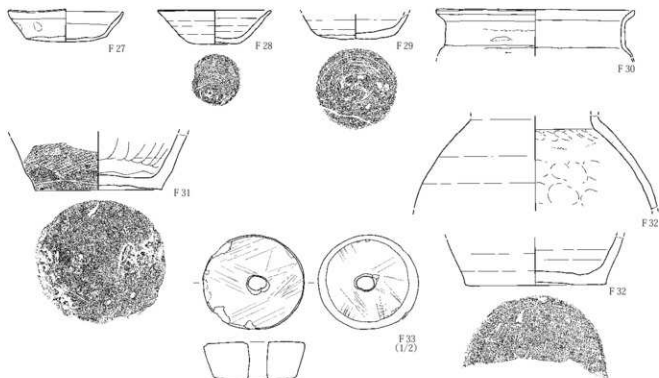
第178図 E区6住居(2)、F区1住居、2住居(1)出土遺物

0 1:2 4cm

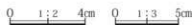
第4章 検出された遺構と遺物



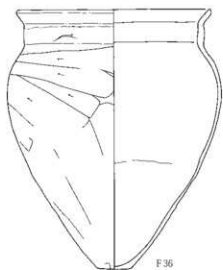
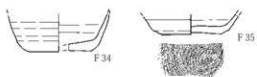
F区2住居出土遺物(2)



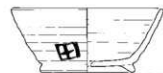
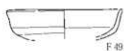
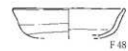
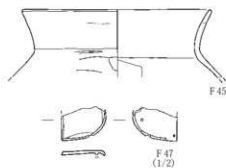
F区3住居出土遺物



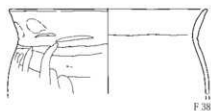
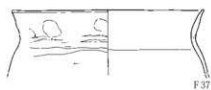
第179図 F区2住居(2)、3住居出土遺物



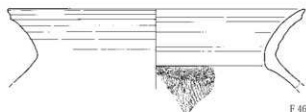
F区4住居出土遺物



F区7住居出土遺物(1)



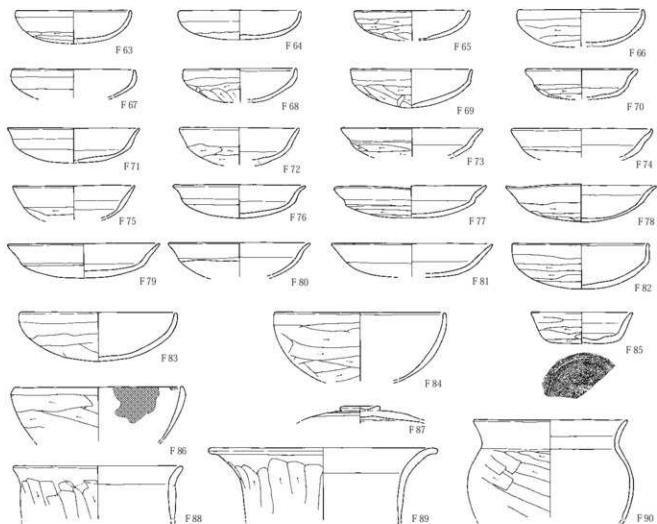
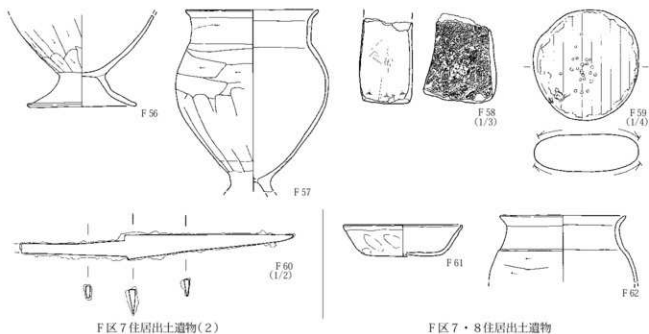
F区5住居出土遺物



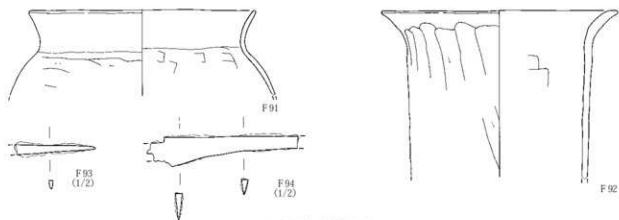
F区6住居出土遺物

0 1:2 4cm

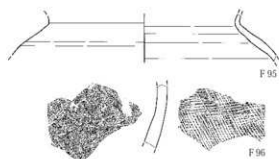
第4章 検出された遺構と遺物



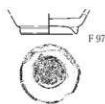
第 181 図 F 区 7 住居 (2)、7・8 住居、8 住居 (1) 出土遺物



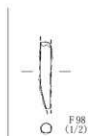
F区8住居出土遺物(2)



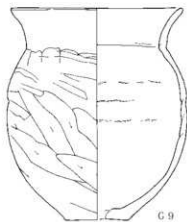
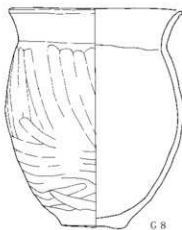
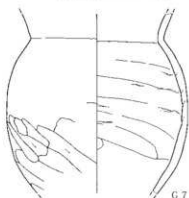
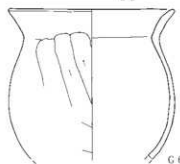
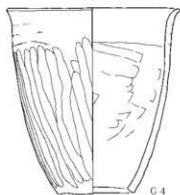
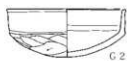
F区1溝出土遺物



F区2溝出土遺物



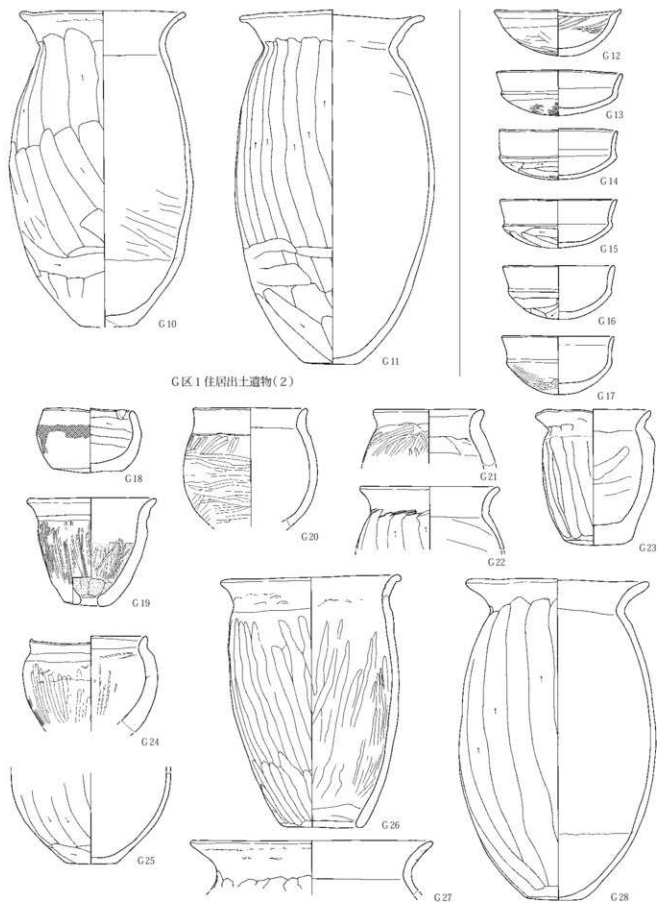
F区3溝出土遺物



G区1住居出土遺物(1)

第182图 F区8住居(2)、1~3溝、G区1住居(1)出土遺物

0 1:2 4cm

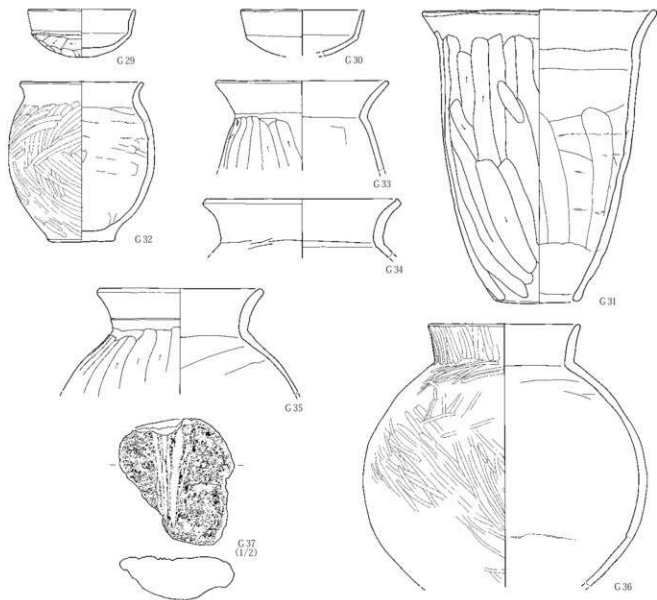


G区1住居出土遺物(2)

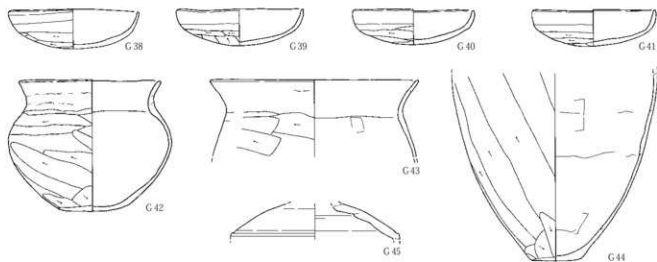
G区2住居出土遺物

第183図 G区1住居(2)、2住居出土遺物

器物图(G区)



G区3住居出土器物

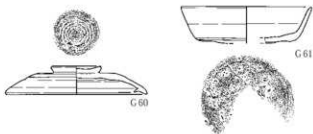
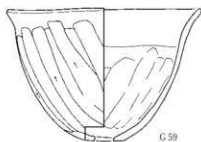
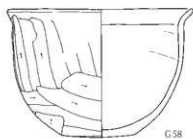
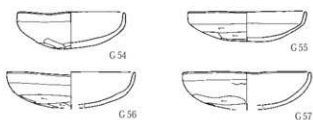
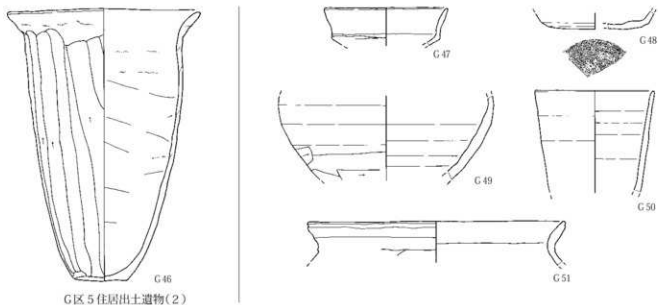


G区5住居出土器物(1)

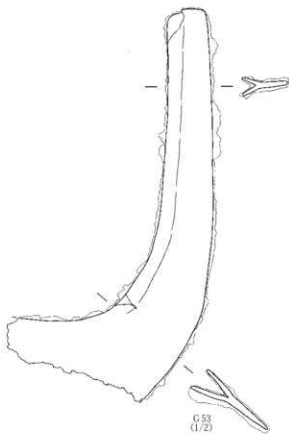
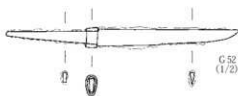
第184图 G区3住居、5住居(1)出土器物

0 1:2 4cm

第4章 検出された遺構と遺物



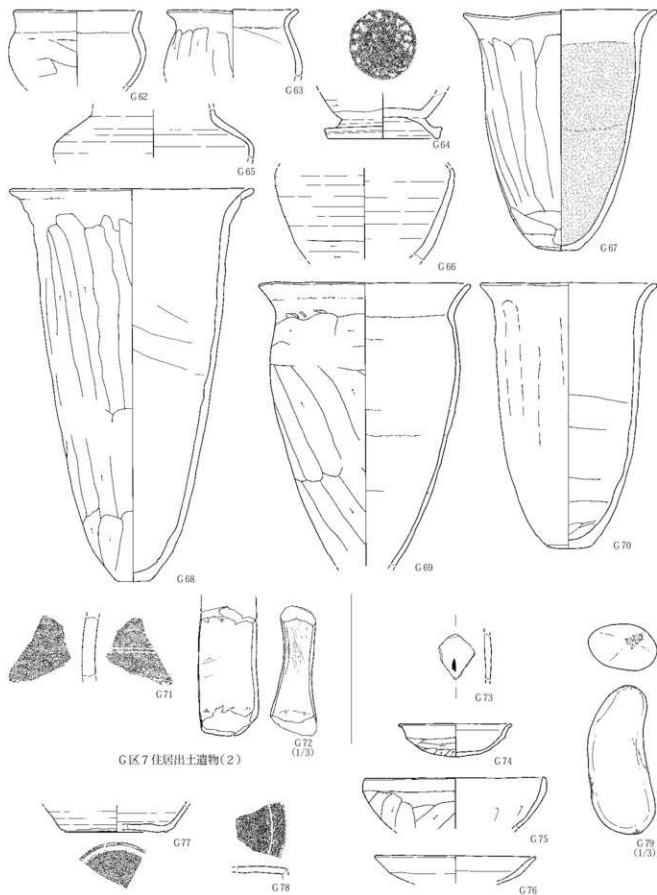
G区7住居出土遺物(1)



G区6住居出土遺物

0 1:2 4cm

第185図 G区5住居(2)、6住居、7住居(1)出土遺物



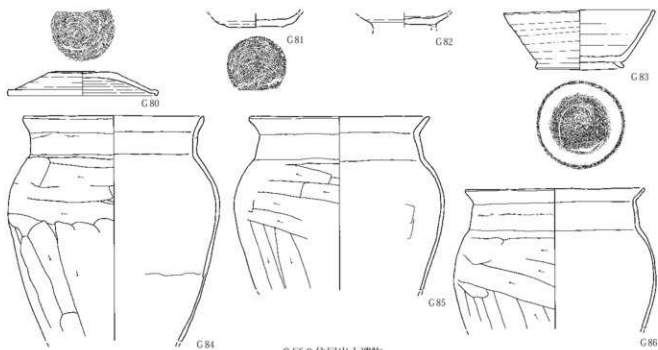
G区7住居出土遺物(2)

G区8住居出土遺物

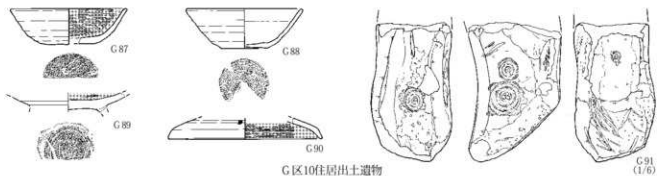
第186圖 G区7住居(2)、8住居出土遺物

0 1/3 5cm

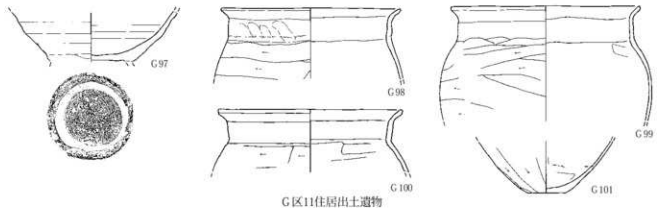
第4章 検出された遺構と遺物



G区9住居出土遺物



G区10住居出土遺物

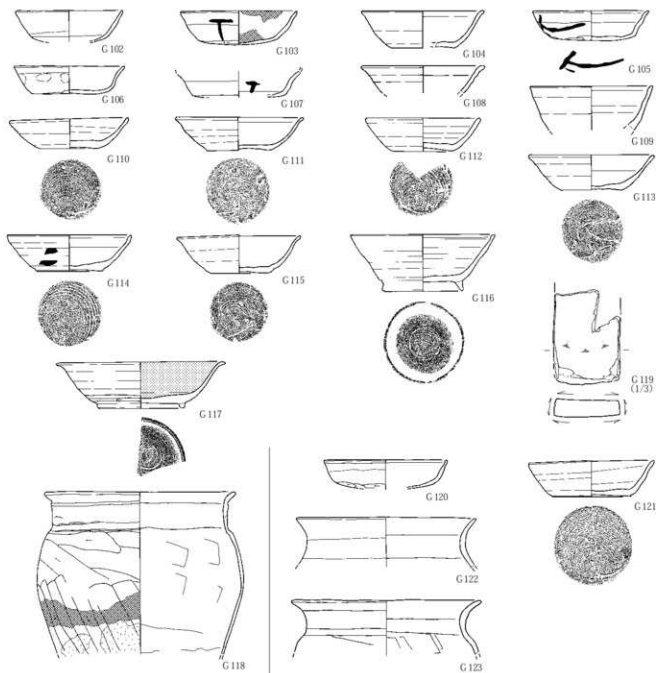


G区11住居出土遺物

0 1:6 12cm

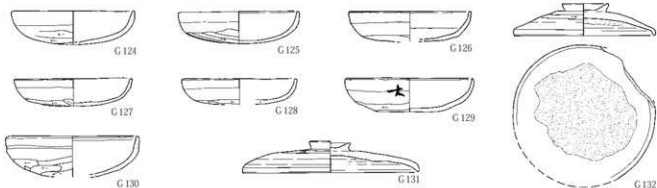
第187図 G区9～11住居出土遺物

遺物図(G区)



G区12住居出土遺物

G区13住居出土遺物

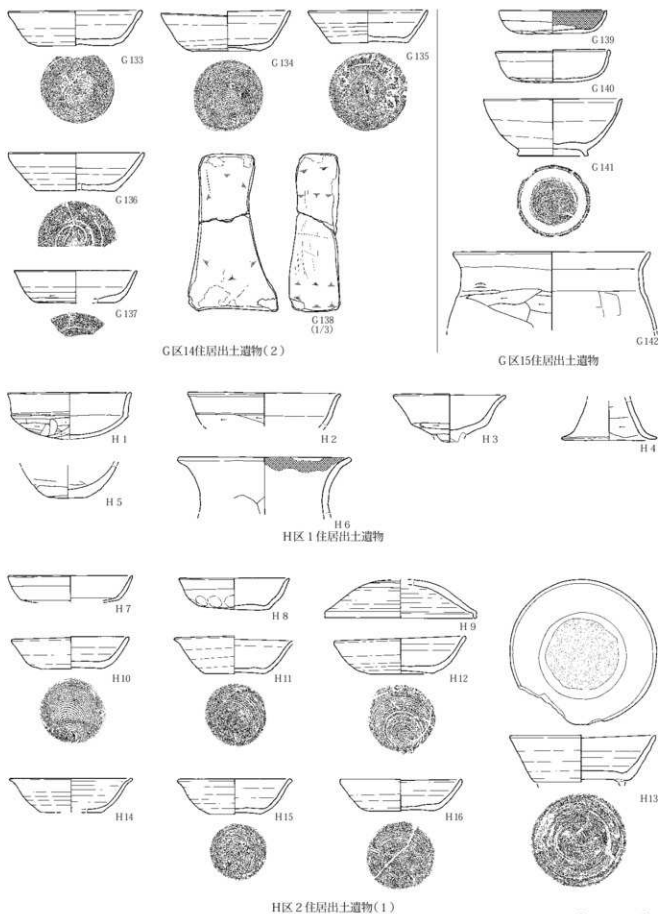


G区14住居出土遺物(1)

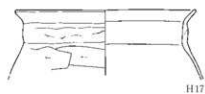
第188圖 G区12・13住居、14住居(1)出土遺物

0 1:3 5cm

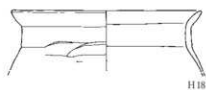
第4章 検出された遺構と遺物



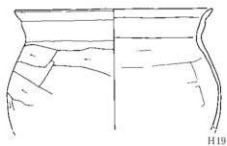
第189図 G区14住居(2)、15住居、H区1住居、2住居(1)出土遺物



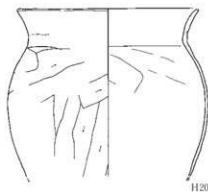
H17



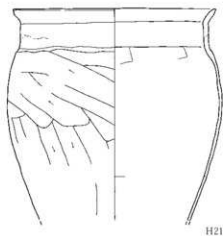
H18



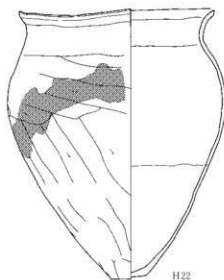
H19



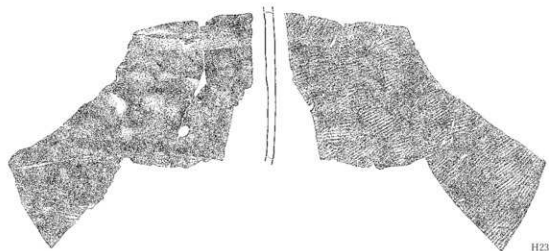
H20



H21

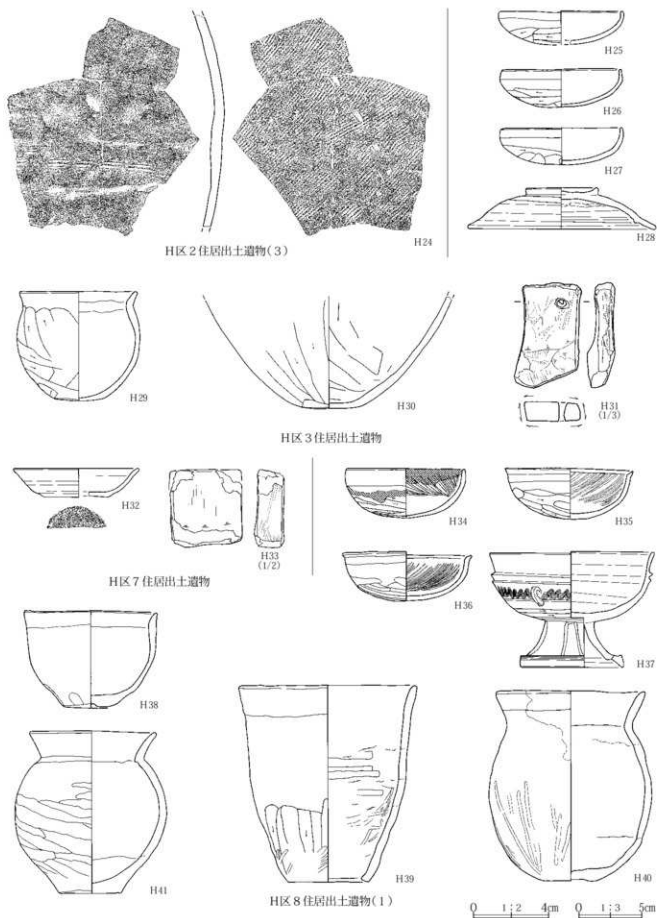


H22

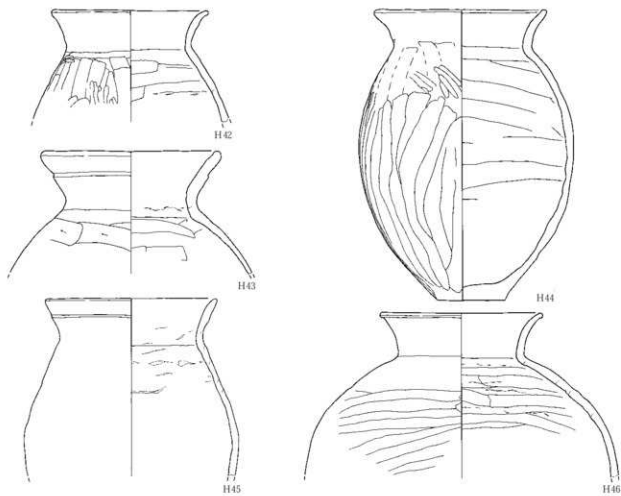


H23

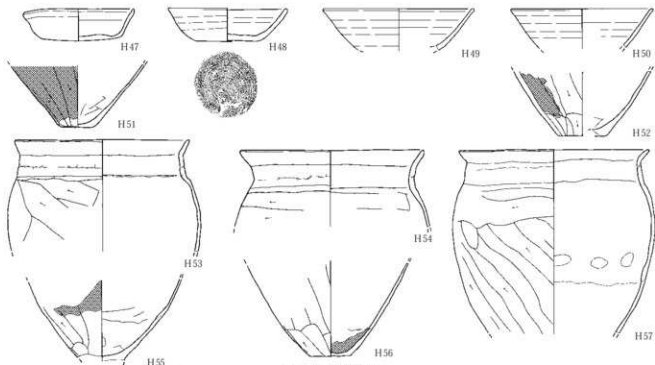
第190图 H区2住居(2)出土遺物



第191図 H区2住居(3)、3・7住居、8住居(1)出土遺物



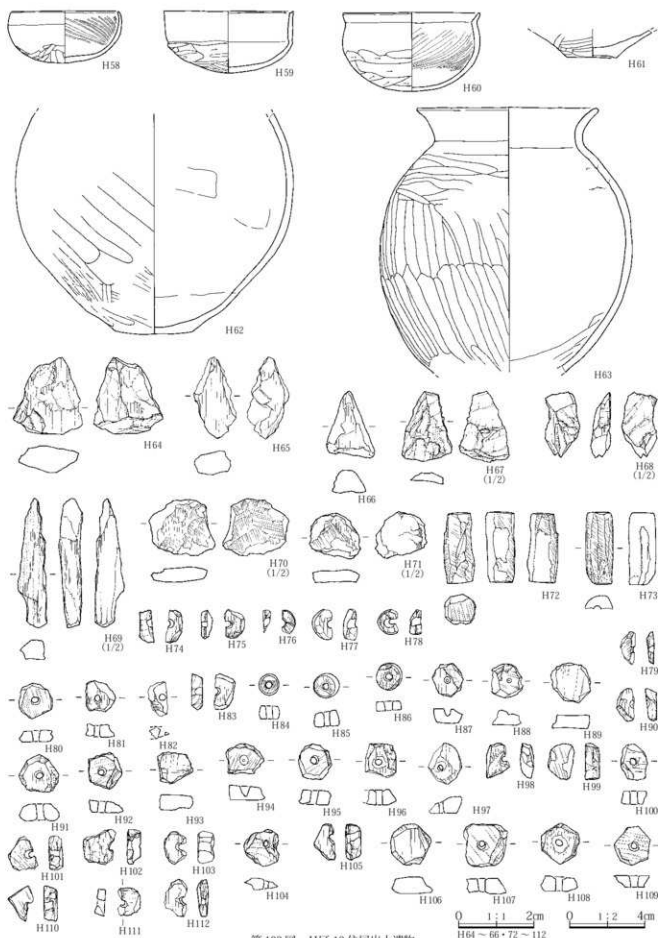
H区8住居出土遺物(2)



H区9住居出土遺物

第192図 H区8住居(2)、9住居出土遺物

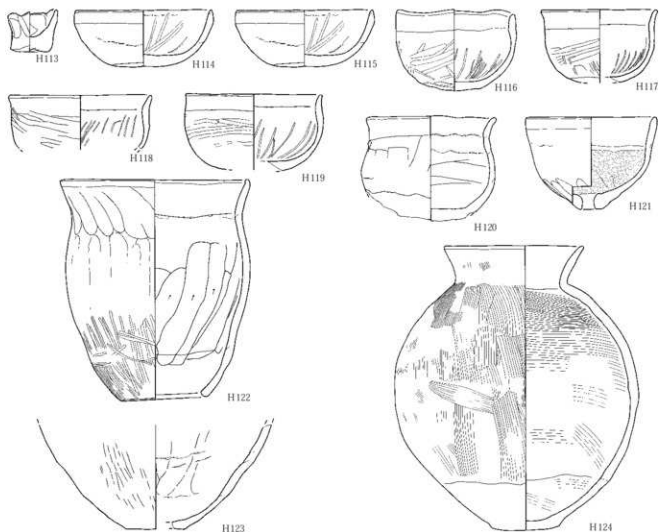
第4章 検出された遺構と遺物



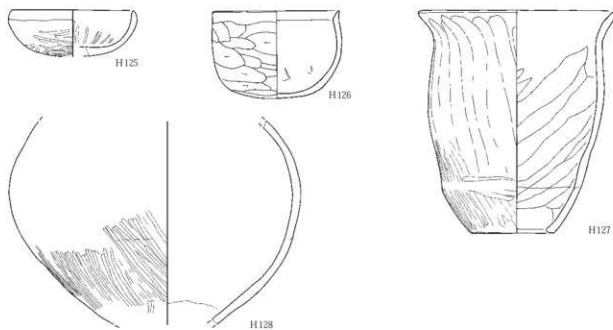
第193図 H区10住居出土遺物

0 1; 1 2cm 0 1; 2 4cm
H64 ~ 66・72 ~ 112

器物图(H区)



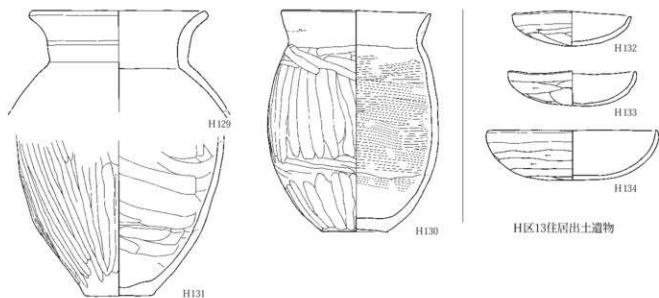
H区11住居出土器物



H区12住居出土器物(1)

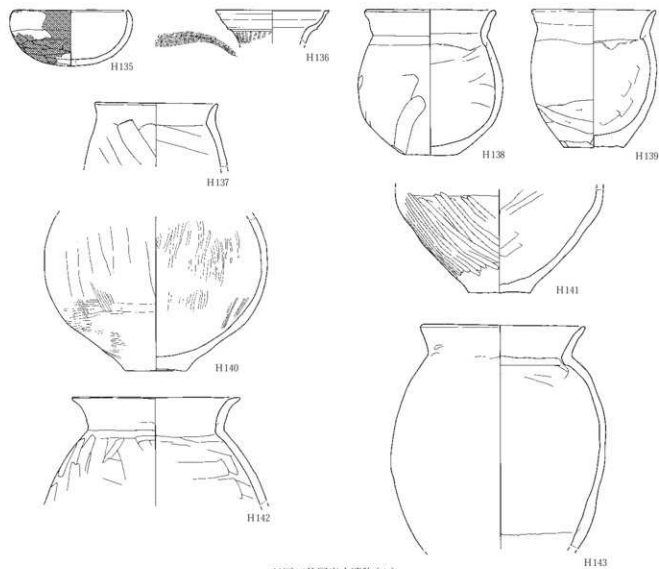
第194图 H区11住居、12住居(1)出土器物

第4章 検出された遺構と遺物



H区13住居出土遺物

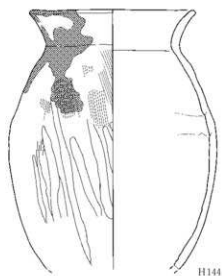
H区12住居出土遺物(2)



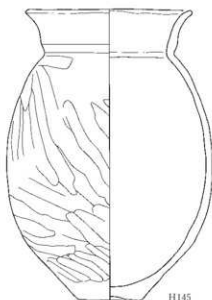
H区14住居出土遺物(1)

第195図 H区12住居(2)、13住居、14住居(1)出土遺物

遺物図(H区)



H144



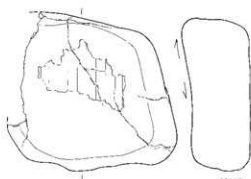
H145



H146
(1/1)



H147
(1/1)



H148
(1/4)

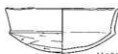
H区14住居出土遺物(2)



H149



H150



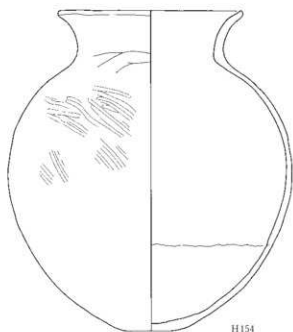
H151



H152



H153



H154



H155
(1/2)



H156
(1/3)

H区15住居出土遺物

0 1:1 2m

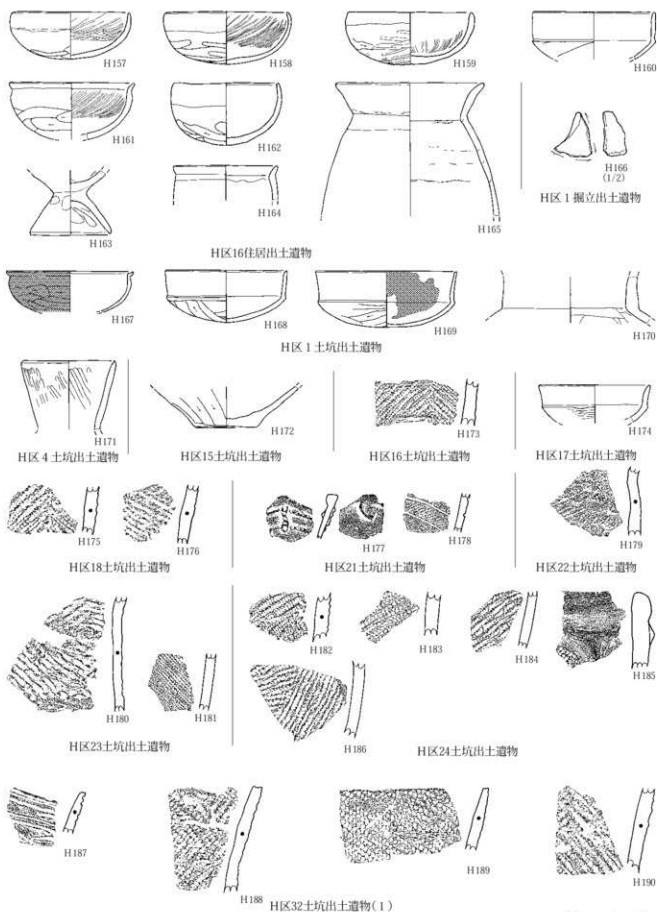
0 1:2 4m

0 1:3 5cm

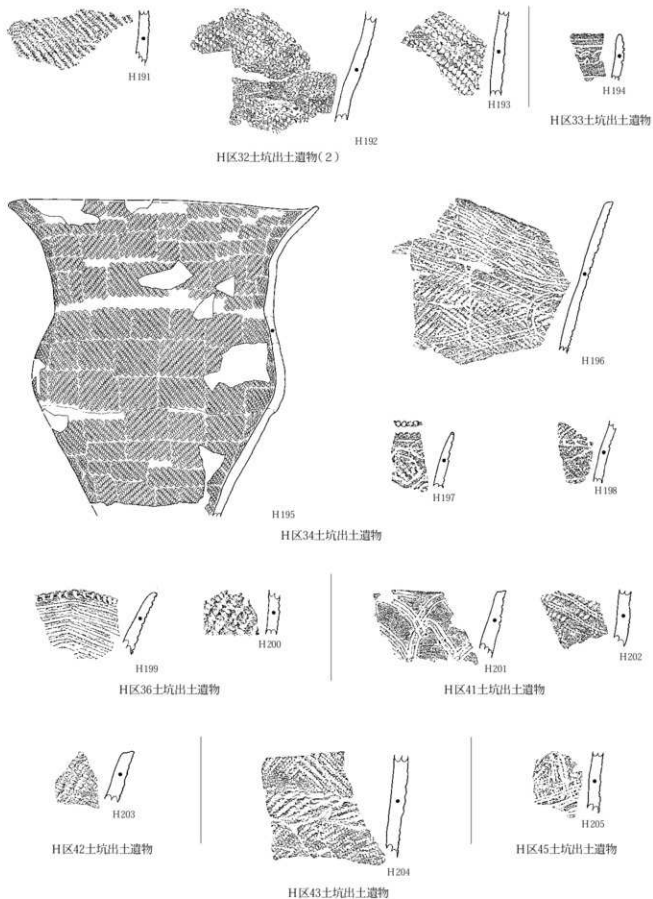
0 1:4 8cm

第196图 H区14住居(2)、15住居出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第197図 H区16住居、1掘立柱建物、1・4・15～18・21～24土坑、32土坑(1)出土遺物



第198图 H区32土坑(2)、33·34·36·41~43·45土坑出土道物

第4章 検出された遺構と遺物



H206
(1/1)



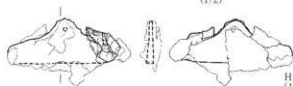
H207
(1/1)



H208
(1/2)



H209
(1/2)

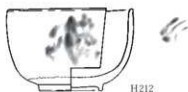


H210
(1/2)

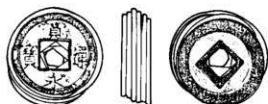


H211
(1/2)

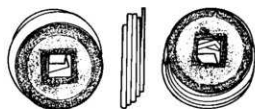
H区48土坑出土遺物



H212

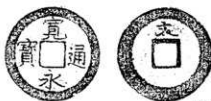


H213
(1/1)



H214
(1/1)

H区49土坑出土遺物



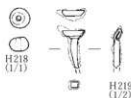
H215
(1/1)

H区53土坑出土遺物



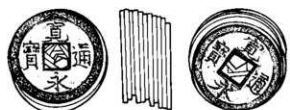
H216・217

H区54土坑出土遺物



H218
(1/1)

H219
(1/2)

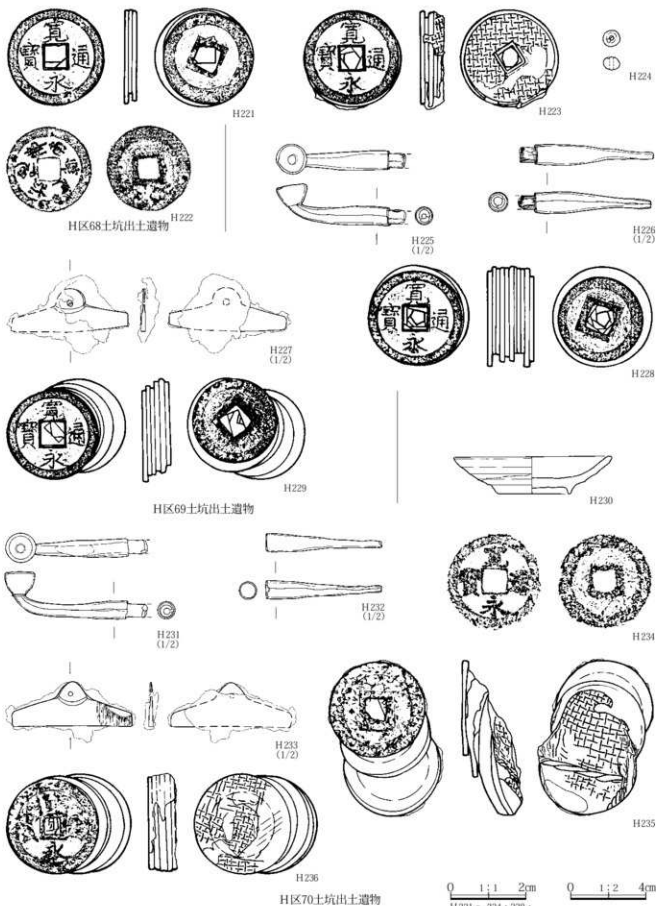


H220
(1/1)

H区67土坑出土遺物

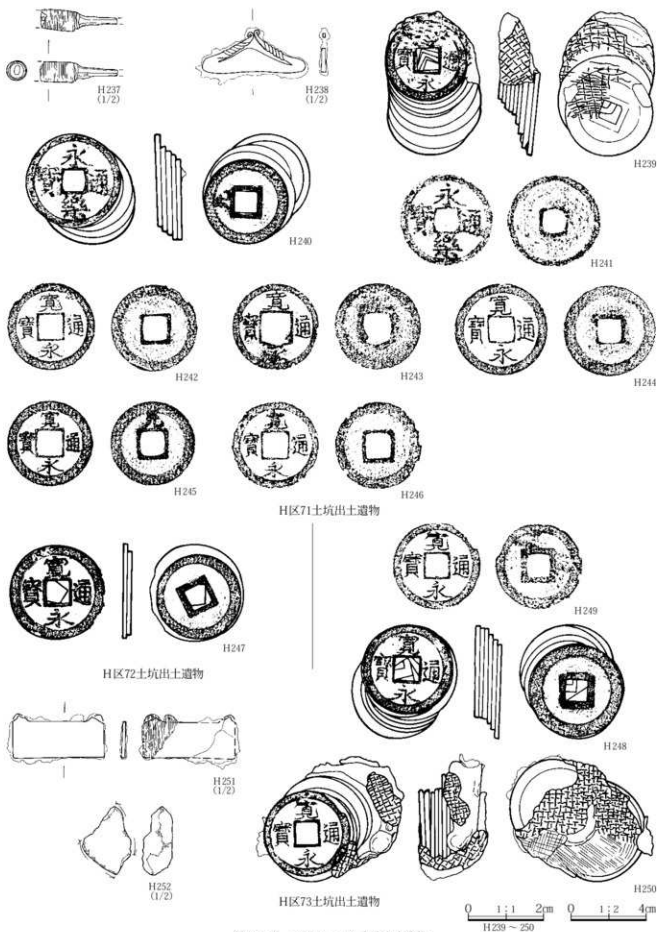


第199図 H区48・49・53・54・67土坑出土遺物

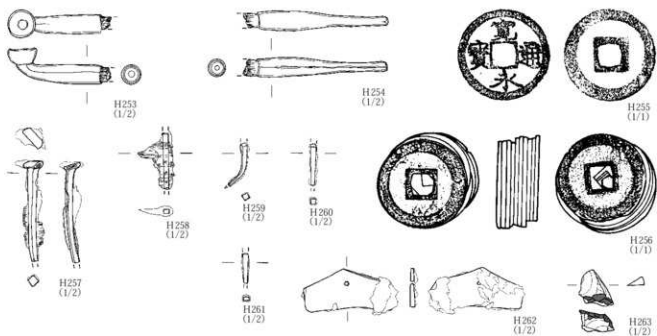


第200图 H区68~70土坑出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



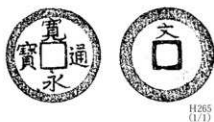
第201図 H区71～73土坑出土遺物



H区74土坑出土遺物



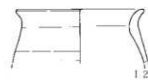
H区77土坑出土遺物



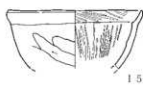
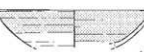
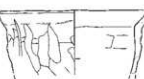
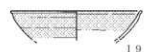
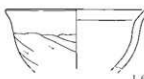
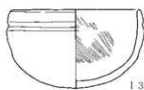
H区墓地跡出土遺物



H区2トレンチ出土遺物



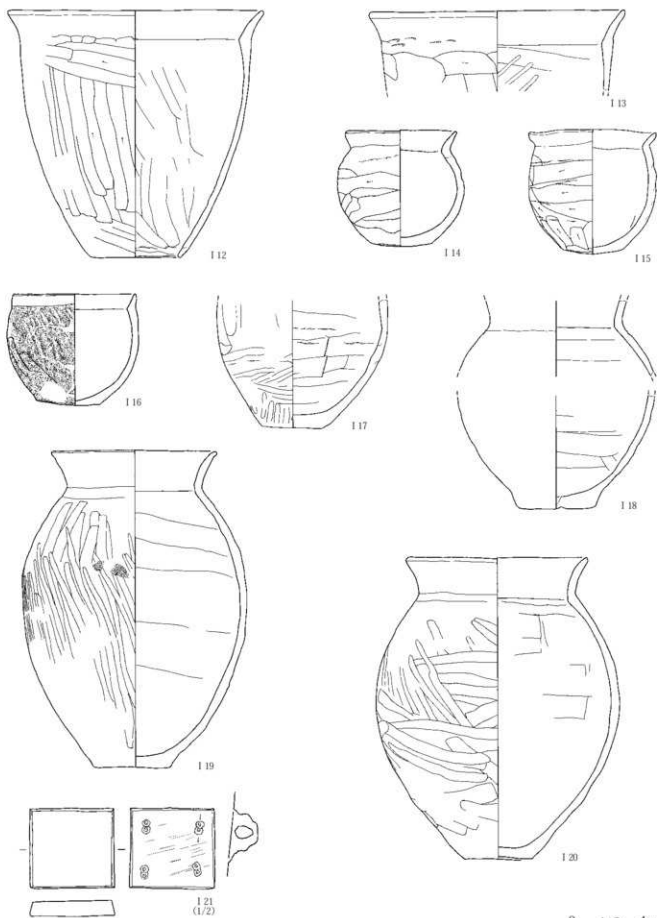
I区1井戸出土遺物



I区2住居出土遺物(1)

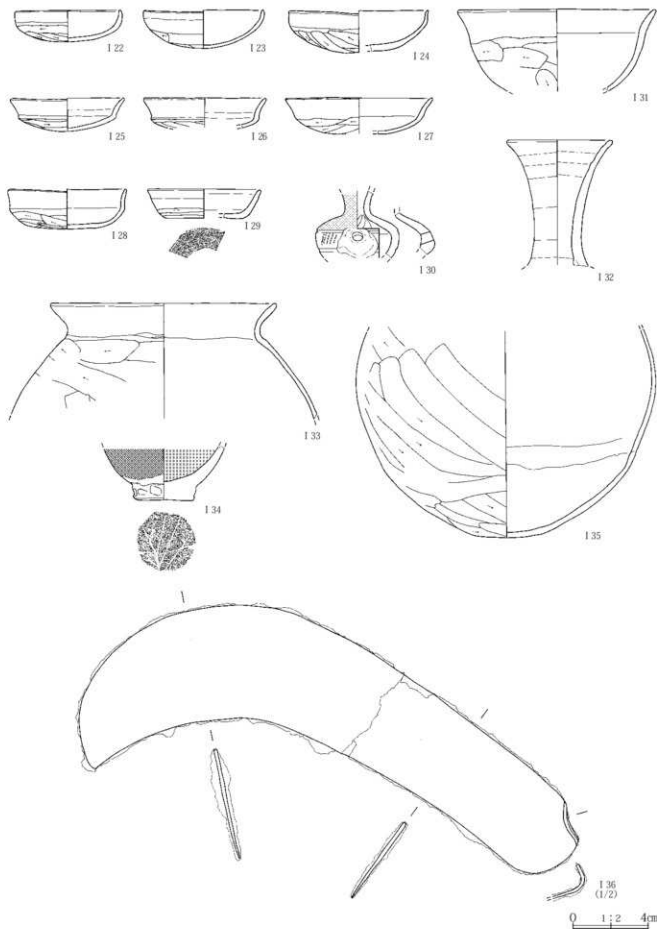


第202図 H区74・77土坑、墓地跡、2トレンチ、I区1井戸・2住居(1)出土遺物



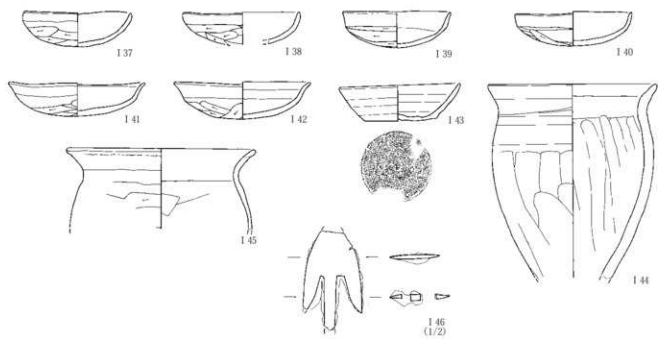
第203図 1区2住居(2)出土遺物

遺物図(1区)

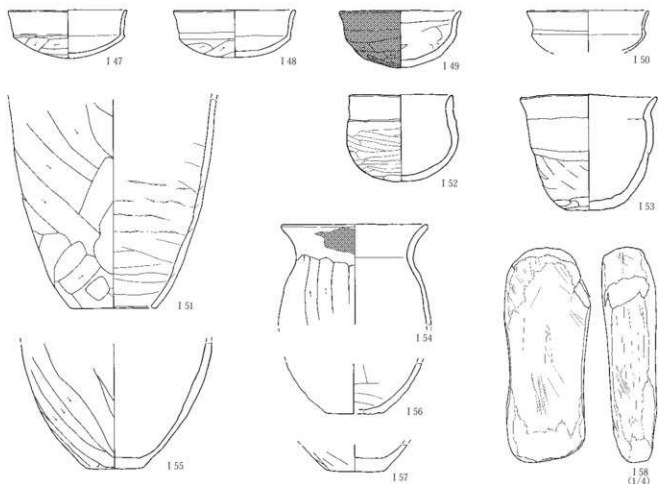


第204图 1区3住居出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

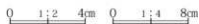


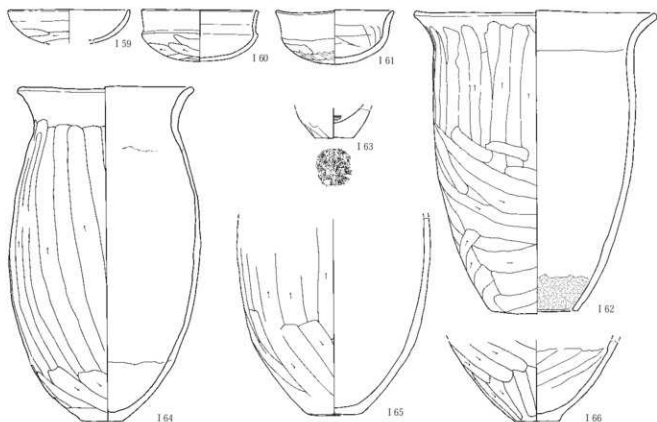
1区4住居出土遺物



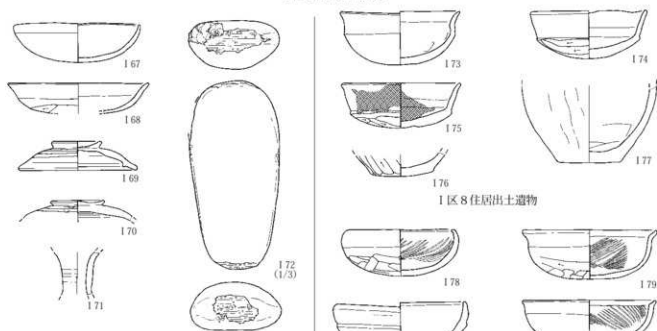
1区5住居出土遺物

第205図 1区4・5住居出土遺物





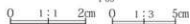
I区6住居出土遺物



I区8住居出土遺物

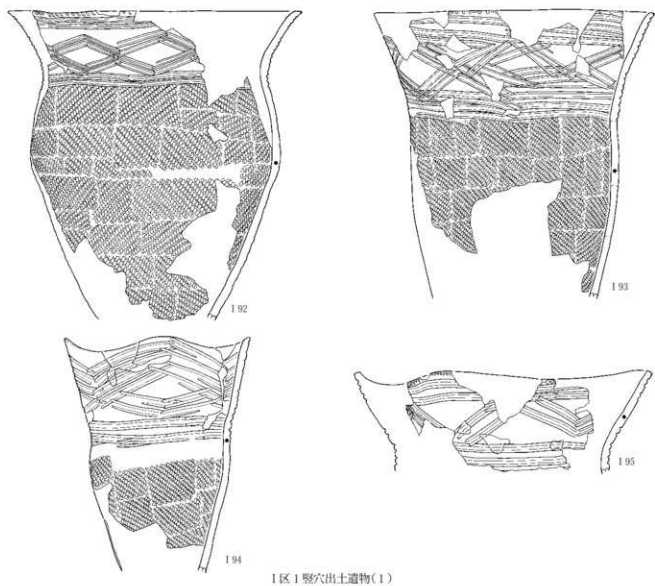
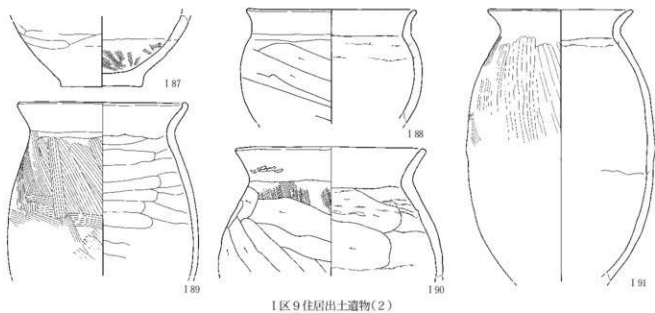


I区9住居出土遺物(1)

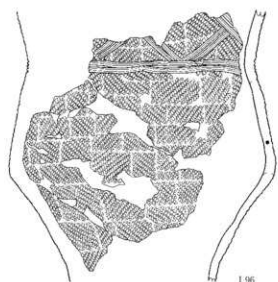


第206图 I区6~8住居、9住居(1)出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



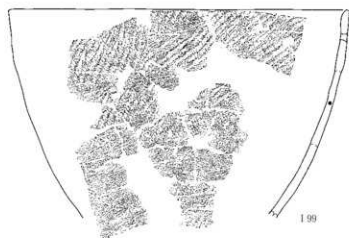
第207図 1区9住居(2)、1区1竪穴(1)出土遺物



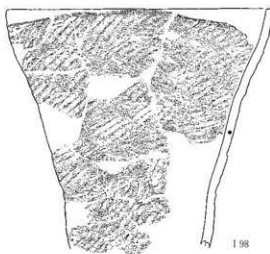
196



197



199



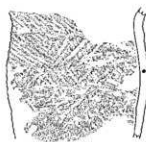
198



1100



1101



1102



1103



1104



1105



1106



1107



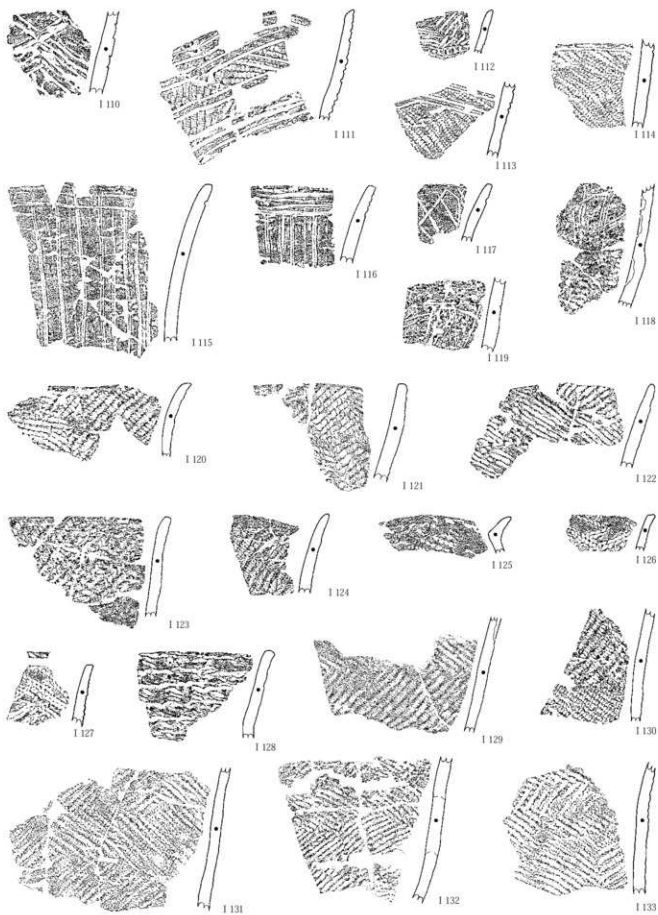
1108



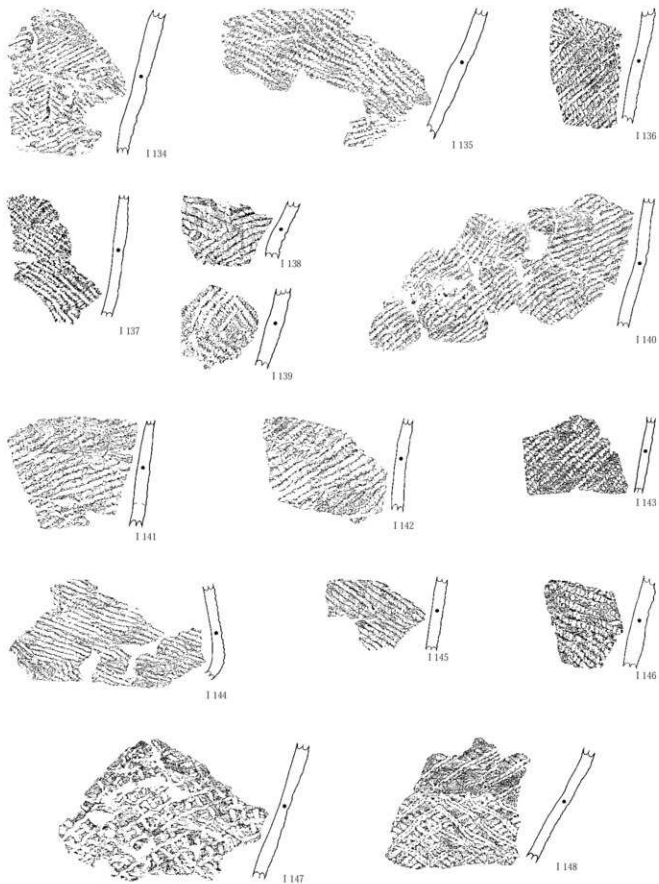
1109

第208图 1区1壑穴(2)出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

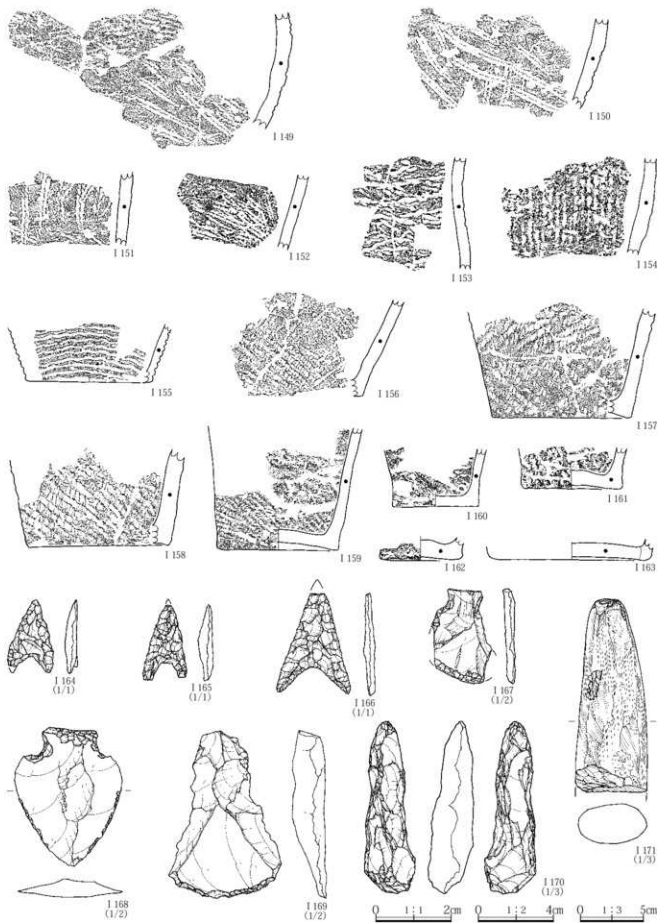


第209図 1区1壟穴(3)出土遺物



第210图 1区1壑穴(4)出土遺物

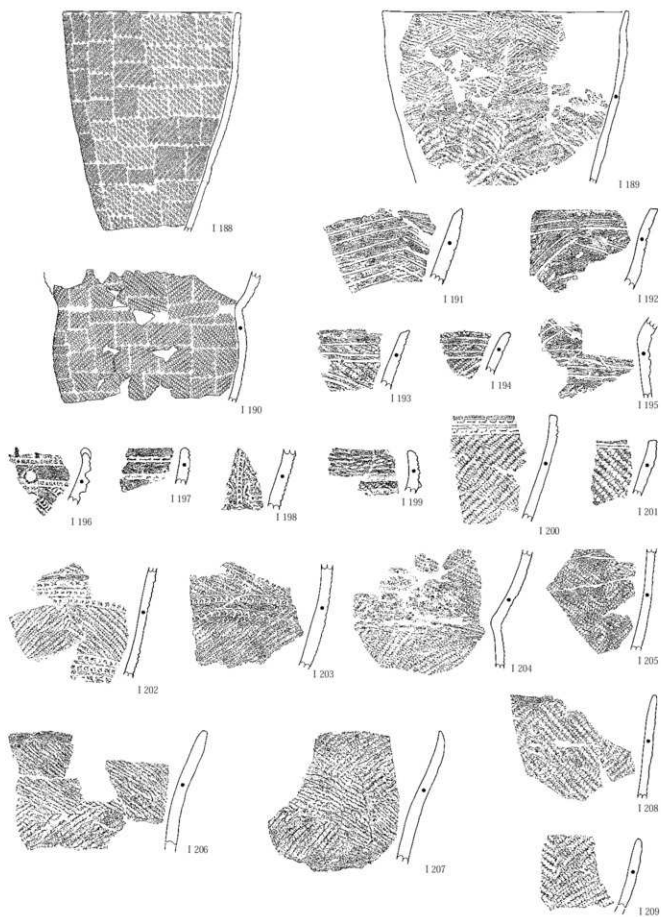
第4章 検出された遺構と遺物



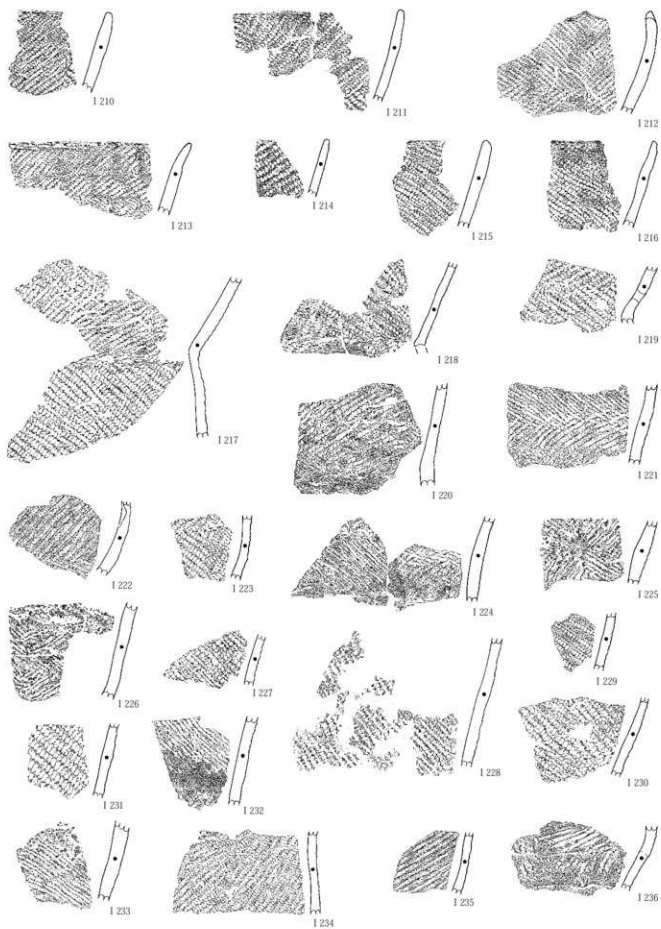
第211图 1区1壑穴(5)出土遺物



第212图 1区1壑穴(6)出土遺物

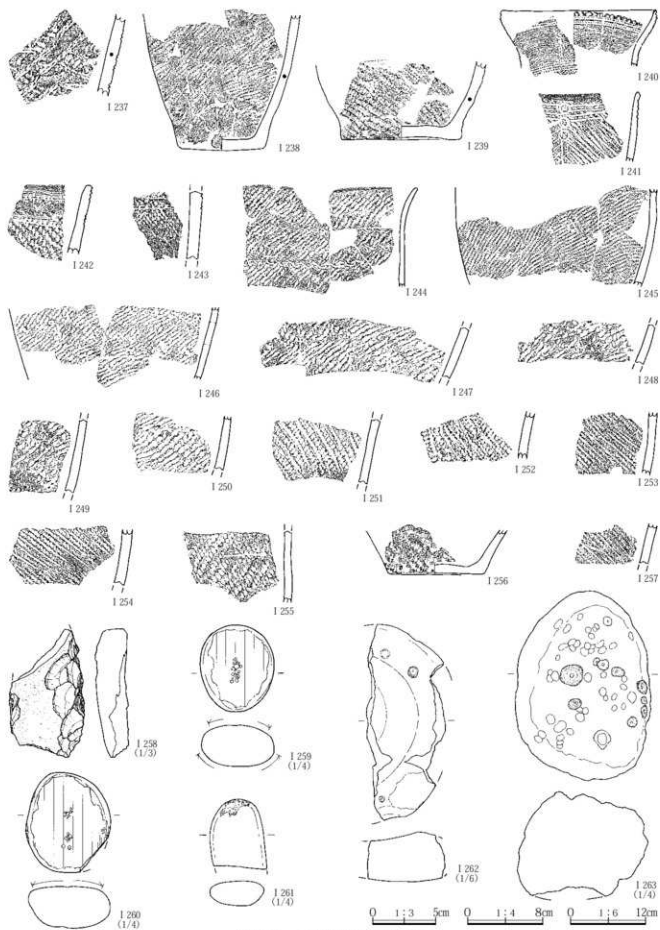


第213図 1区2壜穴(1)出土遺物

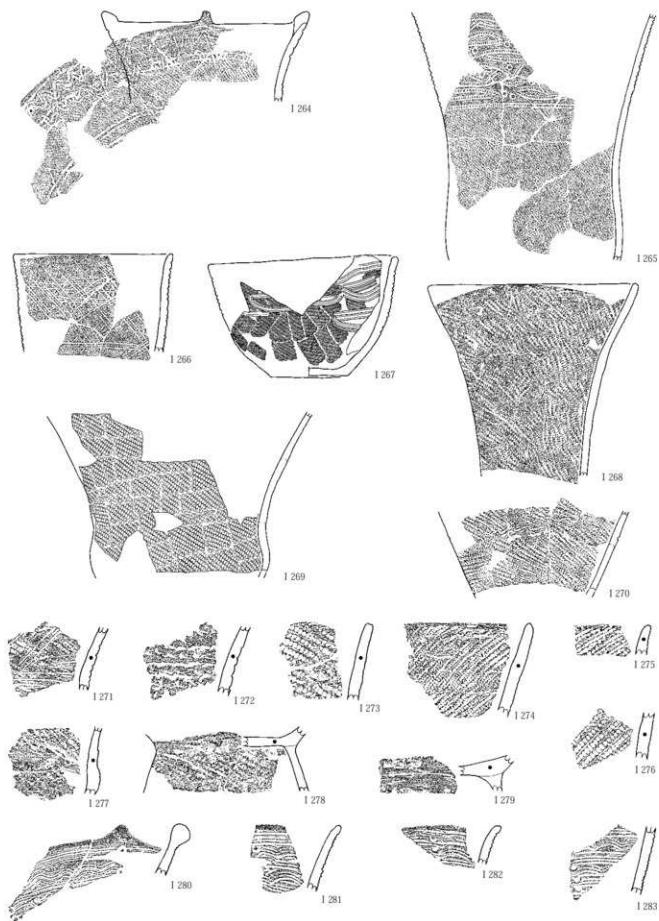


第214图 1区2整穴(2)出土遺物

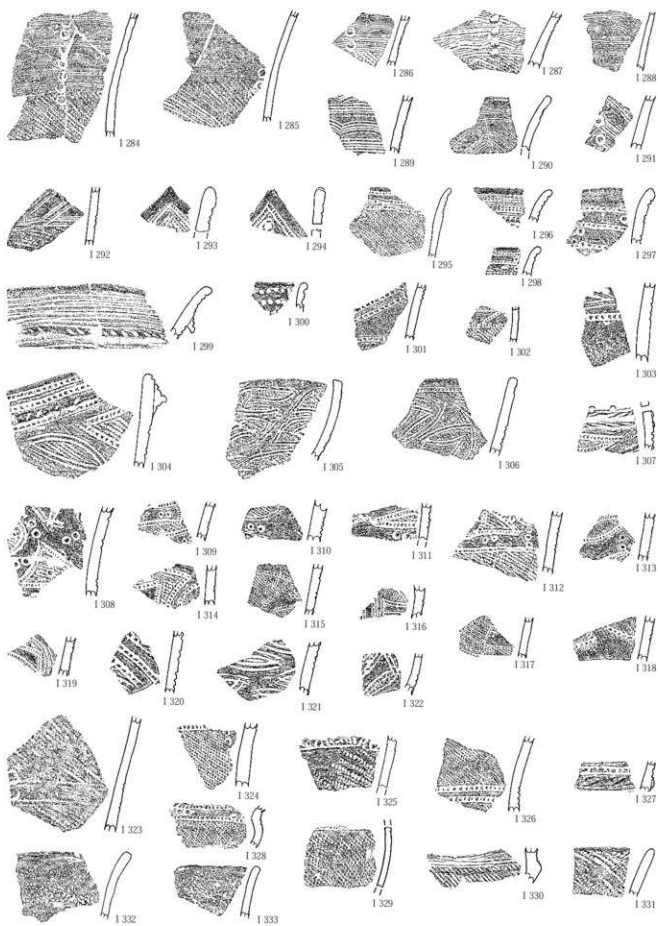
第4章 検出された遺構と遺物



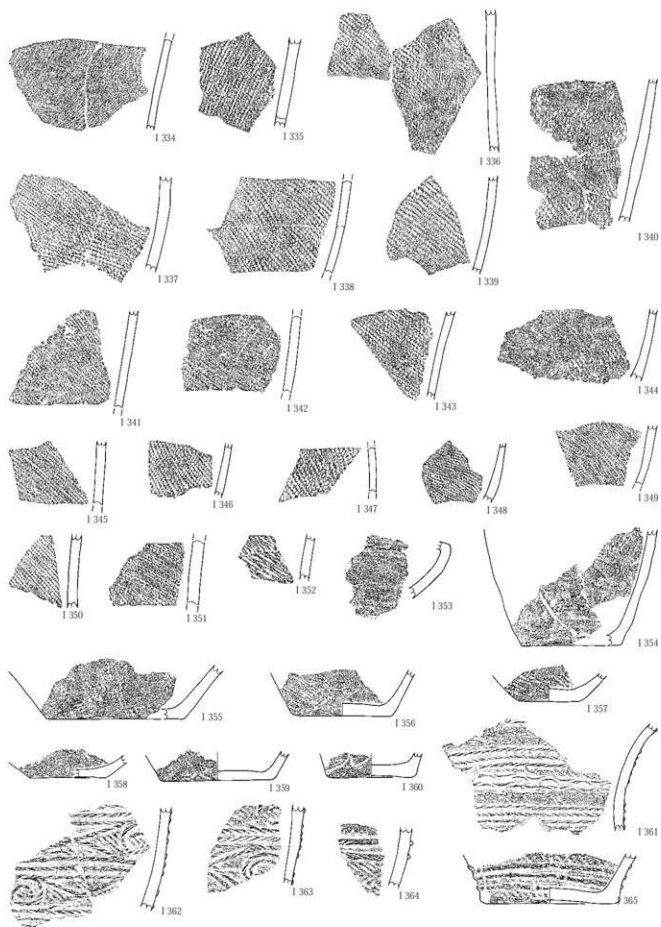
第215図 1区2壑穴(3)出土遺物



第216图 1区3号穴(1)出土遺物

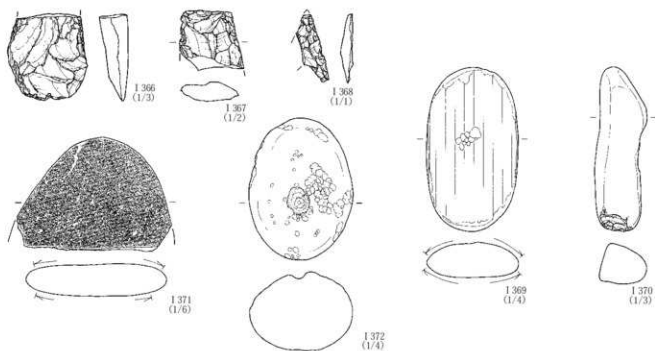


第217图 1区3整穴(2)出土遺物

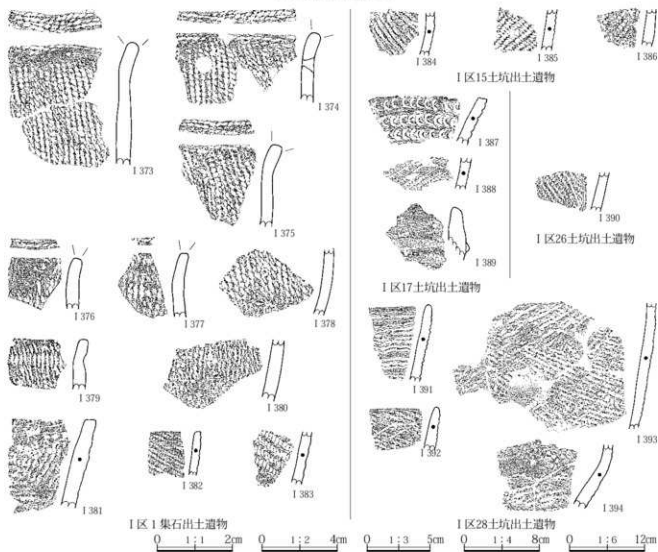


第218图 1区3壑穴(3)出土遺物

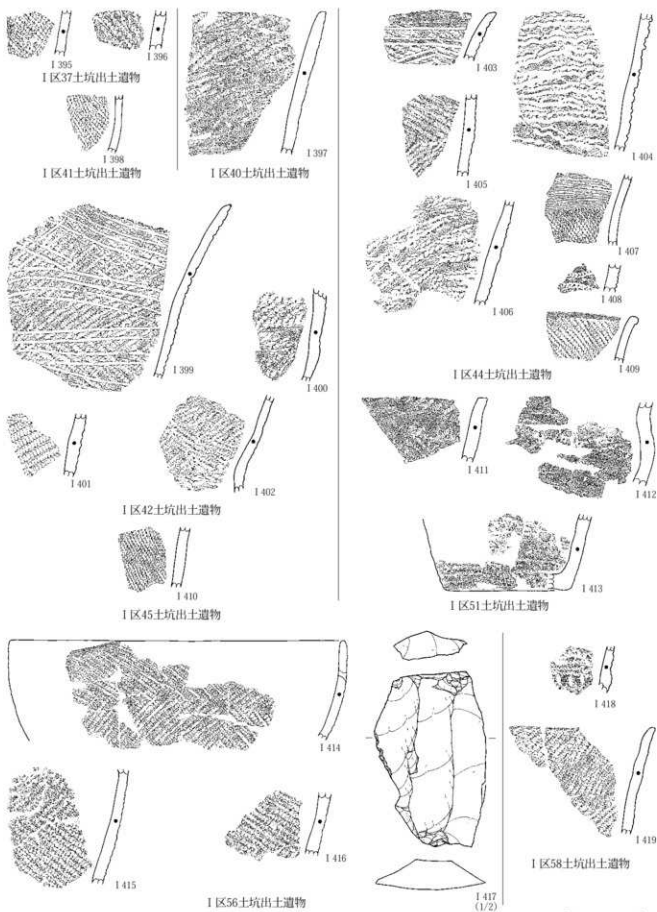
第4章 検出された遺構と遺物



1区3竪穴出土遺物(4)

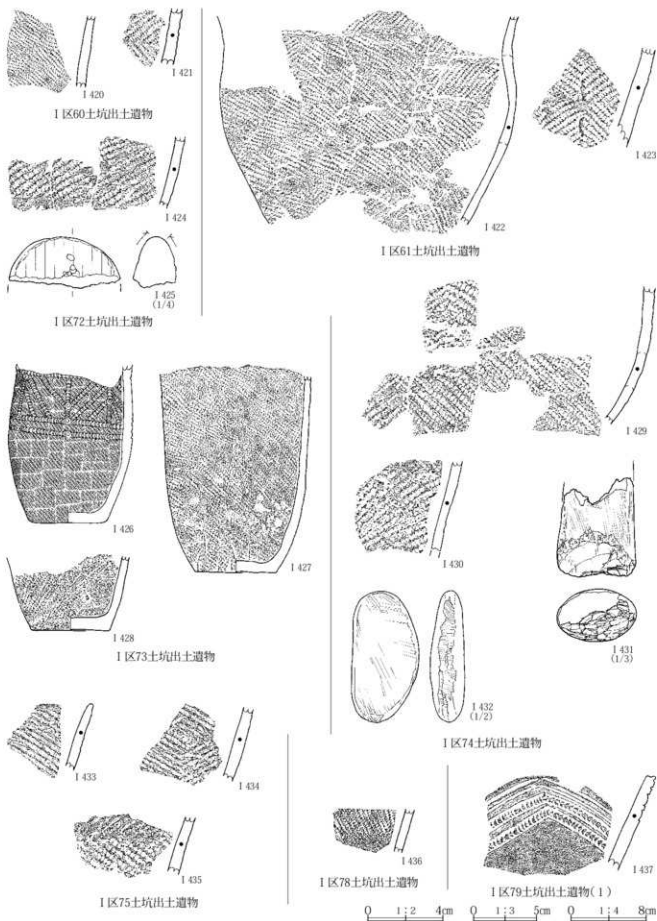


第219図 1区3竪穴(4)、1集石、15・17・26・28土坑出土遺物

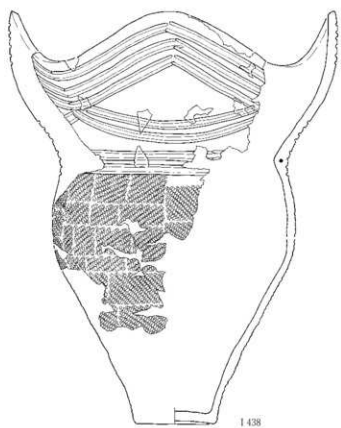


第220图 Ⅰ区37·40~42·44·45·51·56·58土坑出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第221図 I区60・61・72～75・78土坑、79土坑(1)出土遺物



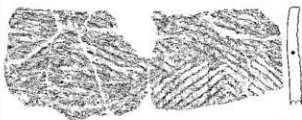
1区79土坑出土遺物(2)

1438



1439

1区81土坑出土遺物



1441

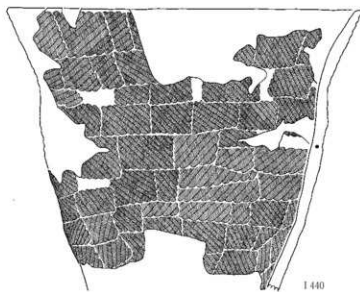


1442



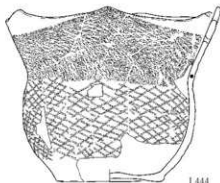
1443

1区84土坑出土遺物



1440

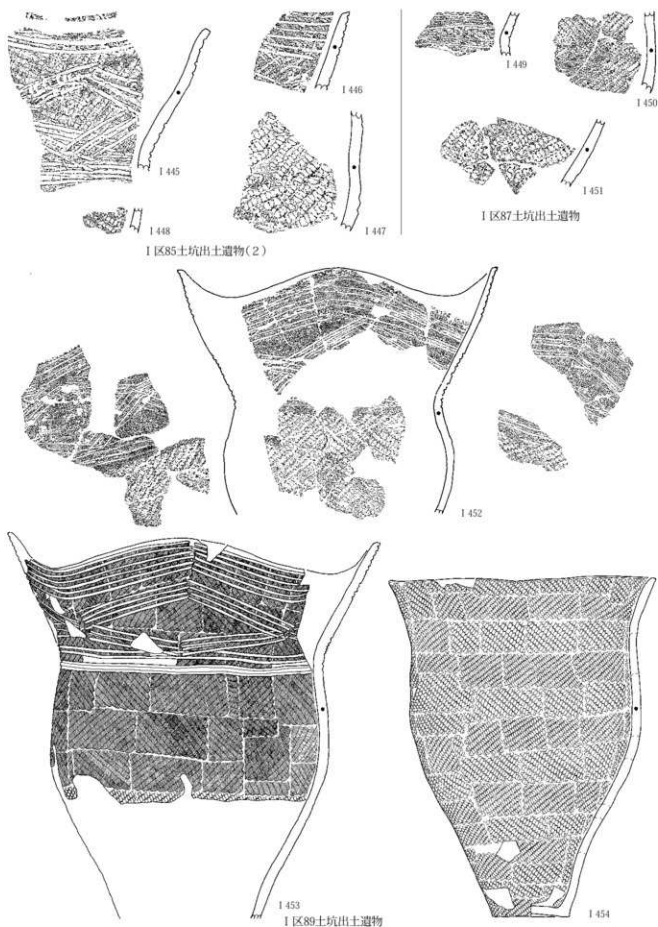
1区82土坑出土遺物



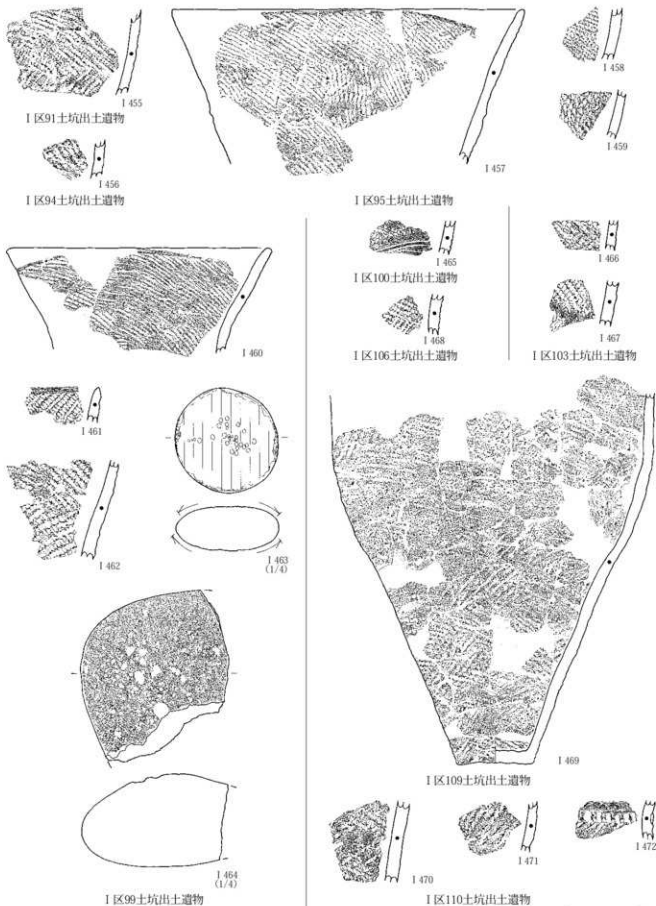
1444

1区85土坑出土遺物(1)

第4章 検出された遺構と遺物

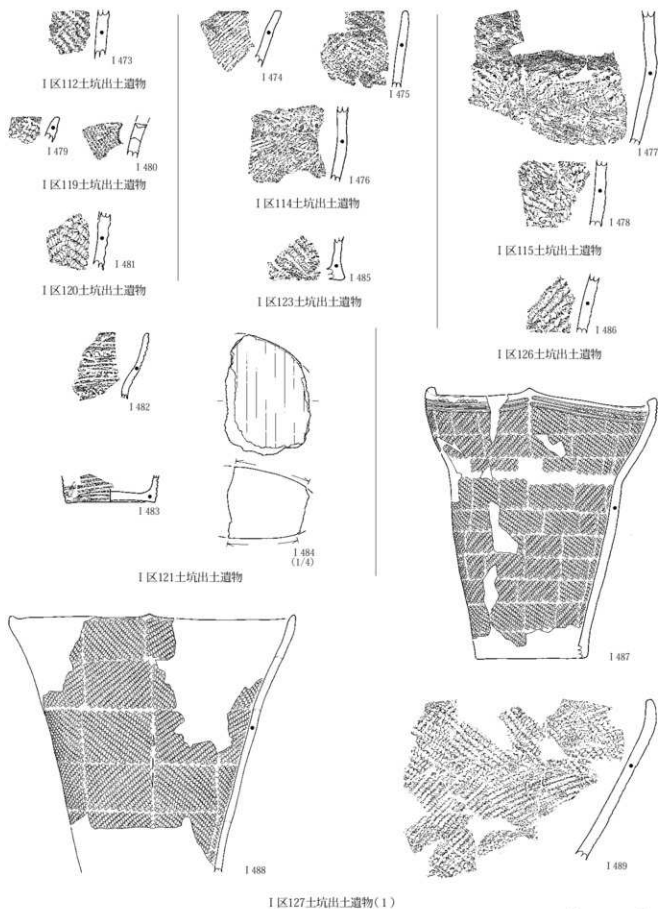


第223図 I区85土坑(2)、87・89土坑出土遺物

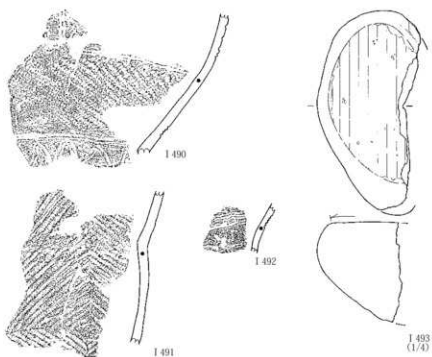


第224图 I区91·94·95·99·100·103·106·109·110土坑出土器物

第4章 検出された遺構と遺物



第225図 I区112・114・115・119～121・123・126土坑、127土坑(1)出土遺物



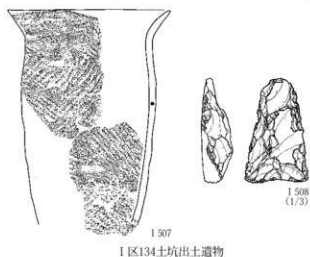
I区127土坑出土遺物(2)



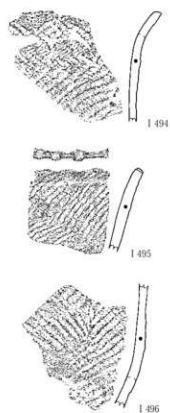
I区130土坑出土遺物



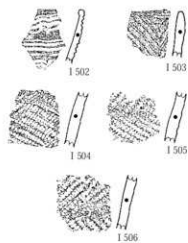
I区131土坑出土遺物



I区134土坑出土遺物



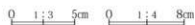
I区128土坑出土遺物



I区133土坑出土遺物

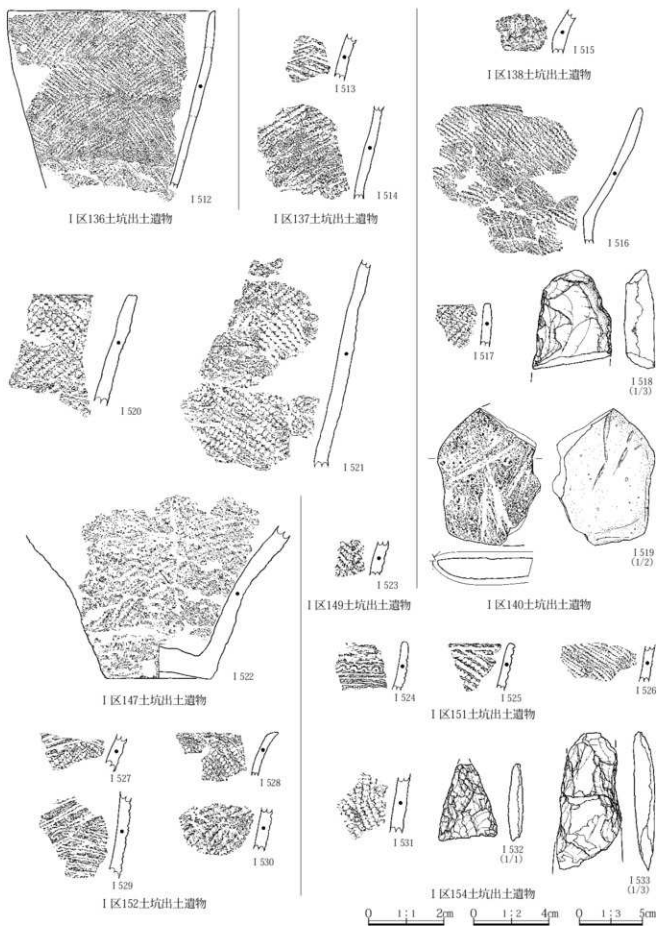


I区135土坑出土遺物



第226图 I区127土坑(2)、128·130~135土坑出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第227図 I区136・138・140・147・149・151・152・154土坑出土遺物



1534

Ⅰ区158土坑出土遺物



1535



1536

Ⅰ区162土坑出土遺物



1537

Ⅰ区163土坑出土遺物



1538



1539



1540

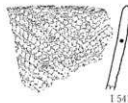
Ⅰ区165土坑出土遺物



1545



1546



1541



1542



1543



1544

Ⅰ区166土坑出土遺物



1547

Ⅰ区167土坑出土遺物

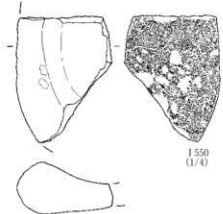


1548

Ⅰ区168土坑出土遺物



1549



1550
(1/4)

Ⅰ区169土坑出土遺物



1551

Ⅰ区170土坑出土遺物



1552

Ⅰ区171土坑出土遺物



1553



1554



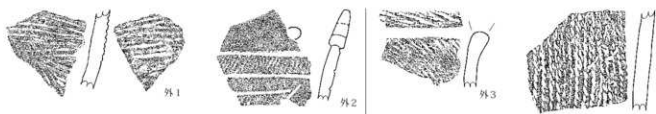
1555

Ⅰ区172土坑出土遺物

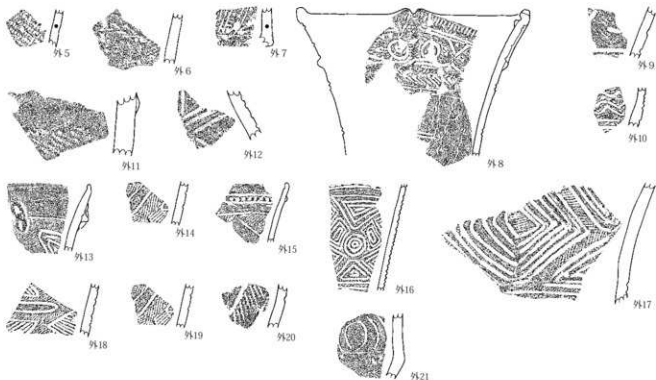


第228图 Ⅰ区158・162・163・165～172土坑出土遺物

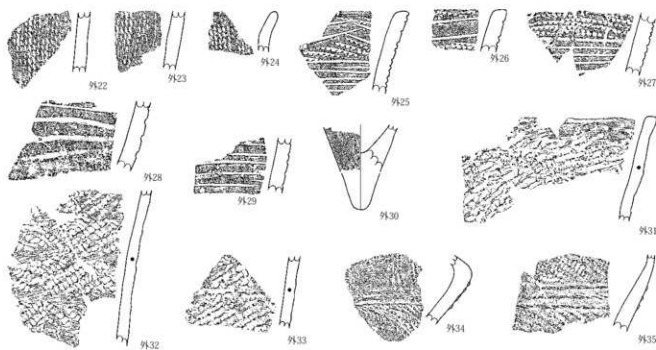
第4章 検出された遺構と遺物



A区遺構外出土縄文土器

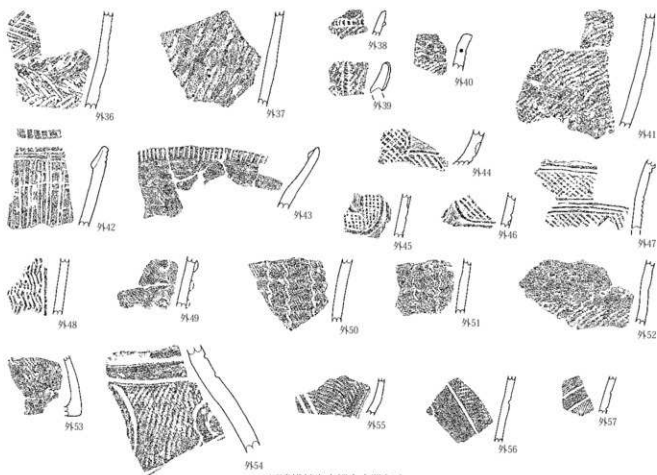


B区遺構外出土縄文土器



C区遺構外出土縄文土器(1)

第229図 A・B区遺構外、C区遺構外(1)出土縄文土器



C区道構外出土縄文土器(2)

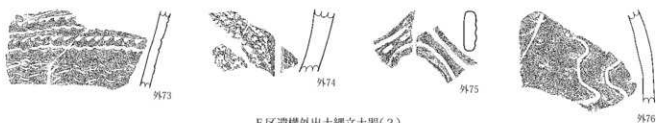


D区道構外出土縄文土器

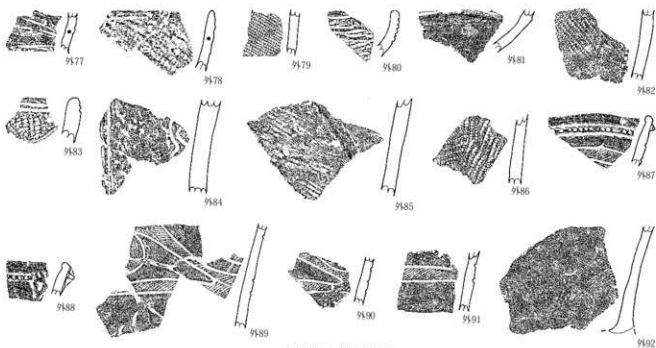
E区道構外出土縄文土器(1)

第230图 C区道構外(2)、D区道構外、E区道構外(1)出土縄文土器

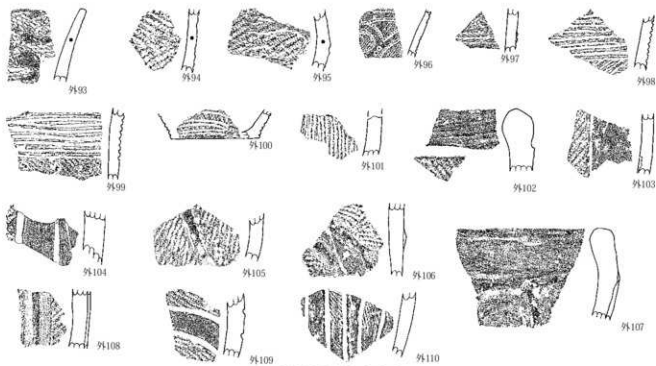
第4章 検出された遺構と遺物



E区遺構外出土縄文土器(2)

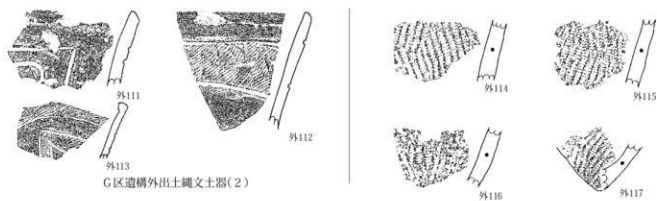


F区遺構外出土縄文土器



G区遺構外出土縄文土器(1)

第231図 E区遺構外(2)、F区遺構外、G区遺構外(1)出土縄文土器

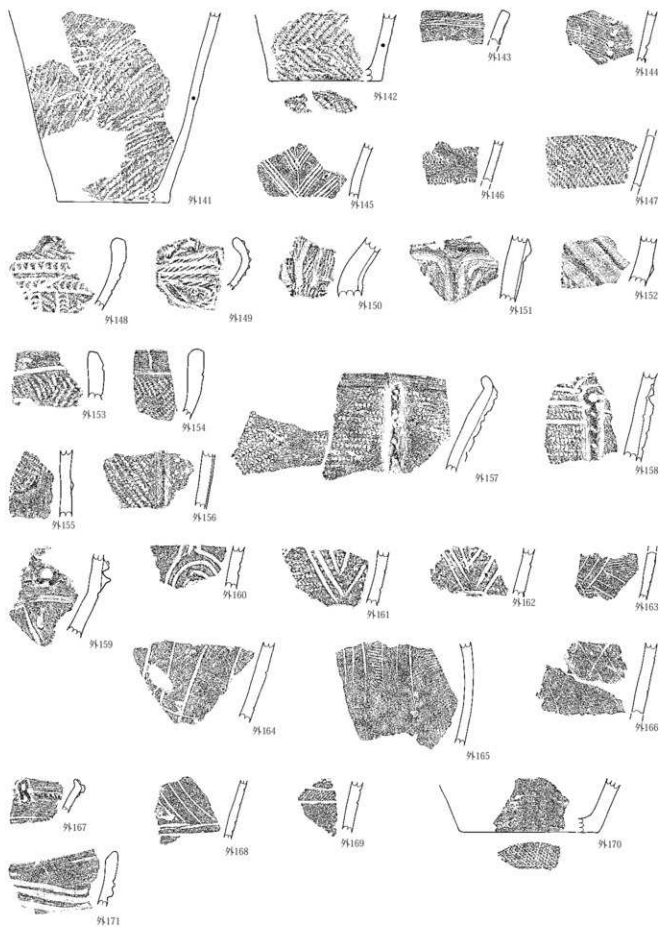


G区遺構外出土縄文土器(2)

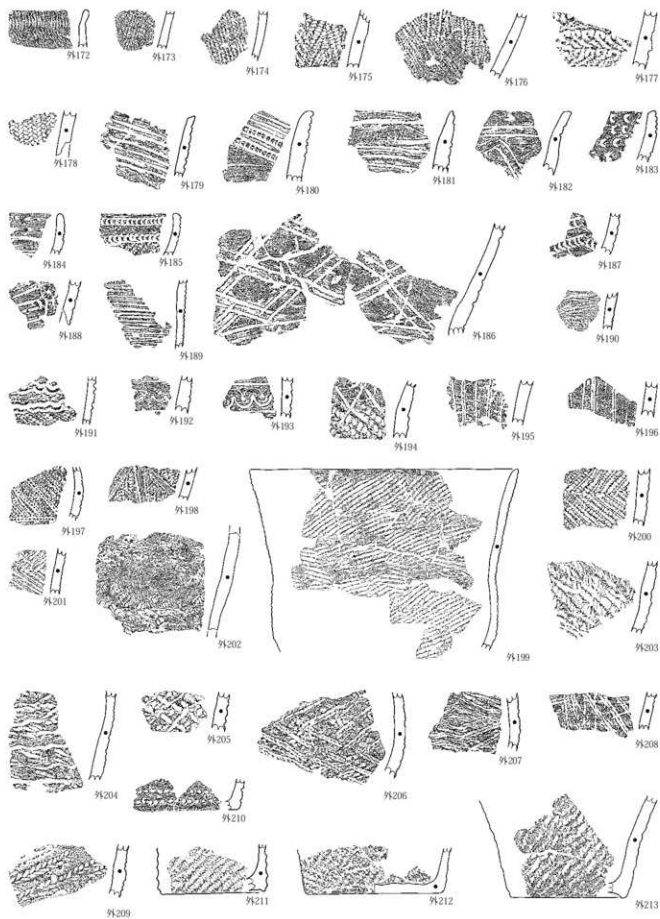


H区遺構外出土縄文土器(1)

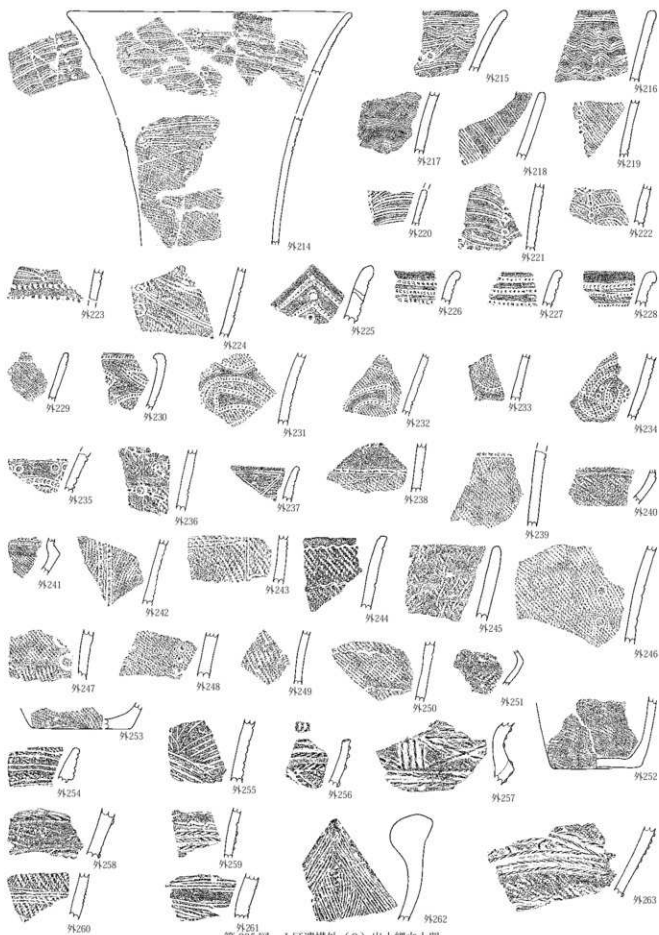
第232図 G区遺構外(2)、H区遺構外(1)出土縄文土器



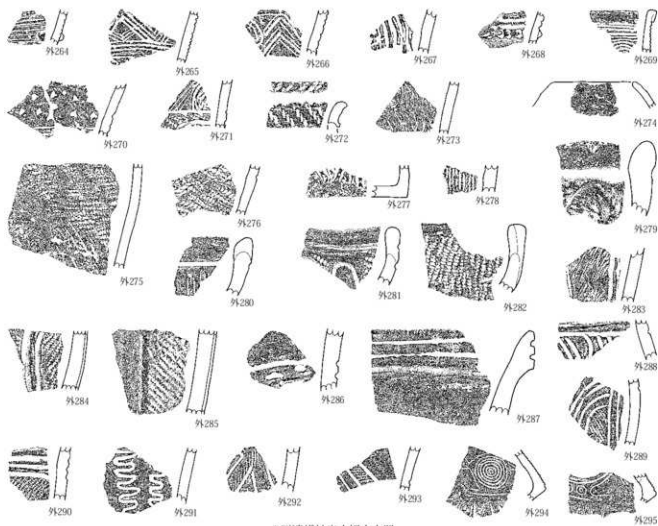
第233図 H区遺構外(2)出土縄文土器



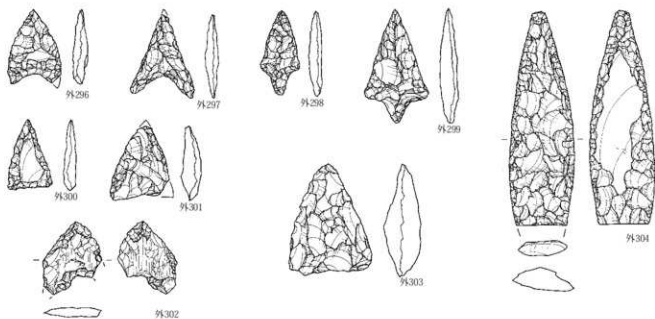
第 234 图 I 区道構外 (1) 出土縄文土器



第235図 I区遺構外(2)出土縄文土器



I区遺構外出土縄文土器

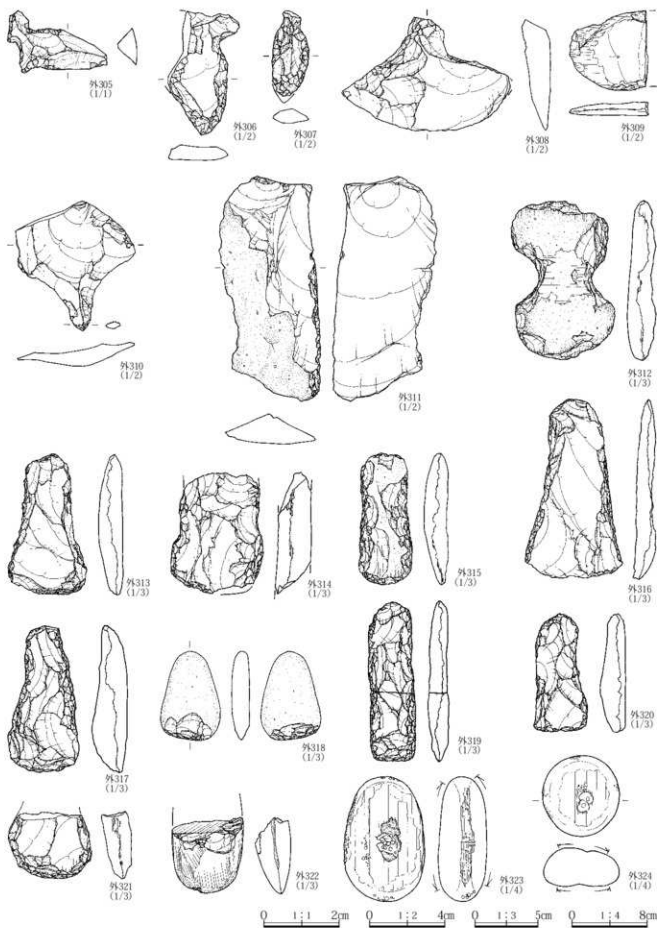


遺構外出土石器(1)

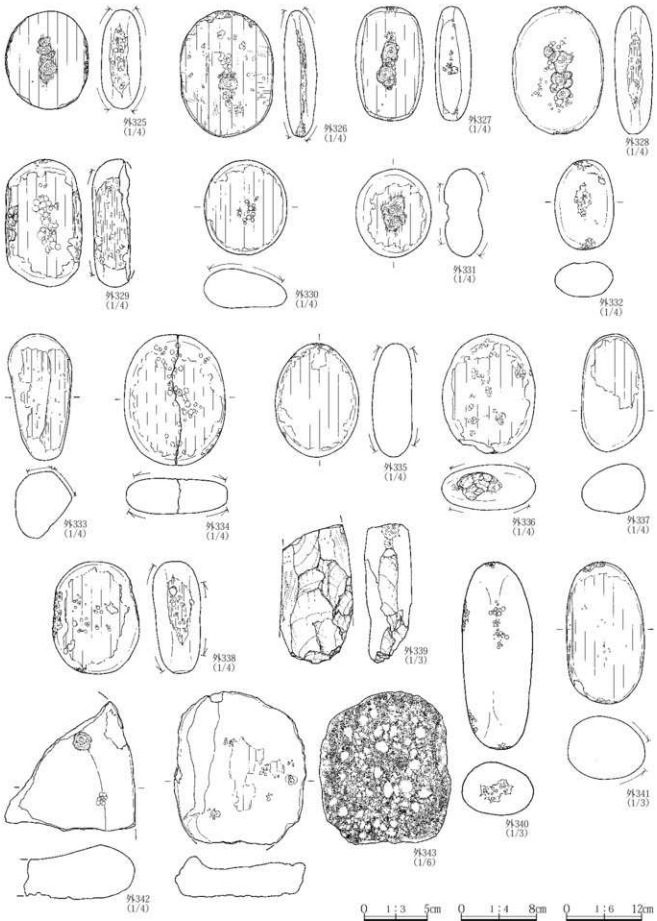


第236图 I区遺構外(3)出土縄文土器、遺構外出土石器(1)

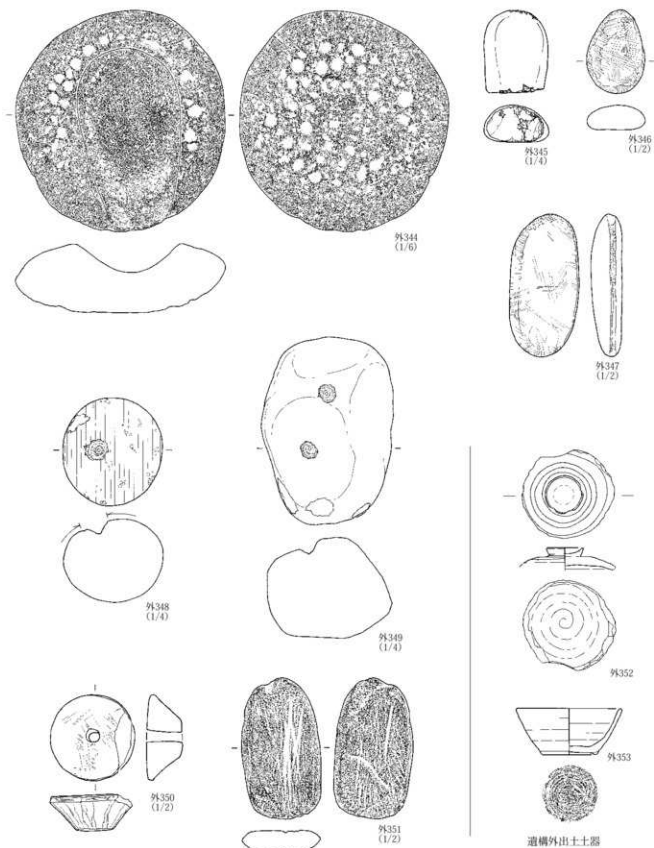
第4章 検出された遺構と遺物



第237図 遺構外出土石器(2)



第238圖 遺構外出土石器(3)



遺構外出土石器(4)



第239図 遺構外出土石器(4)、遺構外出土石器

第5章 自然科学分析

第1節 分析の目的

本遺跡では、いくつかの分析・鑑定を実施し、堆積物や出土物の詳細を明らかにしようとした。ここでは、それぞれの目的と試料を採取した地点を示し、6章のまとめにつなげたい。

テフラ分析

株式会社火山灰研究所 早田 勉氏に依頼した。

堆積土層に含まれるテフラを明らかにし、土層の年代を示して、遺構・遺物の年代観に資することを目的とする。分析試料の採取位置は、第241図に示す。

人骨の鑑定

生物考古学研究所 橋崎修一郎氏に依頼した。

H区の土坑から出土した江戸時代と推定される人骨の性別・年齢・身長・病歴、その他の属性を明らかにして、骨からわかる当時の人の生活や病気、埋葬された状況を復元する資料とする。人骨の出土土坑の位置を第240図に示す。

炭化材の樹種同定

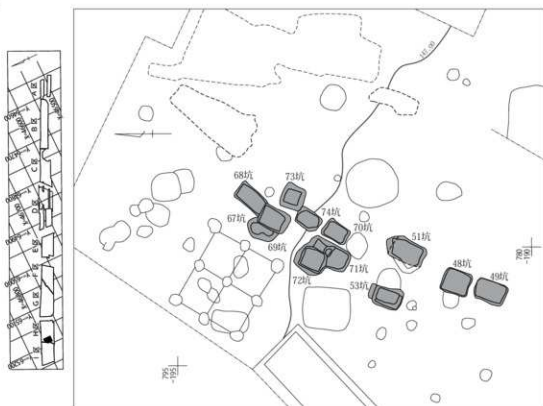
当事業団保存処理室 関 邦一補佐(総括)に依頼した。

主としてC区2・3・4住居の炭化材を観察し、竪穴住居に使われた樹木の種類の傾向を把握する資料とする。炭化物の出土状況と試料採取位置を第242図に示す。

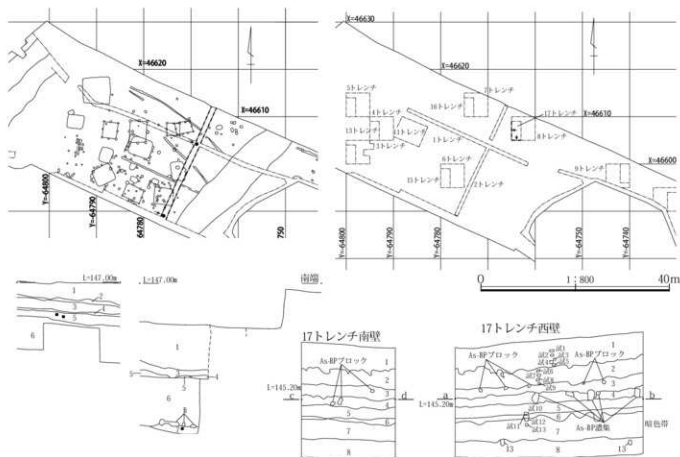
鉄滓の分類と観察

当事業団 笹澤泰史主任調査研究員に依頼した。

主としてF区から出土した鉄滓を観察し、前橋市教育委員会が芳賀住宅団地区域で調査した製鉄遺構や製鉄関連遺物と比較・検討する資料とする。鉄滓の出土遺構の位置を第243図に示す。



第240図 H区人骨出土土坑位置図



C区 東西ベルト・南北ベルト

- 1 黄褐色土 崩れたロームの埋土。黒褐色土ブロック・礫が一部に混じる。粘性・締まりやや強い。工脚建設後の駐車場造成土。昭和55年以降。
- 2 暗褐色土 細砂粒・黒褐色土・褐色土を粗粒に混入する。粘性・締まり弱い。前橋市教育委員会開始から駐車場造成前までの土。発掘調査の埋土か。昭和51年以降。
- 2' 細砂層。2層の一部。
- 3 黒褐色土 白色軽石・細砂粒少。ローム粒子微量混入。団地造成前の埋植土。ワイヤーロープ埋設溝(4溝)より新しい。
- 4 黒褐色土 白色軽石・細砂粒を少量含む。黒色土(5層)ブロック(1~3ca大)が少量混入。粘性弱い。締まりやや弱い。4溝より古い。
- 5 黒色土 白色軽石を多く含む。粘性・締まりやや強い。遺跡以前(古墳~平安朝)の表土。
- 6 灰黄褐色土 古墳~平安時代の遺構埋土。
- 7 明黄褐色土 地山ローム層。
- 8 灰黄褐色土 黄色軽石粒(1~3ca大、As-PP)を含む。

C区17トレンチ

- 1 灰黄褐色土 下位は2へ漸移的に変化。
- 2 明黄褐色土 1~3ca大の白色軽石を多く含む。
- 3 2に似る。白色軽石少ない。As-PPのブロックあり。
- 4 明黄褐色土 As-PPのブロックを多量。黄褐色軽石・黒色の砂粒状を含む。
- 5 4よりも色が薄い。As-PPブロックあり。黄褐色軽石を含む。
- 6 に近い黄褐色土 5~10ca大の百灰色粒子を含む。クリーム色のブロックが斑点状に入る。
- 7 灰黄褐色土 5~10ca大の青灰色粒子を多く含む。粘質。「暗色帯」。
- 8 明黄褐色土 レンガ色粒子を多量。白色粒子を含む。締まっている。
- 13 7に似る。

0 1:80 2m

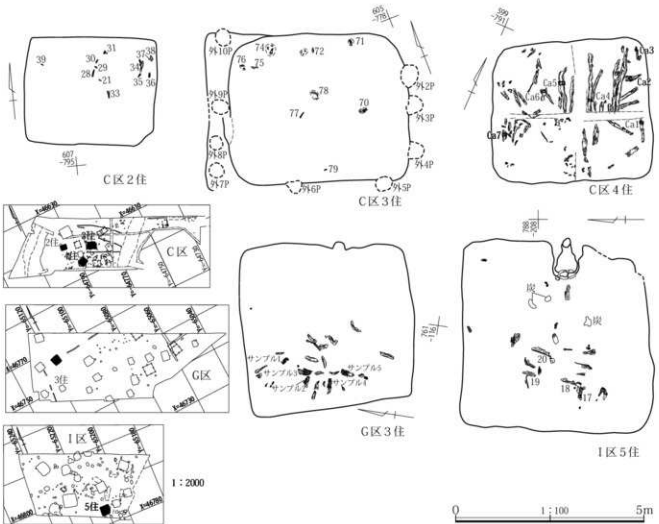


C区南北ベルト分析試料採取位置

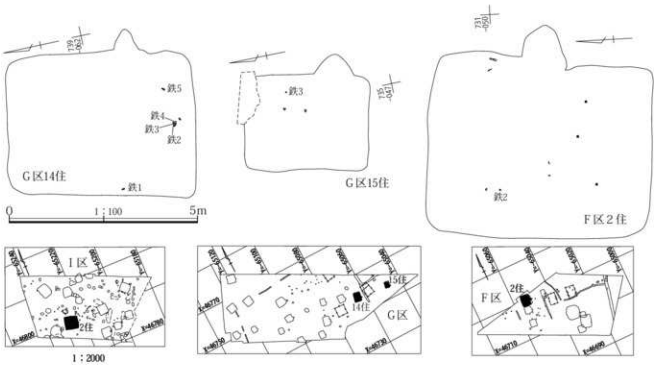


C区17トレンチ分析試料採取位置

第241図 テフラ分析試料採取位置



第242図 住居内炭灰化材出土状況と試料採取位置



第243図 鉄滓出土住居

第2節 テフラ分析

1. はじめに

赤城火山南麓に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壌の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。その中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構や遺物包含層の層位や年代を知ることができる。

そこで、層位や年代が不明な土層が検出された芳賀東部旧地遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、火山ガラス比分析やテフラ検出分析さらに屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、B区1トレンチ、B区2トレンチ、B区7トレンチ、C区南北ベルト、C区2トレンチ南端部、C区17トレンチ、D区2トレンチの7地点である。

2. 土層の層序

(1) B区1トレンチ

深掘が実施されたB区1トレンチでは、下位より若干色調が暗い褐色粘質土(層厚5cm以上)、黄色軽石層(層厚49cm、軽石の最大径58mm、石質岩片の最大径19mm、Hg-1)、若干緑灰色がかかった褐色土(層厚18cm)、橙褐色軽石(最大径3mm、Hg-2)をごく少量含む褐色土(層厚19cm)、橙褐色軽石(Hg-2)を含む褐色土(層厚27cm、軽石の最大径9mm)、灰色岩片や黄白色軽石(Hg-3)を含む灰褐色土(層厚11cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径21mm)、灰色岩片や黄白色軽石(Hg-3)を含む暗灰褐色土(層厚14cm、軽石の最大径13mm、石質岩片の最大径14mm)、灰色岩片や黄白色軽石(Hg-3)混じりで若干色調が暗い灰褐色土(層厚16cm、軽石の最大径14mm、石質岩片の最大径17mm)、灰褐色土(層厚8cm)、細粒の橙色軽石(Hg-5)混じり灰褐色土(層厚15cm、軽石の最大径3mm、Hg-4を混在：後述)、橙色軽石層(層厚4cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径2mm、Hg-6)、橙色軽石混じり褐色土(層

厚2cm、軽石の最大径3mm)、橙色細粒軽石層(層厚5cm、軽石の最大径4mm、石質岩片の最大径2mm、Hg-7)が認められる(第244図)。

その上位には、炭化物混じり暗灰色土(層厚7cm)が特徴的に形成されており、さらに上位には、下位より暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚7cm、軽石の最大径14mm、石質岩片の最大径3mm、Hg-8)、褐色砂質土(層厚13cm)、黄色軽石(Hg-10)を少量含む褐色土(層厚15cm、軽石の最大径4mm)、黄色軽石(Hg-10)混じり褐色土(層厚36cm、軽石の最大径21mm)、黄白色粗粒軽石(Hg-11)を多く含む灰褐色土(層厚11cm、軽石の最大径2mm)が認められる。

これらのうち、Hg-1は層相から約5万年前に榛名火山から噴出したと推定されている榛名八崎テフラ(Hr-HP、新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003)に同定される。Hg-6からHg-8にかけてのテフラは、層相や軽石の岩相などから、約1.9～2.4万年前³⁾に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group、新井, 1962, 早田, 1996, 未公表資料)の中部と考えられる。そのうち、Hg-5については、層位や岩相などから、As-BP Groupの下部、いわゆる室田軽石(MP、森山, 1972, 早田, 1990)と推定される。さらに、Hg-12については、層位や岩相などから、約1.3～1.4万年前⁴⁾に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP、新井, 1962, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。

(2) B区2トレンチ

B区2トレンチでは、下位より暗灰褐色土(層厚5cm以上)、細粒の橙色軽石(Hg-5)を含む灰褐色土(層厚22cm、軽石の最大径3mm)、橙色軽石層(層厚4cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径3mm、Hg-6)、褐色砂質土(層厚2cm)、橙色細粒軽石層(層厚5cm、軽石の最大径4mm、石質岩片の最大径2mm、Hg-7)、橙色細粒軽石混じりで褐色がかかった灰色土(層厚4cm、軽石の最大径2mm)、暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚5cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径3mm、Hg-8)、褐色砂質土(層厚12cm)、橙色軽石層(層厚5cm、軽石の最大径3mm、石質岩片の最大径2mm、Hg-9)、黄色軽石(Hg-10)を少量含

む褐色土(層厚13cm, 軽石の最大径4mm)、黄色軽石(Hg-10)を多く含む褐色土(層厚36cm, 軽石の最大径7mm)、黄色軽石を多く含む褐色土(層厚14cm, 軽石の最大径7mm, Hg-11, 桃灰色砂質細粒火山灰のブロックを含む)が認められる(第245図)。

(3) B区7トレンチ

B区7トレンチでは、As-BP Group層準の岩相をより詳しく観察できた(第246図)。ここでは、下位より細粒の橙色軽石(Hg-5)を含む灰褐色土(層厚3cm以上, 軽石の最大径3mm)、軽石を多く含む橙色軽石層(層厚3cm, 軽石の最大径9mm, 石質岩片の最大径3mm)および灰色粗粒火山灰層(層厚0.4cm, 以上Hg-6)、橙色軽石混じり灰褐色土(層厚1cm)、橙色細粒軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径3mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-7)、橙色軽石混じり暗灰色土(層厚3cm, 軽石の最大径4mm)、橙褐色細粒火山灰層(層厚1.1cm)、暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径7mm, 石質岩片の最大径2mm, 以上Hg-8)、褐色砂質土(層厚5cm以上)が認められる。

(4) C区南北ベルト

C区南北ベルトでは、下位より黒色土(層厚10cm以上)、黄色軽石(Hg-12)混じり黒灰褐色土(層厚5cm, 軽石の最大径3mm)、粗粒の白色軽石(Hg-13)を少量含む黄色軽石(Hg-14)に富む黒灰褐色土(層厚8cm, 白色軽石の最大径63mm, 黄色軽石の最大径12mm)、やや色調が暗い灰褐色土(層厚3cm)、暗灰褐色土(層厚21cm)、やや色調が暗い灰褐色土(層厚5cm)、褐色盛土(層厚32cm)が認められる(第247図)。これらのうち、Hg-12については、層位や岩相などから、4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000など)に由来すると考えられる。

(5) C区2トレンチ南端部

C区2トレンチ南端部では、下位より褐色土(層厚32cm)、黄色軽石層(層厚8cm, 軽石の最大径5mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-11)、黄色粗粒火山灰を多く含む灰褐色土(層厚12cm)、黄白色粗粒火山灰を含む暗灰褐色土(層厚39cm)、暗灰褐色土(層厚36cm)、黒灰褐色土(層厚11cm)、黄色軽石(Hg-12)混じり黒灰褐色土(層厚7cm,

軽石の最大径7mm)が認められる(第248図)。

(6) C区17トレンチ

C区17トレンチでは、下位より灰色岩片や灰白色粗粒火山灰(Hg-3)を含む暗灰褐色粘質土(層厚22cm以上, 軽石の最大径3, 石質岩片の最大径6mm)、灰褐色粘質土(層厚12cm, Hg-4を含む:後述)、黄褐色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径4mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-5)、褐色土(層厚15cm)、橙色軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径4mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-6)、褐色砂質土(層厚1cm)、橙色細粒軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径2mm, Hg-7)、灰色砂質土(層厚6cm)、暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径3mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-8)、砂混じり褐色土(層厚8cm)、橙色軽石(Hg-9)に富む褐色土(層厚6cm, 軽石の最大径4mm)、黄色軽石(Hg-10)を少量含む褐色土(層厚18cm, 軽石の最大径7mm)、黄色軽石(Hg-10)を含む褐色土(層厚18cm, 軽石の最大径12mm)、黄色軽石(Hg-11)を含み若干灰色がかった褐色土(層厚17cm)、黄白色粗粒火山灰を含む灰褐色土(層厚23cm)、暗灰褐色土(層厚16cm)が認められる(第249図)。

(7) D区2トレンチ東壁

D区2トレンチでは、下位より橙褐色軽石(最大径4mm, Hg-2)混じり褐色土(層厚5cm以上)、灰色岩片や黄白色軽石(Hg-3)を含む暗灰褐色土(層厚31cm, 軽石の最大径2mm, 石質岩片の最大径6mm)、灰褐色土(層厚15cm)、若干色調が明るい灰色土(層厚7cm, Hg-4を含む)、橙色軽石層(層厚18cm, 軽石の最大径5mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-5)、灰褐色土(層厚11cm)、炭化物混じり灰褐色土(層厚8cm)、橙色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径4mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-6)、灰色がかった褐色土(層厚2cm)、暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径2mm, Hg-8)、灰褐色砂質土(層厚6cm)、炭化物混じり若干色調が灰色がかった褐色土(層厚17cm)、橙色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径3mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-9)、褐色土(層厚6cm)、攪乱土(層厚3cm以上)が認められる(第250図)。

ここでは、Hg-7より上位で、Hg-6のすぐ下に礫群を構成する礫が検出されている。

(8) D区2トレンチ東壁南部

D区2トレンチ東壁南部では、下位より灰褐色土(層厚2cm以上)、橙色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径4mm, 石質岩片の最大径3mm, Hg-6)、褐色砂質土(層厚1cm)、橙色細粒軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径2mm, Hg-7)、暗灰色砂質土(層厚3cm)、橙褐色細粒火山灰層(層厚0.8cm)、暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚3cm, 軽石の最大径3mm, Hg-8)、灰色がかった褐色土(層厚2cm以上)が認められる(第251図)。

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

C区17トレンチにおいて、ガラス質テフラの降灰層準を求めるために、可能性のある土層から基本的に5cmごとに設定採取された試料のうち8点について、火山ガラス比分析を行った。また、D区2トレンチの試料1(Hg-9)について、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料について10gずつを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別比率を把握(火山ガラス比分析)。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱物の組み合わせを調べる(重鉱物組成分析)。

(2) 分析結果

C区17トレンチとD区2トレンチの試料1(Hg-10)の火山ガラス比分析の結果を第252図と第253図に、その内訳を第48表に示す。第253図には、重鉱物組成も合わせて示した。また、D区2トレンチ東壁のHg-10の重鉱物組成の内訳を第49表に示した。C区17トレンチでは、試料18に透明のバブル型ガラスの出現ピーク(8.4%)が認められる。この火山ガラスで特徴づけられ、試料18付近に降灰層準があると考えられるテフラをHg-5とする。

また、全体として、透明のバブル型ガラス以外の火山ガラスは、上方に向かってその比率が増大する傾向にある。土層断面で、細粒あるいは粗粒の黄色軽石が認められた試料14および13では、スポンジ状あるいは繊維束状

に発泡した軽石型ガラスや分厚い中間型ガラスがほぼ等量含まれている(Hg-10, 後述)。Hg-11が含まれている土層(試料7)やその上位(試料2)では、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスの比率が減少するかわりに、中間型ガラスのそれが増大する傾向が伺える。なお、重鉱物の占める比率は、試料18以下で高く、逆に試料14より上位では比較的低い傾向がある。

D区2トレンチ東壁の試料1(Hg-9)には、ほとんど火山ガラスが含まれていない。これは、含まれるテフラ粒子の風化が進んでおり、洗浄処理中に風化物が流失したことによると考えられる。わずかに認められる火山ガラスは、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスや、中間型ガラスである。一方、含まれる重鉱物は、比率が高い順に、斜方輝石(53.6%)、単斜輝石(29.2%)、磁鉄鉱(16.8%)で、いわゆる両輝石型のテフラである。

4. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

C区南北ベルトで認められた粗粒の白色軽石(試料1)の起源を明らかにするために、テフラ検出分析を実施して、その特徴の把握を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 軽石を粉砕後、適量について超音波洗浄により洗浄。
- 2) 80°Cで恒温乾燥。
- 3) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第50表に示す。軽石には、重鉱物として斜方輝石、角閃石、磁鉄鉱が含まれている。

5. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

C区17トレンチのうち、とくに起源が不明な試料14と試料10に含まれる火山ガラス、C区南北ベルトで認められた白色軽石(試料1, Hg-13)のガラス部、そしてD区2トレンチの試料1(Hg-9)に含まれる斜方輝石について、温度変化型屈折率測定装置(京都フィッション・トラック社製RIMS2000)により、屈折率測定を行った。

(2)測定結果

屈折率測定の結果を第51表に示す。C区17トレンチの試料14に含まれる火山ガラス(29粒子)の屈折率(n)は、1.501-1.506である。また、試料10に含まれる火山ガラス(29粒子)の屈折率(n)は、1.497-1.503である。そのうち、鉱物に付着してより本質物質の可能性が高い火山ガラス(4粒子)については、1.501-1.503の値が得られた。C区南北ベルトの試料1に含まれる軽石(Hg-14)のガラス部(19粒子)の屈折率(n)は、1.502-1.507である。ただし、この試料に関してはさほど測定に不適で、測定精度はさほど高くない。D区2トレンチの試料1(Hg-9)に含まれる斜方輝石(49粒子)の屈折率(γ)は、1.703-1.708である。

6. 考察

C区17トレンチの試料14に含まれる火山ガラスについては、その形態や屈折率などから、浅間大窪沢第1軽石(As-Ok 1, 約1.7万年前⁴, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)および浅間大窪沢第2軽石(As-Ok 2, 約1.6万年前⁴, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)からなる大窪沢テフラ群(As-Ok Group)に由来すると考えられる。試料10には火山ガラスの屈折率から、多くのテフラに由来する火山ガラスが混在している可能性が考えられるが、鉱物に付着したより本質的な火山ガラスについては、As-Ok Groupと考えられる。この火山ガラスで特徴づけられるテフラをHg-10とする。

なお、試料14に含まれる火山ガラスのうち、屈折率(n)が1.506に近いものについては、約1.9万年前⁴の浅間白糸テフラ(As-Sr, 町田ほか, 1984, 町田・新井, 1992, 2003)に由来する可能性もあろう。また試料10で検出された火山ガラスのうち、屈折率が低いものの中には、ATのほか約2.0万年前⁴に浅間火山から噴出した可能性のある雲場火砕流堆積物(早川, 1995)に関係するらしい、浅間萩生テフラ(As-Hg, 早田, 1995, 1996)に由来する火山ガラスが検出された可能性もある。

この地点における火山ガラス比分析で、試料18付近に降灰層があると推定されるテフラは、その層位と透明のバブル型ガラスで特徴づけられることから、約2.4~2.5万年前⁴に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 2003, 松本ほか,

1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995など)と考えられる。

C区南北ベルトの試料1(Hg-14)の軽石粒子は、岩相や重鉱物の組み合わせから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳澁川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)、または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。現段階において、前者には粗粒の軽石の存在が周辺で確かめられているものの、Hr-FAの一次堆積層の上位にHr-FPの一次堆積層が認められた例は知られてない。したがって、現段階においては、前者の可能性がより高いように思われる。今回の軽石の屈折率の測定値については、精度が高くないことから詳しく言及できないが、Hr-FPなどには、輪状軽石があり、部位によっては、火山ガラスの屈折率が従来記載されている値と異なる可能性がある。そこで、輪状軽石について、部位ごとに屈折率を測定して、高精度の同定のための資料を収集する必要があるのかも知れない。さらに、遺跡周辺での調査分析も行う必要がある。

D区2トレンチの試料1のテフラ層(Hg-9)については、今回測定された斜方輝石の屈折率と、テフラ・カタログのデータを比較するとAs-HgあるいはAs-Srの可能性が考えられる。しかしながら、前者については、角閃石や黒雲母が認められず、典型的な層相とかなり異なり、可能性は非常に低い。一方、後者についても必ずやに含まれるとされる角閃石は認められず、軽石の岩相などは、As-BP Groupのそれによく似ている。また、As-BP Group中部に含まれる斜方輝石の屈折率(γ : 1.700-1.709)に比較的似ており、As-BP Group中部を構成する個々のテフラによっては今回の値をもつテフラ層があることも考えられる。今後、火山ガラスの屈折率測定などを実施してさらに同定精度を向上させる必要がある。

なお、今回の斜方輝石の屈折率の値は、同定の可能性が考えられた故新井房夫群馬大学名誉教授測定によるAs-BP Group上部の斜方輝石の値(γ : 1.704-1.714, 町田・新井, 2003)とは異なる傾向にある。今後、後期旧石器のより詳細な編年のために、さらに調査分析を行って、その岩相や分布を把握する必要がある。

7. まとめ

芳賀東部団地遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より榛名八崎軽石(Hr-HP, 約5万年前, Hg-1)、年代および給源が不明の軽石(Hg-2)、榛名箱田テフラ(Hr-HA, 約3万年前¹⁾)に由来すると考えられる粒子(Hg-3)、始良Tn火山灰(AT, 約2.4～2.5万年前¹⁾, Hg-4)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.9～2.4万年前¹⁾)のうちの4層(Hg-5～Hg-8)、現段階では浅間白糸軽石(As-Sr, 約1.9万年前¹⁾)の可能性が高いと考えられるテフラ層(Hg-9)、浅間大窪沢テフラ群(As-Ok Group, 約1.6～1.7万年前¹⁾)に由来する粒子(Hg-10)、

浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3～1.4万年前¹⁾, Hg-11)、浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉, Hg-12)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭, Hg-13)など多くのテフラ層やテフラ粒子を検出することができた。

本遺跡で検出された礫群の層位は、このうちAs-BP Group層準(Hg-5とHg-6の間)にある。また、Hg-7とHg-8の間に特徴的に炭化物が多く含まれていることが明らかになった。

※1 放射性炭素(14C)年代。ATおよびAs-YPの較正年代については、各々約2.6～2.9万年前と約1.5～1.65万年前と考えられている(町田・新井, 2003)。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
 新井房夫(1993)温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質。地質研報, no.45, 65p.
 早田由紀夫(1995)浅間火山の地質見学案内。地学雑誌, 104, p.561-571.
 池田見子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫(1995)南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と戸ノ火砕流中の炭化樹木の加速器14C年代。第四紀研究, 34, p.377-379.
 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義一。科学, 46, p.339-347.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)始良Tn火山灰(AT)の14C年代。第四紀研究, 26, p.79-83.
 森山昭雄(1972)榛名火山東・南麓の地形—とくに軽石流の地形について—。愛知教育大学地理学報告, 36-37, p.107-116.
 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山, 黒川～前掛期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「京浜北原遺跡・今井神社古墳群・京浜青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御店第1テフラより上位のテフラについて—。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
 若狭 徹(2000)群馬の発生上部が終わるとき、かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の上部の交流」, p.41-43.

第48表 火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	重鉱物	その他	合計
C区17トレンチ	2	0	0	0	32	6	12	50	150	250
	7	0	0	0	20	6	7	54	163	250
	10	0	0	0	11	10	7	52	170	250
	14	3	0	0	8	11	7	74	147	250
	18	21	0	0	1	4	0	126	98	250
	19	7	0	0	3	4	0	124	112	250
	20	6	0	0	0	5	1	129	109	250
	22	3	0	0	1	3	0	124	119	250
D区2トレンチ	1	0	0	0	1	6	0	79	164	250

数字は粒子数。bw：バブル型。md：中間型。pm：軽石型。cl：透明。pb：淡褐色。br：褐色。sp：スポンジ状。fb：繊維束状。

第49表 重鉱物組成分析結果

地点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
D区2トレンチ	1	0	134	73	0	0	42	1	250

数字は粒子数。ol：カンラン石。cpx：単斜輝石。ho：角閃石。bi：黒雲母。mt：磁鉄鉱。opx：斜方輝石。

第50表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の発泡形態	鉱物の量	重鉱物
C区南北ベルト	1	sp	++	opx, ho, mt

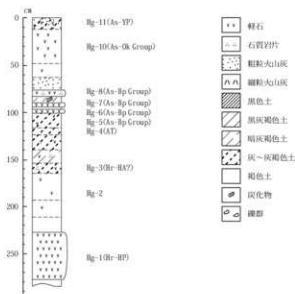
sp：スポンジ状。fb：繊維束状。++++：とくに多い。+++：多い。++：中程度。+：少ない。-：認められない。
ol：カンラン石。cpx：単斜輝石。ho：角閃石。bi：黒雲母。mt：磁鉄鉱。opx：斜方輝石。

第51表 屈折率測定結果

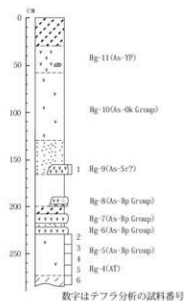
地点	試料	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)	測定粒子数
C区17トレンチ	10	1.497-1.503	-	29
C区17トレンチ	14	1.501-1.506	-	29
C区南北ベルト	1	1.502-1.507	-	19
D区2トレンチ	1	-	1.703-1.708	29

屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定装置(RIMS2000)による。

第5章 自然科学分析



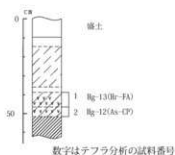
第244図 B区1トレンチの土層柱状図



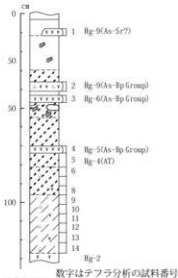
第245図 B区2トレンチの土層柱状図



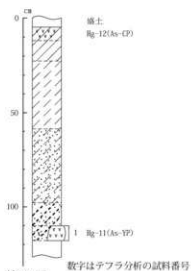
第246図
B区7トレンチの土層柱状図



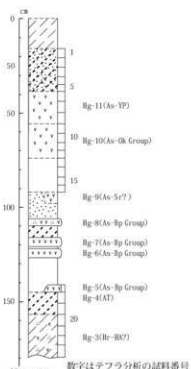
第247図
C区南北ベルトの土層柱状図



第250図
D区2トレンチ東壁の土層柱状図



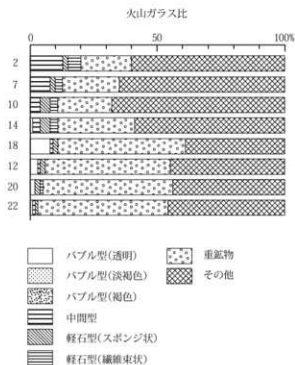
第248図
C区2トレンチ南壁の土層柱状図



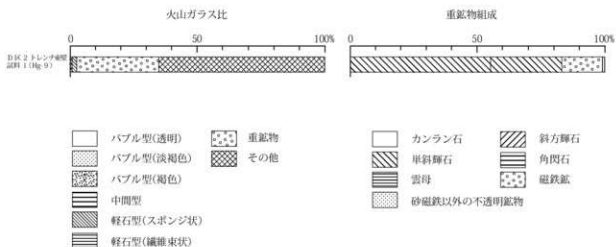
第249図
C区17トレンチ南壁の土層柱状図



第251図
D区2トレンチ南壁の土層柱状図



第252図 C区17トレンチの火山ガラス比ダイヤグラム



第253図 D区2トレンチ東壁試料1 (Hg-9)の火山ガラス比ダイヤグラム(重鉱物組成を含む)

第3節 芳賀東部団地遺跡出土人骨

はじめに

芳賀東部団地遺跡は、群馬県前橋市五代町及び同鳥取町に所在する。国道17号(上武道路)改築事業に伴う発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により、平成19(2007)年5月から同20(2008)年9月まで実施された。本遺跡のH区より、近世墓坑12基が検出され13体の人骨が出土したので、以下に報告する。

これらの墓坑は、発掘調査着手時に引き渡されていない墓跡であり、「元禄十二年」(1699年)・「享保四年」(1719年)・「享保十七年」(1732年)等の記年銘のある墓石が出土しているが、これらの墓石は、墓坑に直接伴っていないので詳細は不明である。

人骨は、清掃後、できる限りの接着復元を行い、観察・写真撮影・計測を行った。人骨の計測はマルティンの方法に従い(馬場 1991)、歯の計測は藤田の方法に従った(藤田 1949)。また、頭蓋骨計測値の比較は近世人は鈴木(鈴木 1967)、現代人は森田(森田 1950)を使用し、歯冠計測値の比較は近世人は松村(Matsumura 1995)、現代人は権田(権田 1959)を使用した。

なお、以下の平面図は、全体図は1/250で土坑は

1/25で示し、上が北である。

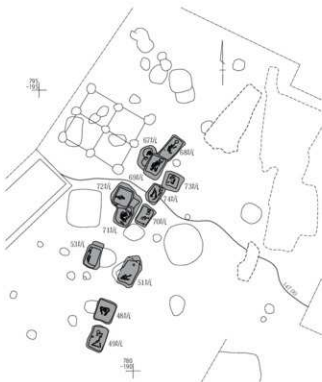
1. H区48土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：人骨は、長軸(南北)118cm・短軸107cm・深さ72cmの方形土坑から出土している。本土坑は、西側で50土坑と重複しているが、新旧関係は、本土坑の方が新しい。

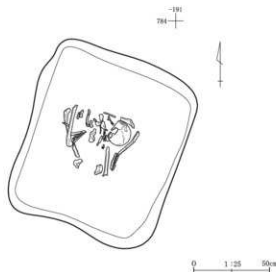
(2)人骨の出土部位：ほぼ、全身が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝11点・煙管1点・火打金1点・火打石3点が検出されている。この内、銭貨は、6点と5点に分かれそれぞれに布が付着している。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、顔



第254図 H区人骨出土土坑全体図



第255図 H区48土坑人骨出土状況



第256図 H区48土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)

面部を北側に向けた座葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：右寛骨の大坐骨切痕の角度が鋭角であるため、男性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は内板は一部癒合しているが、外板はすべて開放の状態である。切歯縫合は癒合している。さらに、出土歯の咬耗度は、象牙質が点状及び線状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。総合的に、約30歳代～40歳代であると推定される。

(8)被葬者の身長：左橈骨の最大長は213mmであり、被葬者の身長は、153.7cmであると推定された。北里大学の平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、近世人骨男性の平均身長は157.1cm[最大167.2cm・最小147.2cm]・同女性の平均身長は145.6cm[最大157.1cm・

最小137.6cm]である(平本 1972)。本人骨は当時の平均身長より少し低いが、変異内である。

(9)古病理：被葬者の前頭骨には前頭縫合が認められた。この前頭縫合は、生後2歳頃まで存在し、通常その後消失するが稀に成人でも残存する。前頭縫合の日本人の出現頻度は、約4.5%～7.8%である(平田 2000)。また、上顎左右M1(第1大臼歯)は、生前脱落をしており、歯槽も閉鎖している状態である。

2. H区49土坑出土人骨

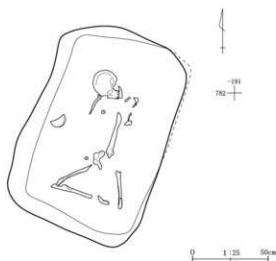
(1)人骨の出土状況：人骨は、長軸(南北)137cm・短軸(東西)94cm・深さ118cmの隅丸長方形土坑から出土している。なお、本土坑には他の遺構との重複は認められない。

(2)人骨の出土部位：ほぼ、全身が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝11点が、検出されている。この銭



第257図 H区48土坑出土人骨頭蓋骨前頭縫合(上面観)



第259図 H区49土坑人骨出土状態



第258図 H区48土坑出土人骨上顎骨生前脱落(咬合面観)



第260図 H区49土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)

賃は、6点と5点に分かれている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、被葬者は、頭位を北にした仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。但し、この場合、上半身はそのまま、脚部のみを「くの字」に曲げた状態である。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：頭蓋骨及び歯の計測値は、比較的小さいため、女性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：主要縫合である、冠状縫合及び矢状縫合は、両方とも、外板は癒合していないが内板は癒合している状態である。ラムダ縫合は、外板及び内板共に癒合していない。切歯縫合は、癒合している。歯の咬耗度は、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。総合的に、約30歳代から40歳代であると推定される。

(8)古病理：齧蝕(虫歯)は認められなかったが、下顎右M1(第1大白歯)の頰側面に軽度の歯石付着が認められた。

3. H区51土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：人骨は、長軸(南北)176cm・短軸(東西)134cm・深さ97cmの隅丸長方形土坑から出土している。

(2)人骨の出土部位：人骨は、頭蓋骨片・四肢骨が出土している。

(3)副葬品：副葬品は、検出されていない。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、被葬者の頭位は北で、顔面部を西側に向けた横臥屈葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：四肢骨は大きく頑丈であるため、男性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：死亡年齢推定となる部位が出土していないため、詳細は不明であるが、成人であると推定される。

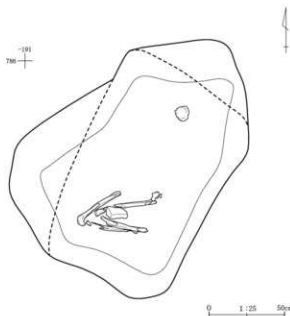
4. H区53土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：人骨は、長軸(南北)146cm・短軸(東西)93cm・深さ78cmの隅丸長方形土坑から出土している。なお、本土坑は、多くの部分で52土坑と重複している。

(2)人骨の出土部位：残存状態は、あまりよくない。人骨は、頭蓋骨片及び四肢骨片が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝1点が、検出されている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位を北にした横臥屈葬で埋葬されたと推定される。



第261図 H区51土坑人骨出土状態



第262図 H区53土坑人骨出土状態

(5) 被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：歯冠計測値が全体的に小さく、出土四肢骨も華奢で小さいため、女性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：下顎には、少なくとも10本の歯が残存しているが、上顎はほぼ無歯顎の状態であるが臼歯部が破損している。切歯縫合は閉鎖しているため、少なくとも、30歳以上である。正中口蓋縫合も、閉鎖しかかっている状態である。下顎歯の咬耗度は、切歯部は象牙質が線状に露出するマルティンの2度の状態であるが、大白歯はエナメル質のみの1度の状態である。これは、上顎歯の生前脱落が早く起こったために、咬耗が進

まなかったと推定すると矛盾しない。総合的に、約40歳代～50歳代であると推定される。

(8) 古病理：上顎は、ほぼ無歯顎の状態である。また、下顎左M1(第1大白歯)は、生前脱落した状態で歯槽も閉鎖しているが、完全ではないため、死亡した数年前に脱落したものと推定される。さらに、下顎左右M2(第2大白歯)の頰側面歯頸部に歯髄に達するC2の状態の齧蝕(虫歯)が認められた。

5. H区67土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況：本土坑は、東側で69土坑と重複しており、新旧関係は本土坑の方が古い。人骨は、現状で、長軸(南北)129cm・短軸(東西)91cm・深さ48cmの規模の楕円形土坑から出土している。

(2) 人骨の出土部位：ほぼ全身が出土している。

(3) 副葬品：寛永通宝11点・釘1点が、検出されている。この内、銭貨は分かれておらず11点が一括して検出されている。

(4) 被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位を南にした仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。脚部の骨は、胸部にくっつくように曲げられている。

(5) 被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：歯の計測値は比較的小さく、四肢骨片も華奢で小さいため、女性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：下顎歯の咬耗度を観察すると、切歯は象牙質が線状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるが、小白歯及び大白歯はエナメル質のみの



第263図 H区53土坑出土人骨下顎骨(左M1の生前脱落)



第264図 H区67土坑人骨出土状態



第265図 H区67土坑出土人骨下顎骨(異常摩耗)

1度の状態である。約30歳代であると推定される。但し、古病理の項目で記載するように、上顎左右P1及び下顎左右P1・P2には異常磨耗が認められた。

(8)古病理：上下歯の内、上顎左右P1(第1小白歯)及び下顎左右P1・P2(第2小白歯)は、歯髄が露出するほどに異常磨耗をしている。上顎P1は舌側咬頭が、下顎P1及びP2は頬側咬頭がほぼなくなるぐらい磨耗している状態である。しかしながら、隣接する犬歯にはそのような咬耗は無いが、舌側面に咬耗が認められる。この異常磨耗の原因は不明であるが、歯ざりではないかと推定される。

左側頭骨には、約10mm×6mmの大きさの鼓室骨裂孔が



第266図 H区67土坑出土人骨左側頭骨(鼓室骨裂孔)



第267図 H区68土坑人骨出土状態

認められた。右側頭骨は破損しており確認できない。この鼓室骨裂孔は、フシユケ [Huscheke] 孔とも呼ばれるものであるが、外耳道下壁に認められる孔で、成長途上に生じた化骨不全と考えられており、日本人では約35.8%の頭蓋骨の約26.0%の側に認められる(平田 2000)。

6. H区68土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：本土坑は、南部で69土坑と重複している。新旧関係は、本土坑の方が古い。現状で、長軸(南北)135cm・短軸(東西)78cm・深さ86cmの規模の隅丸長方形土坑から出土している。

(2)人骨の出土部位：頭蓋骨片及び四肢骨が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝8点・念仏銭1点が、検出されている。この内、寛永通宝は、3点と5点に分かれている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位を北にして顔面部を西に向けた仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：出土四肢骨は、華奢で小さい。右寛骨の大坐骨切痕の角度は鈍角で約90度に近いため、女性であると推定される。



第268図 H区69土坑人骨出土状態

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ(Λ)縫合は、外板及び内板共にすべて癒合している状態である。遊離歯は検出されなかったが、一部残存している下顎骨を観察すると、多くの歯が生前脱落した状態である。但し、上顎骨は検出されていない。総合的に、被葬者の死亡年齢は高齢であると推定される。

7. H区69土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：本土坑は、北側で68土坑とまた西側で67土坑と重複している。新旧関係は、本土坑の方が新しい。人骨は、長軸(南北)128cm・短軸(東西)95cm・深さ137cmの規模の隅丸長方形土坑から出土している。

(2)人骨の出土部位：ほぼ全身が、出土している。

(3)副葬品：寛永通宝17点・煙管1点・火打金1点が、検出されている。この内、銭貨は、11点と6点に分かれている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位を北にして顔面部を西に向け右側を下にした横臥屈葬で埋葬されたと推定される。

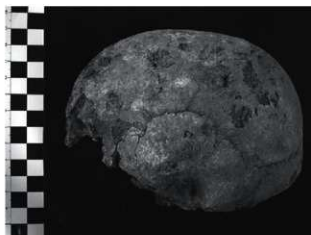
(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：右寛骨の大坐骨切痕部の角度が鋭角であるため、男性であると推定される。

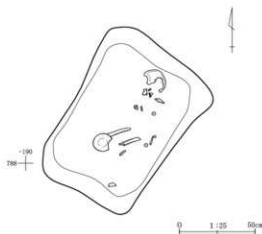
(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は外板及び内板共に癒合していない状態である。切歯縫合は癒合している。歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線上及び面状に露出する程度のマルティンの3度の状態である。総合的に、約30歳



第269図 H区69土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)



第271図 H区70土坑出土人骨頭蓋骨(左側面観)



第270図 H区70土坑人骨出土状態



第272図 H区70土坑出土人骨下顎骨(左M3の遠心捻転)

代から約40歳代であると推定される。

(8)古病理：下顎左M2(第2大臼歯)には、象牙質蝕蝕のC2段階の咬合面蝕蝕(虫歯)が認められた。

8. H区70土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：長軸(南北)108cm・短軸(東西)78cm・深さ60cmの規模の隅丸長方形土坑から出土している。

(2)人骨の出土部位：頭蓋骨片及び四肢骨片が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝1点・不談銭貨10点・煙管1点・火打金1点が、検出されている。この内、不談銭貨は、5点ずつに分かれている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位は北で顔面部を東に向けた横臥屈葬で埋葬されたと推定される

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：頭蓋骨片の骨壁は薄く四肢骨が小さく華奢であるため、女性であると推定される。



第273図 H区71・72土坑人骨出土状態

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合は、外板及び内板共に癒合している。ラムダ縫合は、外板は癒合しておらず内板は一部癒合している状態である。歯の咬耗度は、象牙質が線状及び点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。総合的に、約40歳代であると推定される。

(8)古病理：上顎右及び下顎左M3(第3大臼歯)の近心面に、歯髓に達するC3の蝕蝕(虫歯)が認められた。また、下顎左M3は、90度遠心捻転した状態である。

9. H区71土坑出土人骨

71土坑からは、ほぼ全身が出土している71土坑・1人骨と、頭蓋骨のみの71土坑・2人骨の2体が出土している。

H区71土坑出土人骨・1

(1)人骨の出土状況：本土坑は、北東部で72土坑と重複している。新旧関係は、本土坑の方が古い。長軸(南北)196cm・短軸(東西)103cm・深さ60cmの長方形土坑のように見えるが、一辺約1mの方形土坑が2基並んでいたものと推定される。この内、北部のものが71土坑・2の本来の土坑であると推定される。

(2)人骨の出土部位：ほぼ全身が、出土している。

(3)副葬品：寛永通宝9点・永楽通宝1点・不談銭貨5点・煙管1点・火打金1点が、検出されている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、座葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。



第274図 H区71土坑出土人骨1頭蓋骨(左側面観)

(6)被葬者の性別：左右寛骨の大坐骨切痕の角度が鋭角であるため、男性であると推定される。頭蓋骨及び歯の計測値も大きく、四肢骨も大きく頑丈である。

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は、外板及び内板共に癒合していない状態である。切歯縫合は、癒合している。歯の咬耗度は、下顎切歯及び犬歯が象牙質が線状及び点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるが、他の歯はエナメル質のみの1度の状態である。総合的に、約30歳代であると推定される。

(8)古病理：歯石の付着及び齲蝕(虫歯)は、認められなかった。

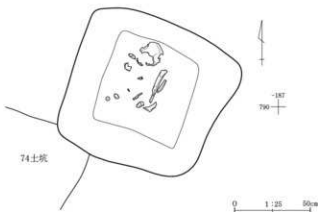
(9)特徴：上顎は、歯槽性突顎である。

H区71土坑出土人骨・2

(1)人骨の出土状況：本人骨は、71土坑の北部にある土



第275図 H区71土坑出土人骨2頭蓋骨(右側面観)



第276図 H区73土坑人骨出土状態

坑の掘り残しであると推定される。

(2)人骨の出土部位：顔面部を欠く頭蓋冠のみである。

(3)副葬品：検出されていない。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：不明である。

(5)被葬者の個体数：頭蓋冠1点のみであるので、1個体である。

(6)被葬者の性別：頭蓋骨の骨壁は比較的薄く、乳様突起も小さいため、女性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は、内板は癒合しているが、外板は癒合していない状態である。恐らく、約40歳代であると推定される。

10. H区72土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：本土坑は、南東部で71土坑と重複している。新旧関係は、本土坑の方が新しい。人骨は、長軸(南北)136cm・短軸(東西)112cm・深さ73cmの方形土坑から出土している。

(2)人骨の出土部位：四肢骨片が出土している。

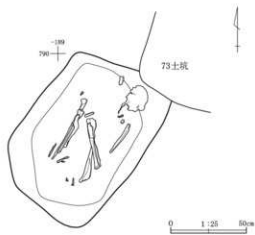
(3)副葬品：寛永通宝2点が、検出されている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：頭位は不明である。

(5)被葬者の個体数：出土四肢骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：出土四肢骨は小さく華奢であるため、女性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：死亡年齢推定の指標となる部位



第277図 H区74土坑人骨出土状態

が出土していないが、成人であると推定される。

11. H区73土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況：人骨は、一辺約100cm・深さ133cmの方形土坑から出土している。本土坑は南西部で74土坑と重複する。新旧関係は本土坑の方が新しい。

(2) 人骨の出土部位：頭蓋骨片及び四肢骨片が出土している。

(3) 副葬品：寛永通宝6点・不読銭貨12点・火打金1点、検出されている。銭貨は、6点と12点に分かれている。

(4) 被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、坐葬で埋葬されたと推定される。

(5) 被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：出土四肢骨は小さく華奢であるため、女性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：死亡年齢推定の指標となる部位が出土していないが、成人であると推定される。

12. H区74土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況：本土坑は、北部で一部73土坑と重複している。人骨は、長軸(南北)112cm・短軸(東西)77cm・深さ47cmの隅丸長方形土坑から出土している。

(2) 人骨の出土部位：ほぼ全身が、出土している。

(3) 副葬品：寛永通宝11点・煙管1点・火打金1点・火打石1点・釘5点が、検出されている。銭貨11点は、まともって検出されている。

(4) 人骨の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位は北で、仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。

(5) 被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者は1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：左右寛骨の大坐骨切痕部の角度は鋭角であるため、男性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の縫合は、外板及び内板共に癒合している。出上下顎歯の咬耗度は、象牙質が面状に露出する程度のマルティンの3度の状態であるので、約40歳代から50歳代であると推定される。

まとめ

芳賀東部工業団地遺跡群のH区の12基の土坑から、13

体の近世人骨が出土した。この13体のいずれも成人であるが、男性5体・女性8体が出土しており、性に偏りが見られる。

群馬県内出土近世墓で、10体以上の人骨が出土している、見立峯遺跡Ⅱ・生品西浦遺跡・上ノ平1遺跡・羅漢町遺跡を比較検討してみる。

見立峯遺跡Ⅱでは15体出土しており、男性7体[子供3体]・女性6体[子供1体]・性別不明2体であり、性はほぼ同じである(橋崎 2003)。生品西浦遺跡では16体出土しており、男性8体・女性6体・性別不明2体[子供1体]であり、大きな性に偏りはない(橋崎 2005)。上ノ平1遺跡では16体出土しており、男性10体・女性5体[子供1体]・性別不明1体であり、男性の方が女性の2倍出土している(橋崎 2008)。羅漢町遺跡では29体出土しており、男性15体[子供1体]・女性14体であり、性はほぼ同じである(橋崎 2011)。

これらの4遺跡出土人骨の性比を見ると、性はほぼ同じか男性の方が多くかつ未成年が含まれる。その点で、本遺跡は女性の方が多くかつ未成年が出土していない点で、他の群馬県内近世遺跡とは異なっており、興味深い。

引用文献[著者名のアルファベット順]

- 馬場悠男 1991 『人類学講座別巻1、人体計測法、Ⅱ、人骨計測法』、雄山閣出版
- 藤田恒太郎 1949 歯の計測基準について、『人類学雑誌』、61：1-6。
- 権田和良 1959 歯の大きさの性差について、『人類学雑誌』、67：151-163。
- 平本嘉助 1972 縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化、『人類学雑誌』、80：221-236。
- 平田和明 2000 「骨」、『日本人のからだ』(佐藤達夫・秋田恵一編)、東京大学出版会
- MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum Monographs No.9, National Science Museum
- 橋崎修一郎 2003 「見立峯遺跡Ⅱ出土人骨」、『見立峯遺跡Ⅱ・滝沢日向堀遺跡』、赤城村教育委員会、p.257-277。
- 橋崎修一郎 2005 「生品西浦遺跡出土人骨」、『生品西浦遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.178-208。

植崎修一郎 2008 「上ノ平1遺跡出土人骨」、『上ノ平1遺跡（1）』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.151-180.

植崎修一郎 2011 「羅漢町遺跡出土人骨」、『羅漢町遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.15-18.

鈴木 尚 1967 「V. 頭骨」、『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』(鈴木 尚・矢島恭介・山辺知行編)、東京大学出版会、p.121-274.

第52表 芳賀東部団地遺跡出土人骨まとめ

	土坑番号	個体数	性別	死亡年齢	身長	備考
1	48土坑	1個体	男性	約30歳代～40歳代	153.7cm	前頭縫合・生前脱落
2	49土坑	1個体	女性	約30歳代～40歳代	—	歯石付着
3	51土坑	1個体	男性	成人	—	—
4	53土坑	1個体	女性	約40歳代～50歳代	—	齲蝕・生前脱落
5	67土坑	1個体	女性	約30歳代	—	異常磨耗・鼓室骨裂孔
6	68土坑	1個体	女性	老齢	—	—
7	69土坑	1個体	男性	約30歳代～約40歳代	—	齲蝕
8	70土坑	1個体	女性	約40歳代	—	齲蝕・遠心捻転
9	71土坑	1個体	男性	約30歳代	—	歯槽性突頭
10			女性	約40歳代	—	—
11	72土坑	1個体	女性	成人	—	—
12	73土坑	1個体	女性	成人	—	—
13	74土坑	1個体	男性	約40歳代～50歳代	—	—

第53表 芳賀東部団地遺跡出土人骨頭蓋骨計測値及び比較表

計測項目 (Martin'sNo.)	芳賀東部工業団地遺跡群				近世人間*		現代人**	
	48上坑	49上坑	69上坑	71上坑-1	♂	♀	♂	♀
1 脳頭蓋最大長	175mm	165mm	185mm	177mm	181.9mm	175.4mm	178.9mm	170.8mm
8 脳頭蓋最大幅	—	131mm	145mm	148mm	139.8mm	136.8mm	140.3mm	135.9mm
8:1 頭蓋長幅示数	—	79.4(中頭)	78.4(中頭)	83.6(短頭)	76.9(中頭)	78.1(中頭)	78.5(中頭)	79.7(中頭)
17 ハジオン・プレグマ高	—	125mm	136mm	133mm	137.5mm	133.3mm	138.1mm	132.5mm
17:1 頭蓋長高示数	—	75.8(高頭)	73.5(中頭)	75.1(高頭)	75.6(高頭)	75.8(高頭)	77.3(高頭)	77.7(高頭)
17:8 横頭幅高示数	—	95.4(中頭)	83.8(中頭)	89.9(平頭)	98.6(狭頭)	97.5(中頭)	98.6(狭頭)	97.7(中頭)
18*17/3 脳頭蓋モズルス	—	140.3	155.3	152.7	153.1	148.7	—	146.8
9 最小前頭幅	87mm	—	88mm	97mm	94.5mm	91.8mm	93.2mm	91.0mm
10 最大前頭幅	—	—	112mm	—	117.4mm	114.0mm	115.9mm	113.7mm
9:10 横前頭示数	—	—	80.0	—	80.8	80.5	80.5	81.5
9:8 横前頭頭頂示数	—	—	60.7(狭前頭)	65.5(狭前頭)	67.7(中前頭)	67.0(中前頭)	66.4(中前頭)	66.9(中前頭)
12 最大後頭幅	99mm	100mm	112mm	111mm	109.9mm	105.8mm	108.4mm	104.2mm
12:8 横頭頂後頭示数	—	76.3	—	—	78.6	76.6	77.3	76.8
25 正中矢状弧長	—	329mm	—	—	373.4mm	361.1mm	371.7mm	357.6mm
26 正中前頭弧長	120mm	103mm	130mm	125mm	126.7mm	123.7mm	127.4mm	122.1mm
27 正中頭頂弧長	120mm	118mm	123mm	128mm	127.7mm	123.9mm	125.1mm	121.0mm
28 正中後頭弧長	—	108mm	120mm	—	119.2mm	113.0mm	119.1mm	114.3mm
27:26 矢状前頭頭頂示数	100.0	114.6	94.6	102.4	101.1	100.7	98.6	98.9
28:26 矢状前頭後頭示数	—	104.9	92.3	—	94.2	91.4	93.6	93.9
28:27 矢状頭頂後頭示数	—	91.5	97.6	—	93.3	91.2	95.4	95.4
26:25 前頭矢状弧長示数	—	31.3	—	—	33.9	34.3	34.3	34.2
27:25 頭頂矢状弧長示数	—	35.9	—	—	34.2	34.3	33.7	33.8
28:25 後頭矢状弧長示数	—	32.8	—	—	31.9	31.3	32	32
29 正中前頭弧長	106mm	102mm	114mm	108mm	111.4mm	108.7mm	111.8mm	106.5mm
30 正中頭頂弧長	108mm	105mm	112mm	113mm	114.6mm	111.2mm	111.8mm	108.6mm
31 正中後頭弧長	—	86mm	102mm	—	99.1mm	96.8mm	100.4mm	97.0mm
29:26 矢状前頭彎曲示数	—	99.0	87.7	86.4	87.9	87.9	87.9	87.4
30:27 矢状頭頂彎曲示数	—	89.0	91.1	88.3	89.7	89.7	89.3	89.8
31:28 矢状後頭彎曲示数	—	79.6	85.0	—	85.7	85.7	84.5	84.9
47 顔高	120mm	—	120mm	122mm	118.0mm	—	123.8mm	115.0mm
48 上顔高	70mm	—	68mm	69mm	66.2mm	66.6mm	70.7mm	67.1mm
50 前眼窩間幅	—	—	—	21mm	18.6mm	17.1mm	17.8mm	17.4mm
54 鼻幅	23mm	—	26mm	27mm	26.2mm	25.1mm	25.0mm	24.5mm
55 鼻高	52mm	—	51mm	49mm	52.5mm	49.5mm	52.0mm	49.0mm
54:55 鼻示数	44.2(狭鼻)	—	60.0(過広鼻)	55.1(広鼻)	49.9(中鼻)	50.9(中鼻)	48.4(中鼻)	50.2(中鼻)
61 上顎面槽突起幅	50mm	—	50mm	64mm	66.5mm	64.8mm	65.8mm	61.7mm
62 口蓋長	46mm	—	47mm	46mm	44.8mm	44.0mm	44.0mm	42.7mm
67 前下顎幅	45mm	—	47mm	48mm	47.8mm	32.5mm	—	—
69 顔高	35mm	30mm	34mm	37mm	34.5mm	32.5mm	36.1mm	33.2mm
70 下顎枝高(右)	52mm	52mm	—	63mm	—	—	—	—
70 下顎枝高(左)	—	—	—	—	68.2mm	58.3mm	62.6mm	57.6mm
71 下顎枝高(右)	38.5mm	33mm	34mm	38mm	—	—	—	—
71 下顎枝高(左)	—	—	—	—	35.4mm	31.1mm	33.1mm	31.1mm
71:70 (右) 下顎枝示数	—	—	—	60.3	—	—	—	—
71:70 (左) 下顎枝示数	—	—	—	—	52	51.3	53.1	54.1

註1:「*」は、鈴木(1967)より引用。

註2:「**」は、森田(1950)より引用。

第4節 芳賀東部団地遺跡出土炭化物について

1 試料について

発掘調査時にサンプルとして取り上げられていた炭化物49点について、その樹種等の調査を行った。炭化物サンプルは、炭破片として一括して取り上げ、または周りの土ごととブロック状に取り上げられていた。その中から試料を抽出し実体顕微鏡を使用して観察し同定を行った。同一Noのサンプルより異なる樹種が検出された場合は、試料を複数抽出して同定を行ったため同定した総点数は50点となった。各試料の同定結果が第55表である。

2 観察所見と同定結果

観察したサンプルはC区2号住居14点・3号住居10点(11試料を抽出)・4号住居7点、E区6号住居4点、G区3号住居5点、I区5号住居5点、I区8号住居2点、I区1号竪穴状遺構1点、B区20号土坑1点の計49点(50試料)である。

C区2号住居は4世紀後半の住居でサンプル14点のすべてがクスギ節の材である。材の形状としては直径3～35cmの丸木が3点・大径木の破片が3点見られたが他は小破片であり用途の特定等は困難である。C区3号住居も4世紀後半の住居でサンプル10点より11試料を抽出した。9点がクスギ節でこのうち7点は大径木の材であるが小破片であり用途等は特定できない。小破片1点が散孔材。またNo73のクスギ節の材の中からイネ科植物程で節を含むカヤ材の破片とみられる1点を抽出した。C区4号住居は4世紀中頃の住居で7点すべてがクスギ節で、このうち6点は大径木の破片で1点の小破片で径は

不明である。いずれも破片のため用途等は特定できない。E区6号住居は9世紀中頃の住居で、4点中1点がクスギ節の小丸木で半裁状に残るが、一方の端部に切断の痕跡が斜めに2か所カットされた痕が残る。他の3点は広葉樹の微小破片で樹種は特定できなかった。G区3号住居は6世紀前半の住居で炭化材のうち一部をサンプルとして取り上げている。このサンプル5点のすべてがクスギ節の材で、大径木破片3点のほかは割材状の破片および径10cmの材の小破片である。I区5号住居も6世紀前半の住居で、5点すべてがクスギ節の材で径5cmの丸木1点のほかは全体に小破片で、形状・用途は不明である。I区8号住居は6世紀後半の住居で2点ともクスギ節の径2cmと3.5cmの丸木で、特にNo1は年輪が細かく径2cmに7年以上の年輪を数える。I区1号竪穴状遺構はサンプル1点のみで広葉樹の散孔材の小破片。B区20号土坑はやはりサンプル1点のみで、クリ材破片の集まりで詳細は不明である。

住居ごとに出土木材の樹種を比較したのが第54表である。本遺跡で調査した住居出土炭化物では、微小破片で細分化できず広葉樹としたE区6号住居(平安時代9世紀中頃)を除き、古墳時代4世紀後半～6世紀後半の住居6軒の炭化材43点がクスギ節であった。このうちC区3号住居の10点中クスギ節9点(クスギ節比率90%)・散孔材1点で、残り5軒の住居出土炭化材は全点がクスギ節の材であった。炭化物は全点がサンプルとして抽出されていないが、そのこと考慮してもクスギ節の木材の出土頻度の高さは特徴的といえる。

第54表 住居出土木材樹種構成表

樹種	C区			E区	F区	G区	I区	
	2住居	3住居	4住居	6住居	6住居	3住居	5住居	8住居
クスギ節	14	9	7		1	5	5	2
散孔材		1						
広葉樹				3				
試料合計	14	10	7	3	1	5	5	2

第5章 自然科学分析

第55表 出土炭化物一覧表

遺構	試料No	樹種	備 考
C区2号住居	Na28	クスギ節	径3.5cmの丸木長さ 10cmほど残存
C区2号住居	Na29	クスギ節	径3.5cmの丸木破片 6×3×1.5cm程度残存
C区2号住居	Na30	クスギ節	大径木材の小破片
C区2号住居	Na31	クスギ節	小径木の破片 8×5×1cm残存
C区2号住居	Na32	クスギ節	微小破片
C区2号住居	Na33	クスギ節	大径木の小破片
C区2号住居	Na34	クスギ節	径4cm平截状長さ14cmを残す木材破片
C区2号住居	Na34②	クスギ節	崩れた破片の集合。範囲は15×4×3cmだが形状は不明
C区2号住居	Na35	クスギ節	範囲15×4×1.5cmの破片の集まりで形状は不明
C区2号住居	Na36	クスギ節	範囲11×4×3cmの小破片の集まりで形状は不明
C区2号住居	Na37	クスギ節	小径木の破片 12×5×2.5cmと11×3.5×3cm残存
C区2号住居	Na38	クスギ節	4×1.5×1cmの小破片で形状は不明
C区2号住居	Na39	クスギ節	径3cmの丸木破片 3.5×2×1.5cm残存
C区2号住居	Na42	クスギ節	大径木の破片 4×2×0.5cm
C区3号住居	Na70	クスギ節	小破片
C区3号住居	Na71	クスギ節	小破片。断面2.5×2cmの割材状破片として残存
C区3号住居	Na72	クスギ節	大径木破片
C区3号住居	Na73	クスギ節	クスギ節大径木破片 2.5×1.7×0.8cm
C区3号住居	Na73	カヤ材	カヤと見られる植物種で節部分を含む破片
C区3号住居	Na74	クスギ節	大径木破片
C区3号住居	Na75	クスギ節	大径木破片
C区3号住居	Na76	クスギ節	大径木破片の集まり、最大破片で3×1.3×1cm
C区3号住居	Na77	クスギ節	大径木破片
C区3号住居	Na78	クスギ節	大径木破片
C区3号住居	Na79	散孔材	小破片で形状不明
C区4号住居	Ca1	クスギ節	小破片
C区4号住居	Ca2	クスギ節	大径木の小破片、断面7×2cmの割材状に残る
C区4号住居	Ca3	クスギ節	大径木の小破片
C区4号住居	Ca4	クスギ節	大径木の小破片
C区4号住居	Ca5	クスギ節	大径木破片 最大破片8×4.5×8cmの割材状に残る
C区4号住居	Ca6	クスギ節	大径木の小破片多数
C区4号住居	Ca7	クスギ節	大径木の小破片
E区6号住居	Na1	広葉樹	小破片
E区6号住居	Na2	広葉樹	小破片
E区6号住居	Na3	広葉樹	小破片
F区6号住居	一括	クスギ節	年輪8本を数える丸木で平截状に残るが本来の形状は不明 一端に2面のカット痕が残る
G区3号住居	Na1	クスギ節	大径木破片 10×3×4cm
G区3号住居	Na2	クスギ節	大径木5×1.5×18cmの割板状に残存
G区3号住居	Na3	クスギ節	推定径10cmの破片の集合 最大破片9×4×4cm
G区3号住居	Na4	クスギ節	大径木破片 3×2×18cmの割材状に残存
G区3号住居	Na5	クスギ節	割材状に残存 最大22×5×4cm他接合不明の破片有り
I区5号住居	Na17	クスギ節	4×3.5×3cmのブロック状に残存
I区5号住居	Na18	クスギ節	小破片
I区5号住居	Na19	クスギ節	小破片
I区5号住居	Na20	クスギ節	小破片
I区5号住居	Na21	クスギ節	径5cmの丸木
I区8号住居	Na1	クスギ節	径2cm年輪7年丸木の1/3残存 長さ8cm残存 一端はカットか
I区8号住居	Na10	クスギ節	径3.5cm丸木平截状に残存
I区1号壱穴状		散孔材	小破片
B区20号土坑	Na11	クリ	破片の集まりで全体形状は不明

※大径木は、破片が小さく具体的に直径推定ができないが、年輪の曲率が大きく推定直径30cm以上のものについてこの表記を用いた。

※大きさ表記は、軸方向×接線方向×放射方向の順に記した。

第5節 鉄滓について


所見

- 芳賀東部団地遺跡の鉄滓には鍛冶滓と製錬滓の二つが存在する。
- 西半部のE区・F区からの鉄滓出土が多い。
- 炉壁と流動滓が見当たらない。
- 以上のことから、
 - 北側(斜面上位)の鍛冶滓が、上武道路区域に流れ込んだ可能性が高い。
 - 炉壁・流動滓が見当たらず、鉄塊系遺物が存在す

















るので、製鉄が本遺跡内にはないが、集落に製鉄した鉄分の多い塊を持ち込み、そのうち比較的鉄分の少ない3級品が残った可能性がある。1級品・2級品は製品化され、持ち出されたと考えられる。

- 個別の鉄滓の観察結果は、第278図に示す。

第278図 芳賀東部団地遺跡製鉄関連遺物一覧

番号	区	遺構番号	遺構名	出土状況	遺物名	特徴	重量	写真・備考
C	4	住居	南西一括				6.57	
F	2	住居	鉄1				27.2	
F	2	住居	鉄6				9.6	
F	2	住居	鉄9		鉄滓		3.77	
F	4	住居				見当たらず		
F	7	住居	振り方		鉄滓		3.55	
F		表土			鉄滓		65.62	
C	15	住居	鉄1				41.06	
C	15	住居	鉄2		鉄滓		65.91	
F	2	住居	鉄4		鍛冶滓		8.30	F21と同じ箇に封入
I	3	土坑	鉄一括				31.83	
I	2	住居	鉄101				30.77	
E	4	住居	覆土				14.08	鉄、銅?
E	4	住居	鉄83		不明の滓		17.61	
G	7	住居	カマド一括				18.18	
G	14	住居	一括				67.83	
G	15	住居			鉄塊系遺物主体		37.95	
F	3	グリット	カク壺一括				14.52	
F			カク壺				89.26	
F		表土					62.52	
F	77レ		一括				12.65	
F					鉄製品		29	取説の可能性
F	2	住居			鉄塊系遺物		270.45	
F	2	住居			鍛冶滓	焼形鍛冶滓含む	245.38	
F	2	住居			鉄滓		144.9	
F	3	住居	一括		鉄塊系遺物と不明の滓		61.4	
F	1	住居			鉄塊系遺物主体		35.41	
F	7	住居	一括				60.03	
F	8	住居	一括				31.62	
D	1	溝	一括				28.06	
F	5	住居	一括		鉄分の多い滓	錆化した鉄塊系遺物含む	125.35	
F	6	住居	覆土			鉄塊系遺物・小卒の薄手の焼形鍛冶滓含む	72.3	
F	6	住居	471一括				30.54	
I	G	15	住居		鉄塊系遺物		140	

第5章 自然科学分析

番号	区	遺構 番号	遺構名	出土状態	遺物名	特徴	重量g	写真・備考
2	F	2	住居	鉄2	楔形鋸歯片	薄手、小型	25.62	
3	F	2	住居		不明の鉄片	気泡が内在し、比重が低い。	27.2	
4	G	14	住居	鉄1	伊内洋(含洋)か		230.81	
5	G	14	住居	鉄2	鉄塊系遺物か		28.1	
6	G	14	住居	鉄3	不明の洋		137.58	
7	G	14	住居	鉄4	伊内洋	大型の木炭燻平団2a	76.65	
8	G	14	住居	鉄5	不明の洋		125.21	
9	G	15	住居	鉄3	内結合洋		36.30	
10	I	2	住居	南西	楔形鋸歯片か	下面に直軸1cm以下の小型の木炭燻あり。	109.6	
11	I	2	住居		楔形鋸歯片		25.22	
12	I	2	住居		楔形鋸歯片	上面黒色ガラス化	43.1	
13	I	2	住居		楔形鋸歯片	粘土質土体。上面の粘土質汚物 物は右口の奥部の凹部か。下面 は伊土が付着している。	65.16	
14	F	2	住居		鉄塊系遺物		12.25	
15	F	2	住居		鉄塊系遺物		7.27	
16	F	2	住居		楔形鋸歯片		23.02	
17	F	2	住居		楔形鋸歯片型		42.44	

第6章 成果とまとめ

第1節 科学分析の成果

ここでは5章に掲載した科学分析の成果について、発掘調査の観点から、いくつか記述しておきたい。

1 テフラ分析

試料を採取した地点のうち、B区1トレンチ・2トレンチ・7トレンチ、C区2トレンチ・17トレンチはローム層の試料であり、これらの同定結果は当事業団発掘調査報告書第535集『上武道路・旧石器時代遺跡群(3)』2012に反映されている。本書は縄文時代以降を内容とするため、直接関連するのは、C区南北ベルト採取の試料である。試料Hg-12は浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)、試料Hg-13は極名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)と同定された。

2 人骨の鑑定

H区のもと墓地区域で12基の墓を検出し、13体の人骨が出土した。同じ区域から江戸時代前半の紀年銘のある石造品が出土しているが、墓坑に伴っていないため、人骨の年代とは決定できない。後述のように、人骨は古銭や喫煙具などの副葬品を伴っていたことから、江戸時代の墓とすることが可能である。

13体のうち女性が8体、男性が5体で、やや女性が多い。71土坑は男・女が認められた。年齢は68土坑の老齢を除き、30歳代から50歳代の間に含まれる。身長が復元できるのは48土坑の30～40代の男性で、153.7cmとされた。未成年の人骨の出土がないことが、特徴のひとつという鑑定結果であった。

3 炭化材の樹種同定

B・C・E～G・I区から出土した炭化材が鑑定された。B区20土坑のものはクリとされ、本遺跡唯一のクリと鑑定された試料である。C区の2・3・4住居出土のものは、クヌギ節とされた。大半のものがクヌギ節と鑑定されたなかで、E区6住居の破片は広葉樹と認められた。クヌ

ギはブナ科コナラ属に分類され、いわゆる「ドングリ」の仲間であり、岩手・山形以南の里山の山林に自生する照葉樹林の一部である。遺跡を取り巻く山林の樹木としては矛盾しない植生とみられる。なお、ここで「大径木」と表記されたものは、推定直径30cm以上のものを指す。

4 鉄滓の分類と観察

今回の観察では、残念ながら時間不足のため、注目点をとらえた実測図を掲げることができず、写真を示すに留まった。しかし、観察者による現物を実見しての所見が得られ、それらをを一覧にまとめて示したのが、第278図である。

出土品を熟覧した結果、

- a フイゴ羽がない
- b 炉壁・流動滓が見当たらない
- c 鍛冶滓と製鍊滓の二種が出土している

以上のことから「製鉄」の場ではなく、鉄分の多い塊を加工した場合(いわゆる小鍛冶の類)を想定できる、という所見であった。

この所見から考えられることは、第一に「製鍊滓」が出土したことから、近隣に製鉄遺構の存在が予想されることである。第二に、近隣遺跡に同時代の製鉄遺構が検出されていれば、一つの限定された区域のなかで(たとえば、芳賀地域で、原料(砂鉄)採掘→製鉄(鉄素材の製造)→小鍛冶(製鉄道具の製作)という分業体制が整備されていた可能性があることである。このことを含め、3節では近傍の遺跡で調査された製鉄関連遺構を取上げて検討したい。

第6章 成果とまとめ

	歴史文庫	田戸文庫	金瓶文庫	花柳下町	前編前巻	男沢有屋	講義a	講義b(正形)	講義c(正形)	講義d(江原)	講義e(浅井)	講義f(浅井)	講義g	浮島	前期後巻	前期中巻	加賀朝日	秘石寺	堀之内1	堀之内2	後編前巻	不明	小計	
17土坑						10																1	11	
26土坑							1																	1
28土坑						17																		17
37土坑						3																		3
40土坑						1																		1
41土坑							1																	1
42土坑					1	10																		11
44土坑						17	4								1									22
45土坑								3																3
51土坑						8												1						9
56土坑						9																		9
58土坑					1	4																		5
60土坑						1	1																	2
61土坑						13																		13
72土坑						7																		7
73土坑						5	3																	8
74土坑						20									1									21
75土坑						5																		5
78土坑							1																	1
79土坑						2																		2
81土坑						5																		5
82土坑						10																		10
84土坑						17																		17
85土坑						10																		10
86土坑						5	1																	6
87土坑						16																		16
89土坑						50																		50
91土坑						3																		3
94土坑						1																		1
95土坑						3	3																	6
99土坑						12																		12
100土坑						2																		2
101土坑						4																		4
106土坑						2																		2
109土坑						1																		1
110土坑						10																		10
112土坑						5																		5
114土坑						7	1																	8
115土坑						4																		4
119土坑						1	2																	3
120土坑						3																		3
121土坑						2																		2
123土坑						2																		2
126土坑						6																		6
127土坑						32																		32
128土坑						10	1																	11
130土坑						5																		5
131土坑						1																		1
132土坑						1																		1
133土坑						27																		27
134土坑						1																		1
135土坑						6																		6
136土坑						7																		7
137土坑						2																		2
138土坑						2																		2
140土坑						11																		11
147土坑						7																		7
149土坑						1																		1
151土坑						15																		15
152土坑						20																		20
154土坑						3																		3
158土坑						3		2																5
162土坑						12																		12
163土坑						3																		3
165土坑						11																		11
166土坑						17																		17
167土坑						6																		6
168土坑						2																		2
169土坑						1																		1
170土坑						6																		6
171土坑						29																		29
172土坑						4																		4
遺構外	7			2	2	1335	664	4	22	27	1	1		221	9		33			4		54	6	2392
小計	11	0	0	2	5	3017	1380	3	37	27	1	1	0	230	9	0	34	1	4	0	34	20	3439	1区小計
総合計	16	18	2	11	6	4542	1446	11	51	52	2	7	1	280	129	1	132	18	30	60	192	232	7250	合計

2 袋形土器

C区1面の4住居貯蔵穴から、特殊な形の土器が出土した。両端が尖り、中央部が膨らんでいて、膨らみの上方に円形に復元される口縁部がある。尖った一端には注ぎ口とみられる小孔が存在する。大きさは長さ10.6cm、高さ6.1cmである。実測図を第174図に、写真をPL142に示した。出土状態の写真を第280図に示す。資料調査が不十分だが、県内では初例のようなのである。

「皮(革)袋形土器」は江戸時代から知られていたようで、明治時代以降も類例調査が重ねられ、昭和時代には主として西日本の出土品で資料集成がされた。牛嶋英俊「革袋形土器研究小史」(註1,以下、「小史」という)によれば、皮袋形土器は大別して須恵器系と非須恵器系とがあり、後者はさらに

A 裾がひろがる袋状胴部の上端に頸部をもつもの
B 逆三角形または逆台形の胴部の上辺中央に頸部または孔があり、一端に注口状の小孔をもつもの
の二種類に分けられるという。非須恵器系は「いずれも製作年代は弥生時代末から古墳時代初頭にかけてであり、須恵器とは年代的につながらない。」とされる。

この分類に従うと、本遺跡出土の土器は、非須恵器系のもので、Bタイプに属すると考えられる。住居内の他の土器を勘案すれば、この土器の時期は古墳時代前期4世紀前半が推定され、小史の類別に合致する。ここでは、小史の提言を尊重し、「袋形土器」と表記した。

機能としては、一端に小孔が開いた状態、中央上部に口縁部らしい形状をもつことから、液体を上位の開口部



第280図 C区4住居袋形土器出土状態

(口縁部)から入れ、小孔から注いだと考えられる。

本遺跡例と時代は異なるが、西畑屋遺跡の「皮袋形土製品」は非須恵器系とみられ、外観が良く似ている。

静岡県浜松市 西畑屋遺跡 土製品 皮袋形 古墳後期 7世紀後半(註2)

西畑屋遺跡は小河川の両岸に数ヶ所の焚き火跡が発見され、岸辺から礫集積や土器集積が検出されている。出土遺物には人形土製品、馬形土製品、裝飾付土師器と皮袋形土製品、土師器甕形品、須恵器・土師器のほか、カマド、土錘、鉄錐類・刀子・U字形鋤先・銅椀・古銭、砥石などを含み、祭祀に関連する遺構・遺物と考えられる。調査報告書に掲載された皮袋形土製品だけでも18個あり、これらは土師器小椀とともに集中して出土し、「両者が祭祀にあたって同時に使用されたことは確かであろう」とされた(須恵器の皮袋形土器は掲載されていない)。わずかな類例だが、日常生活に使う土器ではなく、祭祀や儀式に使われた土器と推定したい(註3)。

註1 牛嶋英俊「革袋形土器研究小史」『同志社大学考古学研究会 50周年記念論集』同志社考古刊行会,2010

註2 『西畑屋遺跡1999』財団法人浜松市文化協会,1999

註3 西畑屋遺跡のほか、次の出土例がある。いずれも実現できていない。

2 宮城県仙台市太白区秋保町 上ノ原遺跡 皮袋形土器 縄文時代中期 県指定資料

3 長野県飯山市 岡家遺跡 皮袋形土器 弥生時代中期後半～末期

写真でみる範囲では、本遺跡出土土器の形状は岡家遺跡例によく似ている。岡家遺跡例は楕円形の底部があるように見える。

3 滑石のチップ

H区1面の10住居内から、多量の滑石破片が出土した。200カ所以上の出土地点があり、そのうち7カ所は数mmほどのチップの集中する範囲であった。出土地点はカマ下前から南辺中央部にかけて分布している(第118図)。住居内施設は、ほかの住居と大きな差がないが、滑石破片が多量に出土していることのみが異質である。滑石破片を観察・分類した結果、本住居は滑石の白玉を製作した工房の可能性が高い。製品とみられる遺物が少ないのは、出荷してしまったためか。住居の時期は古墳時代後期5世紀末～6世紀初頭と推定される。

住居内または集落内で、

- I 自営的に原石採取から作業を始め、製品と食料等の生活必需品を交換したか、
 - II 原石や材料を供給され、製品を納入することによって食料等を入手したのか、
- にわかに判断できないが、より原石に近い材料が出土していないことを勘案すると、IIのケースに思える。ただし、大きめの材料を消費してしまった故に、出土しなかった可能性は否定できない。

出土した滑石破片を分類すると、外観・形状からいくつかの種類に分けられた(第281図)。掲載できないほど小さな破片(チップ)が合わせて2,673点出土した。小片溜りに注目すると、チップには4種類の色合い(濃いグレー、薄いグレー、肌色、白)が識別でき、チップと同じ色合いの素材Bを伴うことが判った。素材A・B・Cは195点、未成品は68点、完成品は小片溜り7から2点・掘り方から1点の3点である。重量別では、完成品0.64g、未成品17.93g、素材A・B・C 165.57g、チップ268.46gで、取上げ総重量は452.60g(計2,939点)であった。

素材と考えられる形状のものは、次のように分けられた。

白玉素材AとB 外形は不定形で、数cmほどの大きさをもつ板状の破片。両面に擦痕があるものをA、片面に擦痕があるものをBとした。

白玉素材C 略円筒形または直方体の形状で細長い棒状を呈し、数cmほどの長さをもつ。

白玉に近い形状をもつ加工品は、

- a 扁平で孔のないもの
- b 半円状を呈し、孔痕跡があるもの
- c 孔を有し、外形が不定形で円形ではないもの
- d 孔を有し、通常の白玉とされるもの

の四種に分けられた。dの外形はほぼ円形を呈するものがあり、完成形と考えられる。孔は開いているが、外形が不定形のものcがいくつかが存在していることから、穿孔ののちに外形を整えて円形にする工程が考えられる。aはその前段階のものと考えられ、穿孔する前の工程を表していると推定した。bは穿孔途中で割れてしまった失敗作であろう(第281図)。

原石に相当する大型の滑石塊(10cm以上を想定)や、小割り塊の滑石(3～5cm前後を想定)が見られないことは、

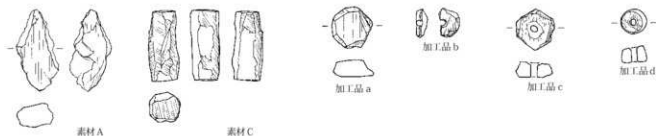
A いずれも消費されてなくなった

イ もともと原石がなかった

ウ 小割りて住居に持ち込まれ、素材A・Cになったなどのケースが考えられる。

以上の代表的な出土例から、白玉製作の工程を推定すると、次のようになる。

何らかの方法で入手した小割り塊(3～5cm大)をさらに割って、素材AまたはCを得る。このとき得られる再小



第281図 滑石製白玉破片の分類

割り破片の形状によって、二つの加工工程に分かれる。

A板材料→素材Aをさらに分割するか、周辺を打ち欠き、薄い板aにする→中央部に穿孔してcにする→cの外周を擦って円形にし、dに仕上げ上げる。

C棒材料→細長い塊状の破片を得た場合は、外周を擦って素材Cのような棒状素材にする→素材Cを輪切り状態の薄い板aにする→中央部に穿孔してcにする→cの外周を擦って円形にし、dに仕上げ上げる。

板状の滑石製品に穿孔があれば、外形が不定形でも祭祀の道具としては機能すると考えられる。しかし、本遺跡例のように、この地域の古墳時代後期の白玉製作が、外周を擦って円形にすることで完成形になるとすれば、後世の奈良平安時代には円形に仕上げ上げる工程を省略または粗雑な仕上げで出荷し、より多くなった需要に応えようとしたのではないだろうか。後日の検証を待ちたい。

4 丸柄と鉈尾

E区4住居から丸柄、F区6住居から鉈尾とみられる金属製品が出土した(第282図)。いずれも銅製品と考え

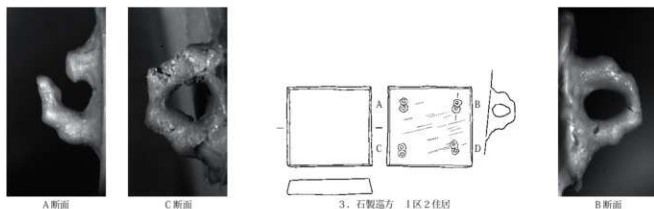
られるが、成分分析は実施していない。

E区4住居は9世紀前半、F区6住居は8世紀中頃と推定される住居である。このほか、1区2住居中央部床面水準から石製巡方が出土している(第282図)が、住居自体は5世紀中頃の所産とみられ、石製巡方から想定される年代と一致しない。写真は石製巡方に開けられた小穴のシリコン型を示したもので、穿孔の方向と回転による穿孔の状態が推定できる。

丸柄や巡方は役人が着けるベルトの飾りであり、材質や色調が官位ごとに規定されていた。逆に、飾りの形状を見ることによって、官位が判定できる仕組みとなっていた。鉈尾はベルト末端の装着品である。これらの出土品は、近隣の集落のなかに官位をもつ人物が存在していたか、その人物から入手した丸柄・巡方等が住居に埋没したことを示しており、今回の発掘区域を含む芳賀地域の遺跡のなかで評価されるべきであろう(註1)。

芳賀東部団地遺跡(市教委)の報告書では、H-364住居で丸柄(第1巻115頁)、H-23住居で巡方(第2巻20頁)、H-206住居で鉄製巡方(第2巻137頁)の3点の出土がある。

註1 県内の遺跡で、ベルトの1セットがすべて出土したという例を知らないが、単独の丸柄や巡方の出土例は少なくない。住居からの単独出土がどのような意味をもつか、確定的ではないように思う。



第282図 丸柄・鉈尾・石製巡方

5 墓の副葬品

(1) 墓副葬品の種類

H区のもと墓地区域から12基の墓坑が発見され、中から人骨13体分が出土した。人骨を出土して明らかに墓とできるものは、第57表の12基である。人骨と副葬品との関連性の有無を見るため、鑑定結果も表に含めた。一覧表から読み取れる傾向を列挙してみると、次のようになる。

- a 人骨が出土する墓の大半は、副葬品がある。何も副葬品が出土しなかったのは、全12基のうち51土坑の1基である。
- b その他の墓坑に共通する副葬品は、寛永通宝などの古銭である。複数枚が副葬されることが多い。古銭は複数枚が錆びついて現状を呈するものがあり、繊維状の付着物が観察できるものも存在することから、布に包むか布袋に入れて死者に添えたと推定される。
- c 次に多いのが喫煙具のキセルである。男性に副葬する 경우가やや多いが、女性への副葬が皆無ではない。喫煙の習慣が、男女を問わず広がっていたためか。

- d そのほか、着火具として火打金+火打石の両者、または単品で副葬されることがある。単品の場合は、調査時に土と混じり、見逃した可能性がある。火打金または火打石の一部に、皮革状付着物が遺存している。携帯用着火セットが想定できる。

そのほか、副葬品ではなく、遺体を納めた棺の一部として、

- e 一部では、板状木片が出土する
 - f 釘とみられる鉄製品が出土する
- ケースが認められる。板状木片は小さいので、いわゆる「早桶」の部品であるか、判定できない。鉄釘は蓋を閉じる場合のほか、箱形の棺の一部であった可能性がある。

(2) 念仏銭

H区68土坑から3枚錆着、5枚錆着の古銭のほか、「南無阿弥陀佛」と鋳出された銭形銅製品が出土した。南無阿弥陀佛は浄土宗で繰返し唱えられる念仏なので、この種の銅製品は「念仏銭」と呼ばれている。この念仏銭の形状は、直径22.6mm、厚さ0.7mm、重さ2.3gで、文字の右側を外周に向けて、片面に漢字で「南無阿弥陀佛」と闊跡



第283図 H区墓坑群 北から

第57表 H区墓坑出土遺物一覧表

遺構名	人骨			出土品		備考	掲載遺物	
	個体数	性別	死亡年齢	取上げ 番号	遺物			数量
H区48号土坑	1	男性	30歳代～40歳代	1	寛永通宝・5	6	6枚踏着。布付着。	第1998H206
					銅製品キセル吸い口	1	ラウ付。	第1998H209
					鉄製品火打ち金	1	皮革製の付着物有り。	第1998H210
				2	石製品火打ち石、b2.5cm大1点、c2.0cm大で火打ち金に付いている1点、d1.0cm大1点。	3		第1998H211
寛永通宝・4	5	5枚踏着。布付着。	第1998H207					
H区49号土坑	1	女性	30歳代～40歳代	1	銅製品キセル雁首	1	ラウ付。	第1998H208
H区51号土坑	1	男性	成人	1	寛永通宝・5	6	6枚踏着。	第1998H213
				2	寛永通宝・4	5	5枚踏着。古寛永か？	第1998H214
H区53号土坑	1	女性	40歳代～50歳代	一括	寛永通宝	1		第1998H215
H区67号土坑	1	女性	30歳代	1	寛永通宝・10	11	11枚踏着。	第1998H220
				釘か？	1		第1998H219	
H区68号土坑	1	女性	老齢	1	寛永通宝・2	3	3枚踏着。	第2008H221
				2	寛永通宝・4	5	5枚踏着。布付着。	第2008H223
				3	念仏銭	1	小型。南無阿弥陀仏。不明付着物有り。	第2008H222
H区69号土坑	1	男性	30歳代～40歳代	1	寛永通宝・10	11	11枚踏着。	第2008H228
					銅製品キセル吸い口	1	ラウ中間欠損。	第2008H226
				銅製品キセル雁首	1	ラウ中間欠損。	第2008H225	
				鉄製品火打ち金	1	木質状付着物。皮革状付着物。	第2008H227	
2	寛永通宝	6	2・4枚踏着。	第2008H229				
	寛永通宝	1	裏面に付着物有り。	第2008H234				
H区70号土坑	1	女性	40歳代	1	銅製品キセル雁首	1	ラウ残。繊維質付着。火皿下部に糊い突帯又は段。	第2008H231
					鉄製品火打ち金	1	木質状付着物。皮革状付着物。	第2008H233
				2	銭路不明	5	5枚踏着。布片付着。皮片？出土。	第2008H235
3	銅製品キセル吸い口	1	ラウ一部残。	第2008H232				
	銭路不明	5	5枚踏着。布片付着。皮片？出土。	第2008H236				
H区71号土坑	1	男性 女性	30歳代 40歳代	1	寛永通宝・寛永通宝	6	1・5枚踏着。	第2018H240
					寛永通宝・8	9	9枚踏着。布付着。	第2018H239
					銅製品キセル吸い口	1	ラウ単品。糸巻状裝飾。	第2018H237
					鉄製品火打ち金	1	繊維質付着物。皮革状付着物。	第2018H238
					木製品板状木片	1		
H区72号土坑	1	女性	成人	1	寛永通宝・1	2	2枚踏着。	第2018H247
H区73号土坑	1	女性	成人	1	寛永通宝・5	6	6枚踏着。	第2018H248
					鉄製品火打ち金	1	皮革状付着物。	第2018H251
				一括	木製品板状木片	1	銭のNo.2に貼り付いていた木片。桶底か？	
2	銭路不明	12	12枚踏着。布片付着。鉄付着。繊維状圧痕。	第2018H250				
H区74号土坑	1	男性	40歳代～50歳代	1	寛永通宝	11	1・10枚踏着。穴に繊維質、絹？付着。	第2028H256
					銅製品キセル吸い口	1	ラウ付。	第2028H254
					鉄製品釘	1	断面方形。木質付着。	第2028H257
					鉄製品火打ち金	1	皮革状付着物。	第2028H262
				2	石製品火打ち石	1	鉄踏付着。	第2028H263
					銅製品キセル雁首	1	ラウ付。絹に青色味が有る。	第2028H253
					鉄製品釘	1	木質付着。	第2028H258
3	鉄製品釘	1		第2028H261				
4	鉄製品釘	1	木質付着。	第2028H259				

されている。文字の配置は時計廻りで、端正ではない(註1)。第284図1に拓影と写真を示した。

このような銭形銅製品の出土例は県内では類例が少ないようで、資料調査が不十分だが、完形品の出土は県内初例とみられる。

これに類似した手元の資料に、次のものがある。

A 元総社寺田遺跡 絵銭=大黒銭・大福銭(第284図A1・A2)

B 駒城遺跡 江戸時代 墓 題目銭(第284図B)

A1は元総社寺田遺跡の中世の遺構の項に掲載されているもので、七福神の「大黒」を模した人物の絵を鑄出していることから、「絵銭」や「大黒銭」と呼ばれている。出土品の観察では、大黒の形状とは必ずしも読み取れないが、ほかの例を参考にする、人物像の腹部に四角い孔のある大黒になると考えられる(註2)。特徴的なのは、左右に広げる腕のような形と、下側にある膝または依の

表現である。A2も絵銭の一つと考えられ、鑄造された文字から「大福銭」とも呼ばれる。上に「大」、下に「福」と文字が隔鑄されており、左と右に人物像が各一人鑄造されている。時計で表現すれば、12時に大、6時に福、9時と3時に人物像が配置されている。詳細に観察したところ、9時の人物は「大黒」、3時の人物は右手を挙げ烏帽子を被っている様子から「恵比寿」と推定された。すなわち、文字「大福」+恵比寿像+大黒像が表現され、極めてめでたい銭形銅製品である。A1・A2とも、裏面には何も鑄造されていない。幸福を願って携帯したもの、または祝い事などで配布したものなどの用途が推定される。

Bは駒城遺跡の江戸時代の2号墓から出土した古銭で、「・・・蓮華経」の文字が読み取れることから、日蓮宗で唱えられた七字題目の「南無妙法蓮華経」の一部が遺存していると考えられ、この種の銭形銅製品は「題目銭」



1. 芳賀東部 念仏銭



A1. 元総社寺田 大黒銭



A2. 元総社寺田 大福恵比寿大黒銭



B. 駒城 題目銭



第284図 念仏銭・大黒銭・大福銭・題目銭(拓影1/1)

と呼ばれている。文字は時計廻りに配置され、墓は17世紀後半と推定されている(註3)。

鈴木公雄氏の研究によると(註4)、念仏銭・題目銭の出土例は東京近郊に多く、栃木県・埼玉県・東京都・千葉県・神奈川県に出土例があり、そのほか愛知県・石川県・大阪府・兵庫県・岡山県・福岡県でも出土している。1999年までの集成では念仏銭44例92枚、題目銭7例7枚が墓から出土している。これらの銭形銅製品は、1)渡来銭のみと伴出しない、2)古寛永通宝の鑄造(1636年)以前に遡らない、3)寛永鉄銭と銅製の念仏銭・題目銭は伴出しない、などの伴出する銭貨との関係から「17世紀の中頃から18世紀の前半にかけて」「六道銭の一部に用いられた。」という。

本遺跡と駒城遺跡とは、約200m程の距離の近接した位置関係にあり、比較的近い地点での出土は、この地域にも銭を副葬する埋葬風習があり、かつ出土例の少ない

念仏銭・題目銭を入手可能な状況が存在したことを示している。鑄造製品であることから考えて、高温を管理できる冶金技術が必要と思われる、寛永通宝のような銭の製造と同等の技術が必要と推定される。近隣で製造元を想定できないとすれば、江戸かその近郊で製造されたのち、特定の販売・流通経路を通じて入手したことが考えられ、あるいは製造元から直接持ち込む手段が存在したはずである。近隣の寺院などが頒布していたかもしれない。鑄造品であるから「型」が必要であり、量産を目的とした製品とみられる。

墓へ副葬される銭や、生前愛用の喫煙具を死者に添えるという行為とは別に、題目銭や念仏銭が副葬される場面を想像すると、亡くなった本人が「南無阿彌陀仏」と唱える宗派に属する人か、埋葬した人がそうした宗派に属していた可能性がある。

註1 本遺跡例は文字の配置が時計廻りであるが、反時計廻りに配置するものも存在するらしい。

註2 「元総社寺田遺跡11」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第208集1996、VII区中世の遺構で報告されている遺物で、出土地点が明瞭としない。

註3 「鳥取松合下遺跡・駒城遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第534集2012、駒城遺跡2号墓から出土している。文字は時計廻りに配置されている。駒城遺跡は、芳賀東原田遺跡の西側の高台に位置し、両遺跡の間の低地に鳥取松合下遺跡が存在する。

註4 鈴木公雄「念仏銭・題目銭と六道銭」『史学』63-3、慶応大学1994-03

同「出土銭貨の研究」財団法人東京大学出版会1999

同「銭の考古学」吉川弘文館2002

第3節 地形・遺構の特徴

1 A区の旧地形復元

A区のトレンチ(第14図,PL.1~3)

A区は調査着手前まで、周辺の工業団地内各社の駐車場として利用されていて、中央部にアスファルト舗装がされていた。東側の五代川を越えた五代砂留遺跡で低地に水田が検出されたことから、対岸であるA区の盛り土の下にも古代の水田が存在した可能性が推定された。水田の有無を確認するため、舗装路の北側に1トレンチ、南側に2トレンチを設定して掘り下げたところ、1トレンチの底面約4.7m付近から湧水し、谷地形底面に至る前に掘り下げを断念した。2トレンチも同様である。

1トレンチと2トレンチの西側斜面は、やや様相が異なる。1トレンチの西側斜面は、用地に対してほぼ直交する方向で、直線的である。しかし、2トレンチの西側斜面は南東側に曲がるような様子で、傾斜が緩いことが観察できた。

第15図下は前橋市の昭和43年地形図に、鉄塔を基準としてC区-B区-A区の調査概念図を並べたものである。地形図をみると、五代川の西約500mの位置に、北側上流の水田につながる無名の水路があり、A区のみで南東に曲がり五代川に合流する様子が見て取れる。

また、A区東側の盛り土が4m以上あることは、二つのトレンチ断面図を見ても解るが、これを補強する資料として、国土交通省が実施したボーリング調査資料がある(国土交通省,平成20年1月調査)。第15図上で「G-3ボーリング」と標記した○が掘削された地点であり、そ

の結果を第15図上右に示す。

以上のことから、A区は西側のB区から急傾斜-緩傾斜-急傾斜となり、無名の水路が南東方向へ曲がる低地地形であったと復元できる。しかし、水田の有無は残念ながら確認できなかった。

2 出入口施設

1区9住居の南辺で、「出入口」と考えられる施設が認められた。住居の土層観察用ベルトにかかっており、南東側を失ったが北西側は調査可能であった。住居土層を記録したのち、慎重に上位の土を除去したところ、住居外から内部へ降りる斜路(凹状)が現れた。その上面は何度も踏み固められた層が観察でき、斜路を降りた地点も硬化して床面中央部につながる。南西辺中央部を中心として、2m×1mの範囲が幅20cmほどの硬い帯状の土で囲まれていた。斜路の傾斜は住居壁の立上りに直交して横切り、住居外の硬く踏み固められた平坦面につながり、平坦面の両側に、40ピット・42ピットが掘り込まれている。掘り方調査では、斜路を含む1.8×1.1mほどの略長方形の掘り込みとなり、著しい凹凸のある範囲となった。このような遺構の検出状況から、斜路と住居外のピットは出入口施設と考えられる(第285図)。

芳賀東部団地遺跡(上武道路)の調査区域内で、このような遺構は1区9住居のみであるため、近傍の遺跡で類例を探したところ、次の例があった(第58表)。

九科遺跡(註1)4号住居・6号住居・8号住居・9号

第58表 出入口施設を伴う住居

遺跡	住居	施設	時代・時期	備考
九科遺跡	4号住居南壁	馬蹄形遺構	鬼高1期	最上層にF A
	6号住居南壁	馬蹄形遺構		
	8号住居南壁	馬蹄形遺構	鬼高1期	最上層にF A
	9号住居南壁	馬蹄形遺構	鬼高1期	最上層にF A
	14号住居南壁	馬蹄形遺構	鬼高1期	最上層にF A
鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡	D区H-61住居址	馬蹄形遺構	6世紀末~7世紀初頭	
五代伊勢宮Ⅱ遺跡	H-1住居跡南壁	壁上部欠失	6世紀第3四半期	
	H-2住居跡南壁寄り	P 8, P 9	6世紀第3四半期	
芳賀北原遺跡	H-4住居跡南壁	壁際床面に硬い面	鬼高Ⅱ-Ⅲ, 6世紀後半	F A降下後
芳賀東部団地遺跡	H-2号住居址	蹄鉄状	9世紀前葉	

住居・14号住居はいずれも南壁中央付近に「馬蹄形状遺構」が検出されている。4号住居では細い溝状の遺構が住居中央部を凸にして東側末端が南壁に接する。6・8号住居は不整形の高まりが住居中央部に向かって凸になり、次第に低くなって床面と同じ水準となる。9号住居は不整形の高まりのなかに、住居壁から直線的な細い溝が中央部に向かって延びる。14号住居は細長い高まりが住居中央に向かって凸状に回る。住居の時期は6世紀

前半とみられる。検出される遺構の形状が異なるのは、遺存状態の違いによるものかもしれない。

鳥取福蔵寺I遺跡(註2)D区H-61住居址では、南辺中央部に馬蹄形状遺構があり、凸形の頂点と両脇にピットが検出されている。住居の時期は6世紀末～7世紀初頭とされている。

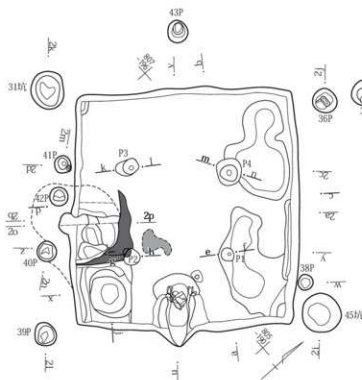
五代伊勢宮I遺跡(註3)H-1住居跡では、南壁の西寄りで壁際の炭化物が途切れ、壁の上部が削られている



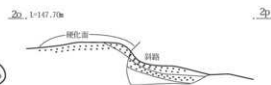
斜路土層断面



硬化面と住居外ピット



第285図 1区9住居斜路土層図



斜路掘り方断面

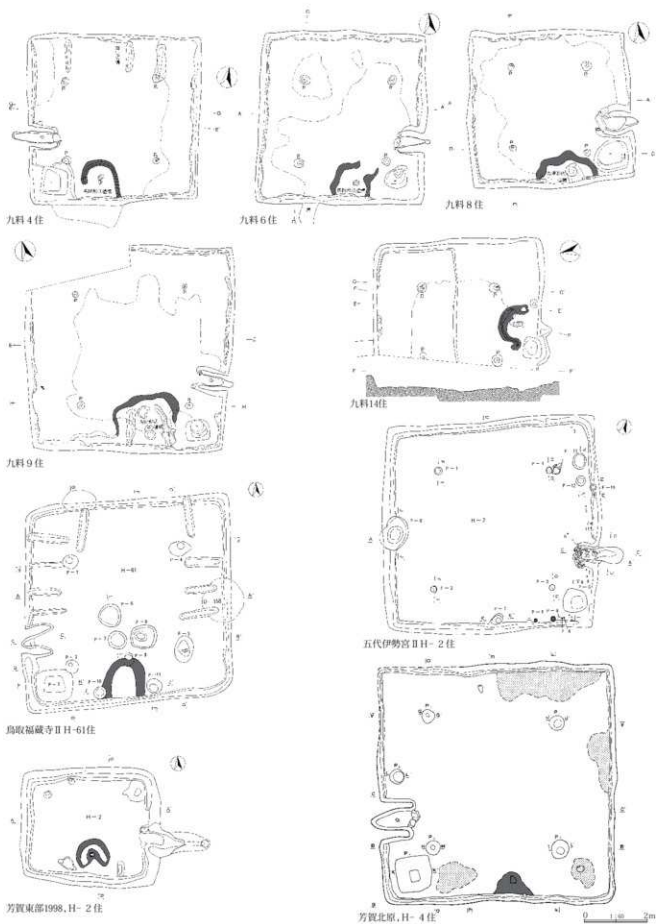


斜路掘り方 2a-2p

- 1 黒色土、ローム粒子を少量含む。
- 2 暗黒褐色土、灰黒褐色土がブロックを含む、とくに暗い、住居床面と同じ。
- 3 黒色土ブロックとロームブロックの混土、締まっている。
- 4 にい、黄褐色土、やや軟弱。

0 1:80 2m

0 1:40 1m



第286図 近傍遺跡住居の出入口施設

ことから、「入口施設に付随する」可能性が指摘されている。H-2住居跡の南壁東寄りの床面にP8、P9の小穴が認められ、「入口施設に付随するピットではないか」と指摘されている。H-1・H-2住居とも、6世紀第3四半期の時期とされている。

芳賀北原遺跡(註4)H-4住居跡では、南壁中央部に略三角形の硬い面が検出され、「入口施設に関係するものであろう」と指摘されている。住居の時期は6世紀後半とされ、埋没土にHr-FAを含まない。

芳賀東部団地遺跡(註5)H-2号住居址では、住居南辺寄りに「蹄状」の遺構が発見され、「住居の出入り口施設に関係する」高まりが認められた。この住居のみ、9世紀前半の所産とされ、他の例に比較して新しい。

壁際に2～3個の小穴が並んで検出されたり、住居壁の一部が斜めに削られていたりするような痕跡は、比較的多くの住居で見られる。しかし、本遺跡1区9住居や近傍の遺跡の「馬蹄形状遺構」の検出例は、少ないのではないだろうか。

今回の調査での反省点の一つは、運悪く住居の土層断面観察ベルトに斜路がかかり、斜路の半分ほどを失ってしまったことである。住居の埋没状態を観察するためのベルト設定ならば、各辺に平行または直交するベルト設定ではなく、出入口を意識した調査方法として、たすき掛けの(対角線状に)ベルトを設定しても構わないと考えられる(隅にカマドを設置している場合を除く)。

馬蹄形状遺構も1区9住居の斜路も古墳時代後期に属し、カマドを伴う住居例である。唯一、芳賀東部団地遺跡(1998)H-2号住居址が平安時代の所産で、より新しい。斜路を伴う出入口施設は時代・地域限定の出入口遺構と考えたが、地域限定に限る可能性もあり、今後は対象区域と時代を広げて類例を探したい。

註1 「小神明遺跡群」前橋市教委,1984

註2 「鳥取福蔵寺II遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1998

註3 「五代伊勢宮II遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2002

註4 「芳賀北原遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1992

註5 「芳賀東部団地遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1998

3 鉄滓と製鉄関連遺構

6章1節科学分析の成果の項で、鉄滓の観察所見が得られ、製錬が存在することから、近隣に製鉄関連遺構

の存在が予想された。これを考えるために、近傍の製鉄関連遺構・遺物を発見した遺跡をまとめたのが、第287図と第59表である。第287図中の遺跡番号は、第2章1節の第8図の番号に一致する。

(1) 近傍の製鉄関連遺構

芳賀東部団地遺跡(市教委)では、5カ所の製鉄関連遺構が発見されており、そのうち4号製鉄址は「製錬炉」と考えられている(註1)。製錬炉は鉄素材を製造する工程で作られるが、原料となる砂鉄と炭から高熱の化学的還元過程によって鉄素材を作り出す。近傍の遺跡では、これまでに発見された唯一の製鉄炉である(鉄滓の分析では、分析試料中に製錬滓は見当たらないとされている)。その他の1・2・3・5号製鉄址は「小鍛冶」とされた。小鍛冶は鉄器を作るための鍛冶の工程である。このほかH58・H87・H198・H216の各住居から鉄滓を出土し、H216を除く住居からは石組や焼石等が出土し、H58は鍛冶関連遺構、H87は小鍛冶遺構とされている。これらの遺構は概ね8世紀後半から9世紀前半の年代が与えられている。

五代砂留遺跡群の284・285・286・299・300土坑では、鉄滓とともに鍛冶剥片・粒状炭化物が多数検出され、9世紀後半の鍛冶遺構とされている。これらは小鍛冶遺構の一部と考えられる。

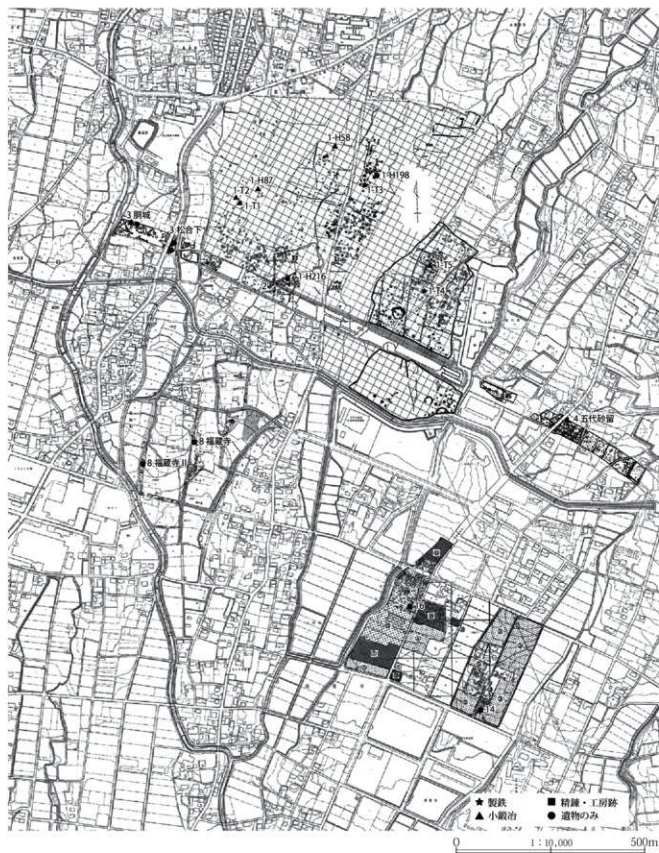
鳥取福蔵寺遺跡では、H-37号住居址からフイゴ羽口・鉗・鉄滓・鍛冶剥片が多数検出され、鉄滓総重量は38kgに及ぶ。破砕された塊状滓が出土し、9世紀中頃の鍛冶及び精錬鍛冶とされた。「精錬」は鉄素材の炭素含有量を調整したり、不純物を除去して鉄素材の品質を調整する工程である(工程的には、製錬→精錬→小鍛冶が想定され、精錬は製品までの中間工程である)。

鳥取福蔵寺II遺跡では、焼土入りの小土坑14基が発見され、9世紀後半の工房とされた。

芳賀北部団地遺跡では、F1・F2・F3号製鉄址が発見されており、いずれも精錬址とされている(第287図には未掲載)。F1号は10世紀とみられる。

五代木福III遺跡では、H-32号住居から鉄滓・鍛冶剥片・鉄床石・砥石が出土し、9世紀代の鍛冶工房とされた。

五代伊勢宮VI遺跡では、H-16号鍛冶工房から地床がのほかに石床が発見され、フイゴ羽口・塊状滓・鉄床



第287図 近傍の製鉄関連遺構

第59表 近傍の製鉄関連道構・遺物 ★製鉄, ■精錬・工房跡, ▲小鍛冶 ●遺物のみ

番号	道跡名	製鉄関連道構	参考遺物	時代・時期	備考	
1	芳賀東部団地道跡 市教委	4号製鉄址	製錬炉=方形, 1.1×1.2m・ 深さ0.54m, 鍛冶炉あり	焼石・楕形鉄滓・チップ ス・羽口・炉壁	IX期, 9世紀中葉	★製鉄跡
		5号製鉄址	鍛冶炉=ピット状, 0.32×0.34m・深さ0.12m	焼石・羽口・鉄滓	IX期, 9世紀中葉	▲小鍛冶
		T1号鍛冶址	鍛冶炉=隅丸長方形, 1.23×0.83m・深さ0.2m	鉄滓・羽口	VI~VII期, 8世紀後葉~9 世紀前葉	▲小鍛冶
		T2号鍛冶址	鍛冶炉=舟形, 3.25×6.50m・深さ0.4m	焼石・鉄滓・チップス・ 珪石・鉄屑	VI~VII期, 8世紀後葉~9 世紀前葉	▲小鍛冶
		T3鍛冶址	鍛冶炉=推定隅丸長方形, 5×3m・深さ0.23~0.30m	花崗岩・鉄滓・チップス・ 珪石	VIII期, 8世紀後葉	▲小鍛冶
		B58号住居跡	石多数出土	鉄滓・羽口	9世紀初頭	▲鍛冶関連
		B87号住居跡	床面中央に石組み	チップス・藍滓・羽口	9世紀後半	▲小鍛冶
	B198号住居跡	床面から凝灰岩・焼石	鉄滓・鉄製品	9世紀中頃	●	
	B216号住居跡	-	鉄製馬具・鉄製紡錘車・ 鉄鎌・鉄洋	9世紀前半	●	
2	芳賀東部団地道跡 郡理文	F2住, G14住15住, 12住	-	鉄滓F区G区I区住居	F2-9世紀前半, G14-8世紀 中頃, G15-9世紀前半, 12-5世紀中頃	●12は流込みか。
3	駒城道跡	駒城8号住居	-	束ねた状態の鉄器→放鉄	10世紀前半	●
		駒城33号住居	-	鉄滓(本炭灰あり)	10世紀後半	●
4	鳥取松合下道跡	鳥取松合下11号住居	-	割れた楕形滓→8C後半~ 9Cの型型がに伴う鍛冶滓	8世紀後半~9世紀	●
		鳥取松合下13号住居	-	楕形鍛冶滓	8世紀前半~中頃	●
5	五代砂留道跡群	284・285・286・299・300上 坑	鍛冶道構	鉄滓・鍛冶刺片・粘状炭 化物	9世紀後半	▲
6	鳥取福蔵寺道跡	B-37号住居跡	精錬鍛冶炉=不整形円形 3.4×3.2m・深さ0.25m, 地 床が=0.51×0.34・深さ 0.2m, フイゴ跡あり	羽口・鉋・破砕塊状滓, 鍛冶刺片, 鉄滓総重量 38kg	9世紀中頃	■小鍛冶・精錬鍛冶 工房, 「勝沢郷」比定 区域
8	鳥取福蔵寺日道跡	工房址	小土坑14, 焼土入り円形 土坑	鉄滓	9世紀後半	■2基, 地床中。
10	芳賀北部団地道跡	F1号製鉄址	精錬炉1.54×0.5m, 植物 繊維入り炉壁	焼石・鉄滓・炭化物・鉄 片	10世紀か。	■
		F2号製鉄址	精錬炉1.02×0.92m, 断面円筒形, 深さ0.65m	鉄滓・石材・羽口	10世紀か。	■
		F3号製鉄址	精錬炉3.4×2.5m	鉄滓・羽口・石材	10世紀か。	■
14	五代木福Ⅲ道跡	B-32号住居跡	鍛冶工房=楕円形炉跡 0.47×0.55m・深さ0.1m	鉄滓・鍛冶刺片・鉄床石・ 砥石・釘	9世紀代	■鍛冶工房跡
16	五代伊勢宮Ⅴ道跡	B-16号鍛冶工房	鍛冶工房跡=4.64×4.22m ・深さ0.21~0.5m, 地床 が=35×38cm円形焼土, 石床 が=52×45.5cm・厚さ6.7 ~18cm, 重さ58kg安山 岩	羽口・鉄滓総重量30kg, 塊状滓9・鉄床石3, 鍛冶 刺片・鎌・辻金具	8世紀末~9世紀前半	■鍛冶工房跡8C後~ 9C前葉

[文献] 番号は第8回番号、近傍道跡表番号と一致

- 1 「芳賀東部団地道跡Ⅰ」前橋市教育委員会, 芳賀団地道跡群第1巻, 1984
- 1 「芳賀東部団地道跡Ⅱ」前橋市教育委員会, 芳賀団地道跡群第2巻, 1988
- 1 「芳賀東部団地道跡Ⅲ」前橋市教育委員会, 芳賀団地道跡群第3巻, 1990
- 1 「芳賀東部団地道跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 1998
- 1 「芳賀東部団地道跡Ⅲ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2005
- 2 本道跡
- 3 「鳥取松合下道跡・駒城道跡」郡理文, 534巻, 2012
- 4 「五代砂留道跡群」郡理文, 530巻, 2012
- 8 「鳥取福蔵寺道跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 1997
- 8 「鳥取福蔵寺日道跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 1998
- 10 「芳賀北部団地道跡Ⅰ」前橋市教育委員会, 芳賀団地道跡群第5巻, 1994
- 14 「五代竹花道跡・五代木福Ⅰ道跡・五代伊勢宮Ⅰ道跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2001
- 14 「五代竹花Ⅱ道跡・五代木福Ⅲ道跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2004
- 16 「五代竹花道跡・五代木福Ⅰ道跡・五代伊勢宮Ⅰ道跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2001
- 16 「五代伊勢宮Ⅱ道跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2002
- 16 「五代伊勢宮Ⅲ道跡・五代深堀Ⅱ道跡・五代中原Ⅰ道跡・五代伊勢宮Ⅳ道跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2002
- 16 「五代伊勢宮Ⅴ道跡・五代中原Ⅱ道跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2003
- 16 「五代伊勢宮道跡(Ⅰ)」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2007
- 16 「五代伊勢宮道跡(Ⅱ)」前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2009

石・鍛造剥片等が出土し、鉄滓総重量は30kgに及ぶ。8世紀末～9世紀前半に操業された。

以上のような製鉄関連遺構の発見状況から、井上唯雄氏は鍛冶工房を「…郷長クラスの有力者層による律令支配の一つの根幹をなすもの」と位置づけ、「おそらく行政的な単位を中心として鉄素材を取り出し、それを関係する郷の支群に分け与える形で、それぞれの拠点集落を中心に鍛冶工房の運営が成されるような形がとられて、自給自足的に機能を果たしていくものと考え」（文献16、五代伊勢宮VI遺跡、45頁）と8世紀後半以降の製鉄→鉄器生産構造を素描した。

(2) 鉄滓の流通と鉄器のリサイクル

遺構を伴わない製鉄関連遺物として、住居からの鉄滓出土及び故鉄とみられる鉄器の出土がある。

銅城遺跡では、8号住居から束ねた状態の鉄器が出土し、一部は折り曲げた状態で出土した。貴重な鉄素材の一つとして、利器利用が困難になった鉄器を保存し、新たな鉄器製造の材料に供する「再生用の原料」と想定されている。破損や摩耗した鉄器を捨てるのではなく、鉄素材として保存し、新しい鉄器に再生する方法のほか、再生鉄器と交換する場合など、リサイクルの想定が可能である。「故鉄」概念の導入は、出土鉄器の評価を変更する可能性がある。また、鳥取松合下遺跡11号住居から出土した鉄滓は割れた状態で出土し、精錬¹⁾の産物の可能性があるという。こうした出土状況から、女屋和志雄氏は「この状態で流通していたのではないだろうか」と指摘した(文献3、202頁)。

(3) 芳賀東部団地遺跡(上武道路)の鉄滓

明確な鍛冶遺構を伴うことなく出土した本遺跡の鉄滓

は、どのように位置づけられるだろうか。出土した鉄滓には鍛冶滓と製錬滓(または精錬滓)が含まれていた。製錬滓だとすれば、近傍の遺跡では芳賀東部団地遺跡(市教委)の4号製鉄址が、持ち出し元の候補になる。上武道路区域では炉壁や羽口の出土が見られないことから、鍛冶滓もまた芳賀東部団地遺跡(市教委)区域からの持ち出しが想定できる。しかし、E区～I区南側の未掘区域に精錬鍛冶工房が存在する可能性も残る。このような出土鉄滓は何らかの方法で入手し、近隣の鍛冶工房や単独の小鍛冶に持ち込まれ、鉄製品となって個別の集落や住居に供給されたと考えられる。

前橋市教育委員会調査遺跡の製鉄関連遺構に注目した井上唯雄氏は、筆者の想定した製鉄→小鍛冶という単純な工程ではなく、製錬→精錬→小鍛冶という鉄器生産工程を指摘し、鉄素材の製造=製鉄は、高度な専門の技術を要求される工程であるとも指摘している。金属鉄を削り出すということが、おそらく最も重要な過程と考えられる。このような工程は、前述の素描から図式化すれば、郡または郷クラスによる鉄素材生産→郷支群クラスによる精錬(拠点集落での鍛冶工房)と鉄器生産→個別集落での鉄器生産という広域動員力と技術力に応じた生産工程と理解される。リサイクル工程は精錬工程以下で可能であろう。

推定される鉄器の生産体制は、この地域の農業生産(開墾、耕作、収穫・採集)や林業生産(森林の育成・管理、木材生産・加工、燃料や炭の生産など)、日々の生活(食料加工など)に使われる鉄製品の配布・流通を規定し、鉄原料の採掘や製鉄にかかわる人の動員力や高技術集団の確保を背景として、地域支配機構の一つの柱であったと考えられる。

註1 「5基の製鉄遺構のうち、1基は製鉄炉跡(T・4)であるが、他は鍛冶址である。」「芳賀東部団地遺跡Ⅱ」芳賀市教育委員会、344頁